

仙台市文化財保護委員會報告書

富沢遺跡・泉崎浦遺跡

—仙台市高速鉄道調査延跡調査報告書Ⅰ—

1989年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第126集

富沢遺跡・泉崎浦遺跡

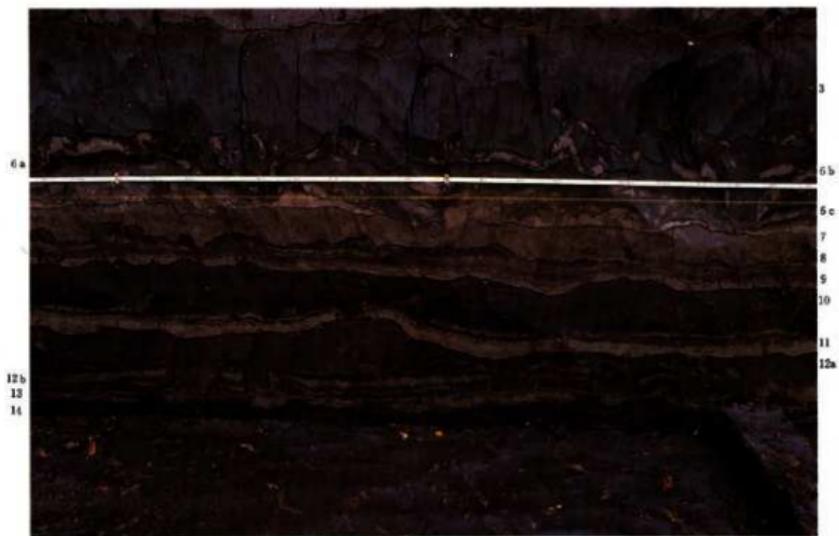
—仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ—

1989年3月

仙台市教育委員会



変電所区12a層水田跡 弥生時代



変電所区西壁断面 大畠畔の北側から耕作土にかけて。



長町南駅区 7c層水田跡 弥生時代。小区画確認状況。直線的な黒い部分が小畦畔で灰色部分は上位の層。



出入口区 7c層水田跡 弥生時代。畦畔確認状況で周囲には上位の層が残存している。



泉崎Ⅰ区 4層水田跡 平安時代。



中谷地Ⅱ区擬似畦群検出状況
直線的な灰色部が擬似畦畔。



I N 試掘区No16 最下部の黒色層が旧石器時代の層。



泉崎II区墓塚 11・25号墓



泉崎II区墓塚 4号墓



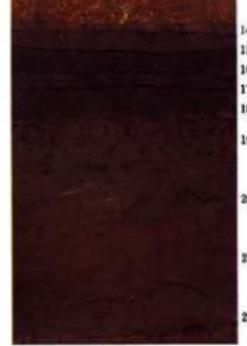
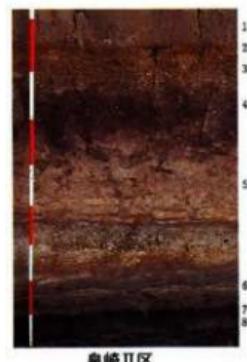
長町南駅区 鋸



泉崎工区 横鍔



変電所区 石庖丁





長町南駅区(Ⅳa区)



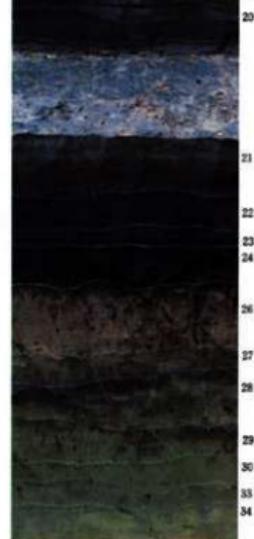
長町南駅区(Ⅲb区)



A換気口区



出入口区



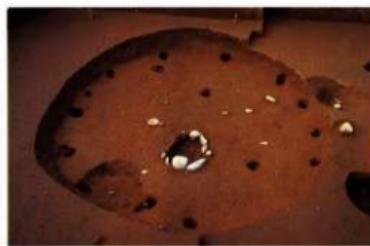
B換気口区



下ノ内遺跡 左は縄文時代の敷石住居跡、右は古代の住居跡と小溝状遺構群。



下ノ内浦遺跡 左は縄文時代の配石墓、右は古代の住居跡。



六反田遺跡 縄文時代の住居跡。



伊古田遺跡 左は縄文時代の土偶、右は最大の土偶の出土状況。

調査した他遺跡のダイジェスト

序 文

仙台市の文化財保護行政につきましては、日頃、多大なるご理解とご協力をいただき、心から感謝いたしております。

仙台市は政令指定都市への昇格をめざし、21世紀へ向けての東北の中核都市として飛躍的な発展を遂げております。特に昭和63年7月の高速鉄道開通は、新しい時代への幕開けとなる画期的な事業でありました。

この高速鉄道建設に関わる発掘調査は、昭和56年度から昭和61年度までの6年間に6遺跡で行われ、新事実の相次ぐ発見など多くの貴重な成果を得ることができました。今回の報告書はその第一冊目として、富沢遺跡と泉崎浦遺跡の調査成果を収録しております。富沢遺跡は弥生時代の水田跡が発見された遺跡として近年有名になっておりますが、高速鉄道の調査がその契機となりました。

仙台市には、私たちの祖先が伝えてきた貴重な文化遺産が多数残されております。これらの文化遺産を保存・活用し、後世へ継承していくことは、これから「まちづくり」に欠かせない大切なことであり、私たちに課せられた大きな責務であると考えております。今後とも市民の皆様や関係機関のご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、高速鉄道関係の発掘調査や整理にご協力頂きました皆様と、本報告書を作成するにあたりご助言ご指導賜りました皆様に心から感謝申し上げますとともに、本書が多くの学術研究に寄与し、文化財の保護・保存に大きく役立つことを念じてやみません。

平成元年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

- 1 本書は、仙台市高速鉄道建設に伴う遺跡発掘調査報告書（全5冊）の第1冊目であり、富沢遺跡と泉崎浦遺跡の発掘成果についてまとめたものである。
- 2 富沢遺跡の名称は数回変更がなされたが、その経緯については本文のIIを参考にされたい。
- 3 報告書の作成および編集は吉岡恭平が行った。本文は篠原信彦・吉岡が担当し、I・II-2を篠原、II-3・III-VIIを吉岡が執筆した。
- 4 関連科学については、プラントオバール分析を藤原宏志氏（宮崎大学）・佐々木章氏（大分短期大学）、土壤分析・火山灰分析を庄子貞雄氏・山田一郎氏・安藤 豊氏（東北大学）、花粉分析を三好教夫氏（岡山理科大学）・安田喜憲氏（広島大学）・畠中健一氏（北九州大学）、¹⁴C年代測定を日本アイソトープ協会、人骨の鑑定を森本岩太郎氏（聖マリアンナ医科大学）、櫻種同定を燐パリノ・サーヴェイ、種子同定を星川清親氏・庄司駒男氏（東北大学）にそれぞれ依頼した（ただし所属は依頼当時のものである）。なお、種子同定については第2冊目以降に掲載する予定である。
- 5 II-1の項は、豊島正幸氏（東北大学）のご了承の上、下記の文章を本構へ転載させていただいた。

豊島正幸：1987「第2章第1節 富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢－仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴う富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 4～8頁。
- 6 発掘調査および報告書作成に際し、多くの方々および諸機関から御指導・御助言・御協力を頂いた。その方々の御名前は本文に記載している。厚く御礼申し上げる次第である。
- 7 発掘調査および整理作業に関わったスタッフの方々は本文に記載している。
- 8 陶磁器の鑑定は、仙台市教育委員会文化財課佐藤洋が行った。
- 9 本遺跡の調査成果については、既に概報などで一部報告がなされているが、本書がそれらに優先するものである。
- 10 調査の諸記録・実測図・写真・出土遺物などの全資料は、仙台市教育委員会が一括保管している。

凡 例

- 1 図中の方位は国土座標北を示す。
- 2 本書第11図に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」「仙台南東部」である。
- 3 土層の色調の記載には「新版標準土色帳」(小山・竹原:1973)を用いた。
- 4 遺構の略号は以下のとおりである。
住居跡-S I 土坑-S K 溝-S D 河川跡-S R その他-S X
- 5 遺物登録は以下の記号を用いて各調査区ごとに行った。
弥生土器-B 土師器(非クロ)-C 土師器(クロ)-D 須恵器-E
陶器-I 磁器-J 土製品-P 木製品(杭を除く)-L 石製品・石器-K
金属製品-N
- 6 本文使用の「擬似畦畔」は、富沢遺跡第15次発掘調査報告書(斎野他:1987, 91~92頁)において概念規定されたものと同義である。
- 7 注は各項ごとに記載した。
- 8 II-1・2、VIII以外の引用・参考文献は307・308頁に記載した。
- 9 VIIIの図・表・写真は各項ごとの番号である。
- 10 VIIIでの「泉崎前遺跡」「中谷地遺跡」「富沢水田遺跡」はII-3の経緯により「富沢遺跡」に変更されている。また、「鍋田地区」は「長町南駅区」に対応している。

本文目次

| | |
|----------------------|-----|
| I 調査に至る経過と調査した遺跡の概要 | |
| 1. 調査に至る経過 | 1 |
| 2. 調査要項 | 2 |
| 3. 調査した遺跡の概要 | 9 |
| (1) 富沢遺跡 | 9 |
| (2) 泉崎浦遺跡 | 10 |
| (3) 下ノ内浦遺跡 | 11 |
| (4) 下ノ内遺跡 | 13 |
| (5) 六反田遺跡 | 14 |
| (6) 伊古田遺跡 | 15 |
| II 遺跡の立地と環境 | |
| 1. 富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷 | 16 |
| 2. 周辺の歴史的環境 | 21 |
| 3. 富沢遺跡登録の経緯 | 32 |
| III 試掘調査の概要と本調査区の設定 | |
| 1. 試掘の概要 | 37 |
| (1) 泉崎東工区・中谷地工区 | 38 |
| (2) 長町南駅工区 | 45 |
| 2. 本調査区の設定 | 46 |
| IV 泉崎前・泉崎浦地区 | |
| 1. 調査の方法と経過 | 48 |
| 2. 泉崎I区 | 50 |
| (1) 調査区の位置 | 50 |
| (2) 基本層序 | 50 |
| (3) 20層検出遺構 | 54 |
| (4) 11層検出遺構と遺物 | 55 |
| (5) 10層検出遺構と遺物 | 57 |
| (6) 5層検出遺構と遺物 | 59 |
| (7) 4層検出遺構と遺物 | 61 |
| (8) 2・3層検出遺構と遺物 | 65 |
| (9) その他の出土遺物 | 66 |
| (10) 小結 | 69 |
| 3. 泉崎II区 | 89 |
| (1) 調査区の位置 | 89 |
| (2) 基本層序 | 89 |
| (3) 4・5層検出遺構と遺物 | 91 |
| (4) 3層検出遺構と遺物 | 101 |
| (5) 小結 | 115 |

| | |
|-------------------|-----|
| 4. 泉崎Ⅲ区 | 132 |
| (1) 調査区の位置 | 132 |
| (2) 基本層序 | 132 |
| (3) 15層検出遺構と遺物 | 134 |
| (4) 5層検出遺構と遺物 | 136 |
| (5) 4 b層検出遺構 | 140 |
| (6) その他の出土遺物 | 140 |
| (7) 小結 | 140 |
| V 中谷地地区 | |
| 1. 調査の方法と経過 | 145 |
| 2. 中谷地Ⅰ区 | 147 |
| (1) 調査区の位置 | 147 |
| (2) 基本層序 | 147 |
| (3) 12層検出遺構と遺物 | 151 |
| (4) 7層検出遺構 | 152 |
| 3. 中谷地Ⅱ・Ⅲ区 | 155 |
| (1) 基本層序 | 155 |
| (2) 9層検出遺構 | 159 |
| (3) 4 b層検出遺構 | 160 |
| (4) その他の出土遺物 | 161 |
| (5) 小結 | 162 |
| VI 鳥居原地区 | |
| 1. 長町南駅区 | 174 |
| (1) 調査の方法と経過 | 174 |
| (2) 調査区の位置 | 174 |
| (3) 基本層序 | 179 |
| (4) 7 c層検出遺構と遺物 | 184 |
| (5) 5層検出遺構と遺物 | 194 |
| (6) 4層検出遺構と遺物 | 204 |
| (7) 3層検出遺構と遺物 | 213 |
| (8) その他の出土遺物 | 216 |
| (9) 小結 | 218 |
| 2. 変電所区 | 223 |
| (1) 調査の方法と経過 | 223 |
| (2) 調査区の位置 | 223 |
| (3) 基本層序 | 223 |
| (4) 12層検出遺構と遺物 | 227 |
| (5) 11層検出遺構 | 231 |
| (6) 7層検出遺構と遺物 | 233 |
| (7) 6層検出遺構と遺物 | 235 |
| (8) 5層検出遺構 | 244 |
| (9) 4層検出遺構と遺物 | 244 |
| (10) 3層検出遺構と遺物 | 247 |
| (11) その他の出土遺物 | 250 |
| (12) 小結 | 250 |
| 3. A換気口区 | 276 |
| (1) 調査の方法と経過 | 276 |
| (2) 基本層序 | 276 |
| (3) 15・16層検出遺構と遺物 | 278 |
| (4) 12層検出遺構 | 278 |
| (5) 4層検出遺構と遺物 | 278 |
| (6) その他の出土遺物 | 280 |

| | |
|------------------------------|------------|
| (7) 小 結 | 280 |
| 4. B換気口区 | 283 |
| (1) 調査の方法と経過 | 283 |
| (2) 調査区の位置 | 283 |
| (3) 基本層序 | 283 |
| (4) 7d層検出遺構 | 286 |
| 5. 出入口区 | 290 |
| (1) 調査の方法と経過 | 290 |
| (2) 調査区の位置 | 290 |
| (3) 基本層序 | 290 |
| (4) 7c層検出遺構と遺物 | 290 |
| VII まとめ | |
| 1. 調査成果の概要 | 301 |
| 2. まとめ | 306 |
| 引用・参考文献 | 307 |
| VIII 自然科学的分析 | 309 |
| 1. プラント・オパール分析 | 309 |
| 2. 鳥居原地区・鍋田変電所部分のプラント・オパール分析 | 314 |
| 3. 富沢水田遺跡鍋田地区の水田遺跡土壤 | 317 |
| 4. 富沢水田遺跡鳥居原地区的水田土壤 | 319 |
| 5. 富沢水田遺跡の十和田一中城テフラ | 321 |
| 6. 泉崎前遺跡(仙台市)の花粉分析 | 325 |
| 7. 中谷地遺跡の泥土の花粉分析 | 331 |
| 8. 仙台市富沢遺跡鳥居原地区的花粉分析 | 341 |
| 9. 富沢遺跡の ¹⁴ C年代測定 | 348 |
| 10. 仙台市泉崎浦遺跡出土の人骨について | 349 |
| 11. 富沢水田遺跡試料材同定(1) | 351 |
| 12. 富沢遺跡試料材同定(2) | 364 |

挿 図 目 次

| | | | |
|-------------------------|----|-----------------------------------|-----|
| 第1図 富沢遺跡位置図 | 1 | 第39図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑫ | 81 |
| 第2図 高速鉄道路線図 | 3 | 第40図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑬ | 82 |
| 第3図 調査区位置図 | 4 | 第41図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑭ | 83 |
| 第4図 空中写真判読による流路跡の分布 | 17 | 第42図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑮ | 84 |
| 第5図 地下鉄路線に沿う地質断面図 | 17 | 第43図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑯ | 85 |
| 第6図 銅出付近の地質断面図 | 17 | 第44図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑰ | 86 |
| 第7図 泉崎浦付近の微地形 | 19 | 第45図 泉崎Ⅱ区遺構配置図 | 89 |
| 第8図 泉崎浦周辺の地質断面図(a～o) | 19 | 第46図 泉崎Ⅱ区土層断面図 | 90 |
| 第9図 泉崎浦周辺の地質断面図(i～s) | 19 | 第47図 5層遺構平面図・SI1・SK4+5 平面図・断面図 | 92 |
| 第10図 泥炭地の分布の変遷と水田跡 | 20 | 第48図 SI1遺物出土状況図 ・SD1～12断面図 | 93 |
| 第11図 富沢遺跡と周辺の遺跡分布図 | 23 | 第49図 SI1出土遺物 | 95 |
| 第12図 富沢遺跡全体図 | 35 | 第50図 泉崎Ⅱ区出土遺物① | 96 |
| 第13図 試掘トレンチ位置図 | 37 | 第51図 泉崎Ⅱ区出土遺物② | 97 |
| 第14図 IN 試掘No.・3平面図・断面図 | 39 | 第52図 2・3層遺構平面図 | 101 |
| 第15図 IN 試掘No.・4平面図・断面図 | 41 | 第53図 墓塙群全体図 | 102 |
| 第16図 IN 試掘No.・16平面図・断面図 | 43 | 第54図 墓塙平面図・断面図(1) | 107 |
| 第17図 IN 試掘No.19断面図 | 45 | 第55図 墓塙平面図・断面図(2) | 108 |
| 第18図 泉崎前・泉崎浦地区調査区・位置図 | 49 | 第56図 墓塙平面図・断面図(3) | 109 |
| 第19図 泉崎Ⅰ区遺構配置図 | 50 | 第57図 墓塙平面図・断面図(4) | 110 |
| 第20図 泉崎Ⅰ区土層断面図 | 51 | 第58図 墓塙平面図・断面図(5) | 111 |
| 第21図 SR2・3平面図・断面図 | 55 | 第59図 泉崎Ⅱ区出土遺物③ | 118 |
| 第22図 11層水田跡平面図・断面図 | 56 | 第60図 泉崎Ⅱ区出土遺物④ | 119 |
| 第23図 SX1遺構平面図・断面図 | 58 | 第61図 泉崎Ⅱ区出土遺物⑤ | 120 |
| 第24図 4・5層水田跡平面図・断面図 | 60 | 第62図 泉崎Ⅱ区出土遺物⑥ | 121 |
| 第25図 2・3層遺構平面図・断面図 | 63 | 第63図 泉崎Ⅱ区出土遺物⑦ | 122 |
| 第26図 SD2・SK1・SK2平面図・断面図 | 64 | 第64図 泉崎Ⅱ区出土遺物⑧ | 123 |
| 第27図 泉崎Ⅰ区出土遺物① | 67 | 第65図 泉崎Ⅱ区出土遺物⑨ | 124 |
| 第28図 泉崎Ⅰ区出土遺物② | 68 | 第66図 泉崎Ⅱ区出土遺物⑩ | 125 |
| 第29図 泉崎Ⅰ区出土遺物③ | 69 | 第67図 泉崎Ⅱ区出土遺物⑪ | 126 |
| 第30図 泉崎Ⅰ区・県教委調査区遺構対比図 | 72 | 第68図 泉崎Ⅲ区遺構配置図 | 132 |
| 第31図 泉崎Ⅰ区出土遺物④ | 73 | 第69図 泉崎Ⅲ区土層断面図 | 133 |
| 第32図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑤ | 74 | 第70図 15層水田跡平面図・断面図 | 135 |
| 第33図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑥ | 75 | 第71図 5層水田跡平面図・断面図 | 138 |
| 第34図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑦ | 76 | 第72図 5層牛・人足跡平面図 | 139 |
| 第35図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑧ | 77 | 第73図 泉崎Ⅲ区出土遺物① | 142 |
| 第36図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑨ | 78 | 第74図 泉崎Ⅲ区出土遺物② | 143 |
| 第37図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑩ | 79 | | |
| 第38図 泉崎Ⅰ区出土遺物⑪ | 80 | | |

| | | | |
|---------------------------------------|-----|--------------------------------|-----|
| 第75図 泉崎III区出土遺物(3) | 144 | 第12図 長町南駅区出土遺物(7) | 209 |
| 第76図 中谷地地区調査区位置図 | 145 | 第13図 長町南駅区出土遺物(8) | 210 |
| 第77図 中谷地地区遺構配置図 | 146 | 第14図 長町南駅区出土遺物(9) | 211 |
| 第78図 中谷地 I 区土層断面図 | 148 | 第15図 長町南駅区出土遺物(10) | 212 |
| 第79図 12層水田跡平面図・断面図 | 150 | 第16図 3層水田跡平面図・断面図 | 214 |
| 第80図 7層水田跡・SD1 平面図・断面図 | 153 | 第17図 SK1~4 平面図・断面図 | 215 |
| 第81図 中谷地II・山区土層断面図 ・遺構平面図 | 157 | 第18図 長町南駅区出土遺物(11) | 217 |
| 第82図 中谷地 I 区・II区出土遺物(1) | 161 | 第19図 長町南駅区出土遺物(12) | 218 |
| 第83図 中谷地 I 区出土遺物(1) | 164 | 第20図 变電所区遺構配置図 | 224 |
| 第84図 中谷地 I 区出土遺物(2) | 165 | 第21図 变電所区上層断面図 | 226 |
| 第85図 中谷地 I 区出土遺物(3) | 166 | 第22図 12層水田跡平面図・断面図 | 228 |
| 第86図 中谷地 I 区出土遺物(4) | 167 | 第23図 12層水田跡・足跡・クルミ平面図 | 230 |
| 第87図 中谷地 I 区出土遺物(5) | 168 | 第24図 变電所区出土遺物(1) | 231 |
| 第88図 中谷地 I 区出土遺物(6) | 169 | 第25図 11層水田跡平面図・断面図 | 232 |
| 第89図 中谷地 I 区出土遺物(7) | 170 | 第26図 变電所区出土遺物(2) | 234 |
| 第90図 中谷地 I 区出土遺物(8) | 171 | 第27図 6層遺構平面図 | 238 |
| 第91図 中谷地 I 区出土遺物(9) | 172 | 第28図 SX1 杭列平面図 | 239 |
| 第92図 烏居原地区調査区位置図 | 175 | 第29図 SX1 断面図 | 240 |
| 第93図 長町南駅区遺構配置図 | 177 | 第30図 变電所区出土遺物(3) | 241 |
| 第94図 深掘区土層柱状図 | 180 | 第31図 SX1 杭列1~3 平面図・断面図 | 242 |
| 第95図 7c層水田跡平面図・断面図(1) | 185 | 第32図 SX1 杭列4~6・8平面図・断面図 | 243 |
| 第96図 7c層水田跡平面図・断面図(2) | 187 | 第33図 SX1 杭列7・9~11平面図・断面図 | 244 |
| 第97図 7c層水田跡平面図・断面図(3) | 189 | 第34図 4層水田跡平面図 | 245 |
| 第98図 7c層水田跡平面図・断面図(4) | 190 | 第35図 变電所区出土遺物(4) | 246 |
| 第99図 7c層水田跡平面図・断面図(5) | 192 | 第36図 3層水田跡平面図 | 248 |
| 第100図 7c層水田跡足跡状分布図 | 193 | 第37図 变電所区出土遺物(5) | 249 |
| 第101図 杭列1 平面図・断面図 ・木製品出土状況図 | 195 | 第38図 变電所区出土遺物(6) | 253 |
| 第102図 張生土器出土状況図・出土遺物(1) | 196 | 第39図 变電所区出土遺物(7) | 254 |
| 第103図 長町南駅区出土遺物(2) | 197 | 第40図 变電所区出土遺物(8) | 255 |
| 第104図 長町南駅区出土遺物(3) | 198 | 第41図 变電所区出土遺物(9) | 256 |
| 第105図 長町南駅区出土遺物(4) | 199 | 第42図 变電所区出土遺物(10) | 257 |
| 第106図 長町南駅区出土遺物(5) | 200 | 第43図 变電所区出土遺物(11) | 258 |
| 第107図 5層水田跡平面図・断面図 | 202 | 第44図 变電所区出土遺物(12) | 259 |
| 第108図 長町南駅区出土遺物(6) | 203 | 第45図 变電所区出土遺物(13) | 260 |
| 第109図 4層遺構平面図(1) | 206 | 第46図 变電所区出土遺物(14) | 261 |
| 第110図 4層遺構平面図・断面図(2) | 207 | 第47図 变電所区出土遺物(15) | 262 |
| 第111図 杭集中地点平面図・断面図 ・木製品出土状況図 | 208 | 第48図 变電所区出土遺物(16) | 263 |
| | | 第49図 变電所区出土遺物(17) | 264 |
| | | 第50図 变電所区出土遺物(18) | 265 |
| | | 第51図 变電所区出土遺物(19) | 266 |

| | | | | | |
|------|---------------------|-----|------|---------------------------|-----|
| 第13回 | 変電所区出土遺物② | 267 | 第18回 | 7c 層水田跡足跡状凹み平面図 | 288 |
| 第14回 | 変電所区出土遺物③ | 268 | 第19回 | B換気口区出土遺物 | 289 |
| 第15回 | 変電所区出土遺物④ | 269 | 第20回 | 出入口区土層断面図 | 291 |
| 第16回 | 変電所区出土遺物⑤ | 270 | 第21回 | 7c 層水田跡平面図・断面図 | 292 |
| 第17回 | 変電所区出土遺物⑥ | 271 | 第22回 | 7c 層水田跡足跡状凹み ・杭半面図・断面図 | 294 |
| 第18回 | 変電所区出土遺物⑦ | 272 | 第23回 | 4層遺構平面図・断面図 | 296 |
| 第19回 | A換気口区土層断面図 | 277 | 第24回 | 出入口区出土遺物(1) | 297 |
| 第20回 | 12・15・16層遺構平面図・断面図 | 279 | 第25回 | 出入口区出土遺物(2) | 299 |
| 第21回 | 4層遺構平面図 | 280 | 第26回 | 出入口区出土遺物(3) | 300 |
| 第22回 | A換気口区出土遺物(1) | 281 | 第27回 | 時期別層序対比図 | 302 |
| 第23回 | A換気口区出土遺物(2) | 282 | 第28回 | 鳥居原地区遺構配置図 | 303 |
| 第24回 | B換気口区出土遺構配置図 | 284 | 第29回 | 明治時代の泉崎周辺 | 306 |
| 第25回 | B換気口区土層断面図 | 285 | 参考図 | 蠍類絵図 | 307 |
| 第26回 | 7d 層・7c 層水田跡平面図・断面図 | 287 | | | |

挿表目次

| | | | | | |
|------|----------------------|-----|------|------------------------|-----|
| 第1表 | 調査一覧表 | 5 | 第24表 | 中谷地II・III区4b層水田跡畦畔計測表 | 160 |
| 第2表 | 試掘調査一覧表 | 5 | 第25表 | 中谷地地区遺物観察表 | 173 |
| 第3表 | 遺跡地名表 | 22 | 第26表 | 長町南駅区深掘区土層注記表(1) | 181 |
| 第4表 | 富沢遺跡調査次数表 | 33 | 第27表 | 長町南駅区深掘区土層注記表(2) | 182 |
| 第5表 | 泉崎遺跡調査次数表 | 34 | 第28表 | 長町南駅区深掘区土層注記表(3) | 183 |
| 第6表 | 泉崎I区5層水田跡畦畔計測表 | 59 | 第29表 | 長町南駅区7c層水田跡畦畔計測表 | 183 |
| 第7表 | 泉崎I区5層水田跡水田区画計測表 | 59 | 第30表 | 長町南駅区7c層水田跡 水田区画計測表 | 193 |
| 第8表 | 泉崎I区4層水田跡畦畔計測表 | 61 | 第31表 | 長町南駅区3層水田跡畦畔計測表 | 213 |
| 第9表 | 泉崎I区4層水田跡水山区画計測表 | 61 | 第32表 | 長町南駅区遺物観察表(1) | 221 |
| 第10表 | 泉崎I区遺物観察表(1) | 87 | 第33表 | 長町南駅区遺物観察表(2) | 222 |
| 第11表 | 泉崎I区遺物観察表(2) | 88 | 第34表 | 変電所区12層水田跡水田区画計測表 | 227 |
| 第12表 | 泉崎II区土師器破片集計表 | 127 | 第35表 | 変電所区12層水田跡畦畔計測表 | 227 |
| 第13表 | 泉崎II区遺物観察表(1) | 127 | 第36表 | 変電所区11層水田跡畦畔計測表 | 231 |
| 第14表 | 泉崎II区遺物観察表(2) | 128 | 第37表 | 変電所区4層水田跡畦畔計測表 | 246 |
| 第15表 | 泉崎II区遺物観察表(3) | 129 | 第38表 | 変電所区遺物観察表(1) | 273 |
| 第16表 | 泉崎II区遺物観察表(4) | 130 | 第39表 | 変電所区遺物観察表(2) | 274 |
| 第17表 | 泉崎II区遺物観察表(5) | 131 | 第40表 | 変電所区遺物観察表(3) | 275 |
| 第18表 | 泉崎III区15層水田跡畦畔計測表 | 136 | 第41表 | A換気口区遺物観察表 | 282 |
| 第19表 | 泉崎III区5層水田跡畦畔計測表 | 136 | 第42表 | B換気口区7d層水田跡畦畔計測表 | 286 |
| 第20表 | 泉崎III区遺物観察表 | 141 | 第43表 | B換気口区7c層水田跡畦畔計測表 | 286 |
| 第21表 | 中谷地I区12層水田跡畦畔計測表 | 151 | 第44表 | 出入口区7c層水田跡畦畔計測表 | 293 |
| 第22表 | 中谷地I区7層水田跡畦畔計測表 | 152 | 第45表 | 出入口区遺物観察表 | 298 |
| 第23表 | 中谷地II・III区8層水田跡畦畔計測表 | 159 | | | |

写 真 目 次

| | | | |
|----------------------------|-----|--------------------------|-----|
| 写真 1 遺跡周辺の空中写真 | 377 | 3. SII 遺物出土状況 | |
| 写真 2 泉崎東工区試掘区設定状況 | 378 | 4. SK4 5. SK5 | 389 |
| 写真 3 IN 試掘区No 3 SD3～5 断面 | 378 | 写真26 泉崎II区 | |
| 写真 4 IN 試掘区No 3 SD1・2 断面 | 378 | 1. SD8 農耕具痕 2. 5層全景 | |
| 写真 5 IN 試掘区 | | 3. 近世墓全景 | 390 |
| 1. No 4 東壁断面 2. No 8 東壁断面 | | 写真27 泉崎II区 | |
| 3. No16完掘状況 | 379 | 1. 1号墓 2. 2号墓 3. 3号墓 | |
| 写真 6 IN 試掘区No19東壁断面 | 380 | 4. 4号墓 5. 5号墓 6. 4号墓 | |
| 写真 7 IN 試掘区No19深掘断面 | 380 | 7. 5号墓 8. 7号墓 | 391 |
| 写真 8 IN 試掘区No19 38層樹木出土状況 | 380 | 写真28 泉崎II区 | |
| 写真 9 泉崎東工区 IN 試掘区No 3 作業風景 | 381 | 1. 8号墓 2. 9号墓 3. 11～25号墓 | |
| 写真10 中谷地区工区試掘風景 | 381 | 4. 14c号墓 5. 15号墓 6. 15号墓 | |
| 写真11 長町南工作站区試掘風景 | 381 | 7. 15号墓 8. 16号墓 | 392 |
| 写真12 泉崎 I 区調査区全景 | 382 | 写真29 泉崎II区 | |
| 写真13 泉崎 I 区南壁断面 | 382 | 1. 17号墓 2. 19号墓 3. 20号墓 | |
| 写真14 泉崎 I 区深掘部分 | 382 | 4. 22号墓 5. 23号墓 6. 24号墓 | |
| 写真15 泉崎 I 区 | | 7. 25号墓 8. 25号墓 | 393 |
| 1. SR2・3 2. 11層水田跡畦畔確認状況 | | 写真30 泉崎III区調査区近景 | 394 |
| 3. 11層水田跡畦畔検出状況 | 383 | 写真31 泉崎III区東壁断面 | 394 |
| 写真16 泉崎 I 区 SX1 | 384 | 写真32 泉崎III区15層水田跡畦畔3検出状況 | 394 |
| 写真17 泉崎 I 区 SX1 杖列 | 384 | 写真33 泉崎III区 | |
| 写真18 泉崎 I 区 SX1 横断出土状況 | 384 | 1. 15層水田跡畦畔 1 断面 | |
| 写真19 泉崎 I 区 | | 2. 15層水田跡畦畔 1・西壁断面 | |
| 1. 5層水田跡 2. 4層水田跡 | | 3. 15層水田跡畦畔 4 検出状況 | |
| 3. 4・5層水田跡畦畔断面 | | 4. 15層水田跡畦畔 4 断面 | |
| 4. 東壁断面 | 385 | 5. 15層水田跡畦畔 3 断面 | 395 |
| 写真20 泉崎 I 区 5 層水田跡 | 386 | 写真34 泉崎III区 | |
| 写真21 泉崎 I 区 4 層水田跡水口検出状況 | 386 | 1. 15層水田跡畦畔 2 確認状況 | |
| 写真22 泉崎 I 区 4 層水田跡石器出土状況 | 386 | 2. 5層水田跡全景 | |
| 写真23 泉崎 I 区 | | 3. 5層水田跡畦畔 1 断面 | |
| 1. SK 1・2 2. SD2 3. SK1 断面 | | 4. 5層水田跡畦畔 2 断面 | 396 |
| 4. SD1 5. プラントオパール分析サン | | 写真35 泉崎III区 | |
| プリング風景 6. SD4 | 387 | 1. 5層水田跡足跡 2. 5層水田跡人足跡 | |
| 写真24 泉崎 II 区 | | 3. 5層水田跡人足跡 4. 5層水田跡人足跡 | |
| 1. 調査区全景 2. 東壁断面 | | 5. 牛足跡実験 | 397 |
| 3. SII 全景 | 388 | 写真36 中谷地 I 区土層断面 | 398 |
| 写真25 泉崎 II 区 | | 写真37 中谷地 I 区12層水田跡 | 398 |
| 1. SII 確認状況 2. SII 遺物出土状況 | | 写真38 中谷地 I 区7層水田跡 | 398 |

| | | | | |
|------|-----------------------------------|-----|------|----------------------------|
| 写真39 | 中谷地Ⅰ区SD1全景 | 399 | 写真64 | 長町南駅区7c層水田跡畦畔2上面 |
| 写真40 | 中谷地Ⅰ区SD1断面 | 399 | | 木製品等出土状況 |
| 写真41 | 中谷地Ⅱ区西壁断面 | 399 | 写真65 | 長町南駅区 |
| 写真42 | 中谷地Ⅱ区 | 400 | | 1. 7c層水田跡畦畔2断面 |
| | 1. 8層水田跡 2. 4b層水田跡 | | | 2. 7c層水田跡畦畔2断面 |
| | 4. 10層土器出土状況 | 400 | | 3. 7c層水田跡畦畔2断面 |
| | 中谷地Ⅲ区 | | | 4. 7c層水田跡畦畔4断面 |
| | 3. 4b層水田跡 | 400 | | 5. 7c層水田跡XVIa区南壁 |
| 写真43 | 長町南駅区 | | 写真66 | 長町南駅区7a層出土七鉢先住木製品 |
| | 1. 全景 2. IIIb区土層断面 | | 写真67 | 長町南駅区7a層出土大型板状 安山岩製石器 |
| | 3. IVa区南壁断面 | | 写真68 | 長町南駅区5層水田跡出土一木罐 |
| | 4. IVa区西壁断面 | 401 | 写真69 | 長町南駅区4層Xb区SD2全景 |
| 写真44 | 長町南駅区深掘1 | 402 | 写真70 | 長町南駅区SD2断面 |
| 写真45 | 長町南駅区深掘2 | 402 | 写真71 | 長町南駅区4層Xb・Xa区 SD6・SD7全景 |
| 写真46 | 長町南駅区深掘3 | 402 | 写真72 | 長町南駅区SD6断面 |
| 写真47 | 長町南駅区深掘4 | 403 | 写真73 | 長町南駅区 |
| 写真48 | 長町南駅区深掘5 | 403 | | 1. 4層SD1 2. 4層IXb区杭集中地点 |
| 写真49 | 長町南駅区深掘6 | 403 | | 3. 4層SK5 4. 4層IXb区田下歟出土状況 |
| 写真50 | 長町南駅区深掘7 | 404 | | 5. 3層遺物出土状況 6. 3層遺物出土状況 |
| 写真51 | 長町南駅区NA試掘No5北壁断面 | 404 | 写真74 | 変電所区東壁断面 |
| 写真52 | 長町南駅区7c層水田跡I区 | 404 | 写真75 | 変電所区西壁断面 |
| 写真53 | 長町南駅区7c層水田跡IIa区小畦畔 確認状況 | 405 | 写真76 | 変電所区南壁断面 |
| 写真54 | 長町南駅区7c層水田跡IIa区 | 405 | 写真77 | 変電所区 |
| 写真55 | 長町南駅区7c層水田跡IIa区 | 405 | | 1. 12a層水山路畦畔2断面 |
| 写真56 | 長町南駅区7c層水山路跡IXb区 | 406 | | 2. 12a層水田跡畦畔2断面 |
| 写真57 | 長町南駅区7c層水田跡IIIb・IVa区 畦畔3・4 | 406 | | 3. 12a層水田跡 |
| 写真58 | 長町南駅区7c層水田跡IIIb・IVa区 南張部分畦畔3・4 | 406 | 写真78 | 変電所区12a層水田跡 |
| 写真59 | 長町南駅区7c層水田跡XIb区 畦畔26・27 | 407 | 写真79 | 変電所区12a層水山路 |
| 写真60 | 長町南駅区7c層水田跡Xb区 畦畔29 | 407 | 写真80 | 変電所区12a層水田跡 |
| 写真61 | 長町南駅区7c層水田跡Xb区 畦畔30・31 | 407 | 写真81 | 変電所区12a層水田跡畦畔2 クルミ出土状況 |
| 写真62 | 長町南駅区7c層水田跡Xb・XIa区 畦畔32 | 408 | 写真82 | 変電所区11層水田跡 |
| 写真63 | 長町南駅区7c層水田跡畦畔32 土器出土状況 | 408 | 写真83 | 変電所区11層水田跡 |

| | | | | | |
|-------|---|-----|-------|-------------------|-----|
| 写真88 | 変電所区 6層 SX1 杭列 3 | 418 | 写真114 | 泉崎II区出土遺物(5) | 435 |
| 写真89 | 変電所区 6層 SX1 杭列 3 | 418 | 写真115 | 泉崎III区出土遺物 | 436 |
| 写真90 | 変電所区 6層 SX1 1. 断面 2. 杭列 1 3. 杭列 2 4. 杭列 3 5. 杭列 4 | 419 | 写真116 | 中谷地 I・II区出土遺物 | 437 |
| 写真91 | 変電所区 1. 5層溝状遺構・4層水田跡 2. 5層溝 状遺構 3. 5層溝状遺構灰白堆積状況 4. 3層水田跡 | 420 | 写真117 | 長町南駅区出土遺物(1) | 438 |
| 写真92 | A換気口区 1. 南壁断面 2. 調査区全景 3. 12a層 水田跡 4. 4層水田跡吐群 | 421 | 写真118 | 長町南駅区出土遺物(2) | 439 |
| 写真93 | A換気口区15・16層杭 1・2 | 422 | 写真119 | 長町南駅区出土遺物(3) | 440 |
| 写真94 | A換気口区15・16層杭 4 | 422 | 写真120 | 長町南駅区出土遺物(4) | 441 |
| 写真95 | A換気口区15・16層杭 7 | 422 | 写真121 | 変電所区出土遺物(1) | 442 |
| 写真96 | B換気口区 1. 東壁断面 2. 東壁断面 3. 西壁深掘断面 4. 調査区全景 5. 調査区近景 | 423 | 写真122 | 変電所区出土遺物(2) | 443 |
| 写真97 | B換気口区7d層水田跡 | 424 | 写真123 | 変電所区出土遺物(3) | 444 |
| 写真98 | B換気口区7c層水山跡 | 424 | 写真124 | 変電所区出土遺物(4) | 445 |
| 写真99 | B換気口区7c層水田跡 | 424 | 写真125 | 変電所区出土遺物(5) | 446 |
| 写真100 | 出入口区 1. 7d層水田跡吐群断面 2. 7c層水田跡吐群断面 3. 西壁断面 4. 東壁断面 | 425 | 写真126 | △換気口区・出入口区出土遺物(1) | 447 |
| 写真101 | 出入口区7c層水田跡 | 426 | 写真127 | △換気口区・出入口区出土遺物(2) | 448 |
| 写真102 | 出入口区7c層水田跡 | 426 | | | |
| 写真103 | 出入口区7c層水田跡 | 426 | | | |
| 写真104 | 出入口区7c層水田跡 | 427 | | | |
| 写真105 | 出入口区4層遺構全景 | 427 | | | |
| 写真106 | 出入口区杭 1・2 | 427 | | | |
| 写真107 | 泉崎I区出土遺物(1) | 428 | | | |
| 写真108 | 泉崎I区出土遺物(2) | 429 | | | |
| 写真109 | 泉崎I区出土遺物(3) | 430 | | | |
| 写真110 | 泉崎II区出土遺物(1) | 431 | | | |
| 写真111 | 泉崎II区出土遺物(2) | 432 | | | |
| 写真112 | 泉崎II区出土遺物(3) | 433 | | | |
| 写真113 | 泉崎II区出土遺物(4) | 434 | | | |

I 調査に至る経過と調査した遺跡の概要

1. 調査に至る経過

仙台市は、東北の中枢都市として益々発展し、周辺の仙台都市圏を含めた人口は100万人を越え、平成元年4月には、政令指定都市に移行する予定である。人口の増加に伴う市街地の拡大や交通量の増加が引き起こす交通渋滞等、快適な都市生活を送る上で大きな障害となっている。このような状況の中から、仙台都市圏の基幹交通として登場して来たのが仙台市高速鉄道南北線（以下高速鉄道という）であり、21世紀に向けて躍進する仙台の原動力として大きな期待と役割を担って、昭和63年7月に運行を開始した。

高速鉄道南北線は、仙台駅を中心に南北に長く、北は泉中央駅から南は富沢駅に至るルートである。建設工事はその地形によって、山岳トンネル工法・シールド工法・開削工法・高架方式の4つの手法が用いられている。

仙台市教育委員会は、高速鉄道建設に先立ち、路線内及びその周辺の分布調査を行った（仙市教：1980）。その結果、北部の台ノ原・瓦山地区で五本松窯跡・堤町窯跡等、南部の富沢・大野田地区で泉崎浦遺跡・山口遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡等が位置していることが判明した。特に南部地域は多くの遺跡が分布しており、なおかつ沖積地の特徴として重層的に遺構遺物が存在するため、周知の遺跡以外にも新たに遺跡が発見される可能性が大きい地域である。そのため仙台市教育委員会は、開削工法で建設される長町南駅（旧名称、鍋田駅）以南については遺跡の発掘調査を行うこととし、仙台市建設局高速鉄道建設本部との協議に入った。そして、昭和56年4月の下ノ内遺跡の調査より本格的な発掘調査を開始し、以後昭和61年の六反田遺跡の調査をもって、野外調査を終了した（第1表・第3図）。



第1図 富沢遺跡位置図

2. 調査要項

| | | |
|-------------|----------------|------------------|
| (1) 遺跡名・所在地 | 富沢遺跡 (C-301) | 仙台市泉崎1丁目・長町南3丁目他 |
| | 泉崎涌遺跡 (C-202) | 仙台市泉崎1丁目 |
| | 下ノ内浦遺跡 (C-300) | 仙台市富沢1丁目他 |
| | 山口遺跡 (C-233) | 仙台市富沢1丁目他 |
| | 六反田遺跡 (C-197) | 仙台市大野田字五反田・六反田他 |
| | 下ノ内遺跡 (C-299) | 仙台市富沢4丁目他 |
| | 伊古田遺跡 (C-196) | 仙台市大野田字塚田他 |
| | 五本松窯跡 (C-403) | 仙台市台ノ原森林公園 |

(2) 調査主体 仙台市教育委員会

仙台市交通局

(3) 調査担当・年度別調査員

①昭和56年度

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

社会教育課課長 永野昌一

主幹兼文化財調査係長 早坂春一

調査員 佐藤 隆 (教諭) 佐藤 裕 (教諭) 結城慎一 棚原信彦
吉岡恭平 荒井 格 高橋勝也 (派遣職員)

②昭和57年度

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

社会教育課課長 永野昌一

主幹兼文化財調査係長 早坂春一

調査員 渡辺忠彦 (教諭) 田中則和 棚原信彦 吉岡恭平

主浜光朗 斎野裕彦 荒井 格 高橋勝也 (派遣職員)
鈴木 実 (嘱託)

③昭和58年度

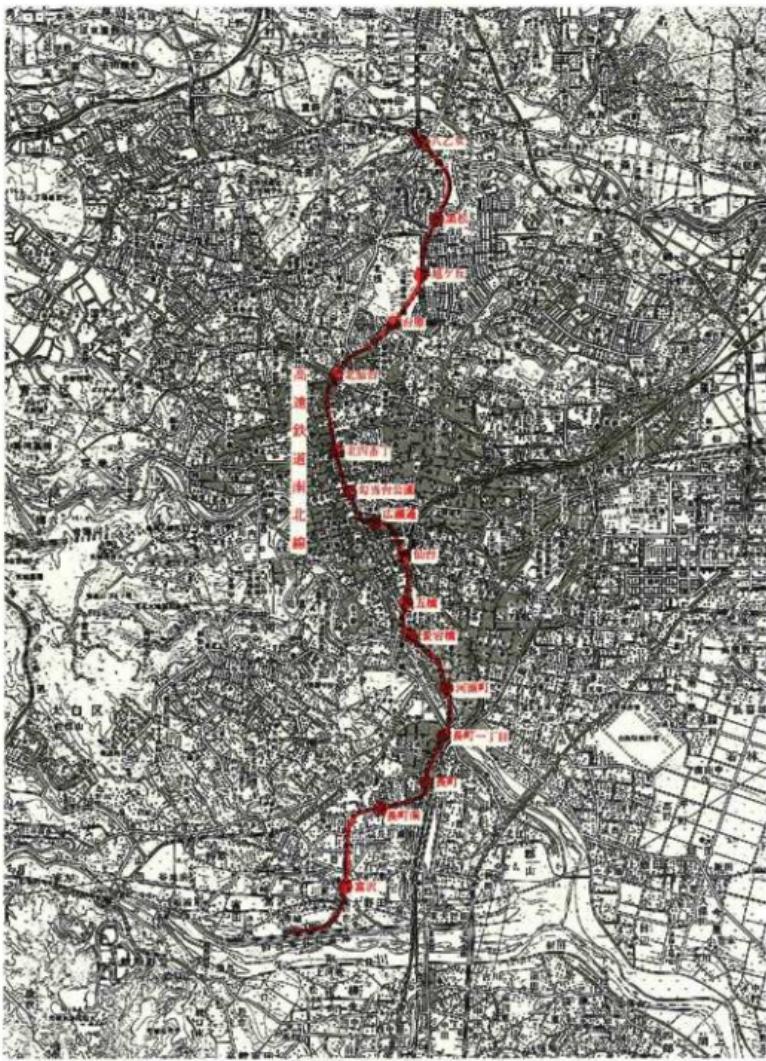
調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

社会教育課課長 永野昌一

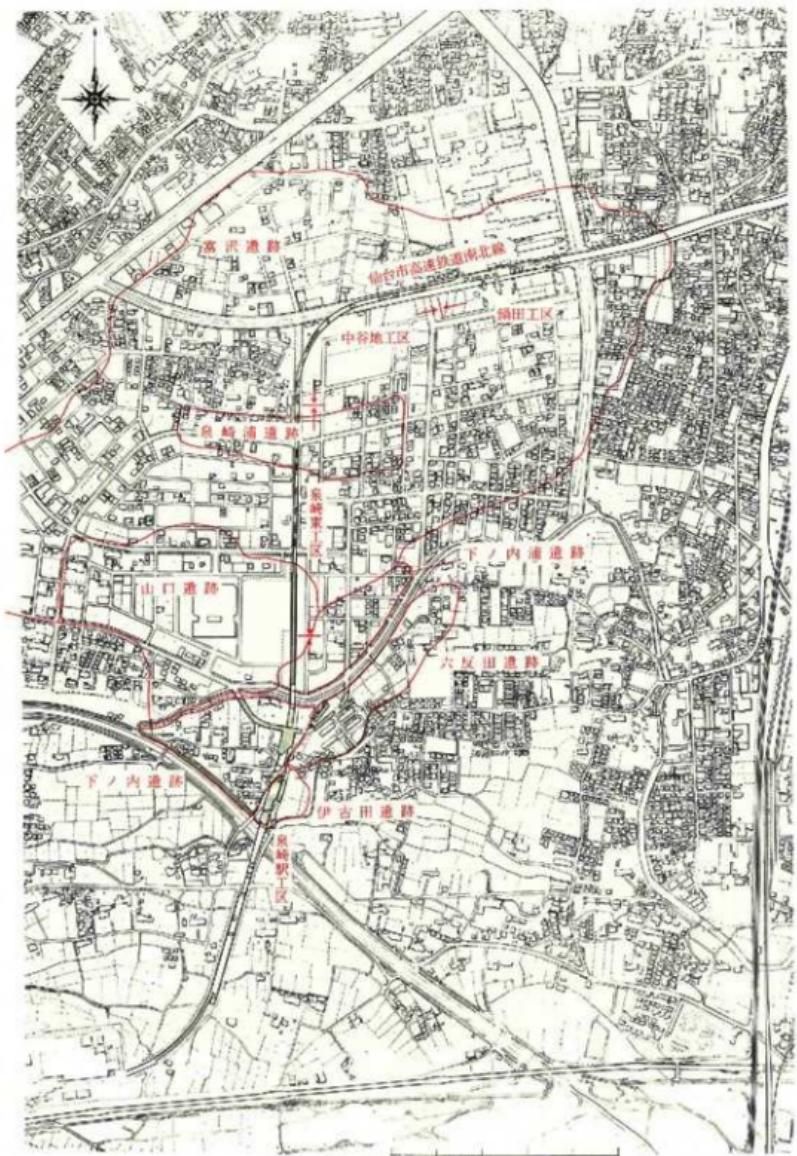
主幹 早坂春一

文化財調査係長 佐藤 隆

調査員 渡辺忠彦 (教諭) 佐藤 裕 (教諭) 成瀬 茂 (教諭)



第2図 高速鉄道路線図



第3図 調査区位置図

第1表 調査一覧表

| 遺跡名 所在地 | 時代 種類 | 調査期間 | 調査面積 | 担当職員 備考 | |
|----------------------------|-------------|--|---|---|---|
| 吉田遺跡 仙台市泉崎1丁目・ 那珂町口山 | (米崎地区) | 第1次調査 S57.9.1～S57.12.31 | 約 600m ² | 吉岡 | |
| | (中谷地地区) | 石器・縄文～近世 | 第1次調査 S57.8.25～S57.12.23 第2次調査 S58.4.13～S58.12.27 S59.1.6～S59.1.9 | 約 1,850m ² 約 500m ² | 吉浜、石橋(附) |
| | | | 第1次調査 S57.10.5～S57.12.25 | 約 1,300m ² | 西野、荒井、渡辺誠 |
| | | | S58.2.3～S58.2.12 第2次調査 S58.4.13～S58.12.27 S59.3.5～S59.3.23 第3次調査 S59.4.11～S59.6.26 第4次調査 S60.4.10～S60.8.9 | 約 1,300m ² 約 750m ² 約 710m ² | 吉野、荒井、渡辺誠 藤原、渡辺(急) 藤原、西野 藤原、吉岡、高橋泰 |
| 泉崎沿道跡 仙台市泉崎1丁目 | 縄文・古墳・平安・江戸 | 第1次調査 S57.9.1～S57.12.25 | 約 1,200m ² | 田中、吉岡 | |
| | 集落跡・水田跡 | S58.1.5～S58.2.16 | | | |
| 下ノ内浦・山口遺跡 仙台市高沢1丁目地 | 縄文～平安 | 第1次調査 S56.6.25～S56.12.28 第2次調査 S58.4.13～S58.12.23 | 約 3,000m ² | 吉岡、成瀬、毛浜 | |
| | 集落跡・水田跡 | 第3次調査 S59.4.11～S59.11.19 | 約 3,000m ² | 高橋(附) | |
| 六反田遺跡 仙台市大野山字五反田・六反田 | 縄文～平安 | 第1次調査 S56.1.7～S56.12.26 S57.1.6～S57.1.18 | 約 1,200m ² | 佐藤隆、藤原 | |
| | 集落跡 | 第2次調査 S58.0.9～S58.11.28 | 約 1,200m ² | 吉岡、佐藤(良) | |
| | | 第3次調査 S59.4.22～S59.12.25 | | | |
| 下ノ内遺跡 仙台市高沢4丁目地 | 縄文～中世 | 第1次調査 S56.4.17～S56.12.26 S57.1.6～S57.1.18 | 約 1,200m ² | 佐藤隆、佐藤裕 | |
| | 集落跡 | 第2次調査 S57.4.12～S57.17.25 | 約 1,700m ² | 渡辺(急)、藤原 | |
| | | 第3次調査 S58.4.13～S58.12.8 | | | |
| | | 第4次調査 S59.4.11～S59.5.26 | | | |
| 伊吉田遺跡 仙台市大野山字吉田他 | 縄文・古墳～平安 | 第1次調査 S58.4.15～S58.12.27 S59.3.5～S59.3.23 | 約 2,100m ² | 藤原、佐藤(附) | |
| | | 第2次調査 S59.4.25～S59.8.11 | 約 2,100m ² | 吉岡、西野、荒井 | |
| | | 第3次調査 S61.4.4～S61.9.5 | 約 2,100m ² | 高橋(附) | |

第2表 試掘調査一覧表

| 建設工区名 | 調査期間 | 直積 | 発見遺構 | 担当職員 | 遺跡名 | 備考 |
|-------|---------------------|-------------------|-----------|----------------|---------|--------|
| 泉崎駅工区 | S57.4.12～S57.7.1 | 480m ² | 堅穴住居跡・水田跡 | 吉岡、吉野、荒井、高橋(附) | 泉沢・泉崎遺跡 | 本調査へ移行 |
| 中谷地工区 | S57.6.4～S57.8.11 | 710m ² | 水田跡 | 吉岡、吉野、高橋(附) | 泉沢遺跡 | 本調査へ移行 |
| 中谷地工区 | S58.5.25～S58.6.30 | 36m ² | | 吉野、荒井 | 泉沢遺跡 | |
| 鶴田工区 | S57.7.5～S57.10.4 | 350m ² | 水田跡 | 吉野、荒井 | 泉沢遺跡 | 本調査へ移行 |
| 泉崎駅工区 | S57.10.25～S57.11.26 | 280m ² | | 藤原、渡辺(急) | | |
| 泉崎駅工区 | S58.4.13～S58.4.19 | 65m ² | | 藤原、高橋(附) | | |
| 草津工区 | S57.10.25～S57.11.4 | 72m ² | | 藤原、渡辺(急) | | |

調査員 篠原信彦 吉岡恭平 渡辺 誠(教諭) 斎野裕彦
荒井 格 高橋勝也(派遣職員)

④昭和59年度

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
社会教育課 課長 阿部 達
主幹 早坂春一
文化財調査係長 佐藤 隆
調査員 篠原信彦 佐藤美智雄(教諭) 吉岡恭平 丁藤哲司
主浜光朗 斎野裕彦 千葉 仁(教諭) 高橋勝也(派遣職員)

⑤昭和60年度

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
社会教育課 課長 阿部 達
主幹 早坂春一
文化財調査係長 佐藤 隆
調査員 篠原信彦 古岡恭平 高橋 泰

⑥昭和61年度

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査係
文化財課 課長 早坂春一
調査係長 佐藤 隆
調査員 篠原信彦 吉岡恭平 佐藤良文

(4) 調査協力機関

宮城県教育委員会文化財保護課 東北大学考古学研究室 古窯跡研究会
宮城県警察本部 宮城県仙台土木事務所 仙台営林署 東北財務局
仙台市交通局高速鉄道建設本部
鹿島・鴻池・日本国工 J V (鍋田工区) 松村・株木 J V (中谷地工区) 三菱・徳倉 J V (泉崎東工区)
仙建・奥田 J V (泉崎駅工区)

(5) 調査協力者(五十音順、敬称略)

阿子島香 新井房夫 伊東信雄(昭和62年4月10日逝去) 曹上元博 加藤 強 工藤雅樹
桑月 鮑 佐川正敏 佐々木章 庄子貞雄 庄司駒男 須藤 隆 豊島正幸 畑中憲一
藤原宏志 藤下典之 崎川清親 松谷曉子 松本秀明 三好教夫 森本岩太郎 安田喜憲
山田 格 山田一郎 渡辺泰伸

(6) 調査参加者・整理参加者(昭和56年～平成元年)

①調査参加者

| | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 柏沢 勝利 | 柏沢 国雄 | 柏沢 史子 | 青山 素子 | 浅理 千賀 | 安達八千代 | 熱海 齐也 |
| 阿部あき子 | 阿部いしよ | 阿部 吉了 | 阿部 弘一 | 阿部 孝一 | 阿部さつき | 阿部 正一 |
| 阿部清太郎 | 阿部 清 | 阿部 高子 | 阿部 貢 | 阿部 武 | 阿部徳四郎 | 阿部のり子 |
| 阿部 正子 | 阿部ミノル | 阿部八重子 | 阿部 保行 | 阿部 祐一 | 阿部 小夫 | 阿部 良則 |
| 阿部よね子 | 飯塚 俊行 | 飯塚 晴夫 | 五十嵐慶一 | 五十嵐旗洋 | 志岐 豊子 | 石川 達也 |
| 石黒伸一郎 | 板橋 康子 | 板橋さくみ | 板橋 孝子 | 板橋 春行 | 板橋みつよ | 伊東ヒデヨ |
| 伊東 秋代 | 伊藤 敦子 | 伊藤 和恵 | 伊藤清之助 | 伊藤 民子 | 伊藤 脩 | 伊藤 裕 |
| 伊藤理恵子 | 糸谷 明子 | 故人間川富市 | 猪股 幸子 | 岩間かつ江 | 岩間 春吉 | 岩見 和泰 |
| 梅宮 哲 | 浦 香織 | 遠藤いな子 | 故遠藤 金蔵 | 遠藤 良子 | 及川 一郎 | 大内志づゑ |
| 大内 労郎 | 大浦 茂司 | 大里のり子 | 大里美恵子 | 太田 一郎 | 太田しげの | 太田志づゑ |
| 太田 錠 | 太田 有厚 | 太田百合子 | 太田わくり | 大友いくよ | 大友 勇 | 大友かおる |
| 大友 桂子 | 大友 節子 | 大友 透 | 大友フミ子 | 大友 義信 | 大槻 光子 | 大場 功 |
| 大場 执俊 | 大沼 勇 | 大宮 裕二 | 小笠原英也 | 岡本真紀子 | 小島 真弓 | 小嶋 澄子 |
| 小嶋登喜子 | 長山 輝子 | 小野ヒサコ | 小沼ちえ子 | 鐵内 登 | 加賀美要子 | 龍倉 潤 |
| 加藤けい子 | 門野 カ恋 | 企森 弘一 | 鎌田みどり | 川下 厚 | 神城 浩志 | 菅野 冷子 |
| 菊地 旭 | 菊地つね子 | 菊地 宜之 | 菊池 典子 | 菊池 治彦 | 菊池みよし | 木皿 荘子 |
| 工藤えなよ | 国井 影人 | 熊谷 政子 | 黒沢トシ子 | 小池 英子 | 小池 房子 | 小泉 律正 |
| 郡山 和子 | 小西子川文博 | 小竹 恵子 | 児玉 研也 | 小林 国子 | 小林 てる | 小村田達也 |
| 小松 茂樹 | 今野 ちぎよ | 今野 義晴 | 郷家 栄一 | 後藤 修 | 後藤 幸子 | 清藤 康子 |
| 斎藤 信次 | 斎藤 誠司 | 斎藤とき子 | 斎藤 光子 | 斎藤美弥子 | 斎藤 晴 | 斎藤 豊 |
| 佐伯かほり | 佐伯とき子 | 佐伯みつゑ | 境 恵子 | 坂下とみ子 | 佐川 正敏 | 佐久間光平 |
| 佐々木うめの | 佐々木信信 | 佐々木とし子 | 佐々木 賢 | 佐藤 有弘 | 佐藤栄三郎 | 佐藤 三郎 |
| 佐藤 静子 | 佐藤 茂己 | 佐藤 忠勝 | 佐藤たみえ | 佐藤 輝子 | 佐藤とし子 | 佐藤とし子 |
| 佐藤 博 | 佐藤 文子 | 佐藤 正勝 | 佐藤まき子 | 佐藤 正広 | 佐藤みや子 | 佐藤 みよ |
| 佐藤 実子 | 佐藤よし江 | 佐野たみえ | 矢田アツ子 | 柴田 雄 | 清水 寿江 | 庄子 道一 |
| 庄子 信広 | 庄司よしぶ | 陣場 峰雄 | 課江 敏 | 背井 純子 | 背井 妙子 | 菅原恵美子 |
| 菅原 達校 | 菅原まさよ | 鈴木きぬ子 | 鈴木 梢示 | 鈴木 聰 | 鈴木 雅徳 | 鈴木 正 |
| 鈴木つや子 | 鈴木よしゑ | 武田 萬 | 竹森 永源 | 立花利惠子 | 高橋 和夫 | 高橋かめよ |
| 高橋 孝次 | 高橋 憲一 | 高橋千年世 | 高橋千代子 | 高橋とし子 | 高橋とみ子 | 高橋 智 |
| 高橋 博 | 高橋 秀樹 | 高橋美知子 | 高橋ヨシ子 | 高橋 りえ | 田高 親 | 千田あや子 |
| 千田タイ子 | 千葉きよ子 | 富地 晃裕 | 富谷五郎兵衛 | 中沢 正古 | 中島 敦子 | 中野 裕平 |
| 七尾 高義 | 西沢 浩子 | 西村日出子 | 沼倉 新兵 | 沼田 純子 | 沼田ツヤ子 | 根深ハツエ |
| 萩原くみ子 | 支倉 力衛 | 長谷部 享 | 羽田 信行 | 早坂みつえ | 原 遼 | 原 充広 |
| 牛田 栄子 | 曳地エチ子 | 平野 正人 | 福山 和子 | 富士渕正浩 | 藤沢 敏 | 藤田 淳 |
| 布田 光子 | 古木 肇一 | 古屋敷則進 | 故文星 誠 | 星 廉徳 | 星 昌彦 | 堀口チカノ |

| | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 本郷 孝治 | 本堂 富子 | 本間 妙子 | 増子きぬよ | 松浦 二郎 | 松木 仁 | 松崎 啓示 |
| 松林 四郎 | 真山 淳 | 三詠きよの | 三詠ヤス子 | 三詠フミエ | 峰岸 登 | 峰岸 光子 |
| 宮崎 進 | 宮本 昌俊 | 武暮 秀哉 | 村井二郎松 | 村上 鶴 | 村上さかゑ | 村上てるゑ |
| 村上 正毅 | 村上 洋子 | 村上よしえ | 毛利 貴洋 | 桃井 秀子 | 森 節子 | 森 利男 |
| 森 みほ子 | 森屋とし子 | 八代 功 | 谷津 妙子 | 篠瀬 裕一 | 山川 道信 | 山田きよゑ |
| 山田しょう | 山山 稔 | 山山よね子 | 山守 梅子 | 山村 一作 | 横田多慶子 | 横田 太吉 |
| 横山 つる | 吉田 恒治 | 吉田 常治 | 吉田 均 | 古田 秀享 | 吉田 雅之 | 吉野たま子 |
| 渡辺 幸子 | 渡辺 節子 | 渡辺 東子 | | | | |

②整理参加者

| | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 相沢 史子 | 会田 宏弘 | 浅見 千賀 | 熱海 哲也 | 阿部あき子 | 阿部いしよ | 阿部清太郎 |
| 阿部多津子 | 阿部恵美子 | 阿部八重子 | 阿部 祐二 | 阿部よね子 | 荒木 隆 | 有路 尚子 |
| 五十嵐慶一 | 宅枝 義子 | 砂金よしえ | 石井多賀子 | 石川 勝子 | 板橋さくみ | 板橋 孝子 |
| 伊藤清之助 | 上野 明仁 | 臼井美津子 | 梅宮 智 | 江刺ゆかり | 及川 一郎 | 大内 芳郎 |
| 大里美恵子 | 太田 勉 | 大平いちみ | 大友 節子 | 大友 透 | 大場 功 | 大久 真理 |
| 岡崎 修子 | 岡本真紀子 | 小沼ちえ子 | 小野 妙子 | 織内 登 | 柿沼 幸子 | 加藤けい子 |
| 加藤 若子 | 金沢 翔代 | 神尾紀以子 | 萱場せい子 | 曾野 正道 | 菊地つね子 | 木皿 庄子 |
| 木村 浩 | 熊谷 信一 | 桑月 鮮 | 小池 房子 | 児玉 研也 | 小池子川文博 | 木幡真喜子 |
| 足野 賢一 | 今野ちぎよ | 後藤 修 | 後藤 幸子 | 斎藤 信次 | 斎藤 賦司 | 斎藤 洋美 |
| 斎藤美智子 | 斎藤美弥子 | 西東 雅子 | 坂田 浩二 | 佐川 正敏 | 佐々木真由美 | 佐々木弥生 |
| 佐藤 育弘 | 佐藤 啓子 | 佐藤 恵司 | 佐藤 浩己 | 佐藤ちづ子 | 佐藤 博 | 佐藤 美子 |
| 宍戸あつ子 | 宍戸 光枝 | 庄司 敏 | 庄司よしみ | 庄子 信広 | 鰐江 敏 | 菅井 君子 |
| 菅原恵美子 | 菅原 珍子 | 杉原比佐子 | 須佐 文恵 | 鈴木 和子 | 鈴木 勝彦 | 鈴木 聰 |
| 鈴木つや子 | 鈴木みづ子 | 関内 久子 | 平 照子 | 高橋 利子 | 高橋 繁子 | 高橋 孝次 |
| 高橋 博 | 高橋ヨシ子 | 高橋 りえ | 印中 敏子 | 田村理恵子 | 千田あや子 | 千田タイ子 |
| 千葉きよ子 | 千葉ヨシ子 | 富地 光裕 | 豊村 幸公 | 土井 常久 | 中島 敏子 | 中島いく子 |
| 長江 恵子 | 中野 裕平 | 西村日出子 | 沼田 梢子 | 芳賀 英美 | 早坂みつえ | 原 薫 |
| 原 光広 | 飯田 珠美 | 平塚 秀男 | 藤沢 敏 | 藤田 淳 | 古屋牧則雄 | 星 昌彦 |
| 細谷 広枝 | 本間 妙子 | 松浦 二郎 | 松木 仁 | 武藤 秀哉 | 村上 俊彦 | 村田 佐子 |
| 毛利 貴洋 | 森 節子 | 森 利男 | 森 みほ子 | 森 陽子 | 諸澤 陸子 | 八木 祥子 |
| 八代 功 | 山川 道信 | 山寺 梅子 | 湯浅ます枝 | 横田 広美 | 古川 陽子 | 古田 雅之 |
| 吉田 康子 | 渡辺 幸子 | 渡辺 清子 | 渡辺 節子 | 渡辺 東子 | | |

3. 調査した遺跡の概要

(1) 富沢遺跡(C-301)

富沢遺跡は、仙台市鹿野・長町・長町南・泉崎・富沢に所在し、面積が約90haの広大な遺跡である。

この遺跡は、青葉山丘陵と名取・広瀬両河川によって区画された郡山低地の西半部に位置し、主に名取川と広瀬川によって形成された後背湿地に立地している。

高速鉄道の路線は、この富沢遺跡の中心部を横切るように東側から西側に進み、さらに南進して富沢駅へと向かっている。調査は泉崎前地区、中谷地地区、鳥居原地区の各地区のほぼすべてにわたり実施している。調査の結果、弥生時代の水田跡、平安時代の水田跡、中世の水田跡が検出されている。

弥生時代の水田跡は、ほぼ調査区全域で中期の樹形畠式期のものが検出されている。特に鳥居原地区では、水田区画の基軸となる大畦畔によって大きく画され、さらに小畦畔によって区画された水田が検出されている。小区画の水田の規模は、 $2 \times 3 \sim 4 \times 6.5m$ の方形を基本とし、面積は $6 \sim 26m^2$ を測る。また、水田の区画などは不明だが弥生時代中期の十三塙式期の水田跡も検出されている。出土遺物としては、樹形畠式期の弥生土器や石器、丸木弓、十三塙式期の木製鋤や石庖丁、弥生時代～8世紀初め頃の木製横鍬などがある。

平安時代の水田跡は2時期存在する。水田の区画は不明だが、ほぼ南北・東西方向に延びる畦畔が検出され、畦畔の上や耕作土中に平安時代に降下した灰白色火山灰がみられる。遺物としては土師器・須恵器のほか木製の田下駄などがある。



長町南駅区調査風景



長町南駅区弥生時代水田跡

(2) 泉崎浦遺跡(C-202)

泉崎浦遺跡は、仙台市泉崎1丁目に所在し、広瀬川と名取川により形成された後背湿地と、その中にある微高地とに立地している。調査の結果、微高地では、古墳時代の竪穴住居跡・遺物包含層、江戸時代の墓壙群が検出され、北側の後背湿地では、弥生時代と平安時代の水田跡が検出されている。

古墳時代の住居跡は1軒検出されている。西側と南側が後世の搅乱により破壊され全体の規模は不明だが、平面形は方形と考えられる。遺物は床面やピットなどから土師器壺・高壺・蓋・甕・瓶等が出土している。

江戸時代の墓壙群は31基検出されている。そのうち木棺、木棺片、桶等が残存するものは7基である。7号墓では、40才以上の頑強な男性の人骨が良好に遺存していた。4号墓では箸1膳をのせた茶碗と提灯2個が出土した。他の墓壙の副葬品としては陶磁器、提灯、箸、鳥形木製品、煙管、柄鏡、櫛、寛永通宝などがある。

水田跡は、微高地北側の後背湿地の5層上面と15層上面で検出されている。5層上面の水田跡は水田面が砂層に覆われており、東西方向と南北方向の畦群が各1条検出された。時期は平安時代である。作土上面及び畦畔上には、人・牛の足跡が確認されている。15層上面の水田跡では、畦畔が南北方向1条、北西方向2条、北東方向1条検出されたが水田の枚数や規模、形状は不明である。時期は弥生時代である。



泉崎II区古墳時代住居跡



泉崎II区近世墓調査風景

(3) 下ノ内浦遺跡 (C-300)

下ノ内浦遺跡は仙台市富沢1丁目に所在し、名取川及びその支流である笊川とによって形成された自然堤防上とその後背湿地とに立地している。

調査区は仙台市体育馆の東隣に位置し、縄文時代（早期中葉・前期後葉・後期前葉）、弥生時代から平安時代の遺構・遺物が検出されている。

<縄文時代>

縄文時代早期中葉の遺構・遺物としては、日計式の押型文土器が出土し、住居跡の可能性がある竪穴遺構2基、土坑7基が検出された。遺物は押型文土器・無文土器、石鏃・尖頭器・スクレイバーのほか多数の剥片・チップが遺物包含層より出土している。

後期前葉の遺構としては、墓と

考えられる9基の配石遺構・土壙約120基、埋設土器遺構5基などが検出されている。遺物は配石遺構・土壙より赤彩された土製耳飾り6点出土のほか、遺物包含層より多量の南境式の土器や石器、土偶などが出土している。

配石遺構の構造は河原石を1～2重にめぐらし、長軸両端に立石を配し内側に小砾を詰め込むもの（5基）、西端のみを立石としているもの（2基）、立石のないもの（1基）、組石の単位がくずれたと思われる集石状のもの（1基）がある。配石下部では土壙が検出され、そのうち2基からは赤彩された土製耳飾りが出土している（1号・7号）。

土壙群は約120基が検出され、その分布範囲は上層を覆う遺物包含層の範囲に一致する。土壙の平面形は、円形と梢円形とに大別され、規模は径が60～150cm、深さが15～60cmと様々である。各土壙の堆積土中から土器片、土製品、石器が出土しているが、特にSK43土壙、SK117土壙からは、赤彩された土製耳飾りが出土している。



下ノ内浦遺跡配石墓



下ノ内浦遺跡土壙群

<弥生時代>

弥生時代の遺構としては、竪穴遺構2基、土壙3基、溝跡1条、多数のピット群が検出されている。

S I 2 竪穴遺構は、東西約3.2m、南北約3mの南東隅がややふくらむ隅丸方形である。堆積土などより鉄石英製の管玉、アメリカ式石鐵、石錐、炭化米、弥生土器などが出土している。

S K 2 土壙は土壙墓と考えられ、長軸2.7m、短軸1.2mの隅丸長方形を呈する。東壁寄りに径20cmの赤色部分が2ヵ所、それに近接して石庖丁2点、太形蛤刃石斧1点が出土している。

遺物包含層より弥生土器のほか土製紡錘車、石錐、アメリカ式石鐵、鉄石英製の管玉、石錐などが出土している。弥生土器は細い沈線を2本ないし3本同時に施文する平行沈線文系土器群（十三塚式比定）と、交互刺突に特徴づけられる土器群（天王山式比定）とが出土している。

<奈良・平安時代>

5層上面で奈良時代の住居跡5軒、平安時代の住居跡5軒のほか、掘立柱建物跡1棟、柱列2列、溝跡3条、小溝状遺構群、河川跡などが検出されている。



下ノ内浦遺跡土壙墓



下ノ内浦遺跡土壙墓出土遺物

(4) 下ノ内遺跡 (C-299)

下ノ内遺跡は仙台市富沢四丁目に所在し、名取川及び名取川の支流である荒川によって形成された自然堤防上に立地し、荒川の南岸に位置している。調査の結果、縄文時代から中世までの遺構・遺物が発見されている。

縄文時代では、中期末葉の竪穴住居跡3軒、中期末葉～後期前葉の埋設土器遺構2基や土坑35基などの遺構が検出されている。

竪穴住居跡は4～6mの円形プランを呈し、土器埋設部と石組部からなる複式炉が構築された大木10式期の住居跡である。そのうち2軒の住居跡は、中央付近に河原石を敷き詰めた住居跡である。住居跡の周辺からは土坑やピットが集中して検出されており、さらに遺構及び遺物包含層から中期末葉から後期前葉の縄文土器、石器が多量に出土している。

弥生時代では、後期の天王山式期の土壙墓と考えられる遺構が検出され、土壙上面およびその周辺より交互刺突文が口縁部に施された壺一個体分の破片が出土した。

古墳時代から平安時代にかけては、23軒の竪穴住居跡及び竪穴遺構、11棟の掘立柱建物跡・掘立柱列など多くの遺構が調査区全体で検出されている。古墳時代の住居跡のうち、S I 16住居跡からは南小泉式期の土師器壺・甕・甌などの一括資料が出土している。S I 28竪穴遺構は平安時代の鍛冶遺構と考えられ、多量の鉄滓が出土している。



下ノ内遺跡縄文時代竪穴住居跡

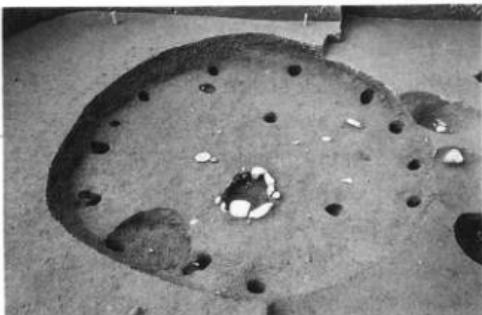


下ノ内遺跡現地説明会風景

(5) 六反田遺跡(C-197)

六反田遺跡は、仙台市大野田字五反田・六反田地内に所在し、名取川及び名取川の一支流である笊川によって形成された自然堤防上に立地している。

これまで、日本電信電話株式会社東北總支社（NTT）の社宅建設のために昭和51～53年度と昭和59年度の4次にわたり調査が実施され、縄文時代中期中葉の竪穴住居跡、中期末葉～後期初頭の竪穴住居跡や土坑のほか、多量の縄文土器・石器が出土している。さらに、古墳時代のものとして、五反田古墳や箱式石棺・木棺墓、塩釜式の竪穴住居跡がある。奈良・平安時代では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・小溝状遺構・溝跡などが調査されている。



六反田遺跡縄文時代住居跡



六反田遺跡住居跡と小溝状遺構群

今回の調査では、NTTの調査

区の西側に位置する市道「下ノ内・六反田線」建設と共同住宅建設の部分の調査を実施している。調査の結果、縄文時代と奈良・平安時代の遺構が検出されている。縄文時代の遺構は後期前葉の南境式期の竪穴住居跡1軒と多くの土坑、埋設土器遺構、配石遺構のほか、遺物包含層から多量の縄文土器・石器が出土している。S I 4住居跡は、直径4.2mの円形プランを呈するもので、中央よりやや南側に梢円形に河原石を配列した石圓炉が検出されている。柱穴は壁直下に約20個のピットがほぼ等間隔でめぐっている。遺物包含層からは多量の南境式の縄文土器が出土している。

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡、小溝状遺構などが検出されている。

(6) 伊古田遺跡(C-196)

伊古田遺跡は、仙台市大野田字塙田他に所在し、名取川とその支流である荒川とによって形成された自然堤防上に立地している。調査の結果、縄文時代、古墳～平安時代の遺構や遺物が検出されている。調査区の北半部は、産業廃棄物などを埋めるために大きな搅乱が砂礫層まで達している。

縄文時代の遺構としては、細長い梢円形状の広がりを見せる遺物包含層が発見され、縄文時代後期中葉の宝ヶ峯式期の縄文土器や石器のほか、土偶などの土製品が出土している。縄文土器は、鉢・深鉢・浅鉢・壺形など多種な器形がある。

土偶は23体分が出土している。全体像の判明しているものは、立像3体、蹲距像1体で、立像の1体は大きさ41.4cmを測るものである。

古墳～平安時代の遺構としては、竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡2棟、土坑20数基、溝跡4条などが検出されている。古墳時代のものは、塩釜式期の竪穴住居跡2軒と土坑1基がある。住居跡はいずれも、方形で地床炉が検出されており、S I 14住居跡からは土師器壺・高壺・器台・壺・甕など塩釜式のまとまと一括資料が出土している。



伊古田遺跡遺物包含層



伊古田遺跡古墳時代住居跡

II 遺跡の立地と環境

1. 富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷

東北大学理学部地理学教室 豊 島 正 幸

(1) 遺跡周辺の地形概観

仙台市東南部の海岸平野（仙台平野）のうち、広瀬川と名取川にはさまれた部分は郡山低地と呼ばれている。西側には地質構造線（長町一利府線）が存在し、丘陵・段丘地域と海岸平野を明瞭に分けている。富沢遺跡は郡山低地西部の低湿地帯に位置する。

第4図には、米軍撮影の空中写真（縮尺4万分の1）の判読に基づいて、流路跡の分布状態を示した。鍋田付近を中心とする一帯には荒川、金洗沢および二ツ沢等の支流の流路跡は見られるものの、広瀬川や名取川に関する流路跡はほとんど見られない。このことから、鍋田付近は両河川の影響が直接には及びにくい所であることが推定される。

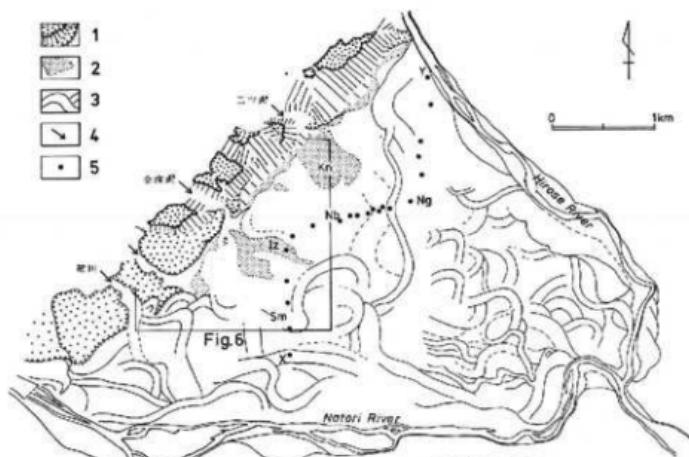
なお、郡山低地一帯は、後氷期の海面上昇に伴う海域拡大の極大期においてさえ陸成層の堆積が継続していたところである（松本（1981）の沖積層断面図参照）。

(2) 低湿地帯の地質断面

ポーリング調査による既存の地質柱状図（地下鉄路線に沿う20地点、第4図中の黒丸）や発掘現場における地層観察に基づいて地質断面図を作成すると、第5図および第6図のようになる。

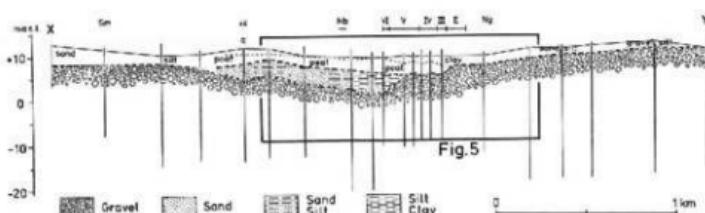
遺物包含層の基盤である疊層を鍋田やII区で観察すると、最大径15cm前後の円疊層である。これは主として名取川や広瀬川の河道内で堆積した流路堆積物と考えられる。疊層の上面高度は鍋田付近で最も低く、名取川および広瀬川の両方向に向かって高くなる（第5図）。このことは、名取川および広瀬川が、それぞれ鍋田付近から南および北へ流路を移動させつつ河床を上昇させてきたことを示す。両河川が鍋田の東方で合流することから、同疊層上面の断面形は東西方向にも凹形をなすことが推定される。疊層上面によって示される鍋状の凹所の出現は、低湿地成立における基礎的要因となったと考えられる。下ノ内浦および隣接する山口の各遺跡で、疊層の上位の層から押型文土器が出土するので、下ノ内浦から鍋田の間の疊層は、縄文時代早期にはすでに堆積していたと考えられる。

この疊層上面がつくる凹所を埋める形で堆積しているのは、砂・シルト・粘土である（第5図）。西方の丘陵地帯に露出する酸性凝灰岩起源の礫を含むことや位置関係から、これは主として金洗沢や二ツ沢の支流によって供給された堆積物であると判断される。（なお、名取川や広瀬川の氾濫堆積物に由来する細粒物質も混入していることは十分に予想される。）この支流起源

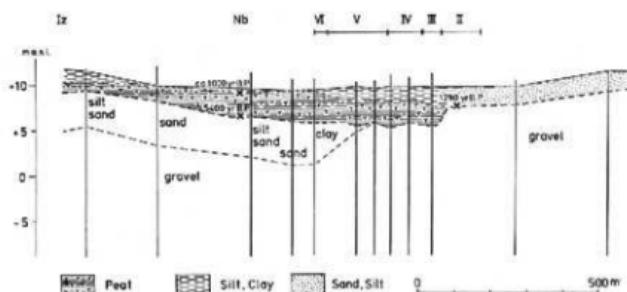


第4図 空中写真判読による流路跡の分布

1. 段丘面と崖(浜田の段丘を含む) 2. 濡原地 3. 流路跡 4. 支流の位置 5. ボーリング調査の地点
Nb : 鍋田 Ng : 長町駅 Sm : 下ノ内浦 Ix : 犬崎瀬 Kn : 鹿野



第5図 地下鉄路線に沿う地質断面図(X-Y)



第6図 鍋田付近の地質断面図

の堆積物は部分的に植物遺体（湿性植物と思われる）を含むことから、その一部は低湿地的土壤条件下で堆積したと考えられる。ただし、本格的な泥炭集積の開始時期は、次に述べるよう約5400年前以降である。

鍋田付近を中心に泥炭層（最大層厚3.5m）が存在する。泥炭層最下部の¹⁴C年代は、 5400 ± 150 yr B.P. (TH-1215) である（第6図）。この層準にはガラス質火山灰が薄くはさまれる。泥炭層から出土する土器型式に基づけば、泥炭集積は少なくとも弥生時代（崎山圓式・十三塚式土器の時代、一部、天王山式土器の時代）まで継続していたと判断される。この間、鍋田付近には氾濫時の浮遊物質（主にシルト・粘土）が繰り返しもたらされたものの、全体として堆積物の供給は微弱であった。このことが鍋田付近における泥炭集積を可能にした。

泥炭層は名取川に向かって泥炭集積の程度が弱くなり、シルト～砂質の堆積物へと移行する（第5図）。ドノ内浦付近のシルト～砂質堆積物は、名取川や支流の笊川の溢流に伴う氾濫堆積物に由来すると考えられる。

鍋田より広瀬川に近い発掘区（II～VI）では、泥炭層の上位に広瀬川の氾濫堆積物が認められる（第5図・第6図）。同堆積物の層相は広瀬川に向かって変化し、シルト・粘土層から砂・シルト層へ、さらに疊混りの堆積物へと粗粒化する。同層基底部の木片の¹⁴C年代は、 1290 ± 110 yr B.P. (660 ± 110 A.D.) (TH-1174) である（第6図）。

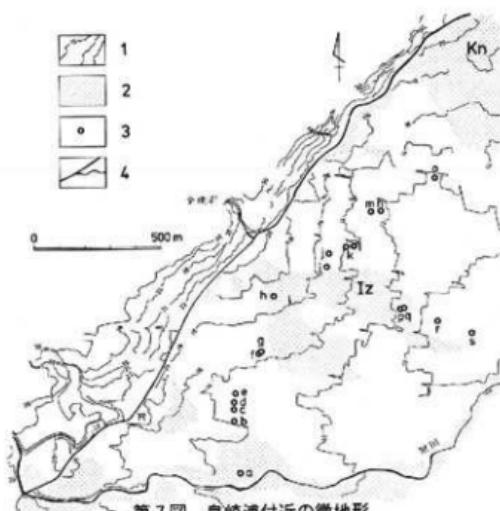
（3）泉崎浦付近の微高地

泉崎浦や鹿野付近に微高地が存在する（第4図）。この微高地を詳細に検討するために、縮尺2500分の1の都市計画図（昭和46年測量）から等高線をぬきだしたのが第7図である。

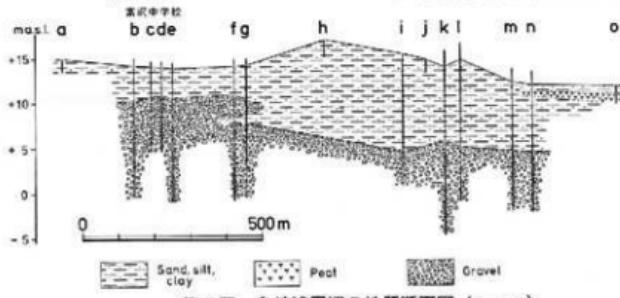
等高線の配列状態から、泉崎浦付近の微高地は金洗沢の谷口を扇頂とする扇状地に由来することがわかった。微高地の平面形が扇形を示さないのは、この扇状地が現成のものではなく、谷口から東方および南方の部分が小規模ながら開析（侵食）されているためである。すなわち、泉崎浦の微高地は、扇状地のうち侵食からまぬがれた部分である。鹿野付近の微高地もこれと同様の成因をもつと考えられる。なお、笊川に沿う微高地は自然堤防と判断される。

泉崎浦付近の地質断面を第8図および第9図に示す。微高地（h地点）を含む扇状地の構成物質は粘土混じりの砂～シルト層である。厚さは最大約10mに及ぶ。なお、笊川に近い富沢中学校（b～e地点）付近では、笊川の流路堆積物と考えられる疊層がくさび状に堆積している（第8図）。

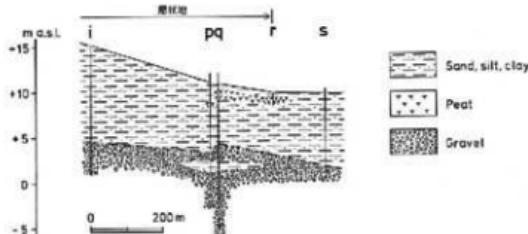
第9図は扇状地の縦断方向の地質断面であり、地下鉄路線に沿う地質断面（第5図）とはq地点で交差する。r地点に傾斜変換点があらわれており、この付近が扇状地の末端にあたる。q～r地点付近の泥炭層は金洗沢からの堆積物供給が微弱であった時に形成されたと考えられる。これは鍋田付近の泥炭層（第5図と第6図）に連続する。第8図のn～o地点にもこれと高



1. 等高線(昭和46年測量の1:2,500仙塩広域都市計画図に基づく) 2. 岩高地 3. ポーリング調査の地点 4. 河川および水路(木波網)
Iz : 泉崎浦
Kn : 鹿野
K : 佐野
m.s.l. : 海抜
500m : 距離



第8図 泉崎浦周辺の地質断面図(a~o)



第9図 泉崎浦周辺の地質断面図(i~s)

度的に連続する泥炭層が存在する。これらの地質断面図から、鍋田を中心に分布する泥炭層は、支流起源の扇状地堆積物と指交関係にあると判断される。

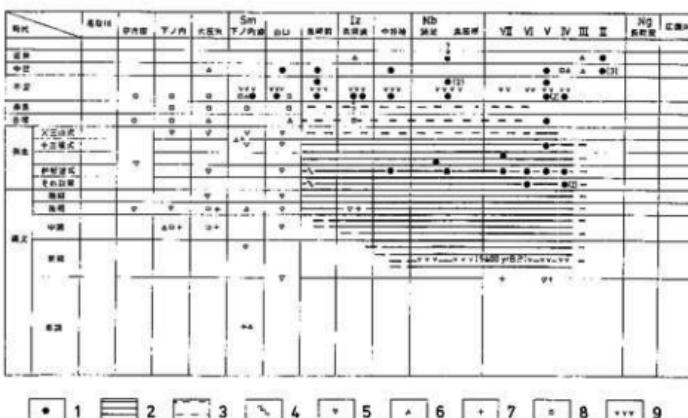
(4) 土地条件の変遷

縄文時代以降の土地条件の変遷は、ドノ内浦～鍋田～II区に至る約2kmの範囲内において差異が認められた。

名取川および広瀬川の直接的影響を受けにくい位置にある鍋田付近では、約5400年前から弥生時代にかけて金洗沢やニッ沢等の支流からの堆積物（主に砂・シルト）供給が微弱になり、泥炭地が形成された。弥生時代の水田は泥炭地の範囲内に限られている（第10図）。古墳時代ごろから広瀬川の氾濫堆積物が供給されるようになり、鍋田～III区における泥炭集積作用は徐々に終了していった。泉崎浦付近では、支流起源の堆積物供給が泥炭集積作用の終了に関与した。

ドノ内浦のように名取川に近いところでは、縄文時代早期から絶えず名取川や荒川の氾濫水の影響を受け続けてきた。このため顕著な泥炭集積はみられない。

以上のように、低湿地である郡山低地では、河川（支流を含む）による堆積物供給の強弱や、その及んだ範囲が、各時代の土地条件を左右している。



第10図 泥炭地の分布の変遷と水田跡

1. 水田跡(東丸の右に付した(2)は2層準に水田跡が検出されたことを示す)
2. 泥炭地
3. 泥炭集積の時代が不明な部分
4. 水路跡
5. 土器
6. 住居跡以外の遺構と土器
7. 石器
8. 住居跡と土器
9. テフラ(約1,000年前と約5,400年前の2層準に存在する)

註) 1. 松本秀明 1981 「仙台平野の沖積層と後水系における海岸線の変化」 地理学評論 vol. 52 p. 72-85

2. 周辺の歴史的環境

名取川流域の低地や丘陵・台地上には、II石器時代から近世に至るまでの遺跡が数多く分布している。特に富沢周辺の地域は、仙台市の中でも遺跡の分布する密度が高い地域であり、さらに、低地に立地する遺跡が多く、縄文時代から中世・近世までの各遺構が層位的に検出される重層構造の遺跡群として知られている。ここでは、これまでの発掘調査の成果を踏まえ、名取川流域の遺跡との係わりの中で、富沢周辺における歴史的環境について時間的な移り変わりを概観してみたい。

旧石器時代

名取川流域におけるこの時代の遺跡としては、前期旧石器時代の石器を出土した山田上ノ台遺跡(10)、北前遺跡(11)、青葉山B遺跡が知られており、3遺跡とも高段丘および青葉山丘陵に立地している。一方、旧石器時代の遺跡は、これまで平野部での発見が困難とされてきたが、昭和63年に富沢遺跡(1)で後期旧石器時代の石器とともに樹木や穂果、シカのフンなどが検出され、当時の自然環境と人間活動との関係を解きあかす貴重な成果があげられた。

山田上ノ台遺跡では、藏王を起源とする約3万年前の火山灰と考えられる「川崎スコリア層」¹⁾⁽²⁾⁽³⁾の下層から、チョッパー、チョッピングトゥールなどの前期旧石器時代の石器が出土した。この発見は宮城県北部の庵敷乱木遺跡、中峰C遺跡、馬場塙A遺跡と並び前期旧石器時代の存在を証明した重要なものといえる。山田上ノ台遺跡の北側に隣接する北前遺跡でも「川崎スコリア層」が検出され、下層から石器が出土している。青葉山B遺跡は約6～8万年以上前のテフラと考えられる愛島軽石層の下層から石器が出土しており、その層の年代が約18万年前と測定⁴⁾されている。

後期旧石器時代の遺跡としては、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、青葉山遺跡(14)、青葉山B遺跡が知られていたが、前述したように、今回低地部に立地する富沢遺跡の第30次調査で貴重な成果があげられた。旧地表下約3mの層中より後期旧石器時代の自然環境を具体的に示す多量の自然遺物や当時の人間の行動の痕跡が検出されたのである。行動の痕跡は、炭化材の集中部分と、その周辺に分布する多数の石器である。石器は別の2地点からも出土している。石器は、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、スクレイパー、ノッチ、ハンマーストーン、剥片などがある。⁵⁾⁽⁶⁾自然遺物は樹木、穂果、子葉、昆虫、大型シカのフンなどが多量に出土している。

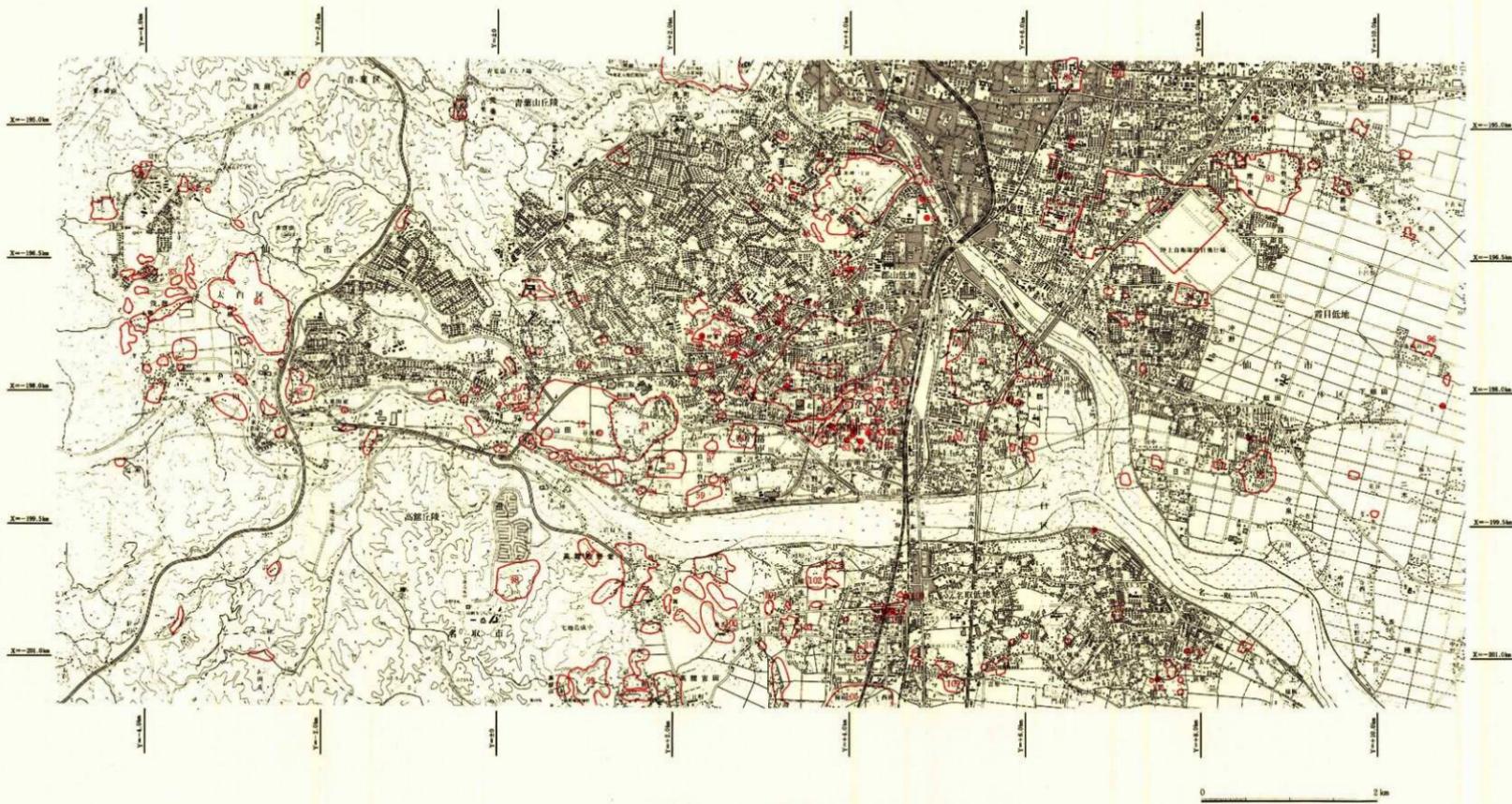
縄文時代

縄文時代の遺跡は、名取川流域の主に丘陵・段丘上に数多く分布するが、近年は平野部においても確認される例が増えている。これまで名取川左岸で多くの遺跡が調査されている。

早期の遺跡としては、郡山低地に立地する下ノ内浦遺跡(3)や山口遺跡(7)、富沢遺跡(1)

第3表 遺跡地名表

| 地名 | 字 | 時代 | 地名 | 字 | 時代 |
|-------------|------|----------------------|-------------|------|-------------------|
| 高瀬 游跡 | 後背溝地 | 田石原(後)・鶴文・近世 | 58 緑治恩田日波跡 | 自然地形 | 鶴文・要良・平安 |
| 泉崎 游跡 | 自然地形 | 碑文(後)・御牛・古墳・平安・近世 | 59 八木松塚跡 | 自然地形 | 泉崎・山寶 |
| 下ノ内 游跡 | 自然地形 | 碑文(後)・御牛・空島・平安 | 60 高沢庵跡 | 自然地形 | 高町 |
| 下ノ内 游跡 | 自然地形 | 碑文(後)・御牛・御牛・空島・山宝 | 61 大野山山寺跡 | 自然地形 | 古墳 |
| 六尺山 游跡 | 自然地形 | 碑文(後)・御牛・御牛・空島・平安 | 62 大野山山寺跡 | 自然地形 | 古墳 |
| 伊吉田 游跡 | 自然地形 | 碑文(後)・鶴文・古墳・要良・平安 | 63 春日社古墳 | 自然地形 | 古墳 |
| 山口 游跡 | 自然地形 | 碑文(後)・御牛・古墳・要良・平安 | 64 山口庚古墳 | 自然地形 | 古墳 |
| 丘坂田 古墳 | 自然地形 | 古墳 | 65 玉ノ原古墳 | 自然地形 | 古墳 |
| 幽東 游跡 | 自然地形 | 古墳 | 66 下ノ原遺跡 | 自然地形 | 鶴文(後)・御牛・古墳・要良・平安 |
| 山田上ノ山遺跡 | 自然地形 | 碑文・丘 | 67 長野宿木遺跡 | 自然地形 | 古墳? |
| 北前 游跡 | 自然地形 | 碑文(後)・鶴文・平成・御牛・空島・平安 | 68 久保曾根跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 上野山 游跡 | 自然地形 | 鶴文 | 69 大野山山寺跡 | 自然地形 | 鶴文(後)・御牛 |
| 御安平 游跡 | 自然地形 | 古墳・平島・平安 | 70 元氣日進跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 吾妻山 游跡 | 自然地形 | 石碑(後) | 71 元氣日進跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 歌過山 游跡 | 自然地形 | 鶴文 | 72 長町南邊跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 町邊 游跡 | 自然地形 | 丘 | 73 菊川山遺跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 八幡 游跡 | 自然地形 | 丘 | 74 長町六丁目遺跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 新川原西邊跡 | 自然地形 | 鶴文・平安 | 75 敦賀古墳 | 後背溝地 | 古墳 |
| 山田吳里遺跡 | 自然地形 | 丘 | 76 食萬八塚古墳 | 後背溝地 | 古墳 |
| 酒呑無束古墳跡 | 自然地形 | 鶴文・平安 | 77 白石堀跡 | 自然地形 | 鶴文(後)・御牛・古墳 |
| 上野 游跡 | 自然地形 | 丘 | 78 那山山跡 | 自然地形 | 鶴文(後)・御牛・古墳・御牛・平安 |
| 新酒翁 游跡 | 自然地形 | 丘 | 79 佐日本跡 | 自然地形 | 長町・江戸 |
| 南北東遊跡 | 自然地形 | 御牛・要良・平安 | 80 大米山跡 | 自然地形 | 古墳・要良・平安 |
| 御東南西遊跡 | 自然地形 | 御牛・平安 | 81 的場山遺跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 三神峯 游跡 | 自然地形 | 丘 | 82 新野八邊跡 | 丘 | 鶴文・丘塚・平安 |
| 御臺古墳跡 | 自然地形 | 丘 | 83 御原A道跡 | 丘 | 鶴文・御牛・平安 |
| 新浜 游跡 | 自然地形 | 古墳 | 84 萩原B丘塚跡 | 丘 | 少姓 |
| 西和森 游跡 | 自然地形 | 丘 | 85 人見附道跡 | 冲積河野 | 鶴文 |
| 原 通 | 自然地形 | 丘 | 86 日置国分寺跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 土手内移古墳跡 | 自然地形 | 丘 | 87 阿美國分寺跡 | 自然地形 | 要良・平安 |
| 金山 游跡 | 自然地形 | 古墳 | 88 加賀原古墳 | 自然地形 | 古墳(後) |
| 土手内移古墳跡 | 自然地形 | 鶴文・要良・平安 | 89 藤原御古墳 | 自然地形 | 古墳 |
| 土手内移古墳跡 | 自然地形 | 古墳(末) | 90 香林城跡 | 丘陵地形 | 中津・江戸 |
| 原家 通 | 自然地形 | 丘 | 91 小鬼鬼道跡 | 自然地形 | 御牛・吉浦・要良・平安・中津 |
| 森町 古墳 | 自然地形 | 丘 | 92 通鬼塚山跡 | 自然地形 | 古墳 |
| 森町東邊跡 | 自然地形 | 丘 | 93 仙台東鬼塚山跡 | 後背溝地 | 御牛 |
| 金後武古墳 | 自然地形 | 丘 | 94 伸野城跡 | 自然地形 | 中津 |
| 砂押 古墳 | 自然地形 | 丘 | 95 今良通跡 | 自然地形 | 御牛・吉浦・要良・平安 |
| 砂押鬼敷遺跡 | 自然地形 | 丘 | 96 鹿戸御出道跡 | 自然地形 | 御牛 |
| 40. 一ノ原 古墳 | 自然地形 | 丘 | 97 鶴野鬼塚穴跡 | 丘陵地形 | 古墳 |
| 鬼野應敷遺跡 | 自然地形 | 丘 | 98 鶴野大鬼塚丘跡 | 丘陵地形 | 中津 |
| 鬼野一ノ原遺跡 | 自然地形 | 丘 | 99 高岩城跡 | 丘 | 中津 |
| 一ノ原 古墳 | 自然地形 | 丘 | 100 高坂道跡 | 自然地形 | 御牛・吉浦・要良・平安 |
| 萩 五疊 丘 | 自然地形 | 鶴文・要良・平安 | 101 桜木通跡 | 自然地形 | 平安・中津・近世 |
| 萩々丘 | 自然地形 | 丘 | 102 開先古墳跡 | 自然地形 | 内浦・要良・平安 |
| 二ノ原横穴 | 自然地形 | 丘 | 103 沼場跡 | 自然地形 | 古墳・要良・平安 |
| 茂ヶ崎前古墳 | 自然地形 | 古墳(未) | 104 堺通跡 | 自然地形 | 古墳 |
| 茂ヶ崎前古墳 | 自然地形 | 南北朝・室町 | 105 斎木通跡 | 自然地形 | 御牛・吉浦・要良・平安・中津 |
| 大年寺山城穴跡 | 自然地形 | 古墳(未) | 106 宮久瀬山跡 | 自然地形 | 内浦 |
| 吳井山標高大寺 | 自然地形 | 古墳(未) | 107 幸久鬼塚跡 | 自然地形 | 御牛・吉浦・要良・平安・中津 |
| 宋神寺標高大寺 | 自然地形 | 古墳(未) | 108 伊豆野御笠古墳 | 自然地形 | 内浦 |
| 32. 魔摩 通 | 自然地形 | 古墳 | 109 横河御茶跡 | 自然地形 | 御牛・平安・中津 |
| 33. 吾妻山 古墳 | 自然地形 | 古墳 | 110 中山松山中邊跡 | 自然地形 | 御牛・吉浦・要良・平安 |
| 小兜塚 古墳 | 自然地形 | 古墳 | 111 井戸田面古墳 | 自然地形 | 古墳 |
| 55. 富洲上ノ台渡跡 | 自然地形 | 丘 | 112 戸ノ内通跡 | 自然地形 | 古墳・御牛・平安・中津 |
| 56. 滝洪源水道跡 | 自然地形 | 谷 | 113 嵐丸古墳 | 自然地形 | 古墳 |
| 57. 鶴の巣山古墳跡 | 自然地形 | 鶴文・要良・平安 | 114 例塚古墳 | 冲積河野 | 古墳 |



第11図 富沢遺跡と周辺の道路分布図

と段丘上に立地する北前遺跡で検出されている。下ノ内浦遺跡では、早期前葉の住居跡の可能性がある竪穴遺構2基や所謂階し穴遺構を含む土坑7基が検出されており、遺構および遺物包含層からは日計式の押型文土器、無文の土器片、石鐵・尖頭器・スクレイバーのほかチップや剝片が多数出土している。石鐵の中には黒曜石製の局部磨製のものが含まれている。⁸⁾⁹⁾ 山口遺跡¹⁰⁾¹¹⁾ や富沢遺跡では、早期後葉から前期初頭にかけての土器や石器が出土している。⁴⁾

北前遺跡では、早期末葉の集落跡が発見され、竪穴住居跡8軒、土坑10基が検出されている。

前期の遺跡としては、低地では下ノ内浦遺跡で前期後葉の大木5b式の土器片が7点出土しているほか、富沢中学校建設に伴って調査された富沢遺跡でも前期中葉の大木3式相当の土器¹²⁾⁵⁾ が出土している。

段丘上に立地する三神峯遺跡(25)では、前期前葉の大木1~2a式期の竪穴住居跡8軒が¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾ 検出されているほか、大木1~7式の土器が出土している。また、北前遺跡では前期後葉の大木6式期の土坑群が検出されている。⁶⁾

中期の遺跡は、台地や段丘上及び低地から数多く発見されている。台地や段丘上に立地する上野遺跡(21)では大木7~10式の土器や石器が出土している。その中でも大木8a・8b式¹⁷⁾¹⁸⁾ の遺物が多く、大木8b式期の竪穴住居跡や土坑などが検出されている。また、北前遺跡では大木9式期の竪穴住居跡2軒が検出されている。⁴⁾隣接する山田上ノ台遺跡では、大木7a式~大木10式の遺物が出土し、中期末葉・大木10式期の竪穴住居跡は38軒が検出され、大規模な集落跡であったことが知られているほか、大木7a・9式・10式期の土坑や大木7a・10式の遺物¹¹⁾³⁾ 包含層などが検出されている。

低地では、今までのところ中期中葉の大木8式期の遺構から検出される。六反田遺跡(5)では大木8b式期の竪穴住居跡1軒が検出されたほか大木10式期の竪穴住居跡などが検出されている。¹⁹⁾²⁰⁾ 下ノ内遺跡(4)では大木10式期の竪穴住居跡が3軒検出され、そのうち2軒の住居跡は河原石を部分的に敷き詰めた敷石の住居である。その他、山口遺跡でも大木10式期の埋設土器遺構や大木8~10式の土器が出土している。²³⁾

後期の遺跡は、台地および低地で多くの遺跡が発見されているが、低地部での調査例が多く、台地では山田上ノ台遺跡から後期前葉の土器が出土している程度である。³⁾

低地には、六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、山口遺跡、伊古田遺跡(6)などがあり、六反田遺跡では、後期初頭の南境式期前半の竪穴住居跡12軒の他、屋外炉、配石遺構、土壙、埋設土器遺構、遺物包含層などが検出され、多数の縄文土器や石器が出土している。¹⁹⁾²⁰⁾

下ノ内浦遺跡では後期前葉の配石墓9基、土壙墓約120基、埋設土器遺構5基、遺物包含層などが検出され、多量の縄文土器、石器、土製品が出土している。配石遺構は河原石を1~2重に配し、長軸方向を立石とし、内側に小砾を詰め込むという構造のもので、配石下部には土壙

が検出されている。また、土壙基の中からは赤彩された土製耳飾りが出土している。⁸⁾

伊古田遺跡では、後期中葉の宝ヶ峯式期の遺物包含層が検出され、縄文土器や石器、土偶などの土製品が出土している。土偶は19体分の破片が出土し、その中に完形に近く形状の判明するものは4体ある。立像のもの3体、蹲踞のもの1体である。立像の土偶のうち最大のものは41.4cmで、日本最大級のものである。²⁴⁾

その他、郡山遺跡(78)や西台畠遺跡(77)でも遺物が出土している。

晩期の遺構は、未発見であるが、六反田遺跡や山口遺跡などで河川跡の堆積土より土器が出土しており、周辺に存在することが予想される。⁹⁾⁽²⁵⁾

弥生時代

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡に比べ平野部に多く分布し、海岸線付近まで広がっている。名取川左岸の郡山低地には、富沢遺跡、下ノ内浦遺跡、山口遺跡、西台畠遺跡などがあり、対岸の名取低地には清水遺跡(105)や安久東遺跡(107)などがある。また、名取川左岸の霞目低地には南小泉遺跡(91)や今泉遺跡(今泉城跡)(95)、藤田新田遺跡(96)が分布している。

富沢遺跡では、弥生時代中期の樹形圓式期以前および樹形圓式期の水田跡、後期の大王山式期の水田跡などの生産跡が検出され、弥生土器、石庖丁などの石器のほか木製の歎・鋤などの農耕具が出土している。¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾ 下ノ内浦遺跡や山口遺跡では平行沈線文系土器群(十三塚式比定)と交互刺突に特徴づけられる土器群(天王山式比定)を出土する遺物包含層が検出されており、さらに下ノ内浦遺跡では後期の堅穴遺構・土壙基が検出されている。堅穴遺構は隅丸方形で土器のほかアメリカ式石錐や鉄石斧の管玉、炭化米が出土し、隅丸長方形の土壙基からは赤色顔料の2カ所の分布と、石庖丁2点、太型蛤貝石斧1点が出土している。²⁸⁾

郡山低地の東半部の西台畠遺跡では中期の樹形圓式の土器や石器が出土しており、郡山遺跡²⁹⁾でも同時期の遺物包含層から土器片が出土している。³⁰⁾

名取川の自然堤防上に立地する船渡前遺跡(22)では中期の大泉式期の土坑が1基検出され、³¹⁾基本層第2層より多量の土器のほか石庖丁1点が出土している。南小泉遺跡では、昭和14~16年にかけて霞目飛行場の拡張工事の際に、多量の土器や石器が出土している。弥生時代の遺物は大泉式、樹形圓式、十三塚式、天王山式の土器が出土し、その中で、樹形圓式のものがもっとも多い。樹形圓式期の合口壺棺は少なくとも15組が発見され、そのうち飛行場の西側から東北方向に250mの付近から約13組の合口壺棺が出土しており、墓域を形成している。弥生時代の石器は太形棒状石斧、片刃石斧、有角石斧、石ノミ、石庖丁、石錐などが出土している。また昭和52年から平成元年まで15次の調査が実施され、青木畠式併行と考えられる土器や弥生時代中期~後期の土坑2基、溝跡1条が検出され、樹形圓式・円田式・十三塚式・天王山式の土器が出

³⁴⁾ 土している。また、海岸に近い今泉遺跡（今泉城跡）³⁵⁾³⁶⁾ や藤田新田遺跡では樹形壺式の土器が出土している。

名取低地の清水遺跡や安久東遺跡からは、中期の大泉式や後期の天王山式の土器が出土し、³⁷⁾³⁸⁾ また清水遺跡からは石庖丁や太形始刃石斧、偏平片刃石斧などの石器が出土している。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、丘陵、丘陵斜面、段丘、平野部に分布し、弥生時代よりも増して多くの遺跡が発見されている。

名取川左岸の郡山低地では、前期（塩釜式期）のものとして、荒川流域の伊古田遺跡・六反田遺跡から竪穴住居跡が検出されている。伊古田遺跡では、塩釜式期の竪穴住居跡2軒と土坑²¹⁾ 1基が検出され、一定のまとまりのある塩釜式の土器が出土している。²²⁾ 六反田遺跡でも同時期のものが1軒検出されている。²³⁾

中期（南小泉式期）のものとして、下ノ内遺跡、泉崎浦遺跡で竪穴住居跡が検出されている。この時期の水田跡は富沢遺跡第15次調査（富沢遺跡北東部）で検出されている。それは大畦、小畦、水路によって区画された小区画水田で、一区画の面積が平均5.26m²、106枚の水田で構成²⁴⁾ されている。さらに南に隣接する同第35次調査でも一辺1.5～4.5m程度の小区画の水田が多数検出されている。²⁵⁾

後期（住社式・栗園式期）のものとして、現在までの調査で集落跡はほとんど見られないが²⁶⁾ 下ノ内遺跡で栗園式期の竪穴住居跡が検出されているだけである。栗園式期の水田跡は、富沢遺跡第24次調査（富沢遺跡西部）で検出されている。この水田跡は谷状の窪地に形成され、区画のわかる水田の面積は24m²～28m²で、14枚以上の水田が検出されている。²⁷⁾

名取川左岸・右岸では、古墳時代中期から後期にかけて高塚古墳が盛んに造営されてくる。名取川左岸の西多賀・鹿野・根岸にかけての青葉山丘陵縁辺部では、中期後半から後期の古墳²⁸⁾ が一直線上に分布し、5世紀後半の前方後円墳で、主軸長50～60mの裏町古墳（35）、径15mの円墳の金洗沢古墳（37）、円墳か前方後円墳で周溝内縁径42mの砂押古墳（38）、主軸長30mの²⁹⁾ 前方後円墳で、後円部から凝灰岩の削抜石棺が出土した二塚古墳（40）、径20～30mの円墳で、³⁰⁾ 竪穴式石室の中から家形削抜石棺が発見された一塚古墳（43）、5世紀後半の帆立貝式前方後³¹⁾ 円墳に推定される円墳径50mの兜塚古墳（53）などがある。

一方、郡山低地の荒川流域の大野田地区には、5世紀末から6世紀中葉頃に造られたと考えられる大野田古墳群がある。五反田古墳・五反田木棺墓・五反田石棺墓（8）、周溝内より円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土した大野田1・2号墳（61・62）、円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪が出土した春日社古墳（63）や鳥居塚古墳（64）、削平を受けて変形しているが唯一・墳丘が残存している王ノ塚古墳（65）など、多くの古墳が造営されている。現況が水田や畠の部分にも、

墳丘が削平されて埋没している古墳や、あるいは破壊された古墳が数多くあると予想される。

三神峯公園の南側の丘陵斜面には、5世紀後半から5世紀末に位置づけられている埴輪窯の富沢窯跡(27)⁴⁷⁾や須恵器窯の金山窯跡(31)⁴⁸⁾などがある。

古墳時代後期から奈良時代にかけては背葉山丘陵の崖面には横穴墓の造営が盛んになってくる。土手内横穴墓群(30)、二ツ沢横穴墓群(46)、茂ヶ崎横穴墓群(47)、宗禅寺横穴墓群(51)、大年寺山横穴墓群(49)、愛宕山横穴墓群(50)⁴⁹⁾などの横穴墓群が発見されている。そのうち、愛宕山横穴墓群C地点1号横穴墓は装飾のある横穴墓である。⁵⁰⁾

名取川と広瀬川の合流地点に近い郡山低地東半部には、7世紀後半から8世紀初頭にかけての多賀城以前の官衙である郡山遺跡が造営され、中央政府による陸奥国支配の重要な拠点となっていたことがうかがえる。郡山遺跡のこれまでの調査によって、真北より約30°東に傾いた方向を基準とするI期官衙(7世紀後半～7世紀末)、真北方向を基準とする方四町のII期官衙(7世紀末～8世紀初頃)とその南側に推定方二町のII期官衙に付属する寺院(郡山庵寺)⁵¹⁾が確認されている。⁵²⁾

名取川右岸の自然堤防では、前期(塩釜式期)⁵³⁾の集落跡が安久東遺跡、戸ノ内遺跡(112)、中田畠中遺跡(110)⁵⁴⁾で確認されている。また、この時期の方形周溝墓は安久東遺跡・戸ノ内遺跡⁵⁵⁾で、1基ずつ検出されている。

古墳時代後期のものとしては、住社式期・栗田式期の豊穴住居跡が検出された清水遺跡や栗門式の標式遺跡で多くの豊穴住居跡が検出された栗遺跡(104)⁵⁶⁾のほか中田畠中遺跡などの集落跡が確認されている。また後期の古墳としては、直径15～16mの円墳で、河原石乱石積みで両袖式横穴式石室を有する安久源訪古墳(106)がある。また、伊豆野櫻現古墳(108)、城丸古墳(113)、弁天園古墳(111)などの古墳が散在している。⁵⁷⁾

名取川左岸の霞目低地には、塩釜式期の集落は明らかでないが、遠見塚古墳周辺の傾斜面より多量の一括土器が出土している。⁵⁸⁾今泉遺跡では土坑より壺・台付壺・壺・器台などが出土している。南小泉式の標式遺跡である南小泉遺跡では、多数の豊穴住居跡が検出され、中期の南小泉式期から後期にかけての大規模な集落跡を形成している。その中心部に5世紀前後に築造された主軸長110mの前方後円墳である遠見塚古墳が位置している。後円部からは割竹形木棺と考えられる2基の粘土壺が検出され、束縛からガラス製小玉、碧玉製管玉、豊穣が出土している。⁵⁹⁾後期の古墳としては、7世紀に位置づけられ、直径32mの円墳で切石積みの横穴式石室をもつ法領塚古墳(88)⁶⁰⁾や円墳の猫塚古墳(89)⁶¹⁾が発見されている。

奈良・平安時代

名取川の両岸の低地では、古墳時代よりもさらに遺跡が広範囲に分布し、遺跡数も増加する。郡山低地、特に荒川流域の遺跡で調査が進んでおり、奈良時代から平安時代にかけての集落

跡が多く発見されている。下ノ内浦遺跡、山口遺跡、トノ内遺跡、六反田遺跡、伊古田遺跡など各遺跡では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、小溝状遺構等が検出されており、また王ノ塙遺跡(66)や元袋田遺跡(71)でもこの時期の遺構が検出されている。さらにこの時期の遺跡として、荒川流域には北屋敷遺跡(68)、長町六丁目遺跡(67)、新田遺跡(73)などの遺跡が分布している。富沢の西方の名取川流域の段丘上に立地する八幡西遺跡(22)では、平安時代の竪穴住居跡1軒が検出され、土師器・須恵器や鉄製の鎌先・刀子が出土している。⁶³⁾また、青葉山丘陵の谷底平野に立地する御堂平遺跡(13)⁶⁴⁾や段丘上に立地する山田上ノ台遺跡で平安時代の竪穴住居跡が検出されている。

平安時代の水田跡は、富沢遺跡、泉崎浦遺跡、山口遺跡、下ノ内浦遺跡、六反田遺跡で検出されている。山口遺跡では、ほぼ真北方向の大畦とほぼ直交する小畦により東西に長い区画の水田跡が検出され、10世紀前半の降下と考えられる灰白色火山灰をのせている。水田は22枚検出され、そのうち区画の判るものとして南北5.0m、東西11.5mの長方形を呈し、面積57.5m²⁶⁵⁾の水田が検出されている。⁶⁶⁾富沢遺跡でも灰白色火山灰をのせる、あるいは耕作土中に混じる水田跡が検出され、その畦畔の方向が真北、東西方向となっている。^{10) 13) 27)}

名取川右岸の自然堤防上には、古墳時代から引き続き集落跡が形成されている清水遺跡、安久東遺跡、中田畠中遺跡が知られており、清水遺跡では奈良時代になって竪穴住居跡の軒数が前代より急激に増加する傾向にある。また、名取低地でもこの時代からはじまる遺跡が増加していく傾向がある。

霞日低地北側に位置する段丘上には、奈良時代になると勝奥国分寺(86)・陸奥国分尼寺(87)が造営され、北方の丘陵地帯には陸奥国府・多賀城や国分寺・国分尼寺に供給された瓦を焼いた窯跡群が多く分布している。この時代の集落跡は南小泉遺跡で検出されている。

中世以降

中世以降の遺跡としては、名取川左岸では青葉山丘陵の東端に茂ヶ崎城跡(48)、郡山低地の東半部に北日城跡(79)、西半部の荒川流域に宮沢館跡(60)など中世の城館跡が分布している。⁴¹⁾王ノ塙遺跡では、中世の掘立柱建物跡や墓跡、溝跡が検出されている。⁵⁾中世の水田跡は山口遺跡や富沢遺跡で検出されている。また、近世の遺構として、富沢遺跡、泉崎浦遺跡、山田上ノ台遺跡などで墓塚群が検出されている。¹⁰⁾

霞日低地では、中世から近世の若林城跡(90)、今泉遺跡(今泉城跡)などが知られている。名取川右岸では、高館丘陵に高館城跡(99)、熊野堂大館跡(98)、大館山城館、小館などの中世山城が多く分布している。平野部では、松木遺跡(101)で中世から近世の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、火葬遺構などの遺構や多量の陶磁器が出土している。また、松木遺跡の周辺の柳生地区には日向古碑群などが分布しており、仙台市内では岩切に次いで板碑が多く、36基の

67)
板碑が調査されている。

(注)

- 渡部弘美・主浜光明・鶴沢みどり 1981 「山手上ノ台道路発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第30集
- 及川 格 1985 「山田上ノ台遺跡」 仙台市文化財調査報告書第77集
- 主浜光明 1987 「山田上ノ台遺跡」 仙台市文化財調査報告書第100集
- 佐藤 洋・斎野裕彦 1982 「北前遺跡」 仙台市文化財調査報告書第36集
- 東北大學埋蔵文化財調査委員会 1986 「東北大學埋蔵文化財調査年報2」
- 仙台市教育委員会 1988 「富沢遺跡 第30次調査」 現地説明会資料
- 仙台市教育委員会 1989 「タイムトラベル富沢を探る—富沢遺跡第30次調査のあらましー」 仙台市文化財パンフレット第15集
- 吉岡恭平 1985 「下ノ内浦遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV」仙台市文化財調査報告書第82集
- 田中則和・主浜光明他 1984 「山口遺跡II」 仙台市文化財調査報告書第61集
- 斎野裕彦他 1987 「富沢・富沢遺跡第15次発掘調査報告書-」 仙台市文化財調査報告書第98集
- 佐藤甲二 1988 「富沢遺跡・富沢遺跡第28次発掘調査報告書-」 仙台市文化財調査報告書第114集
- 斎野裕彦 1986 「富沢水田遺跡鳥居原地区33層の火山灰について」 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V 仙台市文化財調査報告書第89集
- 工藤哲司 1988 「富沢遺跡-24次調査 富沢小学校地区発掘調査報告書-」 仙台市文化財調査報告書第113集
- 伊東信雄 1950 「仙台市内の古代遺跡」「仙台市史3」
- 白鳥良一 1974 「仙台市三神峯遺跡の調査」「東北の考古・歴史論集」 宝文堂
- 岩淵康治・佐藤則之 1980 「仙台市三神峯遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第25集
- 金森安季・工藤哲司・千葉 仁 1988 「上野遺跡」 仙台市文化財調査報告書第28集
- 結城慎一 1989 「上野遺跡」 仙台市文化財調査報告書第127集
- 田中則和 1981 「六反田遺跡III」 仙台市文化財調査報告書第34集
- 佐藤 洋 1987 「六反田遺跡III」 仙台市文化財調査報告書第102集
- 篠原信彦 1982 「下ノ内浦遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I」 仙台市文化財調査報告書第40集
- 篠原信彦 1983 「下ノ内浦遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II」 仙台市文化財調査報告書第56集
- 佐藤 洋 1981 「山口遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第33集
- 高橋勝也 1985 「伊古田遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV」 仙台市文化財調査報告書第82集
- 篠原信彦 1986 「六反田遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V」 仙台市文化財調査報告書第89集
- 工藤哲司・渡辺 誠他 1984 「富沢水田遺跡1・病院建設に伴う泉崎前地区の報告書-」 仙台市文化財調査報告書第67集
- a. 斎野裕彦・荒井 格 1983 「鳥居原遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II」 仙台市文化財調査報告書第56集
b. 荒井 格 1984 「富沢水田遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III」 仙台市文化財調査報告書第69集
c. 斎野裕彦 1985 「富沢水田遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV」 仙台市文化財調査報告書第82集
d. 吉岡恭平 1986 「富沢水田遺跡鳥居原地区」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V」 仙台市文化財調査報告書第89集
- 成瀬 茂・吉岡恭平 1984 「下ノ内浦遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III」 仙台市文化財調査報告書第69集
- 伊藤玄三 1969 「弥生文化-東北-」「新版考古学講座4」 河出書房
- 木村浩二他 1985 「郡山遺跡V」 仙台市文化財調査報告書第74集
- 宮城県教育委員会 1977 「清太原西・船渡前遺跡」 宮城県文化財調査報告書第49集
- 伊東信雄・結城慎一他 1978 「南小泉遺跡範囲確認調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第13集
- 結城慎一・佐藤 洋 1984 「南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第3次調査報告」 仙台市文化財調査報告書第68集
- 佐藤甲二他 1985 「南小泉遺跡-第12次発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第80集
- 篠原信彦他 1980 「今泉城跡」 仙台市文化財調査報告書第24集
- 佐藤 洋 1983 「今泉城跡」 仙台市文化財調査報告書第58集
- 丹羽 茂他 1981 「清水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」 宮城県文化財調査報告書第77集
- 土岐山武 1980 「安久東遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書IV」 宮城県文化財調査報告書第72集

39. 渡辺忠彦 1984 「下ノ内遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II」仙台市文化財調査報告書第69集
40. 吉岡泰平 1983 「泉崎遺跡!」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II」仙台市文化財調査報告書第56集
41. 仙台市教育委員会 1989 「午報10」「仙台市文化財調査報告書第132集
42. 伊東信雄他 1974 「裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集
43. 佐藤 隆 1983 「砂押古墳」「仙台平野の遺跡群II」仙台市文化財調査報告書第47集
44. 千葉宗久・阿部博志 1978 「兜塚古墳」「宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)」宮城県文化財調査報告書第53集
45. 長島栄一 1982 「大野田古墳群」「年報3」仙台市文化財調査報告書第41集
46. 結城慎一・藤沢 敦 1987 「春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第108集
47. 渡辺泰伸他 1974 「宮沢塚跡」古塚跡研究会
48. 斎藤秀寿 1981 「仙台市金山窯跡出土の古式須恵器」「陸奥国宮窯跡群IV」古塚跡研究会
49. 木村浩二他 1989 「茂ヶ崎機工穴群発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第130集
50. 伊東信雄・岩淵康治・田中則和他 1976 「宗禅寺横穴群発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第9集
51. 岩淵康治 1974 「仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第8集
52. 伊東信雄・結城慎一 1985 「宮城県仙台市愛宕山装飾横穴古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第85集
- 53a. 木村浩二 1980 「郡山遺跡発掘調査概報」「年報1」仙台市文化財調査報告書第23集
- b. 木村浩二他 1981 「郡山遺跡I」仙台市文化財調査報告書第29集
- c. 木村浩二他 1982 「郡山遺跡II」仙台市文化財調査報告書第38集
- d. 育沼一民・木村浩二 1982 「郡山遺跡」仙台市文化財調査報告書第42集
- e. 木村浩二他 1983 「郡山遺跡III」仙台市文化財調査報告書第46集
- f. 木村浩二他 1984 「郡山遺跡IV」仙台市文化財調査報告書第64集
- g. 木村浩二他 1986 「郡山遺跡VI」仙台市文化財調査報告書第86集
- h. 結城慎一・木村浩二他 1987 「郡山遺跡VII」仙台市文化財調査報告書第96集
- i. 木村浩二・及川 格・千葉 仁 1988 「郡山遺跡VIII」仙台市文化財調査報告書第110集
- j. 結城慎一・木村浩二・渡辺雄二 1989 「郡山遺跡IX」仙台市文化財調査報告書第124集
54. 岩淵康治・田中則和 1978 「安久東遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第10集
55. 主浜光朗・渡部弘美 1984 「」ノ内遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第70集
56. 長島栄一・青沼一民 1983 「中田畠中遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第53集
57. 上藤哲司・成瀬 茂 1982 「栗原式・栗原式土器類様式遺跡調査報告」仙台市文化財調査報告書第43集
58. 結城慎一・上藤哲司 1979 「史跡遠見塚古墳—昭和53年度環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第15集
59. 結城慎一 1982 「南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第1次調査報告」仙台市文化財調査報告書第35集
60. 加藤正範・結城慎一 1983 「南小泉遺跡—倉庫建設に伴う緊急発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第60集
61. 結城慎一・上藤哲司 1979 「史跡遠見塚古墳—昭和57年度環境整備予備調査概報」仙台市文化財調査報告書第48集
62. 氏家和典 1972 「仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書」仙台市文化財調査報告書第5集
63. 工藤哲司 1980 「八幡西遺跡発掘調査報告」「年報1」仙台市文化財調査報告書第23集
64. 斎藤吉弘・佐々木和博 1983 「御堂平遺跡」宮城県文化財調査報告書第97集
65. 吉岡恭平 1983 「泉崎浦遺跡」「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II」仙台市文化財調査報告書第56集
66. 工藤哲司・菅原和男・佐藤 洋 1986 「柳生」「柳生」仙台市文化財調査報告書第95集
67. 石黒伸一郎 1986 「仙台市柳生の板碑」「柳生」仙台市文化財調査報告書第95集

3. 富沢遺跡登録の経緯

富沢遺跡は、高速鉄道関係遺跡発掘調査事業の2年次（昭和57年度）に実施された試掘調査により認定された遺跡である。以下にその経緯を簡単にまとめておく。

試掘調査の結果、周知の遺跡外の地区で平安時代や中世の畦畔が検出された。遺構の確認された泉崎前地区・中谷地地区・鳥居原地区が、それぞれ「泉崎前遺跡」「中谷地遺跡」「鳥居原遺跡」として昭和57年に遺跡登録され、本調査が実施された（猿原他：1983）。

その本調査の成果により、数時期の水田跡が広範囲に展開することが予想されるに至り、地形等を考慮しながら遺跡範囲の再検討が行われ、昭和58年6月に「富沢水田遺跡」として再登録された。その後遺跡内の各地区で調査が継続して行われ、水田跡以外にも縄文時代の遺物や中世の居住域等が検出されるようになり、遺跡の性格が水田跡だけではないことが次第に判明してきた。そのため再度遺跡名が検討され、昭和62年3月20日付で「富沢遺跡」と改称された（斎野他：1987）。

高速鉄道関係の試掘および本調査で水田跡が確認された背景には、六反田遺跡（出中：1981）や山口遺跡（佐藤：1981、出中・主浜：1984）での大きな二つの成果が存在する。一つは、両遺跡はともに地表下数m間に幾枚もの文化層が存在する重層構造の遺跡であることが判明し、同様の構造をもつ遺跡がこの富沢・大野田地区には数多く存在することが予測されるようになったことである。つまり未発見の遺跡が土中深く埋没している可能性が高く、周知の遺跡以外にも試掘調査の必要性があったのである。二つめは、從来集落跡とみなされていた山口遺跡において、平安時代の条里型水田が検出されたことである。プラント・オパール分析の結果、遺跡北側の後背湿地に水田跡の存在が予想され、実際に整然と区画された条里型の水田跡が検出されたという成果である。同じ頃、隣接した場所で高速鉄道関係の試掘調査が進行しており、早速山口遺跡の成果を受けプラント・オパール分析を行い、水田跡、特に畦畔の検出を主眼に試掘に臨むこととなった。その結果数地点で畦畔が検出され、富沢遺跡が認定されるべく本調査となったのである。

その後調査件数が増加するにしたがい、とくに同地区内での調査箇所の区別が困難になったため調査次数を付けることになり、高速鉄道関係は以下のように整理された。

第1次：泉崎東・中谷地・鍋田工区内試掘調査。

第2次：中谷地工区内本調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区。

第3次：泉崎東工区内本調査泉崎Ⅰ区。

第4次：泉崎東工区内本調査泉崎Ⅱ・Ⅲ区。

第5次：鍋田工区（報文では長町南駅区と呼称）内本調査1982年度分。

第7次：鍋田工区（報文では長町南駅区と呼称）内本調査1983年度分。

第13次：鍋田電工所区（報文では変電所区と呼称）。

第16次：鍋田工区A換気口部分（報文ではA換気口区と呼称）。

第17次：鍋田工区B換気口・②③番出入口部分（報文ではB換気口区・出入口区と呼称）。

1988年12月の時点で第48次調査まで実施されており、その一覧は第4表に提示した。

なお、泉崎浦遺跡・山口遺跡についても調査次数が付けられ、高速鉄道関係では泉崎浦第2次が泉崎東工区での本調査泉崎II・III区に該当している。

第4表 富沢遺跡調査次数表

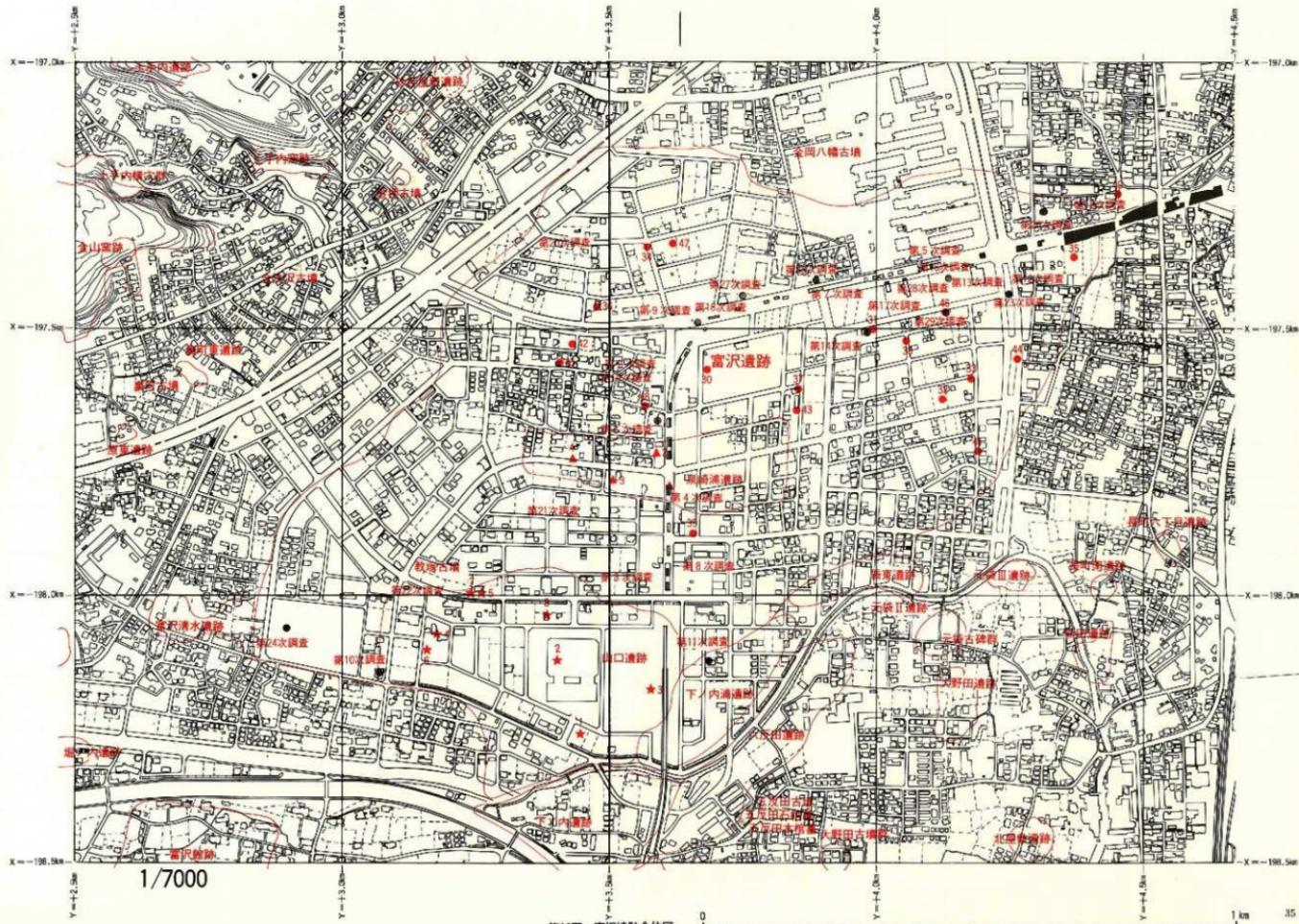
| 調査区分 | 調査区段番号 | 調査の実績 | 調査期間 | 採集 | 調査結果（主な発見遺物） | 文献 |
|------|------------------------|-----------------------|--------------------------------|--------------------|--|---------------------------|
| 1 | 長崎市西新町1丁目 （北側の区段） | 私鉄車両廃棄場遺跡 | 9.07. 9.-10. | 各約50m ² | 初期の車両廃棄場として、平安時代から平安時代中期の車両廃棄場 | 佐野文子「財團法人日本古跡研究会編『古跡』」 |
| 2 | 長崎市西新町2丁目 （北側の区段） | 六条多合遺跡跡地 (通称「六条」) | 9.07. 9.25.-5. 30. 12. 23. | 100m ² | 平安時代中期・中世の水路 | 日本古跡名勝天然記念物等保護法第4条による古跡登録 |
| 3 | 長崎市西新町1丁目 | 私鉄車両廃棄場遺跡 | 9.07. 9. 1.-5. 27. 12. 11. | 約500m ² | 平安時代中期の水路跡・土塁跡や柱跡 | 佐野文子「財團法人日本古跡研究会編『古跡』」 |
| 4 | 長崎市西新町1丁目 （南側の区段） | 私鉄車両廃棄場遺跡 (通称「六条」) | 9.07. 9. 12.-5. 26. 1. 16. | 約120m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代の水路跡 | 佐野文子「財團法人日本古跡研究会編『古跡』」 |
| 5 | 長崎市西新町3丁目 （北側の区段） | 私鉄車両廃棄場遺跡 (通称「六条」) | 9.07. 9. 2.-5. 26. 1. 12. | 約130m ² | 平安時代中期の水路跡・漢式土器により平安時代中期の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 6 | 長崎市西新町3丁目付近 （北側の区段） | 私鉄車両廃棄場遺跡 (通称「六条」) | 9.07. 10. 5.-5. 27. 10. 13. | 約50m ² | 平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 7 | 長崎市西新町3丁目 （北側の区段） | 私鉄車両廃棄場遺跡 (通称「六条」) | 9.08. 4. 22.-5. 26. 1. 9. | 約200m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 8 | 長崎市西新町4丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 4. 11.-5. 26. 11. 14. | 約300m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 9 | 長崎市西新町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 7. 20.-8. 6. 5. | 60m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 10 | 長崎市西新町4丁目 | 無 | 9.08. 8. 8.-8. 26. 8. 9. | 20m ² | 平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 11 | 長崎市高島町下ノ丸町 （北側の区段） | 無 | 9.08. 11. 1.-5. 26. 11. 17. | 20m ² | 平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 12 | 長崎市高島町下ノ丸町 （北側の区段） | 無 | 9.08. 11. 20.-5. 26. 12. 16. | 10m ² | 平安時代中期の水路跡跡地・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 13 | 長崎市高島町1丁目 （北側の区段） | 無 | 9.08. 7. 4.-7. 27. （通称「六条」） | 約70m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 14 | 長崎市高島町1丁目 （北側の区段） | 無 | 9.08. 8. 34.-5. 26. 6. 20. | 20m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 15 | 長崎市高島町1丁目 （北側の区段） | 無 | 9.08. 4. 10.-5. 26. 7. 31. | 50m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 16 | 長崎市高島町1丁目 （北側の区段） | 無 | 9.08. 4. 10.-5. 26. 7. 9. | 60m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 17 | 長崎市高島町1丁目 （北側の区段） | 無 | 9.08. 4. 10.-5. 26. 8. 9. | 50m ² | 2期の水路跡や回廊跡・平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 18 | 長崎市高島町上ノ丸町 （北側の区段） | 無 | 9.08. 4. 11.-5. 26. 9. 30. | 30m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 19 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 4. 11.-5. 26. 5. 31. | 50m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 20 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 4. 12.-5. 26. 6. 30. | 10m ² | 平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 21 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 5. 25.-5. 26. 9. 12. | 20m ² | 昭和時代の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 22 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 7. 17.-5. 26. 12. 11. | 10m ² | 平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 23 | 長崎市高島町1丁目 （下北造工事） | 無 | 9.08. 11. 5.-5. 26. 11. 6. | - | - | - |
| 24 | 長崎市高島町1丁目 （中央段） | 無 | 9.08. 11. 13.-5. 26. 6. 15. | 約600m ² | 西側の水路跡・東側の水路跡が平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 25 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 5. 8.-5. 26. 9. 27. | 10m ² | - | - |
| 26 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 6. 6.-5. 26. 5. 30. | 约50m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 27 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 7. 28.-5. 26. 6. 1. | 50m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 28 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 9. 1.-5. 26. 6. 1. | 约40m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 29 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 無 | 9.08. 11. 10.-5. 26. 1. 19. | 50m ² | 2期の水路跡（平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡） | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 30 | 長崎市高島町1丁目 （北側の区段） | 小学校建設 | 9.08. 4. 32.-5. 26. 12. 23. | 約400m ² | 平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 第一回・第二回 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 31 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 川端庄園庭園 | 9.08. 4. 27.-5. 26. 7. 7. | 约200m ² | 平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 32 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 川端庄園庭園 | 9.08. 7. 19.- | 约50m ² | 平安時代中期の水路跡 | 佐野文子「古跡と遺跡」 |
| 33 | 長崎市高島町1丁目付近 （北側の区段） | 柳原庄園庭園 | 9.08. 8. 26.-5. 26. 13. 3. | 250m ² | 4期の水路跡（平安時代中期の水路跡・平安時代中期の水路跡 第一回・第二回） | 佐野文子「古跡と遺跡」 |

第4表(続)

| 測量区 | 測量の標品 | 高さ・幅 | 面積 | 測定概要(主な見通し) | 又 |
|-------------------------|--------|-----------------------|--------------------|--|--------------------------------------|
| 34 佐賀市大口町丁目22-2他、川原町7地番 | | 5.82.12.24~5.82.12.27 | 約850m ² | 古墳時代中期・古墳時代・古墳時代中期・平安時代中期・中世 時代中期・中世後期・平安時代・古墳時代中期・古墳時代中期・平安 時代中期・中世後期・平安時代中期・中世 | 佐賀市文化財調査報告書第124号 佐賀市文化財調査報告書第125号 |
| 35 少子久人町 | 川原町7 | 5.83.5.9~5.83.5.13 | 約800m ² | 古墳時代中期・古墳時代中期・古墳時代中期・平安時代中期・中世 | 佐賀市文化財調査報告書第126号 |
| 36 佐賀市大口町丁目1~1 | 川原町4地番 | 5.83.4.11~5.83.4.20 | 160m ² | 中世水路跡 | 佐賀市文化財調査報告書第127号 |
| 37 佐賀市大口町丁目3 | 共同住宅地 | 5.83.4.11~5.83.6.15 | 200m ² | 中世水路跡 | 佐賀市文化財調査報告書第128号 佐賀市・山門跡 |
| 38 佐賀市大口町丁目4 | 川原町6地番 | 5.83.5.23~5.83.7.14 | 110m ² | 古墳時代中期・古墳時代中期・古墳時代中期 | 佐賀市文化財調査報告書第129号 佐賀市・山門跡 |
| 39 佐賀市大口町丁目9 | 川原町7地番 | 5.83.6.14~5.83.7.20 | 160m ² | 古墳時代中期・古墳時代中期・平安時代・中世水路跡 | 佐賀市文化財調査報告書第130号 |
| 40 佐賀市大口町丁目10 | 共同住宅地 | 5.83.7.18~5.83.9.20 | 300m ² | 古墳時代中期路(所蔵式塚跡) | 佐賀市文化財調査報告書第131号 佐賀市・山門跡 |
| 41 佐賀市大口町丁目11~17 | 川原町6地番 | 5.83.7.19~5.83.7.20 | 20m ² | | 佐賀市文化財調査報告書第132号 佐賀市・山門跡 |
| 42 佐賀市大口町丁目1~7 | 共同住宅地 | 5.83.8.1~5.83.9.24 | 100m ² | 平安時代の水路跡 | 佐賀市文化財調査報告書第133号 佐賀市・山門跡 |
| 43 佐賀市大口町丁目4~10 | 共同住宅地 | 5.83.8.22~5.83.9.27 | 40m ² | 古墳時代中期・古墳時代中期 | 佐賀市文化財調査報告書第134号 |
| 44 佐賀市大口町丁目8~17 | 共同住宅地 | 5.83.9.34~5.83.9.2 | 25m ² | | 佐賀市文化財調査報告書第135号 佐賀市・山門跡 |
| 45 佐賀市大口町丁目1~7 | 共同住宅地 | 5.83.9.5~5.83.9.31 | 30m ² | | 古墳時代中期・古墳時代中期 |
| 46 佐賀市大口町丁目1~1 | 川原町7地番 | 5.83.10.3~5.83.11.20 | 220m ² | 1周の古墳時代中期 古墳時代中期・古墳時代中期・古墳時代中期 | 佐賀市文化財調査報告書第136号 佐賀市・山門跡 |
| 47 佐賀市大口町丁目1~13 | 川原町7地番 | 5.83.9.39~5.83.10.34 | 90m ² | 平安時代の水路跡 | 佐賀市文化財調査報告書第137号 佐賀市・山門跡 |
| 48 佐賀市大口町丁目1~13 | 川原町7地番 | 5.83.10.3~5.83.10.34 | 90m ² | 平安時代の水路跡・古墳時代・平安時代中期 | 佐賀市文化財調査報告書第138号 佐賀市・山門跡 |

第5表 泉崎浦遺跡調査次数表

| 測量区 | 測定・火炎帯 | 測定範囲 | 面積 | 測定概要(主な見通し) | 又 |
|-------------------|-----------------------|--------------------|-------------------------------|--------------------------------------|---|
| 1 佐賀市大口字泉崎 | 5.83.3.1~5.83.3.5 | 61m ² | 古墳時代中期初期の土坑 | 佐賀市文化財調査報告書第139号 年表1 | |
| 2 佐賀市大口丁目1~7 | 5.83.9.13~5.83.11.15 | 約200m ² | 平安時代中期・平安時代の水路跡・古墳時代の住跡・近世の墓地 | 佐賀市文化財調査報告書第140号 佐賀市文化財調査報告書第141号 | |
| 3 佐賀市大口字泉崎1丁目8~10 | 5.83.10.25~5.83.11.30 | 90m ² | 古墳時代中期・古墳時代中期後半・平安時代中期・古墳時代中期 | 佐賀市文化財調査報告書第142号 | |
| 4 佐賀市大口字泉崎1丁目16~3 | 5.83.1.1~5.83.11.17 | 21m ² | | 佐賀市文化財調査報告書第143号 佐賀市・山門跡 | |

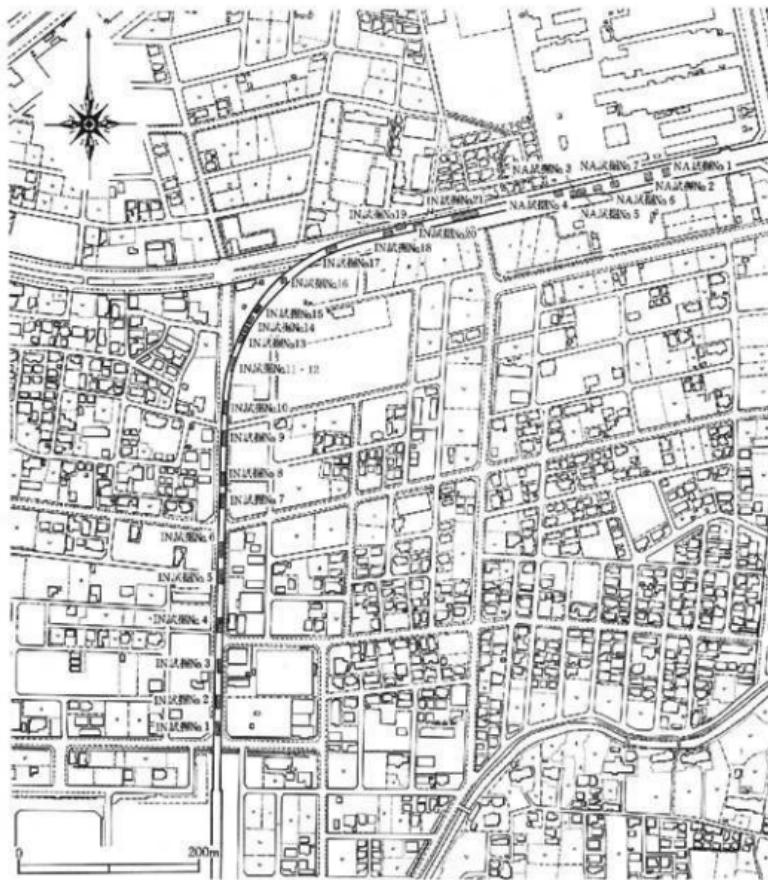


第12回 富沢道路全体図

III 試掘調査の概要と本調査区設定

1. 試掘の概要

前項で述べたように長町地区は周知の遺跡以外にも遺跡が発見される可能性が高いので、開削工法で建設される長町南駅工区から南の中谷地・泉崎東工区については、遺跡外であっても試掘調査を実施し遺跡の有無の確認に努めた。また、建設工事の進展を考慮し工事に取りかかれる部分を提示することにも努めた。



第13図 試掘トレンチ位置図

泉崎東工区（高速鉄道七北田起点から13.059～13.370km）には $5 \times 15m$ の試掘区を8箇所（No.1～8）、中谷地工区（起点から12.560～13.059km）には $5 \times 10m$ の試掘区を12箇所（No.9～13・13'・14・15・17～20）、 $6 \times 6m$ を1箇所（No.16）、 $5 \times 40m$ を1箇所（No.21）設定した。長町南駅工区（起点から12.316～12.560km）には $6 \times 8m$ の試掘区を7箇所（No.1～7）設定した（第13図）。以下にその概要を記述するが、試掘区Noが重複するため頭に「IN」（泉崎東・中谷地工区）、「NA」（長町南駅工区）を付けて区別しておく。

（1）泉崎東工区・中谷地工区

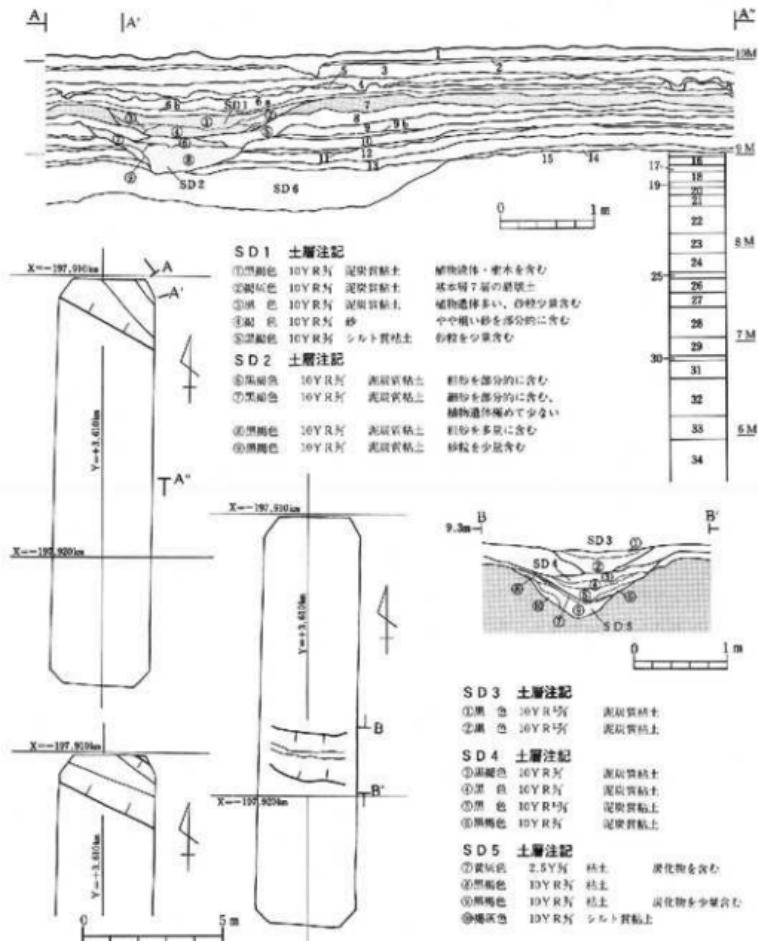
IN 試掘No.1 明確な遺構は検出されなかったが、11層（本調査での11層）から弥生土器片が数点出土したことや、プラントオパール分析から4・5・11・12層（各層とも本調査での層位）に水田跡の存在する可能性が指摘されたことから、畦畔を検出した試掘No.2の結果とあわせて本調査へ移行した。また、深堀を行い標高約7.3mで疊層を確認している。

IN 試掘No.2 6層(10YR4/1褐色粘土層、本調査での4層)上面で畦畔2条と水口1ヵ所を検出したので試掘No.1とあわせて本調査へ移行した。

IN試掘No.3 土層記載表

| 順序 | 土色 | 土質 | 層厚 | 異入物 | 備考 |
|-----|--------|-------------------|--------|-----------------|-----------------------|
| 1 | 灰黄褐色 | 10YR4/1 砂質シルト | 1~25cm | | |
| 2 a | 灰黄褐色 | 10YR4/1 砂質シルト | 1~10cm | | 炭化植物根 |
| 2 b | 灰黄褐色 | 10YR4/1 砂質シルト | 1~23cm | | |
| 3 | 黑褐色 | 10YR4/1 シルト質粘土 | 1~18cm | 白色火山灰を少含む | |
| 4 | 黑色 | 10YR4/1 シルト質粘土 | 1~31cm | 灰白色火山灰を部分的に多く含む | |
| 5 | にじみ黄褐色 | 10YR4/1 砂 | 2~10cm | | |
| 6 a | 灰色 | 泥炭質粘土 | 1~15cm | | 互層 |
| 6 b | にじみ黄褐色 | 10YR4/1 粘土 | | | |
| 7 | 黑色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 1~14cm | | |
| 8 | 黒褐色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 2~28cm | | |
| 9 a | 黑色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 1~16cm | | |
| 9 b | 灰褐色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 1~4cm | | |
| 10 | 黒褐色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 6~18cm | 植物遺体 多量 | 互層 |
| | 灰褐色 | 10YR4/1 粘土 | | | |
| 11 | 褐色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 1~6cm | | |
| 12 | 黑色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 4~16cm | 植物遺体 多量 | |
| 13 | 黑色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 1~9cm | | |
| 14 | 黒褐色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 1~10cm | | |
| 15 | 黒褐色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 約8cm | | |
| 16 | 黑色 | 10YR4/1 泥炭質粘土 | 約9cm | | |
| 17 | 褐色 | 10YR4/1 粘土 | 約7cm | 上部に植物遺体が広がっている | 植物遺体が多く含む |
| 18 | 黑色 | 10YR4/1 粘土 | 約10cm | 植物遺体を少量含む | 炭化物を全体的にまばらに含む |
| 19 | 黒褐色 | 10YR4/1 粘土 | 約6cm | 植物遺体をやや含む | |
| 20 | 褐色 | 10YR4/1 粘土 | 約8cm | 植物遺体を少量含む | 黒褐色をブロック状に含む |
| 21 | 黒褐色 | 10YR4/1 粘土 | 約12cm | 植物遺体を少量含む | 黒褐色粘土をブロック状に多く含む |
| 22 | 褐色 | 10YR4/1 シルト質砂 | 約20cm | 植物遺体を少量含む | 黒褐色粘土をブロック状に含む |
| 23 | 灰色 | 5G4/1 シルト質粘土 | 約21cm | 植物遺体を少し含む | |
| 24 | 緑褐色 | 7.5G4/1 シルト質粘土 | 約20cm | 植物遺体を少し含む | |
| 25 | 暗褐色 | 10G4/1 シルト質粘土 | 約7cm | 植物遺体を少し含む | |
| 26 | 褐色灰褐色 | 7.5G4/1 粘土質シルト | 約15cm | | |
| 27 | 緑褐色 | 5G4/1 シルト質砂 | 約15cm | | |
| 28 | 暗褐色 | 10G4/1 砂 | 約25cm | | |
| 29 | 緑褐色 | 5G4/1 砂 | 約20cm | | |
| 30 | 暗褐色 | 10G4/1 砂 | 約5cm | | |
| 31 | 緑褐色 | 5G4/1 砂 | 約19cm | 炭化物粒をわずかに含む | |
| 32 | 暗褐色 | 10G4/1 砂 | 約10cm | | |
| 33 | 暗褐色 | 5G4/1 砂 | 約20cm | | |
| 34 | | 砂礫層 | : | | 深2~10cmの円錐、ほとんどは2~3cm |

IN 試掘No.3 (第14図、写真3・4) 8層上面と15層上面で溝跡、8層と10層と溝跡から土器片3点を検出した。溝跡は壁の立ち上がりが緩いことや流木があったことなどから自然河川跡、土器片は摩滅していることから流れ込みと理解し、本調査不要と判断した。一方、翌1983年に東方約50mの地点で実施された第8次調査において、9層水田跡に伴う7号溝と8B層水田跡に伴う7号溝を改修した水路跡の6号溝が検出された(工藤:1984)。その報告では、本試



第14図 IN試掘No.3 平面図・断面図

掘区のSD5と「7号溝」、SD4と「6号溝」とが対応すると考えられたが、その後検討が加えられ標高・堆積土の様相が異なることから前述の対応関係は訂正されている（斎野：1987）。しかし、本試掘区と第8次調査区とは同じ谷地形の谷心線上にあることから、今後とも両者の溝跡の関連を考える必要性が生じたため、ここに試掘結果の概要を報告したい。

【基本層序】 層序は36層に細分された。1層は灰黄褐色砂質シルト層で旧水田耕作土、2a層は酸化鉄集積層である。2b層は灰黄褐色砂質シルト層で水田耕作土の可能性がある。3・4層は黒・黒褐色シルト質粘土層で灰白色火山灰を含む。4層は5・6層を攪拌している状況から水田耕作土の可能性が高い。5層は砂層である。6～20層は黒～灰褐色の泥炭質粘土・粘土層、21層以下がグライ化した粘土の砂層でとくに24層以下は緑灰色系になる。34層が礫層となり、その標高は6mである。

【遺構】 試掘時の平面的調査で溝跡2条が検出されたが、さらに東壁の断面観察により4条の溝跡の存在が確認された。

【SD1】 7層上面が掘りこみ面の溝跡である。トレーニングの北端部にある。上端幅2m以上、下端幅80cm前後、深さ40cm前後（以上断面図からの復原値）で、方向は北西～南東方向である。底面の標高は約9.2mである。堆積土は5層で底面には砂が堆積している。下位のSD2の埋没過程で7・8層が形成された後に機能した溝と考えられる。

【SD2】 SD1の下位で9a層上面が掘りこみ面の溝跡である。規模は上端幅1.9m以上、下端幅40～80cm、深さ35～50cm（復原値）で、方向は北西～南東である。底面の標高は8.8～9.0mである。堆積土は4層で、底面近くは粗砂を多く含んでいる。下位のSD6の影響でくぼんだ場所に形成された溝跡と考えられる。

【SD3】 トレーニングのほぼ中央に位置し、SD4の上位で13層上面が掘りこみ面の溝跡である。規模は上端幅1.1m、下端幅30cm、深さ20cmである。方向は東西方向で、堆積土は2層である。底面の標高は8.8mである。下位のSD4の埋没過程で、13層上面で機能した溝と考えられる。

【SD4】 SD3の下位で14層上面が掘りこみ面の溝跡である。規模は上端幅2m、下端幅10cm、深さ50cm、断面形は「V」字形である。底面の標高は8.5mである。堆積層は4層で、方向は東西方向である。下位のSD5の埋没過程で、14層上面で機能した溝と考えられる。

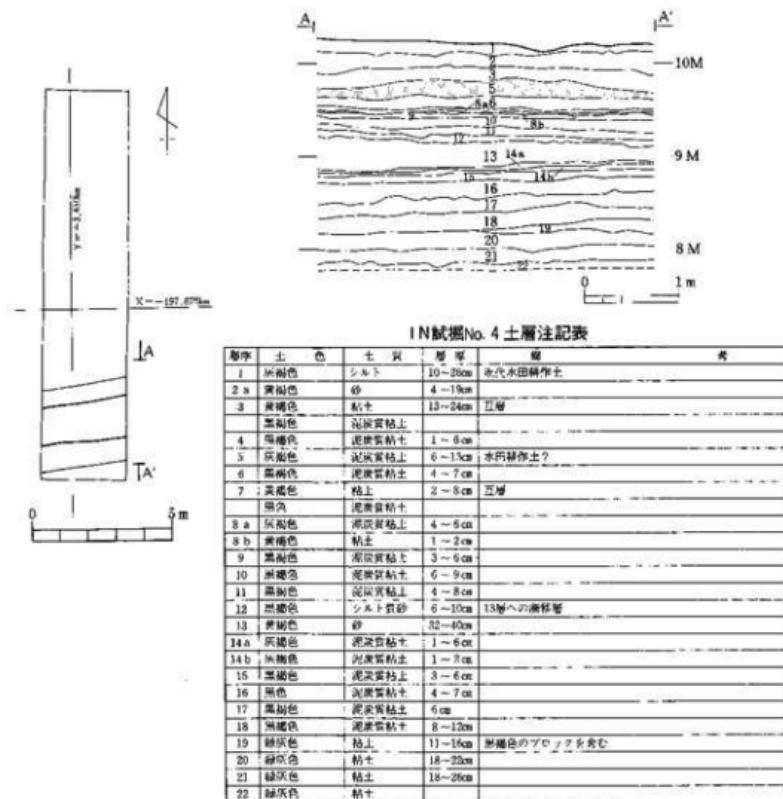
【SD5】 SD4の下位で15層上面が掘りこみ面の溝跡である。規模は上端幅1.8m、下端幅20cm、深さ65cm、断面形は「V」字形である。底面の標高は8.36mである。堆積土は4層で、方向は東西方向である。

【SD6】 トレーニングの北東側に位置し、15層上面が掘りこみ面の溝跡である。方向は北北西～南南東で、西岸のみ検出された。規模は上端幅1.8m以上、下端幅1.2m以上、深さ50cmである。

堆積土は3層である。SD 3の形成に影響を与えたと考えられる。

【遺物】 遺物は3点出土しているがいずれも小片で図示できなかった。SD 1・2、8層、10層から各1点出土している。10層のものは口縁部破片で、内湾して立ち上がり、外面は太めの沈文線が描かれている。他は体部破片でLR縦文、撫糸文Rが施文されている。

【まとめ】 第8次調査との層の対比は、その層相から第8次調査の「8B」層が本区の7層、「9」層が8層、「10」層が9a層に対応する。7層の層相が水田土壤に類似し、8次の「8B」層に対応することからこの地点にも水田跡が存在していた可能性が高いと考えられる。また層の対応関係に合わせると、SD 1は第8次調査の6号溝と対応するが、SD 2と7号溝に関しては後者が1枚上の層で検出されているという相違点があり、今後の検討が必要とされよう。



第15図 IN試掘No. 4平面図・断面図

IN 試掘No.4 (第15図、写真5) 5層上面で帶状の高まりを検出した以外に遺構遺物は検出されなかった。帶状の高まりも人為的なものではなく自然のものと考え、本調査不要の判断を下した。しかし、その後周辺での水田跡の調査が進展し、水田の様相が明かになった現在、この高まりを再考する必要が考えられるので、ここに試掘の概要を簡単にまとめておく。

〔層序〕 層序は22層まで細分された。1層は灰褐色シルト層の旧水田耕作土で、2層は黄褐色砂層、3層と8層は灰黄褐色シルトと黒色泥炭質粘土の互層になる層である。4～11層は黒～灰褐色の泥炭質粘土層、12・13層は砂層、14～18層は黒～灰褐色の泥炭質粘土層、19～22層¹⁾は緑灰色の粘土層である。疊層までは確認せず、標高約7.8mで掘り込みは終了している。

〔遺構〕 5層上面で畦畔状の高まりを検出した。東西の土層断面図からその規模を復原すると上端幅1.5m、下端幅3m、比高差12cmとなる。

〔まとめ〕 5層の層相が分解の進んだ水田土壤に類似した様相であること、畦畔状の高まりはかなり安定したものであることなどから、この地点にも水田跡が存在していたと考えられ、試掘時の判断は誤りであったと言えよう。水田跡の時期は断定されない、IN 試掘No.3との層相、標高等の対比から弥生時代の可能性も考えられる。

IN 試掘No.5 II 水田耕作土および鉄分の集積層を剥いた段階で、土師器を包含する黒褐色砂質シルト層を確認した。先行して行われた IN 試掘No.6 の結果（古墳時代の住居跡検出）、および周知の泉崎浦遺跡の隣接地であることから本調査へ移行した。

IN 試掘No.6 旧畠・水田耕作土を剥いた段階で住居跡のプランと一括土器（古墳時代の土師器）を検出した。もともと周知の泉崎浦遺跡内の地点であったために本調査へ移行した。

IN 試掘No.7 9層上面で畦畔状の高まりを検出した。この9層はIN 試掘No.8でプラントオパールが検出された8層に相当し、水田跡の存在が考えられたためIN 試掘No.8とともに本調査へと移行した。なお、トレチ南半部を現地表面から約3.4m下がった標高約8.4mまで掘り下げたが、疊層は確認されなかった。

IN 試掘No.8 (写真5) 4層上面で東西方向の畦畔および人間の足跡を検出、また、プラントオパール分析により、8層に水田跡の存在する可能性が高いことから、IN 試掘No.7とともに本調査へ移行した。さらにトレチ北半部を現地表面から約4.1m下がった標高8mまで掘り下げたが、疊層は検出されなかった。

IN 試掘No.9 旧水田面以下約1.5mまで掘り下げたが遺構遺物は検出されなかった。層序は21層まで確認された。層序は大まかに旧水田面以下50cmほどまでが旧耕作土とシルト層、それ以下が泥炭質粘土層および砂層で、グライ化層は未確認である。遺構は未検出であったが、IN No.8と10を繋ぐ位置という視点から本調査へ移行した。

IN 試掘No.10 5層(本調査中谷地II区4b層) 上面で灰白色火山灰を乗せる畦畔を「T」の字

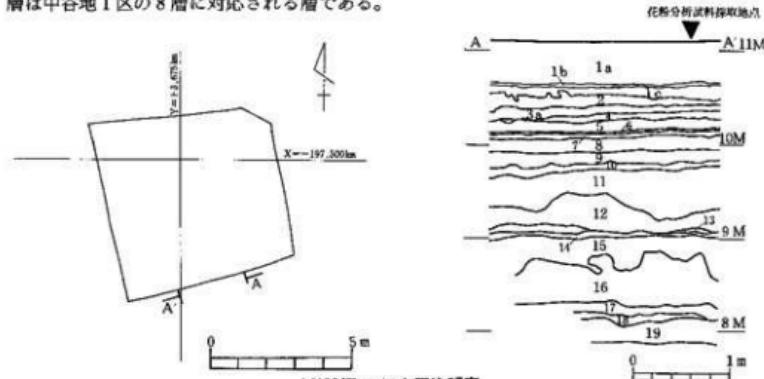
状に確認したため本調査へ移行した。

IN 試掘No.11・12 3層（本調査中谷地I区7層）で珪片を検出したので本調査へ移行した。

IN 試掘No.13 3層（本調査中谷地I区7層）で珪片を検出したので本調査へ移行した。

IN 試掘No.14 旧水田面以下約1.5mまで掘り下がり、隣の試掘No.15と同様の砂層が続き遺構が検出されなかつたため本調査不要と判断した。

IN 試掘No.15 3層から中国銭5点が出土したが遺構は検出されず、本調査は不要と判断した。確認した層は16層で旧水田面以下約1.6mまで調査を実施している。1～3層はシルト層、4～11層は砂とシルトの互層、12～15層が泥炭質粘土層、16層以下がグライ化した層である。出土した中国銭のうち初鉄年代の判明したのは4点で、内訳は周通元宝（後周：955）、咸平元宝（北宋：998）、大觀通宝（北宋：1107）、正隆元宝（金：1158）である。中国銭を出土した3層は中谷地I区の8層に対応される層である。



IN 試掘No.16上層注記表

| 層序 | 土色 | 土質 | 層厚 | 混入物 | 備考 |
|-----|--------|------------|--------|---------|-------------------------------|
| 1 a | 灰褐色 | 7.5Y R 5/4 | シルト | 2~14cm | 現代の水田の耕作土 |
| 1 b | 明褐色 | 7.5Y R 5/4 | 粘土 | 1~6cm | 泥炭質粘土層 |
| 1 c | 黒褐色 | 10Y R 4/2 | 粘土 | 3~15cm | |
| 2 | 黄褐色 | 2.5Y R 4/2 | 粘土 | 5~25cm | 3層をブロック状に含む |
| 3 a | 明褐色 | 2.5Y R 4/2 | 泥炭質粘土 | 1~14cm | 植物遺体 多量 |
| 3 b | 黒褐色 | 5Y R 4/2 | 泥炭質粘土 | 2~7cm | 植物遺体 多量 |
| 4 | 鈍い茶色 | 7.5Y R 4/2 | 砂 | 2~8cm | 試掘区の両半分に分布 |
| 5 | 青灰色 | 2.5Y N 5/4 | 粘土 | 9~12cm | 互層 |
| 6 | 黑色 | 泥炭質粘土 | | | |
| 7 | 黑色 | 10Y R 4/2 | 泥炭質粘土 | 1~3cm | 植物遺体 多量 |
| 8 | 黑色 | 10Y R 4/2 | 泥炭質粘土 | 3~8cm | |
| 9 | 黑色 | 10Y R 4/2 | 泥炭質粘土 | 4~19cm | 植物遺体 稀めて多量 |
| 10 | 暗褐色 | 10Y R 4/2 | 粘土 | 10~18cm | 植物遺体 多量 |
| 11 | 明オリーブ色 | 5O Y 5/4 | 粘土 | 4~18cm | |
| 12 | 綠褐色 | 7.5G Y 5/4 | 砂 | 22~30cm | 細砂・細砂を含む |
| 13 | 綠褐色 | 10G Y 5/4 | シルト質粘土 | 12~40cm | 20cmに暗褐色粘土が夾まれる。上面に赤褐色に覆われている |
| 14 | 暗オリーブ色 | 7.5Y 5/4 | 粘土 | 1~8cm | 赤褐色に硬い層である |
| 15 | 明褐色 | 10O Y 5/4 | 粘土 | 18~44cm | 赤褐色に硬い層である |
| 16 | オリーブ色 | 2.5G Y 5/4 | 粗砂 | 30~58cm | オリーブ色 粘土が層を成す |
| 17 | 暗褐色 | 2.5Y 5/4 | 粘土 | 6~16cm | 植物遺体・ホウ(ホウカク)が多量に見られる |
| 18 | 鈍い茶色 | 5Y R 5/4 | 粘土質シルト | 2~10cm | 上面ににおいて褐色の粘土が見られる |
| 19 | オリーブ色 | 3O Y 5/4 | 粗砂 | 16~28cm | |

第16図 IN 試掘No.16平面図・断面図

IN 試掘No16 (第16図、写真5) 旧水田面以下約3mまで調査を実施したが遺構は検出されず、本調査は不要と判断した。しかし、本試掘区の花粉分析の結果、17層から19層にかけては最終冰期後半期の植生であることが判明した。分析結果についてはVIII-7を参照されたい。本試掘区で確認された層は19層である。1～4層がシルト・粘土・砂層で、5層が黄灰色と黒色粘土の互層、6～9層が泥炭質粘土層、10～19層がグライ化した層である。グライ化した層の中に暗赤褐色系の17・18層が存在する。17層は暗赤褐色(2.5YR3/4)の粘土層で、層厚は8～20cmである。炭化物片、木片、種果を多量に含む。18層は鈍い赤褐色の粘土質シルト層で、層厚は5～20cmである。17層上面の標高は8.3m前後である。

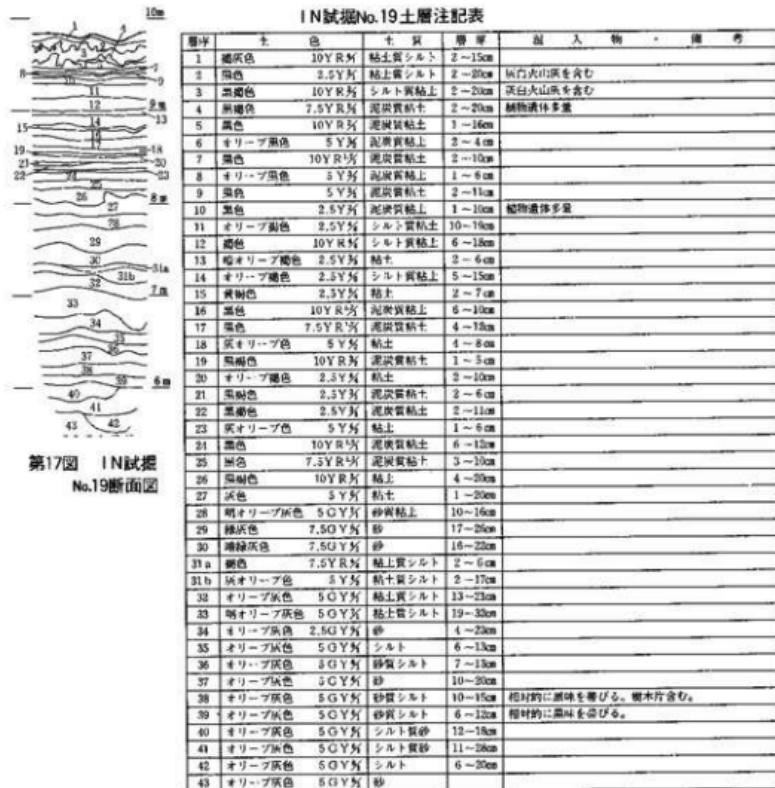
本試掘区の花粉分析の結果により、沖積平野の下層部分に旧石器時代の生活面が存在する可能性が考えられるようになり、1988年3月第30次調査での後期旧石器の発見に結び付いたと言えよう（仙教委：1988）。

IN 試掘No17 旧水田面以下約1.8mまで調査を実施したが遺構遺物は検出されず、本調査は不要と判断した。確認された層は12層である。1層（旧耕作土ではない）が粘土層で、2～11層が泥炭質粘土層で、12層がオリーブ灰色の砂層である。

IN 試掘No18 旧水田面以下約2mまで調査を実施したが遺構遺物は検出されず、本調査は不要と判断した。確認された層は39層である。1層が旧耕作土で、2～4層がシルト・粘土層で3・4層中には灰白色火山灰が含まれる。5～30層が泥炭質粘土層で、そのうち17～23層は特に分解度が悪い層で約50cmの厚さを有している。31層以下はグライ化した砂および粘土層である。

IN 試掘No19 (第17図、写真6～8) 旧水田面以下約4.5mまで調査を実施したが遺構遺物は検出されず、本調査は不要と判断した。確認された層は43層である。1層が旧耕作土で、2・3層がシルト層で灰白色火山灰を含む。4～25層が泥炭質粘土層で、そのうち11～15層は特に分解度の悪い層で約50cmの厚さを有している。26層以下がグライ化した砂・シルト・粘土層であるが、31a・b層および38・39層が緑灰色系の土色の中でも相対的に黒味の強い層になっている。31a層は褐色(7.5YR4/4)粘土質シルトで、31b層は31a・b層より黒味の強い層で、ともに砂質シルト層である。38層上面では樹木片が出土地してある。31a層上面の標高は7.3～7.36mで、38層上面は6.2～6.3mである。なお、この付近でのボーリング調査（No17）によると礫層の標高は4.0mである。

IN 試掘No20 旧水田面下約2.2mまで調査を実施したが遺構遺物は検出されず、本調査は不要と判断した。確認された層は25層である。1層が旧耕作土で2層が粘土質シルト、3～22層が泥炭質粘土である。No18・19区と同様に10～14層が分解度の悪い層で、厚さが約40cmである。23層以下がグライ化した層になっている。



第17図 IN試掘
No.19断面図

IN試掘No.21 2層で畦畔を検出したため西方へ30m拡張したが畦畔は確認されず、中谷地工区の起点から約60mまでを長町南駅区と併せて本調査へ移行することにした。

(2) 長町南駅工区

NA試掘No.1 旧水田面下約3.2mまで調査を実施した。遺構は検出されていないが、12m西のNA試掘No.2で畦畔状の高まりを検出した8層の存在は確認されている。確認された層は28層である。1層がII耕作土で、2・3層が粘土層、4~26層が泥炭質粘土および砂層、27層以下がグライ化した砂・粘土層である。

NA試掘No.2 8層(本調査での7c層)で畦畔状の盛り上がりを検出した。同時に進行していたNA試掘No.1と層を対応させるため両者間にトレッチを設定し8層の広がりを確認した。な

お、本試掘区ではプラント・オパール分析を実施している（VII-1の項参照）。

NA 試掘No.3 旧水田面下約70cmまで調査を実施したが明確な遺構は検出されなかった。ただし隣接した NA 試掘No.5 の7c層の畦畔状の盛り上がりの延長部と考えられる土層の盛り上がりが、北東隅の断面観察で確認されている。

NA 試掘No.4 旧水田面下約4.5mまで調査を実施したが明確な遺構は検出されなかった。ただし、NA 試掘No.5 で畦畔状の高まりを検出した7c層（本調査での7c層）の存在は確認されている。また、7a層上面で大形板状安山岩製石器が出土地（第104図1、写真□）。確認された層は41層である。1・2層が盛土で、3層が粘土層、4～27層が泥炭質粘土層、28～41層がグライ化した粘土および砂層である。なお本試掘区では花粉分析を実施している（VII-8の項参照）。

NA 試掘No.5 7c層上面で畦畔状の高まりを検出した。北東方向と北西方向の高まりで、北西方向のものは隣接する NA 試掘No.3 に延長していたが明瞭には検出されず、断面での確認にとどまった。なお本試掘区においてもプラント・オパール分析と花粉分析を実施している（VII-1・8の項参照）。

NA 試掘No.6 調査区の北東隅の7c層（本調査区での7c層）で畦畔状の高まりを検出した。本試掘区では深掘りも実施しており、35層まで確認している。1層が旧耕作土で、2・3層がシルト・粘土層、4～26層が泥炭質粘土層および砂層で、27～34層がグライ化した粘土および砂層である。

NA 試掘No.7 7c層（本調査での7c層）で畦畔状の高まりを検出した。

以上の試掘結果をまとめると、7cおよび8層（いずれも本調査での7c層）で畦畔状の高まりが数条検出されるとともに各試掘区で7cおよび8層の存在が確認され、水田跡が広範囲に展開することが予想されたため、本調査が必要と判断された。

なお、深掘りを3ヶ所（NA 試掘No.1・4・6）で実施したが、それらについてVIの章を参照されたい。

2. 本調査区の設定

試掘調査の結果をもとに次のように本調査区を設定した。

泉崎東工区は道路部分がほとんどであり、しかも店舗等が並ぶ幹線的な道路であるため、交差点や車道確保等の道路事情を考慮に入れた本調査区の設定となった。IN 試掘No.1・2を中心とした七北田起点から（以下略）13.314～13.356kmの部分を泉崎I区、IN 試掘No.5・6を中心とした13.158～13.208kmの部分を泉崎II区、IN 試掘No.7・8を中心とした13.079～13.120kmの部分を泉崎III区と設定した。なお、泉崎II・III区は泉崎浦遺跡と富沢遺跡にまたがる調査区で

あるが、調査時点より便宜上遺跡を区別せず取扱ってきたためこの報告においてもそれを踏襲した。

中谷地工区は道路部分と公園予定地にまたがっており、道路部分については泉崎東工区と同様に道路事情を考慮して本調査区を設定した。IN 試掘No11～13を中心とした12.909～12.965kmの公園予定地区内部を中谷地I区、IN 試掘No10を中心とした12.960～13.023kmの道路部分を中谷地II区、IN 試掘No9を中心とした13.036～13.058kmを中谷地III区とした。

長町南駅工区は一般道路として供用されていない部分であり、広範囲に調査区が設定可能であることからほぼ全域を調査対象とした。また、IN 試掘No21で本調査が必要とされた中谷地工区の一部分(60m)をも取り込んで調査を実施することにした。その結果、12.300～12.560kmの全長260mの長大な調査区を設定することになった。また、A・B換気区、出入口区、変電所区については82・83年度の本調査の成果に基き、試掘等は実施せず木調査を行っている。

注)

1. 土色・土性は現場での注記が欠落していたため、富沢遺跡での一般的な十層のあり方を踏まえて、カラースライドより復元したものである。
2. 誠に遺憾ながら遺物が行方不明になり図示できなかった。渡来鏡の種類は現場での調査日誌の記録による。
3. 36層以下についてはすべてオリーブ灰色(5 G Y6/1)という現場での注記であるが、カラースライドから明らかに黒味の強い層であることが看取される。
4. 発見当時は石器であるかどうか意見が分かれたが、担当調査員であった荒井格により、人為的剝離痕および光沢面の存在が観察され、石器として認識されるに至った。その後資料の増加とともに、斎野裕彦により第15次調査において本格的な検討がなされ、この名称が付された(斎野1987)。

IV 泉崎前・泉崎浦地区

1. 調査の方法と経過

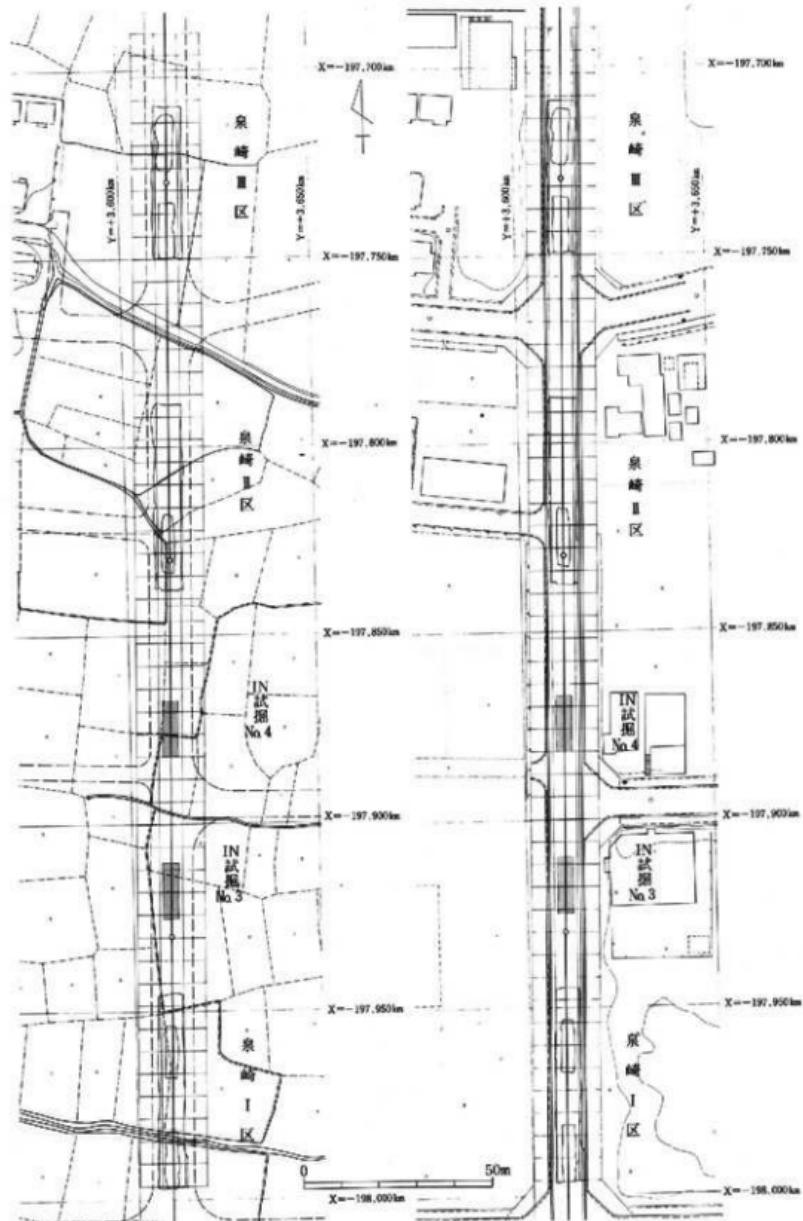
泉崎東工区においては、起点より13.060～13.366kmの306m間を南北に1～51、東西にA～Cの6×6mグリッドを設定した(第18図)。泉崎I区は43～51グリッド、II区は17～25グリッド、III区は4～10グリッドに位置する。各調査区は道路部分であるため交通事情を考慮して西側に車道を確保し、交互通行方式をとって調査を実施した。したがって路線幅は11mであるが西側が2m減じたため、各調査区の規模はI区が8.8×51m、II区が8.8×50m、III区が8.8×41mとなった。

前項で述べた本工区での試掘調査は1982年6月末で終了し、7・8月は工事業者側の調査区設定の準備期間に当たった。調査区設定に関連する諸工事(調査区用土留工・車道用覆鋼板取付・保安施設設置等)や盛土・表土掘削・残土運搬工事等は、高速鉄道建設本部との協議の上、各工区請負業者が施工することになった。なお、工事工程上工事用鋼矢板打込み工事は文化財調査に先行して行った。

I区の調査は1982年9月6日より調査を開始し、続く8日にはIN試掘No1でプラントオーバル分析と花粉分析用のサンプリングを藤原宏志氏(宮崎大学)と畠中健一氏(岡山理科大学)により行った(写真23)。盛土・旧水田耕作土を重機で除去したところ、2・3層上面で溝跡・土坑・河川跡を検出した。9月末からは4層水田跡の検出を開始し10月上旬に終了し、中旬には5層水田跡の検出を開始し下旬で終了している。11月上旬に11層で畦畔を検出、西へ延びていたため車道用覆鋼板の下まで拡張した。中旬にSX1遺構と杭列を検出、16日には木製の横歓が出土した。12月4日には12層で丸木弓が出土した。SX1の杭の取り上げを最後に12月11日に調査を完了した。

II区は9月13日より開始した。重機での盛土・表土除去が十分でなく、人力による除去作業に多少の時間を費やした。9月末から本格的な遺構検出作業を開始し、まず試掘時に確認していた古墳時代の住居跡を調査区北端部の5層上面で検出、続いてその南側の3層上面で近世の墓壙群を検出した。墓壙群は10月1日に掘り込みを開始し25Hに終了した。人骨の出土した墓壙が数基あったが、遺存状況の悪い人骨平箱1箱分は近くの淹沢寺に無縫仏としての供養をお願いした。続いて住居跡と遺物包含層4層の調査を終え、10月下旬には5層上面で溝跡を検出し11月初めに終了している。11月中旬以降は水田跡の検出を主眼としてより下層の調査を行ったが畦畔等は検出されず、9層上面の精査を最後に12月2日をもってII区の調査を完了した。

III区の調査はII区の終了後に引き続いて12月2日に開始した。12月8日に旧表土除去が完了



第18図 泉崎前・泉崎浦地区調査区・位置図

し、4層の砂層を掘り下げ中に5層の畦畔を検出し水田跡を確認した。5層上面では多数の人と牛の足跡が検出され石膏での型取りを行うとともに、星川清親氏（東北大学）と加藤強氏（仙台市中央卸売市場KK）に実物の牛の足（切断した前足2本と後足2本）を持参していただき、実際に地面に足跡を付け検出した足跡状のものと比較検討を行いそれらが牛の足跡である確認を得ることができた（写真35）。12月中旬に5層水田跡の調査は終了したが、プラントオパール分析から水田跡の存在が予想された15層の調査は越年となった。翌年1月5日から調査を再開、15層の畦畔を検出し水田跡の存在を確認し中旬にその調査を終了した。15層以下の調査は17層上面まで終え、土層断面図作成を最後に1月26日をもってIII区の調査を完了した。

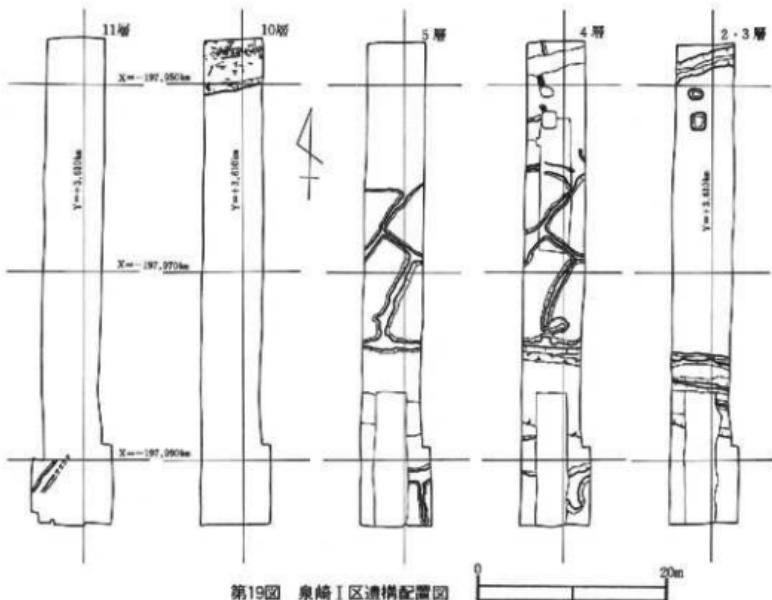
2. 泉崎I区

（1）調査区の位置

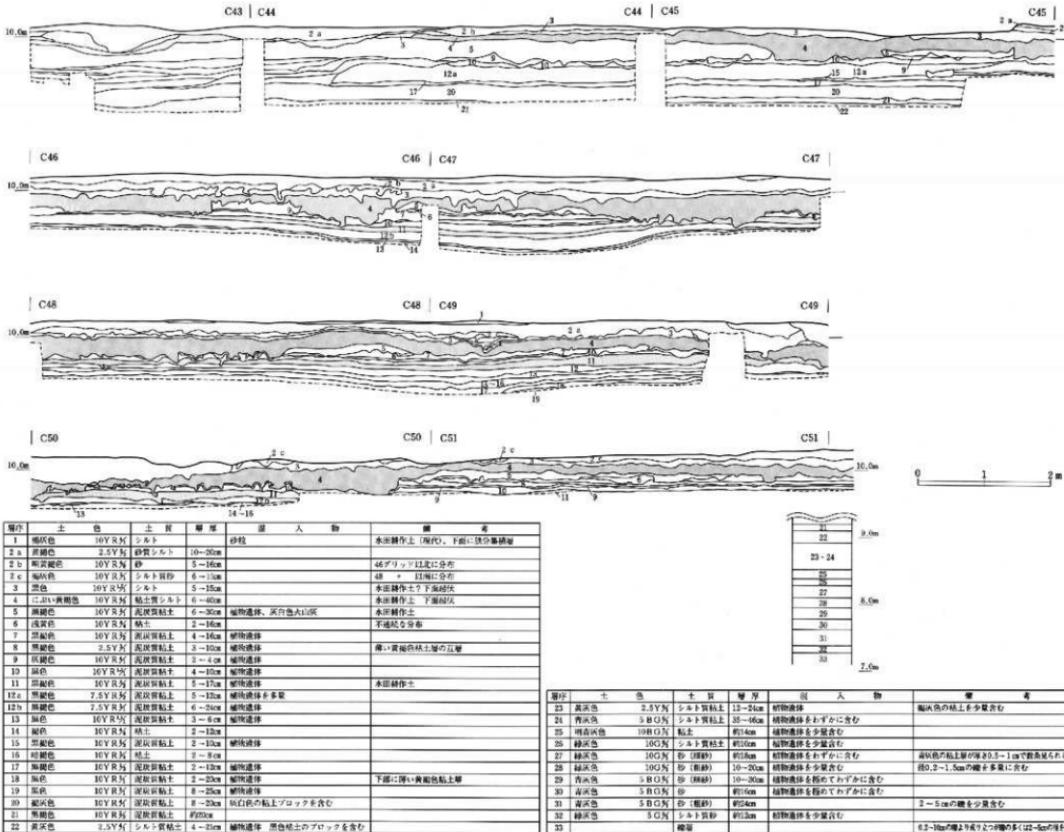
調査地点は、富沢遺跡の南端部中央に位置し、荒川が形成した自然堤防の後背湿地に立地している。区画整理以前は水田で東へ傾斜しており、標高は10.37～10.65mであった。

（2）基本層序

確認された基本層序は大別で21層、細別で24層である。層序を大まかにみると1層が旧耕作



第19図 泉崎I区遺構配置図



第20図 泉崎I区土層断面図

土、2層が砂層及び砂質シルト、3・4層がシルト層、5層以下21層にかけてが泥炭及び泥炭質粘土層である。IN 試掘区No.1の結果によれば22層以下はグライ化した粘土および砂層、そして礫層になる。礫層の標高は7.3mである。なお、23層以下については、土層観察表を参照されたい（第20図）。

- 1層：褐灰色（10YR4/1）シルト。旧耕作土。下面に鉄分の集積層が認められる。
- 2a層：暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質シルト。層厚は10～20cmでほぼ全域に分布する。
- 2b層：明黄褐色（10YR6/6）砂。層厚は5～16cmで46グリッド以北に分布する。
- 2c層：褐灰色（10YR5/1）シルト質砂。層厚は6～15cmで48グリッド以南に分布する。
- 3層：黒色（10YR1.7/1）シルト。層厚は5～15cmでほぼ全域に分布する。下面に凹凸が認められる。水田耕作土の可能性がある。
- 4層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルト。層厚は6～40cmで、43・44グリッドが比較的薄く堆積している。ほぼ全域に分布する。上面下面ともに凹凸が認められる。水田耕作土である。
- 5層：黒褐色（10YR3/1）泥炭質粘土。上面近くに灰白色火山灰を含む。層厚は6～30cmで45グリッド以北に厚く堆積している。ほぼ全域に分布している。上面下面ともに凹凸が認められる。水田耕作土である。
- 6層：浅黄色（10YR8/4）粘土。層厚は2～16cmである。薄い黒褐色土層と互層になる部分がある。南端の51グリッドに比較的良好に分布するが、他は部分的に分布するだけである。上面下面に凹凸、層中に攪拌を受けたような箇所が観察される。それらが5層水田跡の耕作深度の影響であるか、6層の水田耕作土の可能性を示しているのかは不明である。
- 7層：黒褐色（10YR2/2）泥炭質粘土。層厚は4～16cmで、ほぼ全域に分布する。下半部は黒味がやや強くなっている。上半部に攪拌を受けたような箇所が観察される。それらが5層水田跡の耕作深度の影響であるか、7層の水田耕作土の可能性を示しているのかは不明である。
- 8層：黒褐色（2.5Y3/1）泥炭質粘土と黄褐色粘土との互層。層厚は3～10cmで、51グリッド付近に分布する。自然堆積層である。
- 9層：灰褐色（10YR4/1）泥炭質粘土。層厚は2～4cmで、46グリッド以南に分布する。自然堆積層である。
- 10層：黒色（10YR1.7/1）泥炭質粘土。層厚は4～10cmで、46グリッド以南に分布する。自然堆積層である。
- 11層：黒褐色（10YR3/2）泥炭質粘土。層厚は5～17cmで、46グリッド北半部以南に分布する。下面に若干の凹凸が認められる。水田耕作土である。
- 12a層：黒褐色（7.5YR2/2）泥炭質粘土。層厚は5～12cmで、45グリッド以北に分布する。分

解度の低い層で植物遺体を多量に含む層である。

12b層：黒褐色（7.5YR3/1）泥炭質粘土。層厚は6～24cmで、45グリッド以南に分布する。自然堆積層である。

13層：黒色（10YR1.7/1）泥炭質粘土。層厚は3～6cmで、45グリッド以南に分布する。自然堆積層である。

14層：褐色（10YR4/4）粘土。層厚は2～12cmで、45グリッド以南に分布する。自然堆積層である。

15層：黒褐色（10YR2/3）泥炭質粘土。層厚は2～10cmで、45グリッド以南に分布する。下位にSR2・3河川跡が存在する箇所で層が厚くなっている。自然堆積層である。

16層：暗褐色（10YR3/4）粘土。層厚は2～8cmで、45グリッド以南に分布する。自然堆積層である。

17層：黒褐色（10YR2/3）泥炭質粘土。層厚は2～12cmで、45グリッド以南に分布する。下位にSR2・3河川跡が存在する箇所で層が厚くなっている。自然堆積層である。

18層：黒色（10YR2/1）泥炭質粘土。下部に薄い黄褐色粘土層がある。層厚は2～20cmでほぼ全域に分布する。下位にSR2・3河川跡が存在する箇所で層がかなり厚くなっている。自然堆積層である。

19層：黒色（10YR2/1）泥炭質粘土。層厚8～25cmでほぼ全域に分布する。自然堆積層である。

20層：褐灰色（10YR4/1）泥炭質粘土。灰白色の粘土ブロックを含む。層厚は8～20cmで、ほぼ全域に分布する。自然堆積層である。

21層：黒褐色（10YR2/2）泥炭質粘土。層厚は約20cmである。自然堆積層である。

22層：黄灰色（25Y4/1）シルト質粘土。グライ化した層である。

（3）20層検出遺構

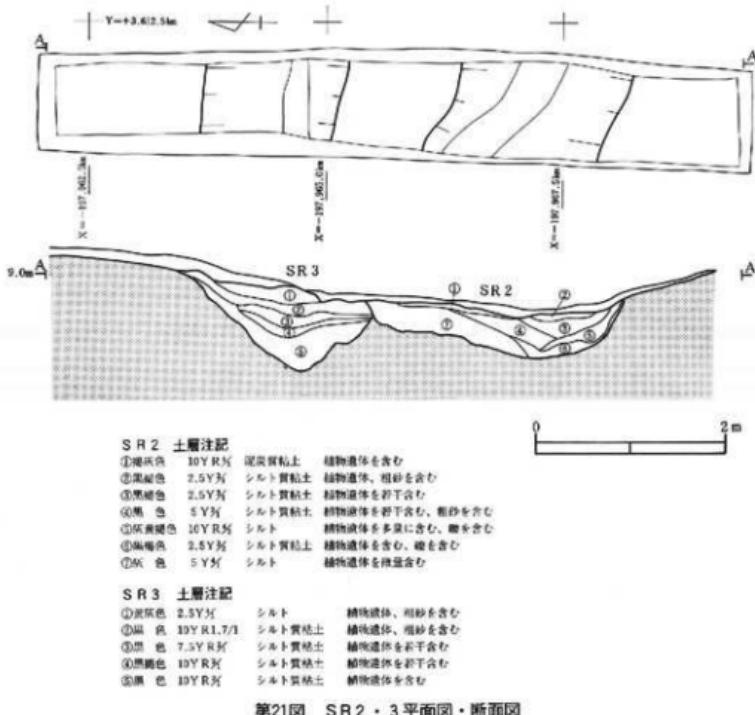
B46・47グリッド東端部分の深堀区（1×7.5m）で河川跡SR2・3を検出した。なお、平面図は掘り上げ段階のものなので上端幅は断面図から計測している。

SR2（第21図、写真15）

検出長は短いがおそらく東南方向に延びると推定される。SR3より新しい。上端幅は約2.5m、下端幅は約50cm、深さは約60cmである。堆積土は5層である。出土遺物はない。

SR3（第21図、写真15）

SR2と同様に検出長は短いがほぼ東西方向に延びると推定される。上端幅約2m、下端幅約20～30cm、深さ約1mである。断面形はやや開いたU字形を呈する。堆積土は5層である。出土遺物はない。



第21図 SR 2・3 平面図・断面図

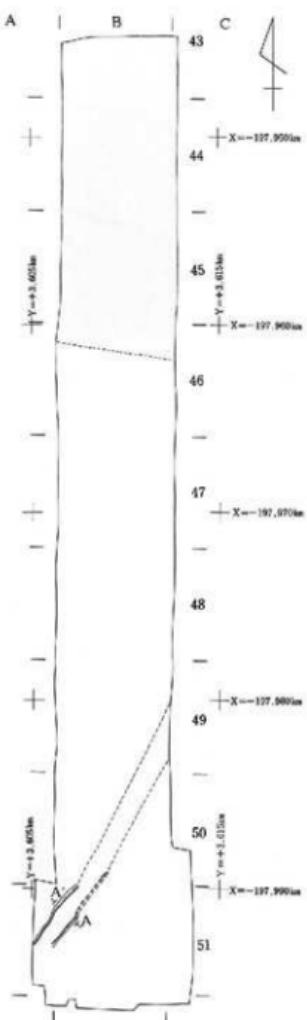
(4) 11層検出構造と遺物

11層水田跡（第22図、写真15）

畦畔が1条検出されたのみである。

[地形面] B51グリッド南西隅が最も高くなりB46グリッドからB47グリッド北半にかけて幅約3mの帯状に最も低くなる部分があり、B46グリッド北東隅がやや高くなる。下位にSR 2・3が存在する箇所が最も低くなっている。標高は9.36～9.76mである。

[水田域] 耕作土である11層の分布が46グリッドの北半部で終り、そこに耕作域と非耕作域の境界が確認された。境界線は、東西の断面から復元した線であり、その方向はN-83°-Wである。境界線付近に畦畔は認められない。耕作域では境界線の北側約2.5mの範囲に12b層が分布し、さらに北側に12a層が分布している。非耕作域は調査区の北端まで広がるが、約20m北に位置する試掘区No3で耕作土を確認しているため、耕作域がさらに北側に展開すること



が想定される。一方、東西南方へは11層が広がることから水田跡は調査区外へも広がると考えられる。

【耕作土】 基本層11層で黒褐色の粘土層である。層厚は6~18cmほどで母材となる層は不明である。分解が進んでいる。

【直下の層】 基本層12b層が直下の層になっている。11層直下、12b層直上・層中に鉄分やマンガン斑の集積は認められない。

【畦畔】 A・B51グリッドにかけて畦畔1条が検出されている。畦畔の方向はN-36°-E、検出長は約4mで直線的に伸びる。その規模は上端幅0.7~1m、下端幅0.9~1.2m、高さ5cm前後である。畦畔の東側は試掘No1にあたるがその時点では検出されなかった。しかし、畦畔の延長上の49グリッド東壁断面に約1.7mの11層の高まりが観察されることから、畦畔はさらに北東方向へ連続していた可能性が高い。また、耕作域の境界線とほぼ直交する方向性であることから、各々の延長上で直交する可能性も考えられよう。

【水田の区画】 畦畔と耕作域の境界線により2区画存在するが全貌は不明である。

【水田面の傾斜】 地形面の頂で触れたが、下位の河川跡により11層上面には高低差が存在する。この高低差が水田面の区画を反映している可能性も考えられる。

【出土遺物】 弥生土器2点が出土している。うち1点を図示した。他の1点は細片でしかも器面がほとんど剥落しており、辛うじて縹文の節が観察される程度である。第27図7の弥生土器は試掘区No1の11層中から出土している。壺の口縁部から体部上半部分と体部下半から底部にかけての部分で同一個体である。体部上半が膨らみ口縁部が強く外反する器形である。口縁

第22図 11層水田跡平面図・断面図

部から体部上端にかけて無文部となり、その下半部にZ字状の綾絡文が横位に施文されている。無文部の器面調整は、口縁部がヨコナデ、体部上端部が斜め方向のナデである。体部には斜行するLR繩文が施される。頸部付近の綾絡文は、弥生時代の桟形団式から十三塙式にみられる特徴とされており（太田：1980）、この壺もその時期に位置づけられよう。

（5）10層検出遺構と遺物

S X 1 遺構（第23図、写真16～18）

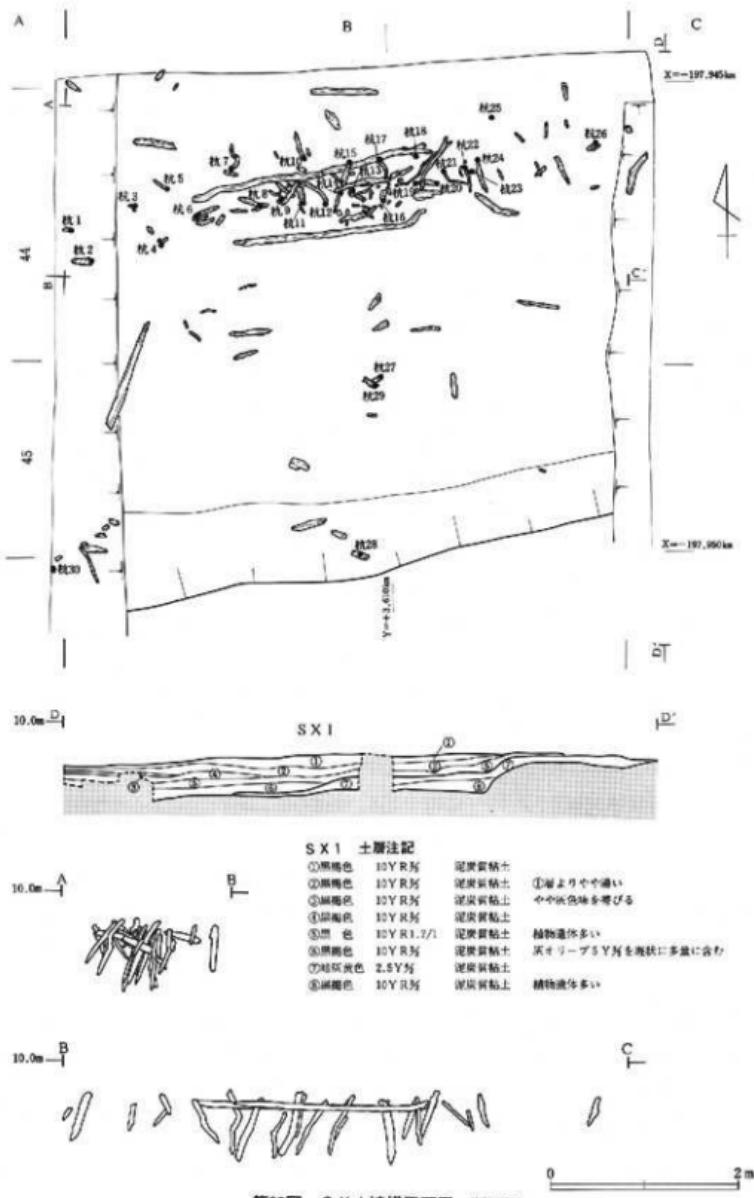
調査区の北端部43・44グリッドに位置する。12層で検出されたが、断面での検討から掘りこみ面は10層上面と判断された。南岸のみ検出されており、北岸は調査区外のため不明である。上端、下端の検出長は5.3mで直線的に伸びており、その方向はN-80°-Eである。上端幅は5.6m以上で深さは約50cmである。底面は平坦で北側がやや低くなっている。壁は東側でやや急に西側で緩く立ち上がっている。堆積土は8層で、堆積土1層中で杭列、木製品を検出している。

〔杭列〕 S X 1 の南側上端から北へ約4mに位置する。26本の杭（杭1～26）と2本の樹木片（樹木①・②）で構成される。杭の配列は2列並行で幾分蛇行気味である。方向はS X 1 の南側上端とほぼ同じ方向でN-80°-Eである。検出長は約6mであるが、東西方向へさらに延びている可能性が高い。各杭は打ち込み杭である。杭列の間隔は30～50cm、杭の間隔は15～80cmで、杭25・26が若干離れている。2本の樹木片は樹木①が杭列の間に、樹木②が杭列の南側に位置する。両者は50～70cmの間隔で並行し、その方向は杭列とほぼ同様である。樹木片①②は杭の頭部より若干低いレベルでほぼ水平の状態で検出されている。

杭22本と樹木片2本、杭列以外の杭4本（杭27～30）を図示した（第31図～第42図）。図示した杭のうち19本が丸太材で、3本が分割材である。先端の加工は全てに認められている。杭の長さは15～113cmで、径は3.0～9.4cmである。樹木片①②は丸太材である。両者とも片端に加工が認められている。長さは樹木①が210cm以上、樹木②が164.2cmである。樹種の判明しているものは杭6・9がヌルデ、8がヤマグワ、11がサクラ属の一種、12がシラキ、13がニガキ、16ケンボナシ、17・18がヤナギ属の一種である。

〔出土遺物〕 木製品が1点出土している。

横鉗（第28図3、写真108）：S X 1 の堆積土1層中から出土している。頭頂部および刃先部が欠損し、外形は両側縁に原形が一部残存しているのみである。身の幅は22.1cm、身の残存長は13.9cm、厚さは1～0.6cmである。着柄隆起の刃部側は二又になり、両端部が尖っている。着柄孔は円形で径4cmである。着柄角度は着柄隆起部を前面とした場合103度になる。樹種はクヌギ節の一種である。着柄孔の位置から頭頂部が近いと推定されることや刃部近くまで身が残存していると考えられることなどから、身の長さは身の幅よりも小さくなると想定され、柵目材



が横に用いられている点も考え方を横断と捉えておきたい。

(6) 5層検出構造と遺物

5層水田跡 (第24図、写真19・20)

畦畔6条と段差部分1箇所、それらが形成する区画7区画を検出している。

【地形面】 ほぼ平坦であるが調査区の中央がやや低い。標高は9.68~10.06mである。

【水田域】 調査区はすべて水田域である。耕作土の5層は4層にかなり搅拌されているが調査区のほぼ全域に分布すること、畦畔が調査区外へさらに延びることから、水田域は調査区外へも広がっている。

【耕作土】 基本層は5層で黒褐色の粘土質シルトである。層厚は10~30cmである。4層水田での耕作による搅拌をかなり受けている。母材となる層は不明である。

【直下の層】 47グリッド以北では6・7層が、それ以北では9・10層が直下の層である。耕作土の下位に鉄分やマンガン粒の集積は認められない。

【畦畔】 畦畔は6条(1~6)検出され、うち畦畔1~4が小区画を形成している。計測表は第6表に示した。畦畔1・3の方向はN-33°・20°-Eで、畦畔2がそれらに直交する方向でN-55°-W、畦畔4・5がほぼ東西方向、畦畔6がほぼ南北方向である。畦畔の下端幅は70~150cmである。

【水口】 畦畔1と2の交点の南側と畦畔2と3の交点の南側の2箇所で検出されている。

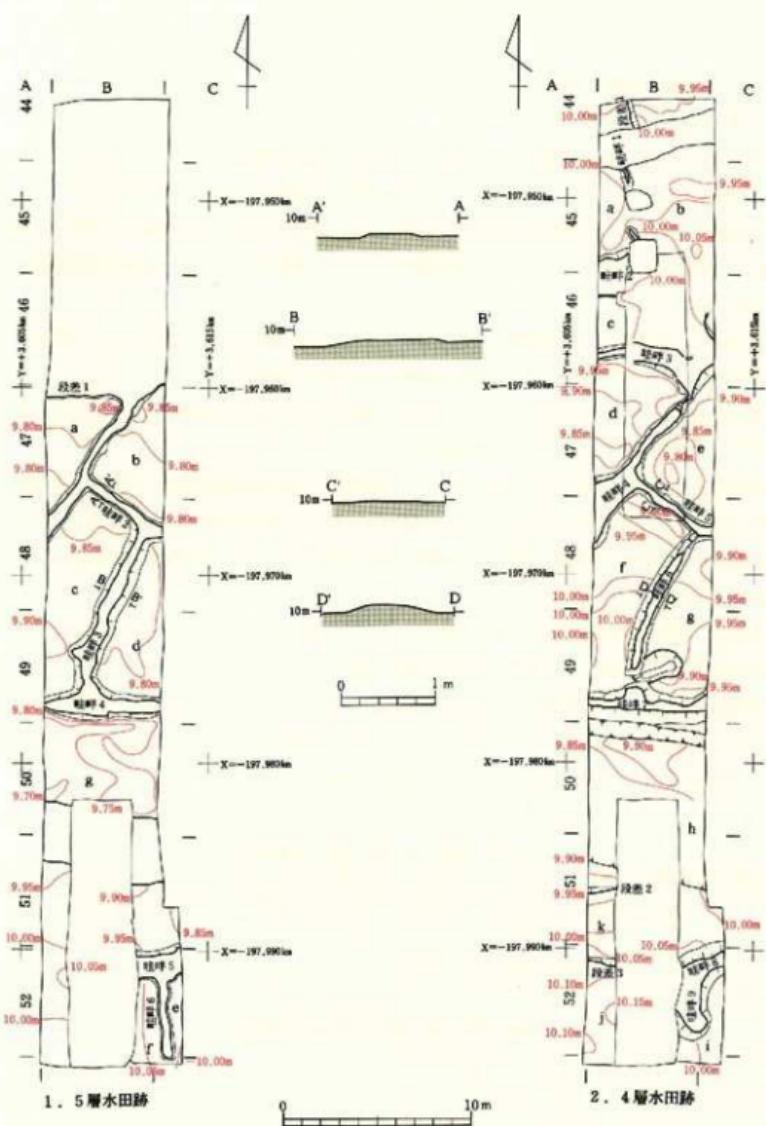
【水田の区画】 畦畔により形成される区画が7区画(a~g)存在する。そのうちまとまった小区画といえるのは畦畔1~4の形成する区画a~dである。1区画の全体が判明するものではなくその形状や面積については不明である。長辺短辺の計測が可能な区画はcで長辺が9.5m、短辺が3.5m、面積は方形とするならば推定で約33m²となる。

第6表 泉崎I区5層水田跡畦畔計測表

| 検出番号 | 検出高(m) | 方向 | 方位 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との距離(m) | 高さ(m) |
|------|--------|-----|---------|---------|---------|------------|----------------------|
| 1 | 9.5 | 直 | N-33°-E | 30~70 | 60~100 | 西側 | 2.8~6.4 東側 3.7~7.6 |
| 2 | 4.8 | 直 | N-55°-W | 30~65 | 60~120 | 南側 | 2.4~4.1 北側 2.2~6.8 |
| 3 | 9.2 | ほぼ直 | N-20°-E | 40~130 | 130~185 | 西側 | 1.0~4.2 東側 2.6~8.0 |
| 4 | 6.2 | 直 | N-90°-W | 20~120 | 60~180 | 北側 | 5.0~11.7 南側 7.7~13.7 |
| 5 | 2.3 | 直 | N-84°-E | 110前後 | 150前後 | 南側 | 10.5~11.7 0 1.8~3.8 |
| 6 | 4.2 | 直 | N-5°-W | 40~45 | 55~75 | 西側 | 1.7~2.2 東側 1.8~3.6 |
| 接1 | 4.0 | 直 | N-90°-W | | | | 1.8~3.2 |

第7表 泉崎I区5層水田跡水田区画計測表

| 水田区画 | 標高(m) | | 面積(m ²) |
|------|--------|-------|---------------------|
| | 低 | 高 | |
| a | 9.867 | 9.774 | 6,832.1 |
| b | 9.838 | 9.759 | 6,213.1 |
| c | 9.909 | 9.777 | 2.7 |
| d | 9.852 | 9.753 | 3,563.1 |
| e | 10.036 | 9.99 | - |
| f | 10.064 | 10.02 | - |
| g | 9.87 | 9.675 | 12.3 |



第24図 4・5層水田跡平面図・断面図

〔水田面の傾斜〕 小区画a～dでは、cが最も高くaが若干低くなり、b・dがほぼ同じ高さで低くなる。畦畔4と5の間は4層に搅乱されているので、本来の水田面とは考えられないが、その標高は9.7～9.8mと最も低くなっている。5層以下も他の地点に比べ低いことからこの部分は本来の水田面でも最も低くなっていた可能性がある。

〔出土遺物〕 弥生土器片1点、土師器片2点が出土している。図示できたのは弥生土器片1点である。

弥生土器（第27図4、写真107）：細片である。同図1～3・5と同一個体の可能性がある。2条の沈線が施文されている。

（7）4層検出構造と遺物

4層水田跡（第24図、写真19・21）

畦畔8条と段差部分3箇所、それらが形成する区画11区画を検出している。

〔地形面〕 ほぼ平坦であるが、5層水田跡と同様に調査区中央部がやや低くなっている。標高は9.77～10.16mである。

〔水田域〕 調査区はすべて水田域である。耕作土である4層が調査区全域に広がること、畦畔が調査区外へも延びることから、水田域は調査区外へさらに広がっている。

〔耕作土〕 基本層は4層で黄褐色の粘土質シルトである。層厚は10～40cmである。4層下面の凹凸はかなり顕著で5層をかなり搅拌している場合が多い。

〔直下の層〕 基本的に5層であるが耕作深度が深い場合は7～10層にまで及んでいる。耕作土の下位に鉄分やマンガン粒の集積は認められない。

第8表 泉崎I区4層水田跡計測表

| 測定番号 | 成層数(n) | 方向性 | 方 向 | 上端面(m) | | 下端面(m) | 水 田 面 と の 比 高 差(cm) |
|------|--------|-----|-------------|---------|---------|----------------------------|---------------------|
| | | | | 北 | 南 | | |
| 1 | 3.3 | 直 | N 11° - W | 15段後 | 50段後 | 西側 1.7 東側 6.7 | |
| 2 | 1.6 | 西 | N - 90° - W | 180-200 | 210-230 | 北側 1.5-2.6 南側 2.4 | |
| 3 | 5.0 | 直 | N - 71° - W | 30段後 | 70-150 | # 2.4-3.9 | 3.5-9.8 |
| 4 | 11.0 | 直 | N - 38° - W | 35-150 | 70-210 | 西側 2.1-5.0 北側 3.7-8.9 | 0.4-12.5 4.5-6.6 |
| 5 | 4.7 | 直 | N - 54° - W | 20-50 | 50-80 | 北側 3.4-6.7 東側 3.6-11.0 | |
| 6 | 9.0 | ほぼ直 | N 23° - E | 30-60 | 100段後 | 西側 3.4-6.7 北側 12.7-19.8 | |
| 7 | 6.3 | 東 | N - 90° - E | 30-85 | 140-190 | 北側 4.8-9.9 南側 - | |
| 8 | 4.1 | 直 | N - 85° - E | 60段後 | 180段後 | # 1.0 | |
| 9 | 2.5 | | N - 21° - W | 100段後 | 300段後 | 東側 2.7-7.0 | |
| 段2 | 1.5 | | N - 82° - E | | | 2.6-4.2 | |

第9表 泉崎I区水田跡4層水田区画計測表

| 水田区画 | 層 高 (m) | | 成層数 (n) | | 面積 (m ²) |
|------|---------|--------|---------|-----|----------------------|
| | 高 | 低 | 北 近 | 南 近 | |
| a | 10.046 | 9.966 | - | - | |
| b | 10.384 | 9.843 | - | - | |
| c | 10.072 | 10.008 | - | - | |
| d | 10.023 | 9.946 | - | - | |
| e | 9.965 | 9.769 | - | - | |
| f | 10.03 | 9.872 | 9.0 | 3.5 | 約22以上 |
| g | 10.0 | 9.838 | 8.0 | - | |
| h | 9.809 | 9.923 | - | - | |
| i | 10.092 | 10.031 | - | - | |
| j | 10.159 | 10.091 | - | - | |
| k | 10.103 | 9.946 | - | 3.5 | |

【畦畔】 畦畔は9条(1~9)検出されそのうち畦畔3~7が小区画を形成している。計測表は第8表である。畦畔4~9は5層水田跡の畦畔を跨襲している。畦畔の方向は畦畔4・6が北東~南東方向でN-38°23'~E、畦畔3・5はそれらに直交する北西~南東方向でN-71°54'~Wである。畦畔2・7・8は東西方向、畦畔1・9はほぼ南北方向でN-11°21'~Wである。畦畔3のみが曲線的になる。畦畔の下端幅は50~250cmで水田面との比高差は1.7~19.8cmである。畦畔2・7・8の下端幅が大きくなっているが、特に7は検出状況が良好で下端幅が140~190cm、水田面との比高差が約13~20cmと大型になっており、大区画を形成する大畦畔の可能性がある。

【段差部分】 段差部分を3箇所検出している。段差1は畦畔1の延長、段差3は畦畔8の延長と考えられる。段差2は3の北側約3.5mにあり、方向はN-82°~Eでほぼ東西方向である。高低差は2.6~4.2cmである。

【水田の区画】 畦畔により形成される区画が11区画(a~k)存在する。小区画として捉えられるのは畦畔3~7が形成する区画d~gである。1区画全体が判明しているものではなく、その形状や面積については不明である。長辺短辺が計測可能な区画はfのみで、その長辺は9.0m、短辺は3.5m、面積は長方形とするならば推定で約32m²となる。

【水口】 水口は3箇所検出している。畦畔6の両端部、畦畔4の北端部である。水口1は下端幅で40cmほどである。区画g側では水口付近が2.5×1.5×0.1mの浅い梢円状のくぼみになっている。水口2は下端幅60cmであるが水田面より4cm高くなっている。水口3は下端幅20cmで区画d側が若干高くなっている。

【水田面の傾斜】 南端部の区画i~kでは北へ傾斜している。小区画d~gではfが最も高くeが最も低くなっている。またf→g、d→eという傾斜があり、水口の位置とも関連して、水田面は東へ傾斜する可能性が高い。

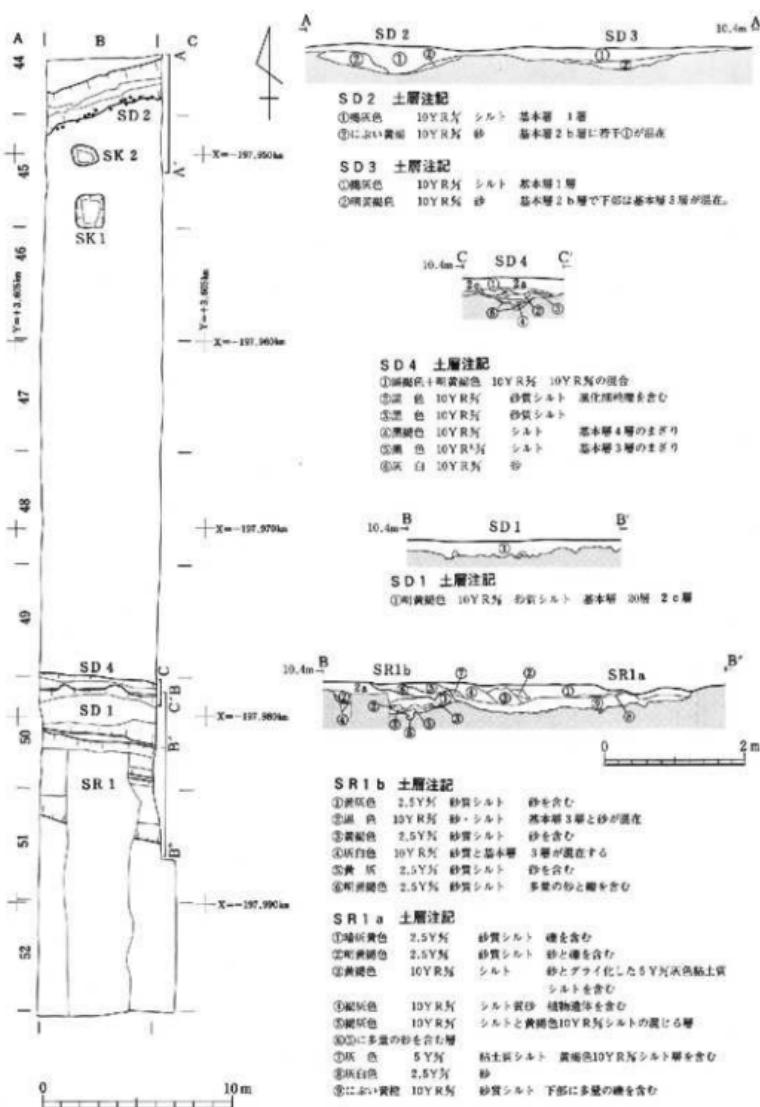
【出土遺物】 土師器片9点、赤焼土器片6点、須恵器片2点、石器1点が出土した。そのうち図示できたのは土師器1点、須恵器1点、赤焼土器3点、石器1点である。

土師器(第27図10、写真107)：高台付壺の底部である。底部の切り離し技法は回転糸切りである。内面はヘラミガキの後黒色処理が施されている。なお、他の土師器片もすべてロクロ使用の壺で内面に黒色処理が施されている。このような特徴をもつ土師器は、平安時代の表杉ノ入式に比定されるものである。

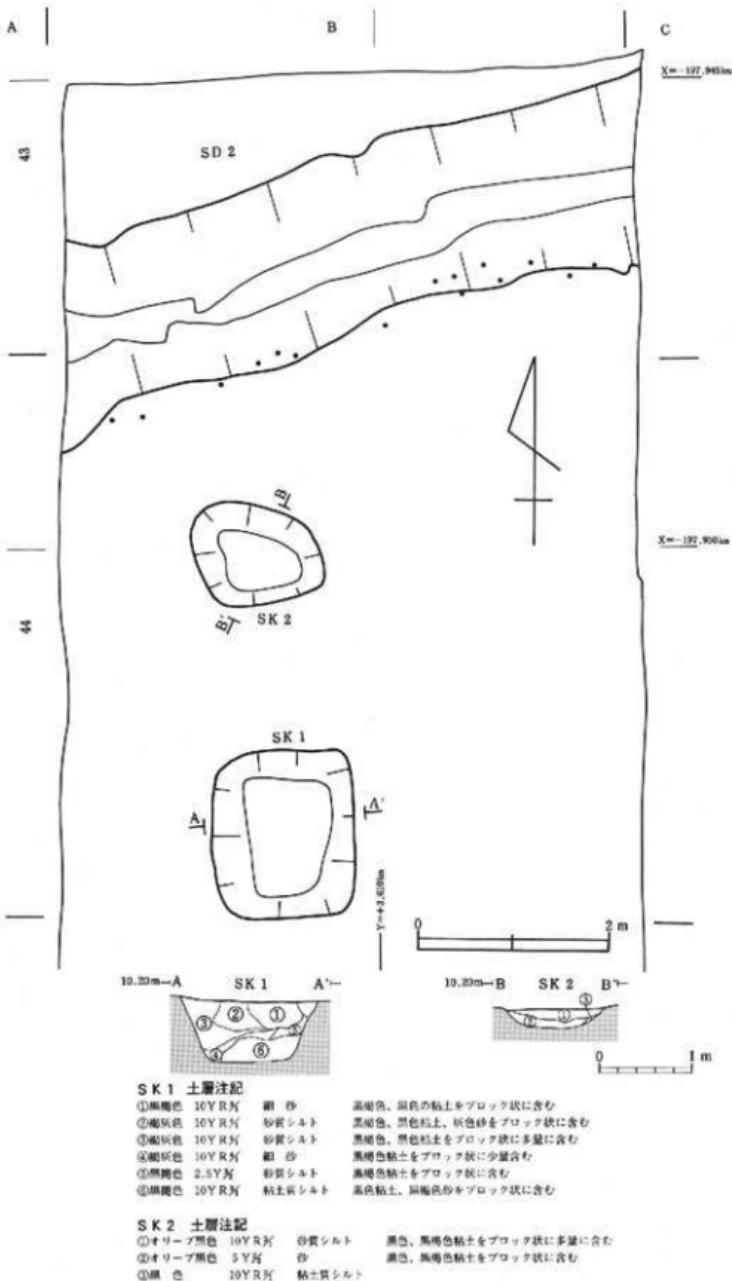
赤焼土器(第27図12・13・14、写真107)：いずれも壺である。12・13の底部の切り離し技法は回転糸切り技法で再調整はない。

須恵器(第27図15、写真107)：壺の一部で、内外面ともにロクロナデの調整が観察される。

石器(第28図2、写真108)：大型板状安山岩製石器である。a面上側縁左側に二次加工が認め



第25図 2・3層造構平面図・断面図



第26図 SD 2・SK 1・SK 2 平面図・断面図

られる。同じ面の右側縁が鋭角になり刃部と考えられる。他の側縁は折れ面である。

(8) 2・3層検出遺構と遺物

2層上面で溝跡1条(S D 1)、土坑1基(S K 1)、小河川跡1条(S R1a)、3層上面で溝跡3条(S D 2~4)、土坑1基(S K 2)、小河川跡(S R1b)を検出している。

S D 1 (第25図、写真23)

B49グリッドの2c層上面で検出された。上端幅2.6~2.1m、下端幅0.8~1.6m、深さ約20cmで壁が緩く立ち上がる浅い溝である。検出長は約6m方向はほぼ東西方向である。堆積層は1層で基本層2a層である。出土遺物はない。

S D 2 (第25・26図、写真23)

調査区北端部のB43グリッドに位置する。3層上面で検出された。検出長は約5mで、方向はN-73°-Eである。規模は上端幅1.6~2m、下端幅0.2~0.5m、深さ約25cm前後で断面が皿状の浅い溝である。堆積土は2層で基本層1層と2b層である。底面から須恵器甕の体部片が出士している(第27図17)。南岸に沿って杭列が検出された。

【杭列】 9本の杭と6本の杭痕跡である。杭の配列は若干蛇行気味で、方向はS D 2とほぼ同様である。すべて打ち込み杭で、間隔は20~100cmで規則性は認められない。S D 2の南岸に沿っていることから護岸用の杭列と考えられる。杭8本(杭31~38)を示した(第43・44図)。杭は丸太材が2本、分割材が6本で長さは14.4~29.2cmである。樹種の判明しているものは杭32・33がコナラ亜属コナラ節の一種で、34がカエデ属の一種である。

S D 3 (第25図)

B44グリッドの3層上面で検出された。S D 2の南側に位置する。断面観察で確認した。規模は上端幅1.6m、下端幅0.4m、深さ約15cmで断面形が皿状の浅い溝である。堆積土は2層で基本層1層と2b層である。出土遺物はない。

S D 4 (第25図、写真23)

B49グリッドの3層上面で検出された。検出長は6mで、方向はほぼ東西方向である。上端幅0.7~1.1m、下端幅0.2~0.5m、深さ約15cmである。堆積土は6層で堆積土1層を基本層2c層が覆っている。出土遺物はない。

S K 1 (第26図、写真23)

B44グリッドの2a層上面で検出された。平面形は方形で規模は1.8×1.5m、深さ65cmである。堆積土は7層であるが、基本層を大きなブロック状に含むことから人為的な堆積と考えられる。とくに堆積土2・3層は基本層1層を主体としており、掘り込み面が1層になる可能性が大きい。出土遺物はない。

S K 2 (第26図、写真23)

B44グリッドの3層上面で検出されたが、この地点では1層が3層直上になることから、掘り込み面は上層であった可能性がある。S K 1 の北側に位置する。平面形は不整円形で規模は1.5×1.1m、深さ20cmである。堆積土は2層でS K 1 同様の堆積状況を示し、人為的な堆積と考えられる。堆積土中から陶器片1点(第27図19、写真107)が出土している。堤の小壺の口縁部破片で、19世紀頃の所産と考えられる。

S R 1 (第25図)

B49-50グリッドに位置し、2a層上面でS R 1a、3層上面でS R 1bが検出された。S R 1bがS R 1aを切っている。検出長は6mで方向はN-80°-Wである。S R 1aの規模は上端幅約5m、下端幅2~2.5m、深さ約40cmである。堆積土はS R 1aが9層で、S R 1bが6層である。堆積土中から土師器片、赤焼土器片、須恵器片、陶磁器片が出土している。図示できたのは土師器1点(第27図11、写真107)と磁器1点(第27図18、写真107)である。11は壊で底部の切り離し技法は回転糸切りである。内面はヘラミガキの後黒色処理がなされている。18は肥前の染付け皿で17世紀前～中葉頃の所産と考えられる。

2・3層出土遺物

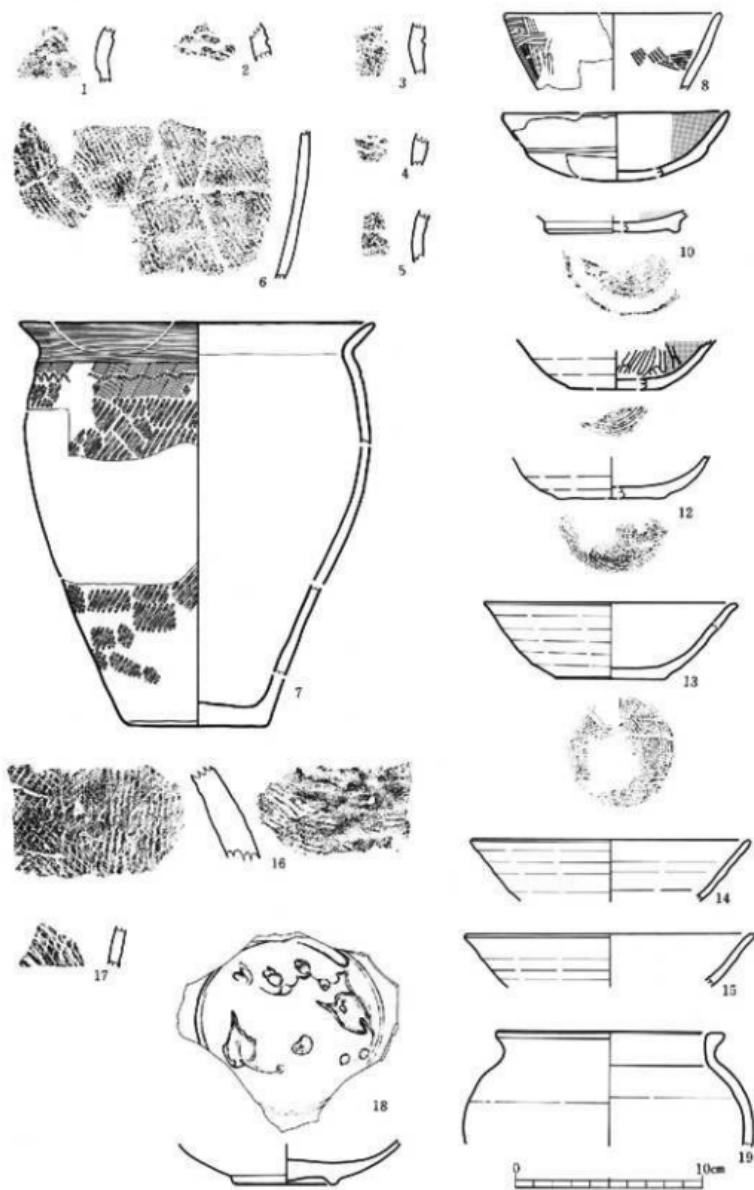
造構外の2・3層からは土師器片1点、須恵器片1点が出土している。図示できたのは須恵器片(第27図16、写真107)である。須恵器壺の体部片で外面には平行叩き目痕、内面には当て具痕とナデの調整が観察される。

(9) その他の出土遺物

1、7・8、12層からは弥生土器片10点、土師器片2点、須恵器片1点、石器1点、木製品1点が出土している。図示できたのは弥生土器5点と土師器2点、石器1点、木製品1点である。なお、弥生土器は10点出土しているがすべて7・8層である。

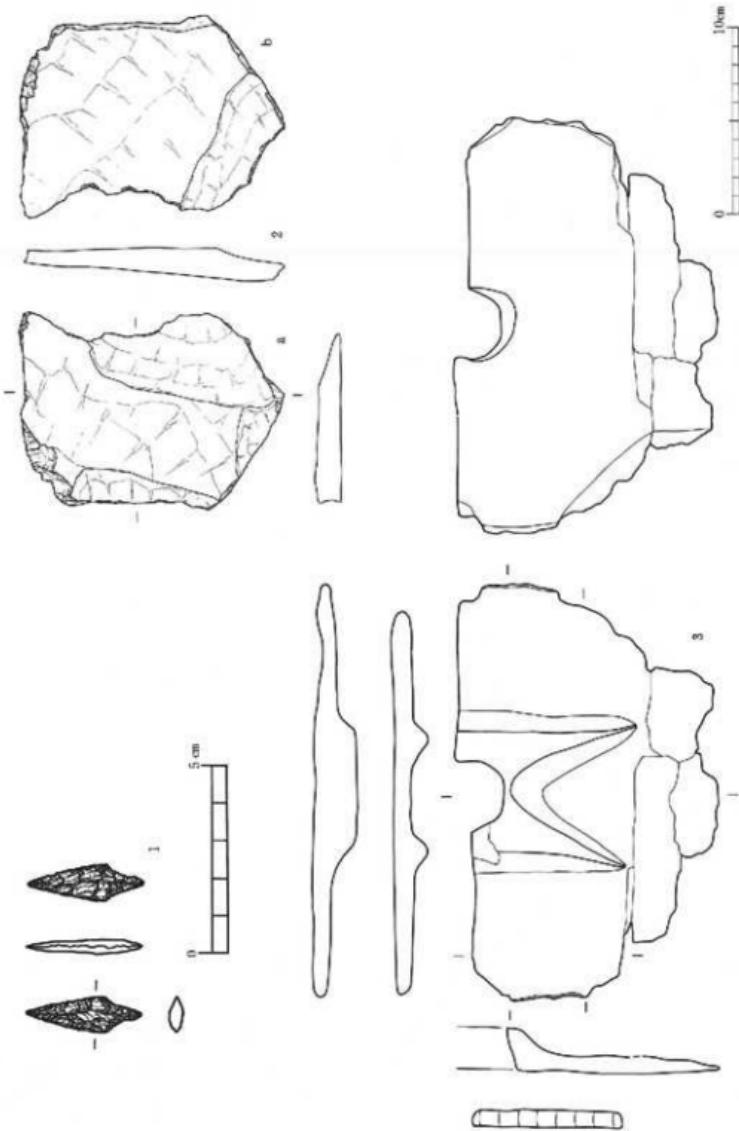
弥生土器(第27図1～3・5、写真107)：B46グリッドの7・8層から出土している。1～4はいずれも細片であるが、やや太めの沈線1～2条で描かれた山形文、下向きの連弧文などが観察される小破片である。2・4には繩文(原体不明)が観察される。1～3はくびれ部を有し、4は壺か甕の肩部と考えられる。5は甕の体部片で斜行するR L 繩文が施文されている。1～4・6の土器は、平行する沈線ではあるが同時施文でなく沈線もやや太いことなどから、十三塙式より後出の天王山式と捉えられる。

木製品(第29図1、写真108)：12層中から出土している。片端の欠損した丸木弓である。弓幹の弯曲が幾分残存している。彎部は両側刃を削り込んでほぞ状に作り出している。彎部付近の片側にのみ加工痕が認められ、他は樹皮を取り除いた程度と考えられる。樹種はイヌガヤであ



第27図 泉崎I区出土遺物 (1)

第26圖 桌崎 I 区出土遺物（2）



る。

土器（第27図8・9、写真107）：8、9ともに7・8層中から出土している。8は壺の口縁部の一部である。製作時にロクロは使用されておらず、調整は内面がハケメ、外面がミガキである。体部は球形になると考へられる。このような壺は塙釜式に比定されるものである。9は壺の口縁部の一部である。製作時にロクロは使用されていない。体部と頸部の境に軽い段があり、口縁部は外反せずむしろ内弯気味に外傾している。器面がいたんでおり調整は不明だが内面は黒色処理が施されている。底部は丸底になると考へられる。このような特徴をもつ壺は、郡山遺跡第43次調査のS D35堆積土1層出土の壺にその類例を求めることが出来る。これらは国分寺下層式の初期段階（共伴する須恵器が7C末～8C初）のものとされている（木村他：1985）。よって9の壺もほぼ同時期に位置づけられよう。

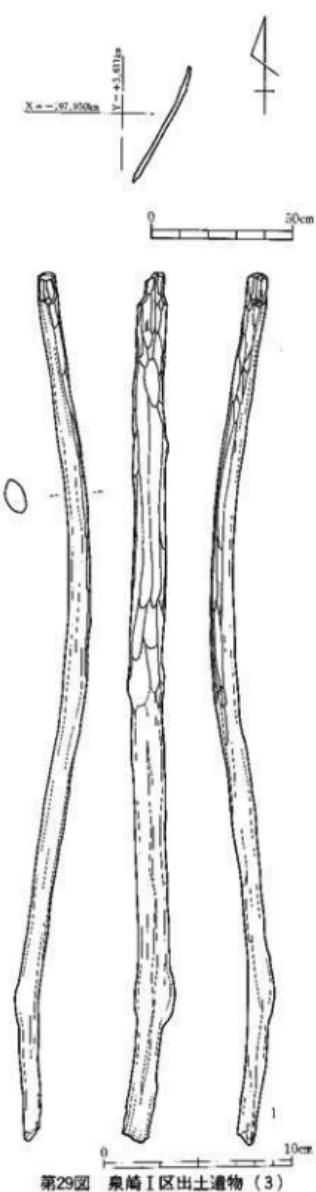
石器（第28図1、写真108）：12層中から出土している。有茎の石鐵である。尖頭部の側縁は直線的で、基部との境は明瞭である。片面に素材面が残存している。基部にアスファルト状の物質が付着している。石材は頁岩である。

（10）小結

検出した遺構は、20層での小河川跡2条（S R 2・3）、11層・5層・4層での水田跡、10層での溝状遺構（S X 1）と杭列、2層・3層での溝4条（S D 1～4）、土坑2基（S K 1・2）、小河川跡1条（S R 1）である。以下に各遺構の時期と性格について簡単にふれておきたい。

①周辺調査区との層の対比

1983年に北東約30mの所で仙台市教委により第8次



第29図 泉崎I区出土遺物（3）

調査（工藤：1984）が行われ、1987年には東方約20mの所で宮城県教委（真山他：1988）により調査が行われている。本調査区との両者との主な層位の対応はその層相などから以下のようなになる。但し、8次調査と県教委の層の対応は後者の報告に基づいている。

| 本調査 | 第8次 | 県教委 |
|------|-----------------------|-----------------------|
| 2a層 | = 2層 | = 2層(近世以降) |
| 2c層 | = 3層(中世水田跡) | = 3層(近世) |
| 3層 | = 4層 | = 4層 |
| 4層 | = 5A層(平安水田跡) | = 5層(平安後半水田跡) |
| 5層 | = 5B層 | = 6層(平安前半水田跡) |
| 7・8層 | = 7B層(弥生中期末～5C中) | |
| 9層 | = 7C層 | = 8層 |
| 10層 | = 7D層 | = 9層 |
| 11層 | = 8B層(弥生時代中期梯形壠式期水田跡) | = 10層(弥生時代中期梯形壠式期水田跡) |
| 12b層 | = 9層 | = 12層 |
| ② | S R 2・3 | |

20層上面で検出されているが、遺構内からも20層からも出土遺物はなく、年代を特定することは不可能である。時期の判明する遺物を出土した最も近い層は11層で、後述するように弥生時代の梯形壠式期に比定されている。よってかなり大まかではあるがS R 2・3の時期は弥生時代梯形壠式期以前となる。1987年の県教委の調査で検出された河川跡IIIはS R 2・3の延長上に位置し、標高も近いことから同一の河川跡である可能性が考えられる。

S R 2・3が埋没し、19層が堆積した時点でもS R 2・3の箇所は窪地になっていたと考えられ、平坦化するのは5層の段階である。11層の水田跡の形成にも多少の影響を与えていたと考えられる。なお、49グリッドにおいても基本層がくぼむ箇所があり、下位にS R 2・3と同様の河川跡の存在が予想される。

③11層水田跡

11層出土の遺物がきわめて少なく、十分な年代決定資料はない。同層出土の遺物で時期の判明するものは甕のみであり、この土器をもって水田跡の年代を考えざるを得ない。この甕はその特徴により弥生時代中期の梯形壠式から十三塚式に比定され、11層水田跡もその時期の所産とされる。一方、第8次調査では、本調査での11層に対応する「8B」層から梯形壠式の甕が出土している。よって、11層水田跡は時期がさらに限定され、梯形壠式期の所産とされよう。

11層水田跡では畦畔1条と非耕作域を検出している。非耕作域の北への広がりは、最小限で調査区の北端部まで、最大限で11層対応の層が確認されている試掘No.3の南端部までである。

数値でいえば17m≤非耕作域（南北）≤37mとなる。東西の広がりは不明である。

この非耕作域の広がりについては第8次調査で検出された水路跡（6号溝）の周辺でどのような土地利用がなされていたかを考える上でのひとつの課題となろう。

④ SX 1

10層で検出されているが、10層および堆積土層から年代決定資料が出土していないので、上下の層の年代でもってある程度の時間幅をもった限定をせざるを得ない。まず下位では11層が弥生時代の楕円形甌期である。次に上位では堆積土を覆う9層より上層の7・8層から弥生土器（天王山式）、土師器（塙釜式、7C末～8C初）が出土している。7・8層の形成年代は、これも年代決定資料に乏しくかなり大まかになるが、弥生時代後期から8世紀初め頃と考えたい。したがってSX 1の時期はかなりの時間幅になるが弥生時代中期から8世紀初め頃と捉えられる。

また、杭列と横鍬についてはSX 1の堆積土1層で検出されていることから、その時期は前述した時間幅のなかでも7・8層の形成時期に近い頃と考えられる。

SX 1の性格については溝跡の可能性が考えられるが、遺構の一部の検出なのでその可能性の指摘にとどめたい。第8次調査で検出された5号溝跡が形態上類似しており、同様のものが想定されるかもしれない。ただし、5号溝跡の検出面が、本調査での7・8層に対応する「7B」層であるという相違点が存在する。

杭列の性格については、SX 1が溝（水路）として機能していた場合は水流の調節や分水などのための施設、そうでない場合には堆積土1層に近い時期の畦畔あるいはそれに類した施設の補強材が考えられるという可能性を指摘するにとどめたい。

以上のSX 1、杭列、横鍬に関しては、今後の周辺での調査成果をもとに再検討される必要があろう。

⑤ 5層水田跡

5層から年代決定資料が出土していないので、5層上部や畦畔の上面に存在する灰白色火山灰をもって年代を限定せざるを得ない。この灰白色火山灰は10世紀前半に降下したと考えられている（白鳥：1980）。したがって5層水田跡は灰白色火山灰降下以前の平安時代の所産と考えられる。

県教委調査区には、本調査での5層に対応する6層の水田跡で、条里型土地割の坪境の大畦畔と考えられる（平間：1988）畦畔が存在する（第30図）。本調査区においてもその畦畔に直交ないし平行する畦畔が存在し、条里型の区画が行われたことが想定される。しかしながら、真北方向の基準からはずれた畦畔で区画される場合もあり（区画a～d）、微地形的な制約には、それに応じた区画が行われたようである。

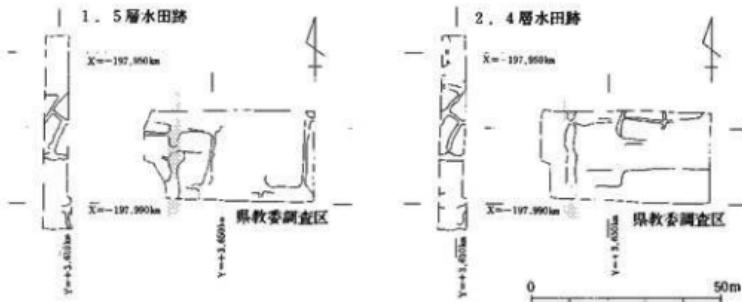
⑥ 4層水田跡

4層から平安時代の表杉ノ入式の土師器が出土していること、それ以降の遺物が出土していないこと、下位の5層上面・上部に灰白色火山灰が存在することなどから、4層水田跡は灰白色火山灰降下以後の平安時代の所産と考えられる。

5層水田で真北方向からずれていた畦畔は4層においても畦畔として踏襲されている。また、県教委調査区においても5層の水田跡で坪境の大畦畔が踏襲されており(第30図)、下層同様条里型土地割が継続していたと考えられる。しかし、本調査区では前述したように斜めの畦畔が継続していることから、灰白色火山灰降下後における微地形の変化はこの地点ではあまりなかったことが想定される。

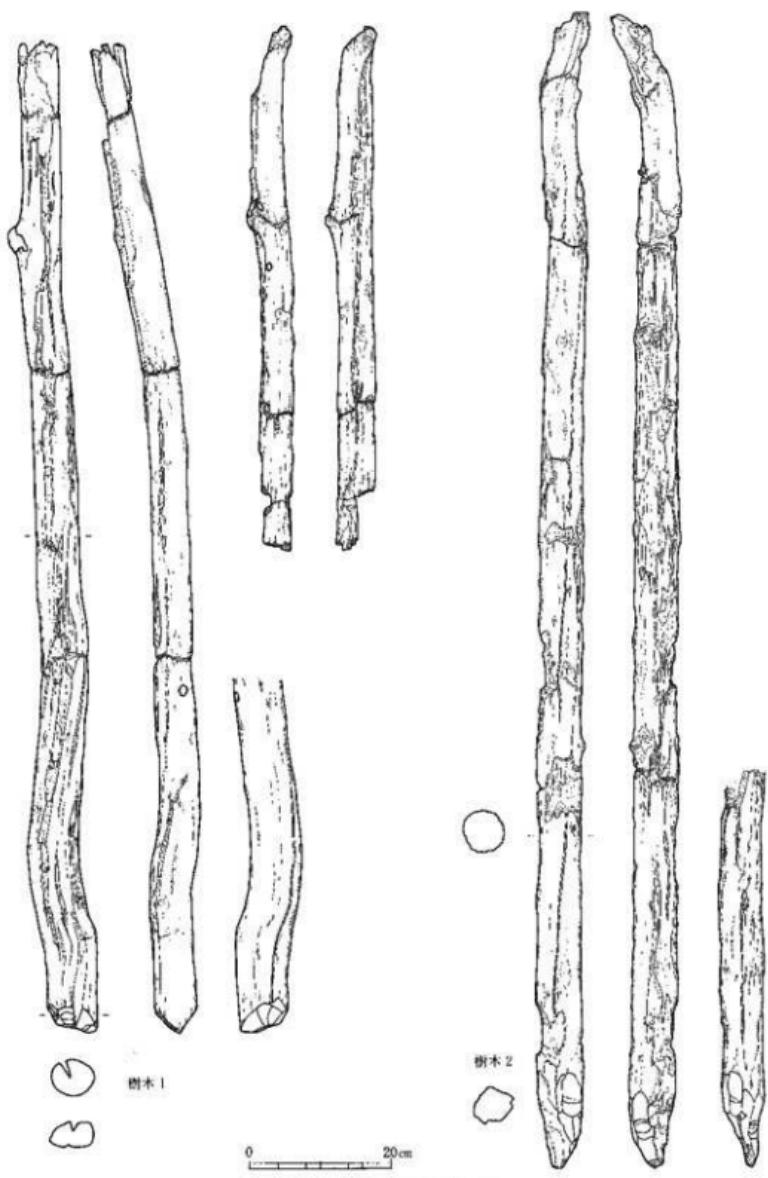
⑦ 2層・3層

2層・3層からは年代決定に有効な遺物が検出されておらず、上下の層から大まかに平安時代以降としか捉えられない。しかし、第8次調査や県教委の調査成果と対応させると、おおむね3層は平安時代後半～中世、2c層が中世～近世、2a層が近世以降と考えられるようである。したがってSD4は平安時代以降～近世頃、SD2・3は平安時代以降、SD1は中世以降、SD1bは平安時代以降から近世頃、SK1、2、SR1aは近世以降の時期となる可能性が高い。ただし、確実とは言い難く平安時代(灰白色火山灰降下後)以降の各層の年代については、今後の課題といえよう。

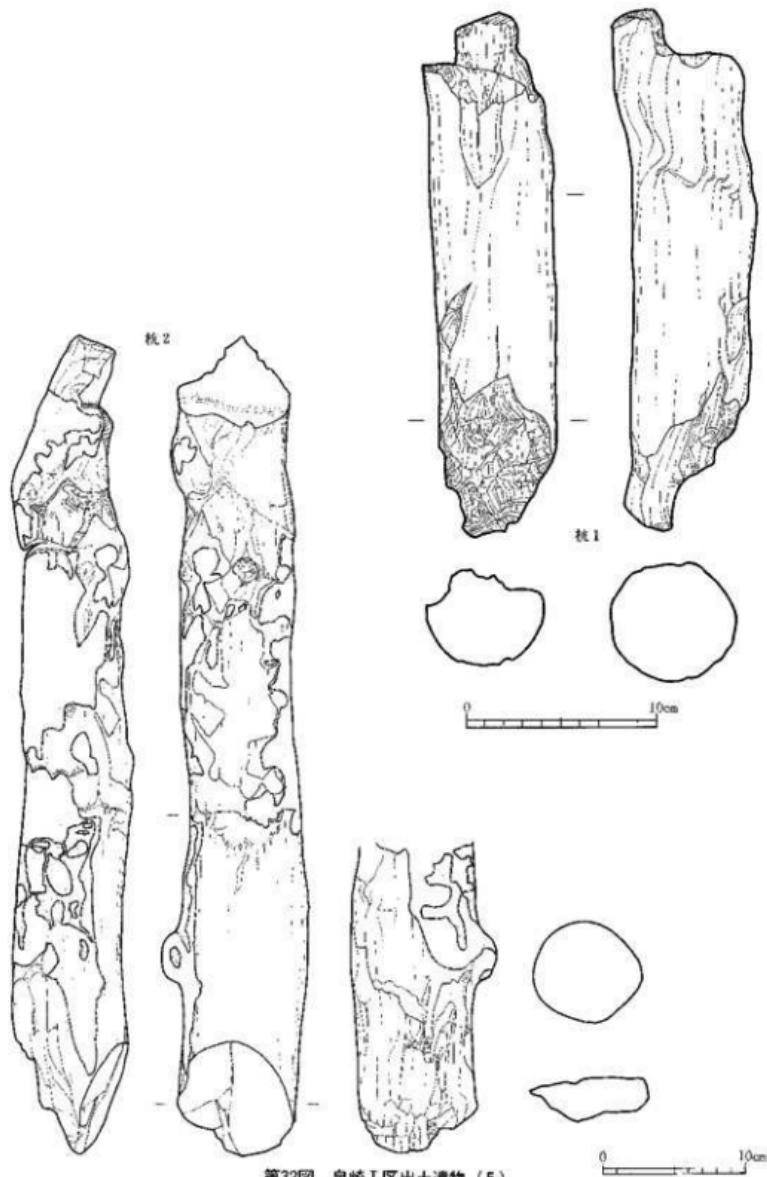


第30図 泉崎I区・県教委調査区遺構対比図

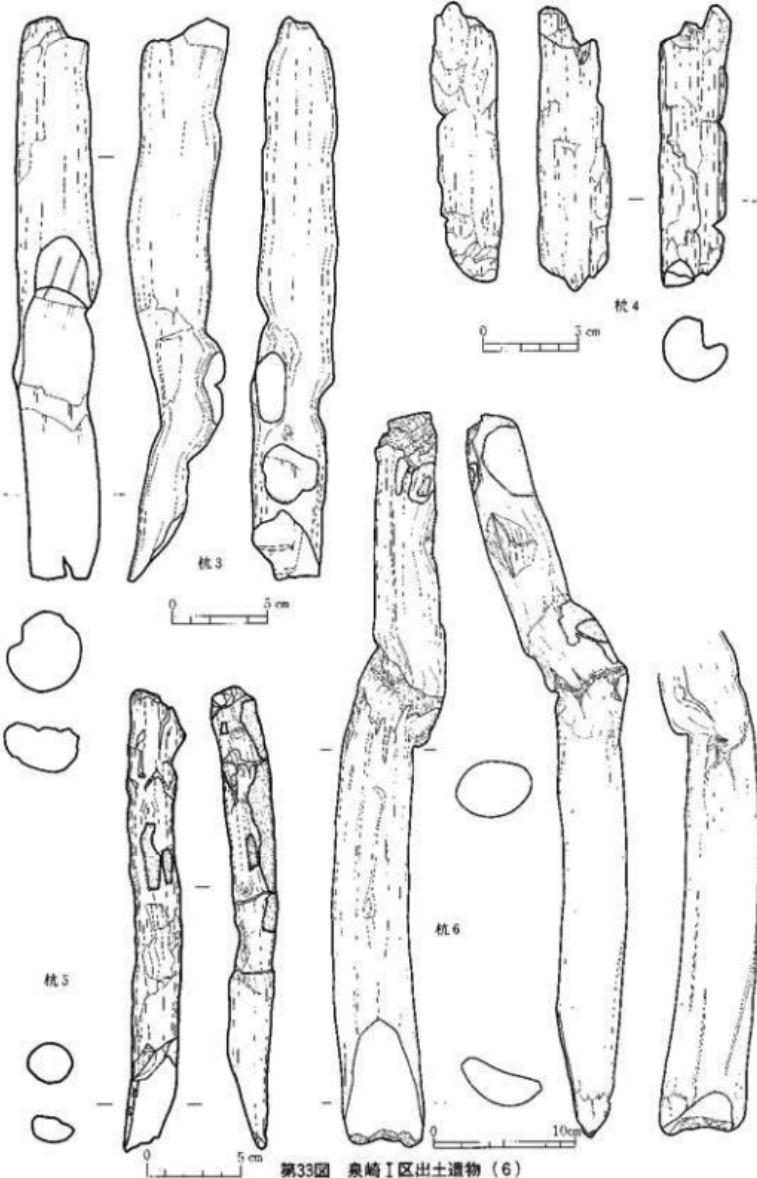
(県教委調査区遺構図は青山他1988に一部加筆)



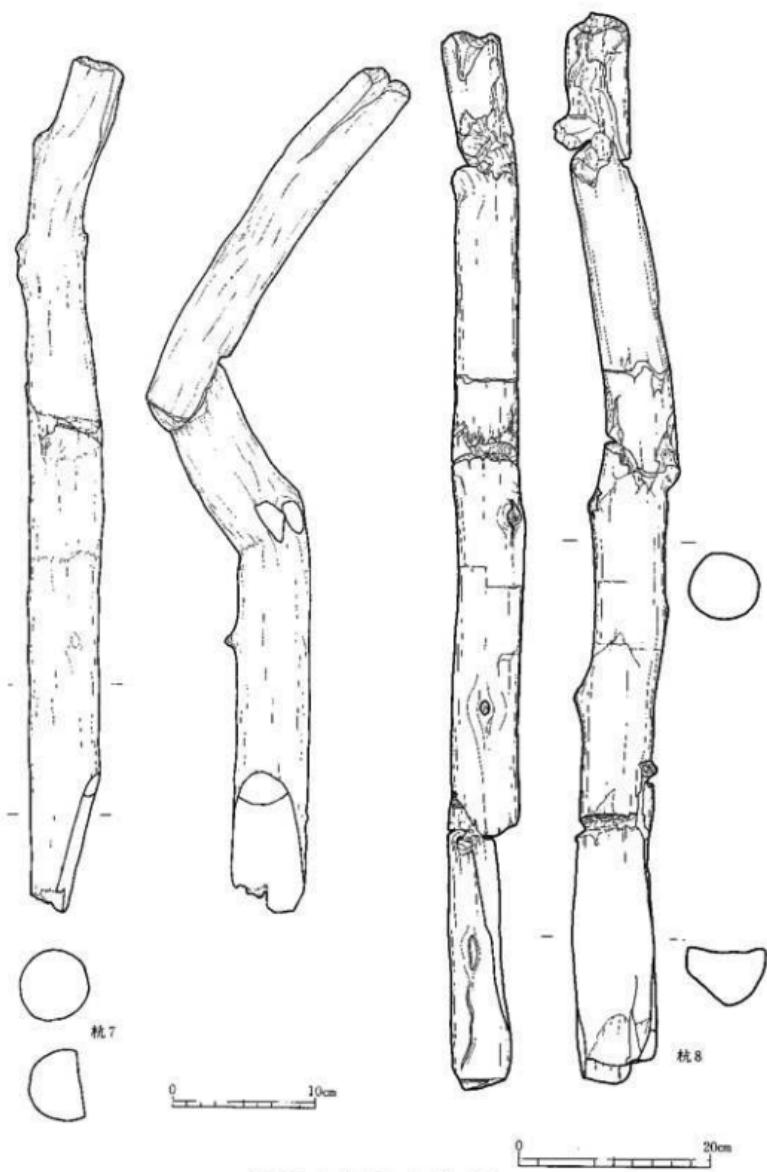
第31図 泉崎I区出土遺物 (4)



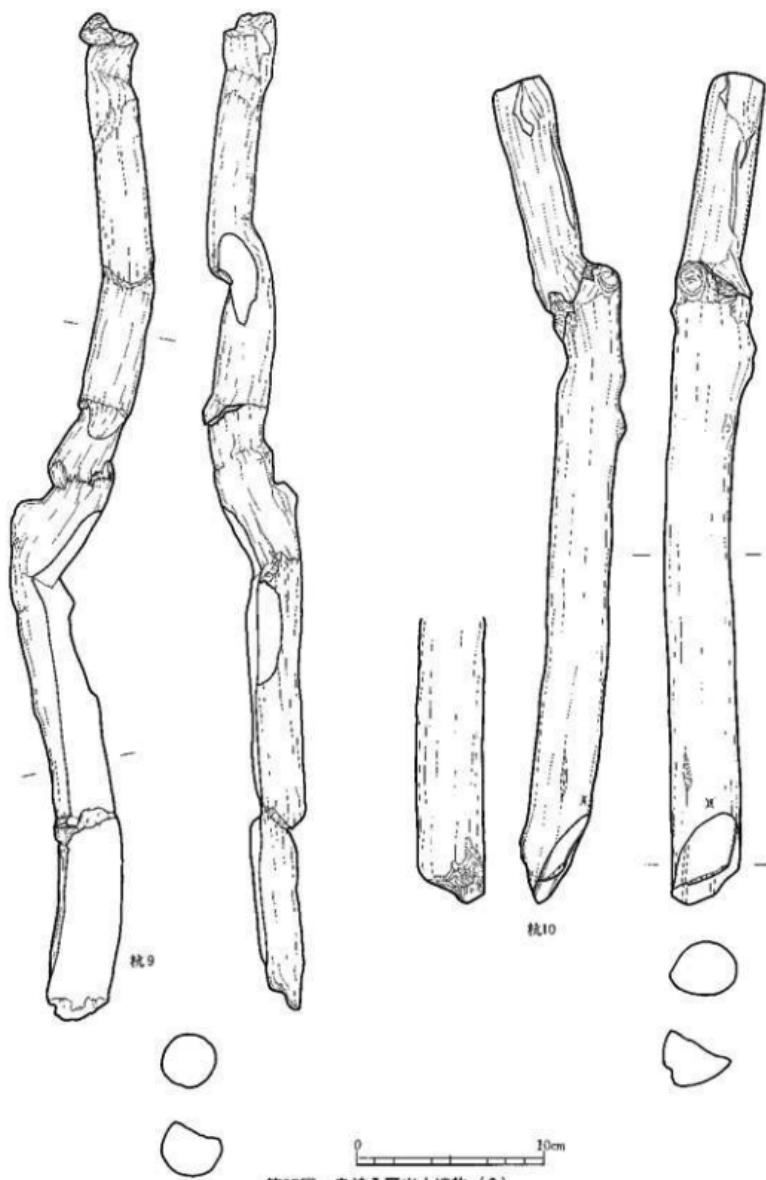
第32図 泉崎Ⅰ区出土遺物（5）



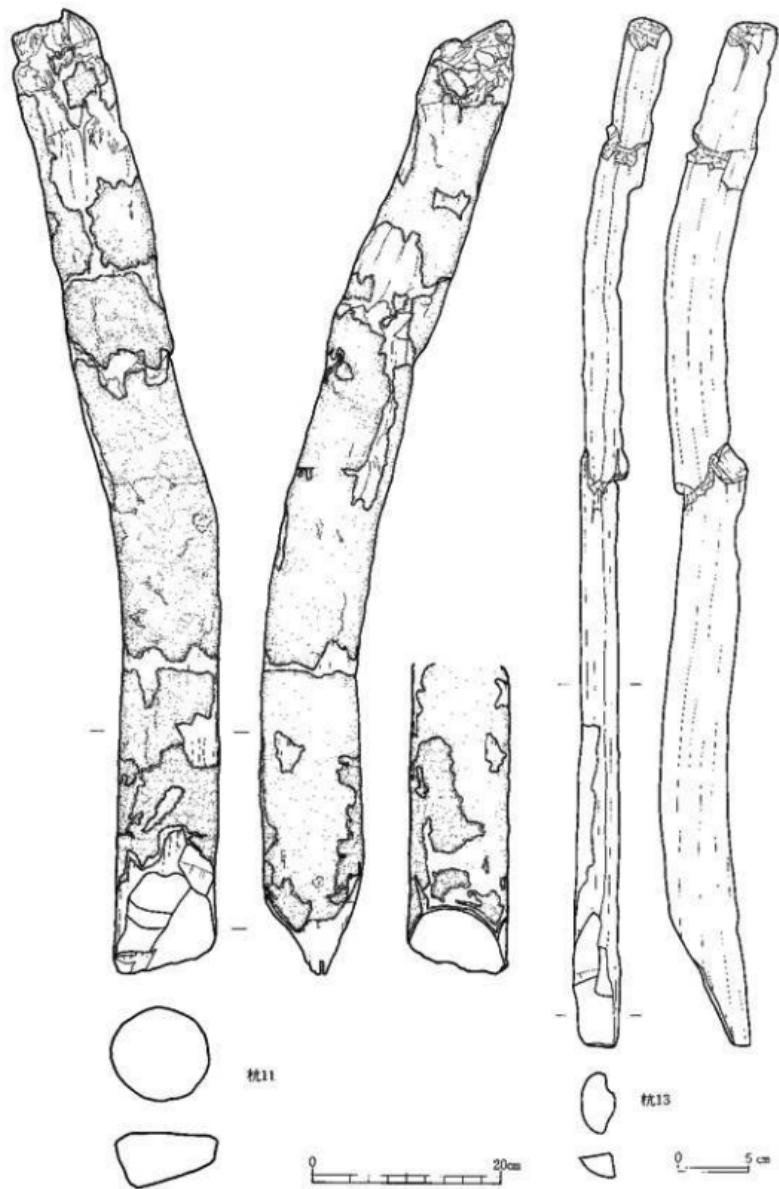
第33図 墓崎Ⅰ区出土遺物（6）



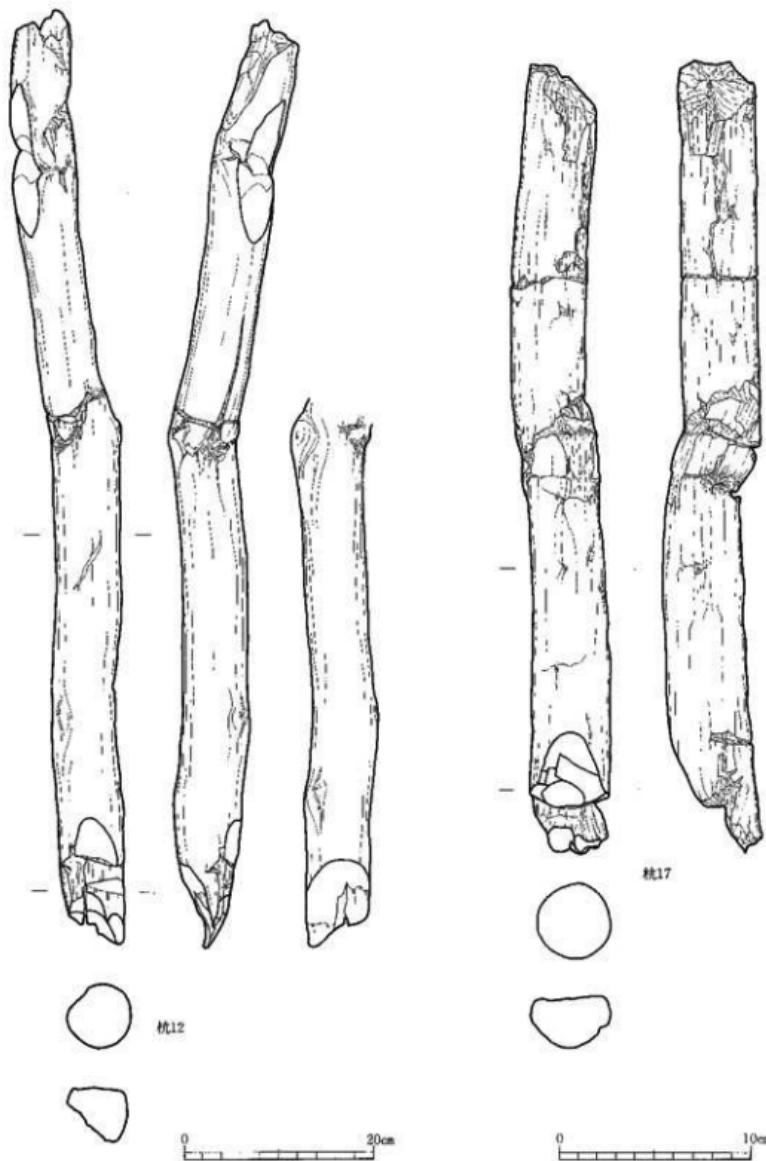
第34図　泉崎I区出土遺物（7）



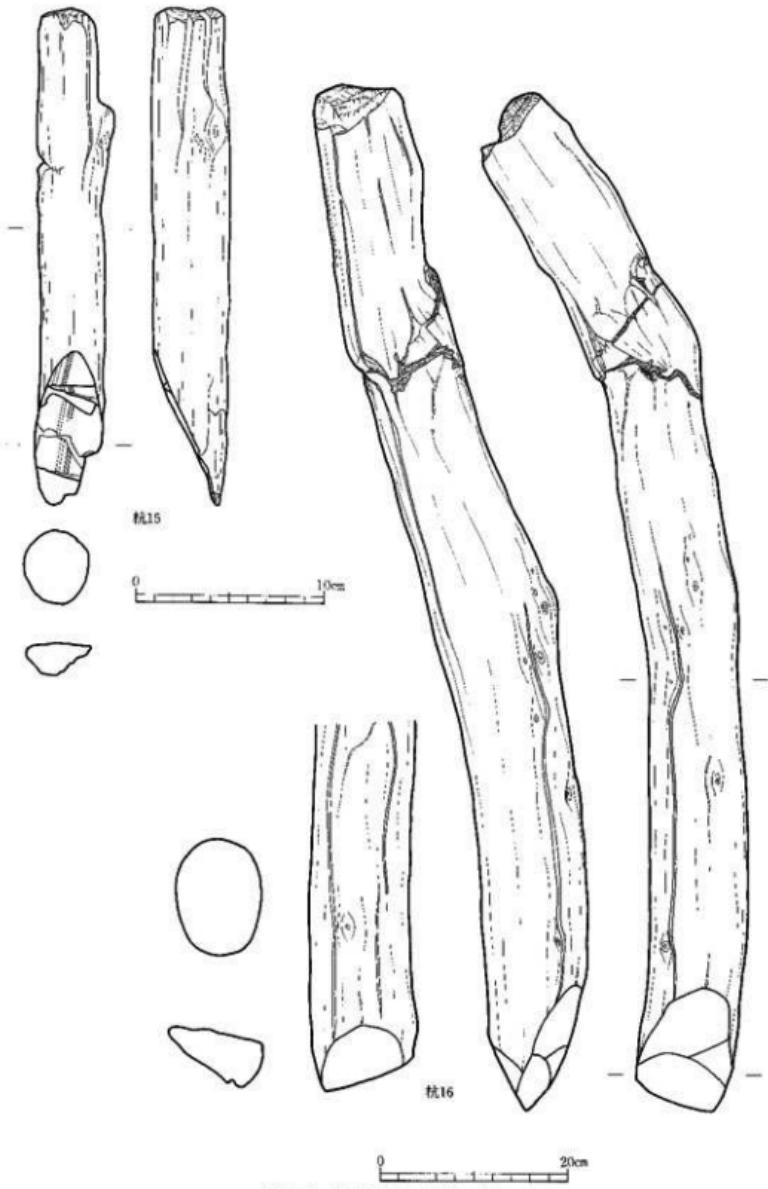
第35図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (8)



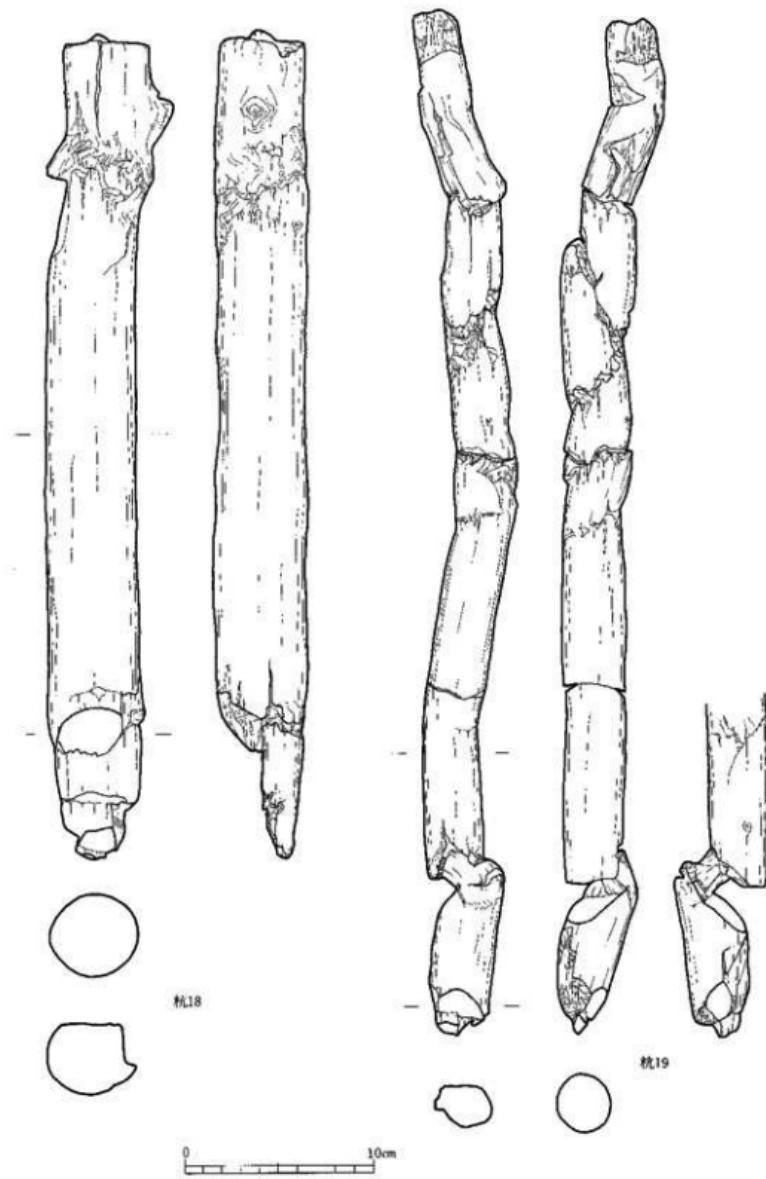
第36図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (9)



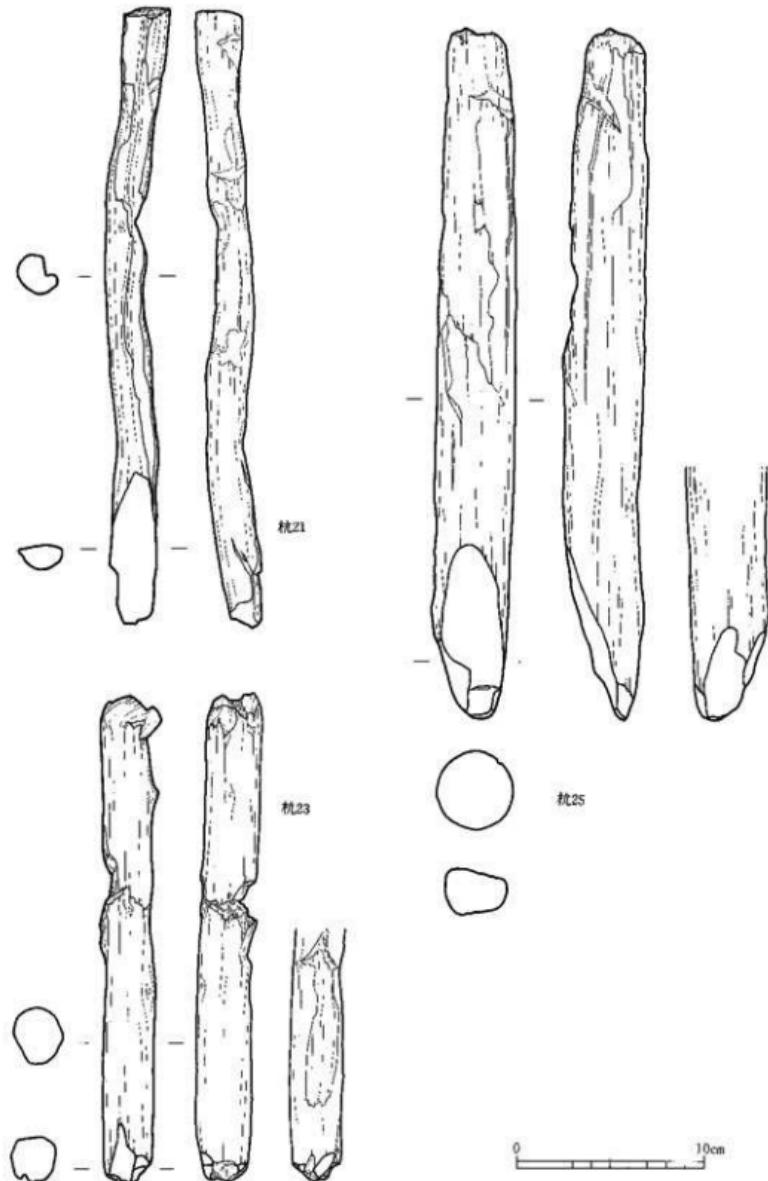
第37図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (10)



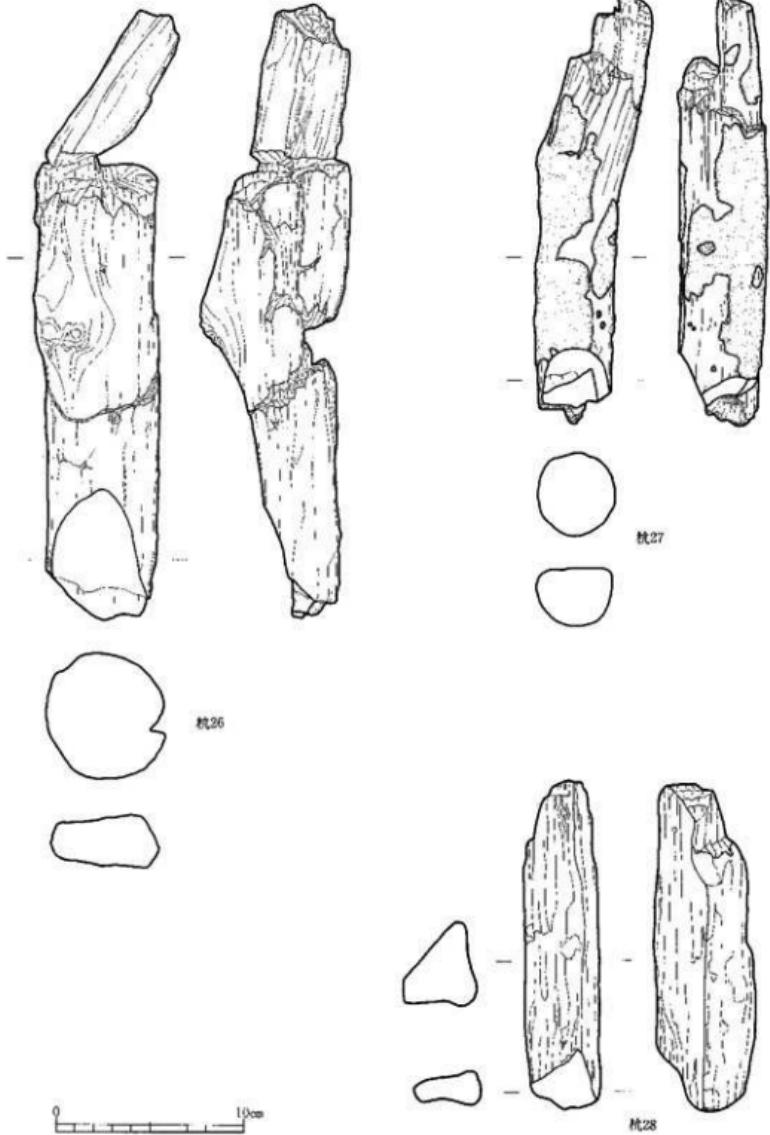
第38図 泉崎I区出土遺物 (11)



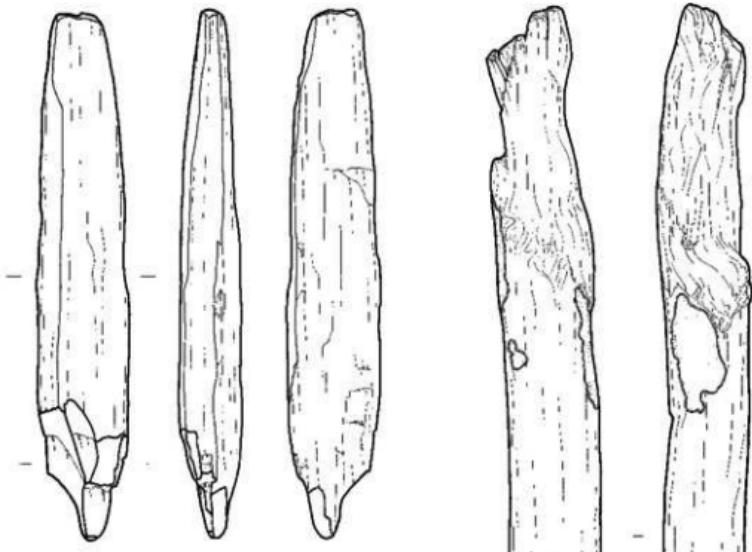
第39図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (12)



第40図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (13)

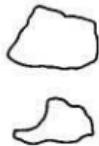


第41図 泉崎I区出土遺物 (14)



桩29

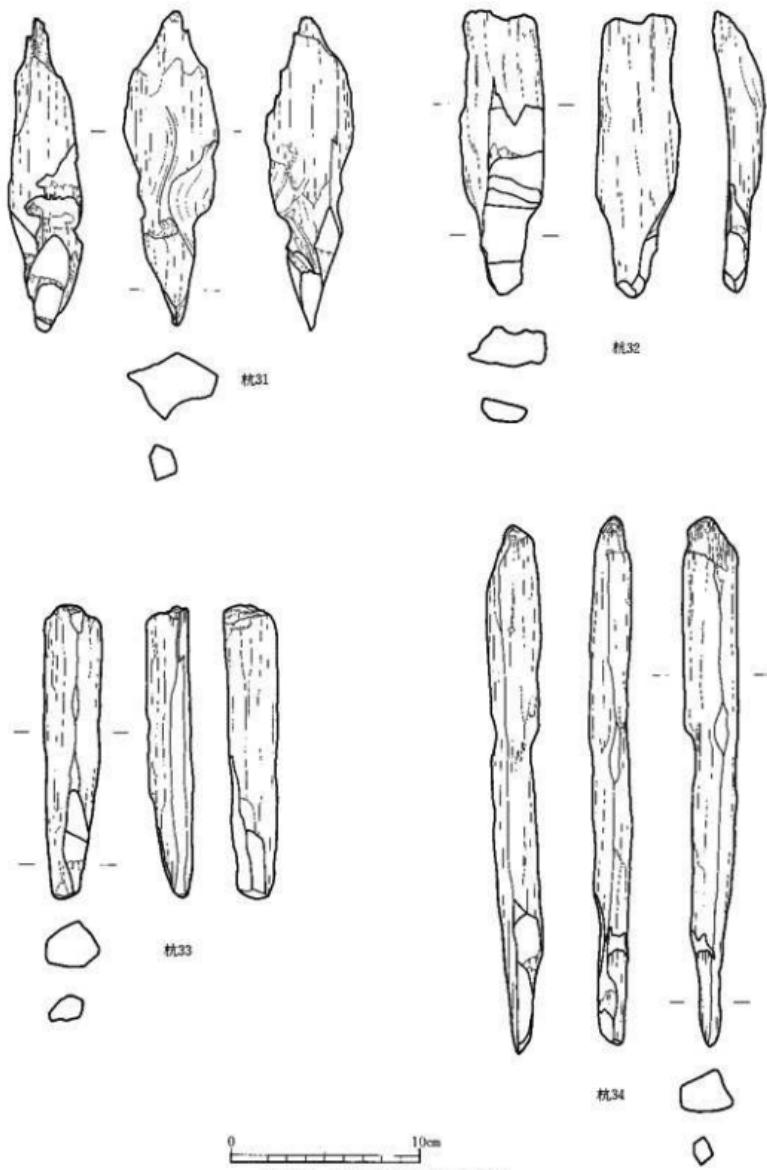
0 10cm



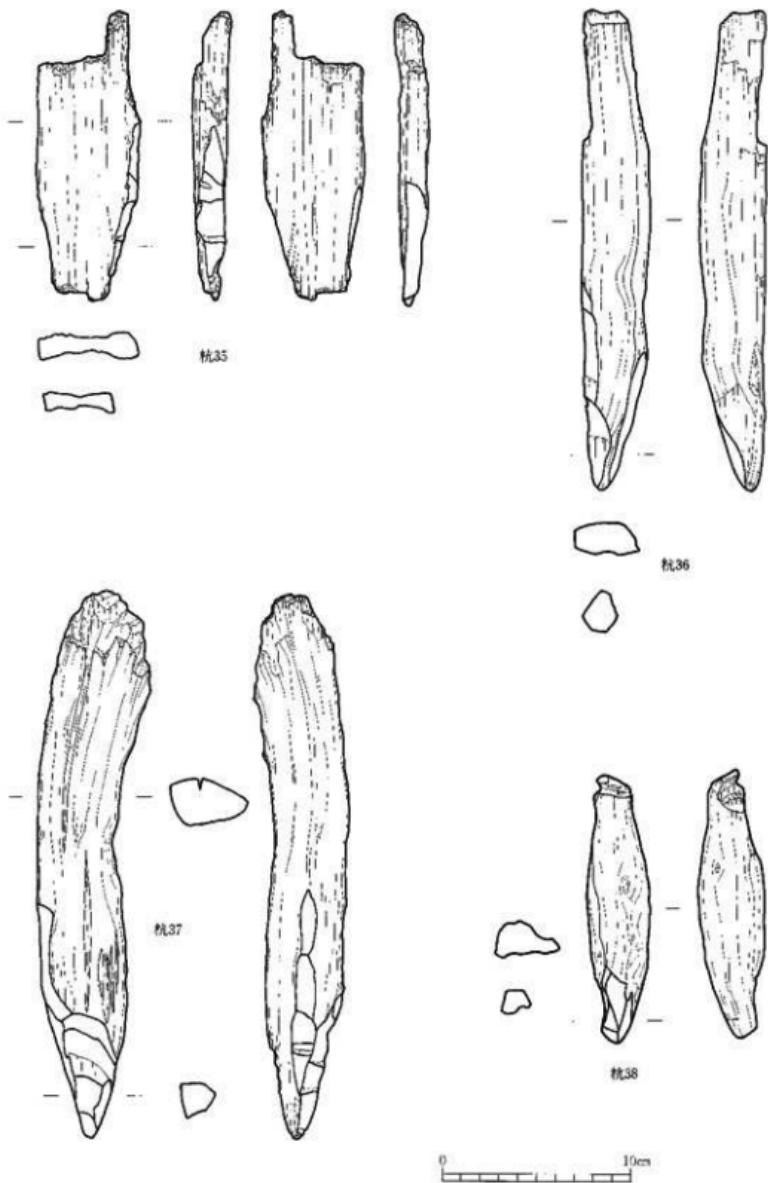
桧30

0 20cm

第42図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (15)



第43図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (16)



第44図 泉崎Ⅰ区出土遺物 (17)

第10表 泉崎1区遺物観察表(1)

| 遺物番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 種 | 形 | 大きさ | 厚さcm | 幅cm | 高さcm | 特 | 記 | 年次番号 | |
|-------|------|-----------|-----|---|-------|------|-----|------|--------------------------|------------------------|------|-----|
| 27-1 | B-2 | B45. 7-8層 | 陶土片 | - | 赤褐色 | 小片 | | | 泥質火(山形X) | | 107 | |
| 27-2 | B-6 | B45. 7-8層 | 陶土片 | - | 赤褐色 | 小片 | | | 泥質火(通型火2種) | | 107 | |
| 27-3 | B-4 | B45. 7-8層 | 陶土片 | - | 赤褐色 | 小片 | | | 泥質火(2種) | | 107 | |
| 27-4 | B-7 | B45. 5層 | 陶土片 | - | 赤褐色 | 小片 | | | 泥質火 | | 107 | |
| 27-5 | B-5 | B45. 7-8層 | 陶土片 | - | 赤褐色 | 小片 | | | 泥質火 | | 107 | |
| 27-6 | B-10 | B45. 7-8層 | 陶土片 | - | 赤褐色 | 片 | | | 泥質火 | | 107 | |
| 27-7 | B-1 | 13層水田跡 | 陶土片 | 圓 | 口縁一端區 | 16.8 | 7.6 | 21.9 | 山形器コナゲ、外板上端ハメ一枚火文、外側ヒア羅文 | | 107 | |
| 27-8 | C-1 | B45. 7-8層 | 土 | 板 | 陶 | 板 | 1/6 | 11.6 | | ロクハ不規則、表面ハメハラミガタ、内面ハラメ | | 107 |
| 27-9 | C-2 | B45. 7-8層 | 土 | 板 | 陶 | 板 | 1/4 | 12.0 | (3.2) ロクハ不規則、表面不均、内面黑色火文 | | 107 | |
| 27-10 | D-2 | 1層水田跡 | 土 | 板 | 陶 | 板 | 1/3 | 7.2 | ロクハ、内板火候強調、内面ヘラミガタ後鼻炎 | | 107 | |
| 27-11 | D-16 | S-1 | 土 | 板 | 陶 | 板 | 1/3 | 5.0 | ロクハ、内板火候強調、内面ヘラミガタ後鼻炎 | | 107 | |
| 27-12 | D-13 | 4層水田跡 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/2 | 5.9 | ロクハ、内板火候強調 | | 107 | |
| 27-13 | D-1 | 4層水田跡 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/2 | 13.4 | 5.9 | ロクハ、内板火候強調、内面ヘラミガタ後鼻炎 | | 107 |
| 27-14 | D-5 | 1層水田跡 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/6 | 15.0 | ロクハ | | 107 | |
| 27-15 | B-7 | 4層水田跡 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/6 | 14.0 | ロクハ | | 107 | |
| 27-16 | E-1 | C18. 3層 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/6 | 14.0 | 外板火候強調、内面凹凸具目→ナギ | | 107 | |
| 27-17 | E-3 | S-13. 3層 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/6 | 14.0 | 外板火候強調、内面凹凸具目→ナギ | | 107 | |
| 27-18 | J-1 | S-1 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/6 | 14.0 | 外板火候強調、内面凹凸具目→ナギ | | 107 | |
| 27-19 | L-1 | S-12 | 陶土片 | 板 | 陶 | 板 | 1/6 | 14.0 | 外板火候強調、内面凹凸具目→ナギ | | 107 | |

石器

| 同様番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 種 | 系 | 大きさcm | 幅cm | 厚cm | 厚cm | 備 | 考 | 年次番号 |
|------|------|----------|-----------|---|-------|-------|------|-------|----------------|---|------|
| 28-1 | K-2 | B47. 12層 | 石 | 拳 | 30.2 | 10.1 | 4.2 | 0.9 | 基盤にアスファルト状物質付着 | | 108 |
| 28-2 | K-1 | 1層水田跡 | 大型板状安山岩板石 | 拳 | 139.4 | 103.3 | 27.5 | 209.4 | | | 108 |

木製品

| 同様番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 種別 | 大きさ | 幅cm | 高cm | 厚cm | 幅cm | 備 | 考 | 年次番号 |
|-------|------|----------|----|------|-----|-------|------|-------|-----------------------------------|---|------|
| 28-3 | I-1 | S-1 | 焼物 | 瓦 | 丸太材 | 12.9 | 22.1 | 0.6~1 | 焼成度2.3cm、剥離4.1cm、角度10°、傾斜、クヌギ歯力一組 | | 108 |
| 28-21 | L-2 | B45. 12層 | 瓦 | 片端火痕 | 丸太材 | 1~1.8 | | | 頭部に赤銹に附着、イヌダギ | | 108 |

竹

| 番 | 竹No | 遺物・部位 | 形 | 大きさcm | 幅cm | 高cm | 厚cm | 幅cm | 備 | 名 | 寸高cm |
|----|------|-------|-----|-------|------|-----|-----|-------|----|---|------|
| 31 | 櫛木1 | SX-1 | 丸太材 | 215.6 | 8.2 | | ○ | カエデの櫛 | 26 | | 109 |
| 31 | 櫛木2 | SX-1 | 丸太材 | 164.0 | 5.8 | | ○ | ニワトコ | 26 | | 109 |
| 32 | 竹 1 | SX-1 | 丸太材 | 20.8 | 6.6 | | × | | | | |
| 32 | 竹 2 | SX-1 | 丸太材 | 38.1 | 7.6 | | ○ | | | | |
| 33 | 竹 3 | SX-1 | 丸太材 | 20.0 | 3.9 | | ○ | | | | |
| 33 | 竹 4 | SX-1 | 丸太材 | 14.8 | 3.2 | | ○ | | | | |
| 33 | 竹 5 | SX-1 | 丸太材 | 21.6 | 2.1 | | ○ | | | | |
| 33 | 竹 6 | SX-1 | 丸太材 | 52.0 | 3.4 | | ○ | メルニア | 26 | | 109 |
| 34 | 竹 7 | SX-1 | 丸太材 | 68.7 | 5.0 | | ○ | | | | |
| 34 | 竹 8 | SX-1 | 丸太材 | 56.3 | 3.8 | | ○ | ヤマグサ | 26 | | |
| 35 | 竹 9 | SX-1 | 丸太材 | 53.5 | 2.9 | | ○ | ブルグ | 26 | | 109 |
| 35 | 竹 10 | SX-1 | 丸太材 | 44.5 | 3.5 | | ○ | | | | |
| 36 | 竹 11 | SX-1 | 丸太材 | 162.8 | 16.0 | | ○ | モククの櫛 | 26 | | |
| 37 | 竹 12 | SX-1 | 丸太材 | 99.4 | 6.8 | | ○ | シラキ | 26 | | 109 |
| 38 | 竹 13 | SX-1 | 分割材 | 23.0 | 4.3 | 2.4 | ○ | ニガチ | 26 | | |
| 39 | 竹 14 | SX-1 | 丸太材 | 26.6 | 4.0 | | ○ | | | | |
| 39 | 竹 15 | SX-1 | 丸太材 | 107.1 | 12.0 | | ○ | サンバシ | 26 | | 109 |

杭(続)

第11表 泉崎1区遺物観察表(2)

| ID | 測定 | 遺物・部位 | 素 材 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 文様記号 | 備 考 | 写真番号 |
|----|------|-------|-----|-------|------|------|-------------|-----|------|
| 37 | 杭 17 | SX-1 | 丸太材 | 42.3 | 3.9 | | ○ ヤクザ属の一種 頭 | | 169 |
| 39 | 杭 18 | SX-1 | 丸太材 | 41.0 | 4.7 | | ○ ヤナギ属の一種 頭 | | 168 |
| 39 | 杭 19 | SX-1 | 丸太材 | 34.5 | 3.2 | | ○ | | |
| 40 | 杭 21 | SX-1 | 丸太材 | 31.7 | 2.1 | | ○ | | |
| 40 | 杭 23 | SX-1 | 丸太材 | 26.0 | 3.0 | | ○ | | |
| 40 | 杭 25 | SX-1 | 丸太材 | 27.6 | 1.0 | | ○ | | |
| 41 | 杭 26 | SX-1 | 丸太材 | 32.6 | 6.3 | | ○ | | |
| 41 | 杭 27 | SX-1 | 丸太材 | 23.9 | 4.2 | | ○ | | |
| 41 | 杭 28 | SX-1 | 分割材 | 17.5 | 5.2 | 3.5 | ○ | | |
| 42 | 杭 29 | SX-1 | 分割材 | 28.2 | 4.8 | 3.2 | ○ | | |
| 42 | 杭 30 | NX-1 | 丸太材 | 123.0 | 9.6 | | ○ | | |
| 43 | 杭 31 | SD-2 | 分割材 | 16.7 | 4.7 | 3.5 | ○ | | |
| 43 | 杭 32 | SD-2 | 分割材 | 15.2 | 4.1 | 2.0 | ○ オナラ属の一種 頭 | | |
| 43 | 杭 33 | SD-2 | 丸太材 | 15.7 | 2.6 | | ○ オクタ属の一種 頭 | | |
| 43 | 杭 34 | SD-2 | 分割材 | 26.3 | 2.8 | 2.2 | ○ カユダ属の一種 頭 | | |
| 44 | 杭 35 | SD-2 | 分割材 | 15.3 | 3.3 | 1.4 | ○ | | |
| 44 | 杭 36 | SD-2 | 分割材 | 23.6 | 3.5 | 1.7 | ○ | | |
| 44 | 杭 37 | SD-2 | 丸太材 | 29.2 | 4.1 | | ○ | | |
| 44 | 杭 38 | SD-2 | 分割材 | 14.3 | 3.6 | 1.6 | ○ | | |

3. 泉崎II区

(1) 調査区の位置

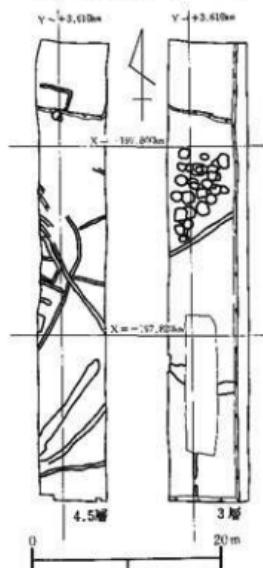
調査地点は、金洗沢が形成した微高地（II-1参照）の東端部の南側で、微高地から低地にかけての部分に位置する。区画整理以前は畑地と水田で南東へ緩い傾斜があり、その標高は11.33～10.66mであった。

(2) 基本層序

確認された基本層序は大別で8層、細別で12層である。層序を大まかにみると1層が旧耕作土、2・3・4層がシルト層、5・6層が粘土・シルト・砂の互層、7・8層が泥炭質粘土層である。今回8層以下についての調査は実施しなかったが、1987年に西方約37mの地点で行われた泉崎浦遺跡第3次調査（主浜：1988）によれば、泥炭質粘土層は標高8.0～8.5mまで続き、それより下位が粘土・砂のグライ化層になる。疊層は地下鉄工事の際のボーリング調査結果から標高約5.5mと推定される。

1層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト。旧耕作土。

2層：明黄褐色（2.5Y6/6）シルト。鉄分の集積層。



3a層：にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト。うすい酸化鉄斑を全体的に含む。層厚は5cm前後で20グリッド以南に分布する。

3b層：灰黄褐色（10YR4/2）シルトと黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトがつづれ状に混じる層。層厚は3～15cmで21グリッド以南に分布する。

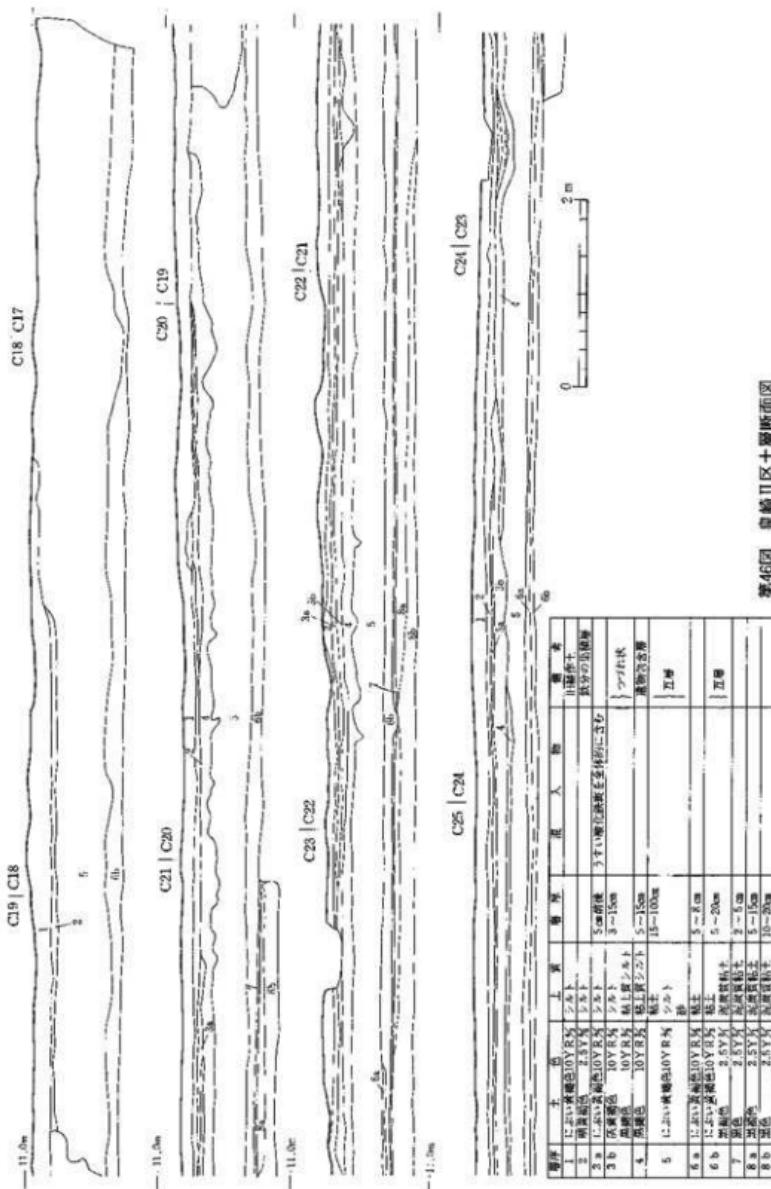
4層：黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト。層厚は5～15cmで、19グリッド以南に分布し、20～22グリッドに比較的厚く、南側に行くに従い漸く堆積している。遺物包含層である。

5層：にぶい黄褐色（10YR5/3）系の粘土・シルト・砂からなる互層。層厚は15～100cmで北側に行くに従い厚く堆積している。

6a層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土。層厚は5～8cmで23グリッド以南に分布している。

6b層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粘土と黒褐色（2.5Y3/1）泥炭質粘土との互層。層厚は5～20cmで全域に分布し、北側に行くにしたがい、厚くなるとともに砂層に変化する。

第45図 泉崎II区遺構配置図



第46図 泉崎Ⅱ区土壤断面図

- 7層：黒色（2.5Y2/1）泥炭質粘土。層厚は2～5cmと薄い層ではほぼ全域に分布する
- 8a層：黒褐色（2.5Y3/1）泥炭質粘土。層厚は5～15cmである。20グリッド以北は掘り下げていないので未確認だが、ほぼ全域に分布すると思われる。
- 8b層：黒色（2.5Y2/1）泥炭質粘土。層厚は10～20cmである。8a層同様、20グリッド以北は掘り下げていないので未確認だが、ほぼ全域に分布すると思われる。

(3) 4・5層検出遺構と遺物

① 遺構

4層上面で溝跡4条、5層上面で溝跡7条、5層上面に対応する河川堆積土上面で住居跡1軒、土坑2基、遺物包含層が検出されている。

S I 1（第47・48図、写真24・25）

[位置・確認面] A B 18グリッドに位置する。表土直下の、5層上面に対応する河川堆積土上面で検出した。

[重複] 直接遺構との重複関係はない。S I 1の南側で検出されたSK 4・5は、位置関係からS I 1と重複する可能性があるが不明である。

[平面形・規模] 西側は調査区外へ延び、南側は耕作により破壊されている。住居跡の北東部分が検出されただけで全体は不明であるが、平面形は方形と考えられる。北辺4m、東辺2.2mを検出した。

[堆積土] 堆積土は薄く5～10cmほどであるが7層に分層された。

[床面] 床面はほぼ平坦であるがやや南へ傾斜をもっている。全体に掘り方が認められる。掘り方埋土の厚さは5cmほどで、灰黄褐色（10YR6/2）からにぶい黄橙色（10YR6/4）のシルトである。

[壁] 壁は床面から周溝を経て若干立ち上がるが残存状況よくない。

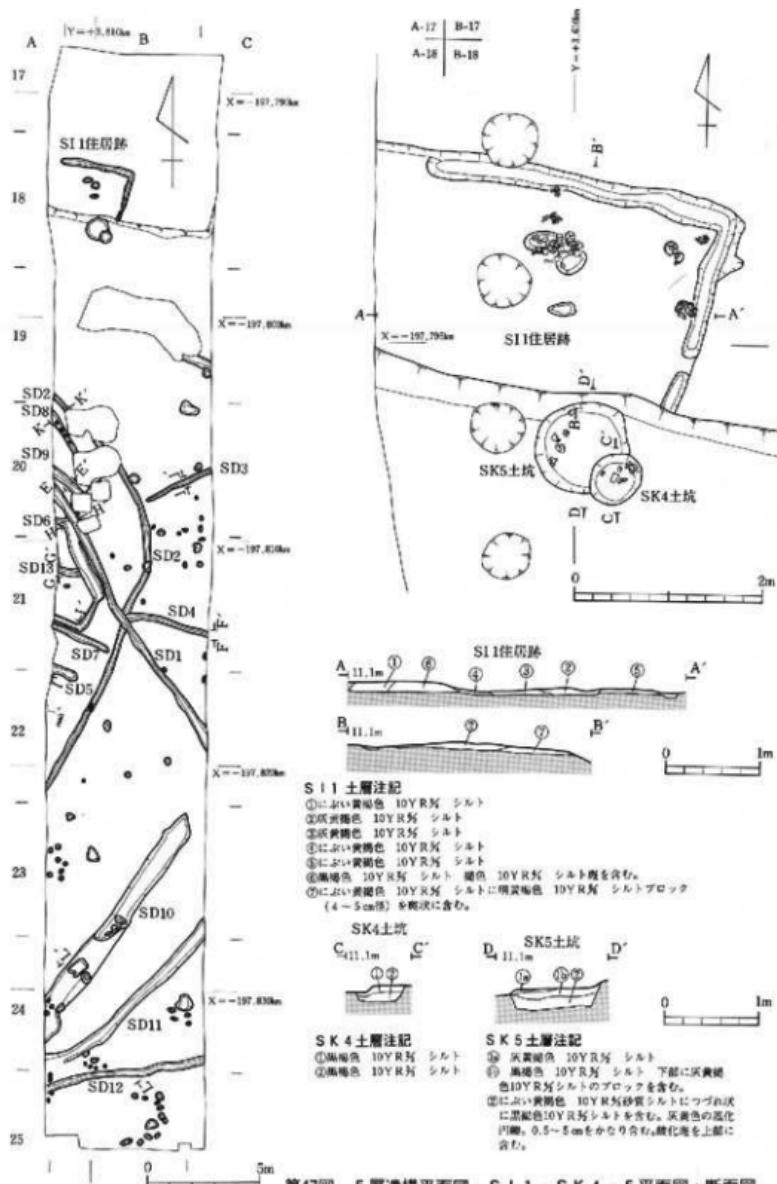
[柱穴] 柱穴と考えられるものは検出されていない。

[周溝] 東・北限際に幅15～30cm、深さ3～5cmの周溝が南北2.3m、東西3.5m確認された。

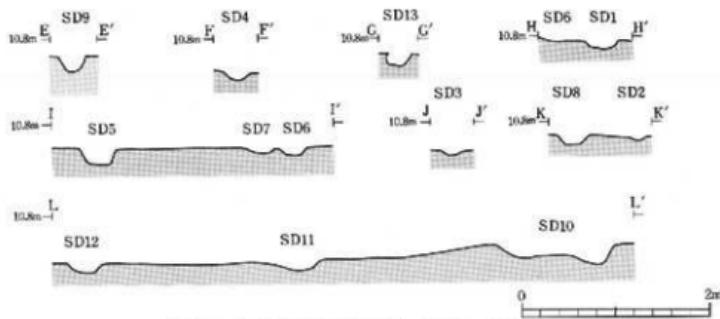
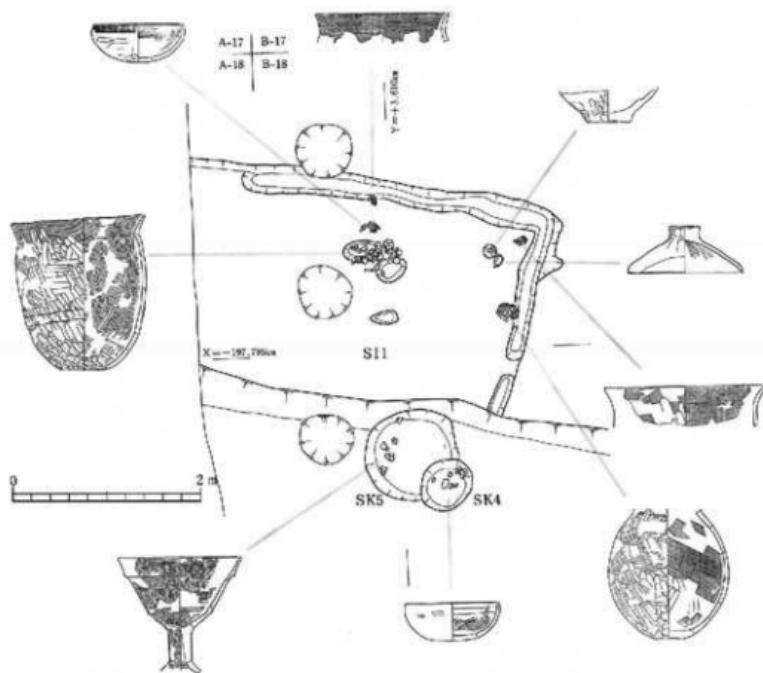
[カマド] カマドや炉は検出されていない。

[出土遺物] 土師器壺・甕・瓶・蓋が出土している。床面と堆積土中から出土しているが、第49図に示したものはすべて床面出土である。

土師器（第49図1～7、写真110）：1は丸底の壺で、体部から口縁部へ丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は内窵する。器面調整は口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面は口縁部ヨコナデ、体部タテ方向のヘラミガキである。2は蓋で天井部から口縁部へ直線的に開き、口縁部がやや内傾し、短い円筒状のつまみがつく。器面調整は外面がナデ、内面がヘラミガキである。3～5



第47図 5層造構平面図・S11・SK4・5平面図・断面図



第48図 S11 遺物出土状況図・SD1~12断面図

は甕である。3・4は緩く外傾する口縁部破片で、体部の形状は不明である。器面調整は両者とも口縁部ヨコナデ、体部は内外面ともヘラナデで4はナデもみられる。5は口縁部が欠損した球形に近い長胴形の体部資料で最大径は体部中央にある。底部はわずかにくぼむ平底である。器面調整は体部外面がヘラミガキ、下間にヘラケズリ、内面がヘラナデとナデである。7は底部資料で、わずかにくぼむ平底である。器面調整は外面ナデとヘラケズリで内面は風化により不明である。6は無底式の甕で、口縁部が屈曲して直線的に外傾し、最大径が口縁部にある。体部はやや膨らみをもつ長胴形である。器面調整は口縁部がヨコナデ、外面体部上半がナデ、下半がヘラケズリ、内面は孔部付近がヘラケズリで他はヘラミガキである。堆積土中から出土したもののはすべて破片資料であり、その内訳は第12表に示した。

S K 4 (第47・48図、写真25)

B18グリッドの南西部、S I 1の南側で検出された。SK 5と重複関係があり、SK 4が新しい。平面形は円形で径55cm、深さ18cmである。堆積土は2層で、2層中から土師器壊1点および甕などの破片が7点出土している。破片はいずれもロクロ不使用で内面黒色処理も認められない。

土師器 (第50図1、写真110)：底部の欠損した壊の破片で、体部から口縁部にかけて丸味を帯びて立ち上がり口縁部は内湾する。器面調整は外面は風化でほとんど不明だが、内面は横方向と縱方向のヘラミガキである。

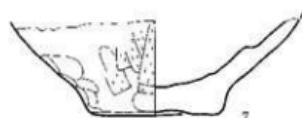
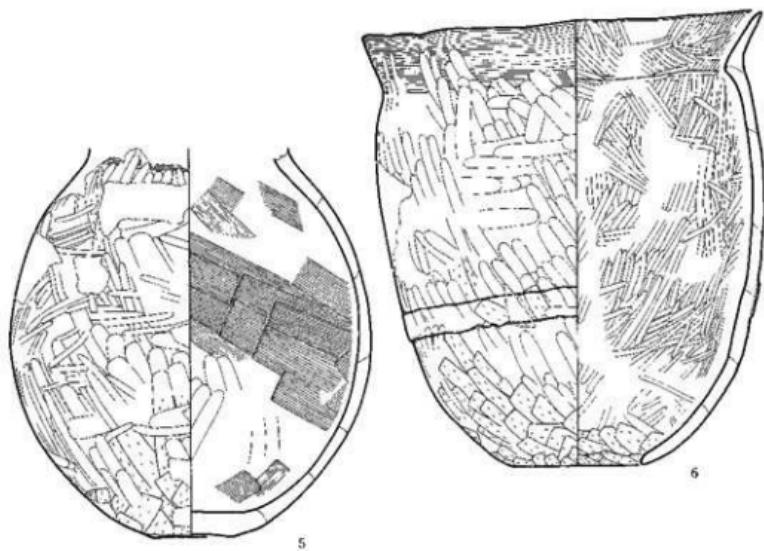
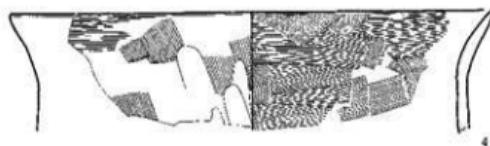
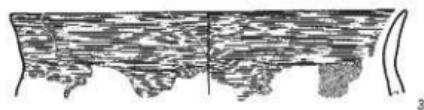
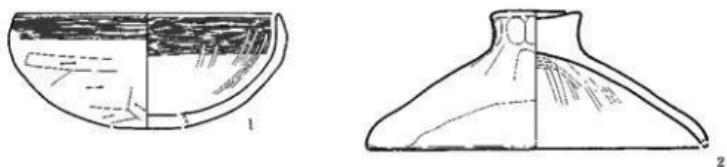
S K 5 (第47・48、図写真25)

B18グリッドの南西部、S I 1の南側で検出され、SK 4に切られている。平面形はほぼ円形で径約1m、深さ約20cmである。堆積土は3層で、層中から土師器の高壊、縄文のある土器片、種別不明素焼土器片が出土している。

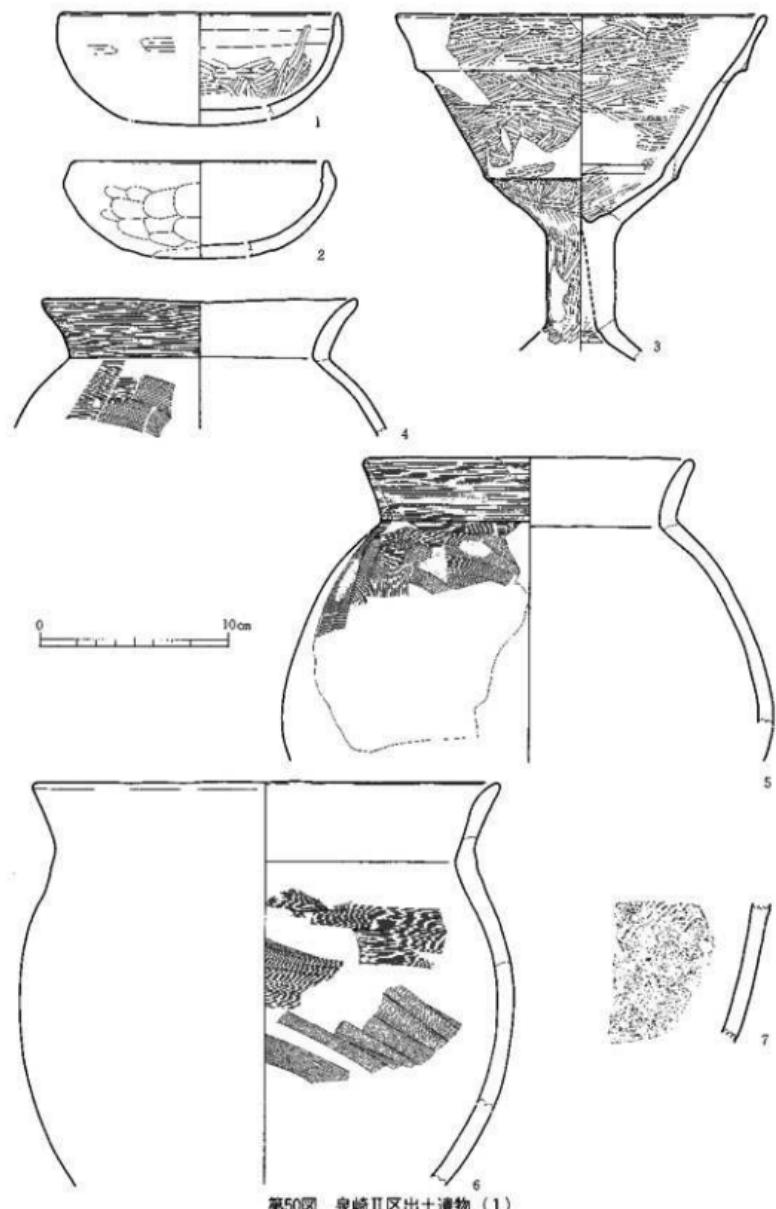
土師器 (第50図3、写真111)：有段口縁の高壊である。壊部は体部下半で屈曲しながら直線的に立ち上がり口縁部にいたる。口縁部下端と体部の屈曲部の内外面には粘土を貼り付けて段が作り出されている。器面調整は外面全体と壊部内面が丁寧なヘラミガキで裾端部がヨコナデである。壊部下端と脚部上端部には前段階の刷毛目が若干認められる。口縁部下端と体部の段の上部には赤色顔料の痕跡が認められる。胎土には金雲母が含まれている。

S D 1 (第47・48図)

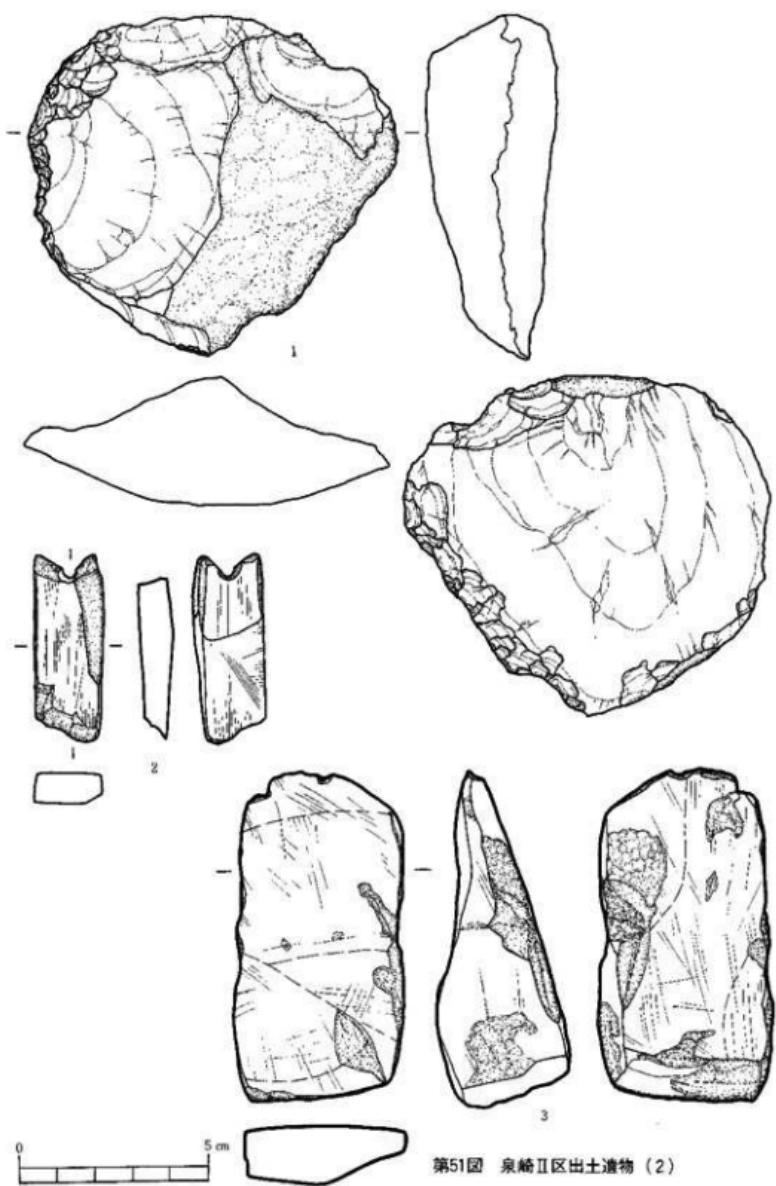
B21・22グリッドにかけて4層中で検出された。SD 2・4と重複関係があり、両者より新しい。検出長は約13mで直線的にのび、方向はN-30°-Wである。規模は上端幅25~50cm、深さ17cmで断面形はU字形である。堆積土は2層で土師器破片が5点出土しているが図示できるものはない。



第49図 SII 出土遺物



第50図 泉嶺Ⅱ区出土遺物（1）



第51図 泉崎II区出土遺物（2）

S D 2 (第47・48図)

B20・21・22グリッドにかけて4層中で検出された。SD1・2と重複関係にあり両者より古い。検出長は約20mで、北東方向(N-25°-E)から北西方向(N-40°-W)へ大きく曲がる。規模は上端幅20~30cm、深さ10cmで断面形はU字形である。堆積土は2層で、土師器破片(うち高环器部1点)2点が出土しているが図示できるものはない。

S D 3 (第47・48図)

B20グリッドの5層上面で検出された。検出長は3.2mで方向はN-65°-Eである。規模は上端幅14~24cm、深さ5cmで浅い溝である。堆積土は注記がなく不明で出土遺物はない。

S D 4 (第47・48図)

B21グリッドの4層中で検出されたが、SD1・2と重複しSD1より古くSD2より新しい。検出長は3.7mで方向はN-76°-Wである。規模は上端幅25~40cm、深さ12cmで断面形はU字形である。堆積土は1層で出土遺物はない。

S D 5 (第47・48図)

B21・22グリッドの4層中で検出された。検出長は1.2mと短く、方向はN-70°-Wである。規模は上端幅25~40cm、深さ20cm、断面形はU字形である。堆積土は3層で、土師器破片が4点出土しているが図示できるものはない。

S D 6 (第47・48図)

B20・21グリッドの5層上面で検出された。検出長は約8mであるが、その形状は不整形である。溝の南北方向部分が逆「く」の字形になり、その南北端と中央から西の方向へ3条の溝が取り付くという形状になる。規模は上端幅30~50m、深さ10cmで断面形はU字形である。堆積土は2層で、土師器破片が8点出土しているが図示できるものはない。

S D 7 (第47・48図)

B21グリッドの5層上面で検出された。検出長は2.8mで西に調査区外へと延びる。方向はN-68°-Wで規模は上端幅20~30m、深さ5cmで浅い溝である。堆積土は1層で、堆積土中から土師器破片が2点出土しているが図示できるものはない。

S D 8 (第47・48図)

B20グリッドの5層上面で検出された。検出長は2mで西に調査区外へと延びる。方向はN-35°-Wで規模は上端幅20~30m、深さ10cmで断面形はU字形である。底面に農具痕と考えられる半月形のくぼみが5個検出された。堆積土は1層で、堆積土中から土師器破片1点が出土しているが図示できるものはない。

S D 9 (第47・48図)

B20グリッドの5層上面で検出された。検出長は1.5mで短く西方調査区外へ延びている。方

向はN-50°-Wで規模は上端幅30~40cm、深さ15cm、断面形はU字形である。堆積土は注記がなく不明で出土遺物はない。

S D10 (第47・48図)

B23・24グリッドの5層上面で検出された。検出長は約10cm、方向はN-35°-Wで両端とも調査区外へ延びる。規模は上端幅90~130cm、下端幅70cm、深さ10~20cmで断面形はU字形である。底面にピット状や不整形の落ち込みがある。堆積土は1層で出土遺物はない。

S D11 (第47・48図)

B23・24グリッドの5層で検出された。S D10にはほぼ平行している。検出長は9mで両端は調査区外へ延びている。方向はN-43°-Eで直線的である。規模は上端幅50~60cm、下端幅30cm、深さ15cmで断面形はU字形である。堆積土は1層で出土遺物はない。

S D12 (第47・48図)

B24・25グリッドの5層上面で検出された。検出長は7m両端は調査区外へ延びる。方向はN-78°-Eで直線的である。規模は上端幅35cm、下端幅15cm、深さ10cmで断面形はU字形である。堆積土は1層で出土遺物はない。

遺物包含層

基本層4層が遺物包含層である。4層はB19グリッド以南に南に傾斜しながら分布している。B19グリッド以北は微高地となり4層は分布しない。出土遺物はほとんどが土師器で、B21グリッドからの出土量が比較的多く、一括土器も散点出土している。しかし、その他はほとんどが破片資料であり、図示できたものは5点にすぎない。また、基本層5層から土師器破片5点、縄文のある土器片1点、種別不明土器片2点が出土している。

土師器（第50図2・4~6、写真111）：2は底部の欠損した壺である。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は内弯する。器面調整は外面がヘラミガキかナデで、内面は風化で不明である。底部は丸底状になると考えられる。4~6は甕である。4は外反する口縁部を持ち、体部はほぼ球形になると考えられる。5は橢円形の体部には直線的に外傾する口縁部を持つ。器面調整は風化で不明な点が多いが口縁部がヨコナデで体部はヘラナデである。

須恵器（第50図7）：甕の体部片で、外面が平行叩き目痕である。

石製品（第51図1~3、写真111）：1は大型のスクレイパーである。打面と背面に自然面が残っている。背面側の左縁辺と腹面側の右縁辺に連続した二次加工が施されている。石材は流紋岩である。2は用途不明の石製品である。有孔で径は5.5mm、両方向から穿孔されている。上下両端が欠損しており、全体の形状は不明である。表裏面、両側面は研磨され擦痕が観察される。石材は粘板岩である。3は砥石である。下半部は柱状であるが、上半部は研磨により薄くなっている。石材は凝灰岩である。

② 出土遺物

土師器について

4・5層検出の遺構、遺物包含層から出土している遺物はほとんど土師器であり、しかも破片が多い。ここでは図示できた遺物について若干の検討を行いたい。

前述したように土師器はロクロを使用していないものである。そのうち内面黒色処理をしたもののは小破片2点のみである。図示できたものは、壺4点、高壺1点、甕7点、瓶1点、蓋1点である。

壺は底部が丸底ないし丸底風になり、体部が丸みを持ちながら立ち上がり、口縁部が内弯するものである。

高壺は丹塗りの有段口縁のものである。体部途中に屈曲部を有し、その内外面にも段がある。脚部上半はほぼ直立し、下半部が円錐状に開くものである。

甕は口縁部の屈曲の度合で2分類される。A類は頸部が強く屈曲し口縁部が外反ないし直線的に外傾するもので、体部は球形ないしやや縱長の楕円形になる（第49図5、第50図4～6）。B類は口頸部の屈曲が弱く、口縁部はそのまま外傾するもので、体部は膨らみの少ない長胴形になる（第49図3・4）。

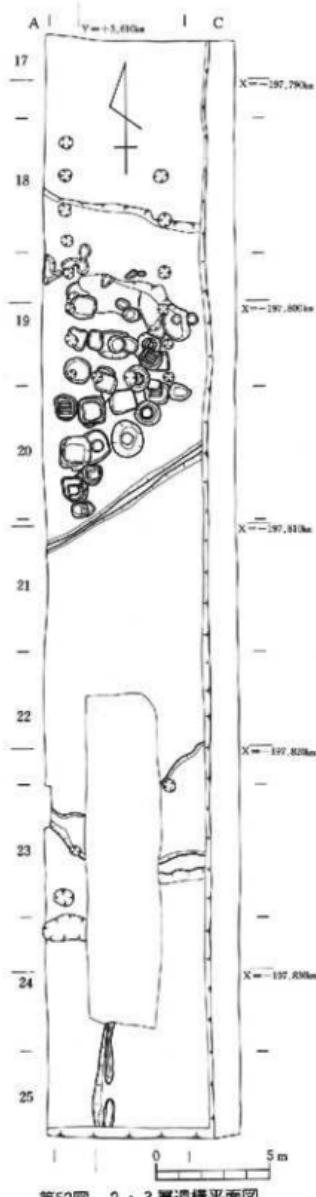
瓶は無底式である。頸部はやや強く屈曲し口縁部は直線的に外傾する。体部は上半がやや膨らみが少なく、下半部が丸みをもってすぼまる長胴形である。

蓋は短いつまみ部を有し、天井部から口縁部へ直線的に開き、口縁部がやや内傾するものである。

S I 1住居跡と遺物包含層出土の土器群について

これらの土師器のうち、S I 1住居跡から出土した壺1点、甕A類2点、甕B類2点、瓶1点、蓋1点はいずれも床面から出土しており、一括性の高い資料と考えられる。また、遺物包含層出土の壺1点、甕A類3点も4層上面でB21グリッド中心に分布するもので一群のものと考えられる。

上記の住居跡と遺物包含層の一群は、その特徴から、おおむね南小泉式に比定されるものである（氏家1957）。南小泉式の土器は丹羽茂氏によって、A群土器段階からC群土器段階までの3段階の変遷が考えられている（丹羽1983）。この3段階の変遷は壺の形態の多様化、壺・甕の長胴化、深鉢状あるいは長胴形の變形の瓶の出現などが指標とされている。しかし、当該資料では、変遷を考える上で最も有効な器種である壺が不足しており、明確な編年的位置付けを行うことは困難である。ただし、長胴化した變形の瓶が存在することから岩切鴻ノ巣遺跡1号住居跡（白鳥・加藤1974）に代表されるB群七器段階に近い時期が考えられよう。なお、南小泉



式期の蓋は管見によれば未確認であるが、出土状況から当該期の器種を構成するものと考えられる。

S K 5 出土の高坏について

次に S K 5 出土の高坏について若干触れておきたい。この高坏の特徴は口縁部と体部に段を有し、体部の立ち上がりが急角度であるという坏部の形態にあると考えられる。このような高坏の類例は現在のところ県内では認められない。

ここで部位別にその特徴をみてみたい。有段口縁や複合口縁は塩釜式から南小泉式の古い段階の壺などに認められる要素である。高坏の坏部体部の段は南小泉式に存在する要素である。脚部の上半が柱状、下半が円錐台状になるものは塩釜式後半から南小泉式にかけて存在する要素である。

以上の諸要素の出現時期と、S K 5 が南小泉式の坏を出土した S K 4 に切られていることなどから、この高坏の時期はごくおまかではあるが古墳時代前半と捉えておきたい。

(4) 3 層検出遺構と遺物

① 遺構

3 層で 31 基の墓壙が検出されている。

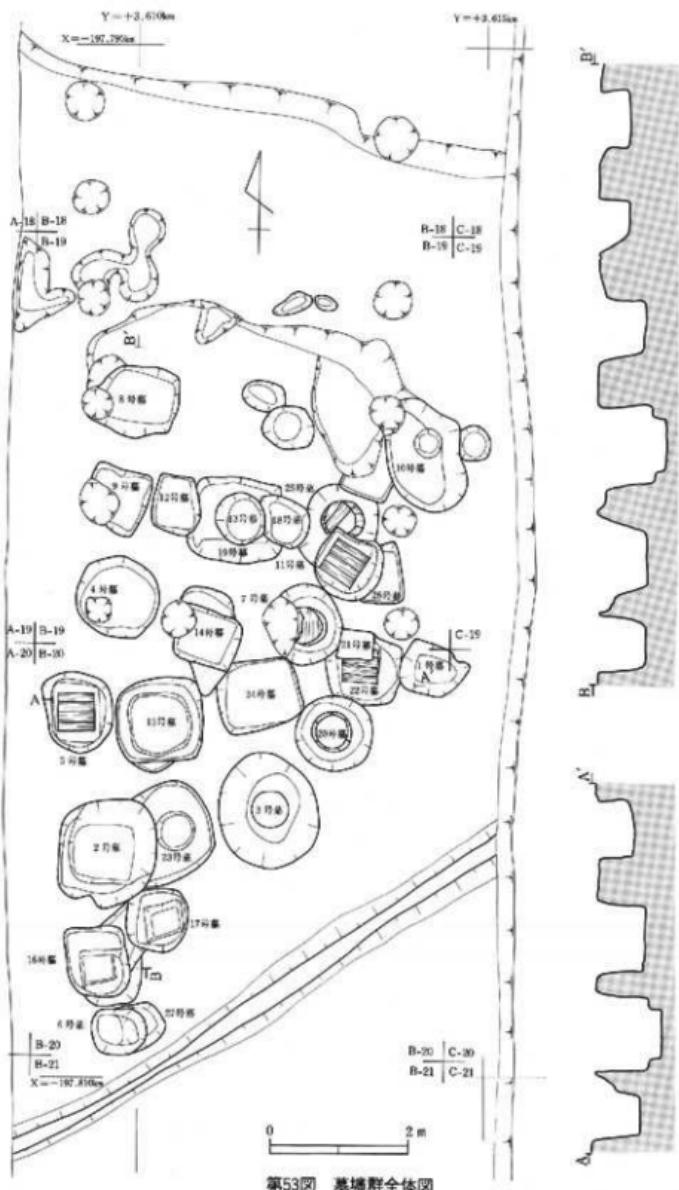
1 号墓（第54図、写真27）

B20グリッド北東隅に位置する。平面形は不整方形で、規模は $100 \times 75\text{cm}$ 、深さ 20cm である。棺桶などは検出されていない。埋土は 3 層で、層中から煙管の吸口が出土している。

2 号墓（第54図、写真27）

B20グリッド西半部に位置する。23号墓と重複し、2号墓が新しい。平面形は隅丸方形である。規模は上端が $155 \times 140\text{cm}$ 、深さ 8cm 、底面が約 80cm 方四である。西壁と南壁には深さ 15cm と 60cm の所に段がある。底面に

第52図 2・3層遺構平面図



第53図 墓塚群全体図

は棺の底板と側板の一部が検出された。棺箱である。埋土は2層である。底板上から錢貨（寛永通宝）3枚、煙管の吸口、歯が出土している。

3号墓（第54図、写真27）

B20グリッドのほぼ中央に位置する。平面形は梢円形である。規模は上端が170×140cm、下端が100×70cm、深さが60cmである。底面で径51cmのタガが検出された。棺桶である。断面にも桶の痕跡がうかがえる。埋土は4層である。杖状の木製品、三日月状の不明木製品が出土している。

4号墓（第54図、写真27）

B19グリッド南西部に位置する。試掘時に打ち込まれたH鋼に破壊された箇所がある。平面形は不整円形である。規模は上端が115×115cm、底面が105×90cm、深さ75cmである。埋土は6層である。断面に棺などの痕跡はない。底面の北東隅から提灯2点、陶器碗1点、箸1膳が出土している。碗と箸は、碗の口縁部を打ち欠いて作られた凹みに箸が置かれた状態で検出されている。

5号墓（第54図、写真27）

B20グリッドの北西隅に位置する。平面形は上端が不整隅丸方形、底面が隅丸方形である。規模は上端が115×97cm、底面が85×65cm、深さ74cmである。棺箱が良好に残存しており、大きさは55cm四方で、残存高は約60cmである。埋土は7層で、3・4層は埋め戻し土、5・6層は棺の蓋板崩壊後の棺内堆積土で、蓋板の下の7層中から人骨、箸1膳、櫛1点、錢貨5点、煙管1点が出土している。人骨はかなり脆弱化しており、取り上げは困難であった。

6号墓（第54図）

B20グリッドの南西隅に位置し、墓壙群の最南端にある。平面形は隅丸方形である。規模は上面が77×65cm、底面が40×35cm、深さ25cmである。埋土は1層で、棺などの痕跡はなく、出土遺物もない。

7a号墓（第55図、写真27）

B19グリッドの南端部中央部に位置する。試掘時のH鋼に西半部を破壊されている。11・21・22・24・7b号墓と重複し、いずれよりも新しい。平面形は上端が不整円形、底面が円形である。規模は上端が105×45（残存部）cm、底面が径55cmで深さが約60cmである。底面近くには棺桶のタガと底板が残存しており、その底板上からは人骨が比較的良好な遺存状況で検出された。分析の結果、人骨は壮年～熟年期の頑丈な男性で、蹲距の習慣があったことが判明している（図-6）。埋土は5層で、遺物は煙管1点、錢貨2点である。

7b号墓（第55図、写真27）

7a号墓とほぼ重なる位置で検出された。7a号墓より古い。平面形は不整円形で、規模は120×

90cm、底面80×50cm、深さ約60cmである。底面で棺桶のタガが検出された。埋土は6層である。7a号墓の底板直下から鏡1点、鉄1点、櫛2点、骨片1点が出土している。

8号墓（第55図、写真28）

B19グリッドの西側に位置する。墓壙群の最北端である。西側の一部が試掘時のH鋼で破壊されている。平面形は不整円形である。規模は上端が125×105cm、底面95×75cm、深さ50cmである。棺などの痕跡はない。埋土は3層で、層中から錢貨1点が出土している。

9号墓（第55図、写真28）

B19グリッドの西半部に位置する。南北隅が試掘時のH鋼で破壊されている。平面形はほぼ方形で、規模は上端が95×85cm、底面が75×80cm、深さが50cmである。棺などの痕跡はない。埋土は4層で、層中から錢貨1点が出土している。

10号墓（第55図）

B19グリッドの東半部に位置している。平面形は不整梢円形である。規模は上端160×115cm、底面140×80、深さ20cmである。底面の北東部では径40cm、深さ16cmの円形ピットが検出された。埋土は2層で出土遺物はない。

11号墓（第55図、写真28）

B19グリッドの南東部に位置する。25・26号墓と重複し、两者より新しい。平面形は上端が圓丸方形で、底面が方形である。規模は上端が95×95cm、底面63×61cm、深さ105cmである。棺箱が良好に残存しており、蓋板と北側上部の側板が破損していただけである。棺箱の大きさは56cm四方で、残存高は70cmである。埋土は4層以上である（記録が欠落しており土層の状況は不明である）。提灯の底板2点、折敷の底板1点、陶磁器1点が出土している。

12号墓（第55図）

B19グリッドの南西部に位置する。19号墓と重複し、それより新しい。平面形は方形である。規模は上面が85×70cm、底面75×55cm、深さ20cmである。棺などの痕跡はない。埋土は3層で、煙管が出土している。

13号墓（第55図）

B19グリッドの中央よりやや南に位置する。18・19号墓と重複し、两者より新しい。19号墓のほぼ真上にある。平面形はほぼ円形である。規模は上面75×70cm、底面60×50cm、深さ20cmである。棺などの痕跡はない。埋土は4層で層中から骨片が出土している。

14号墓

14号墓はB19グリッドの南端ほぼ中央に位置する。三つの墓壙が重複していたのでa・b・cと付した。新旧関係は14c→14a→14bの順に新しくなる。

14a号墓（第56図）

平面形は上面が不整方形 $110 \times 82\text{cm}$ 、底面が不整形である。規模は上面が $110 \times 82\text{cm}$ 、底面が $80 \times 70\text{cm}$ 、深さ 80cm である。棺箱の側板の一部が残存している。埋土は4層で、編物状のものが出土していたが、遺存状態が悪く取り上げ不可能であった。

14b号墓（第56図）

平面形は上面、底面ともに方形である。規模は上面が $53 \times 48\text{cm}$ 以上、底面は $40 \times 40\text{cm}$ 以上、深さ 30cm である。棺などの痕跡はないが、規模と形状から棺箱と考えられる。埋土は2層で、出土遺物はない。

14c号墓（第56図、写真28）

平面形は方形である。規模は上面 $95 \times 80\text{cm}$ 、底面 $80 \times 60\text{cm}$ 、深さ 60cm である。棺などの施設はないが、形状から棺箱と考えられる。埋土は2層で、遺物は茶碗1点、煙管1点、用途不明の板材1点、折敷の脚板と思われるもの1点が出土している。

15号墓（第56図、写真28）

B20グリッド北西部に位置する。平面形は上面底面ともに隅丸方形であるが、深さ約 80cm の所で掘り方の規模を棺の大きさに縮小してしている。規模は上面 $123 \times 120\text{cm}$ 、底面 $90 \times 90\text{cm}$ 、深さは 95cm である。棺箱の底板が残存している。埋土は5層で、箸1点、鳥形木製品1点、提灯の底板4点、不明竹製品2点、銭貨4点、煙管2点、磁器片1点が出土している。

16号墓（第56図、写真28）

B20グリッドの南西部に位置する。平面形は隅丸方形である。規模は上面 $105 \times 88\text{cm}$ 、底面推定 80cm 四方である。深さ約 50cm のところで箱形の棺の $50 \times 60\text{cm}$ の方形のプランを検出した。その底面の規模は $42 \times 35\text{cm}$ 、深さ $35 \sim 20\text{cm}$ である。埋土は4層で出土遺物はない。

17号墓（第56図、写真29）

B20グリッド南西部に位置する。平面形は隅丸方形である。規模は $92 \times 72\text{cm}$ 、底面 75cm 四方、深さ 67cm である。深さ 35cm のところで棺箱の方形のプラン $55 \times 47\text{cm}$ を検出した。底面は $38 \times 31\text{cm}$ 、深さ 35cm である。埋土は4層である。提灯の底板1点が出土している。

18号墓（第56図）

B19グリッド中央やや南よりに位置する。13・19・25号墓と重複し、19・25号墓より新しく、13号墓より古い。平面形は上面が不整方形、底面が不整円形である。規模は上面が $85 \times 66\text{cm}$ 、底面が $62 \times 49\text{cm}$ 、深さが 25cm である。棺などの痕跡はない。埋土は1層で、脣中から煙管1点、銭貨6点が出土している。

19号墓（第57図、写真29）

B19グリッド中央やや南よりに位置する。12・13・18号墓と重複し、いずれよりも古い。平面形は隅丸方形である。規模は上面が $135 \times 122\text{cm}$ 、底面が $105 \times 95\text{cm}$ 、深さ 75cm である。深さ

45cmのところで棺箱の方形のプランを検出している。その規模は上面が55×50cm、底面も方形で45×30cmである。埋土は7層で、提灯の底板2点、杖状木製品1点、石器1点を出土している。

20号墓（第57図、写真29）

B20グリッドの南東部に位置する。22号墓と重複し、それより古い。平面形は上面が円形で底面が不整円形である。規模は上面が径120cm、底面が85×80cm、深さ50cmである。深さ30cm前後のところで棺桶の側板の残存を検出した。径は60cmで底板はない。埋土は10層で、不明竹製品2点、種子2点を出土している。

21号墓（第57図）

B20グリッド北東部に位置する。7・22号墓と重複し、7号墓より古く22号墓より新しい。平面形は方形で、規模は上面52×45cm、底面42×48cm、深さ32cmである。規模形状から棺箱の痕跡のみが検出されたと考えられる。埋土は2層で、煙管1点が出土している。

22号墓（第57図、写真29）

B20グリッド北東部に位置する。1・7・20・21号墓と重複し、1・7・21号墓より古く、20号墓より新しい。平面形は不整方形である。規模は上面110×107cm、底面93×85cm、深さ45cmである。棺箱の側板と底板が良好に残存していた。棺箱の大きさは56×54cmの方形で、残存高は28cmである。埋土は5層で、1・2層は棺内の堆積土である。棺内から棒状木製品1点、煙管1点、木製櫛1点、錢貨7点、墓壙内から提灯の底板2点が出土している。

23号墓（第57図、写真29）

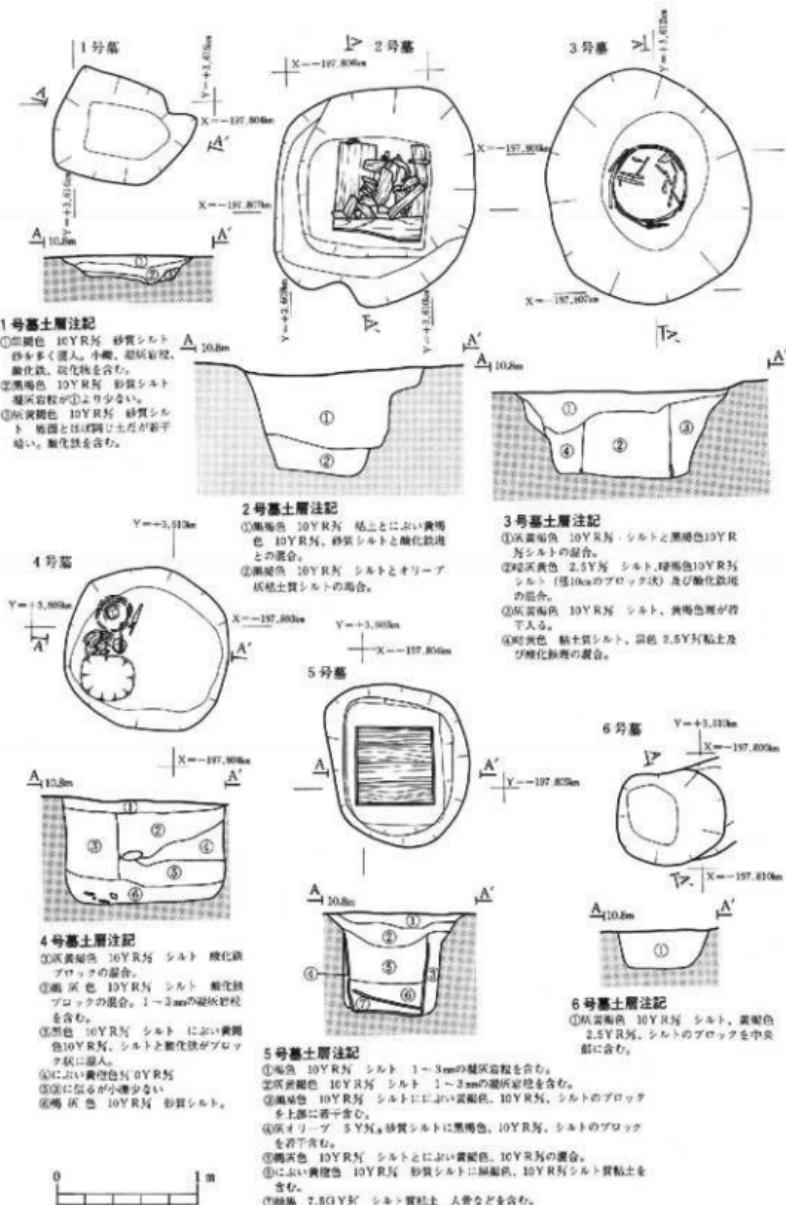
B20グリッド中央からやや西寄りに位置する。2号墓と重複し、それより古い。平面形は上面が隅丸方形であるが底面は記録不備のため不明である。深さ25cmのところで円形のプランを検出していることから棺桶と考えられる。その規模は上面が径56cm、底面が径41cm、深さ45cmである。埋土は7層で、4a・b・c・5層が棺桶内堆積土である。遺物は木片と錢貨4点が出士している。

24号墓（第58図、写真29）

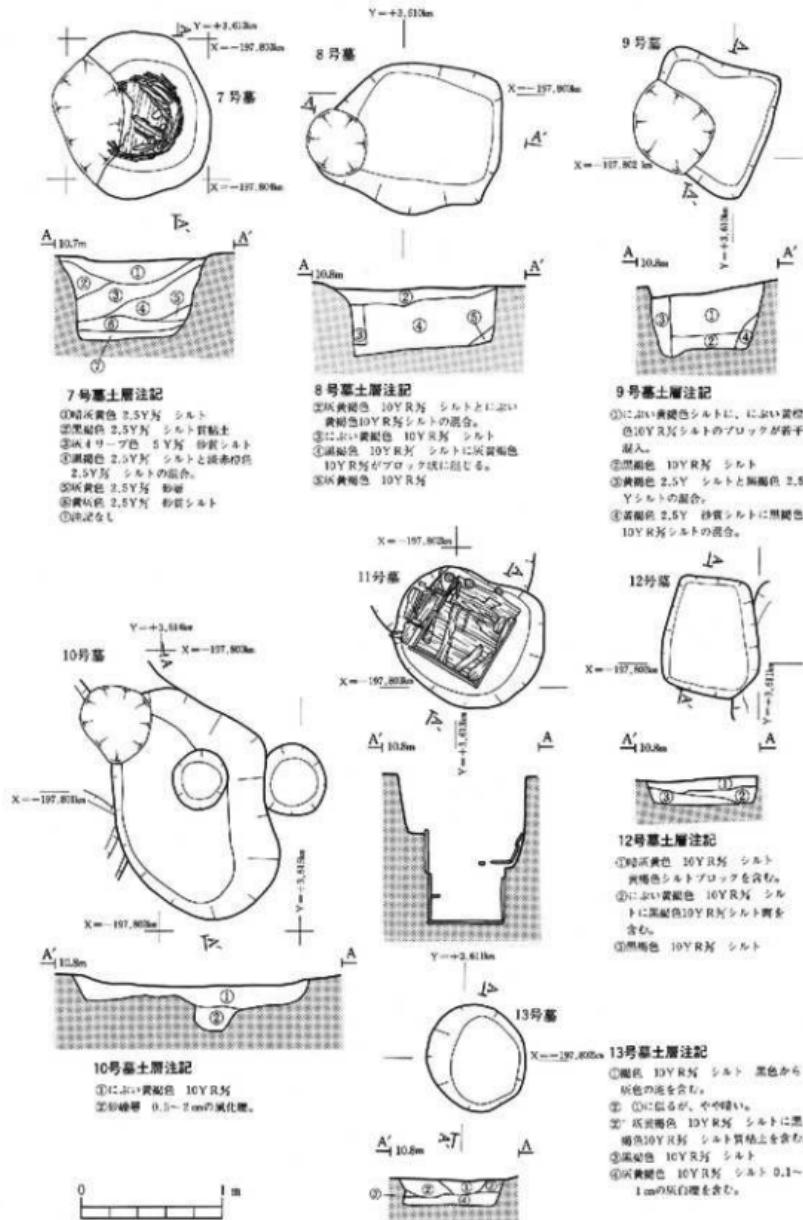
B20グリッド北半の中央に位置する。14c号墓と重複しそれより古い。平面形は隅丸方形で規模は上面が118×100cm、底面が90×105cm、深さ70cmである。深さ20cmで方形のプランを検出していることから、棺箱と考えられる。その規模は42cm四方、深さ約50cmである。埋土は5層で、1・2層が棺内堆積土である。棺外から提灯3点、杖状木製品1点が出土している。

25号墓（第57図、写真29）

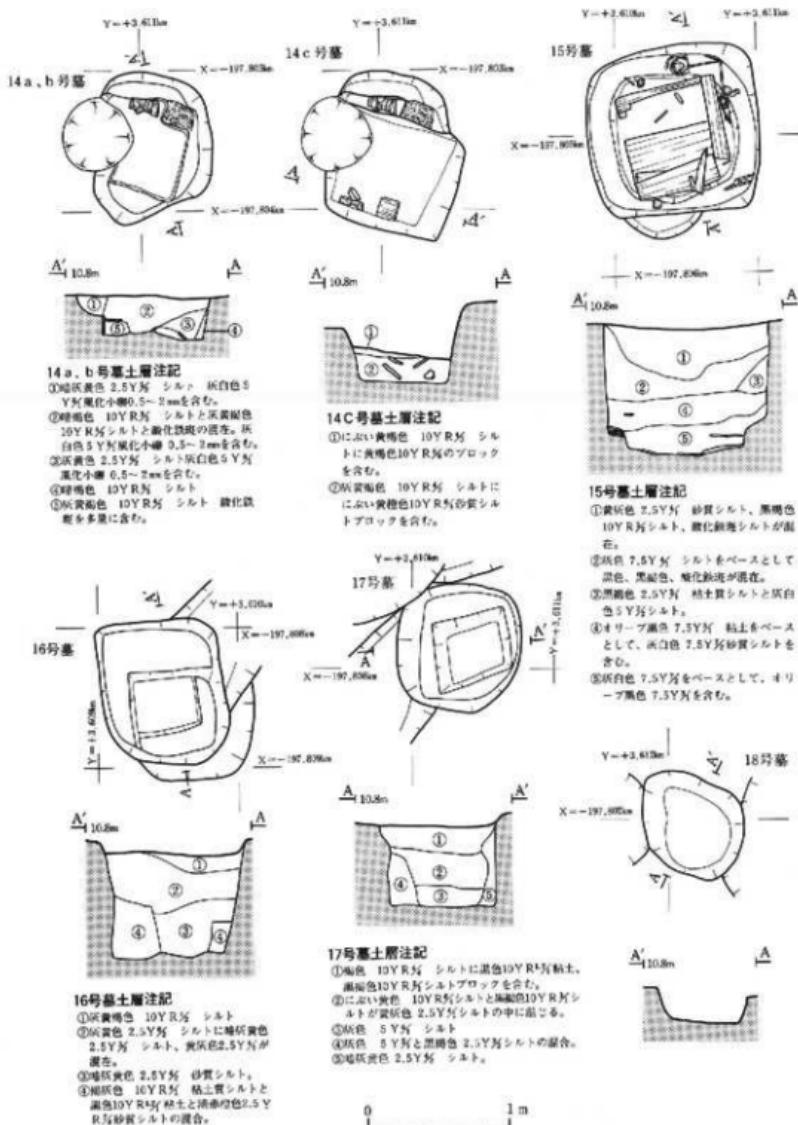
B19グリッド東南部に位置する。11・18・22号墓と重複し、いずれよりも古い。平面形は残存部からみて不整円形で、規模は上面が100×120cm、底面が87×83cm、深さ45cmである。桶



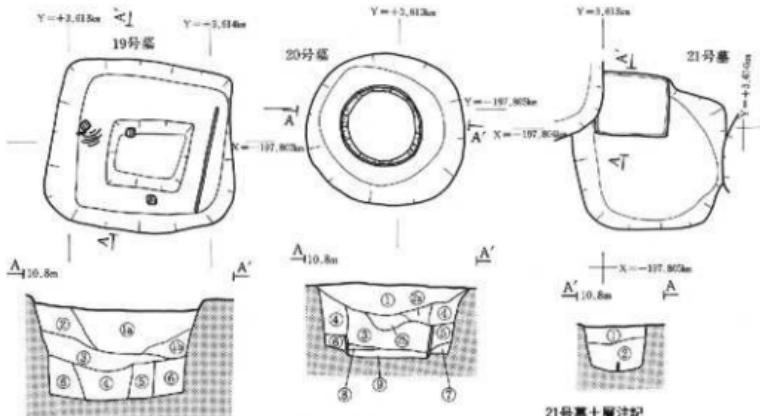
第54図 墓塙平面図・断面図 (1)



第55図 墓壙平面図・断面図 (2)



第56図 墓塚平面図・断面図（3）



19号基盤層注記

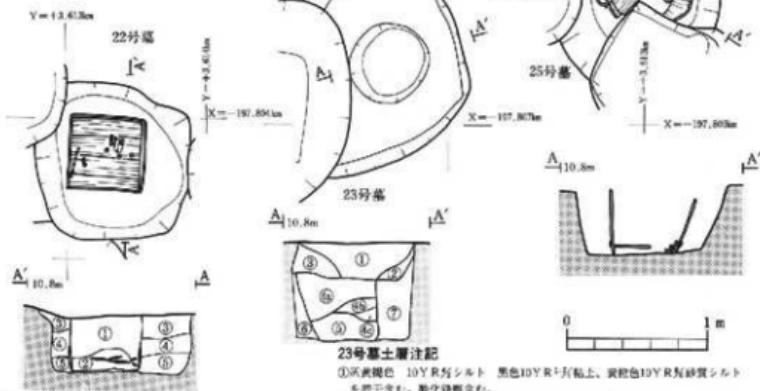
- ④ 黄灰色 10Y R 4% 粘土と灰黄色 10Y R 4% 粘土をルートにおいて、砂質 10Y R 4% 粘土と砂質シルト粘土の混在。
- ⑤ 灰黄色 10Y R 4% 粘土とにおいて、砂質 10Y R 4% 粘土シルトの混在。
- ⑥ 灰色 10Y R 4% 粘土、黑色 10Y R 3% の混在。
- ⑦ ③と同じだが、において、2.5Y R 4% 粘土シルトを含む。
- ⑧ 黄灰色 2.5Y R 4% 粘土とにおいて、黄色 2.5Y R 4% 粘土シルトが混在。
- ⑨ 黑色 7.5Y R 4% シルト。
- ⑩ 黄色 5Y R 4% シルトと黄色 2.5Y R 4% シルトの互層。

20号基盤層注記

- ⑪ 黄灰色 10Y R 4% シルトにおいて、砂質 10Y R 4% 粘土の混在。
- ⑫ ⑪に似るが全体的に暗い。
- ⑬ 灰黄色 10Y R 4% シルトと灰黄色 10Y R 4% 粘土の混在。
- ⑭ 灰黄色 10Y R 4% シルトに黑色 10Y R 4% 粘土シルトのブロックを含む。
- ⑮ 灰色 10Y R 4% 粘土シルト。
- ⑯ 灰黄色 10Y R 4% 粘土シルト。
- ⑰ ～⑩ 注記なし。

21号基盤層注記

- ⑪ 黄灰色 2.5Y R 4% シルトにおいて、黄色 2.5Y R 4% 粘土をツブ状に含む。
以降 2.5Y R 4% 粘土を若干含む。
- ⑫ 灰黄色 2.5Y R 4% 砂質シルトに黑色 2.5Y R 4% 粘土と黄色 2.5Y R 4% 粘土をツブ状に若干含む。



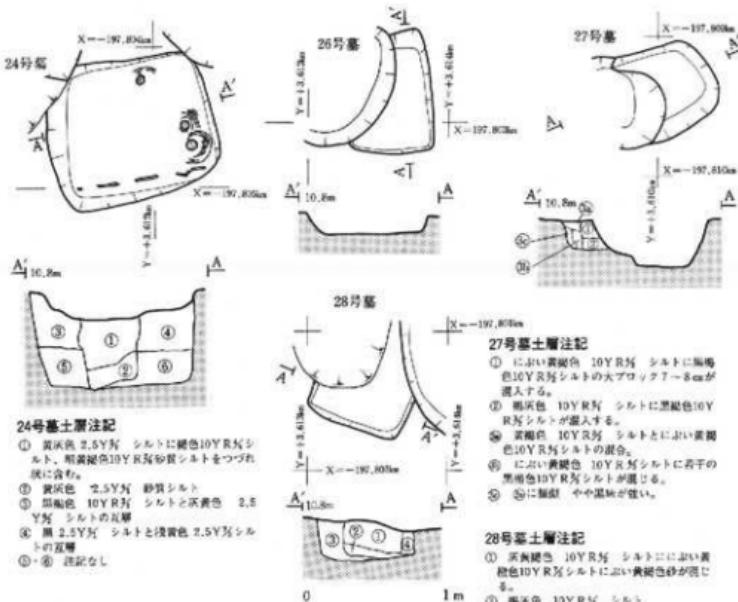
22号基盤層注記

- ① に近い黄灰色 10Y R 4% シルトを複数塊を地底に含む。
- ② 黄灰色 10Y R 4% 粘土シルト。
- ③ に近い黄灰色 10Y R 4% 砂質シルトに、暗灰色 10Y R 4% ブロックが多くの量で入る。
- ④ 黄灰色 2.5Y R 4% シルトに暗褐色 2.5Y R 4% シルトのブロックを含む。
- ⑤ 黄灰色 2.5Y R 4% シルトを含む。

23号基盤層注記

- ① 黄灰色 10Y R 4% シルト 黒色 10Y R 1% 粘土上、黄灰色 10Y R 4% 砂質シルトを若干含む。動化鉄筋含む。
- ② 暗褐色 10Y R 4% 砂質シルトに暗褐色 10Y R 4% 砂質シルトブロック含む。
- ③ 黄灰色 10Y R 4% シルトに偏褐色 10Y R 4% シルト粘土。黑色 10Y R 4% 粘土ブロックを含む。
- ④ 黄灰色 10Y R 4% シルト 粘土に複数 10Y R 4% 砂質シルト粘土ブロックを含む。動化鉄筋含む。
- ⑤ 暗褐色 10Y R 4% シルト。
- ⑥ 黄灰色 10Y R 4% シルトは黑色 10Y R 4% 粘土を含む。
- ⑦ 黄灰色 10Y R 4% 粘土シルト。
- ⑧ ～⑩ 注記なし。

第57図 基壇平面図・断面図(4)



第58図 基壇平面図・断面図(5)

形の棺桶が良好に遺存しており、蓋と底板が1/2、側板が10枚で3/4の残存である。棺桶の大きさは口径が54cm、底径が50cm、残存高が51cmである。埋土は棺桶の上位の3層が記録されるのみで他は不明である。遺物は箸1膳、煙管1点、提灯底板2点、漆塗の木製の椀1点、竹製品1点、古銭6点、陶磁器片数点が出土している。

26号墓(第58図)

B19グリッド東南部に位置する。11号墓と重複しそれより古い。平面形は隅丸方形である。規模は上面が62×96cm、底面が70cm、深さ15cmと浅い墓壇である。棺などの痕跡はない。埋土は1層で出土遺物はない。

27号墓(第58図)

B20グリッド南西部に位置する。6号墓と重複しそれより古い。平面形は残存部からみて隅丸方形と考えられる。規模は上面が65×40(残存部)cm、底面が48×28(残存部)cm、深さ20cmである。埋土は5層で出土遺物はない。

28号墓(第58図)

B19グリッド東半中央に位置する。10・25号墓と搅乱部と重複し、10号墓と搅乱部より古く、25号墓より新しい。平面形は残存部からみて方形と考えられる。規模は残存部で上面が70cm、底面が63cm、深さ30cmである。確認面で方形のプランが検出されており、棺箱と考えられる。その残存長は33cmである。埋土は4層で、1・2層が棺内堆積土である。出土遺物はない。

② 出土遺物

a. 陶磁器

陶磁器は5点あり、すべて墓壙出土である。図示できたのは4点である。

陶器（第62図1～3、写真112）：1～3は碗である。1・2は灰釉、3は白濁釉が施釉され、いずれも貫入が認められる。1・2は高台脇、高台内部ともに無釉で、3は高台脇に釉が流れているが高台内部は無釉である。1は口縁部の相対する2箇所が打ち欠いてある。3点ともに相馬産で18～19世紀の所産である。これらは椀飯に使用された飯碗と考えられる。図示できなかつたが1号墓から相馬産と考えられる掛け分け碗の口縁部片が出土している。

磁器（第62図4、写真112）：4は染め付けの皿で底部片で内外面に文様がある。肥前産で18世紀の所産と考えられる。

b. 木製品

木製品として、棺、漆器、櫛、箸、提灯、折敷、数珠、杖、鳥形木製品、不明木製品、竹製品が出土している。すべて墓壙からの出土である。

棺（第59～61図、写真111・112）：棺は9点残存しており、その内訳は箱形が5点、桶形が4点である。そのうち図示できたのは5点である。第59図1・2が5号墓、第60図1・2が11号墓、第61図1が22号墓の箱形の棺である。棺の大きさはほぼ同様で一辺が55.6～58.6cmとなり、残存状況の良好な11号墓は棺高が約70cmほどになる。第59図2、第60図2は蓋板である。板材は針葉樹の板目材を用いている。側板の組み方は、いずれの側面も右側辺に木口面がくるように組んである。釘はいずれも鉄製の角釘であるが、第61図1の側板の上下は木釘で止めてある。第59図2が7号墓、第61図2が25号墓の桶形の棺である。底板の径は約50cmと同様である。第59図2は底板が3枚で木釘で止めてある。第61図2は側板10枚、底板2枚が残存している。ともにタガも残存していた。

漆器（第62図5・6、写真112）：漆器の椀は2点とともに25号墓で、5は棺桶内、6は棺桶外から出土している。5は内面に朱色の漆、外面に黒色の漆が塗られた浅い椀で、高台内に朱書きされた文字がある。6は内外面ともに朱色の漆が塗られた大振りで深い椀である。高台高が2.4cmと高く、高台内のえぐりが0.8cmと深い特徴を有し、このような形態のものは17世紀後半以降にはみられないとされている（古泉：1987）。6にも高台内に朱書きの文字がある。6は箸・匙と共に伴しており、枕飯に使用された飯椀と考えられる。

櫛（第62図7～10、写真113）：櫛は4点すべて墓壙出土である。櫛の形状が丸味の強いもの（8・10）と、丸味の弱いもの（7・9）がある。前者は櫛の断面の背も丸くなっているが、後者はほぼ平坦になっている。櫛目の切り込み上端の線はいずれも櫛に平行している。櫛目は9が最も粗く、7・10がやや粗く、8が細くなっている。

箸（第62図11～19、写真113）：箸は9点あり、すべて墓壙出土である。これらの形態は、ほぼ太さの変わらない寸胴箸（11・12・14・15・17・18）、一端が最大径となり、もう一端が細くなる片口箸（1）、両端が細くなり、中央に最大径のある両口箸（16・19）の三通りに分類される。11・12、13・14、15・16、18・19は対になっているが、形態・長さともに一致するものではなく、不揃いの一膳となっているのが特徴である。これらはおそらく枕飯として供された箸が埋葬時に墓壙に納められたものと考えられる。

提灯（第63図1～12）：提灯の底板と考えられるものが19点あり、いずれも墓壙から出土している。径が7～10mm、厚さが2～3mmの円形ないし隅丸方形の薄い板で、中央に小孔が穿たれている。4・15・19・24号墓で同心円状になった竹ひごとセットで出土していることから提灯の底板と判断された。6には蠟燭を差す軸棒が残存しており、他の底板の小孔も軸棒を通すためのものと思われる。これらの提灯は野辺送りに使用されたものが埋葬時に墓壙に納められたものと考えられる。

折敷（第63図13）：四隅が切り落とされた折敷の底板である。一边は21.2cm（7寸）である。側辺に木釘穴が2ヶ所残っている。枕飯に使用したものが埋葬時に墓壙に納められたものである。数珠（第63図14～19）：数珠は6点すべて木製である。15号墓から1点、2号墓から6点出土している。14は小玉状で径7mm、厚さ4mm、孔径2mmである。15～19はやや長めの偏平な数珠で長さほぼ1cm、幅6～7mm、厚さ2～4mmである。

杖（第64図3～5）：杖は3点でいずれも墓壙出土である。すべて丸木で、3・5には若干加工痕がある。

鳥形木製品（第64図2、写真113）：15号墓出土である。鳥の全形で、頭から胸の部分と胸の部分とが接がれて作られている。目や羽毛、羽根と思われるものが墨書きされている。とくに目はくっきりと描かれている。胸部と胸部の下側に径2mm程の小孔が穿たれており、細い棒状のものが差し込まれていたと思われる。野辺送りの道具のひとつと考えられる。

不明木製品（第64図1、写真113）：3号墓出土である。一端が欠損しているが、両端が尖る三日月状を呈する。

竹製品（第65図1～6）：1～4は、竹の片端を二つのヘラが相対するように作り出したものである。ヘラの部分は幅2～3cm、長さ5～15cmで先端は舌状になっている。いずれも節は抜かれている。用途は不明である。5・6は25号墓出土で、同サイズの細長い竹製品である。両

側辺が薄く削り出され、両端に径1.5mmの小孔が穿たれている。

c. 金属製品

金属製品として、鏡、鉄、刃物、煙管、錢貨などが出土している。墓壙出土のものが圧倒的に多くなっている。

鏡（第65図7、写真113）：完形の銅製の鏡で、背には波に肩の文様があり、「藤原重勝」の銘がある。

鉄（第65図8）：ほぼ完形の鉄製の和鉄である。

刃物（第65図9、写真113）：鎌形の鉄製品で、緩く弯曲しながら一端が細くなり、弯曲の内側が刃部になる。

煙管（第66図1～19、写真113）：煙管は総計19点出土している。そのうちの墓壙出土のものは15点で、そのほとんどは副葬品と考えられる。内訳は雁首が11点、吸口が8点で、両者の組合せのわかる例が3例ある（1・2、3・4、5・6）。いずれも棺の底面から出土し、（3・4）と（5・6）はその出土状態から煙管の全長が判明している。7号墓出土の（3・4）が約17cm、22号墓出土の（5・6）が約22.5cmである。羅字は雁首・吸口にそれぞれ若干残存するのみである。素材は銅と真鍮で一部に鍍金されたもの（1・2）もある。

煙管の形態については古泉（1987）の分類を参考に次のように分類した。

まず雁首は、首部に肩の付くA類（1・8）、肩がなく脇返しが比較的大きく弯曲し、火皿と首部の接合部に補強帶の付くB類（12）、肩がなく首部の弯曲の小さいC類（5・7・11・18）、肩がなく首部の弯曲のなくなるD類（3・9・10・17）の四つに分類される。A・B・C・D類はそれぞれ古泉分類の第2・3・5・6段階に対比される。ただしD類には古泉分類の第6段階の火皿が小型化しその断面形が逆台形になるという特徴はみられない。吸口については、肩の付くA類（2・13・19）、肩がなく側辺が直線的にすぼまるB類（4）、肩がなく側辺がやや弯曲しながらすぼまるC類（6・14・15・16）の三つに分類される。

年代については、古泉（前掲）を参考にすると雁首のA類が17世紀前半、B類が17世紀後半、C類が18世紀後半、D類は19世紀以降となる。

錢貨（第67図、写真□）：錢貨は66点出土している。内訳は寛永通宝52点、仙台通宝2点、永樂通宝1点、元豊通宝1点、不明10点である。墓壙内出土の錢貨は52点で、不明7点を除いた45点がすべて寛永通宝である。寛永通宝は明暦2年（1656）以前に鋳造された古寛永（「寶」の字の17-19画が「ス」の字状）と寛文8年（1668）以降に鋳造された新寛永（「寶」の字の18-19画が「ハ」の字状）とに大別される。これらはさらに細別されるが、ここでは同定不可能なので、新古寛永の大別と背文や特徴的な字体により特定できるものに補足を加えるにとどめたい。

図示した寛永通宝（50を除く）のうち、古寛永は2・14・35～42・51の11点である。そのな

かで37~42の6点はすべて25号墓出土であり、墓壙の年代を決定しうる好資料である。他はすべて新寛永である。そのうち、1・24・34・44は背面に「文」字のある「文錢」で、寛文8~13年(1668~1673)に鋳造されたものである。特徴のある字体として4・7・12・19・21・29がある。これらは「通」字のコ頭が「マ」の字になり(マ頭通)、「永」字が左へかしいでいるのを特徴とする「不旧手」といわれるもので、享保11年(1726)が初鋳である。また、17・28・45は外径が2.1cm、穿径が0.7cmとほかに比べ径が小さく穿径が大きくなっていることから、元文4年(1739)初鋳の「吉田島錢」である可能性が高い。図示できなかったがほかに背文のあるものが2点確認されている。ひとつは背面に「元」字のある寛保元年(1741)初鋳のもので、もう1点は「千」字のある天保4年(1838)石巻初鋳のものである。ともに18号墓出土の癒着した鉄錢である。同様に図示できなかつたが形状(隅丸方形)から仙台通宝(天明4年・1784)と考えられる癒着錢が3層上面から出土している。渡来錢は2点で、50は北宋錢「元豐通宝」(初鋳年代1018年)、他の1点は永樂通宝とともに遺構外出土である。

その他の金属製品(第66図20・21):20は、中央がくびれ両端に方形の小孔のある細長い用途不明の銅製品である。長さ5.0cm、幅0.45cmである。21は、木質部の残った釘である。

(5) 小結

①周辺調査区との層の対応

1987年に東方約37mの所で泉崎満遺跡第3次調査(主浜:1988)が行われている。本調査区との主な層の対応はその層相などから以下になる。

| 本調査 | 泉崎満 3次 |
|----------|----------------------------------|
| 4層 | =IV・V層(古墳時代中期南小泉式期の遺物包含層) |
| 5・6a・6b層 | =VI層 |
| 7層 | =VII層 |
| 8a層 | =VIIIa-1層 |
| 8b層 | =VIIIb層(弥生時代中期樹形圓式期あるいはそれ以前の水田跡) |

②4層5層検出遺構について

S 1 住居跡では床面および床面直上から土師器壺1点、壺4点、甌1点、蓋1点が出土している。これらの土師器は古墳時代中期の南小泉式に比定されるものである。特に甌は体部がやや膨らむ長胴形のもので、類似した資料は岩切鴻ノ巣遺跡1号住居跡に求められる。以上のことからS 1は古墳時代中期の南小泉式期に位置付けられる。なお蓋については類例の増加を待って検討して行きたい。

S K 4では土師器壺1点が出土している。この壺は南小泉式に比定されることから、SK 4

も南小泉式期に位置付られる。またSK4はその位置関係からSI1に伴う遺構である可能性も考えられる。

SK5から出土した高坏は類例がなくその時期を詳細に限定することは困難であるが、おおむね古墳時代前半と捉えられた。よってSK5も同様の時期に位置付られよう。高坏については今後の類例を待つて再検討される必要があろう¹⁴。

溝は12条検出されているがいずれからも時期を決定するような資料は出土していない。遺物はほとんどが非クロロの土器器の小破片で内黒のものがないことや、他の遺構や遺物包含層から出土している遺物がほぼ古墳時代の遺物に限定されていることから、溝も古墳時代の所産と考えられる。

これらの溝のうち、SD6～9はA20・21グリッドに集中しており、しかもほぼ北西方向で並行している。いずれも幅20～50cmと小規模で並行していることからいわゆる「小溝状遺構群」(田中：1981)に該当すると理解される。SD8からは農具痕と思われるものも検出されており畑跡であった可能性が考えられよう。

遺物包含層からは器形のわかるものとして坏1点、甕3点が出土しており、それらも古墳時代中期の南小泉式のものに比定される。この遺物包含層も同時期のものと考えられ、しかもSI1と同時期であることが予想される。一方、泉崎浦遺跡の第3次調査においても基本層IV・V層が遺物包含層として検出されている。今調査の4層と3次調査のIV・V層は層相でも対応する層であり、基本的に同一の層である(主浜前掲)。両者を比較した場合、3次調査では高坏の脚部が3点確認されていることや5C末～6C前半に比定される須恵器坏が出土していること、遺物量が3次の方が多いこと等の相違点が挙げられる。

以上より、4・5層で検出された遺構はほぼ古墳時代中期を中心とするものと考えられ、微高地に集落があり、その南側の緩斜面に遺物包含層が形成されるとともにそこが畠地としても利用されていたことが窺える。

③墓壙群について

墓壙群の時期がある程度限定されるのは9基(25・23・2・5・15・22・14c・7a・18号墓)である。これらは副葬品である寛永通宝の初鋤年代により推定されるものである。25号墓は六道銭の6枚すべてが古寛永であることから17世紀中頃以降の時期が考えられる。共伴する煙管の雁首が17世紀後半、漆器碗が17世紀後半以降にはみられないタイプ(古泉：1987)であることも大きな矛盾とはならない。23・2号墓は文銭(1668～72)から17世紀後半以降、5・15・22号は不旧手(1726)から18世紀前半以降、18号墓は石巻造の鉄銭(1838)から19世紀以降と推定される。また、煙管からもある程度年代を推定することが可能である。7a号墓では底面出土の煙管から19世紀以降と推定される。14c号墓からは17世紀前半と考えられている肩付の煙管

が出土しているが、共伴する陶器碗が18～19世紀であることや、同タイプの煙管が出土した15号墓が18世紀前半以降と考えられることから、肩付のタイプではあるがやや年代が下ったものと考えられ、14c号墓も18世紀前半以降と推定される。

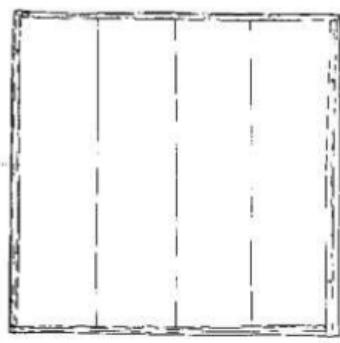
一方、墓壙群の重複関係は、北側の一群では25→18→13号の3段階、中央の一群では20→22→21→7a号、24→14c→14a→14b号の4段階、南の一群では23→2号の2段階がある。そしてこれらの新旧関係と前述した墓壙の年代との間には矛盾する関係は認められない。

以上より、この墓壙群は17世紀中頃から19世紀にかけて、つまりほぼ江戸時代全般にわたり機能していた墓域と理解される。

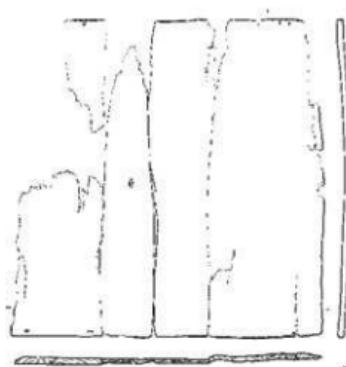
調査区は近世富沢村の範囲にあたる。これらの墓壙群が村の墓域として機能していたものか、いわゆる屋敷墓として機能していたものかについては、他に集落の遺構が検出されていないことから判断不可能であった。

注

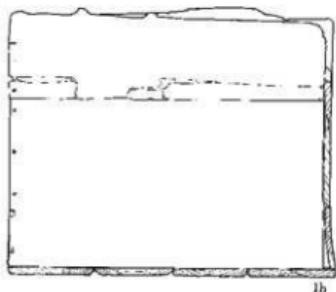
- 1) この高壙は口縁に段を有すること、口縁部がかなり立ち上がるプロポーションである点から、北陸地方に類例を求めることができそうであるが、今後実物との比較などを通じて検討をすすめて行きたい（田嶋：1986）。



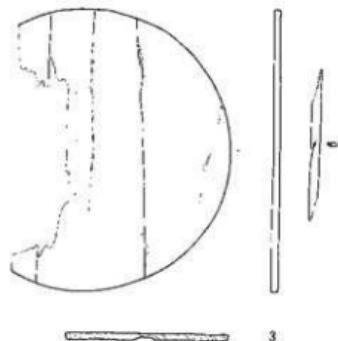
1a



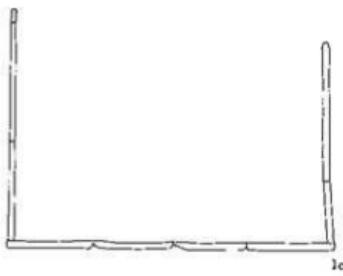
2



1b



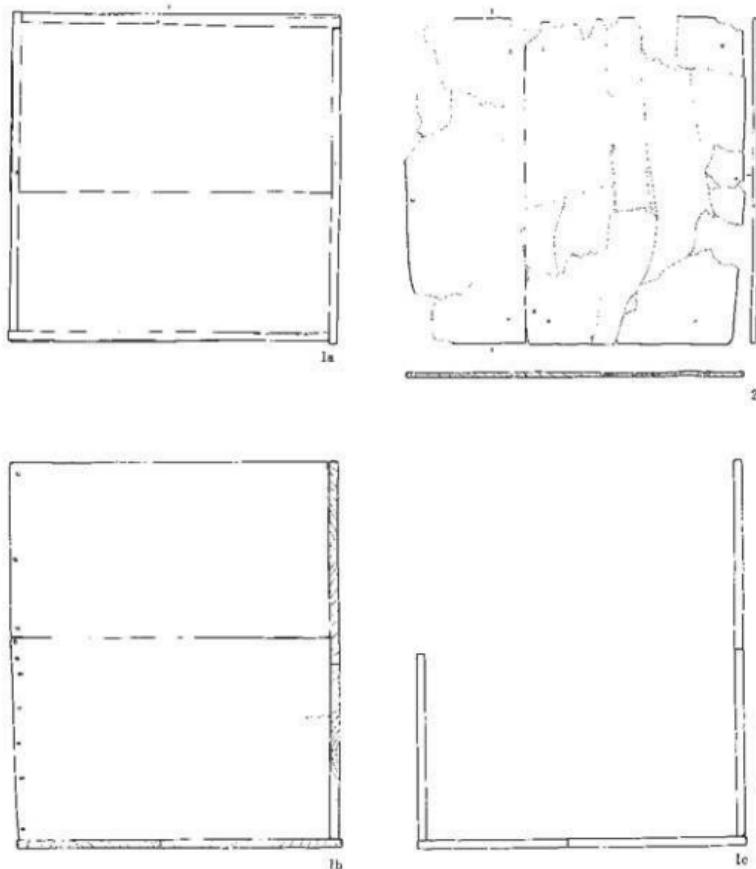
3



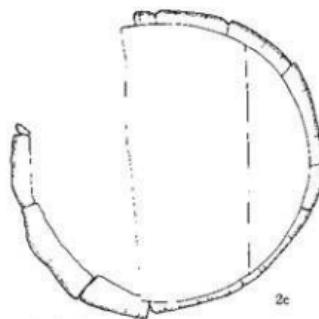
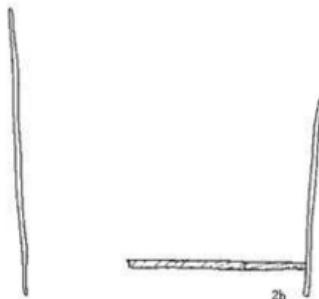
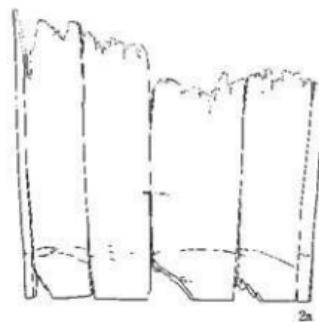
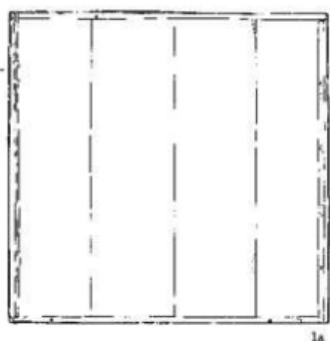
1c

0 20cm 40cm

第59図 泉崎Ⅱ区出土遺物（3）

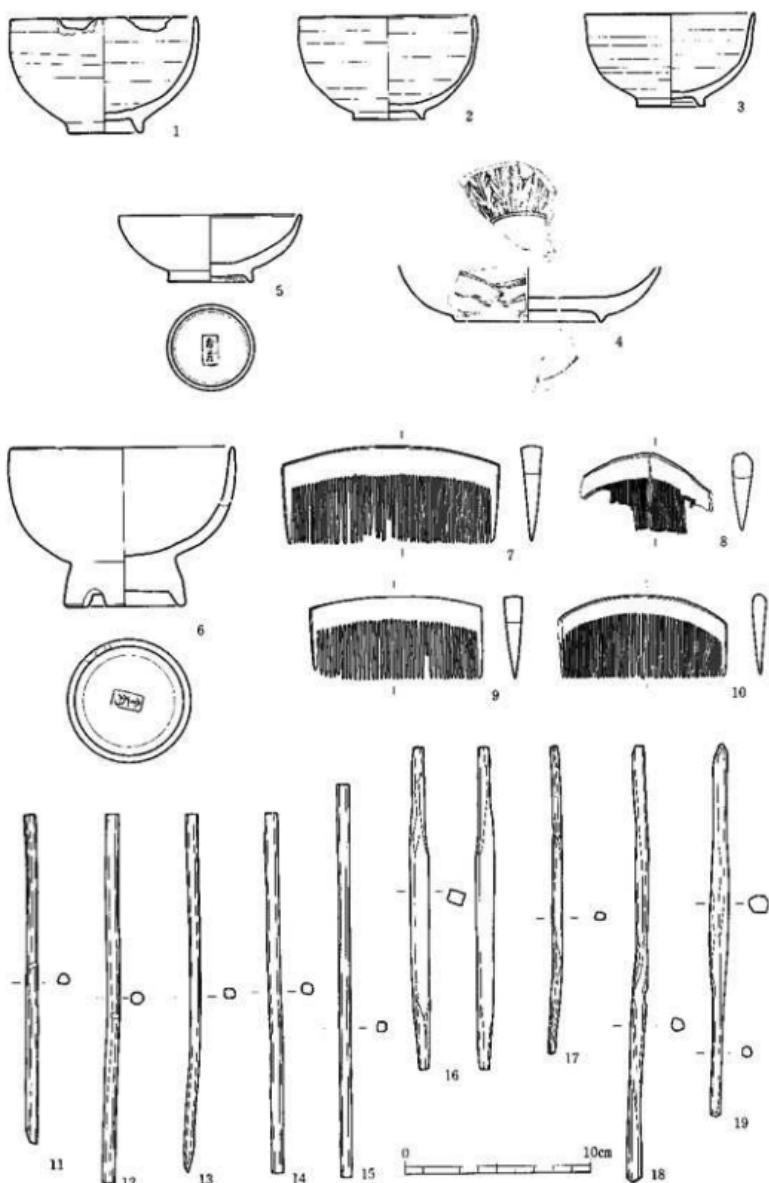


第60図 泉崎Ⅱ区出土遺物（4）

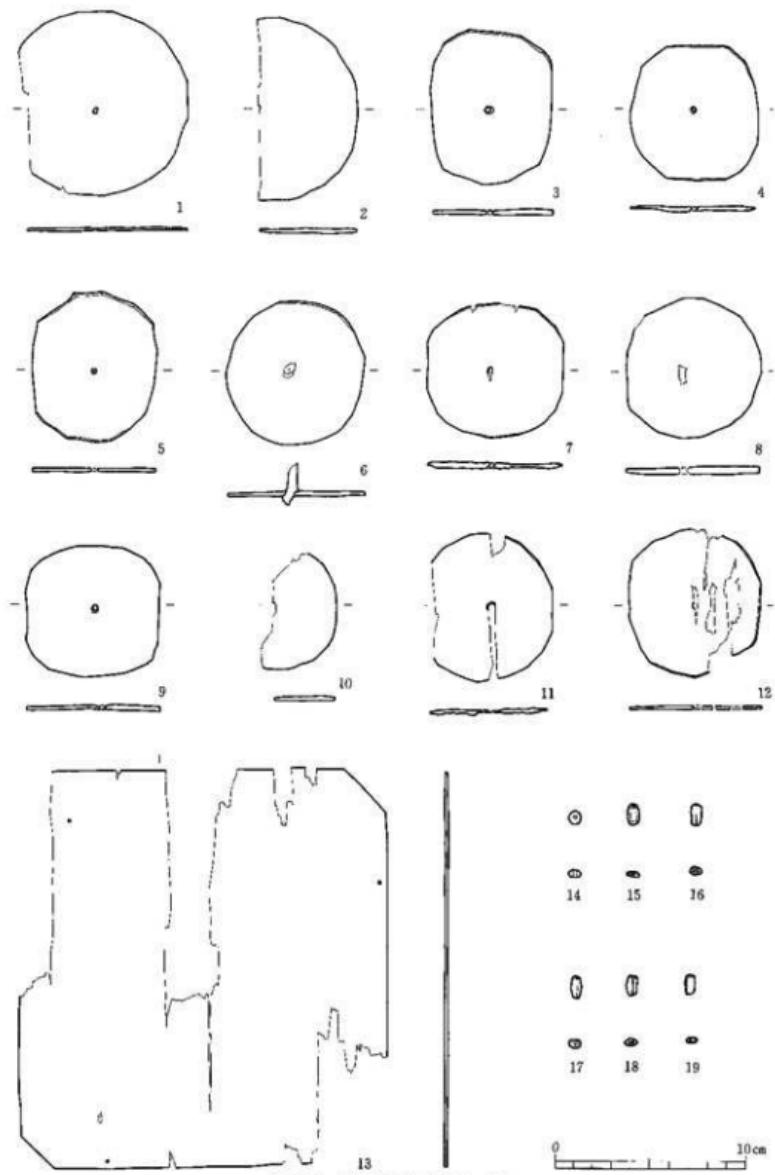


0 20cm 40cm

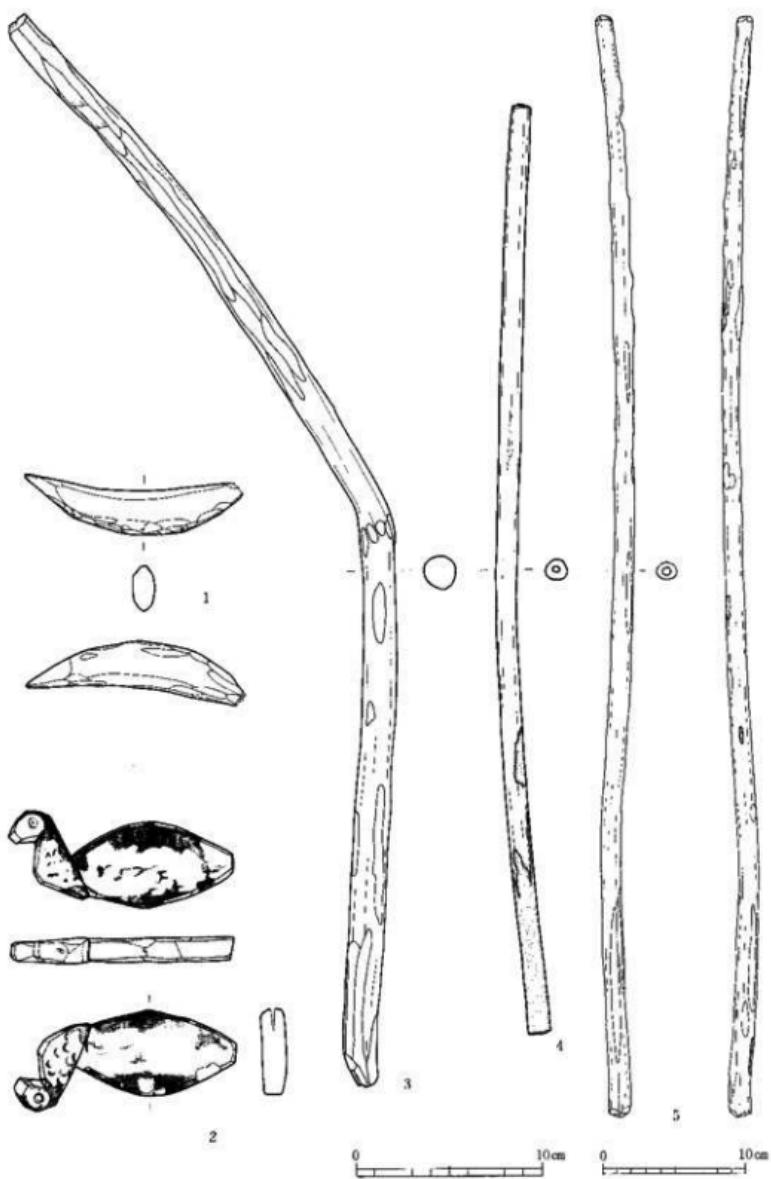
第61図 泉崎Ⅱ区出土遺物（5）



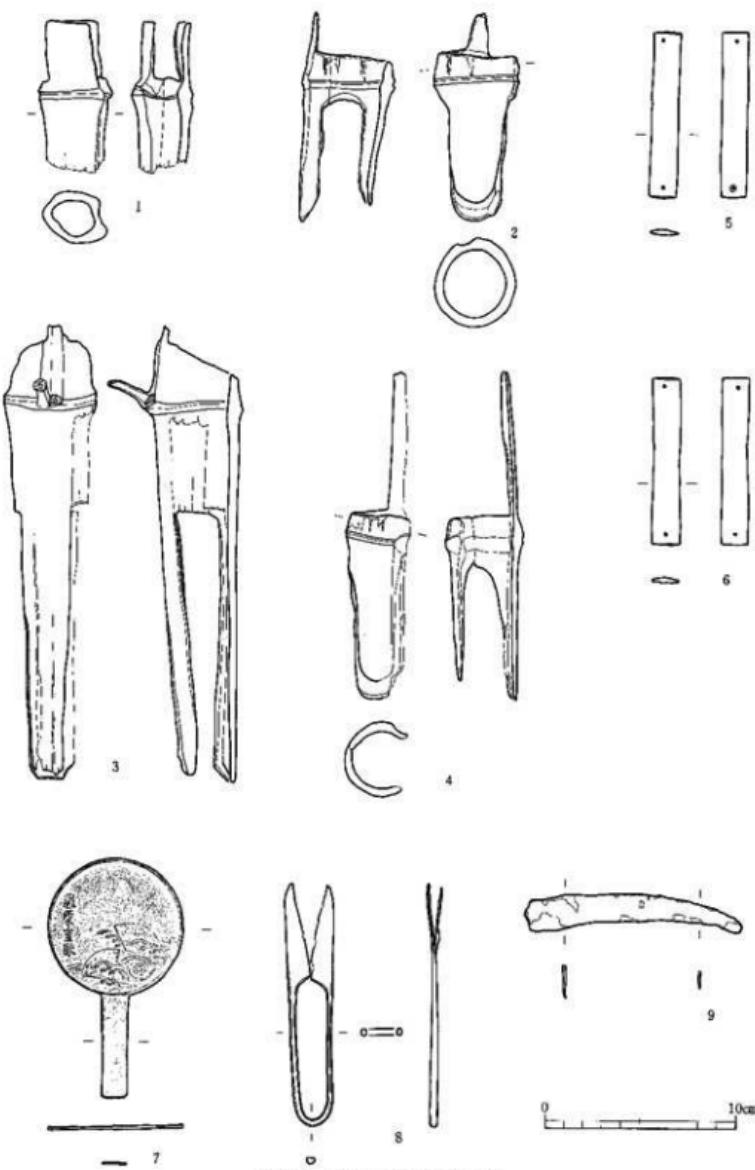
第62図 泉崎II区出土遺物（6）



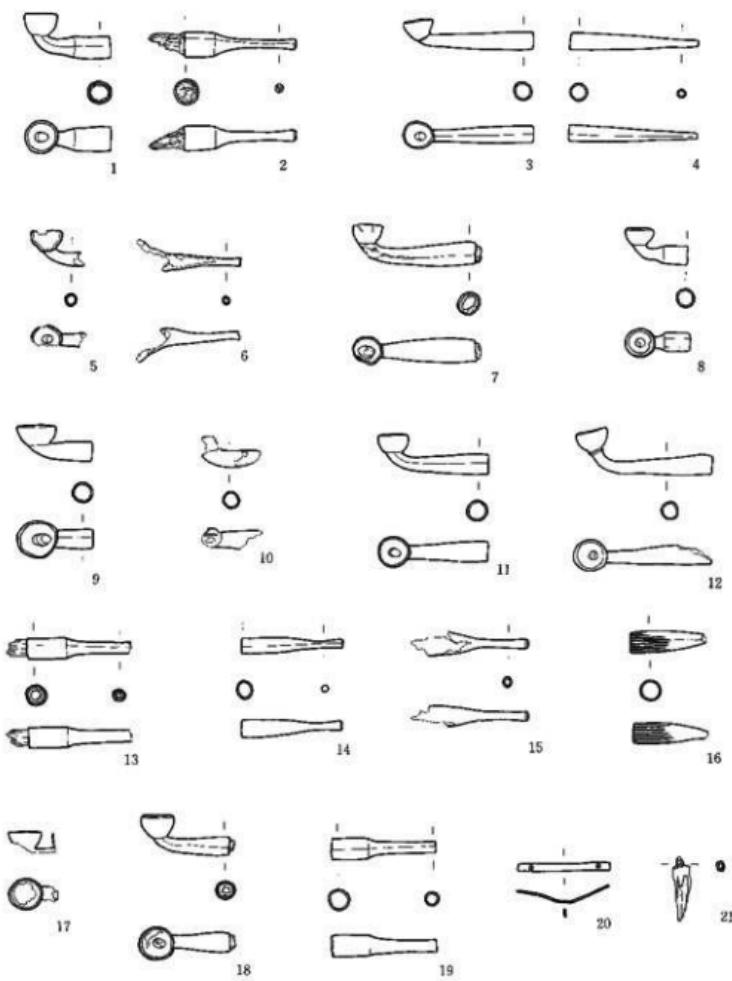
第63図 泉崎II区出土遺物 (7)



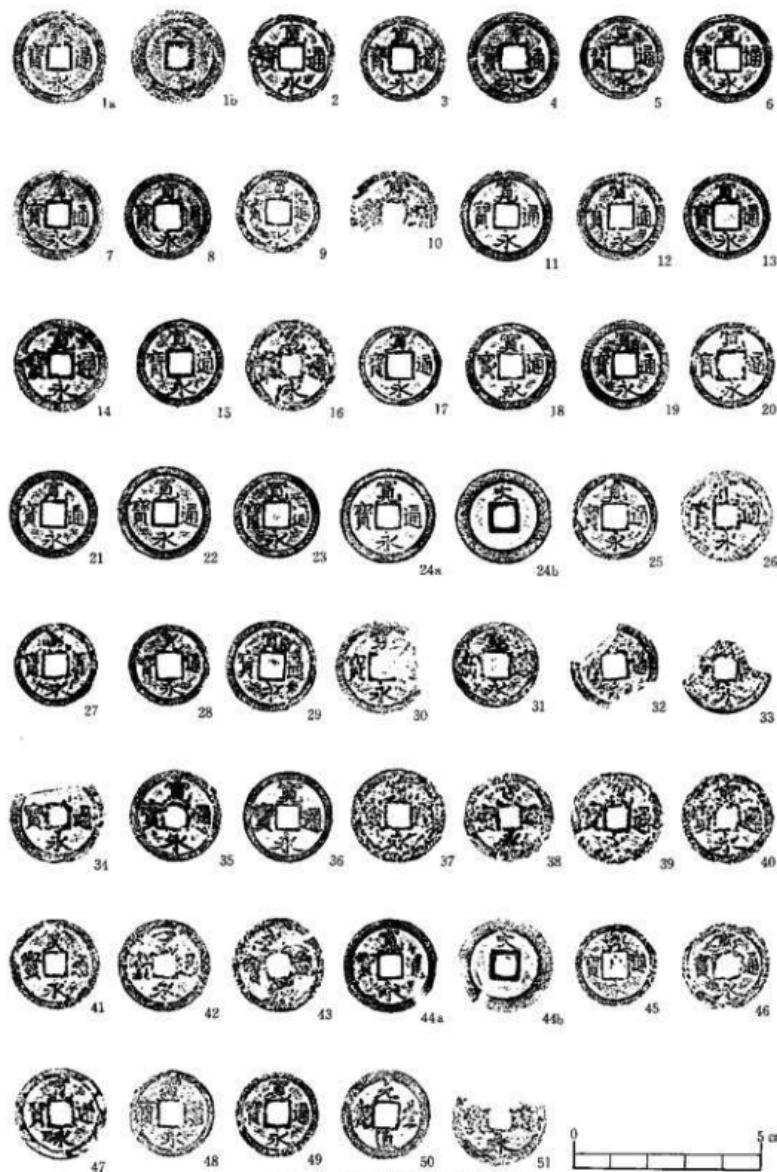
第64図 泉崎Ⅱ区出土遺物 (8)



第65図 泉崎Ⅱ区出土遺物 (9)



第66図 泉崎II区出土遺物 (10)



第67図 泉崎Ⅱ区出土遺物 (11)

第12表 泉崎II区土器器破片集計表

| 部 分 名 | 器 種 名 | 形 態 名 | 調 査 面 | | | | | | 不 規 則 部 | 整 理 部 | 破 片 数 | 試 験 部 | 合 计 | | | | | |
|-------------|---------------|-------------|-------------|-------------|--------|-------------|--------|-------------|------------------|-------------|-------------|-------------|--------|----|----|---|----|----|
| | | | 正 面 | 左 右 面 | 底 面 | 左 右 面 | 底 面 | 左 右 面 | | | | | | | | | | |
| 上 部 部 | 1. 横テラ・横ナゲ | | 1 | | | | | | | | | | 3 | | | | | |
| | 横テラ・ナゲ | | 2 | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | 横ナゲ・不規 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | |
| | 不規・不規 | | | | | 1 | | | | | 8 | 1 | 10 | | | | | |
| | ア・ガ・オ・ダ | | 1 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | |
| | ミガキ・ナゲ | | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | ミガキ・不規 | | | | | | 1 | | | | 1 | | 2 | | | | | |
| | ス・明・ヒヨキ | | | | | | | 2 | | | | | 3 | | | | | |
| | ス・明・エジカ(内側) | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | |
| 中 部 部 | 不規・不規 | | 1 | 1 | 1 | | | 2 | | | 9 | | 12 | | | | | |
| | チ・デー・スガタ | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | 不規・エギサ(内側) | | | | | | | | | | 1 | 1 | 2 | | | | | |
| | 不規・不規 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | チ・デー・スガタ | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | チ・デー・スガタ(内側) | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | チ・デー・スガタ | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | チ・デー・スガタ | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | チ・デー・スガタ | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| 下 部 部 | 横ナゲ・ハマメー不規 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | 横ナゲ・不規 | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | ス・明・横ナゲ | | | | | | | | | | 4 | | 4 | | | | | |
| | ス・明・ハマメ | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | 不規・不規 | | | | | | | | | | 8 | 1 | 9 | | | | | |
| | チ・デー・ア | | 2 | | 1 | 1 | 1 | | 1 | 1 | 2 | | 5 | | | | | |
| | ヘラフ・ア・ダ | | | | | | | | | | 6 | | 6 | | | | | |
| | チ・デー・ハマメー(内側) | | | 1 | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | チ・デー・不規 | | | | | | 1 | | | | 11 | 1 | 14 | | | | | |
| 後 部 部 | ミガキ・ミガキ | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| | ミガキ・不規 | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | ハケメー不規 | | | | | | 1 | | | | | | 0 | | | | | |
| | ハケメーア | | | | | | | | | | 1 | 1 | 2 | | | | | |
| | ヤケメー・ア | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| | ス・明・ア | | 1 | 2 | | | | | | | 11 | 1 | 12 | | | | | |
| | ス・明・ミガキ | | 1 | | | 1 | | | | | | | 2 | | | | | |
| | ス・明・ハセメ | | | 1 | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | 不規・不規 | | 2 | | 3 | 1 | 2 | 2 | 3 | 1 | 3 | 9 | 20 | | | | | |
| 高 部 部 | 不規・ア | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | バ・明・ハセメ | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | バ・明・ミガキ | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | バ・明・ハセメ | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | バ・明・ミガキ | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | カゼリ・ミガキ・ケシリ | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | カゼリ・ミガキ・ケシリ | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | カゼリ・ミガキ・ケシリ | | | | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | |
| | 合 計 | | 6 | 3 | 6 | 1 | 6 | 2 | 4 | 8 | 2 | 1 | 23 | 38 | 96 | 5 | 11 | 67 |

第13表 泉崎II区遺物観察表(1)

土器

| 測定番号 | 特徴 | 出場・部位 | 器 種 | 形 態 | 造 成 | 口徑cm | 底径cm | 高さcm | 備考 | 特 徴 | 直 径 | 底 面 | 高 度 |
|----------|--------|-------|--------|--------|--------|------|------|-------|---|---|--------|--------|--------|
| 49-1 C1 | S11 沈 | 土器底 | 片 | 均 | 1/4 | 12.8 | | 6.2 | 口部下方はコナゲ。底部はヘタナゲ。内底はミガキ。底下14.4cm | 内底下方はコナゲ。底部はヘタナゲ。内底はミガキ。底下14.4cm | 110 | | |
| 49-2 C2 | S11 沈 | 土器底 | 片 | 均 | 2/3 | 18.1 | | 7.4 | コロコロ底コナゲ。大分量外壁はヘタナゲ。内底はミガキ | 内底下方はコナゲ。底部はヘタナゲ。内底はミガキ | 110 | | |
| 49-3 C6 | S11 沈 | 土器底 | 片 | 均 | 1/3 | 20.8 | | | コロコロ底コナゲ | | | | |
| 49-4 C12 | S11 沈 | 土器底 | 裏 | 均 | 1/6 | 25.6 | | | 1.底内面ヨコタグ。体側外面タグ。内底ヘタナゲ | 1.底内面ヨコタグ。体側外面タグ。内底ヘタナゲ | | | |
| 49-5 C4 | S11 沈 | 二輪縦 | 張 | 体-2体 | 1/2 | | 4.4 | | 背筋-ヘタクズリタグ。ヘタカギ。下手ヘタクズリ。内底ヘタナゲ。底下13.7cm | 背筋-ヘタクズリタグ。ヘタカギ。下手ヘタクズリ。内底ヘタナゲ。底下13.7cm | 110 | | |
| 49-6 C3 | S11 沈 | 二輪縦 | 張 | 均 | 3/4 | 23.0 | 24.5 | | 直底7.7cm。外周に上縁ヨコタグ。底上縁ナゲ。下手ヘタクズリ。内底ヘタナゲ。底下13.7cm | 直底7.7cm。外周に上縁ヨコタグ。底上縁ナゲ。下手ヘタクズリ。内底ヘタナゲ。底下13.7cm | 110 | | |
| 49-7 C3 | S11 沈 | 上部縦 | 裏 | 体-1底 | | | 6.8 | | 後脚部外壁タグ。ヘタナゲ | 後脚部外壁タグ。ヘタナゲ | 110 | | |
| 50-1 C7 | SK4 2 | 土器底 | 片 | 均 | 1/4 | 11.6 | | 6.0 | 内底ヘタナゲ。底大底14.2cm | 内底ヘタナゲ。底大底14.2cm | 110 | | |
| 50-2 C9 | B21 4番 | J縫隙 | 片 | 均 | 1/2 | 14.0 | | (5.2) | 大外周高6.7cm。側面4.1cm。底14.4cm | 大外周高6.7cm。側面4.1cm。底14.4cm | 110 | | |
| 50-3 C8 | SK5 | 土器底 | 均 | 約 | 1/4 | 19.0 | | 10.0 | 丸筒丸白色。金剛石合。浅底3.5cm。内底ナゲ。側面ハナゲ。内底ハナゲ | 丸筒丸白色。金剛石合。浅底3.5cm。内底ナゲ。側面ハナゲ。内底ハナゲ | 111 | | |
| 50-4 C17 | B21 4番 | J縫隙 | 片 | 均 | 1/2 | 16.6 | | | 外壁-口部リカナゲ。体側ヘタナゲ。内底風化 | 外壁-口部リカナゲ。体側ヘタナゲ。内底風化 | 110 | | |
| 50-5 C18 | B21 4番 | 土器底 | 張 | 口部-1体 | 1/4 | 21.0 | | | 背筋1.5cmヨコタグ。内底ヘタナゲ。内底風化。底大底26cm | 背筋1.5cmヨコタグ。内底ヘタナゲ。内底風化。底大底26cm | 111 | | |
| 50-6 C13 | B21 4番 | J縫隙 | 片 | 均 | 1/2-中 | 24.8 | | | 大型体部ヘタナゲ。外壁風化。最大径26.2cm | 大型体部ヘタナゲ。外壁風化。最大径26.2cm | 111 | | |
| 50-7 E1 | B21 4番 | 縫隙 | 裏 | 底部凹? | | | | | 当40-1出中口底 | 当40-1出中口底 | | | |

第14表 泉峰II区遺物観察表(2)

石製品

| 出発番号 | 登録番号 | 造形・部位 | 種別 | 造作度 | 大きさ | 幅cm | 厚cm | 高さcm | 石材 | 特徴 | 用 | 可否番号 |
|------|------|--------|--------|-----|------|------|------|-------|-----|------------|---|------|
| SI-1 | L-1 | 石14-4層 | スクレーパー | 完 | 82.0 | 97.5 | 33.0 | - | 砂岩 | - | - | - |
| SI-2 | L-2 | 石21-4層 | 石器 | 6 | 76.0 | 98.1 | 9.1 | 12.2 | 板状岩 | 有孔、DGS-Sex | - | 111 |
| SI-3 | L-3 | 石24-4層 | 石 | 完 | 88.9 | 45.8 | 32.2 | 138.9 | 板状岩 | - | - | 111 |

棺

| 出発番号 | 登録番号 | 造形・部位 | 種別 | 造作度 | 大きさ | 幅cm | 高cm | 特徴 | 用 | 可否番号 | |
|------|------|-------|-----|----------|------|------|------|--------------------|---|------|-----|
| 19-1 | L-1 | 5号墓 | 楕円柱 | 側面下平～底凹凸 | 45.0 | 37.3 | 52.0 | 板状、斜面質、下面のわ割面に木の接觸 | - | - | 111 |
| 19-2 | L-2 | 5号墓 | 楕円柱 | - | - | 55.0 | 55.8 | 板状、斜面質 | - | - | - |
| 19-3 | L-3 | 7号墓 | 楕円柱 | - | - | 50.2 | - | 板口、斜面質 | - | - | - |
| 60-1 | L-4 | 11号墓 | 楕円柱 | 側面～底斜直 | 46.0 | 38.3 | 58.0 | 板状、斜面質 | - | - | 111 |
| 60-2 | L-5 | 11号墓 | 楕円柱 | 底 | - | 59.0 | 52.0 | 板口、斜面質 | - | - | - |
| 61-1 | L-6 | 22号墓 | 楕円柱 | 側面下平～底斜直 | 46.0 | 35.6 | 56.4 | 板口、斜面質 | - | - | 111 |
| 61-2 | L-7 | 35号墓 | 楕円柱 | 側面下平～底斜直 | 45.0 | 30.7 | 49.8 | 板口、斜面質 | - | - | 111 |

陶器類

| 出発番号 | 登録番号 | 造形・部位 | 種別 | 造作度 | 造作度 | 口径cm | 底径cm | 高さcm | 特徴 | 用 | 可否番号 |
|------|------|-------|----|-----|-----|------|------|------|------------------------|---|------|
| 62-1 | L-1 | 4号墓周 | 輪盤 | 底 | - | 18.0 | 4.0 | 6.2 | 紀元、灰褐色、18~19世紀 | - | 111 |
| 62-2 | L-2 | 11号墓 | 輪盤 | 底 | - | 9.3 | 3.8 | 5.5 | 砂質、灰褐色、底無孔(-a)18~19世紀 | - | 111 |
| 62-3 | L-3 | 14号墓周 | 輪盤 | 底 | - | 9.0 | 3.6 | 5.0 | 板口、小腹窓、口腹内(十灰粒)18~19世紀 | - | 111 |
| 62-4 | L-4 | 15号墓周 | 輪盤 | 底 | - | 7.8 | 2.9 | 4.8 | 肥泥、兩孔、口腹 | - | 111 |

漆器

| 出発番号 | 登録番号 | 造形・部位 | 種別 | 造作度 | 大きさ | 幅cm | 高cm | 特徴 | 用 | 可否番号 | |
|------|------|--------|----|-----|------|-----|-----|------|------------------------|------|-----|
| 62-5 | L-5 | 25号墓漆土 | 漆 | - | 9.7 | 4.5 | 3.0 | 0.65 | 外灰黑色、内赤紫色、漆? | - | 111 |
| 62-6 | L-9 | 25号墓 | 漆 | - | 11.8 | 6.5 | 4.3 | 2.4 | 内灰黑色、口内ぐら高0.8cm、ブナ属の一種 | - | 111 |

櫛

| 出発番号 | 登録番号 | 造形・部位 | 種別 | 造作度 | 大きさ | 幅cm | 高cm | 特徴 | 用 | 可否番号 | |
|-------|------|-------|----|-----|------|-----|-----|----------|---|------|-----|
| 62-7 | L-10 | 5号墓 | - | - | 11.6 | 5.2 | 1.1 | - | - | - | 111 |
| 62-8 | L-11 | 22号墓 | - | - | 27.0 | 4.3 | 1.1 | 弧形櫛(歯孔付) | - | - | 111 |
| 62-9 | L-12 | 7号墓 | - | - | 9.3 | 4.5 | 1.0 | - | - | - | - |
| 62-10 | L-13 | 7号墓漆付 | - | - | 8.9 | 4.5 | 0.7 | - | - | - | 111 |

箸

| 出発番号 | 登録番号 | 造形・部位 | 種別 | 造作度 | 大きさ | 幅cm | 高cm | 特徴 | 用 | 可否番号 | |
|-------|------|-------|----|-----|------|------|-----|-----------------|---|------|-----|
| 62-11 | L-14 | 4号墓 | 光形 | - | 27.6 | 6.65 | - | 更彎曲、多角形 | - | - | - |
| 62-12 | L-15 | 4号墓 | 光形 | - | 19.8 | 6.7 | - | 弓彎曲、多角形、ズボ | - | - | 111 |
| 62-13 | L-16 | 5号墓 | 光形 | - | 19.3 | 6.55 | - | 弓彎曲、多角形 | - | - | - |
| 62-14 | L-17 | 5号墓 | 光形 | - | 19.4 | 6.6 | - | 寸彎曲、多角形 | - | - | - |
| 62-15 | L-18 | 11号墓 | 光形 | - | 21.3 | 6.5 | - | 寸彎曲、多角形 | - | - | - |
| 62-16 | L-19 | 11号墓 | 光形 | - | 27.5 | 9.5 | - | 弯D型、中央凹凸形、両端多角形 | - | - | - |
| 62-17 | L-20 | 15号墓 | 光形 | - | 16.0 | 6.6 | - | D型、多角形 | - | - | - |
| 62-18 | L-21 | 15号墓 | 光形 | - | 23.5 | 6.7 | - | 寸彎曲、多角形 | - | - | - |
| 62-19 | L-22 | 23号墓 | 光形 | - | 39.0 | 1.6 | - | 内凹型、多角形 | - | - | - |

提灯

第15表 泉崎II区遺物觀察表(3)

| 出発番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 遺存度 | 長 cm | 幅 cm | 厚さ cm | 特徴 | | 写真番号 |
|-------|------|-------|-------|------|------|-------|----|---|------|
| | | | | | | | 件 | 枚 | |
| 63-1 | L23 | 11号灰 | は焼形 | 10.0 | 0.2 | 円形 | | | |
| 63-2 | L24 | 11号灰 | L/2 | 9.3 | 0.3 | 円形 | | | |
| 63-3 | L25 | 15号灰 | 丸形 | 8.2 | 0.5 | 圓丸形 | | | |
| 63-4 | L26 | 15号灰 | 丸形 | 7.7 | 0.3 | 圓丸形 | | | |
| 63-5 | L27 | 15号灰 | 丸形 | 8.0 | 0.2 | 圓丸形 | | | |
| 63-6 | L28 | 15号灰 | 丸形 | 7.6 | 0.5 | 円形 | | | |
| 63-7 | L29 | 19号灰 | 丸形 | 7.3 | 3.5 | 中央偏丸形 | | | |
| 63-8 | L30 | 17号灰 | は焼形 | 7.5 | 0.4 | 円形 | | | |
| 63-9 | L31 | 19号灰 | 丸形 | 7.0 | 0.3 | 中央偏丸形 | | | |
| 63-10 | L32 | 22号灰 | L/2 | 6.4 | 0.5 | 円形 | | | |
| 63-11 | L33 | 25号灰 | 12.6形 | 8.0 | 0.3 | 円形 | | | |
| 63-12 | L34 | 25号灰 | は焼形 | 7.9 | 0.2 | 円形 | | | |

折敷

| 出発番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 遺存度 | 長 cm | 幅 cm | 厚さ cm | 特徴 | | 写真番号 |
|-------|------|-------|-----|------|------|-------|----|---|------|
| | | | | | | | 件 | 枚 | |
| 63-13 | L35 | 11号灰 | | 21.2 | 19.7 | 0.2 | | | |

数珠

| 出発番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 遺存度 | 長 cm | 幅 cm | 厚さ cm | 特徴 | | 写真番号 |
|-------|------|-------|-----|------|------|-------|---------|---|------|
| | | | | | | | 件 | 枚 | |
| 63-14 | L36 | 25号基 | | 4 | 7 | 4 | 2×2 | | |
| 63-15 | L37 | 1号基 | | 11 | 7 | 3 | 2×1 | | |
| 63-16 | L37 | 2号基 | | 12 | 9.3 | 5 | 3.5×1 | | |
| 63-17 | L32 | 2号基 | | 11.5 | 6.5 | 5 | 1×1 | | |
| 63-18 | L37 | 2号基 | | 19.5 | 6.5 | 4 | 2.5×0.3 | | |
| 63-19 | L37 | 2号基 | | 10.5 | 5.5 | 3 | 1.2×1 | | |

その他の木製品

| 出発番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 遺存度 | 長 cm | 幅 cm | 高さ cm | 厚さ cm | 特徴 | | 写真番号 |
|------|------|-------|-------|------|------|-------|-------|------------|---|------|
| | | | | | | | | 件 | 枚 | |
| 64-1 | L38 | 3号基 | 不明木製品 | 11.8 | 2.4 | 3.2 | 1.2 | 斜傾、6.1高の一枚 | | |
| 64-2 | L38 | 15号基 | 魚形木製品 | 11.9 | 5.2 | 1.3 | 1.6 | 斜傾、マツ高の一體 | | |
| 64-3 | L40 | 3号基 | 枕形木製品 | 63.4 | | 1.6 | | | | |
| 64-4 | L41 | 11号基 | 枕形木製品 | 59.1 | | 1.2 | | | | |
| 64-5 | L42 | 19号基 | 枕形木製品 | 78.7 | | 1.2 | | | | |

竹製品

| 出発番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 遺存度 | 長 cm | 幅 cm | 高さ cm | 厚さ cm | 特徴 | | 写真番号 |
|------|------|-------|-----|------|------|-------|-------|----|---|------|
| | | | | | | | | 件 | 枚 | |
| 65-1 | L43 | 15号基 | | 8.2 | 4 | | | | | |
| 65-2 | L44 | 20号基 | | 11.1 | 4.6 | | | | | |
| 65-3 | L45 | 15号基 | | 74.5 | 5.1 | | | | | |
| 65-4 | L46 | 20号基 | | 13.7 | 4.2 | | | | | |
| 65-5 | L47 | 25号基 | | 8.9 | 1.4 | 0.3 | | | | |
| 65-6 | L47 | 25号基 | | 8.9 | 1.4 | 0.3 | | | | |

第16表 泉崎II区遺物観察表(4)

銅・鉄

| 出発番号 | 遺物番号 | 遺物名 | 形状・部位 | 器種 | 直径 | 高さ | 厚さ | 目 | 備考 | 写真番号 |
|------|------|-----|-------|----|------|-----|-----|---------------|----|------|
| 65-7 | N56 | 丁字鉄 | 鉄 | 丸形 | 12.7 | 7.5 | 3.2 | 鋸刃、背に「鷹頭半跡」の跡 | | 115 |
| 65-8 | N76 | 丁字鉄 | 鉄 | 丸形 | 13.8 | 8.5 | 3.4 | 鋸刃 | | |
| 65-9 | N77 | 丁字鉄 | 鉄 | 丸形 | 12.4 | 7.3 | 3.0 | 鋸刃 | | 115 |

焼管

| 出発番号 | 遺物番号 | 遺物名 | 形状・部位 | 直径 | 高さ | 内径 | 外径 | 壁厚 | 目 | 備考 | 写真番号 | |
|-------|------|------|-------|----|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| 66-1 | N72 | 5号管 | 圓筒 | 丸形 | 46.3 | 24.3 | 18.0 | 12.3 | 12.5 | 10.7 | A | 116 |
| 66-2 | N73 | 5号管 | 吸口 | 丸形 | 60.3 | — | — | — | 13.9 | 9.1 | A | 116 |
| 66-3 | N74 | 7号管 | 圓筒 | 丸形 | 68.2 | 11.6 | 15.1 | 9.2 | 9.1 | 12.8 | D | 116 |
| 66-4 | N75 | 7号管 | 吸口 | 丸形 | 68.6 | — | — | — | 8.9 | 8.5 | B | 116 |
| 66-5 | N76 | 22号管 | 圓筒 | 丸形 | — | 18.6 | 16.3 | 11.1 | 1.8 | C | | 116 |
| 66-6 | N77 | 22号管 | 吸口 | 丸形 | — | — | — | — | 1.3 | C | | 116 |
| 66-7 | N78 | 7号管 | 圓筒 | 丸形 | 68.7 | 19.1 | 15.4 | 11.7 | 12.1 | 6.5 | C | 116 |
| 66-8 | N79 | 14号管 | 圓筒 | 丸形 | 33.8 | 19.1 | 15.3 | 10.5 | 10.2 | 3.6 | A | 116 |
| 66-9 | N80 | 78号瓦 | 圓筒 | 丸形 | 40.7 | 17.5 | 13.3 | 11.5 | 10.4 | 7.0 | D | 116 |
| 66-10 | N81 | 15号管 | 圓筒 | 丸形 | — | — | — | — | 3.0 | D | | 116 |
| 66-11 | N82 | 15号管 | 端面 | 丸形 | 57.8 | 18.6 | 16.2 | 11.6 | 11.0 | 9.5 | C | 116 |
| 66-12 | N83 | 35号瓦 | 圓筒 | 丸形 | 72.5 | 24.3 | 17.5 | 13.8 | 10.6 | 7.6 | B | 116 |
| 66-13 | N84 | 1号管 | 吸口 | 丸形 | — | — | — | — | 10.8 | 6.3 | A | 116 |
| 66-14 | N85 | 3号瓦 | 吸口 | 丸形 | 54.3 | — | — | — | 8.9 | 5.4 | C | 116 |
| 66-15 | N86 | 18号瓦 | 吸口 | 丸形 | — | — | — | — | — | C | | 116 |
| 66-16 | N87 | 18号瓦 | 吸口 | 丸形 | — | — | — | — | 13.0 | 3.6 | C | 116 |
| 66-17 | N88 | 18号瓦 | 吸口 | 丸形 | — | — | — | — | — | 1.9 | D | 116 |
| 66-18 | N89 | 18号瓦 | 吸口 | 丸形 | 47.5 | 19.1 | 17.7 | 11.5 | 9.9 | 7.0 | C | 116 |
| 66-19 | N90 | 18号瓦 | 吸口 | 丸形 | — | — | — | — | 11.7 | 5.4 | A | 116 |

鉢

| 出発番号 | 遺物番号 | 遺物名 | 形状・部位 | 器種 | 外径 | 内径 | 高さ | 厚さ | 目 | 備考 | 写真番号 |
|-------|------|------|-------|------|-----|-----|-----|--------------|------------|----|------|
| 67-1 | N1 | 2号鉢 | 束縫式 | 25.2 | 5.5 | 1.8 | 4.2 | 建文6年(1404) | 新瓦灰、文様 | | 117 |
| 67-2 | N2 | 2号鉢 | 束縫式 | 24.3 | 5.7 | 1.8 | 3.6 | 明治2年(1869)以前 | 古灰灰 | | 117 |
| 67-3 | N3 | 2号鉢 | 束縫式 | 23.0 | 6.5 | 1.2 | 2.6 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-4 | N4 | 5号鉢 | 束縫式 | 24.4 | 6.3 | 1.3 | 1.7 | 泰和11年(1270) | 新瓦灰、文様、手削子 | | 117 |
| 67-5 | N5 | 3号鉢 | 束縫式 | 22.7 | 6.2 | 1.3 | 2.5 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-6 | N6 | 5号鉢 | 束縫式 | 23.9 | 6.3 | 1.0 | 2.3 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-7 | N7 | 3号鉢 | 束縫式 | 24.3 | 6.3 | 1.1 | 2.7 | 泰和11年(1270) | 新瓦灰、文様、不削子 | | 117 |
| 67-8 | N8 | 3号鉢 | 束縫式 | 22.2 | 6.3 | 1.4 | 2.2 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-9 | N9 | 3号鉢 | 束縫式 | 22.6 | 6.3 | 1.1 | 1.8 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-10 | N10 | 9号鉢 | 束縫式 | 23.1 | 6.5 | 1.1 | 1.5 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-11 | N11 | 15号鉢 | 束縫式 | 24.7 | 5.9 | 1.6 | 3.6 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-12 | N12 | 13号鉢 | 束縫式 | 24.8 | 6.0 | 1.2 | 3.0 | 泰和11年(1270) | 新瓦灰、文様、不削子 | | 117 |
| 67-13 | N13 | 15号鉢 | 束縫式 | 23.1 | 6.3 | 1.1 | 2.5 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-14 | N14 | 13号鉢 | 束縫式 | 25.2 | 5.3 | 1.8 | 4.1 | 明治2年(1869)以前 | 古灰灰 | | 117 |
| 67-15 | N15 | 15号鉢 | 束縫式 | 23.5 | 5.7 | 1.1 | 3.2 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-16 | N16 | 18号鉢 | 束縫式 | 24.2 | 5.5 | 1.6 | 3.5 | | | | 117 |
| 67-17 | N17 | 18号鉢 | 束縫式 | 22.7 | 6.5 | 1.2 | 2.3 | 大正6年(1917) | 新瓦灰、A口急放? | | 117 |
| 67-18 | N18 | 18号鉢 | 束縫式 | 22.9 | 5.5 | 1.7 | 2.4 | | 新瓦灰 | | 117 |
| 67-19 | N19 | 18号鉢 | 束縫式 | 23.9 | 5.9 | 1.0 | 2.6 | 泰和11年(1270) | 新瓦灰、文様、手削子 | | 117 |
| 67-20 | N20 | 18号鉢 | 束縫式 | 23.5 | 6.2 | 1.6 | 2.6 | | 新瓦灰、鉄錆 | | 117 |

第17表 泉崎II区遺物観察表(5)

鉢質(続)

| 登録番号 | 遺物番号 | 遺跡・層位 | 器 形 | 内径mm | 外径mm | 高さ mm | 断面 | 年 代 | 特 徴 | 参考番号 |
|-------|------|---------|-----|------|------|---------|------|--------------|---------------|------|
| 67-21 | N21 | 18号墓 | 束水甌 | 23.6 | 6.6 | 1.5 | 4.0 | 平安11年(1726) | 斜直火、火照過、小油手 | 114 |
| 67-22 | N22 | 18号墓 | 束水甌 | 18.0 | 5.6 | 1.4 | 2.7 | | 古甌 | 114 |
| 67-23 | N23 | 18号墓 | 束水甌 | 22.2 | 6.2 | 1.2 | 3.0 | | 新甌 | 114 |
| 67-24 | N24 | 18号墓 | 束水甌 | 25.6 | 6.8 | 1.3 | 3.5 | 寛文6年(1696) | 古甌、火照 | 114 |
| 67-25 | N25 | 18号墓 | 束水甌 | 23.0 | 6.3 | 1.4 | 2.2 | | 新甌 | 114 |
| | N26 | 18号墓 | 束水甌 | | | 2.4 | 5.5 | | 古甌、火照過 | 114 |
| | N27 | 19号墓 | 束水甌 | | | 2.6 | 5.8 | 寛定元年(1711) | 斜直火、火照過、火照「火」 | 114 |
| | N28 | 19号墓 | 束水甌 | | | 2.1 | 13.3 | 天保4年(1833) | 斜直火、火照過、火照「手」 | 114 |
| 67-26 | N29 | 22号墓 | 束水甌 | 24.6 | 5.8 | 1.6 | 3.0 | | 古甌 | 114 |
| 67-27 | N30 | 22号墓 | 束水甌 | 22.5 | 5.7 | 1.6 | 2.4 | | 新甌 | 114 |
| 67-28 | N31 | 22号墓 | 束水甌 | 21.8 | 6.6 | 1.7 | 2.0 | 寛文4年(1724) | 古甌、古印萬能? | 114 |
| 67-29 | N32 | 22号墓 | 束水甌 | 24.7 | 6.6 | 1.9 | 2.1 | 寛保11年(1731) | | 114 |
| 67-30 | N33 | 22号墓 | 束水甌 | 16.9 | | 1.4 | 1.7 | | 新甌 | 114 |
| 67-31 | N34 | 22号墓 | 束水甌 | 22.9 | 6.7 | 1.1 | 1.8 | | 新甌 | 114 |
| 67-32 | N35 | 22号墓 | 束水甌 | 23.4 | 6.5 | 1.6 | 1.1 | | 古甌 | 114 |
| 67-33 | N36 | 23号墓 | 束水甌 | | | 5.6 | 1.9 | 2.4 | | 114 |
| 67-34 | N37 | 23号墓 | 束水甌 | 23.4 | 5.1 | 1.9 | 3.2 | 寛文6年(1696) | 新甌、火照 | 114 |
| 67-35 | N38 | 23号墓 | 束水甌 | 24.5 | 5.1 | 2.0 | 3.9 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-36 | N39 | 23号墓 | 束水甌 | 25.2 | 5.8 | 1.3 | 2.6 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-37 | N40 | 25号墓 | 束水甌 | 25.3 | 3.9 | 1.6 | 3.5 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-38 | N41 | 25号墓 | 束水甌 | 23.9 | 3.2 | 1.2 | 3.4 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-39 | N42 | 25号墓 | 束水甌 | 24.6 | 5.1 | 1.9 | 4.3 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-40 | N43 | 25号墓 | 束水甌 | 26.6 | 3.5 | 1.7 | 3.4 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-41 | N44 | 25号墓 | 束水甌 | 24.4 | 5.2 | 1.9 | 3.5 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-42 | N45 | 25号墓 | 束水甌 | 24.7 | 5.3 | 2.0 | 3.0 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |
| 67-43 | N46 | B10 3層上 | 束水甌 | | | 4.1 | 8.5 | | 新甌、火照過 | 114 |
| 67-44 | N47 | B10 3層上 | 束水甌 | 25.3 | 5.6 | 1.3 | 2.7 | 寛文6年(1696) | 古甌、火照 | 114 |
| | N48 | B10 3層上 | 束水甌 | | | | 0.7 | | 新甌 | 114 |
| 67-45 | N49 | B10 3層上 | 束水甌 | 21.7 | 6.7 | 0.9 | 1.1 | 寛文4年(1720) | 古甌、古印萬能? | 114 |
| 67-46 | N50 | B10 3層上 | 束水甌 | 22.3 | 5.8 | 1.6 | 2.7 | | 新甌 | 114 |
| 67-47 | N51 | B10 3層上 | 束水甌 | 24.7 | 5.7 | 1.7 | 2.4 | | 新甌 | 114 |
| 67-48 | N52 | B10 3層上 | 束水甌 | 23.2 | 4.3 | 1.3 | 2.1 | | 新甌 | 114 |
| | N53 | B10 3層上 | 束水甌 | 22.0 | 5.6 | 2.0-5.1 | 4.5 | 天保4年(1784) | 2枚過 | 114 |
| 67-49 | N54 | 普 通 | 束水甌 | 21.8 | 5.2 | | | | | 114 |
| 67-50 | N55 | 不 明 | 束水甌 | 21.9 | 5.7 | 1.5 | 2.5 | 天保4年(1784) | 丸輪底 | 114 |
| 67-51 | N57 | B10 3層上 | 束水甌 | 25.1 | 5.6 | 1.5 | 3.9 | 明和2年(1765)以前 | 古甌 | 114 |

4. 泉崎III区

(1) 調査区の位置

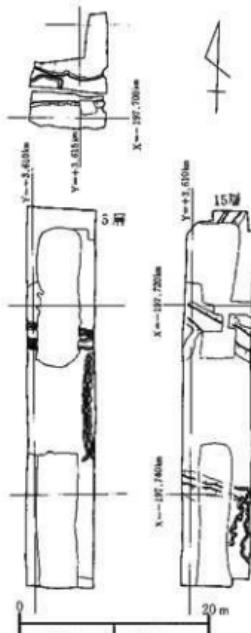
調査地点は、金洗沢が形成した微高地（II-1 参照）の東端部北辺の微高地裾部から後背湿地にかけての部分に位置する。区画整理以前は北東へ緩く傾斜をもつ畠地と水田で、その標高は11.06～10.98mであった。

(2) 基本層序

確認された基本層序は1～18層である。層序を大まかにみると、1～8層が砂、シルトおよび粘土層で、9層以下が泥炭質粘土層となる。試掘結果によれば、泥炭質粘土層は標高約8.5mまで連続する。以下はグライ化した層になり、標高約8mで固い青灰色粘土層となる。礫層は未確認だが、地下鉄工事の際のボーリング調査（No.19）から約5mと推定される。なお、1層および2層の一部は調査当初に除去したため、土層断面図では欠落している部分が多い。

1a層：灰黄褐色（10YR4/1）シルト。旧耕作土。

1b層：褐色（10YR4/4）シルト。鉄分の集積層である。



2a層：黒褐色（10YR3/1）砂質シルト。白色礫（径2～5mm）を含む。

2b層：黒褐色（10YR2/2）シルト。白色礫（径2～5mm）を含む。層厚は10～20cmでほぼ全域に分布する。下面に凹凸が認められ、水田耕作土の可能性がある。

3層：にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂。層厚4～14cmで、調査区の南半部に分布する。自然堆積層である。

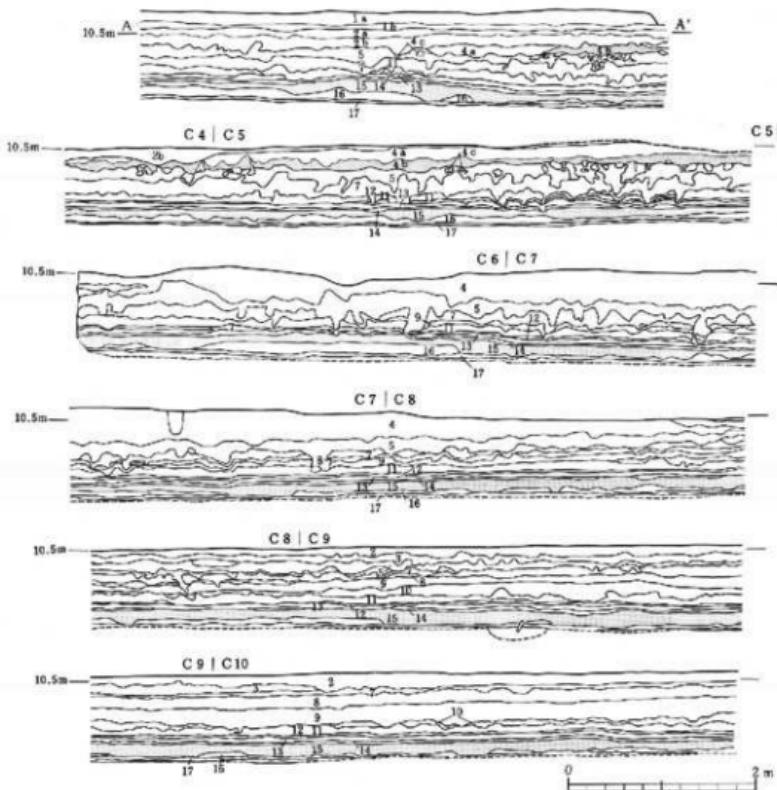
4a層：にぶい黄色（2.5Y6/3）砂。層厚は10～40cmで、調査区中央部に厚く堆積している。灰白色火山灰の部分的な分布が7・8グリッド境界付近の4a層上面で確認されている。下部がやや白っぽく（2.5Y7/3）なっている。自然堆積層である。

4b層：黄灰色（2.5Y5/1）砂質シルト。層厚は5～16cmで、5層水田跡の畦畔2の北側に分布する。上面下面に凹凸が認められる。水田耕作土であり、上面に人・牛の足跡が認められる。

4c層：にぶい黄橙色（10YR6/3）粗砂。足跡内の堆積土としてほぼ全域に分布する。

5層：オリーブ黒色（5Y3/1）粘土。層厚は8～18cmで、ほぼ全

第68図 泉崎III区遺構配置図



| 序号 | 土色 | 土質 | 厚さ | 著人物 | 標名 |
|-----|--------|-----------|-------|------------------|-----------------------------|
| 1.a | 灰黃褐色 | 10YR 4/4 | シルト | | |
| 1.b | 褐色 | 10YR 4/4 | シルト | | |
| 2.a | 深褐色 | 10YR 3/4 | 砂質シルト | | |
| 2.b | 黒褐色 | 10YR 2/4 | シルト | 白色縞を含む 白色縞を含む | 自然堆積層 部分の風化層 |
| 3 | に赤い褐色 | 7.5YR 4/4 | 砂 | 4-14cm | |
| 4.a | に赤い褐色 | 7.5YR 4/4 | 砂 | 10-40cm | |
| 4.b | 黄灰色 | 2.5Y 3/4 | 砂質シルト | 5-15cm | 自然堆積層 水田耕作上 上部に入・手の足跡 |
| 4.c | に赤い褐色 | 10Y R 4/4 | 粘土 | | 足室内の堆積土 |
| 5 | オリーブ褐色 | 5 YR 4/4 | 粘土 | 8-30cm | 水田耕作土 |
| 6 | に赤い褐色 | 10Y R 4/4 | 粘土 | 4-7cm | |
| 7 | 褐色 | 5 YR 4/4 | 粘土 | 5-20cm | 植物 出土 |
| 8 | に赤い黄褐色 | 3.5Y 4/4 | 砂 | 2-15cm | 自然堆積層 |
| 9 | 灰黃褐色 | 10Y R 4/4 | シルト | | |
| 9 | に赤い褐色 | 10Y R 4/4 | 砂質 | 4-25cm | 瓦層 自然堆積層 |
| 10 | 黒色 | 10Y R 4/4 | 泥炭質粘土 | | |
| 10 | に赤い黄褐色 | 10Y R 4/4 | 粘土 | 4-16cm | 自然堆積層 |
| 11 | 赤褐色 | 5 YR 4/4 | シルト | 5-12cm | 瓦層 自然堆積層 |
| 12 | 褐色 | 10Y R 4/4 | 泥炭質粘土 | 2-6cm | 自然堆積層 |
| 13 | 褐色 | 5 YR 4/4 | 泥炭質粘土 | 2-8cm | 自然堆積層 |
| 14 | 黒褐色 | 10Y R 4/4 | 泥炭質粘土 | 2-5cm | 自然堆積層 |
| 15 | オリーブ褐色 | 5 YR 4/4 | 泥炭質粘土 | 4-17cm | 瓦層 自然堆積層 |
| 15 | 灰黃褐色 | 10Y R 4/4 | 粘土 | | |
| 16 | 褐色 | 2.5Y 4/4 | 泥炭質粘土 | 4-24cm | 瓦層 自然堆積層 |
| 17 | 暗灰褐色 | 2.5Y 4/4 | 粘土 | 2-5cm | 自然堆積層 |
| 18 | 褐色 | 2.5Y 4/4 | 泥炭質粘土 | | 自然堆積層 |

第69図 泉崎Ⅲ区土層断面図

域に分布するが、10グリッド以南では消滅している。上面下面ともに凹凸が顕著で、下面は一部11層まで及んでいる。水田耕作土である。

6層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。層厚は4～7cmで、9グリッド付近に部分的に分布するだけである。

7層：黒色(2.5Y2/1)粘土。層厚は5～20cmで、南ほど薄くなる。ほぼ全域に分布し、10グリッド付近から標高が高くなっている。上面下面ともに凹凸が認められる。上面の凹凸は5層の耕作によるものであるが、下面の凹凸が5層の耕作によるものでないとするならば、この層も水田耕作土の可能性が考えられる。遺物（土師器、須恵器）を出土する。

8層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粗砂。層厚は2～15cmで南ほど厚くなる。調査区の南半に分布する。自然堆積層である。

9層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト、にぶい黄橙色(10YR6/3)微砂、黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土の互層。層厚は4～25cmで南ほど厚くなる。自然堆積層である。

10層：にぶい黄橙色(10YR6/4)粗砂。層厚は4～16cmで9グリッド付近が最も厚くなる。調査区南半に分布する。自然堆積層である。

11層：灰オリーブ色(5Y4.5/2)シルトと黒色(5Y2/1)泥炭質粘土との互層。層厚は6～12cmでほぼ全域に分布する。自然堆積層である。

12層：黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土。層厚は2～6cmで全域に分布する。自然堆積層である。

13層：灰色(5Y4/1)泥炭質粘土。層厚は2～8cmで全域に分布する。自然堆積層である。

14層：黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土。層厚は2～6cmで全域に分布する。自然堆積層である。

15層：オリーブ黒色(5Y3/1)泥炭質粘土。層厚は4～17cmで全域に分布する。下面に若干凹凸が認められる。灰色の岩片(径0.5～2cm)を含む。水田耕作土である。

16層：灰黄褐色(10YR4/2)粘土、黒色(2.5Y2/1)泥炭質粘土、黒褐色(7.5YR3/1)泥炭質粘土の互層。層厚は4～14cmである。火畠畔の下部に明瞭に残存するが、耕作土では薄く残存するだけである。自然堆積層である。

17層：暗灰黄色粘土(2.5Y5/2)。層厚は2～5cmで全域に分布する。自然堆積層である。

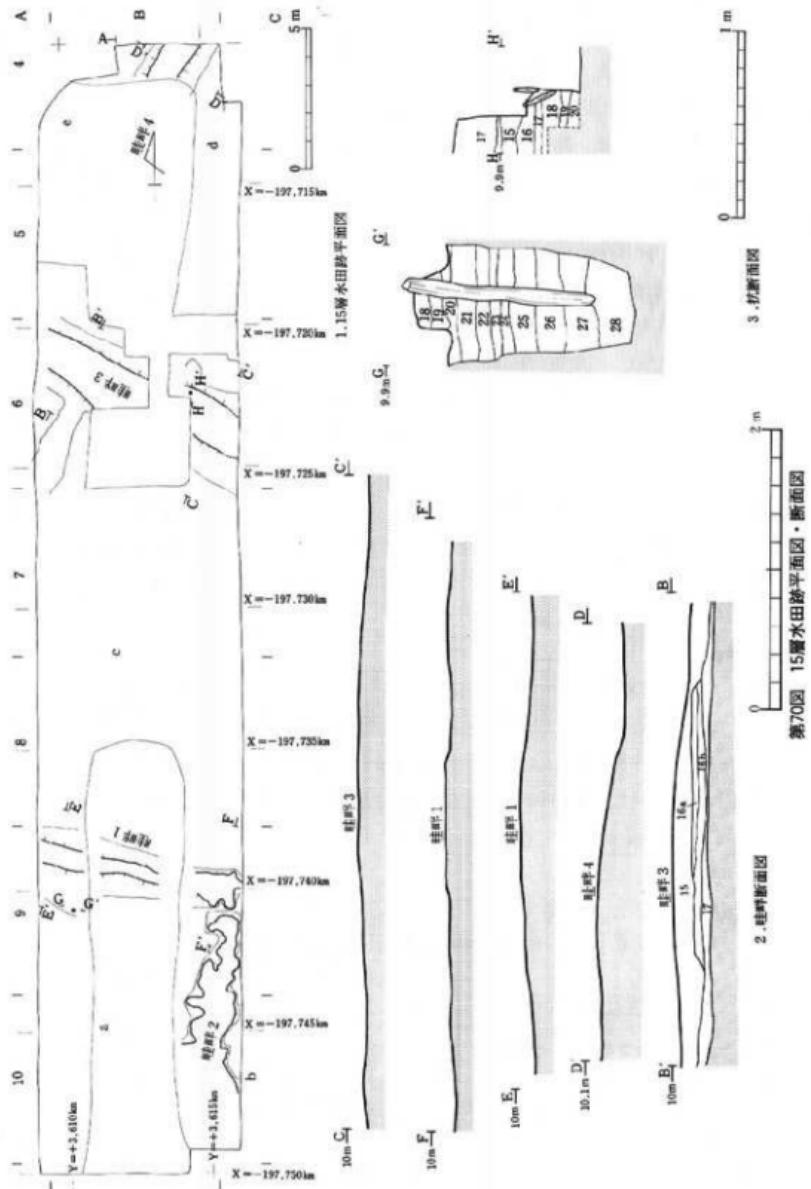
18層：黒色(2.5Y2/1)泥炭質粘土。全域に分布する。自然堆積層である。

(3) 15層検出構造と遺物

15層水田跡(第70図、写真32～34)

15層上面で大畦畔4条とそれらが形成する大区画5区画(A～E)を検出している。

[地形面] 15層上面はほぼ平坦であるが、西から東へわずかながら傾斜し、その度合は3cm/5m程である。標高は9.8～10.0mである。



〔水田域〕 調査区域はすべて水田域である。また畦畔および耕作土が調査区外へも延びることから水田域はさらに広がると想定される。

〔耕作土〕 耕作土は基本層15層で、オリーブ黒色の泥炭質粘土層である。層厚は5~18cmで調査区全域に分布する。層中に16層をブロック状に含むことや、大畦畔の下位に16層が比較的良好に残存することなどから、耕作土の母材層は16層と考えられる。下面には凹凸が認められる。

〔直下の層〕 直下の層は基本層16・17層である。ともに自然堆積層である。15層直下、16・17層直下・層中に鉄分やマンガン斑の集積は認められない。

〔畦畔〕 大区画を形成する大畦畔が4条（畦畔1~4）存在する。計測値は第18表に示した。畦畔1と3が並行し、方向はN-80°・65°-Wである。畦畔2は1と、畦畔4は3と直交し、方向はN-12°・32°-Eである。下端幅は60~320cmで、畦畔3が規模の大きな畦畔になっている。畦畔3の西端の南側で、土色の違いにより畦畔状のプランを検出したが畦畔かどうかは確定していない。

〔水田の区画〕 大畦畔により形成される大区画（a~e）が存在する。1区画全体が判るものはない。比較的広くなるのは区画cで台形状の区画が想定される。その南北長のみが計測可能で13~14mとなる。畦畔4は検出長が1.5mと短いが規模と方向性から畦畔3に取り付き区画d・eを形成すると考えられる。

〔水田面の傾斜〕 水田面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 15層中より弥生土器片1点、石器1点、礫片1点（第73図4~6）、杭3本が出土している。4はL R網文の体部片である。5は微細剝離痕のある剝片で、本来は横長であったものがおよそ半分欠損した剝片である。石材は安山岩である。6は周辺に加工のある安山岩の礫片である。杭は1本を図示した（第75図）。丸太材で先端に加工が認められる。

(4) 5層検出遺構と遺物

5層水田跡（第71・72図、写真34・35）

第18表 泉崎川区15層水田跡畦畔計測表

| 畦 畦 No. | 検出長(m) | 方 向 性 | 方 向 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比高差(cm) | | |
|---------|--------|-------|---------|---------|---------|--------------|---------|---------|
| | | | | | | 西 畦 北側 | 東 畦 南側 | 東 畦 北側 |
| 1 | 7.5 | | N-80°-W | 40-110 | 110-300 | 5.6-6.9 | 8.3-10 | |
| | | | | | | 東 畦 南側 | 1.3-1.6 | 2.8 |
| 2 | 6.5 | | N-12°-E | 60-170 | 60-200 | 西 畦 南側 | 1.2-2.9 | 1.0-3.5 |
| 3 | 7.5 | | N-65°-W | 130-180 | 240-320 | 西 畦 北側 | 4 | 1.2-6.3 |
| 4 | 1.5 | | N-32°-E | 100 | 200 | 東 畦 北側 | 1-5.8 | 7.6-8.9 |
| | | | | | | 西 畦 南側 | 2.2 | 6.7-12 |

第19表 泉崎川区5層水田跡畦畔計測表

| 畦 畦 No. | 検出長(m) | 方 向 性 | 方 向 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比高差(cm) | | |
|---------|--------|-------|--------|---------|---------|--------------|--------|--------|
| | | | | | | 西 畦 北側 | 東 畦 南側 | 東 畦 北側 |
| 1 | 約11 | | N-0°-E | 20-40 | 50-100 | 3-8 | 10-21 | |
| 2 | 2.7 | | N-6°-W | 30-45 | 60-110 | 5-10 | 9-18 | 南 例 |

畦畔 2 条とそれらが形成する区画 3 区画 (a ~ c) を検出している。

【地形面】 5 層上面はほぼ平坦であるが、若干南西から北東へ傾斜している。その度合は 3cm / 5m ほどである。標高は 10.25 ~ 10.45m である。

【水田域】 耕作土である 5 層がグリッド 10 ラインを除くほぼ全域に分布することから、調査区内はほぼ全域が水田域である。また、耕作土と畦畔が延びることから水田域はさらに広がっている。グリッド 10 ラインが非耕作域であるか否かは、5 層が後世の耕作により消滅している可能性もあることから不明である。

【耕作土】 基本層 5 層でオリーブ黒色粘土層である。層厚は 5 ~ 25cm で、グリッド 9 ライン以北に分布する。下面是凹凸が顕著である。母材となる層は不明である。

【直下の層】 基本層 6 層は局所的存在なので直下の層はほとんどが基本層 7 層になるが、一部耕作深度が深い場合は 11 層にまで及ぶこともある。7 层上面、層中に鉄分の集積やマンガン斑などは認められない。

【畦畔】 畦畔 2 条 (畦畔 1 + 2) が存在する。計測値は第 19 表に示した。畦畔 1 の方向はほぼ南北方向である。検出長が 11m、規模は下端幅が 50 ~ 100cm である。水田面との比高差は東側が大きく 10 ~ 21cm、西側が 3 ~ 8 cm である。畦畔 2 は 1 に直交しており、その方向はほぼ東西方向の N - 6° - W である。検出長は 2.7m、規模は下端幅が 60 ~ 110cm、水田面との比高差は 5 ~ 18cm である。畦畔の断面観察から畦畔 1 + 2 とともに数回にわたる土盛りの痕跡が確認されたが、それらに対応する水田面の確認は出来なかった。

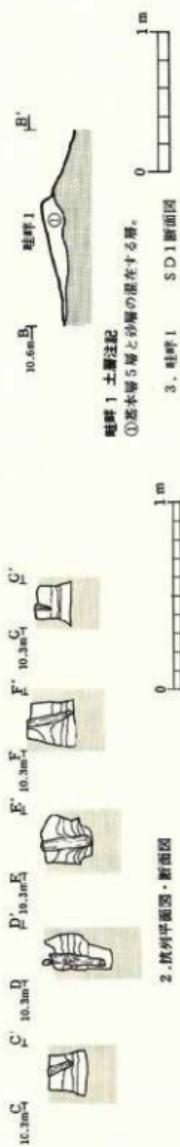
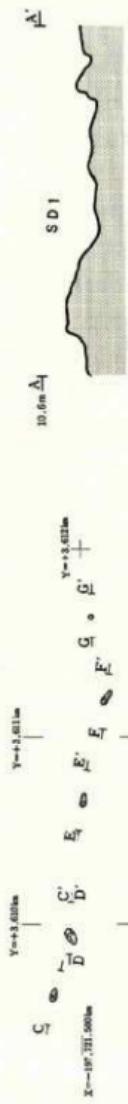
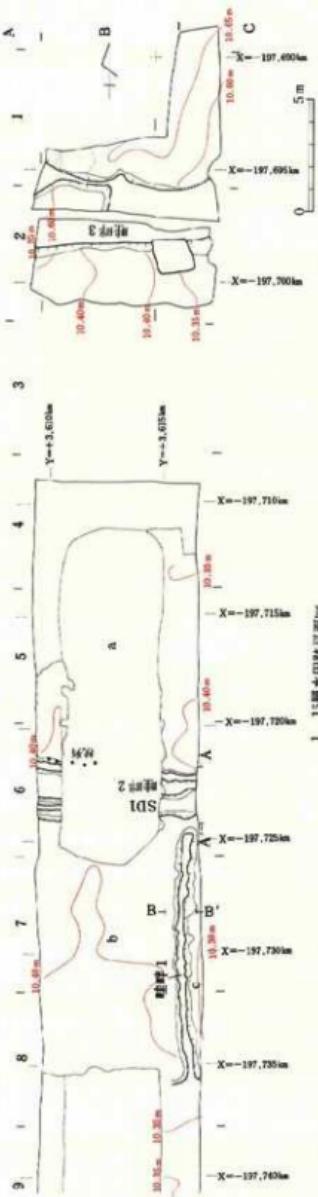
【杭列】 畦畔 2 の北側に沿って杭列が検出されている。杭列の長さは 2.1m で 5 本の杭が打ち込まれている。うち 3 本は試掘区 No. 8 内から検出されているが、試掘時にも畦畔を確認しているのでこの杭列は畦畔 2 の土留め杭と考えられる。杭の間隔は 30 ~ 70cm である。杭はすべて丸太材で先端に加工が認められる。杭の長さは 12 ~ 30cm、径は 2.5 ~ 4 cm である。

【SD 1】 畦畔 2 の南辺に沿って溝が検出されている。規模は上端幅が 80 ~ 200cm、下端幅が 60 ~ 100cm、深さが 15cm である。西側では底面が 2 条の溝状を呈している。北側の壁は畦畔 2 の上端へ連続して立ち上がり、比高差は約 25cm である。堆積土は 4a 層である。上端幅がやや広い部分もあるが深さが浅いことや溝の南岸が水田面に連続することなどから、SD 1 は基幹的水路から引かれた水の流れを規制する補助的な水路の可能性が考えられる。

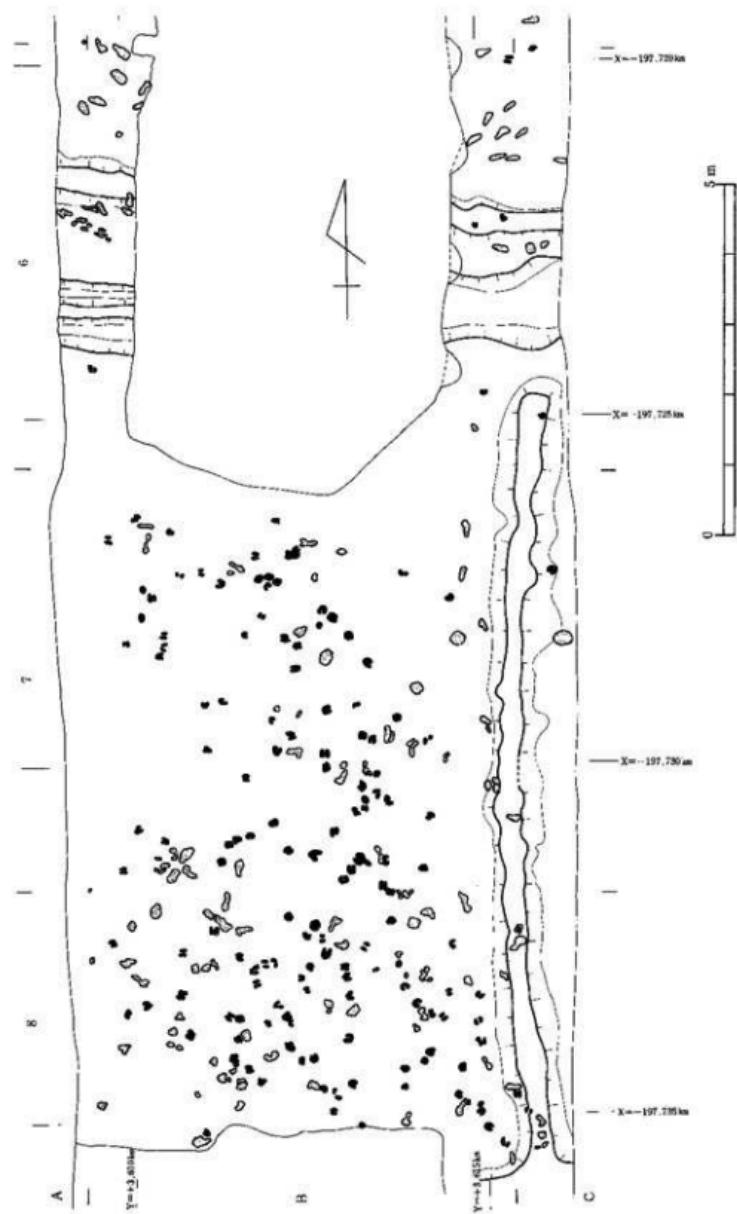
【水田の区画】 区画を 3 区画検出しているが、1 区画全体が判るものはない。規模が計測可能なものは b の東辺のみで 13m である。

【水田面の傾斜】 区画 a + b はほぼ同じ標高 10.4m 前後で、区画 c が標高約 10.25m と低くなっている。

【足跡】 水田面上で人および牛の足跡が多数検出されているが規則性などは認められない。



第71図 5ha水田地盤平面図・断面図



第72圖 5層牛·人足跡平面圖

堆積土は4c層の砂層である。砂に覆われる直前につけられた足跡ではあるが、その行動が直接農作業に関係したものであるかは不明である。

〔出土遺物〕 5層中より土師器3点が出土しているがいずれも細片で調整も不明である。

(5) 4b層検出遺構

4b層水田跡

試掘区No.8の東側でしかも5層水田跡畦畔2の北側でのみ検出された水田跡である。畦畔2が4c層を介在させて踏襲されていることから確認された。4b層上面でも人間・牛の足跡が検出されている。堆積土は4a層である。

(6) その他の出土遺物

基本層4・7・8・12層から土師器片・須恵器片・陶器片・石器が出土している。

土師器は25点出土しているがいずれも細片で図示できず、調整も不明のものが多いが明瞭にロクロ調整が観察されるものはない。

須恵器は7点出土している。内訳は壺の底部片2点壺の体部6点で、そのうち8層出土の3点を図示した(第73図1~3)。すべて壺の体部片で外間に平行叩き目痕、内間に同心円の当て具痕が認められる。壺の底部は図示できなかったが4・7層から2点出土しており、ともに底部の切り離しはヘラ切りである。ヘラ切り技法の壺は奈良時代から平安時代にかけて存在するものであり、これらの須恵器も同様の時期が考えられる。

石器は12層から1点出土している(第73図7)。板状の礫片を三角形に粗割りした石器で、最も長い縁辺に二次加工を施したものである。石材は安山岩である。

(7) 小結

①周辺調査区との対応

周辺で数箇所調査が行われているが、北約87mの地点での第19次調査(渡辺:1986)の7b層と本調査の15層とが対応されたのみで、他の調査区との対応はほとんど不可能であった。

②15層水田跡

15層から出土した遺物は縄文が施文された小破片のみで、十分な年代決定資料がない。層の上下関係からでは、5層で平安時代の水田跡が検出されていることから平安時代以前としか捉えられない。19次調査では7b層で弥生時代樹形圓式期の水田跡が検出されている。この7b層は層相が15層と類似しており、さらに凝灰岩の岩片を含むという共通点から同一の層と判断される(渡辺前掲)。したがって、15層水田跡も弥生時代樹形圓式期に位置づけられる。

一方、同時期の水田跡は微高地の南側でも確認されている。泉崎浦遺跡3次調査のVIIb層水田跡とそれに対応する泉崎II区の8b層である。両層と19次7b層、本調査15層は標高が10.4~9.8mの間であることから、当時は微高地の周辺にはほぼ平坦な水田跡が広がっていたことが想定される。その後弥生時代から古墳時代にかけてのある時期に供給された土砂により水田は埋没して微高地がさらに拡大し、そこに古墳時代の遺構が形成されたと理解される。

③ 5層水田跡

5層から出土した遺物は風化した土器のみで十分な年代決定資料がない。4a層の上面に灰白色火山灰が分布していたことと7層から奈良・平安時代の須恵器が出土していることからおよそ平安時代の水田跡と考えられる。

畦畔2条はほぼ真北・東西方向のもので条里型土地割に基づいたものと考えられる。最近の条里型土地割の検討(平間1987)によれば、本調査区から北西約100mの地点の30次調査で検出され東西方向の大畦畔が条里型土地割の坪境と考えられている。その国土座標はX=-197.604kmである。それより1町(109m)南の座標はX=-197.713kmとなり本調査区の北端部を通るが、該当するような遺構は検出されなかった。ちなみに畦畔2はその予想ラインの約9m南に位置する。

第20表 泉崎III区遺物観察表

土器

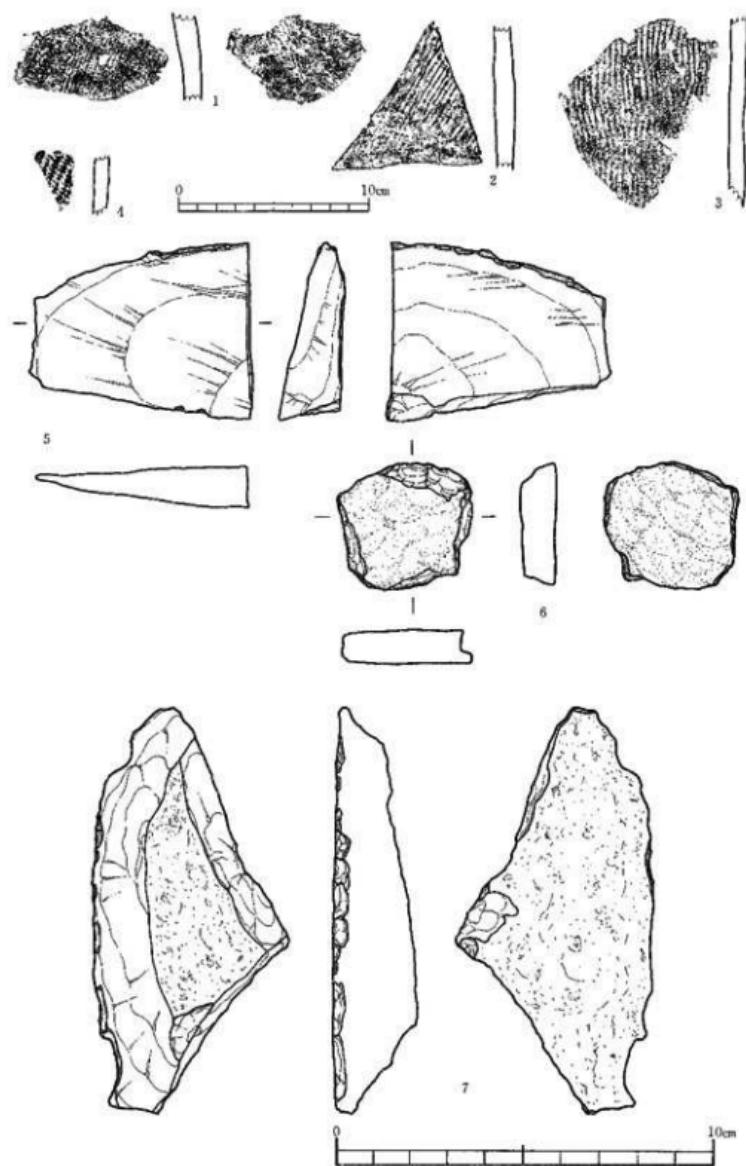
| 20B番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 種 | 例 | 特徴 | 性 | 目 | 年月日 |
|-------|------|---------|------|---|------|-------------------------|---|-----|
| 73-1 | E.5 | C10-8層 | 灰・白 | 陶 | 特殊焼成 | 外底: 平滑面と目皿、内面: 同心円の当て具痕 | 竹 | 115 |
| 73-2 | E.7 | B.9-8層 | 灰・黑 | 陶 | 特殊焼成 | 外底: ハリきぎ痕、内面: 同心円の当て具痕 | 竹 | 115 |
| 73-3 | E.6 | B.9-8層 | 灰・白 | 陶 | 特殊焼成 | 外底: 平滑面と目皿、内面: 同心円の当て具痕 | 竹 | 115 |
| 73-4 | E.1 | B.8-15層 | 朱・土器 | 陶 | 特殊焼成 | SLR鉛文 | 竹 | 115 |

石器

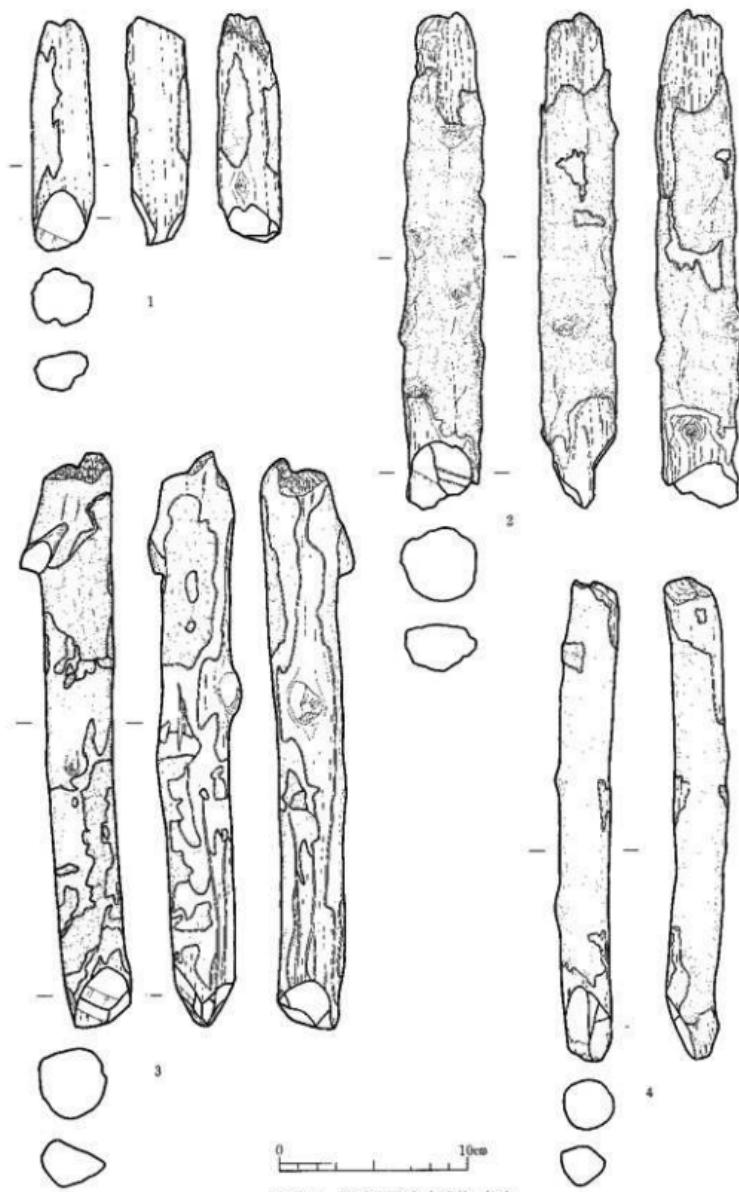
| 20B番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 種 | 例 | 遺物名 | 大きさ | 幅 | 厚さ | 重さ | 右 | 材 | 竹 | 種 | 年月日 |
|-------|------|------------|-----------|-----|-------|------|------|------|-----|---|---|---|-----|-----|
| 73-5 | K.1 | B.6-13層 | 特殊削成の丸み軽石 | 光・素 | 48.0 | 39.0 | 15.4 | 34.0 | 宝山野 | | | 竹 | 115 | |
| 73-6 | K.3 | C.7-15層 | 加工のある軽石 | 光磨り | 39.2 | 35.7 | 10.0 | 16.2 | 宝山野 | | | 竹 | 115 | |
| 73-7 | K.2 | B.9-10-15層 | 二次加工のある石核 | 光・素 | 11.15 | 51.0 | 22.0 | 98.5 | 宝山野 | | | 竹 | 115 | |

杭

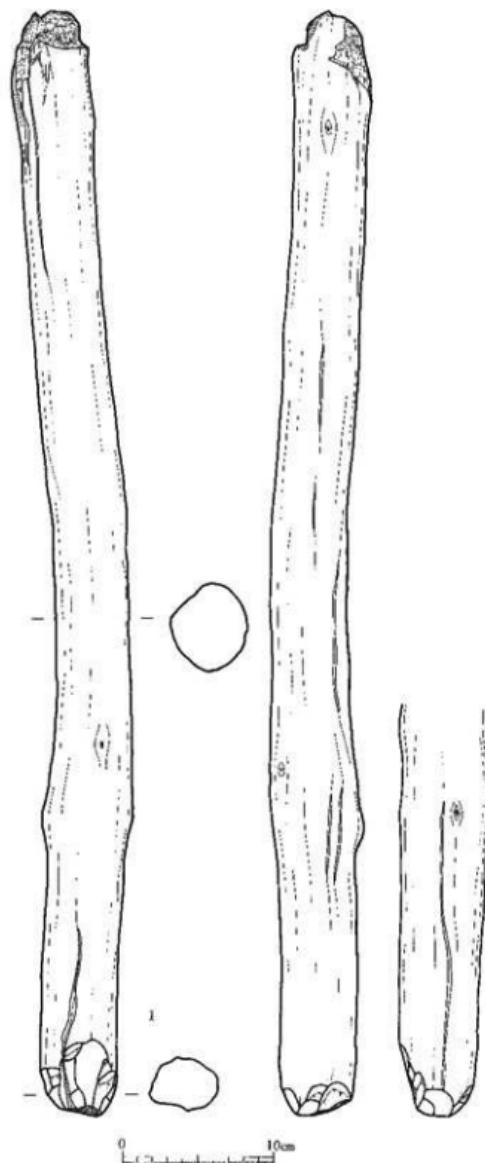
| 回 | 柱番 | 遺物・部位 | 材 | 長さcm | 径cm | 壁厚cm | 備 | 考 | 年月日 |
|------|-----|----------|-----|-------|------|------|---|---|-----|
| 74-1 | 柱.1 | 5層小H縫板瓦 | 丸太材 | 12.25 | 3.25 | 0 | | | |
| 74-2 | 柱.5 | 5層小H縫板瓦 | 丸太材 | 26.05 | 4.0 | 0 | | | 115 |
| 74-3 | 柱.2 | 5層小H縫板瓦 | 丸太材 | 30.4 | 4.3 | 0 | | | 115 |
| 74-4 | 柱.4 | 5層小H縫板瓦 | 丸太材 | 33.6 | 2.75 | 0 | | | 115 |
| 25-1 | 柱.5 | 15層小H縫板瓦 | 丸太材 | 98.0 | 8.0 | 0 | | | 115 |



第73図 泉崎Ⅲ区出土遺物（1）



第74図 泉崎III区出土遺物（2）

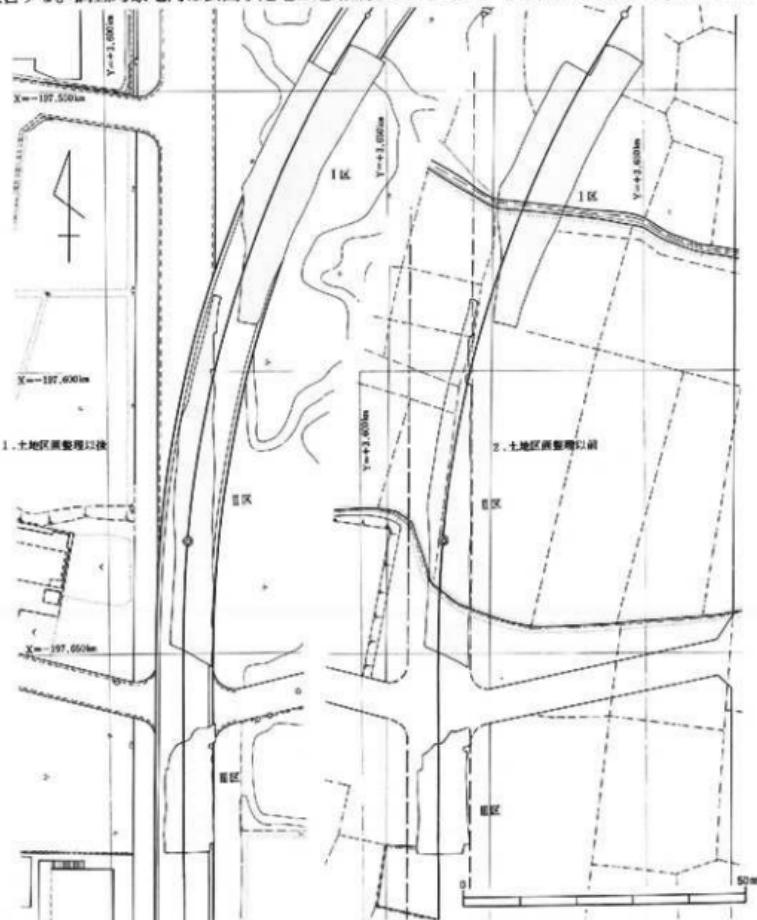


第75図 泉崎田区出土遺物（3）

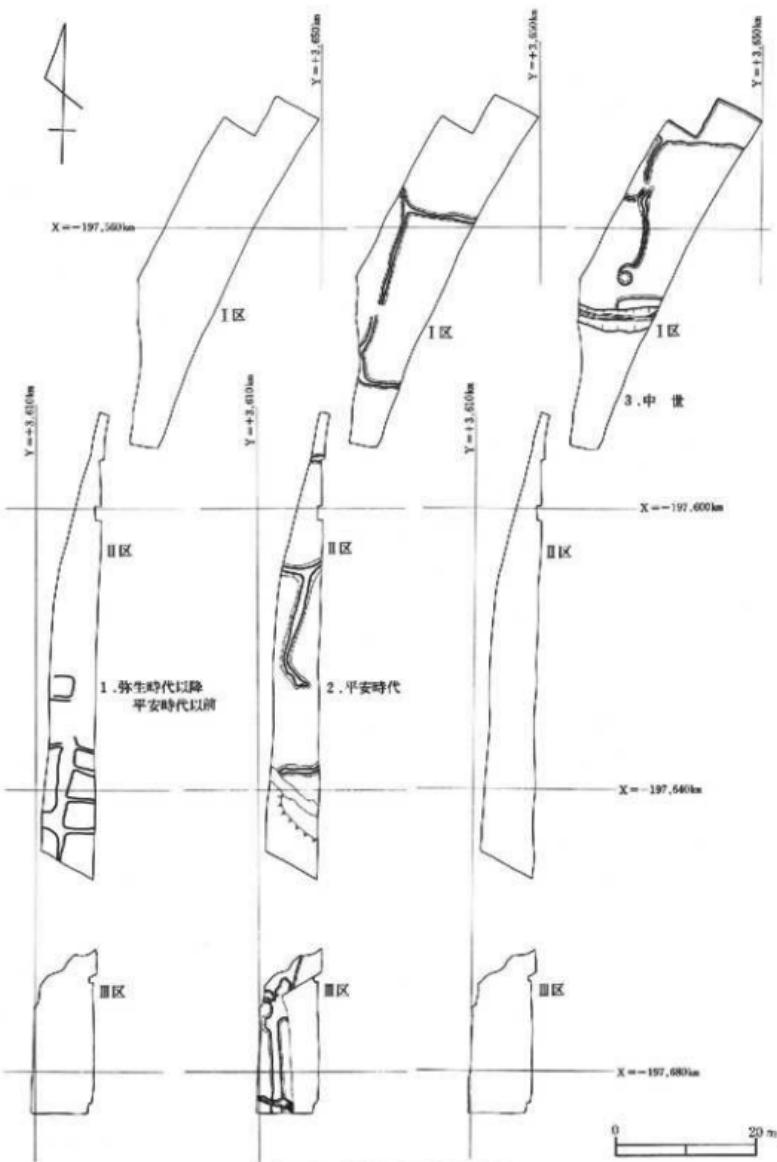
V 中谷地地区

1. 調査の方法と経過

中谷地工区においては、起点より12.909～13.058kmの149mの区間と12.560～12.620kmの60mの区間を本調査対象とした。ただし、後者の区間は長町南駅区と連続しているので次章で報告する。調査対象地内は公園予定地と道路部分とからなり、そのなかに含まれる歩道や交差



第76図 中谷地地区調査区位置図



第77図 中谷地地区造構配置図

点、車道1車線部分は道路事情を考慮し、調査対象から除外した。そのことにより、調査区が3分割されたため、各々を北からI・II・III区と呼称した。調査対象外部分が生じたことと、中谷地工区が路線の南へカーブする地点であることなどから、各調査区は変則的な形状になっている。ちなみにI区は幅4~11m、長さ54m、II区は幅1~8m、長さ66m、III区は幅8m、長さ13mの不整台形状になっている。

I~III区とともにグリッド方式をとってはいない。I区では任意の2点を、II・III区では路線センター上の起点からの距離程を用いて基準点を設定し、実測等を行った。報文図中の国土座標は、工事用に計測済みの路線中心線の国土座標から図上でおこしたものである。盛土・旧表土は重機によって掘削し、それ以下は人力により遺構検出および掘り込みを行った。また、II・III区では東側にベルトコンベアを十数台固定して設置し(工事側設置)、作業の効率化を図った。

なお、試掘調査は、工事用の鋼矢板が打ち込み終了後に行われたため、6~12月まで断続的に実施されている。本調査も工事工程上早めに着手可能となった地点より実施した。調査区設定に必要な諸工事や盛土・旧表土掘削・残土運搬などは他工区と同様に請負業者が担当した。

I区は8月25日に本調査を開始し、7層で試掘時に予想されていた中世の水田跡、12層で灰白色火山灰を乗せる水田跡を検出した。また、調査区の中央部に3×54mの深堀区を設定して下層の水田跡を追究したが畦畔などは検出されず、11月5日に完了した。

II区を本格的に開始したのはI区終了後であった。まず4b層で灰白色火山灰を乗せる水田跡を検出した。引き続き9層にその存在が予想された弥生時代の水田跡を目指し調査を行ったが畦畔などは検出されなかった。しかし、10層上面で擬似畦畔Bが確認され、上層に水田跡が存在したことが判明した。さらに深掘りを行い、12月18日に完了した。

III区は12月7日に開始し、4b層で灰白色火山灰を乗せる水田跡を検出し、引き続き弥生時代の水田跡を追究したが検出されず、12月23日に調査を完了した。

2. 中谷地I区

(1) 調査区の位置

調査地点は、泉崎浦の扇状地に由来する微高地先端部の北側に位置する。区画整理以前は水田が広がっており、南東方向へ緩やかに傾斜していた。調査区内でのその標高は11.66~10.9mで、北のI区が高く南のIII区が低くなっている。

(2) 基本層序

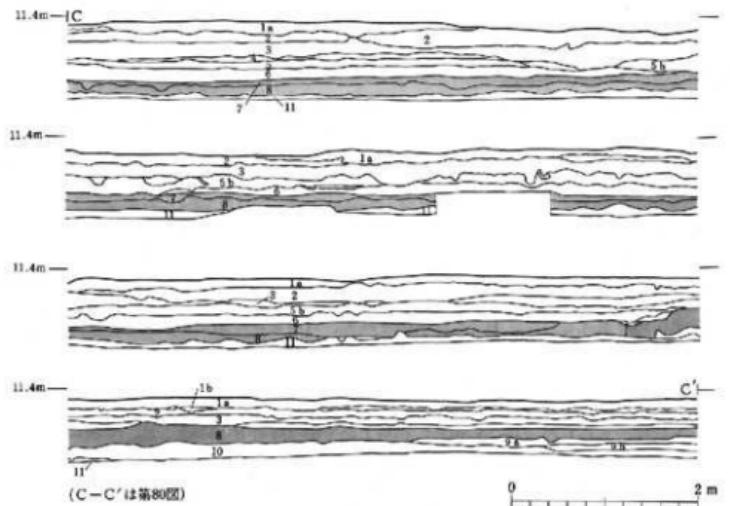
確認された層は大別で18層、細別で21層である。層序を大まかにみると1層が旧耕作土、2

～13層が砂・シルト、14～18層が泥炭質粘土層である。18層以下については未調査のため不明であるが、調査区北側の試掘 No.15・16、および地下鉄工事ボーリング調査の結果によれば、標高約9.6mまで泥炭質粘土層が連続し、それ以下が粘土・砂のグライ化層になり、標高約7.0mで疊層になる。

1a層：灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト。旧水田耕作土。

1b層：明黄褐色（10YR6/6）砂質シルト。鉄分の集積層。

2層：灰黄色（2.5Y6/2）砂質シルト。砂粒、若干の炭化物を含む。上部が酸化している。層厚



| 序号 | 土 色 | 土 質 | 層 厚 | 固 入 物 | 備 考 |
|----|-------------------|-------|---------|-------------------|------------|
| 1a | 灰 黄 色 10YR4/2 | 砂質シルト | | | 旧水田耕作土 |
| 1b | 明 黄 色 10YR6/6 | 砂質シルト | | | 鉄分の集積層 |
| 2 | 灰 黄 色 2.5Y6/2 | 砂質シルト | 5～20cm | 砂粒、若干の炭化物を含む。 | 上部が酸化している。 |
| 3 | 暗 黄 色 2.5Y5/2 | 砂質シルト | 5～30cm | 砂粒、若干の炭化物を含む。 | |
| 4 | 暗 黄 色 2.5Y5/2 | 砂質シルト | 4～8cm | 硬 1～2cm、小礫を多量に含む。 | |
| 5a | 灰 黄 色 10YR6/5 | 砂 | 5～10cm | | 上部が酸化している。 |
| 6 | 褐 黄 色 10YR5/1 | 砂質シルト | 5～15cm | 砂粒、マンゴン粒を含む。 | |
| 7 | 褐 黄 色 10YR3/1 | シ ルト | 5～15cm | 白色砂岩、炭化物を含む。 | 水田耕作土 |
| 8 | 黑 黄 色 2.5Y3/1 | シ ルト | 5～25cm | 白色砂岩、炭化物を含む。 | |
| 9a | | | | | |
| 9b | 黑 黄 色 2.5Y5/1 | 粗 砂 | 約8cm | | |
| 10 | 黑 土 色 10YR3/1 | シ ルト | 5～20cm | 炭化物を含む。 | |
| 11 | 褐 土 色 10YR1.7/1 | 砂質シルト | 5～15cm | 多量の石英斑を含む。 | |
| 12 | 褐 土 色 10YR2/1 | 粘 土 | 5～15cm | 灰白色火山灰、飛片を含む。 | 水田耕作土 |
| 13 | 暗 黄 色 2.5Y5/2 | 粗 砂 | 5～35cm | | |
| 14 | 灰 黄 色 10YR5/2 | 粘 土 | 10～40cm | | 互層 |
| 15 | オ リ ブ 灰 色 5G5Y5/1 | 泥炭質粘土 | 10～15cm | | |
| 16 | 黑 土 色 2.5Y4/1 | 泥炭質粘土 | 10～15cm | | |
| 17 | 褐 土 色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 5～15cm | | |
| 18 | 褐 土 色 5YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 10～25cm | 多量の植物遺体を含む。 | |
| 19 | 黑 土 色 5YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 5～15cm | | |

第78図 中谷地Ⅰ区土層・断面図

は5~20cmでほぼ全域に分布する。

3層：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト。砂粒、若干の炭化物を含む。層厚は5~30cmでほぼ全域に分布する。

4層：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト。径1~2cmの小礫を多量に含む。層厚は4~8cmで南半に部分的に分布する。

5a層：にぶい黄橙色(10YR6/3)砂。上部が酸化している。層厚は5~10cmで、南半に部分的に分布する。

5b層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト。小砂粒、マンガン粒を含む。縦縞状に酸化している。層厚は10~20cmで北半部に分布する。

6層：褐灰色(10YR5/1)砂質シルト。砂粒、マンガン粒を含む。層厚は5~15cmで、7層上面検出の段差部分①以南に分布する。

7層：黒褐色(10YR3/1)シルト。白色岩片、炭化物を含む。層厚は5~15cmで、本層上面検出の段差部分①以南に分布する。水田耕作土である。II区での3層上部に対応する。

8層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト。白色岩片、炭化物を含む。層厚は5~25cmで、ほぼ全域に分布する。7層上面検出の段差部分①を形成している層である。

9a層：土色、土性など注記なし。調査区北端部にのみ分布する層である。

9b層：黄灰色(2.5Y5/1)細砂。層厚約8cmで調査区北端部にのみ分布する。

10層：黒褐色(10YR3/1)シルト。炭化物を含む。層厚は5~20cmで、7層上面検出の段差部分①の位置より北側に分布する。

11層：黒色(10YR1.7/1)砂質シルト。多量の石英粒を含む。層厚は5~15cmで、ほぼ全域に分布する。

12層：黒褐色(10YR3/1)粘土。灰白色火山灰、岩片を含む。層厚は5~15cmで、調査区南半に分布する。層の下面には凹凸が頗著に認められる。水田耕作土である。II区の4b層に対応する。

13層：暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂。層厚は5~30cmで、北へ行くにしたがい厚く堆積している。全域に分布する。

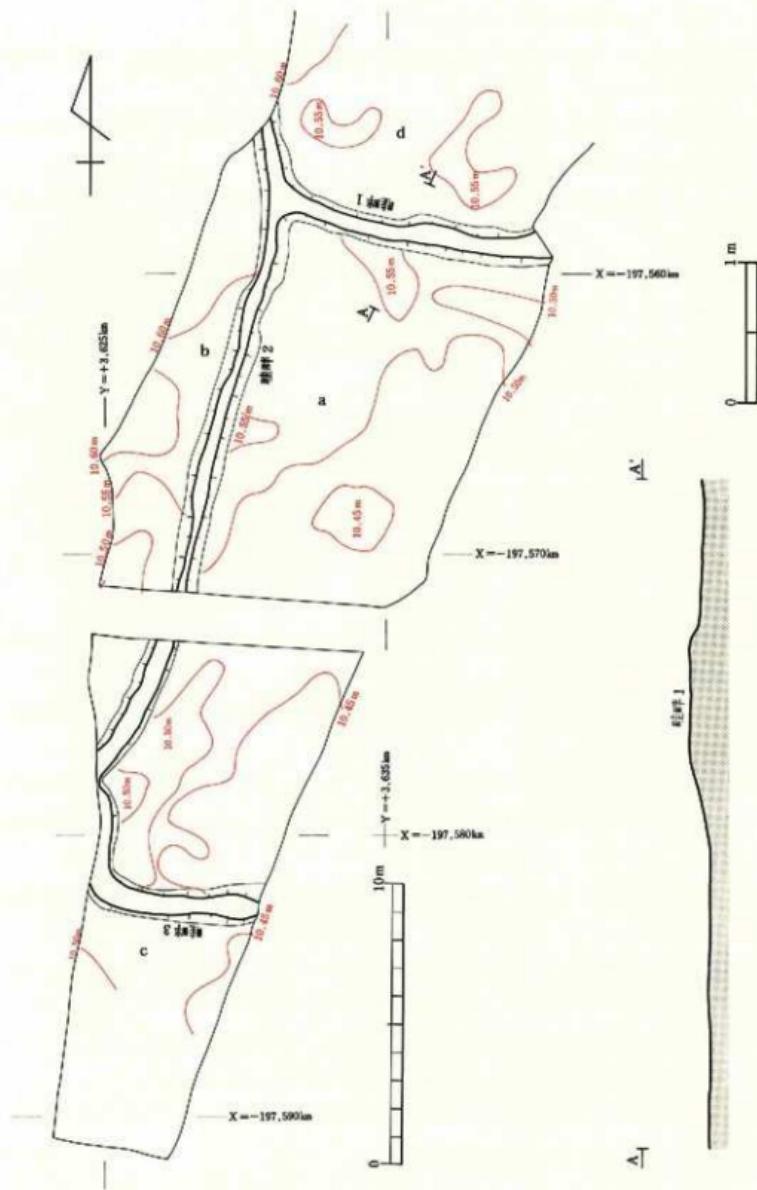
14層：灰黄褐色(10YR5/2)粘土とオリーブ灰色(5GY5/1)粘土の互層。層厚は10~40cmで、北へ行くにしたがい厚く堆積している。ほぼ全域に分布する。

15層：黄灰色(2.5Y4/1)泥炭質粘土。層厚は10~15cmで、全域に分布する。

16層：黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土。層厚は5~15cmで、全域に分布する。

17層：黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土。多量の植物遺体を含む。層厚は10~25cmで北へ行くにしたがい厚く堆積している。全域に分布する。

第79圖 12號水田株平面圖・断面圖



18層：黒色（5YR1.7/1）泥炭質粘土。層厚は5～15cmで全域に分布する。

(3) 12層検出遺構と遺物

12層水田跡（第79図、写真37）

畦畔3条とそれらが形成する区画4区画（a～d）を検出している。

【地形面】 12層上面は北西から南東方面に傾斜している。傾斜は14cm/10mほどで、標高は10.45～10.6mである。

【水田域】 耕作土である12層の分布は、畦畔1の北側3.5mの所までである。そこが水田域の境界線かどうかは不明である。東西南方向へは耕作土や畦畔が延びることから水田域はさらに広がっている。

【耕作土】 基本層12層で黒褐色の泥炭質粘土である。層厚は5～15cmで、下面には凹凸が顕著である。12層の上面および層中に灰白色火山灰が存在する。母材となる層は不明である。なお本層はII区での4b層に対応する。

【直下の層】 基本層13層で、上面には耕作の攪拌による凹凸が認められる。12層直下、13層直上・層中に鉄分の集積やマンガン斑などは存在しない。

【畦畔】 畦畔は3条検出されている。計測値は第21表に示した。畦畔は2方向で、畦畔2が真北からやや東へ振れる南北方向でN-10°-E、畦畔1・3がほぼ東西方向でN-80°-87°-Wである。畦畔2は3に接する手前で東へ若干屈曲し、北側では畦畔1に接する手前から西方へ緩くカーブしている。3条の畦畔はほぼ同規模で、下端幅は90～135cm、水田面との比高差は2.0～17.0cmである。

【水田の区画】 畦畔3条により形成される区画が4区画（a～d）存在する。1区画全体が判明しているものではなく、その形状や面積については不明である。計測可能なのは区画aの南北長のみで約24mである。この区画aの東西長は9m以上で面積は174m²以上となる。これらの区画内がさらに分割されていたかどうかは不明である。区画dについては耕作土の分布が途切れることから水田でない可能性も考えられる。

【水田面の傾斜】 区画a～dではb→d→a→cの順に低くなっている。区画a内はやや南東へ傾斜しており、その高低差は13cmである。

【出土遺物】 土師器片13点、赤焼土器片4点、須恵器片3点が出土した。そのうち図示できたのは土師器2点、赤焼き土器1点である。

第21表 中谷地I区12層水田跡畦畔計測表

| 番号 | 検出長(m) | 方向性 | 方向 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比高差(cm) | | | |
|----|--------|-----|---------|---------|---------|--------------|------|----|-------|
| | | | | | | 北側 | 4-12 | 南側 | 10-15 |
| 1 | 9.5 | 東 | N-80°-W | 50-70 | 90-135 | 北側 | 4-12 | 南側 | 10-15 |
| 2 | 5.5 | 西 | N-87°-W | 50-70 | 100-120 | 北側 | 6-10 | 南側 | 4-8 |
| 3 | 27.5 | 東 | N-10°-E | 30-80 | 120 | 北側 | 2-12 | 東側 | 3-17 |

土師器（第82図2・3）：2は壺の口縁部から体部にかけての破片である。この壺は製作時にロクロは使用されていない。底部は丸底になると推定され、体部下半から弯曲しながら立ち上がり、口縁部は直立気味になる。外面の器面調整は体部下半がヘラケズリ、上半がヘラミガキで、内面は体部下半がヘラミガキである。口縁部は内外面とも風化で調整は不明である。このような壺は奈良時代の国分寺下層式に比定されるものである。

3は壺の底部片である。底部の切り離し技法は回転糸切り技法である。内面はヘラミガキの後黒色処理がなされている。他の土師器のうち製作時にロクロを使用したものは7点あり、すべて内面はヘラミガキの後黒色処理がなされている。2を含めたこれらの土師器は、その特徴から平安時代の表衫ノ入式に比定されるものである。

赤焼土器（第82図4）：4は壺の底部片である。底部の切り離し技法は回転糸切り技法で再調整はない。

(4) 7層検出遺構

7層水田跡（第80図、写真38）

畦畔3条と段差部分1カ所、それらが形成する区画3区画（a～c）、溝跡1条、土坑1基、水口2箇所を検出している。

〔地形面〕 7層上面はほぼ平坦であるがSD1の北側がやや低くなっている。標高は10.7～10.85mである。

〔水田域〕 耕作土である7層の分布は段差部分①付近までであり、段差は8層が形成している。この段差が水田域の境界とも考えられるが、段差以北で水田面が高くなり上層の搅拌により7層が消滅している可能性もあるので、水田域の北への広がりは不明と言わざるを得ない。

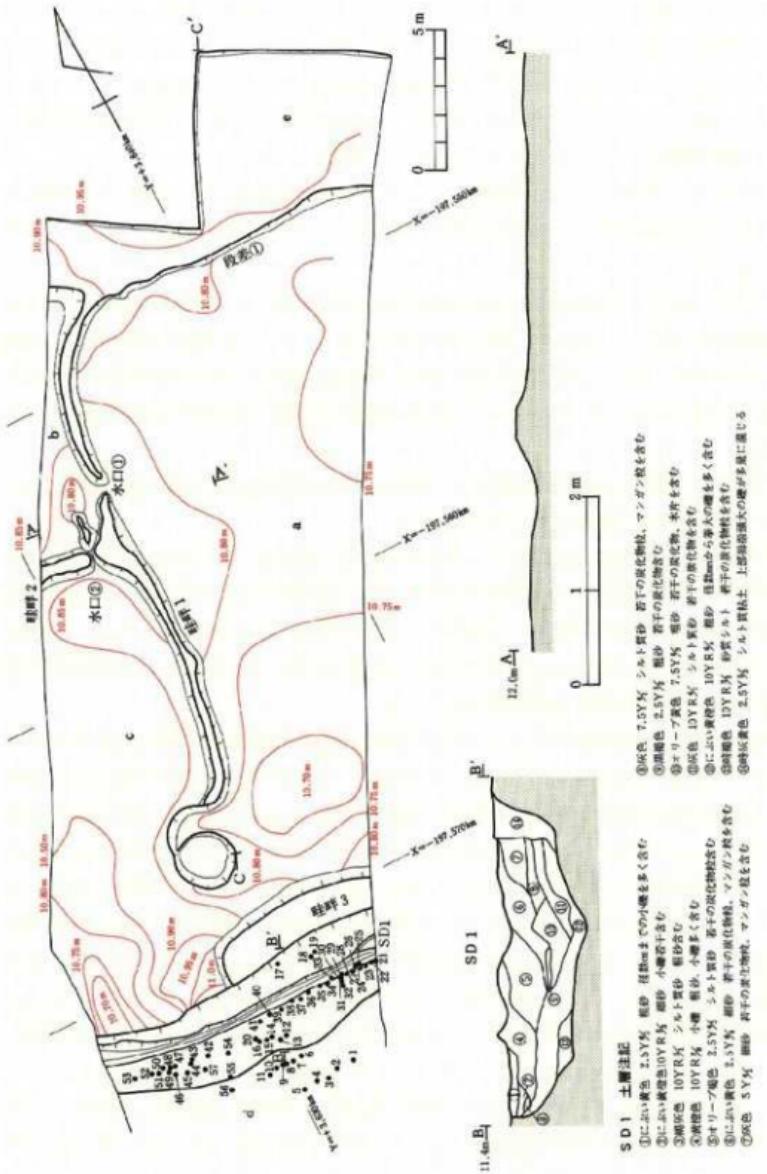
〔耕作土〕 基本層7層で黒褐色のシルトである。層厚は5～15cmで下面には若干の凹凸が認められる。母材となる層は不明である。なおII区での3層の上部に対応する。

〔直下の層〕 基本層8層で、層厚は5～25cmである。上面下面とも凹凸が認められるが下面の方が顕著であり、本層も水田耕作土である可能性がある。7層直下、8層上面、層中に鉄分の集積やマンガン斑などは存在しない。

〔畦畔〕 畦畔は3条検出されている。計測値は第22表に示した。畦畔の方向は2方向で畦畔1が真北からやや東へ振れる南北方向でN-15°～E、畦畔2・3がほぼ東西方向でN-80°・90°～

第22表 中谷地I区 7層水田跡畦畔計測表

| 畦 畐 № | 検出員(m) | 方 向 性 | 方 向 度 | 上 地 面(cm) | 下 地 面(cm) | 水田面との北高差(cm) | | | |
|-------|--------|-------|-------|-----------|-----------|--------------|----|----|------|
| | | | | | | 西 | 東 | 南 | 北 |
| 1 | 19 | S | 7° | N-15°-E | 10-50 | 80 | 西 | 偏 | 3-10 |
| 2 | 2 | 北 | 北 | N-50°-W | 50 | 100 | 北 | 偏 | 5 |
| 3 | 6.5 | 西 | 西 | N-90°-W | 110-140 | 150-180 | 南 | 偏 | 7 |
| 段1 | 19 | 北 | 北 | N-95°-W | .. | .. | .. | .. | .. |
| 段2 | 1 | ? | ? | - | - | - | - | - | 2 |



第80図 7層水田跡・SD1平面図・断面図

Wである。畦畔1は細長いS字形を呈しており、その中央部に畦畔2が取り付いている。畦畔1は畦畔3に延びているが、両者間には、約4mの開きがあり、そこに土坑(SK1)が存在する。畦畔1・2の規模はほぼ同じで下端幅80~100cm、水田面との比高差は3.0~15.0cmである。畦畔3は、SD1の北岸に沿う畦畔で、下端幅が約180cm、水田面との比高差が20~30cmと比較的の規模の大きいもので西方へも延びていた可能性がある。

【段差部分】 段差部分は1カ所検出されている。規模は第22表に示した。畦畔1の北端部と直交してほぼ垂直方向にN-87°-Wに延びている。前述したようにこの段差は8層によって形成されている。

【水口】 畦畔1と2の接続部の北側と西側で水口①②を検出した。水口①は上端幅60cm、下端幅15cm、深さ5~8cmで、区画a側がやや低くなっている。水口②は上端幅22cm、下端幅5cm、深さ5cmで、区画b側に長さ130cm、幅52cm、深さ10~15cmの不整椭円形の凹みが接して検出されている。この凹みは、水口②に関連した水流などの影響で生じたものと考えられる。

【SK1】 畦畔1の南端部に位置する。平面形は円形で径約200cm、底面の深さが160cm、深さ9~16cmである。性格については不明である。

【SD1】 調査区南半部に位置する。検出長は11mで、緩くカーブしているが方向はほぼ東西方向でN-85°-Wである。北岸にある畦畔3はこの溝跡に伴うものである。規模は上端幅210~340cm、深さ30~88cmで、底面がさらに溝状に凹み、その上端幅は30~50cm、下端幅が10~30cmである。堆積土は13層で、ほとんどが砂層であるが、断面観察から数時期の変遷が認められる。南岸を中心に杭列が検出されている。

【杭列】 杭は59本検出されている(うち2点は位置不明)。溝跡の両岸で検出されているが北岸は3本のみで他はすべて南岸に打ちこまれている。これらは大きく5列に大別される。南岸の上端から南へ約1.2mの所に打ち込まれた第1列(杭1~5)、上端に沿って打ち込まれた第2列(杭6~11・55・56)、壁中に打ち込まれた第3列(杭12~16・20・42~54・57)、底面内の溝の上端に沿って打ち込まれた第4列(杭21~41)、北岸に打ち込まれた第5列(杭17~19)である。杭の間隔は10~150cmであるが、各杭列の中での密集した箇所は10~50cm間隔の場合が多い。いずれもSD1に並行して直線的に打ち込まれている。59点中40点を図示した(第83図~第91図)。杭はいずれも丸太材でほとんどの先端に加工が認められる。杭の長さは8.8~46.9cmで15~40cmのものが多い。径は1.5~7.4cmで3cm前後のものが多い。樹種同定を実施したのは、59本中10本で、ヤナギ属の一種、クリ、ウツギ属の一種、ヌルデなどがある。

これらの杭列は、その位置関係から、溝外にある第1・2列は、南岸に沿って存在していた可能性の高い土手状の畦畔の補強材、もしくはその畦畔に取り付けられた水口に伴う杭列が想

定され、溝内の杭列については護岸用の杭列が考えられる。

〔水田の区画〕 畦畔3条と段差部分とで形成される区画が5区画(a～e)存在する。段差部分以北については8層が分布しているので不明である。1区画全体が判明しているものではなく、その形状・面積は不明である。計測可能なのは区画a・b・cの南北長である。区画aは南北長約22m、東西長11m以上で、面積は約176m²以上と比較的大きな区画が想定される。区画bは南北長が約9m、cは南北長がSD1の北岸までとすると約16mとなる。区画dについては耕作土が確認されたのみで、区画eは7層が分布しないことから水田でない可能性も考えられる。

〔水田面の傾斜〕 区画a～cではc→b→aの順に低くなっている。区画a内では南半が若干低くなっている。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

3. 中谷地II・III区

(1) 基本層序

確認された層は大別で19層、細別で33層である。層序を大まかにみると1層が旧水田耕作土、2～5層が砂およびシルト層、6層以下が泥炭質粘土層である。本区の19層以下については、未調査のため不明である。しかし、隣接する第48次調査区によればグライ化層は標高8.8mからはじまり、地下鉄工事のボーリング調査によれば、礫層は中谷地I区北側では標高約7.0m、中谷地III区の南側では標高約5.0mで、南へ低くなっている。

1a層：暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂。区画整理前の水路の堆積土。

1b層：暗褐色(10YR3/3)砂質シルト。1a層同様の堆積土。

1c層：土色等の記述なし。区画整理前の耕作土である。

1d層：灰色(5Y4/1)細砂。水路の土手部分の堆積土。

1e層：にぶい黄褐色(10YR6/4)粗砂。部分的に存在。旧耕作土に近い層。

1f層：黒色(7.5Y2/1)砂質シルト。砂粒を多く含む。層厚は10～45cmで全域に分布する。現代に近い水田耕作土の可能性がある。

2層：灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。層厚は5～22cmで全域に分布するが、4b層水田跡畦畔2の南側に厚く堆積している。下面の凹凸が顕著で水田耕作土の可能性がある。

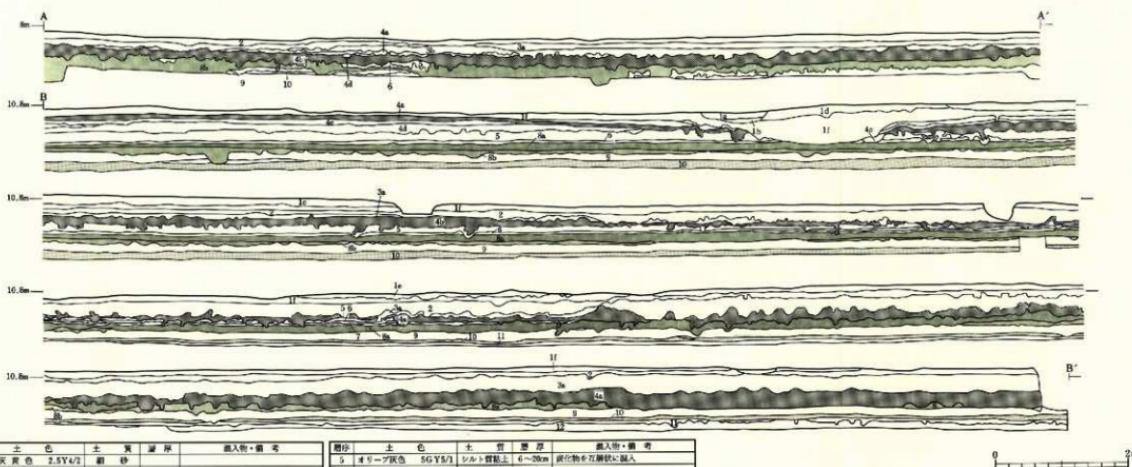
3a層：黒色(5YR1.7/1)砂質シルト。層厚は2～30cmでほぼ全域に分布する。とくに4b層水田跡畦畔2の北側が厚く、下面の凹凸が顕著で水田耕作土の可能性がある。1区の7・8層に対応する。

3b層：黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土。層厚は10～15cmで、III区にのみ分布する。

4a層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト。層厚は4～10cmで、III区にのみ分布する。灰白色火山

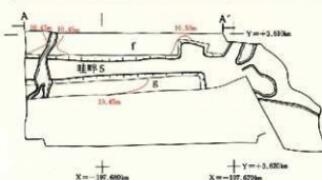
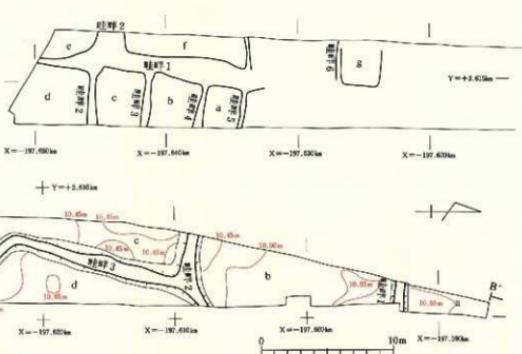
灰をふくむ。

- 4a層：にぶい黄色（2.5Y6/3）粗砂。III区に部分的に分布する。灰白色火山灰をふくむ。
- 4b層：灰色（7.5Y4/1）粘土質シルト。層厚は4～30cmで全域に分布するが、畦畔2より北側が厚い。上面に灰白色火山灰が存在する。水田耕作土である。1区の12層に対応する。
- 4c層：黒褐色（10YR3/1）粗砂。層厚は4～10cmで2区の南端部にのみ分布する。
- 4d層：オリーブ灰（2.5GY6/1）粗砂。層厚は6～20cmで、4c層とほぼ同じ分布である。
- 4e層：灰色（5Y5/1）粗砂。層厚は4～8cmで局部的に存在するのみである。
- 4f層：褐灰（7.5YR4/1）粗砂。層厚は3～6cmで3区にのみ分布する。
- 5層：オリーブ灰（5GY5/1）シルト質粘土。層厚は6～20cmで畦畔2より南側に分布し、南へ行くほど厚くなる。炭化物を互層状に混入する。
- 6層：黒色（7.5YR1.7/1）泥炭質粘土。層厚は2～6cmと薄く、畦畔2より南側に分布する。
- 7層：黒色（10YR2/1）泥炭質粘土。層厚は2～6cmと薄く、II区の中央部にのみ分布する。
- 8a層：黒色（5YR1.7/1）泥炭質粘土。層厚は10～20cmで北端部を除き全域に分布する。8b層と同様に9層上面に擬似畦畔Bを残した水田耕作土である。
- 8b層：黒色（10YR1.7/1）泥炭質粘土。層厚は2～10cmで部分的に欠落する所があるがほぼ全域に分布し、北側に行くほど薄くなる。8a層と同様に9層上面に擬似畦畔Bを残した水田耕作土である。
- 9層：暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土。炭化物を互層に含む。層厚は10～20cmで全域に分布する。1区の14層に対応する。上面に8層水田跡の擬似畦畔が形成されている。
- 10層：黒褐色（2.5Y3/1）泥炭質粘土。層厚は4～15cmで全域に分布する。土器が出土している。I区の15層に対応する。
- 12層以下についてはII区の調査区中央部でのみの確認である。
- 11層：黒色（10YR1.7/1）泥炭質粘土、層厚は10cm前後である。I区の16層に対応する。
- 12層：黒色（5YR1.7/1）泥炭質粘土、層厚は10cm前後である。植物遺体を多量に含む。I区の17層に対応する。
- 13層：黒色（7.5YR2/1）泥炭質粘土。層厚は15～20cmである。I区の18層に対応する。
- 14層：黒褐色（10YR3/1）泥炭質粘土。層厚は4～10cmである。
- 15層：黒褐色（7.5YR3/1）泥炭質粘土。層厚は10cm前後である。
- 16層：灰黄色（2.5Y6/2）粘土。層厚は4～10cmである。炭化物を互層に含む。
- 17層：黒褐色（10YR3/1）泥炭質粘土。層厚は6～14cmである。
- 18層：黒色（10YR2/1）泥炭質粘土。層厚は4～10cmである。
- 19層：灰色（5Y6/1）砂質シルト。層厚は不明である。



| 層序 | 土色 | 土質 | 厚 | 盛入物・備考 |
|-----|--------|---------|--------|------------------------|
| 1-a | 暗灰灰褐色 | 2.5Y4/2 | 細砂 | |
| 1-b | 暗褐色 | 10YR3/2 | 砂質シルト | |
| 1-c | 灰褐色 | 2.5Y4/2 | 細砂 | 針織作上 |
| 1-d | 灰 色 | 5Y4/2 | 細砂 | |
| 1-e | に近い黄褐色 | 10YR4/2 | 細砂 | |
| 1-f | 灰 色 | 7.5Y4/2 | 砂質シルト | 10~45cm 砂質を多く含む |
| 2-a | 灰 色 | 10YR4/2 | 砂質シルト | 5~22cm |
| 2-b | 灰 色 | 10YR3/2 | 砂質シルト | 2~30cm |
| 2-c | 灰 色 | 10YR3/2 | シルト質粘土 | 2~14cm |
| 4-a | 灰 色 | 10YR3/2 | 細砂 | 2~7cm |
| 4-c | に近い黄褐色 | 10YR4/2 | 細砂 | 2~10cm |
| 5-a | 灰 色 | 7.5Y4/2 | 粗粒シルト | 4~20cm 上部に灰白色火成岩 水溶性作上 |
| 4-c | 灰 色 | 10YR3/2 | 細砂 | 4~10cm |
| 4-d | に近い灰褐色 | 5.5Y4/2 | 細砂 | 6~20cm |
| 4-e | 灰 色 | 5Y4/2 | 細砂 | 4~8cm |
| 4-f | 灰 色 | 7.5Y4/2 | 細砂 | 3~6cm |

| 層序 | 土色 | 土質 | 厚 | 盛入物・備考 |
|-----|-------|----------|--------|-------------------|
| 5 | オリーブ灰 | 5G YR1/1 | シルト質粘土 | 6~20cm 硬化物を互層状に混入 |
| 6 | 黒 | 5YK1/1 | 泥炭質粘土 | 2~6cm |
| 7 | 黒 | 5YK1/1 | 泥炭質粘土 | 2~6cm |
| 8-a | 黒 | 5YK1/1 | 泥炭質粘土 | 10~30cm |
| 8-b | 黒 | 10YK1/1 | 泥炭質粘土 | 2~50cm |
| 9 | 暗灰灰褐色 | 2.5Y4/2 | 粘土 | 黄褐色を互層に含む |
| 10 | 黒 | 2.5Y3/2 | 泥炭質粘土 | 4~15cm 稲文の土壁上 |
| 11 | 黒 | 10YK1/1 | 泥炭質粘土 | 10cm以上 |
| 12 | 黒 | 5YK1/1 | 泥炭質粘土 | 細粒度を多量に含む |
| 13 | 黒 | 7.5YK1/1 | 泥炭質粘土 | 4~10cm |
| 14 | 黒 | 7.5YK1/1 | 泥炭質粘土 | 4~10cm |
| 15 | 黒 | 7.5YR2/2 | 泥炭質粘土 | 10cm以上 |
| 16 | 灰 色 | 2.5Y4/2 | 粘土 | 4~10cm |
| 17 | 灰 色 | 10YR3/2 | 泥炭質粘土 | 6~10cm |
| 18 | 黒 | 10YR2/2 | 泥炭質粘土 | 4~10cm |
| 19 | 黒 | 5YK1/1 | 砂質シルト | 不明 |



第81図 中谷地II・III区土層断面図・透視平面図

(2) 9層検出遺構

8層水田跡（第81図、写真42）

9層上面で検出された擬似畦畔Bにより、上層の8a・8b層が水田跡であると判断された。擬似畦畔6条とそれらが形成する区画（a～g）を検出している。

[擬似畦畔による水田跡の認定] II区の南半部において8層下部から9層上面にかけての漸移的段階で灰色の畦畔状のプランが確認された。9層は自然堆積層であることから耕作土にはなりえず、このプランはより上位の水田跡が残した擬似畦畔Bと判断された。上位の層である8a・8b層は面的調査の時点では細分されておらず、基本的に類似した層であることから、両者を水田耕作土8層と捉え、8b層は耕作土の下部の層であると理解した。

[地形面] 8層上面はほとんど平坦であるが、若干南へ傾斜しており、その傾斜度は5cm/10mである。9層上面もほとんど平坦であるが、同様の傾斜で、その傾斜度は3cm/10mである。8層の標高は10.18～10.4m、9層は10.1～10.3mである。

[水田域] 耕作土である8層は北端部（北端から約6.5m）を除くほぼ全域に分布し、本層が区外へも延びることから水田域はさらに広がると考えられる。北端部に存在しないのは上位の4b層の攪拌が深くまで及んだためと理解される。

[耕作土] 上部が基本層8a層、下部が8b層になる。ともに黒色の泥炭質粘土であるが8a層が若干明るい。層厚は8a層が10～20cm、8b層が2～10cmである。下面に凹凸が認められる。母材となる層は不明だが、その一部には10層が含まれる。

[直下の層] 基本層9層で、暗灰黄色の粘土層と薄い炭化物の層との互層で自然堆積層である。上面には疑似畦畔Bと凹凸が認められる。8層直下、9層直上・層中に鉄分の集積やマンガン斑などは存在しない。

[擬似畦畔] 畦畔は6条検出されている。計測値は第23表に示した。畦畔の方向は2方向で、畦畔1が真北からやや東へ振れる南北方向でN-8°-E、畦畔2～6は1に直交する東西方向でN-80°～90°-Wである。畦畔1の規模は大きく幅は50～190cmである。畦畔2の西側を除くと、他は20～70cmである。

[水田の区画] 畦畔6条に形成される区画が7区画（a～g）存在する。1区画全体が判明し

第23表 中谷地II・III区8層水田跡畦畔計測表

| 順序番号 | 検出長(m) | 方向性 | 左 | 右 | 幅(cm) | 水田面との比率(cm) | | |
|------|--------|-----|----------------------|--------|-------|-------------|---|---|
| | | | 北 | 南 | 東 | 北 | 南 | 東 |
| 1 | 11 | 東 | N-8°-E | 50-190 | - | - | - | - |
| 2 | 7 | 北 | N-82°-W | 50-220 | - | - | - | - |
| 3 | 4 | 東 | N-43°-W | 45-70 | - | - | - | - |
| 4 | 4.2 | 西 | N-80°-W | 30-70 | - | - | - | - |
| 5 | 7 | 東 | 東N-81°-W 西N-85°-W | 20-40 | - | - | - | - |
| 6 | 3.2 | 東 | N-90°-W | 40 | - | - | - | - |

ているものはない。畦畔1を中心としてその東側に区画a～dが、西側にe・fが存在し、比較的整然と区画されている。あくまで擬似畦畔での計測であるが、区画a・b・c・f・gの南北長が計測可能で、a・b・c・gは3～4mではほぼ同規模となる。区画a・b・cは東西辺も3～4m以上になることから、短辺が3～4m、長辺が4m以上の長方形の水田区画が基本のひとつであったことが想定され、区画fもさらに分割されていた可能性が考えられる。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

(3) 4b層検出遺構

4b層水田跡（第81図、写真42）

畦畔5条とそれらが形成する区画（a～g）を検出している。

〔地形面〕 4b層上面はほぼ平坦であるが、II区の中央部が標高10.45mとやや低くなり、南端部が10.55mとやや高くなっている。傾斜度は5cm/10mである。

〔水田域〕 耕作土である4b層が全域に及ぶことから調査区はすべて水田域であり、さらに区外へも広がっている。

〔耕作土〕 基本層4b層で灰褐色粘土質シルトである。層厚は5～30cmで調査区全域に分布しているが、畦畔2より北側が20～30cmと厚くなっている。下面に凹凸が認められる。母材層について詳細は不明だが、III区の南壁土層断面には畦畔5の下部に5・6層が擬似畦畔Bとして残存しているのが観察され、5・6層が母材層の一部であることが判明している。

〔直下の層〕 II区の南端では4c層、南半部のほとんどが5層で部分的に6・7層、北半の畦畔2以北では8a・8b層となっている。III区ではほとんどが8a層で部分的に5・6層となっている。4b層直下、直下層の上面・層中に鉄分の集積やマンガン斑などは認められない。

〔畦畔〕 畦畔5条が検出されている。計測値は第24表に示した。畦畔の方向はおむね2方向である。東西方向の畦畔は1・2・4で方向はN-90°・82°・80°-Wである。畦畔1は直線的であるが、2はやや北へカーブし、4はやや蛇行気味である。南北方向の畦畔は3と5で、5はほぼ真北方向、3は南端部付近が東へカーブしている。畦畔の規模は下端幅が80～240cmと比較的大きくなっているが、なかでも畦畔5は160～240cmと大畦畔となっている。

第24表 中谷地II・III区4b層水田跡畦畔計測表

| 区画番号 | 標高(m) | 方 向 | 方 向 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比較(cm) | | | |
|------|-------|-----|--------------------|---------|---------|-------------|------|-----|-------|
| | | | | | | 北 側 | 中 側 | 南 側 | 東 側 |
| 1 | 2.2 | 正南 | N-90°-W | 70 | 130 | 北 側 | 6 | 南 側 | 5-11 |
| 2 | 5.5 | 東 | N-82° E | 120-70 | 130-200 | 北 側 | 8-14 | 南 側 | 17-20 |
| 3 | 17.5 | 南北 | N-14°-S N-58°-W | 45-120 | 110-190 | 西 側 | 3-13 | 東 側 | 5-16 |
| 4 | 6 | 西半南 | N-80°-W | 40-80 | 80-140 | 北 側 | 3-7 | 南 側 | 3-7 |
| 5 | 15.7 | 正 | N-0°-E | 100-150 | 160-240 | 西 側 | 4-7 | 東 側 | 4-8 |

〔水田の区画〕 畦畔5条が形成する7区画(a～g)が存在する。しかし、1区画全体が判明しているものはない。計測可能なのは区画b・c・dの南北片で、bは約16m、c・dは約30mである。c・dに関してはかなり大規模になることから南北部がさらに分割されていた可能性が高い。また区画e内においても、畦畔4から南へ分岐しe内をさらに分割する小畦畔が試掘時(No.10)に確認されている。一方区画aはI区12層水田跡区画cと同一区画と考えられ、その南北辺は約10mと推定される。

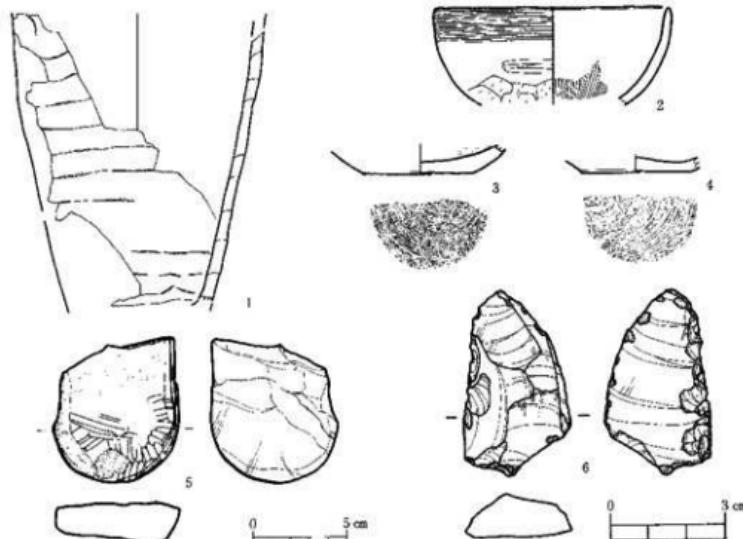
〔水田面の傾斜〕 区画a～dでは、(a+b)、(c+d)がそれぞれ同じ高さで後者がやや低くなっている。区画f・gではgがやや低くなっている。区画内の傾斜については、c・d内で畦畔3の南端以南がやや高くなり、またe内では東側がやや低くなっている。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

(4) その他の出土遺物

基本層10層から小型の深鉢形土器が出土している。

深鉢(第82図1、写真116)：小型の無文の深鉢で、口縁部ではなく底部から体部下半にかけて残存している。残存高は15.6cm、その径が13.5cm、底径が7cmである。外面には幅1～1.5cmの粘土紐の巻き上げ痕跡とそれを押された指頭痕が明瞭に残されている。外面の調整はごく一部にナデが観察されるのみである。内面は粗いナデとミガキが施され、粘土紐の痕跡は認めら



第82図 中谷地I区・II区出土遺物(1)

れない。底部は平底でナデが施されているが葉脈状の痕跡が観察される。色調は基本的に黄褐色で内外面の一部に黒色部分が存在する。二次加熱による赤色化や器面の剥落痕(焼けはじけ)などは認められない。

(5) 小結

まず、19次調査との層の対応をし、ついで中谷地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区で検出した遺構の時期や性格について、簡単にまとめておきたい。なお、検出された主な遺構は3時期の水田跡と溝跡1条である。

①19次調査区との層の対応

中谷地Ⅱ区の中央部から西約12mの地点で19次調査(渡辺:1986)が実施されている。両者の層の標高、層順、層相などの検討を行った結果、三つの層の対応が可能であった。a:19次4'層=Ⅱ区4b層、b:19次6層=Ⅱ区9層、c:19次7a・7b層=Ⅱ区10層である。aは灰白火山灰がからみ、土色が灰色・暗灰黄色となる層、bは東方への傾斜度を考慮した上での標高が一致し、層厚が15~20cmで両者に安定して存在する灰黄色・暗灰黄色の層、cはbの直下に存在する黒色系の層である。

ちなみに19次では4'層で平安時代の水田跡が、7b層で弥生時代中期樹形圓式期の水田跡が検出されている。また、cの対応関係からⅡ区10層も弥生時代の水田耕作土の可能性が考えられる。

②Ⅱ区8層水田跡

10層上面で検出された擬似畦畔により確認された水田跡である。年代を決定する資料は出土していないので上下の層からその時期を大まかに捉えたい。上位の4b層は次項で述べるように平安時代の層である。また、下位の10層は19次で弥生時代の樹形圓式期の水田跡が検出された7b層に対応する。したがって8層水田跡の時期は大まかではあるが弥生時代以降平安時代以前に位置づけられる。

③Ⅰ区12層水田跡、Ⅱ・Ⅲ区4b層水田跡

基本層序の項で述べたようにⅠ区12層とⅡ・Ⅲ区4b層とは対応する層位であり、ともに灰白火山灰を畦畔の上面にのせることから、同一の水田跡と考えられる。また、Ⅰ区12層出土の遺物は少量ながら平安時代の表札ノ入式の土師器を中心であることや、畦畔上にのる灰白色火山灰は10世紀前半に降下したと考えられている(白鳥:1980)ことから、この水田跡の時期は平安時代と捉えられる。

富沢遺跡の灰白色火山灰のかかわる水田については条里型土地割が問題となり、その検討が行われている(平間:1988)。それによれば、南北方向の坪境の想定ライン(Y=+3640km)

がI区を通り、東西方向の想定ライン（X=-197.604km）がII区を通過することになるが、該当するような畦畔は検出されなかった。今後の周辺での調査に期待したい。

④ I区7層水田跡

7層中から年代を決定するような資料は出土していないが、SD1の底面直上から中世常滑窯の甕の破片が出土していることや下位の12層に灰白色火山灰が存在すること、またIN試掘区No.15で8層に対応する層から中国銭一周通元宝（後周：955）・咸平元宝（北宋：998）・大觀通宝（北宋：1107）・正隆元宝（金：1158）が出土していることから、この水田跡はほぼ中世の所産と考えられる¹⁾。

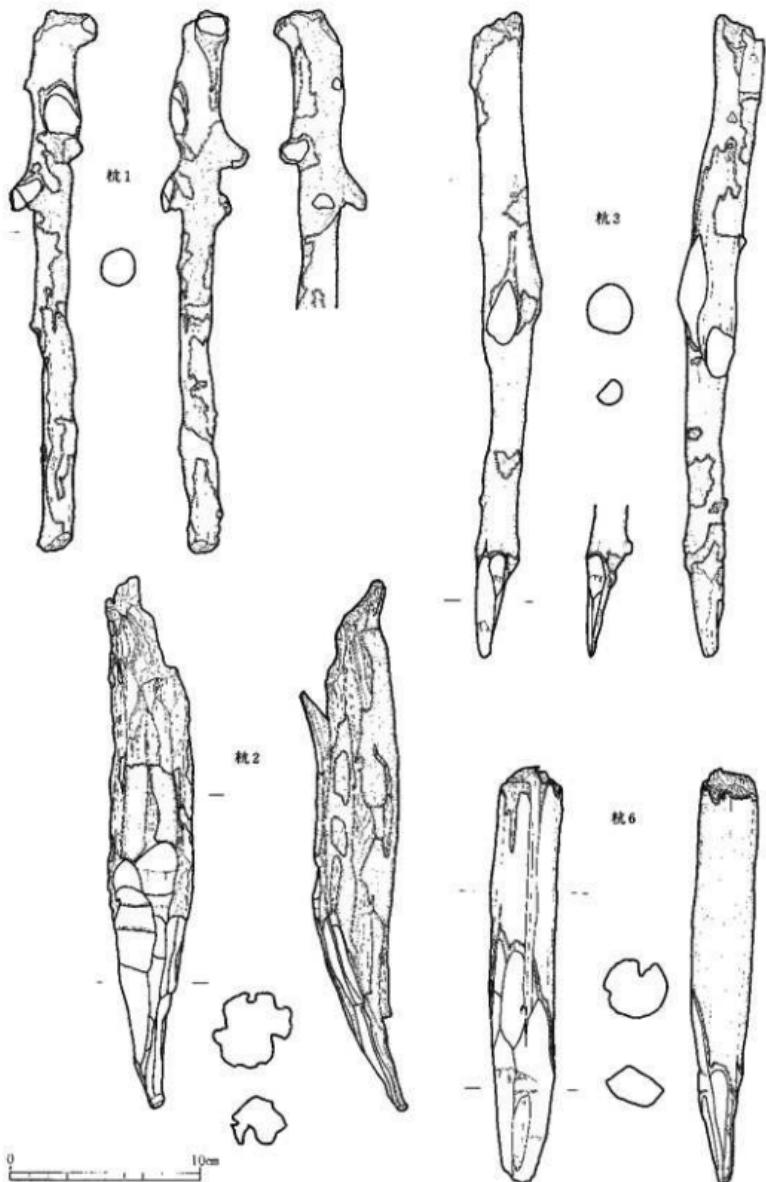
⑤ II区10層出土の土器について

粘土紐の痕跡を明瞭に残すことをひとつ特徴とするものに「製塙土器」と「筒形土器」がある。製塙土器は近傍のは松島湾の製塙遺跡や貝塚で出土する場合が多い。内陸部での出土例は中沢目貝塚（須藤：1984）が挙げられる程度である。土器製塙は松島湾では縄文時代後期後葉から開始されており（岡村：1988）、平安時代まで継続して行われていたと理解されている（宮城県教委：1986）。一方、筒形土器は宮城県内では清水遺跡（丹羽他：1981）・家老内遺跡（真山：1981）・小柴川遺跡（新庄屋：1985）で出土している。いずれも平安時代の堅穴住居跡からの出土で、家老内遺跡では機能のひとつとしてカマドの支脚の可能性が指摘されている。

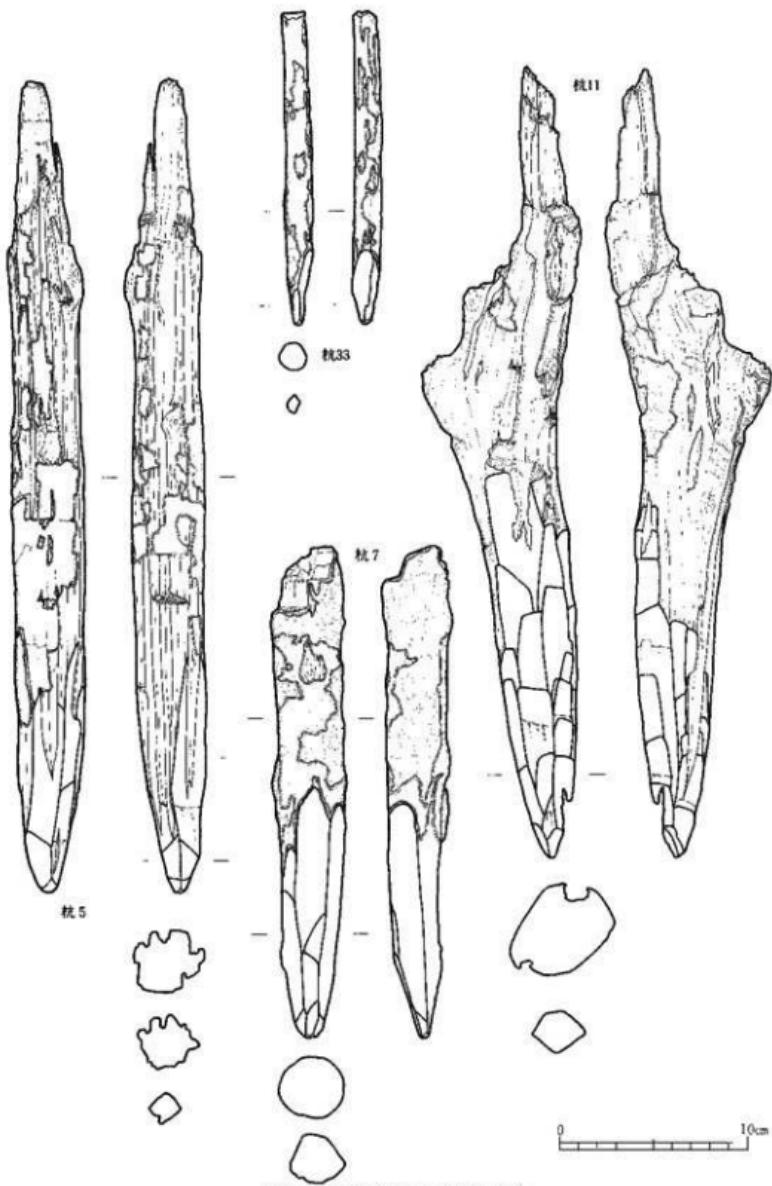
当該深鉢の機能を特定することは現時点では困難である。今回は海岸から約11km内陸の地点から、しかも弥生時代の水田耕作土と考えられる層から、両者に類似した資料が出土したこととを指摘するにとどめておきたい。

注)

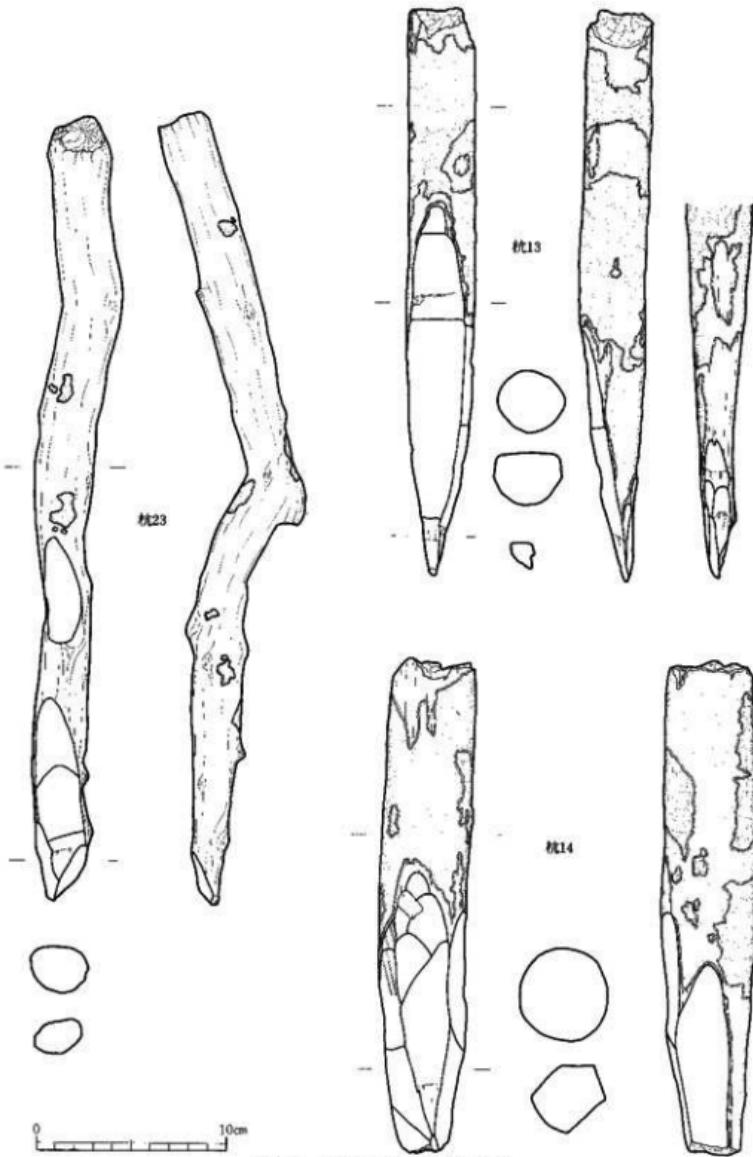
1)誠に遺憾ながら遺物が行方不明になり図示できなかった。中国銭の種類は現場での調査日誌の記録による。



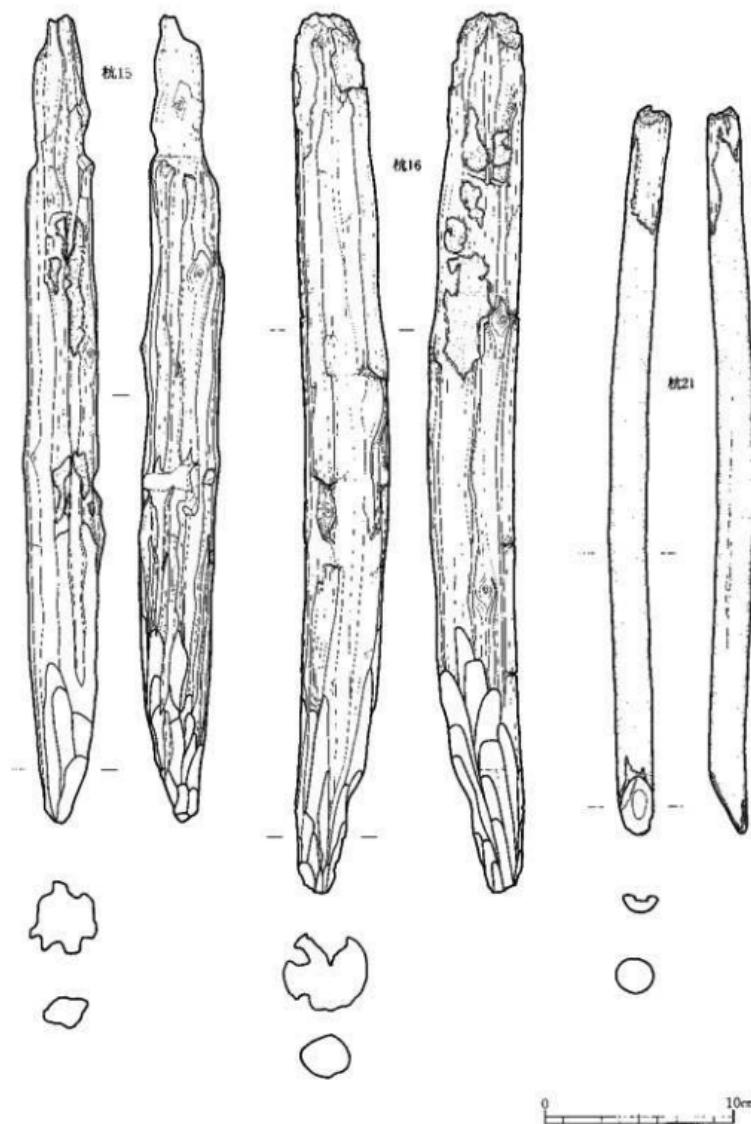
第83図 中谷地I区出土遺物（1）



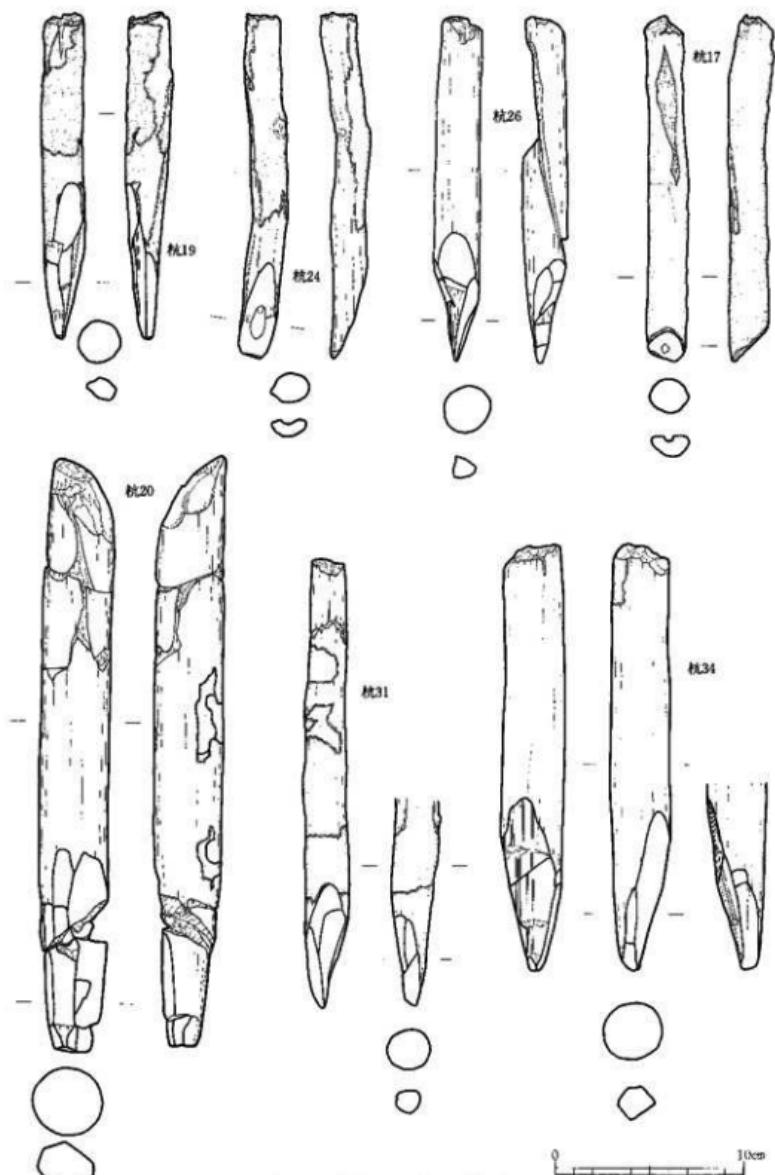
第84図 中谷地Ⅰ区出土遺物（2）



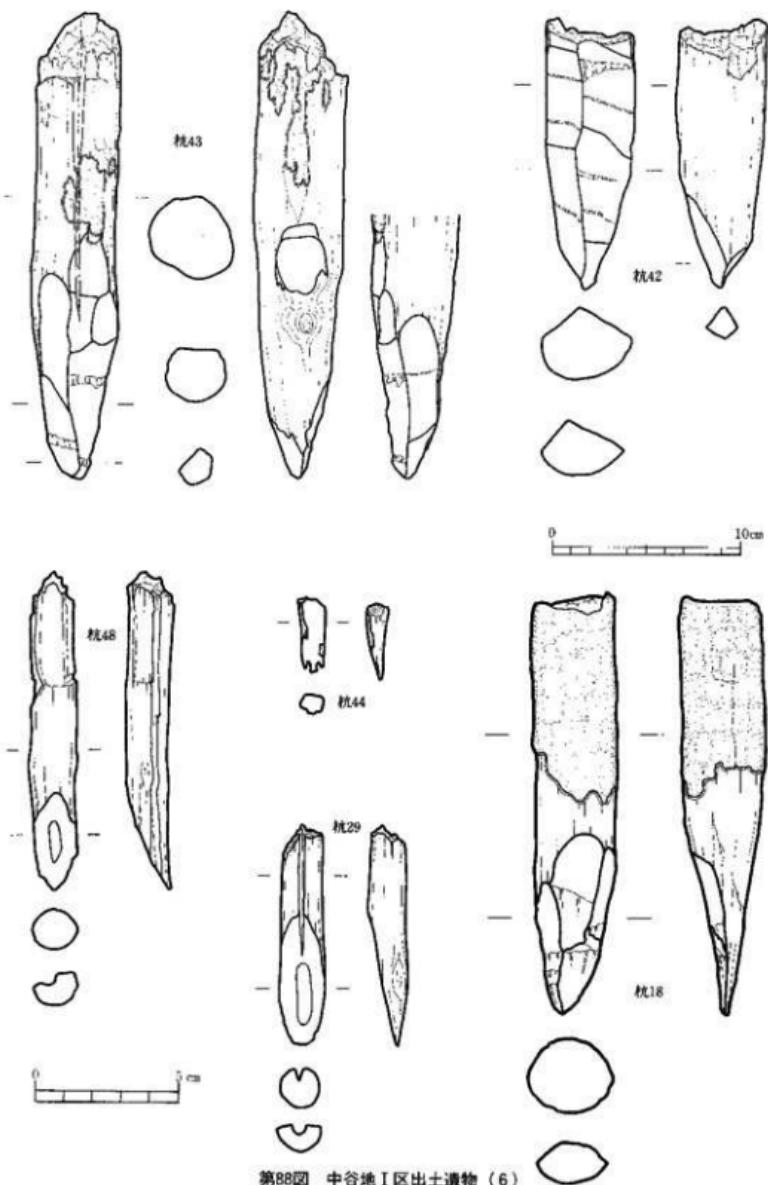
第85図 中谷地I区出土遺物 (3)



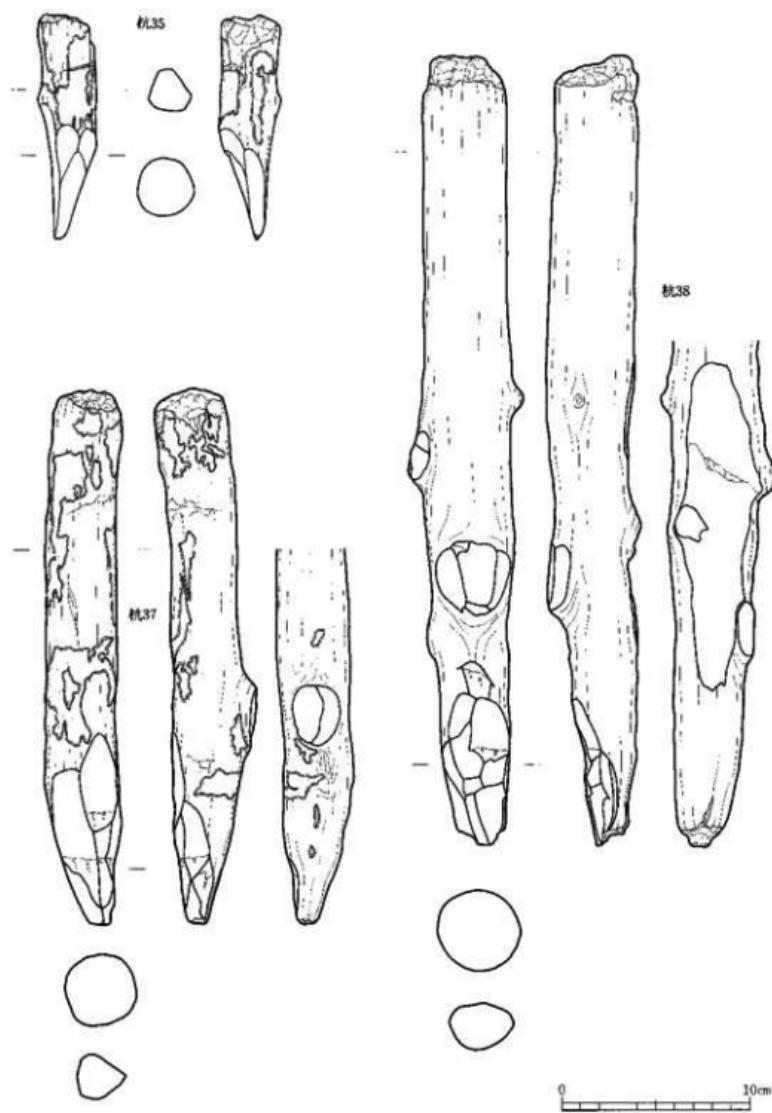
第86図 中谷地I区出土遺物（4）



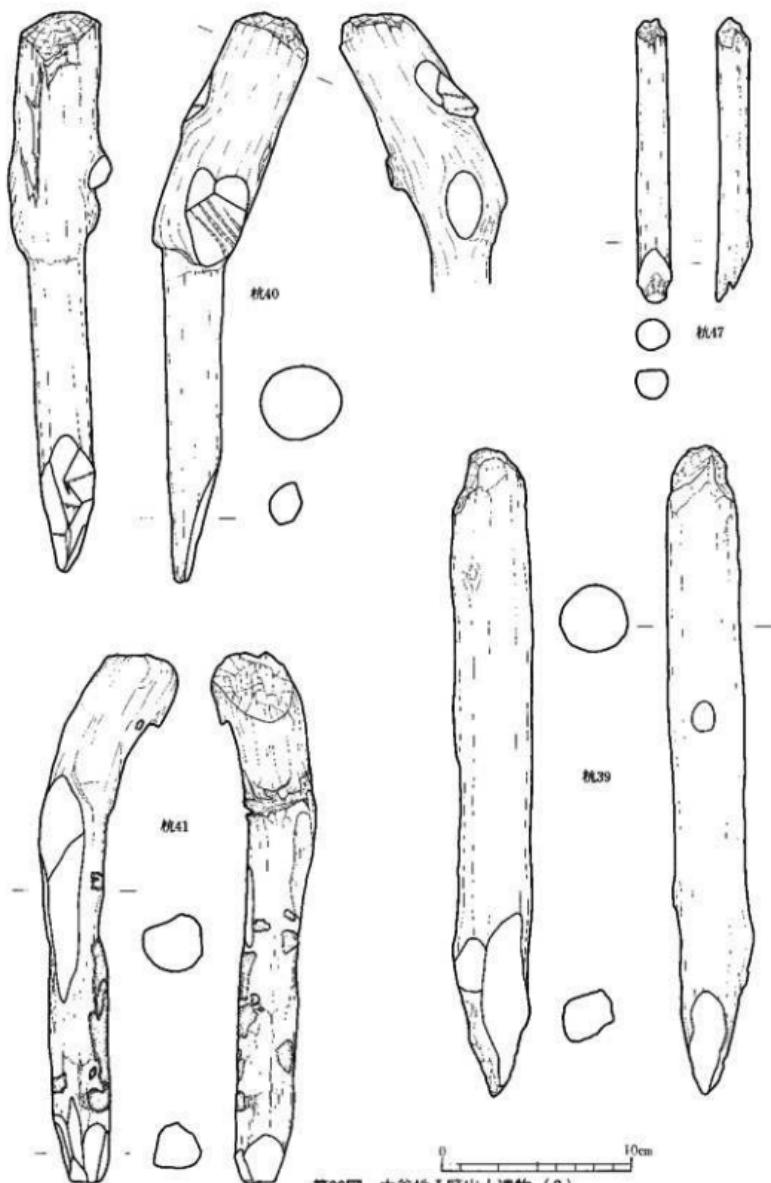
第87図 中谷地I区出土遺物（5）



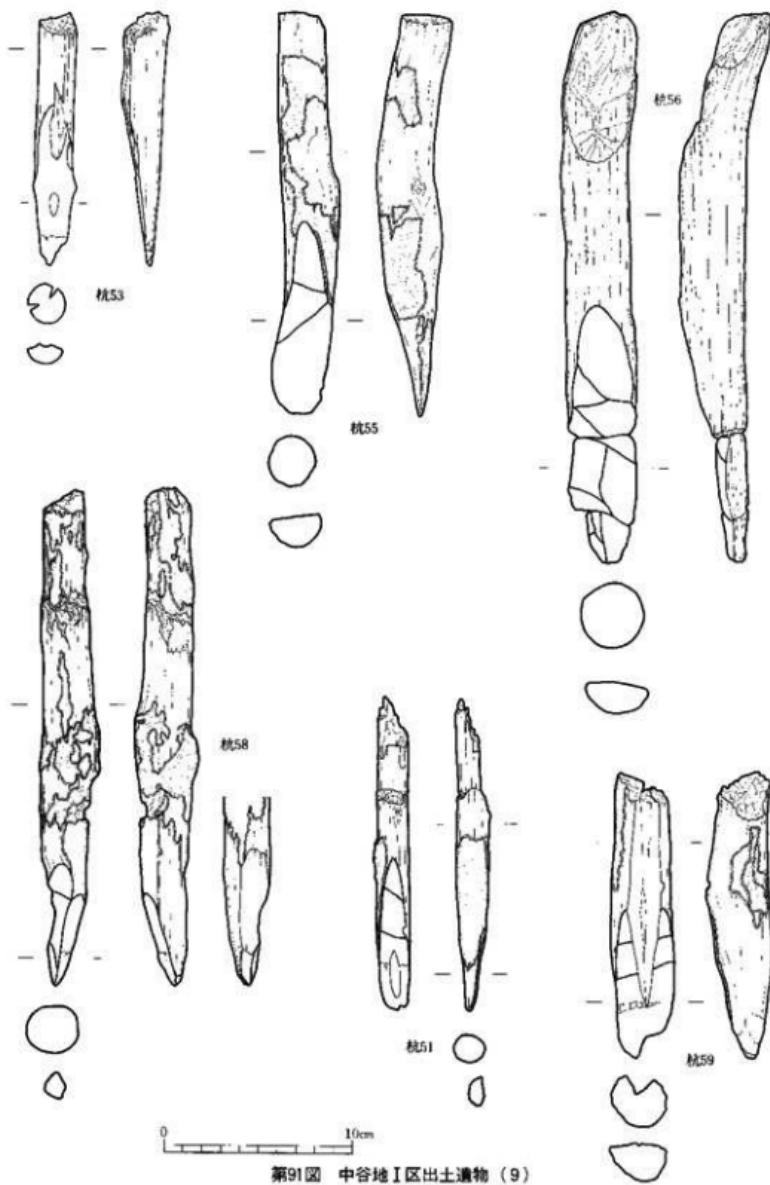
第88図 中谷地I区出土遺物（6）



第89図 中谷地I区出土遺物 (7)



第90図 中谷地I区出土遺物 (8)



第91図 中谷地I区出土遺物（9）

第25表 中谷地区遺物観察表

土器

| 調査番号 | 遺物番号 | 遺物・型式 | 地 質 | 形 態 | 寸 法 | 口部cm | 底径cm | 高さcm | 特 徴 | 出 所 | 年月日 |
|------|------|-----------|--------|--------|--------|------|------|-------------------------|----------------------------------|--------|-----|
| 82-1 | B1 | II区 10号 | 陶片 | 盤 | 18.5 | 7.0 | 15.6 | 外縁: 扇状鋸歯状切欠き。内縁: ハサ・ミガキ | | | 115 |
| 83-2 | C1 | II区12号水江井 | 上 | 盤 | 11.5 | 12.6 | | | スケル手彫り。外縁: ヘクタゴン・ヘクタゴン。内縁: ヘクタゴン | | |
| 82-3 | D1 | II区12号水江井 | 下 | 盤 | 11.2 | 6.0 | | | ローラー。両軸孔近傍突起。外縁: ハサミガキ沿革色切欠 | | |
| 82-4 | D2 | II区12号水江井 | 水槽上蓋 | 盤 | 11.2 | 6.0 | | | ローラー。内縁: 扇状鋸歯状。内縁: ハクロナガ | | |

杭

| 回 | 件号 | 遺物・部位 | 地 質 | 形 態 | 高さcm | 幅cm | 厚さcm | 目録記 | 特 徴(調査用語) | 作 者 | 年月日 |
|-------|------|---------|--------|--------|-------|------|------|-----|--------------|--------|-----|
| 83-1 | 机 1 | SD1第1列 | 丸太材 | 丸太材 | 28.9 | 2.6 | | ○ | | | |
| 83-2 | 机 2 | SD1第1列 | 丸太材 | 丸太材 | 24.6 | 3.1 | | ○ | | | |
| 83-3 | 机 3 | SD1第1列 | 丸太材 | 丸太材 | 28.5 | 4.3 | | ○ | | | |
| 83-4 | 机 4 | SD1第1列 | 丸太材 | 丸太材 | 22.2 | 3.5 | | ○ | | | |
| 84-1 | 机 5 | SD1第1列 | 丸太材 | 丸太材 | 43.4 | 3.7 | | ○ | | | |
| 84-2 | 机 6 | SD1第1列 | 丸太材 | 丸太材 | 36.55 | 1.5 | | ○ | ヤナギ葉の一種 | | 116 |
| 84-3 | 机 7 | SD1第1列 | 丸太材 | 丸太材 | 42.05 | 3.4 | | ○ | クリ | | 116 |
| 84-4 | 机 8 | SD1第2列 | 丸太材 | 丸太材 | 26.1 | 4.0 | | ○ | | | |
| 84-5 | 机 9 | SD1第2列 | 丸太材 | 丸太材 | 22.4 | 3.95 | | ○ | ヤナギ葉の一種 | | 116 |
| 84-6 | 机 10 | SD1第2列 | 丸太材 | 丸太材 | 30.3 | 3.6 | | ○ | | | |
| 84-7 | 机 11 | SD1第3列 | 丸太材 | 丸太材 | 36.4 | 4.9 | | ○ | | | |
| 84-8 | 机 12 | SD1第3列 | 丸太材 | 丸太材 | 32.6 | 4.2 | | ○ | クリ | | 116 |
| 84-9 | 机 13 | SD1第3列 | 丸太材 | 丸太材 | 46.5 | 4.5 | | ○ | クリ | | 116 |
| 84-10 | 机 14 | SD1第4列 | 丸太材 | 丸太材 | 29.9 | 2.8 | | ○ | ヤナギ葉の一種 | | 116 |
| 84-11 | 机 15 | SD1第5列 | 丸太材 | 丸太材 | 22.4 | 2.4 | | ○ | | | |
| 84-12 | 机 16 | SD1第4列 | 丸太材 | 丸太材 | 38.5 | 1.55 | | ○ | ヤナギ葉の一種 | | 116 |
| 84-13 | 机 17 | SD1第5列 | 丸太材 | 丸太材 | 38.4 | 2.3 | | ○ | | | |
| 84-14 | 机 18 | SD1第5列 | 丸太材 | 丸太材 | 38.5 | 2.5 | | ○ | | | |
| 84-15 | 机 19 | SD1第5列 | 丸太材 | 丸太材 | 37.3 | 3.5 | | ○ | | | |
| 84-16 | 机 20 | SD1第5列 | 丸太材 | 丸太材 | 24.05 | 2.4 | | ○ | | | |
| 84-17 | 机 21 | SD1第6列 | 丸太材 | 丸太材 | 32.8 | 3.2 | | ○ | | | |
| 84-18 | 机 22 | SD1第6列 | 丸太材 | 丸太材 | 25.9 | 4.6 | | ○ | | | |
| 84-19 | 机 23 | SD1第7列 | 丸太材 | 丸太材 | 34.3 | 4.8 | | ○ | | | |
| 84-20 | 机 24 | SD1第7列 | 丸太材 | 丸太材 | 17.3 | 1.8 | | ○ | | | |
| 84-21 | 机 25 | SD1第7列 | 丸太材 | 丸太材 | 17.3 | 1.6 | | ○ | | | |
| 84-22 | 机 26 | SD1第7列 | 丸太材 | 丸太材 | 18.8 | 1.5 | | ○ | | | |
| 84-23 | 机 27 | SD1第7列 | 丸太材 | 丸太材 | 12.5 | 2.0 | | ○ | | | |
| 84-24 | 机 28 | SD1第8列 | 丸太材 | 丸太材 | 13.00 | 3.15 | | ○ | | | |
| 84-25 | 机 29 | SD1第8列 | 丸太材 | 丸太材 | 37.2 | 4.4 | | ○ | ヌルダ | | 116 |
| 84-26 | 机 30 | SD1第8列 | 丸太材 | 丸太材 | 28.6 | 4.0 | | ○ | ヤナギ葉の一種 | | 116 |
| 84-27 | 机 31 | SD1第8列 | 丸太材 | 丸太材 | 30.0 | 3.9 | | ○ | | | |
| 84-28 | 机 32 | SD1第9列 | 丸太材 | 丸太材 | 15.15 | 1.8 | | ○ | | | |
| 84-29 | 机 33 | SD1第9列 | 丸太材 | 丸太材 | 28.3 | 4.55 | | ○ | | | |
| 84-30 | 机 34 | SD1第9列 | 丸太材 | 丸太材 | 34.6 | 4.1 | | ○ | ヌルダ | | 116 |
| 84-31 | 机 35 | SD1第9列 | 丸太材 | 丸太材 | 23.5 | 3.3 | | ○ | | | |
| 84-32 | 机 36 | SD1第10列 | 丸太材 | 丸太材 | 41.2 | 3.05 | | ○ | | | |
| 84-33 | 机 37 | SD1第10列 | 丸太材 | 丸太材 | 26.5 | 3.3 | | ○ | | | |
| 84-34 | 机 38 | SD1第10列 | 丸太材 | 丸太材 | 26.2 | 3.3 | | ○ | | | |
| 84-35 | 机 39 | SD1 | 丸太材 | 丸太材 | 24.2 | 2.5 | | ○ | | | |

VI 鳥居原地区

1. 長町南駅区

(1) 調査の方法と経過

長町南駅区においては起点より12.300～12.620kmの320mの区間を本調査対象とした。ただし、西端部の12.560～12.620kmの60m部分は本来中谷地工区の部分であるが、調査の便宜上当工区に含めて調査している。工事業者との協議の結果、工事工程上東半部を急ぐ必要があり、1982年は東半部の12.300～12.420kmの調査を行い、1983年は西半部の12.420～12.620kmの本線部分、東出入口部分、下水管移転先部分の調査を行っている。なお、本調査は工事用の鋼矢板を打ち込んだ後に行われた。

調査区は幅7～11m、長さ約300mの細長いものである。12.328kmより東をI区、西を10mごとにIIa・IIb・IIIa…XVIa区までの30区を設定した。実測は任意の実測用基準杭を数多く設定し、平板測量を基本として行った。基準点と路線の基準杭との位置関係は平板測量で記録した。なお、報文図中の国土座標は工事用に計測された路線中心線の国土座標より岡上にて求めたものである。

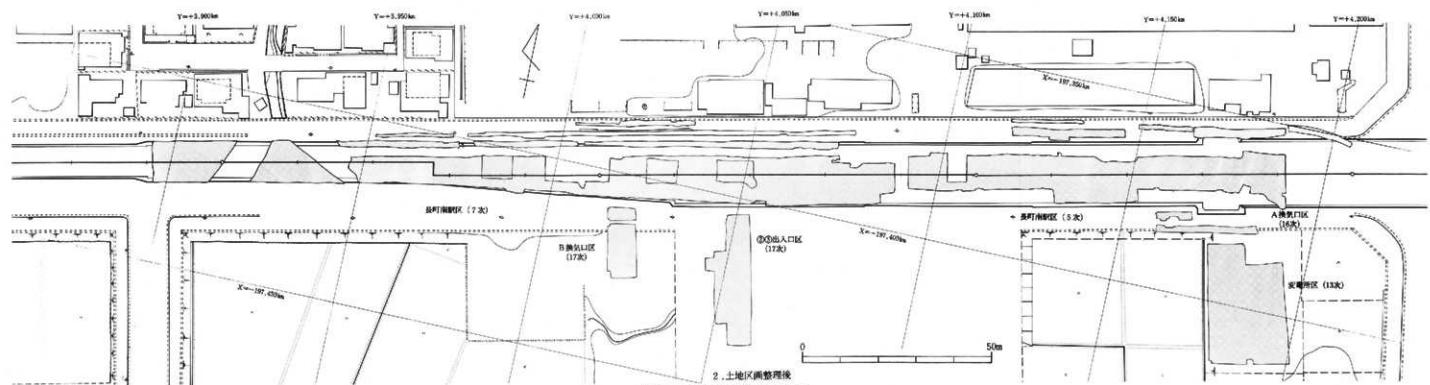
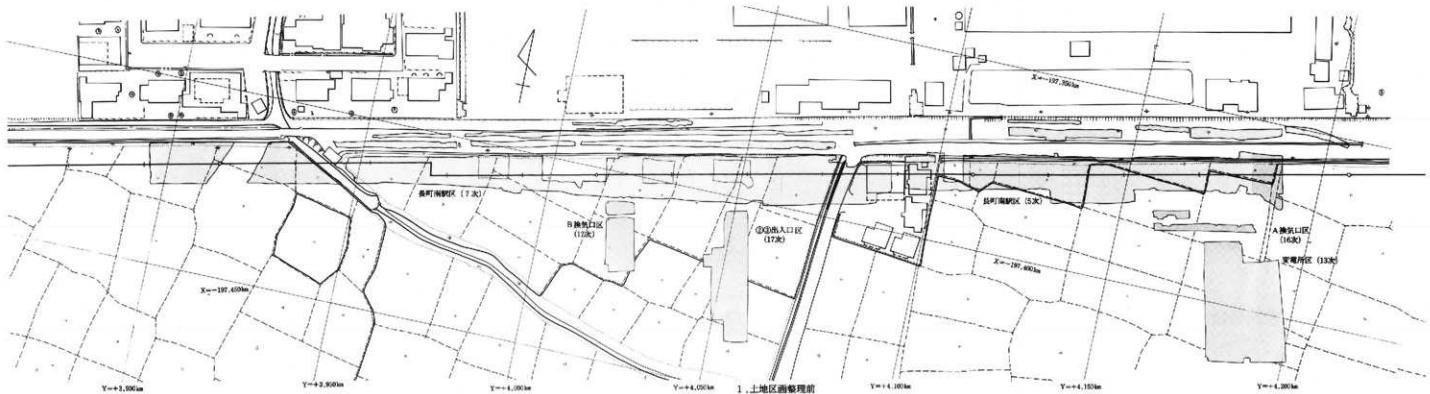
調査にあたり盛土のみを重機によって掘削し、それ以下は人力により遺構検出および掘り込みを行った。また、調査区の片側にベルトコンベアーを數十台固定して設置し（工事側設置）、作業の効率化を図った。調査区設定に必要な諸工事や盛土・旧表土掘削・残土運搬などは他工区と同様に工事業者が担当した。

82年の調査は10月8日に開始し、6層で5層水田跡の擬似畦畔Bを検出、7c層で試掘時に予想された大畦畔を伴う平安時代以前の水田跡を検出した。本調査の大部分は12月26日に終了したが、7c層で人畦畔が2条検出されたIIIb・IVa区については南への拡張が必要になり、2月4日～16日に追加調査を行ってすべてを終了した。

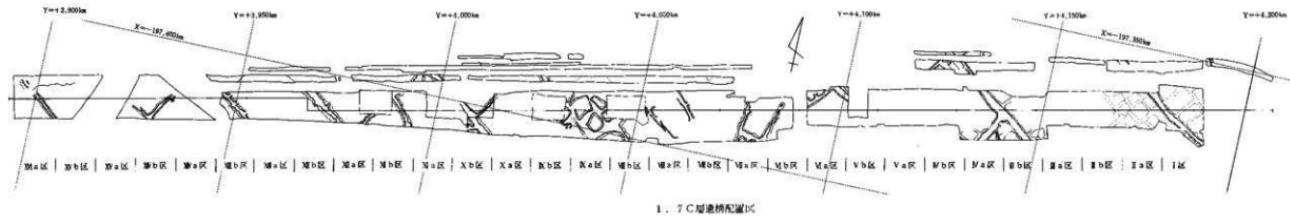
83年の調査は4月14日に下水管移設先の調査より開始し、本線部分のXVIa区を5月26日から開始した。10月には東出入口の調査を行った。3層で平安時代と考えられる水田跡、7c層でも前年同様水田跡を検出したが、大畦畔上から弥生土器が出土し、時期が決定された。調査は越年し1月9日にすべて終了した。なお8月27日に現地説明会を実施している。

(2) 調査区の位置

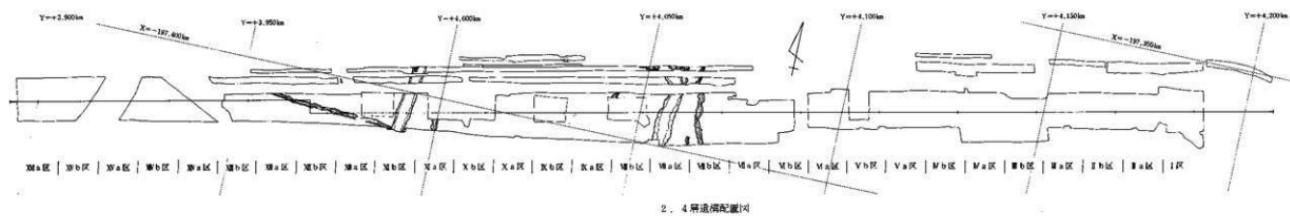
調査地点は富沢遺跡内の北東部にあり、金洗沢が形成した泉崎浦の微高地と二ツ沢が形成した鹿野の微高地（II参照）の中間に位置する。区画整理以前は工場（東北特殊鋼KK）の南



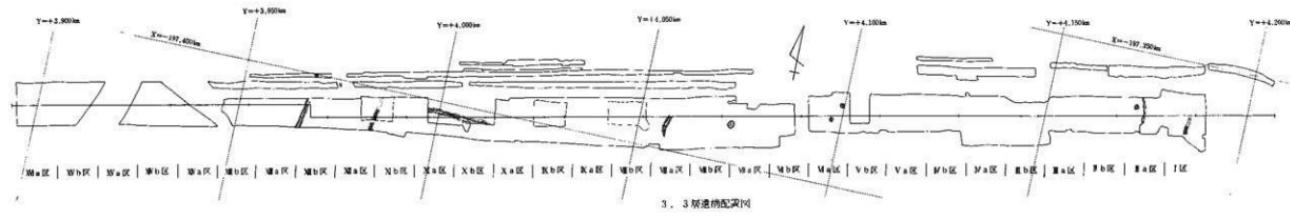
第92図 鳥居原地区調査位置図



1. 7 C 順造油配図



2. 4 順造油配図



3. 3 順造油配図

第93回 長町南駅区油配図

辺に沿う道路と水田であった。水田は南東方向へ緩く傾斜しており、調査区内でのその標高は10.3～9.9mで西高東低になっていた。

(3) 基本層序

全長約300mの調査区を通して確認できた基本層序は1～9層である。10層以下については深掘りを7ヶ所で行ったが各層の対応は困難であった。10層以下については各深掘区ごとの土層注記を参照されたい（写真44～50）。

層序を大まかにみると、1～3層がシルトおよび粘土層、4層以下約3mにかけては泥炭および泥炭質粘土層、それ以下約3.5～4.5mはグライ化した粘土および砂層、そして基底疊層になる。地下鉄工事のボーリング調査の結果によれば、疊層の標高はXII b区で3m、IV b区で1.7mとなり東へ傾斜している。

1層：灰色（7.5YR4/1）シルト。旧耕作土。

2層：黄灰色（2.5Y4/1）シルト。この層の上部に酸化鉄の集積層（2a層）が認められる。炭化物を少量、白色の岩片（1～3mm）を含む。層厚は約5～15cmで、ほぼ全域に分布する。この層の下面の凹凸は顕著で、4層上面まで搅拌が及ぶ場合もある。水田耕作土の可能性がある。

3層：灰黄褐色（10YR4/2）・褐灰色（10YR4/1）・黒褐色（10YR3/1）のシルト・シルト質粘土・粘土。この層中及び上面に灰白色火山灰をブロック状に含む。炭化物を少量、白色の岩片を含む。層厚は4～20cmでほぼ全域に分布する。この層の下面の凹凸は顕著である。水田耕作土である。

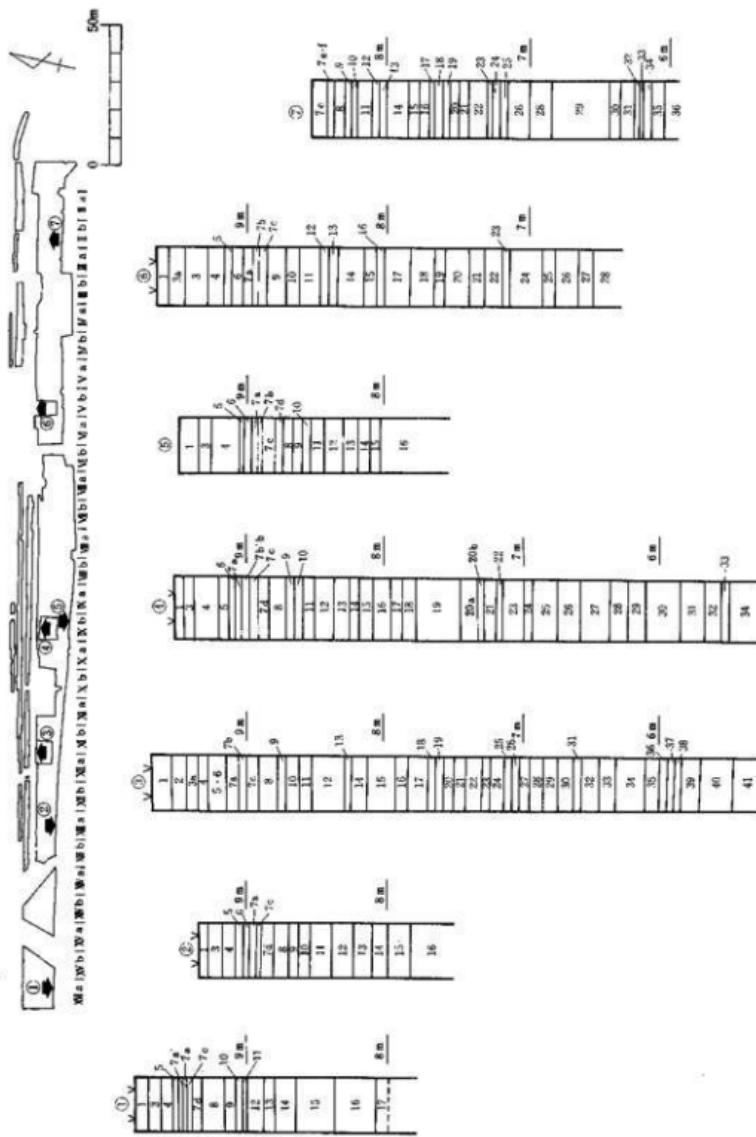
4層：黒色（10YR2/1）泥炭と灰色（5Y5/1）シルト質粘土・黄橙色粘土との互層。ほぼ全域に分布する。層厚は5～30cmで西側ほど薄くなる。自然堆積層である。

5層：灰黄色（2.5Y7/2）・暗灰黄色（2.5Y4/2）の泥炭質粘土。ほぼ全域に分布するが、VII a～IX a区にかけて分布が希薄になる。この層の下面には凹凸が認められ、特にV a区以東の凹凸が顕著である。下位の6層が搅拌を受けて形成された層で分解の進んだ層である。水田耕作土である。

6層：黒褐色（10YR2/3）泥炭質粘土層と黒色（10YR2/1）泥炭層との互層。層厚は4～12cmで、ほぼ全域に分布する。自然堆積層である。

7a層：にぶい黄色・暗灰黄褐色（2.5Y5/2）の泥炭質粘土。層厚が2～4cmと薄い層である。I区～VI a区、XIV a区に分布する。

7a層：黒色（10YR2/1）泥炭質粘土。層厚は2～20cmでほぼ全域に分布する。自然堆積層である。



第94图 深圳区土壤柱状图

第26表 長町南駅区深掘区土層注記表(1)

| 深掘区 ① | | 土 壴 | 土 質 | 厚 度 | 表 入 物 | 備 考 |
|-------|-------|--------------------------|-------------|------------------|--------|----------------|
| 10 | 黒 灰 | 色 10YR 5/1 色 2.5Y 3/3 | 粘 土 | 3~10cm | 植物遺体多量 | 丘陵 |
| 11 | 黒 灰 | 色 10YR 12/2 | 粘 土 | 2~5cm | 植物遺体多量 | |
| 12 | 黒 灰 | 色 2.5Y 3/3 | 粘 土 | 2cm附近 | 植物遺体 | |
| 13 | 黒 灰 | 色 10YR 2/1 | 粘 土 | 13~16cm | | |
| 14 | 黒 灰 | 色 10YR 3/2 | 砂 | 2~15cm | | 13cm~15cmに細砂層有 |
| 15 | 黄 黑 灰 | 色 10GY 7/1 色 2.5Y 6/2 | 粘 土 | 8~20cm | | |
| 16 | オリーブ灰 | 色 2.5G Y 1/1 | 砂質粘土 | 10~20cm | | |
| 17a | 黄 黑 灰 | 色 10YR 4/2 色 2.5Y 6/2 | 泥炭質粘土 灰土 | 6~10cm 10cm附近 | 植物遺体多量 | 丘陵 |
| 17b | 黒 灰 | 色 2.5Y 3/1 | 泥炭質粘土 | 3cm附近 | 植物遺体多量 | |
| 17c | 黄 黑 灰 | 色 2.5Y 5/1 色 2.5Y 6/2 | 泥炭質粘土 灰土 | 20cm附近 | 植物遺体多量 | 丘陵 |
| 17d | 黒 灰 | 色 10YR 3/1 | 泥炭質粘土 | 3cm附近 | 植物遺体多量 | |
| 17e | 黄 黑 灰 | 色 10YR 4/2 | 泥炭質粘土 | 2cm附近 | 植物遺体多量 | |
| 18 | 黒 灰 | 色 2.5Y 3/1 | 泥炭質粘土 | | 植物遺体多量 | |

| 深掘区 ② | | 土 壴 | 土 質 | 厚 度 | 表 入 物 | 備 考 |
|-------|-------|--------------------------|------|---------|--------|-------------|
| 10 | 灰 黄 灰 | 色 10YR 4/2 | 粘 土 | 2~12cm | 植物遺体多量 | |
| 11 | 黒 黄 灰 | 色 10YR 2/1 色 10YR 6/2 | 粘 土 | 8~20cm | 植物遺体多量 | 丘陵 |
| 12 | 黄 灰 | 色 2.5Y 6/1 | 泥 土 | 12~15cm | 植物遺体 | 丘陵 |
| 13 | 黒 灰 | 色 10YR 2/1 | 粘 土 | 10~18cm | 植物遺体 | |
| 13' | 黄 灰 | 色 2.5Y 5/2 | 砂質粘土 | 10~18cm | 植物遺体少量 | 14~15cmに砂層有 |
| 14 | 黄 灰 | 色 2.5Y 5/1 | 粘 土 | 6~12cm | 植物遺体 | 丘陵 |
| 15 | 黄 灰 | 色 2.5Y 4/1 | 粘 土 | 14~22cm | 植物遺体 | 丘陵 |
| 16 | 黒 灰 | 色 10YR 2/1 | 粘 土 | | 植物遺体 | |

| 深掘区 ③ | | 土 壴 | 土 質 | 厚 度 | 表 入 物 | 備 考 |
|-------|-------|---------------|--------------|---------|--------|-----|
| 10 | 灰 灰 | 色 5Y 6/1 色 | 泥質粘土 泥 土 | 4~14cm | 植物遺体多量 | 丘陵 |
| 11 | 黒 | 色 10YR 1.7/1 | 泥炭質粘土 | 8~12cm | 植物遺体 | |
| 12 | 黒 灰 | 色 2.5Y 5/2 | 泥炭質粘土 粘 土 | 10~24cm | 植物遺体多量 | 丘陵 |
| 13 | 黒 灰 | 色 10YR 3/1 | 泥炭質粘土 | 2~8cm | 植物遺体多量 | |
| 14 | 黒 | 色 10YR 2/1 | 泥炭質粘土 | 4~10cm | 植物遺体 | |
| 15 | 黒 灰 | 色 10YR 4/2 | 泥炭質粘土 | 20cm附近 | 植物遺体 | |
| 16 | 黒 | 色 10YR 2/1 | 泥炭質粘土 | 8cm附近 | 植物遺体多量 | |
| 17 | 黒 | 色 10YR 1.7/1 | 泥炭質粘土 | 20cm附近 | 植物遺体 | |
| 18 | 黒 灰 | 色 2.5Y 4/1 | 泥炭質粘土 | 2~6cm | 植物遺体 | |
| 19 | 黑 深 黑 | 色 10YR 3/1 | 泥炭質粘土 | 2~8cm | 植物遺体 | |
| 19b | 黒 灰 | 色 5Y 7/1 | 泥炭質粘土 | 2~8cm | 植物遺体 | |
| 20 | 黒 灰 | 色 10YR 3/1 | 泥炭質粘土 | 2~10cm | 植物遺体少量 | |
| 21 | 黒 | 色 7.5YR 1.7/1 | 泥炭質粘土 | 4~8cm | 植物遺体少量 | |
| 22 | オオシマツ | 色 5Y 6/1 | 泥炭質粘土 泥 土 | 6~16cm | 植物遺体 | 丘陵 |
| 23 | 黒 灰 | 色 10YR 4/1 | 泥炭質粘土 | 4~14cm | 植物遺体少量 | |
| 24 | 黒 灰 | 色 2.5Y 3/1 | 泥炭質粘土 | 2~12cm | 植物遺体 | |
| 25 | 黒 灰 | 色 10YR 3/1 | 泥炭質粘土 | 4~14cm | 植物遺体 | |
| 26 | 黒 灰 | 色 10YR 3/1 | 泥炭質粘土 | 4~12cm | 植物遺体 | |
| 27 | 黒 | 色 10YR 2/1 | 泥炭質粘土 | 2~8cm | 植物遺体少量 | |
| 28 | 黒 | 色 10YR 2/1 | シルト質粘土 | 8~10cm | 植物遺体 | |
| 29 | 黄 灰 | 色 2.5Y 5/1 | シルト | 6~20cm | 植物遺体少量 | |
| 30 | 黒 灰 | 色 2.5Y 4/1 | 砂 | 4~16cm | | |
| 31a | 黒 灰 | 色 5Y 3/1 | 砂 | 6cm附近 | | |
| 31b | 黒 灰 | 色 10YR 3/1 | 砂 | 4cm附近 | | |
| 31c | 黒 灰 | 色 10YR 6/1 | 粘土 | 2cm附近 | 植物遺体少量 | |
| 32 | 黒 灰 | 色 2.5Y 4/1 | 粘土 | 10~26cm | 植物遺体多量 | |
| 33 | 黒 灰 | 色 2.5Y 6/1 | 粘土 | 8~16cm | 植物遺体少量 | |
| 34 | 男郎 灰 | 色 10GY 6/1 | 粘土 | 10~26cm | 植物遺体多量 | |
| 35 | 黒 灰 | 色 2.5G Y 6/1 | 粘土 | 4~16cm | 植物遺体少量 | |
| 36 | 明 緑 灰 | 色 7.5G Y 7/1 | 粘土 | 2~10cm | 植物遺体少量 | |
| 37 | 黒 灰 | 色 5G 6/1 | 粘土 | 2~8cm | 植物遺体多量 | |
| 38 | 黒 灰 | 色 10GY 7/1 | 粘土質粘土 | 4~10cm | 植物遺体少量 | |
| 39 | 黒 灰 | 色 10GY 6/1 | シルト質粘土 | 10~22cm | 植物遺体少量 | |
| 40 | 黒 灰 | 色 5G 6/1 | シルト質粘土 | 4~20cm | 植物遺体少量 | |
| 41 | 明 緑 灰 | 色 10GY 7/1 | シルト | | 植物遺体少量 | |

第27表 長町南駅区深掘区土層注記表(2)

深掘区④

| 順序 | 土色 | 上質 | 層厚 | 目入物 | 備考 |
|-----|-------------------|-------------|---------|--------|----|
| 10 | 黒 色 7.5Y2/1 | 泥炭質粘土 | 2~6cm | 植物遺体多量 | |
| 11 | 黒 黄褐色、黒 色 10YR4/1 | 泥炭質粘土 粘土 | 8cm前後 | 植物遺体多量 | 立層 |
| 12 | 黒 色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 2~10cm | | |
| 13 | 黒 色 2.5Y3/1 | 泥炭質粘土 粘土 | 2~16cm | | 立層 |
| 14 | 灰 黑 色 10YR4/2 | 泥炭質粘土 粘土 | 10cm前後 | 植物遺体多量 | 立層 |
| 15 | 灰 黄褐色 10YR3/1 | 泥炭質粘土 | 0~10cm | 植物遺体多量 | |
| 16 | 灰 色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 0~10cm | 植物遺体多量 | |
| 17 | 灰 黄褐色 10YR4/2 | 泥炭質粘土 粘土 | 10~16cm | 植物遺体多量 | 立層 |
| 18 | 灰 黄褐色 10YR1.7/3 | 泥炭質粘土 粘土 | 8~10cm | 植物遺体多量 | 立層 |
| 19 | 灰 黄褐色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 6~12cm | 植物遺体多量 | |
| 20 | 暗灰褐色 2.5Y3/1 | 泥炭質粘土 | 4~6cm | | |
| 21a | 灰 黄褐色 2.5Y3/2 | 泥炭質粘土 | 4~10cm | 植物遺体少量 | |
| 21b | 灰 黄褐色 2.5Y3/2 | 泥炭質粘土 粘土 | 1~6cm | 植物遺体多量 | 立層 |
| 22 | 灰 黄褐色 2.5Y3/1 | 泥炭質粘土 | 0~10cm | 植物遺体多量 | |
| 23 | 黑 色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 0~8cm | | |
| 24 | 灰褐色、灰褐色 5G7/1 | 泥炭質粘土 粘土 | 10~16cm | 植物遺体多量 | 立層 |
| 25 | 灰 4-2-5 色 5G7/1 | 泥炭質粘土 粘土 | 6cm前後 | 植物遺体多量 | 立層 |
| 26 | 黑 色 2.5Y3/1 | 泥炭質粘土 | 12~18cm | 植物遺体多量 | |
| 27 | 灰 色 10YR2/1 | 泥炭質粘土 | 16~28cm | 植物遺体多量 | |
| 28 | オーブン灰 色 2.5G7/1 | 粘土 | 1~20cm | 植物遺体多量 | |
| 29 | 灰 色 2.5Y3/1 | 粘土 | 6~26cm | 植物遺体多量 | |
| 30 | 灰 色 2.5Y3/1 | 粘土 | 2~10cm | 植物遺体少量 | |
| 31 | 褐 黑 色 5G6/1 | 粘土 | 20cm前後 | 植物遺体少量 | |
| 32 | 深 褐 色 7.5G7/1 | 砂 | 10~20cm | 植物遺体少量 | |
| 33 | 褐 色 10G7/1 | 砂 | 14cm前後 | 植物遺体少量 | |
| 34 | 褐 色 10YR4/1 | シート質粘土 | 4mm前後 | 植物遺体少量 | |
| 35 | 褐 色 7.5G7/1 | シート質粘土 | 6mm前後 | 植物遺体少量 | |

深掘区⑤

| 順序 | 土色 | 上質 | 層厚 | 目入物 | 備考 |
|----|-----------------|-------------|---------|------------|----|
| 7 | 黒 色 30YR2/1 | 泥炭質粘土 | 7cm前後 | 植物遺体多量 | |
| 11 | 黒 黄褐色 5G5/1 | 泥炭質粘土 粘土 | 4~6cm | 植物遺体を含めて多量 | 立層 |
| 12 | 黒 色 10YR2/1 | 泥炭質粘土 | 10cm前後 | 植物遺体多量 | |
| 13 | 黒 色 5G5/1 | 泥炭質粘土 粘土 | 14~20cm | 植物遺体を含めて多量 | 立層 |
| 14 | 灰褐色、黒 色 2.5Y4/1 | 泥炭質粘土 粘土 | 8~10cm | 植物遺体を含めて多量 | 立層 |
| 15 | 褐 色 10YR4/1 | 泥炭質粘土 | 6~10cm | 植物遺体を含めて多量 | |
| 16 | 褐 色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 7~10cm | 植物遺体を含めて多量 | |
| 17 | 黒 色 7.5Y3/1 | 泥炭質粘土 | | 植物遺体を含めて多量 | |

深掘区⑥

| 順序 | 土色 | 上質 | 層厚 | 目入物 | 備考 |
|----|-----------------|--------|---------|------------|------|
| 10 | 黒 色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 12~22cm | 植物遺体多量 | |
| 11 | オーブン灰 色 5G7/1 | 泥炭質粘土 | 2~8cm | (鉄)鉄錆 | |
| 12 | オーブン灰 色 2.5G7/1 | 泥炭質粘土 | 2~10cm | 植物遺体多量 | |
| 13 | 黒 色 2.5Y3/1 | 泥炭質粘土 | 16~22cm | 植物遺体を含めて多量 | 立層 |
| 14 | 黒 色 5G2/1 | 泥炭質粘土 | 10~18cm | 植物遺体 | |
| 15 | 黒 色 10YR2/1 | 泥炭質粘土 | 14~30cm | 植物遺体を含めて少量 | 鉄錆なし |
| 16 | 黒 色 10YR2/1 | 泥炭質粘土 | 8~24cm | 植物遺体 | |
| 17 | オーブン灰 色 2.5Y6/1 | 砂 | 4~8cm | | |
| 18 | 黒 色 2.5Y3/1 | 砂 | 12~22cm | | |
| 19 | 褐 黑 色 10G7/1 | 砂 | 9~12cm | | |
| 20 | 褐 色 10YR4/1 | 粘土 | 10~16cm | 植物遺体少量 | |
| 21 | 褐 黑 色 5G7/1 | 泥炭質粘土 | 10~16cm | 植物遺体少量 | |
| 22 | 黒 色 10YR1.7/1 | 泥炭質粘土 | 5~10cm | 植物遺体多量 | |
| 23 | 黒 色 2.5Y3/1 | 泥炭質粘土 | 20cm前後 | 植物遺体を含めて少量 | |
| 24 | 黒 色 7.5Y6/1 | 泥炭質粘土 | 8~10cm | 植物遺体多量 | |
| 25 | 黒 色 10YR3/1 | 泥炭質粘土 | 12~26cm | 植物遺体 | |
| 26 | 黒 色 7.5Y3/1 | 砂 | 5~20cm | 植物遺体少量 | |
| 27 | オーブン灰 色 2.5G7/1 | シート質粘土 | | 植物遺体少量 | |

第28表 長町南駅深掘区土層注記表(3)

深鉢 ⑦

| 操作 | 土 色 | 十 分 度 | 岩 率 | 混 入 物 | 固 相 |
|--------------------------|---------------|-------------|---------|------------------|--------|
| 10 画 | 赤 10Y R 1/7 | 泥炭質粘土 | 2~4cm | 植物遺体多量 | |
| 11 黒 度 偏 | 赤 10Y R 3/3 | 泥炭質粘土 | 5~10cm | 植物遺体多量 | 正則 |
| 12 黑 度 | 赤 10Y 5/1 | 泥炭質粘土 | 5~10cm | 植物遺体多量 | 年輪 |
| 13 黑 度 | 赤 10Y R 3/1 | 泥炭質粘土 | 2~5cm | 植物遺体多量 | |
| 14 黑 度 | 赤 5Y 4/1 | 泥炭質粘土 | 2~10cm | 植物遺体多量 | 可塑 |
| 15 黑 度 | 赤 7.5Y 5/1 | 泥炭質粘土 | 4~10cm | 植物遺体多量 | |
| 16 黑 度 偏 | 赤 10Y R 1.2/7 | 泥炭質粘土 | 5~10cm | 植物遺体多量 | 瓦薄 |
| 17 壤 式 | 赤 10Y R 4/1 | 泥炭質粘土 | 1~4cm | 植物遺体を含む多量 | |
| 18 黑 度 | 赤 10Y R 3/1 | 泥炭質粘土 | 2~3cm | 植物遺体多量 | |
| 19 黑 度 | 赤 7.5Y 5/1 | 泥炭質粘土 | 3~6cm | 植物遺体 | |
| 20 黑 度 | 赤 10Y R 1.2/7 | 泥炭質粘土 | 4~10cm | 植物遺体多量 | |
| 21 黑 度 | 赤 10Y R 2/1 | 泥炭質粘土 | 10cm以上 | 植物遺体多量 | |
| 22 壤 式 | 赤 10Y R 1.2/7 | 泥炭質粘土 | 12~14cm | 植物遺体少量 | |
| 23 黑 度 偏 紅 | 赤 2.5G Y 4/1 | 泥炭質粘土 | 2~4cm | 植物遺体 | |
| 24 オリーブ 度 偏 灰 | 赤 2.5G Y 5/1 | 泥炭質粘土 | 3~10cm | 植物遺体 | |
| 25 黑 度 | 赤 10Y R 4/3 | 泥炭質粘土 | 2~8cm | 植物遺体 | |
| 26 黑 度 | 赤 10Y R 3/1 | 泥炭質粘土 | 10~20cm | 植物遺体、砂粒を含む、白色の糞片 | |
| 27 オリーブ 度 偏 灰 | 赤 5G Y 6/1 | 砂 | 5~30cm | | |
| 27 b オリーブ 度 偏 灰 | 赤 10Y R 4/1 | 砂 | 8~20cm | | |
| 27 c 暗 度 偏 灰 | 赤 10Y R 4/1 | 砂 | 5~40cm | | |
| 28 オリーブ 度 偏 灰 | 赤 2.5G Y 5/1 | 砂 | 5~20cm | | |
| 29 オリーブ 度 偏 灰 | 赤 2.5G Y 6/1 | 砂 | 1~40cm | | |
| 30 オリーブ 度 偏 灰 | 赤 2.5G Y 6/1 | 砂 | 4~10cm | | |
| 31 売 度 偏 白 | 赤 10Y R 1.2/7 | 泥炭質粘土 | 8~16cm | 植物遺体 | 丘陵 |
| 32 黒 度 偏 白 | 赤 7.5Y 7/1 | 泥炭質粘土 | 1~5cm | 植物遺体 | |
| 33 黑 度 偏 白 | 赤 10Y R 2/1 | シルト | 2~5cm | 火山灰? | |
| 34 黒 度 偏 白 | 赤 10Y R 1.2/7 | 泥炭質粘土 | 5~10cm | 植物遺体 | |
| 35 黑 度 偏 白 | 赤 10Y R 2/1 | 泥炭質粘土 | 4~10cm | 植物遺体 | |
| 36 黒 度 偏 白 | 赤 5Y 4/1 | 粘土 | 5~9cm | | |
| 37 オリーブ 度 偏 灰 | 赤 2.5G Y 6/1 | 粘土 | | | |

第29表 長町南駅区7c層水田跡群計測表

| 地 点 No. | 絶対高(m) | 方 向 | 性 質 | 方 向 | 上 限 (m) | 下 限 (m) | 水田面 との 距離 (m) |
|---------------|--------|-------------|--------|--------|---------------|---------------|--------------------------|
| 1 | 1.9 | 東 | 泥 | N 45°W | 60~80 | 83~95 | 北 側 2 |
| 2 | 19.9 | 東 | 泥 | N 55°W | 90~160 | 150~190 | # 3~13.5 # 0~18.5 |
| 3 | 20.9 | 泥炭質 | 泥 | N 54°W | 40~170 | 100~230 | # 0~11.5 # 0~7 |
| 4 | 8.5 | 東 | 泥 | N 29°E | 90~165 | 135~235 | 西 側 2~9.5 東 側 3~12 |
| 5 | 2.5 | 東 | 泥 | N 35°W | 10~30 | 70~120 | 北 側 2~3.1 東 側 1~4 |
| 6 | 1.2 | 東 | 泥 | N 32°E | 35~65 | 100~110 | 西 側 1.6~2.9 東 側 0.9~1.7 |
| 7 | 2.75 | 東 | 泥 | N 37°E | 40~60 | 85~100 | # 0.1~1.3 # 1.1~1.9 |
| 8 | 6.0 | 東 | 泥 | N 62°W | 110~180 | 195~220 | 北 側 0.5~3 東 側 1~3.5 |
| 9 | 8.7 | 東 | 泥 | N 34°E | 25~50 | 60~100 | 西 側 0~2.5 東 側 0~1 |
| 10 | 1.0 | 東 | 泥 | N 36°W | 40 | 60~70 | 北 側 0.5 東 側 0~2 |
| 11 | 11.0 | 東 | 泥 | N 16°E | 10~80 | 50~120 | 西 側 0.8~6.2 東 側 1.5~8.9 |
| 12 | 5.1 | 東 | 泥 | N 37°W | 70~90 | 120~150 | 北 側 0.9~1.2 東 側 0.8~2 |
| 13 | 9.95 | 東 | 泥 | N 10°E | 20~90 | 70~140 | 西 側 0~1.7 東 側 0.2~2.8 |
| 14 | 7.6 | 東 | 泥 | N 40°W | 60~105 | 105~175 | 北 側 1.6~3.7 東 側 0.9~4.3 |
| 15 | 9.1 | 東 | 泥 | N 50°W | 30~60 | 70~100 | # 0~1.9 # 0~1.6 |
| 16 | 4.9 | 中 央 出 | 泥 | N 45°W | 60~90 | 140~220 | # 0~5.1 # 0.7~3.9 |
| 17 | 18.3 | 東 | 泥 | N 37°E | 120~270 | 160~320 | 西 側 0.4~6.8 東 側 0.7~10.6 |
| 18A | 2.3 | 東 | 泥 | N 54°E | 90~100 | 130 | # 0~0.6 # 0.4~1.6 |
| 18B | 4.0 | 東 | 泥 | N 37°E | 70~90 | 130~160 | # 0.1~0.6 # 1.1~2.5 |
| 19 | 4.4 | 東 | 泥 | N 41°E | 60~80 | 120~140 | # 0~1.6 # 0.1~5.6 |
| 20 | 8.3 | 東 | 泥 | N 44°W | 55~120 | 110~150 | 北 側 0.3~2.9 東 側 0.3~1.8 |
| 21 | 16.7 | 東 | 泥 | N 30°W | 50~150 | 90~240 | # 0.8~4.8 # 0.1~6.3 |
| 22 | 4.6 | 東 | 泥 | N 66°W | 20~30 | 65~90 | 北 側 0~1.8 東 側 0~2.3 |
| 23 | 6.5 | 東 | 泥 | N 33°E | 20~40 | 60~90 | 西 側 1.5~4.5 東 側 0.5~3.5 |
| 24 | 12.5 | 東 | 泥 | N 54°W | 85~150 | 220~260 | 北 側 0.5~4.8 東 側 0.5~3.5 |
| 25 | 2.9 | 東 | 泥 | N 64°E | 60~70 | 95~140 | 西 側 0~3.9 東 側 0~1.6 |
| 26 | 5.6 | 東 | 泥 | N 39°E | 50~80 | 120~240 | # 0~3.6 # 1.0~7.4 |
| 27 | 8.7 | 東 | 泥 | N 43°W | 40~130 | 110~180 | 北 側 1.6~6.5 東 側 1.4~3.6 |
| 28 | 10.1 | 東 | 泥 | N 56°W | 60~210 | 205~250 | # 1.2~5 # 2.3~4.5 |
| 29 | 9.1 | 泥炭質 | 泥 | N 35°W | 30~130 | 120~210 | # 0.9~5.1 # 0.3~4.8 |
| 30 | 8.4 | 泥炭質 | 泥 | N 34°E | R 90 | 40~150 | 西 側 0~2.9 東 側 2.1~3.9 |
| 31 | 5.2 | 東 | 泥 | N 57°W | 50~90 | 130~160 | 北 側 2.3~4.5 東 側 0.7~4.3 |
| 32 | 11.1 | 東 | 泥 | N 50°W | 40~90 | 130~190 | # 0.5~3.5 # 1~7 |

- 7b 層**: 灰黄褐色 (10YR5/2) 泥炭質粘土。層厚は 2 ~ 8 cm で、X b 区以西では希薄になる。この層は、変電所区で水田跡を検出した11層に対応することから、水田耕作土の可能性がある。
- 7c 層**: 暗灰色 (10YR4/1)・黒褐色 (2.5YR3/1) の泥炭質粘土。凝灰岩粒を含む。ほぼ全域に分布し、層厚は 4 ~ 20cm で西へ薄くなる。下面の凹凸は顕著である。水田耕作土で、7e・7f 層および 8 層が攪拌を受けて形成された層である。
- 7e 層**: 黒色 (10YR2/1) の泥炭質粘土と暗灰色 (10YR6/1・7.5YR4/1) の粘土との互層。大畦の下部に比較的良好に残存する。層厚は 5 ~ 10cm である。大部分は 7c 層での耕作による攪拌で消失している。
- 7f 層**: 暗灰色 (7.5YR4/1) 粘土。層厚は 3 ~ 7 cm である。大畦下部に良好に残存している。
- 8 層**: 黒色 (10YR1.7/1)・黒褐色 (10YR3/1) の泥炭質粘土層。層厚は 4 ~ 15cm で、ほぼ全域に分布する。XIV a 区以西では下面の凹凸が顕著で水田耕作土の可能性がある。分解のあまり進んでいない層である。
- 9 層**: 黑褐色 (10YR3/1・10YR2/2) の泥炭質粘土層。層厚は 5 ~ 10cm で、ほぼ全域に分布する。分解度がきわめて低く、植物遺体が主体となる層である。

(4) 7c 層検出遺構と遺物

7c 層水田跡 (第95~97図、写真52~65)

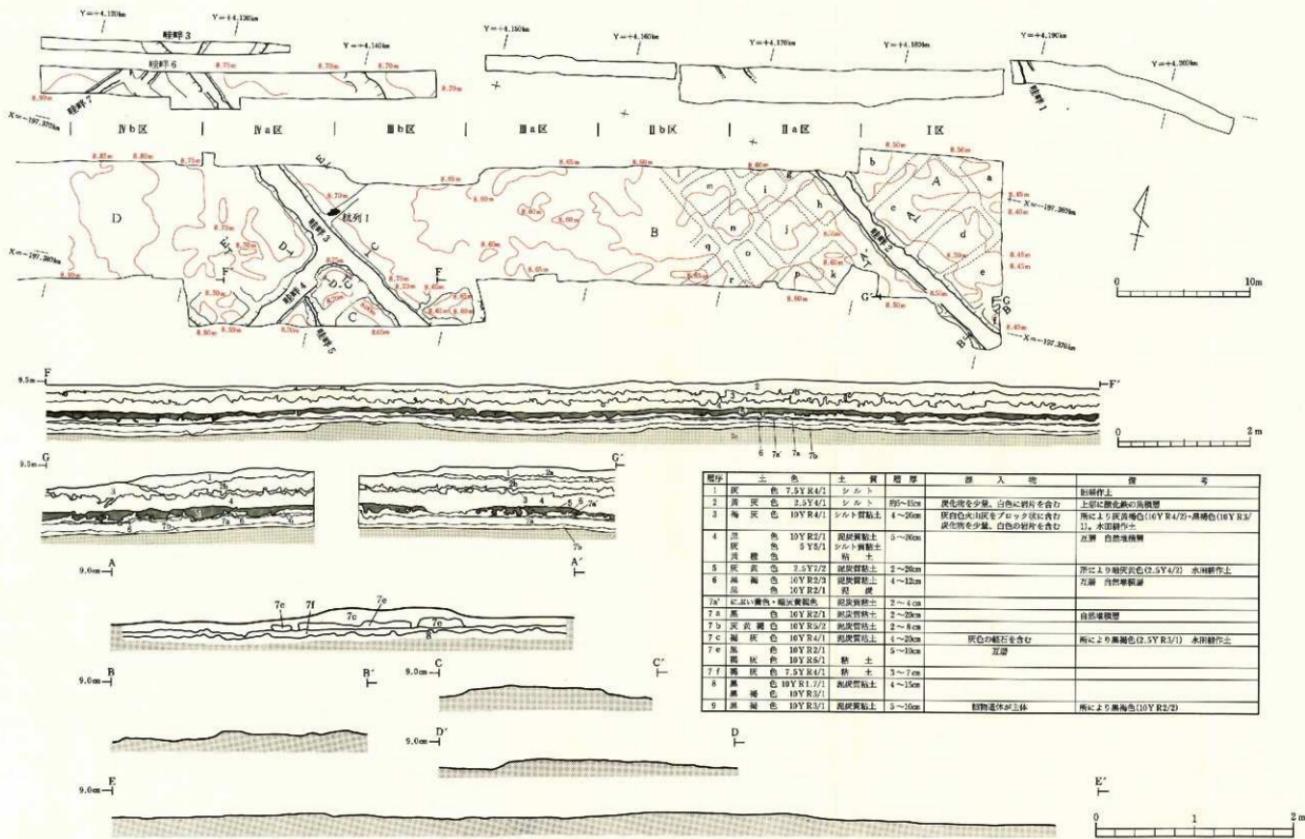
大畦畔17条とそれらが形成する大区画16区画、および小区画約30区画、杭列1列を検出している。大畦畔は全域にわたって検出されているが、小区画は調査区の東端部分である I + II a 区で検出されている。

[地形面] 7c 層上面は若干南東へ傾斜するがほぼ平坦である。標高は調査区の西端XVI a 区が約9.5m、東端 I 区が約8.4m で両者の比高差は約1.1m になる。調査区300m の間には多少の起伏があり、X I a 区付近がやや低く (約8.8m)、IX a 区がやや高く (約9.0m) なる。IX a 区以西の傾斜度が7cm/10m、IX a 区以東の傾斜度が4cm/10m となる。

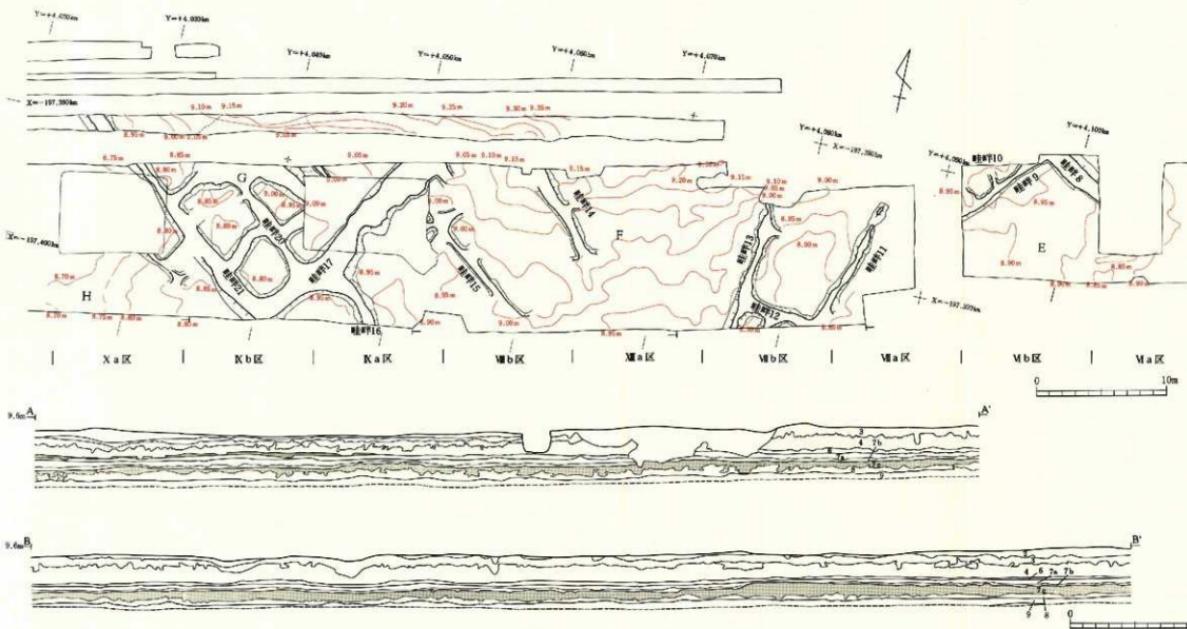
[水田域] 調査区はすべて水田域であり、畦畔や耕作土が区外へ延びることから水田域はさらに広がると考えられる。

[耕作土] 7c 層で暗灰色系の泥炭質粘土である。層厚は 4 ~ 20cm で調査区全域に分布するが西側ほど薄くなる。下面の凹凸は顕著である。大畦の下に7e・7f 層が良好に残存していることから、母材となる層は7e・7f 層および 8 層と考えられる。分解の進んだ層である。

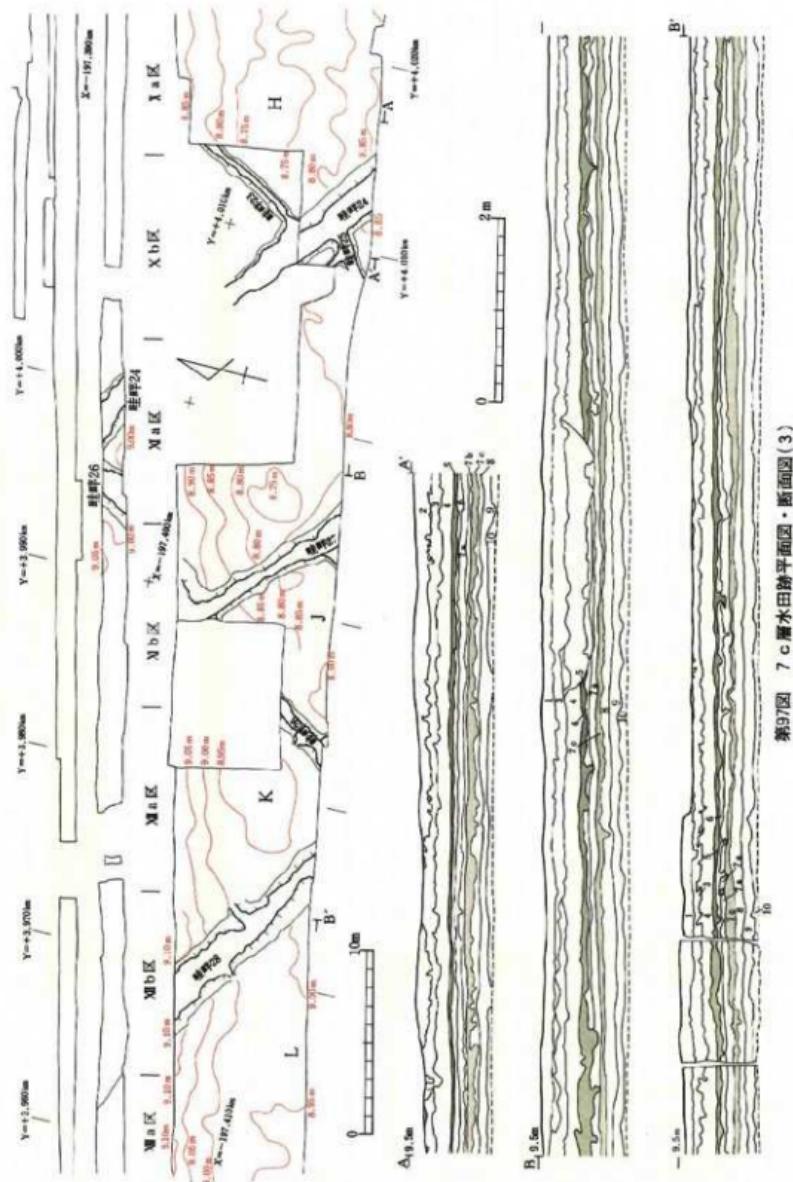
[直下の層] ほとんどが 8 層で、7f 層は部分的に分布するだけである。7c 層直下、8 層直上、層中に鉄分やマンガン粒の集積などは認められない。XIV a 区以西では 8 層の下面にもかなりの凹凸が確認されている。B換区では 8 層に対応する7d 層で大畦畔が検出されており、水田域



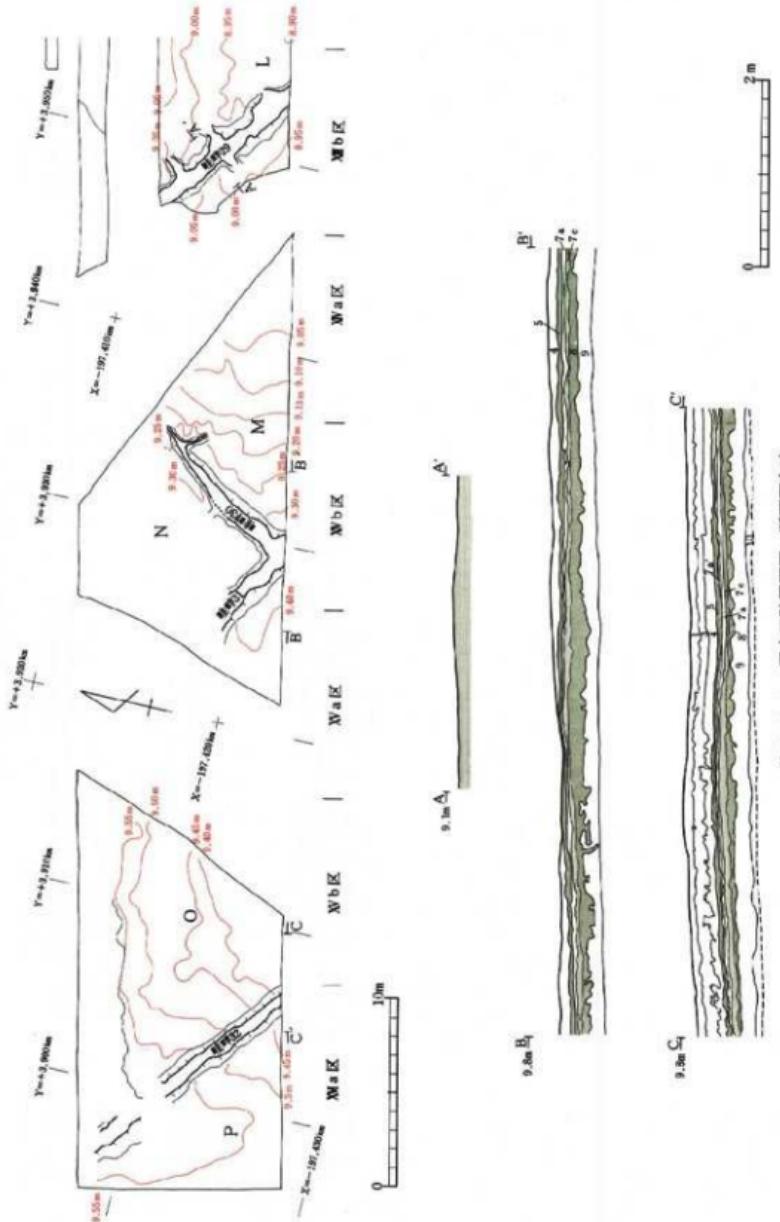
第95図 7c 畠水田路平面図・断面図 (1)



第96図 7c層水田跡・平面図・断面図(2)



第97図 7c層水位平面図・断面図(3)



第95图 7c 潜水田跡平面圖・断面図(4)

がXIVa区まで広がっている可能性も考えられる。

〔畦畔〕 大区画を形成する大畦畔17条、小区画を形成する小畦畔とが存在する。計測値は第29表に示した。

大畦畔となるのは1・2・3・4・8・9・17・21・24・25・26・27・28・29・30・31・32の計17条である。これらの大畦畔には二つの方向性がある。一つはN-50°~57°-Wの方向で、もう一つはそれらに直交するN-29°~39°-Wの方向である。前者は2・3・8・21・24・27・28・29・31・32で、後者は4・9・17・25・26・30である。これらは耕作土を盛り上げた土盛り畦畔である。規模は下端幅で約40~320cmであるが、なかでも検出長が比較的長く規模の大きくなるものは2・3・17・21・24・26・28で、下端幅約200~300cmを測る。水面面との比高差は1~18.5cmである。

小区画を画する小畦畔はI・IIa・IIb区を中心で検出されている。これらの規模は下端幅約50~100cmであるが60cm前後のものが多い。水面面との比高差は約1~3cmと小さい値となっている。方向は大畦畔とほぼ同様である。

他に規模の中間的な畦畔5~7・10~16・18~20・22・23が存在する。規模は下端幅50~220cmであるが70~150cmの幅に入るものが多い。方向は大小畦畔と一致するもの(5・6・7・10・14・15・16・18・19・20・22・23)と、若干ずれるもの(11・12・13)とがある。11・13はN-10°~16°-W、12がN-82°-Wの方向である。

〔水田の区画〕 大畦畔により区切られる大区画が16区画(A~P)存在する。1区画の形状が判るのは区画Iのみで長方形を呈している。規模は長辺が16.2m、短辺が10mで面積が162m²である。他の大区画の形状は、北西方向の大畦畔の数が北東方向の大畦畔の数に比べ多いことから、北西-南東方向に長い長方形を呈していた可能性が考えられる。

他に計測可能なものはB・Hの短辺(北東方向)で、Bが29m、Hが18.2mである。また、推定可能なものが区画D・K・L・M・Oの短辺で、Dが24m、Kが24m、Lが15m、Mが16m、Oが15mである。全体でみると短辺は10~29mの長さでBが最大でIが最小である。

大区画A・B東半・C・F・G内には小区画が存在する。大区画A・Bの中は小畦畔により整然と区画された18区画が検出されている。そのうち形状がほぼ判るのは8区画(c・d・h・i・j・m・n・o)で、ほとんどが長方形である。規模は短辺が1.5~3.6m、長辺が2.8~6.2mである。面積は5.3~22.3m²で、大区画B内は5~6m²と比較的狭いものが多く、A内は16.5~22.3m²と広くなっている。

大区画Cの中の小区画については不明な点が多い。

大区画Fのなかは畦畔14・15・16によりさらに区画されている。畦畔14と15の間は6~7m、15と16の間は約7mを測る。また、畦畔14・15からは2~5mの間隔で小畦畔が分枝する部分

が検出されており、F内にも短辺2~5m、長辺6~7mの小区画が存在した可能性を考えられる。

大区画G内の区画もその規模から小区画と考えられるが、小畦畔に相当する畦畔18・19・20の規模が若干大きくなっている。

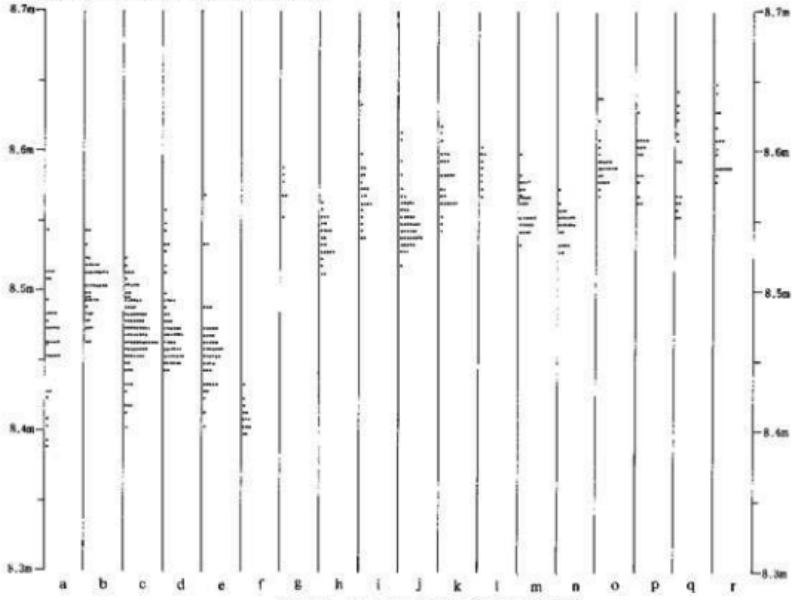
大区画Hの中の畦畔22・23も同時に小区画を画する小畦畔と考えられる。

大畦畔26・28・29・30においても小畦畔が分枝する部分が確認されていることから、他の大区画もさらに小分割されていたことが予想される。

【水田面の傾斜】 水田面の全体的な傾斜は地形面の項で記述した通りである。大区画内ではおむね東から南への傾斜となり高低差は約7~30cmであるが、半数以上は7~20cmの範囲におさまる。

大区画A・B内の小区画のレベル測定値を第99図に示した。大区画内での高低差は18cmであるが、第99図から水田b~fが南東に傾斜していることが読み取れる。大区画B内の小区画の高低差は約14cm以内である。南側の小区画o~rが若干高く、n・j・hが低くなってしまい、整然とした傾斜とはいえない。

【足跡状の凹み】 水田面で足跡状の凹みを多数検出したが規則性は認められない(第100図)。凹みの堆積土は基本層の7b層である。



第99図 7c層水田跡水田面標高分布図



第100図 7c層水田跡足跡分布図(II a・II b区)

第30表 長町南駅区7c層水田跡水田区画計測表

| 水田区画 | 標高(m) | 傾斜 | 面積(m ²) | 面積(m ²) | | |
|------|-------|-------|---------------------|---------------------|-----|------|
| | | | | 北 | 西 | 東 |
| a | 8.513 | 8.388 | — | — | — | — |
| b | 8.518 | 8.463 | — | — | — | — |
| c | 8.523 | 8.493 | 9.2 | 3.6 | — | 22.3 |
| d | 8.558 | 8.413 | 5~5.6 | 2.3~2.6 | — | 16.5 |
| e | 8.568 | 8.403 | — | — | 3.4 | — |
| f | 8.419 | 8.399 | — | — | — | — |
| g | 8.578 | 8.553 | — | — | — | — |
| h | 8.553 | 8.509 | 3.3 | 1.9 | — | 6.3 |
| i | 8.633 | 8.538 | 2.8 | 2.1 | — | 5.9 |
| j | 8.612 | 8.529 | 3.6 | 3.4 | — | 12.2 |
| k | 8.618 | 8.543 | 2.3~3.0 | 2.3 | — | 6.2 |
| l | 8.603 | 8.568 | — | — | — | — |
| m | 8.583 | 8.543 | 3.1 | 2.4 | — | 7.4 |
| n | 8.553 | 8.458 | 2.9 | 1.9 | — | 5.5 |
| o | 8.538 | 8.528 | 3.3 | 1.5 | — | 5.3 |
| p | 8.608 | 8.563 | — | — | — | — |
| q | 8.653 | 8.483 | — | 1.5 | — | — |
| r | 8.643 | 8.579 | — | — | — | — |

[杭列] III b 区と IV a 区の境界部分、大畦畔 3 と東へ延びる小畦畔との取り付き部分で検出している。検出長は 65cm で方向は N-48°-W である。杭は 6 本検出されており、うち 1 本は横位の状態である。杭の先端の標高は 8.74~8.78m である。すべて打ち込み杭で先端の加工は認められない。素材はすべて丸太材で樹種はクリである。杭の長さは 54~30cm で径は 2~4 cm である。

[出土遺物] 遺物は弥生土器 2 点、石器 2 点、木製品 1 点、樹木片多数が出土している。

弥生土器(第102図 1~6、写真117)：1~3 は同一個体の甕で、口縁部片 2 点、体部片 32 点が確認されている。口縁部は強く外反し口唇部には L R 繩文が回転押捺されている。口縁部外面はヨコナデが頗著で、下端部には刺突の一部が認められ列点文が施されている。体部は底部付近が若干接合しており、L R 繩文が横位回転で施文されている。口縁部体部とともに炭化物の付着が認められる。

4~6 も同一個体の甕で、口縁部片 3 点と底部から体部上半にかけて復元されているものである。口縁部は強く外反し口唇部には L 繩文が回転押捺されている。口縁部外面は上半がヨコナデの無文帯で下半には沈線状のものが数条施文されている。底部から体部にかけては直線的に立ち上がるが、口縁部の形状から体部上半で膨らむようである。地文は口縁部と同じ L 繩文の横位回転である。口縁部体部とともに炭化物の付着が認められる。

前者のような特徴一口縁部の明瞭なヨコナデと列点文は樹形圓式の定形化した甕の特徴とされるものである(須藤: 1984)。しかし、直前の形式にも若干認められる(志間: 1971)(太田: 1980)ことから、これらの土器の時期はやや幅をもたせて樹形圓式以前から樹形圓式甕と捉えておきたい。

石器(第102図 9・10、写真118)：9 は有茎の石鏃で完形である。尖頭部の側刃部は直線的で基部との境は明瞭である。火熱を受けて赤変している部分がある。石材は珪質頁岩である。10 は有茎の石鏃であるが先端と基部の一部が欠損している。石材は珪質岩である。

木製品(第103図 2、写真119)：2 は棒状木製品である。I 区の大畦畔 2 の南端部で検出された樹木片集中地点から出土している。残存長は 33.7cm で端部がくびれて膨らみ三角状に加工されている。a のくびれ部以下の折れ面(白ぬき部分)以外はほぼ全面に加工がなされている。

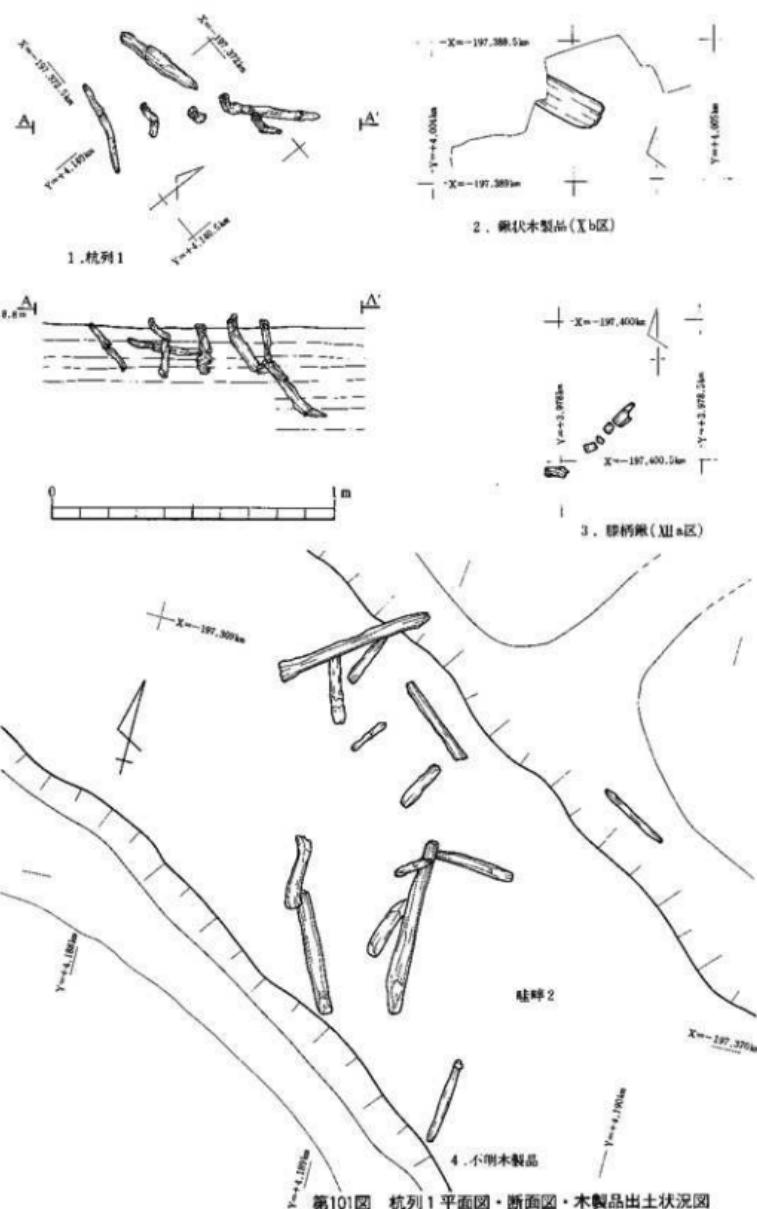
樹種はイヌガヤである。

(5) 5 層検出遺構と遺物

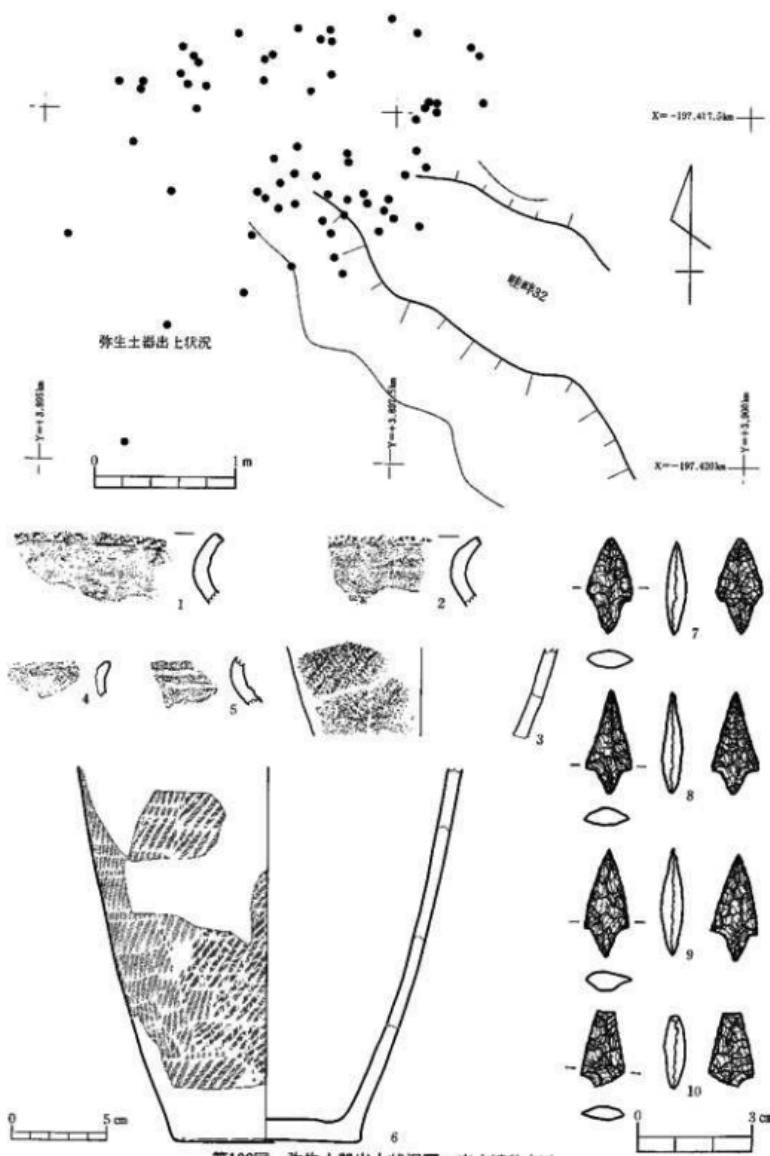
5 層水田跡(第107図)

水田耕作土と擬似畦畔 B 1 条が検出されている。

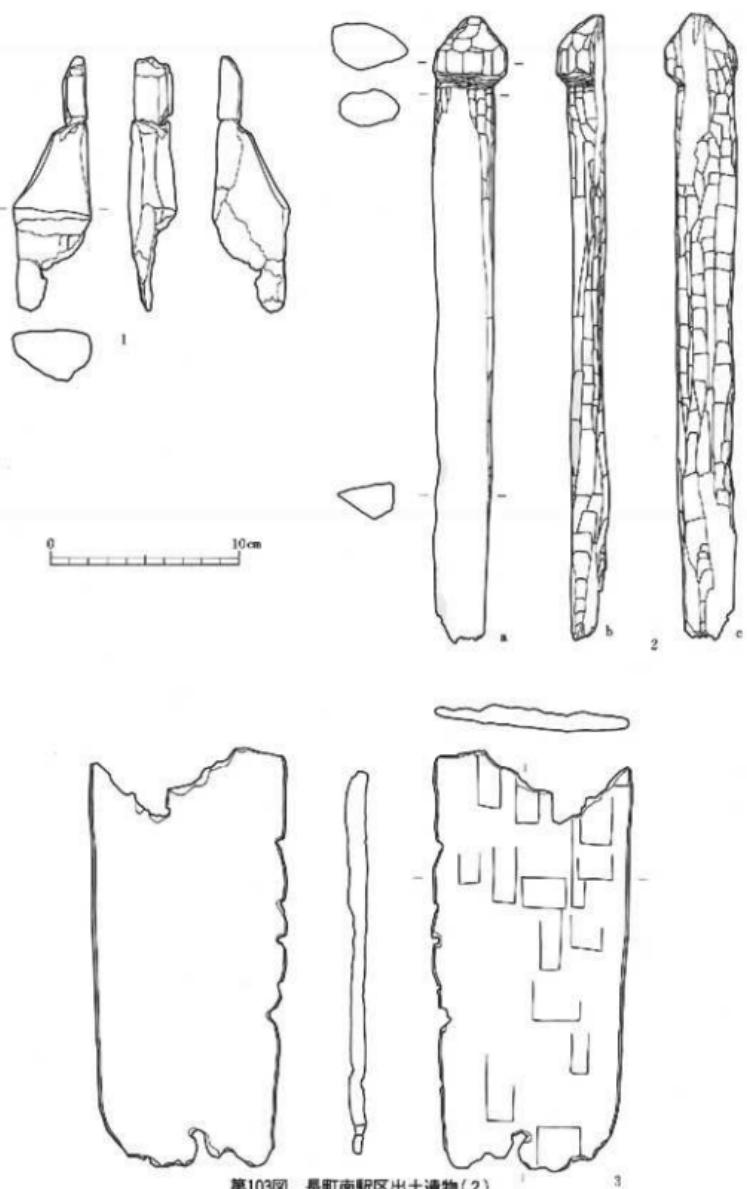
「水田跡の認定」 5 層はかなり分解が進み、下面には擬似により生じた凹凸が頗著で水田耕作



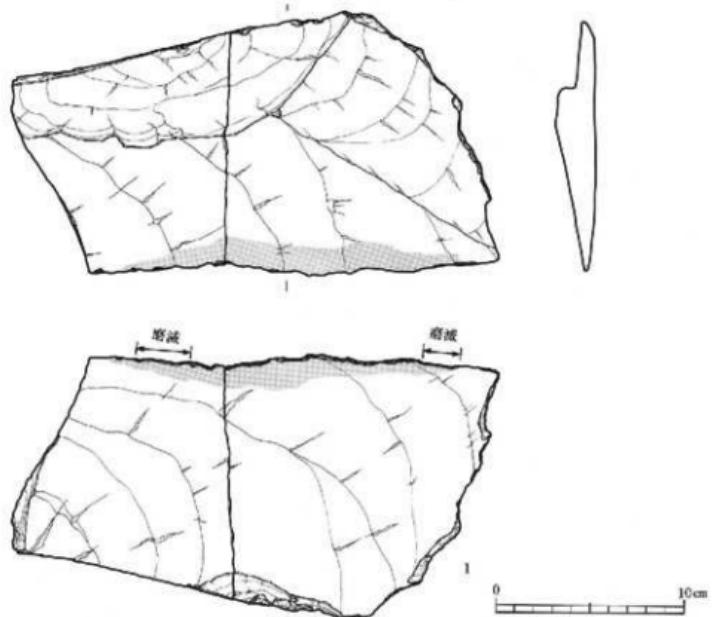
第101図 桅列 1 平面図・断面図・木製品出土状況図



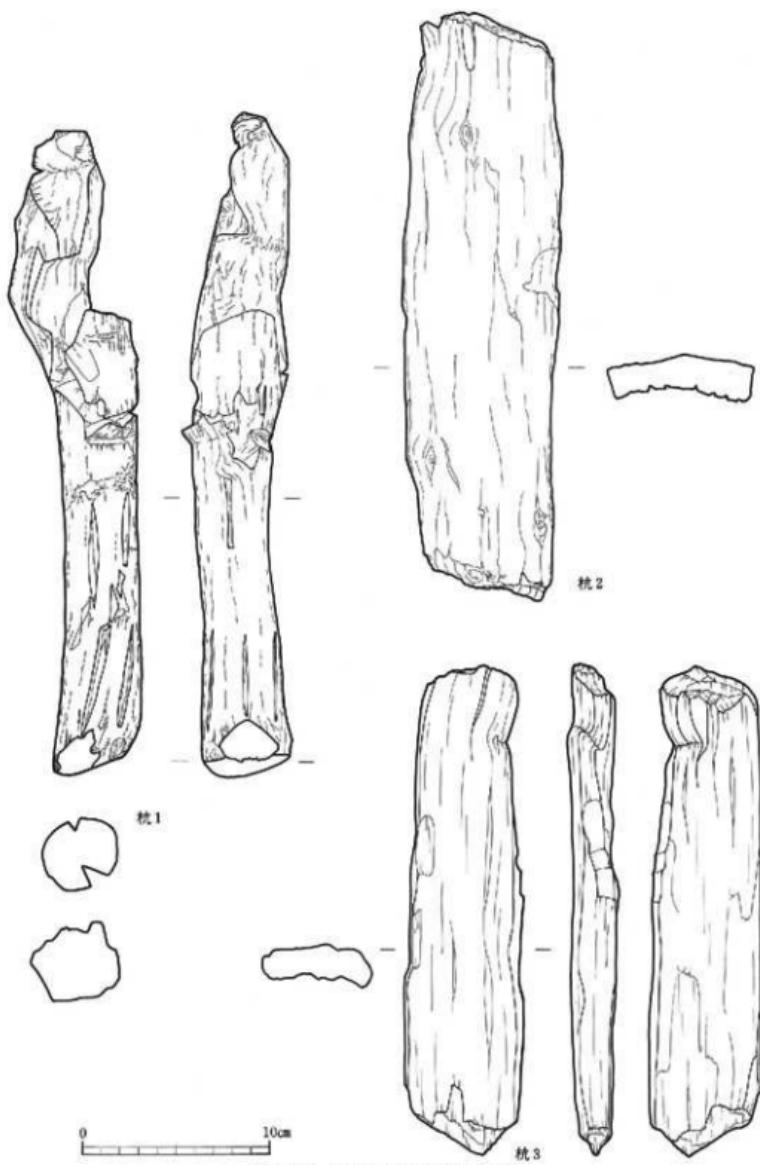
第102図 弥生土器出土状況図・出土遺物(1)



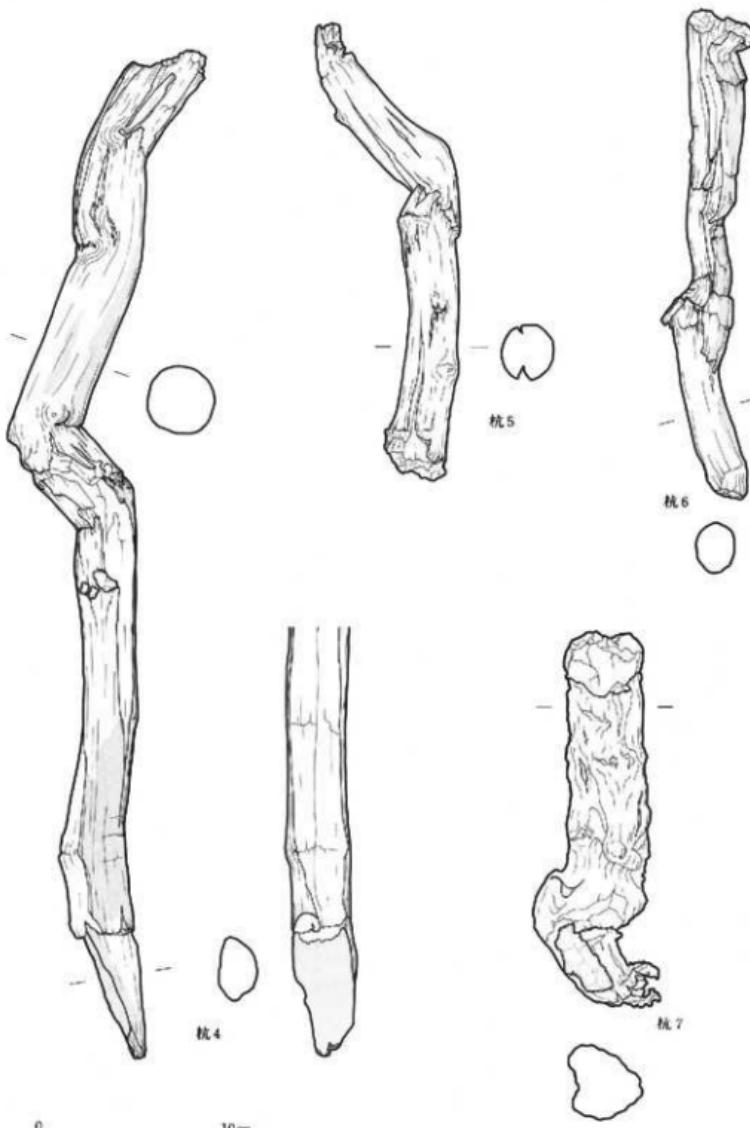
第103図 長町南駅区出土遺物(2)



第104図 長町南駅区出土遺物(3)



第105図 長町南駅区出土遺物(4)



第106図 長町南駅区出土遺物(5)

土と考えられること、また、6層の盛り上がりが検出され擬似畦畔Bと判断されたことなどから5層水田跡を認定した。

〔地形面〕 調査区の東端の標高は約8.8m、西端の標高は約9.56mで比高差が76cmある。調査区300m間は多少の起伏をもちながら南東へ傾斜している。I区からV a区にかけては傾斜度5.7cm / 10mで西に高くなり、V a区～V b区にかけては標高9.2m前後で平坦になる。VII a区～IX a区にかけては5層の分布が希薄になる。IX b区～XIII b区にかけては標高9.1～9.2m前後である。XIV a区から西は傾斜度9.2cm / 10mで高くなる。

〔水田域〕 耕作土が調査区ほぼ全域に分布すること、13・16・17・28次などの他調査区でも水田耕作土が確認されていることから、水田域は調査区外へも広がっていると考えられる。

〔耕作土〕 5層で灰黄色系の泥炭質粘土層である。層厚は6～20cmでほぼ全域に分布するが、V b区以東が比較的厚くなる。下面には凹凸が顕著である。6層も攪拌されていることから6層も母材層のひとつと考えられる。分解が進んだ層である。

〔直下の層〕 6層である。上面は5層の攪拌により凹凸があり、特にV b区以東でかなり顕著である。

〔擬似畦畔〕 I区において6層上面の盛り上がりとして1条検出している。N-56°-Wの方向で検出長は8.7mである。下端幅108～184cmで高さは2～8cmで東側の比高差がやや大きい。7c層においてほぼ同位置に大畦畔2が存在することから、それを踏襲してできた5層の畦畔が形成した擬似畦畔Bと考えられる。

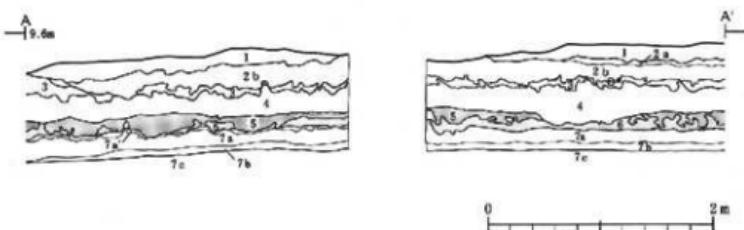
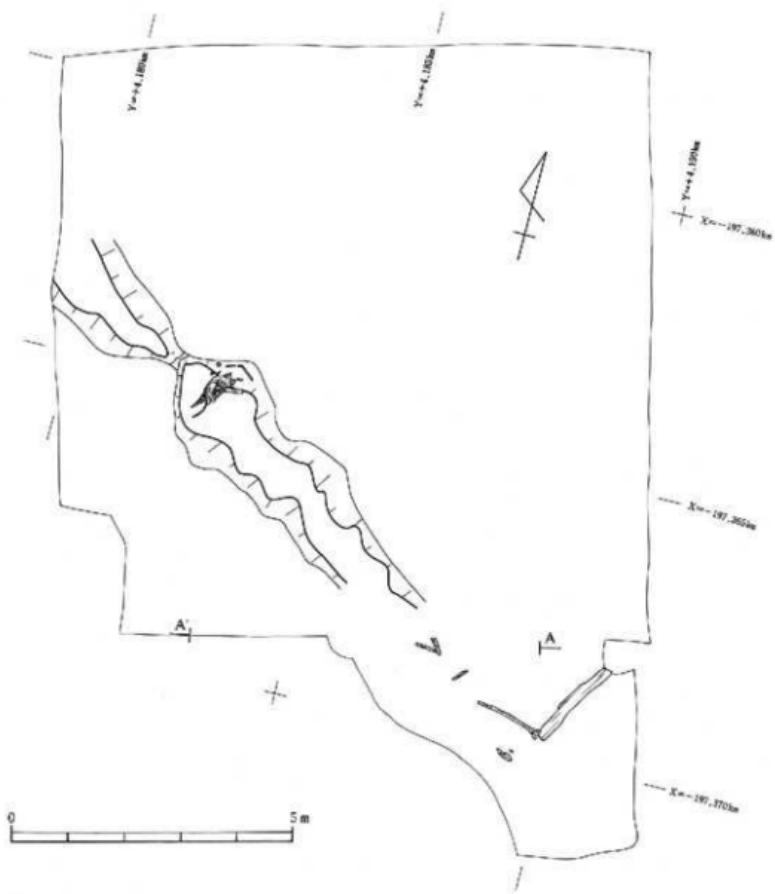
水田の区画・水田面の傾斜などは不明である。

〔樹木集中地点〕 2箇所検出されている。擬似畦畔中央部とそれから南西5.5mの地点である。前者は60×130cmの範囲に分布し、疊3点(内1点受熱)、樹木片12点さらに炭化物若干が出土している。これらは擬似畦畔上から2～6cm浮いており本来5層の畦畔上にあったと考えられる。

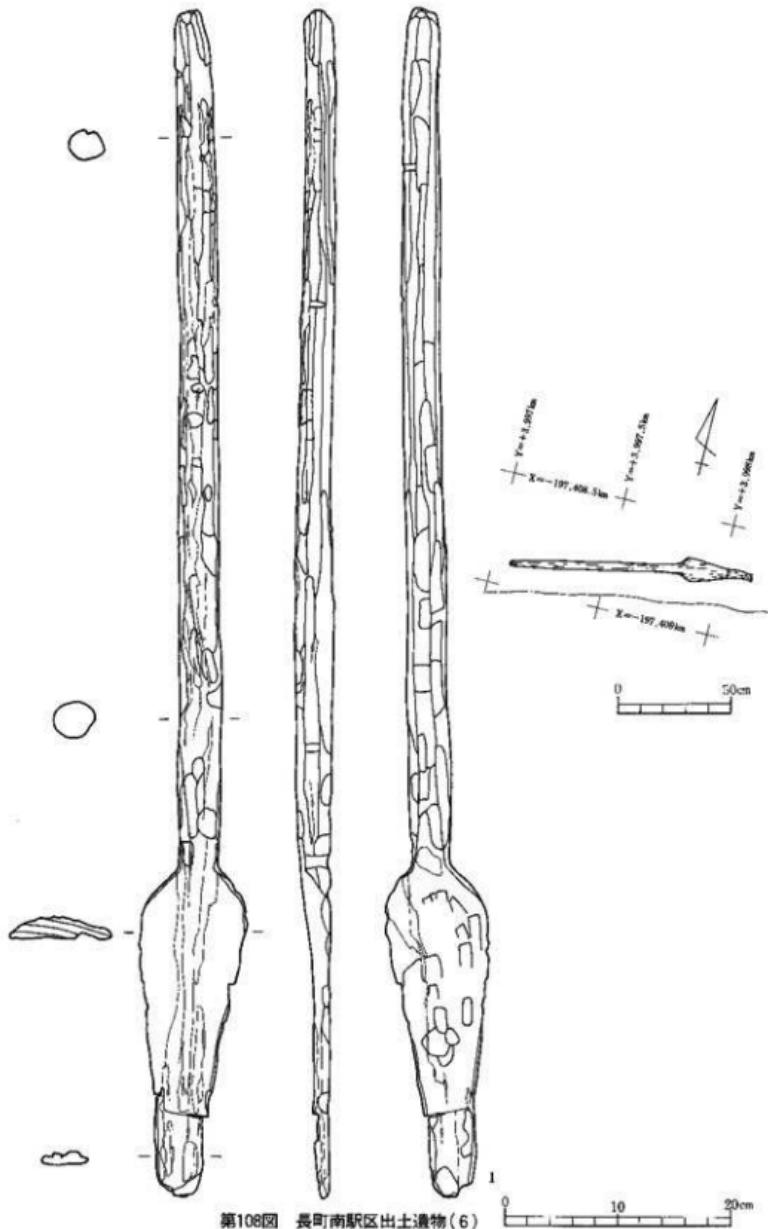
後者は擬似畦畔の延長上にある。1.5×3mの範囲に散在し、樹木片は7点出土している。うち一つは長さ170cm、幅14～17cm、厚さ2～5cmの分割材(樹種不明)である。この分割材は擬似畦畔に直交する方向にあり、しかも畦畔が分枝する位置にあることから畦畔の補強材の可能性を考えられる。

〔出土遺物〕 木製鋤が出土している。

鋤(第108図1、写真119)：一木づくりでほぼ完形である。XI a区南西部の5層と6層が激しく攪拌された箇所から出土している。長さは105.8cmで身の部分は長さ24.4cm、幅3.5～9.5cm、厚さ1～2cmである。柄の径は2.7～3.5cmである。身の部分は先端が細く、肩はナデ肩になっている。身の片側は柄から連続して平坦な面になっている。木取りは板目で、樹種はヤ



第107図 5層水田跡平面図・断面図



第108図 長町南駅区出土遺物(6)

マグワである。

(6) 4層検出遺構と遺物

4層上面で溝状遺構7条、土坑2基、ピット4基、杭集中地点などが検出されている。

S D 1 (第109図、写真73)

X I b区からX III a区にかけて、調査区を斜めに縦断する溝である。S D 2と重複しており、それよりも古い。検出長は約34mと比較的長く方向はN-85°-Wでほぼ東西方向である。上端幅78~36cm、下端幅10~60cmで深さ1~6.5cmと浅い溝である。堆積土は1層で基本層3層である。出土遺物はない。

S D 2 (第109図、写真69・70)

X I a区からX I b区にかけて検出された。調査区を斜めに南北方向に横断する。S D 1と重複しており、それよりも新しい。検出長は16.6mで方向はN-6°-Eでほぼ南北方向に近い。上端幅は3~3.5m、下端幅は2.1~3mで深さ17~34cmである。底面の標高は8.9~9.1mで南へ傾斜している。堆積土は3層である。堆積土中より土師器、杭(第113図杭8、ブナ属の一種)が出土している。

土師器(第109図)：堆積土2層から出土している。製作時にロクロを使用していない土師器の坏の体部片である。外面に段を有し、内面には弱い屈曲があり、底部は丸底と考えられる。調整は外面がヘラミガキ、内面がヘラミガキ後黒色処理である。これらの特徴から国分寺下層式に比定されると考えられる。

杭(第113図杭8)：素材は丸太材で先端に加工が施されている。樹種はブナ属の一種である。

S D 3 (第109図)

X I a区の南半部に位置する。S D 4と約40cm離れて並行して検出されている。検出長は約3mと短く、方向はN-2°-Wでほぼ真北方向である。上端幅は10~40cm、下端幅は2~32cmで深さは0.4~2.4cmと浅い溝である。堆積層は1層で基本層3層である。出土遺物はない。

S D 4 (第109図)

X I a区の南半部に位置する。S D 3と40cm離れて並行して検出されている。検出長は約2.8mとS D 3と同様に短い。方向はほぼ真北方向である。上端幅18~26cm、下端幅2~10cmで深さ1.2~4cmで浅い溝である。堆積土は1層で基本層3層である。出土遺物はない。

S D 5 (第110図)

VII b区の北半部に位置する。検出長は1.3mと短い。方向はN-24°-Wである。上端幅46~106cm、下端幅20~50cm、深さ2~7cmと浅い溝である。堆積土は1層で基本層3層である。出土遺物はない。

S D 6 (第110図、写真71・72)

VIII a 区に位置し調査区を南北方向に横断している。検出長は20mと比較的長い。方向はほぼ真北方向だが北端部で大きく西へカーブしている。上端幅320~450cm、下端幅210~250cm、深さ12~34cmである。底面の標高は9.14~9.4mで南へ下がる傾斜である。堆積土は2層である。堆積土中より内面黒色処理で調整不明の土師器坏底部片1点と須恵器細片1点が出土している。

S D 7 (第110図)

VII b 区で S D 6 の東側に位置する。検出長は約19mで方向はN-12°-Wである。上端幅は38~140cm、下端幅16~70cm、深さ1~11cmである。底面の標高は9.2~9.6mで南へ下がる傾斜である。堆積土は1層で基本層3層である。出土遺物はない。

S K 5 (第109図)

VIII a 区の東南隅に位置する。平面形は不整梢円形で長軸162cm短軸55cmである。深さは8.5~11.5cmで、堆積土は1層で基本層3層である。出土遺物はない。

S K 6 (第109図)

XVI a 区と XV b 区の境に位置する。平面形は不整長方形で、規模は172×53cm、深さ10~16cmである。堆積土は6層で出土遺物はない。

ピット

IX b 区でピットが4基検出されている。平面形は不整円形で、径は20~40cm、深さは20~30cmである。位置関係に規則性は認められない。

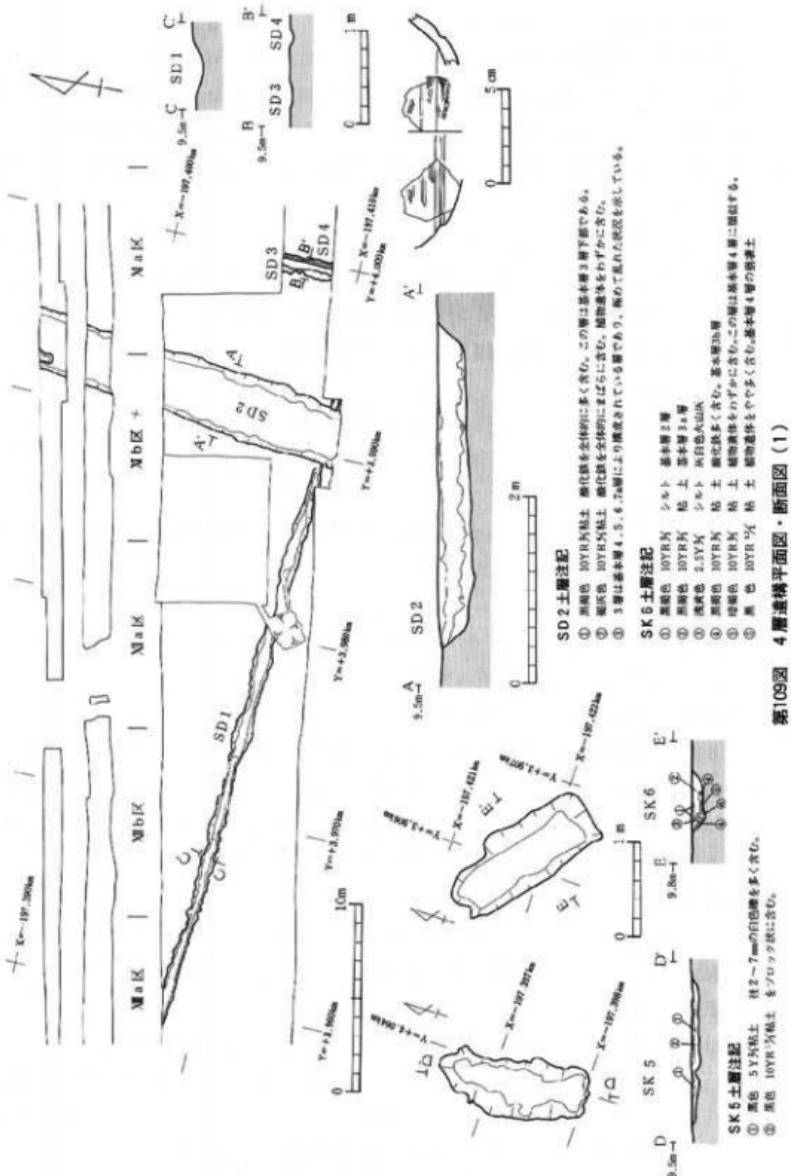
杭集中地点 (第111図、写真73)

IX b 区の北東端で杭が17本検出された。配置に規則性が認められないので杭集中地点とした。杭は直立ないし斜めに打ち込まれたものである。末端部に加工痕のある8点を図示した(第113図杭9~第114図杭16)。その8点の長さは10~35cmで、径1.5~6.5cmの丸太材である。樹種はヤナギ属の一種が3点、クリが2点、コナラ節が2点、クヌギ節が1点である。

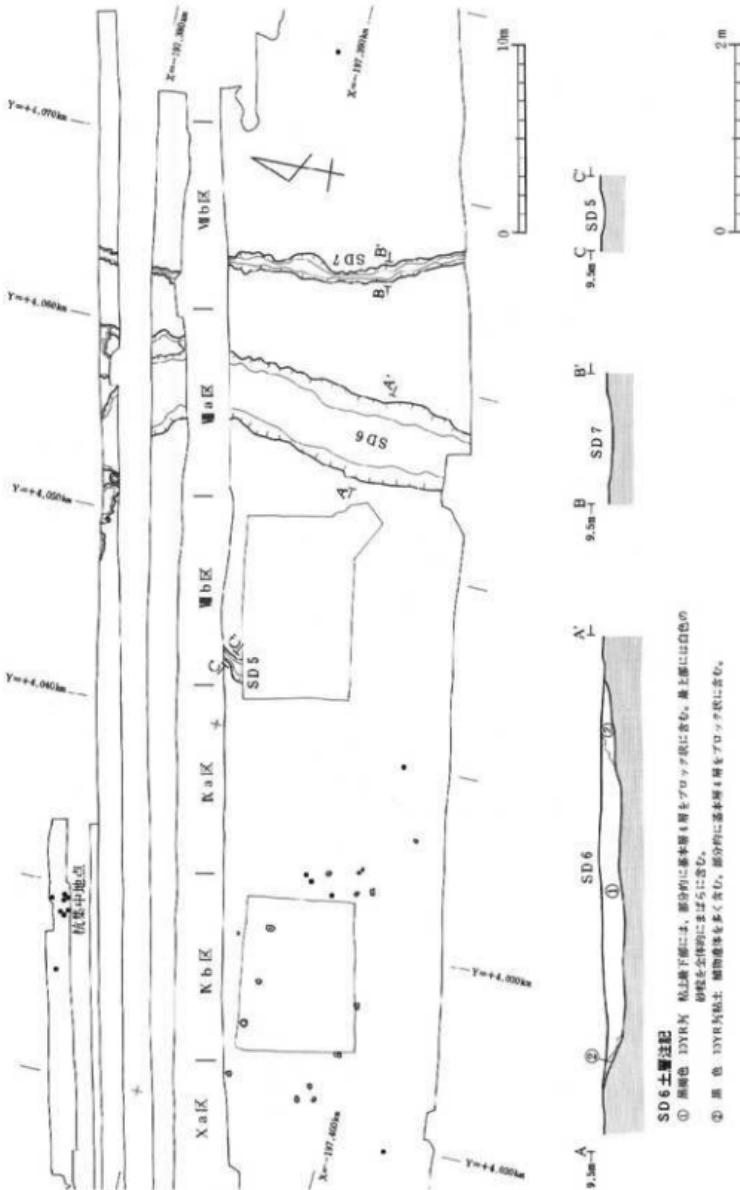
4層出土遺物

4層上面から土師器7点、須恵器1点、木製品1点、杭11点が出土している。図示できたのは木製品と杭のみである。土師器・須恵器は細片で図示できず、調整の判るものはロクロ不使用内面黒色処理の坏底部片1点だけである。

田下駄(第112図1、写真120)：下端部が鋼矢板で破壊されている。残存長は50cm、幅12.8cm、厚さ1.2cmである。片側縁辺が弧状でその部分が1段低くなっていること、棒皮紐が径3mmの小孔に残存していることから折敷の底板を転用したものであることがわかる。鼻緒孔が3孔あり前縫が片側へ寄っている。木取りは板目で、樹種はヒノキ属の一種である。



第109図 4層連續斜面図・断面図（1）

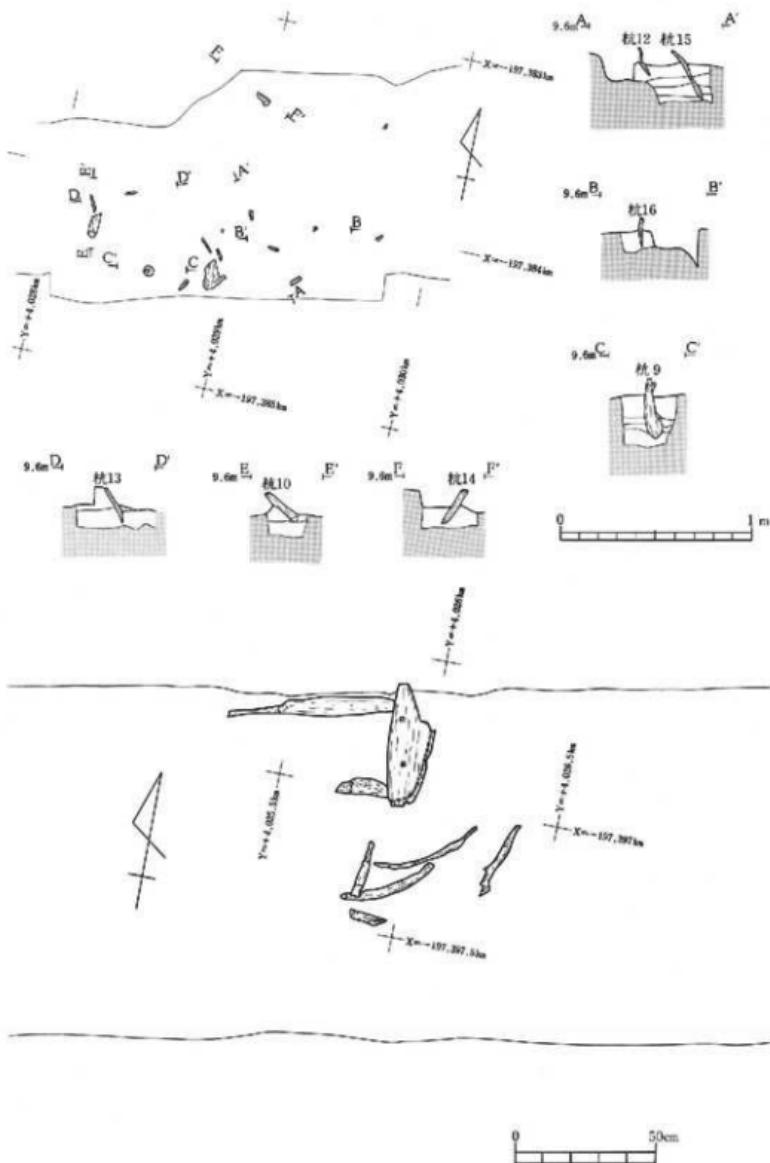


SD 6 土層注記

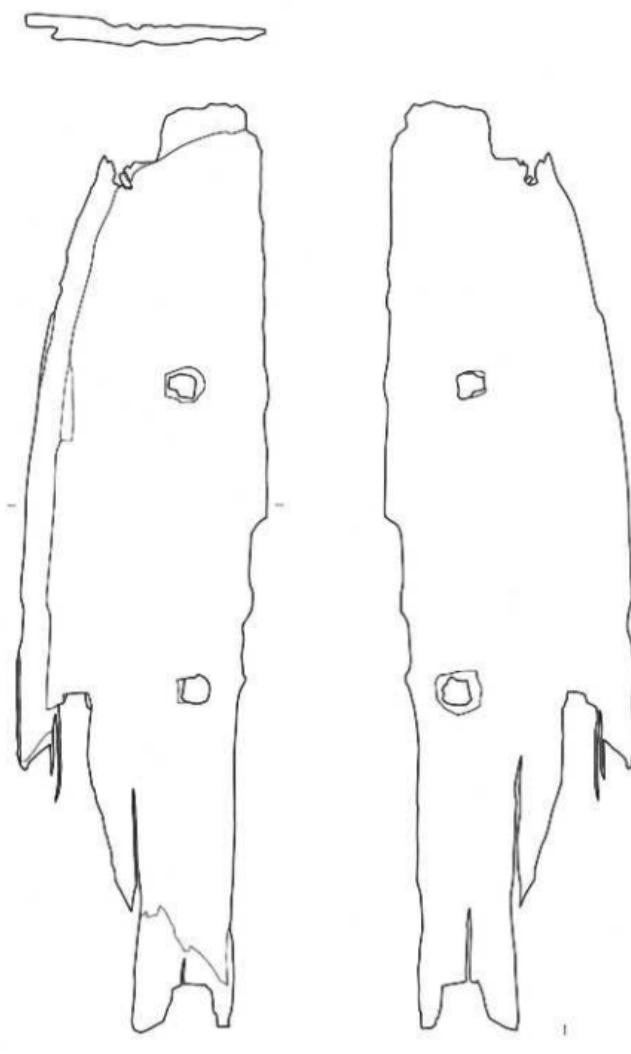
① 白色地帯 地下水層 下部には、部分的に基岩層と層をブロック状に含む。最も厚には白色の砂質土全体的ににはばらに含む。

② 黒色 地下水層 砂質土を多く含む。部分的に基岩層と層をブロック状に含む。

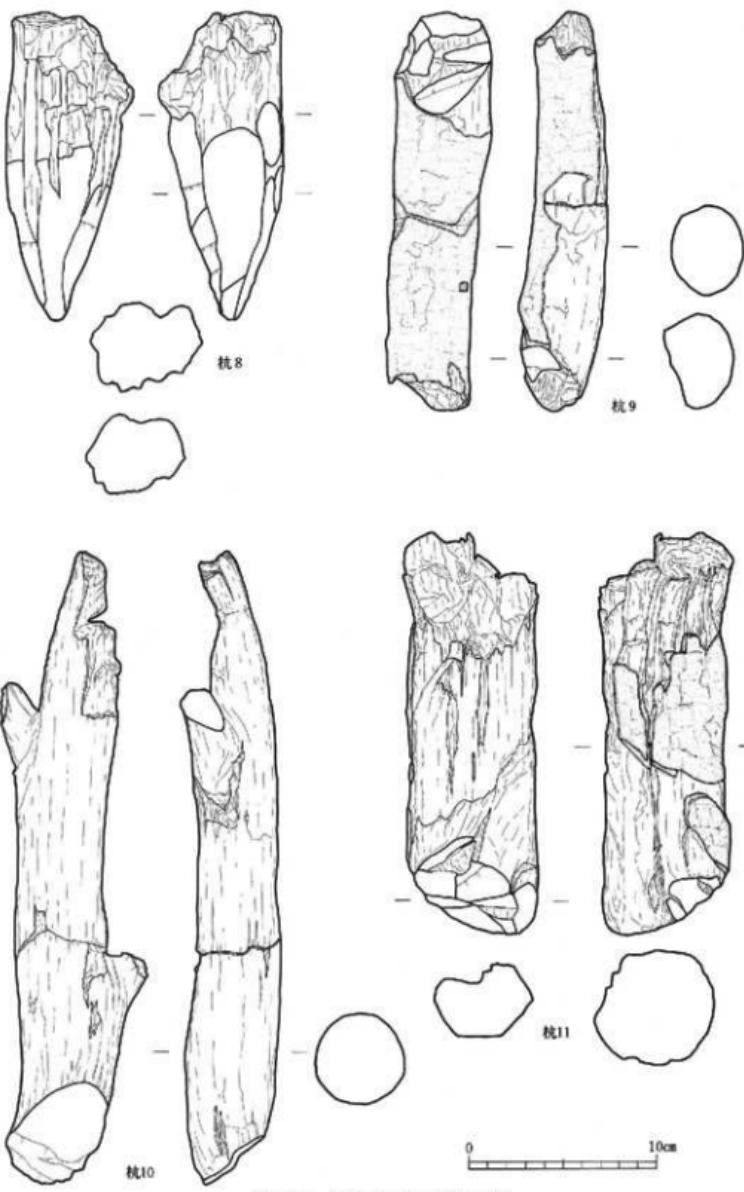
第110図 4層構造平面図・断面図(2)



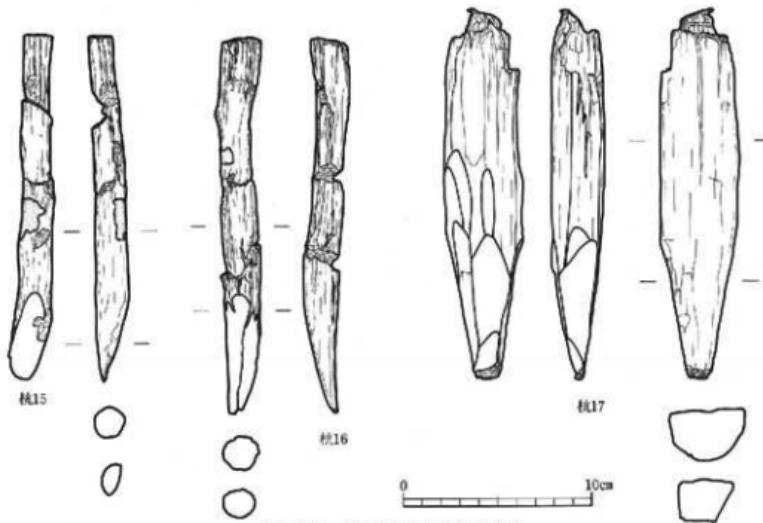
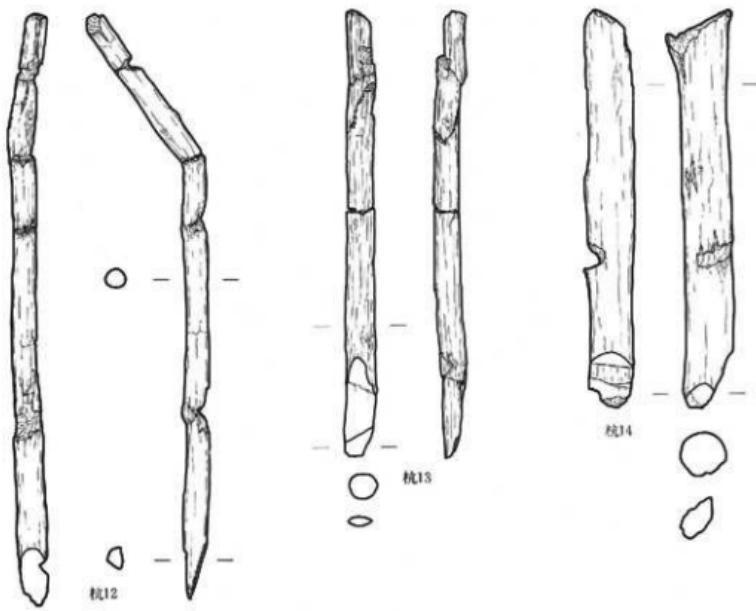
第111図 杭集中地点平面図・断面図・木製品出土状況図



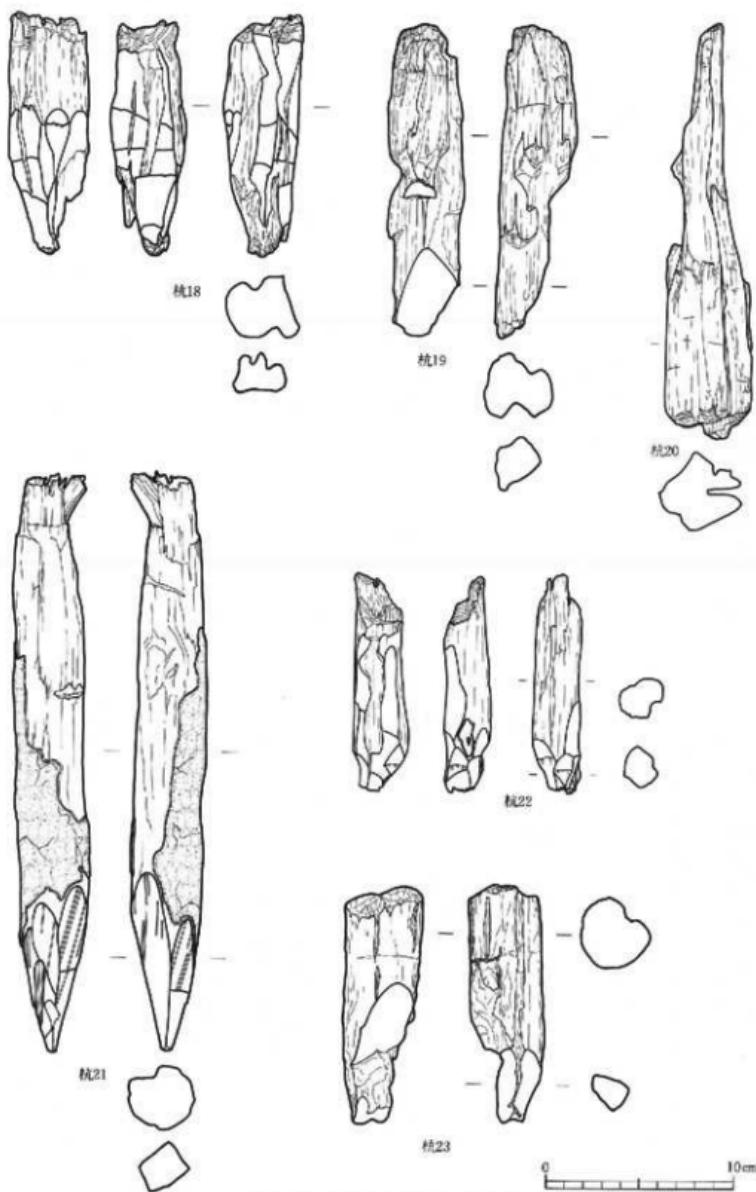
第112図 長町南駅区出土遺物(7)



第113図 長町南駅区出土遺物(8)



第114図 長町南駅区出土遺物(9)



第115図 長町南駅区出土遺物(10)

杭(第114図杭17～第115図杭23)：杭は前述した集中地点以外からも11点出土している。そのうち7点を図示した。杭18～20は比較的近接して検出されている。これらの杭はいずれも深さが10～30センチで本来はより上層から打ち込まれた可能性がある。11本の樹種はウツギ属の一種2、ヤナギ属の一種1、クリ2、コナラ節1、サンショウ1、ヤマグワ1、トネリコ1、散孔材1と多様である。

(7) 3層検出遺構と遺物

3層水田跡(第116図)

3層上面で畦畔5条、段差部分1ヶ所、土坑4基を検出している。

[地形面] 3層上面はほぼ平坦であるが西端のXVI区のみが若干高くなっている。XVIa区を除く標高は9.2～9.5mである。XVIa区は9.7mと高くなっている。

[水田域] 水田土壤がほぼ全域に広がっていることから、調査区外へも広がっていると考えられる。

[耕作土] 3層である。灰黄褐色・褐灰色・黒褐色のシルト・シルト質粘土・粘土と層相に変化がみられる。旧水田耕作土である1層に上面が攪拌されている。下面も耕作による凹凸が顕著である。この層の上面および層中に灰白色火山灰を含んでいる。

[直下の層] 4層である。この層の上面は耕作により攪拌され凹凸が著しい。この4層は3層の母材層のひとつである。

[畦畔] 畦畔は5条検出された。計測値は第32表に示した。畦畔にはふたつの方向性がある。畦1・2・4・5はN-0°～14°-Eの南北方向であり、畦3のみがN-85°-Eで東西方向になる。規模はほぼ同じで下端幅50～130cmである。

[段差部分]

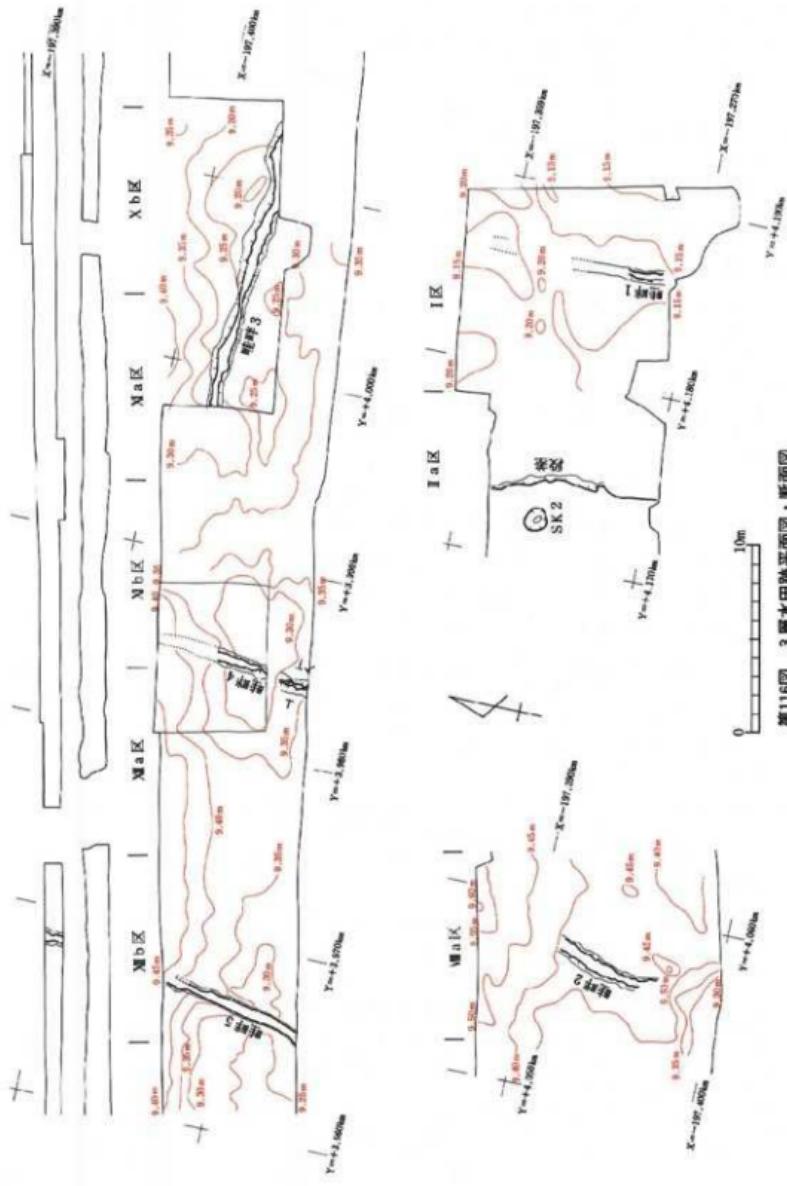
IIa区で検出されている。N-13°-Wの段差で南北方向の畦畔と方向は一致する。検出長は約6mで西側が高くなってしまいその高低差は6.3～7cmである。

S K 1 (第117図)

VIIa区に位置する。平面形は不整円形で規模は164×115cm、深さは約80～90cmである。堆積土は14層である。底面から電動グラインダーの刃が出土しているので現代のものである。

第31表 長町南駅区3層水田跡畦畔計測表

| 段差 No. | 地山高(m) | 方向性 | 方 向 | 上地高(cm) | 下地高(cm) | 水田跡との比較(cm) | | | |
|--------|------------|-----|--------------------|---------|---------|-------------|--------------------|-----|---------|
| | | | | | | 西 | 東 | 北 | 南 |
| 1 | 4.9 1.5 | 東 | N-3.5°-E N 0°-W | 20-35 | 50-70 | 西 剥 | 3.0-5.5 - | 東 剥 | 2.5-5.5 |
| 2 | 3.5 | 東 | N-15°-E | 25-60 | 65-115 | 西 剥 | 1.2-3.3 - | 東 剥 | 0.7-5.2 |
| 3 | 15 | 東 | N-85°-W | 15-65 | 65-120 | 北 剥 | - | 南 剥 | - |
| 4 | 4.33 | 東 | N-8°-E | 10-50 | 70-90 | 西 剥 | - | 東 剥 | - |
| 5 | 8.2 | 東 | N-14°-E | 30-60 | 50-90 | 西 剥 | 1.3-6.1 6.3-7.0 | 東 剥 | 0-6.3 |
| 段1 | 5.8 | 東 | N 17° W | - | - | 西 剥 | - | 東 剥 | - |



第116図 3層水田跡平面図・断面図

SK 2 (第117図)

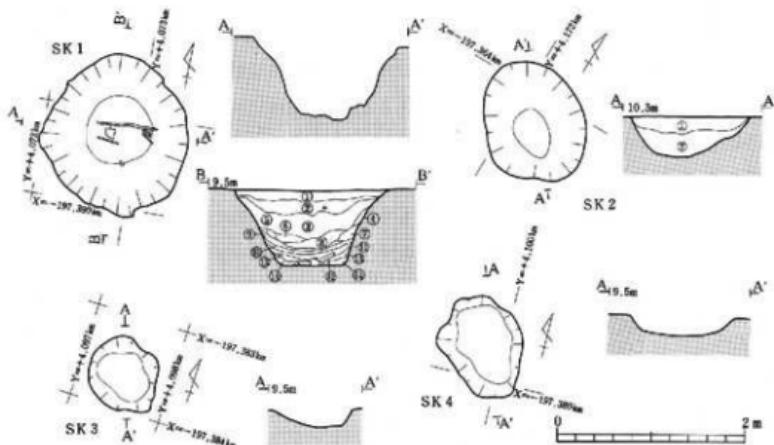
II区で検出されている段差部分のすぐ西に位置する。平面形は不整円形で規模は127×96cm、深さは約45cmである。堆積土は2層で出土遺物はない。

SK 3 (第117図)

V a 区に位置する。平面形は不整円形である。規模は78×60cmで深さは12.5~21.5cmである。堆積土は記録がなく不明である。出土遺物はない。

SK 4 (第117図、写真73)

SK 3 の北東4mに位置する。平面形は不整円形で規模は104×90cmで深さは20cmである。



SK 1 土層注記

- ① 黒褐色 2.5YR 黑 細砂土 1mm以下の砂を含む。表面断面以上に黒色10YR 5/4粘土をブロック状に含む。
- ② 黒褐色 5YR 細 粘土 硫化鉄と鉻1mg/g以下の鐵を少量含む。黒褐色10YR 5/4粘土をブロック状に含む。
- ③ 黑褐色 2.5YR 黑 細砂土 緑灰色7.5GY 5/4粘土及び灰褐色5YR 5/4粘土をブロック状に含む。また左右上部に硫化鉄を含む。
- ④ 灰綠褐色 7.5GY 黑 上
- ⑤ 4リーブ褐色 5YR 黑 上
- ⑥ 黑褐色 2.5YR 黑 上 植物遺跡を含む。
- ⑦ オリーブ黒色 10YR 黑 上 1mm以下の砂を少量含む。
- ⑧ 黑褐色 2.5YR 黑 上 植物遺跡を含む。地緑色10GY 5/4粘土をブロック状に含む。
- ⑨ 黑褐色 5YR 黑 上
- ⑩ 黑褐色 7.5YR 黑 上 漆オリーブ色10YR 5/4粘土(粘性あり、しまりあり)を細状に含む。
- ⑪ オリーブ黒色 5YR 黑 上 植物遺跡をごく少量含む。北側上面に1mm以下の砂を少量含む。
- ⑫ 黑褐色 7.5YR 彩質粘土 上
- ⑬ 黑褐色 10YR 5/4 黑 上 漆黒褐色10YR 5/4粘土をブロック状に少量含む。
- ⑭ 黑褐色 7.5YR 黑 土 1mm以下の砂を含む。

SK 2 土層注記

- ① 黄褐色 2.5YR 粘土シルト 後1~10cmの淡褐色粘土と後3cmの灰褐色粘土をブロック状に含む。
- ② 灰褐色 2.5YR 黑 上 後1~6cmの墨水層3層、4層をブロック状に含む。灰白色火山灰を含む。

第117図 SK 1~4 平面図・断面図

堆積土は記録がなく不明である。出土遺物はない。

3層出土遺物

土師器62点、須恵器20点、赤焼土器5点、陶磁器125点、不明土器9点、瓦1点、木製品1点、砥石1点など126点が出土している。そのうち、土師器1点、須恵器4点、赤焼土器1点、陶磁器3点、砥石2点を図示した。

土師器(第118図3、写真117)：3は製作時にロクロを使用していない坏である。体部下端から膨らみながら立ち上がり口縁部にいたる。底部の形状は不明である。器面調整は外面がヘラケズリ後ヘラミガキで、内面はヘラミガキ後黒色処理である。以上の特徴から国分寺下層式に比定される。

須恵器(第118図1・2・5・6、写真117)：1は坏で底部から直線的に外傾して立ち上がる。底部の切り離しはヘラ切り無調整である。2は坏の底部片で切り離しは回転糸切り無調整である。体部に墨書があるが判読不能である。5・6は壺の体部片で外面は平行叩き目である。これらは奈良時代から平安時代に位置づけられる。

赤焼土器(第118図4、写真117)：4は坏で底部の切り離しは回転糸切り後無調整である。全体に大きく開いた器形で、体部はやや膨らみをもち口縁部は外反気味になる。底径／口径が0.34と底径が小さくなっている。平安時代(10C後半～11C)に位置づけられる。

陶磁器(第118図7・8・10、写真120)：7・8は陶器で8は内外面鉛釉の小壺である。10は肥前産の染め付けの大皿か大鉢で17C後半～18Cのものである。図示できなかった陶磁器類の产地としては柏馬、唐津、瀬戸、美濃などが挙げられる。また、時期は17C～18Cに位置づけられるものが多い。

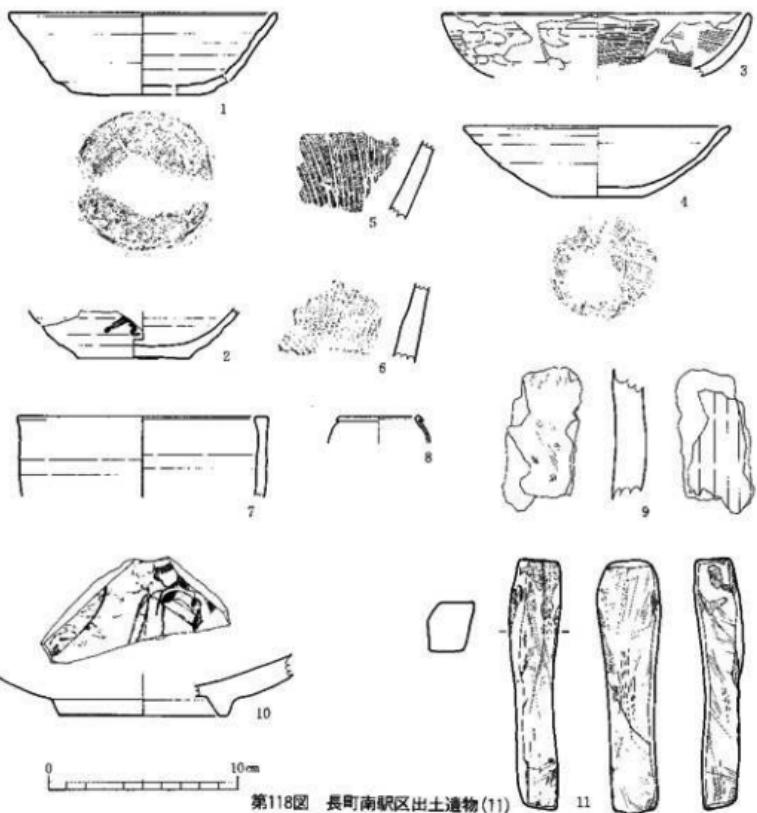
砥石(第118図9・11、写真117)：9は在地の中世陶器壺体部片を砥石に転用したもので内面に磨痕が認められる。11の石材は凝灰岩である。

(8) その他の出土遺物

基本層1・2・7a・7b層から土師器、須恵器、陶磁器、不明土器、瓦、木製品、石器などが出土している。そのうち須恵器1点、陶磁器8点、木製品2点、石器2点を図示した。

須恵器(第119図1、写真117)：坏の口縁部である。体部から直線的に外傾して口縁部にいたる。

陶磁器(第119図2～9、写真120)：2層出土は4・8・9である。4は鉄釉の擂鉢(18～19C)、8は肥前の染付小皿(18C)、9も肥前の染付皿(19C)である。1層出土は2・3・6・7で、2は瀬戸・美濃の小壺、3は瀬戸の鉄釉香炉(14～15C)、6は柏馬の碗、7は瓦質の擂鉢である。図示したもの以外の陶磁器の产地は、堀、柏馬、唐津、肥前などがある。時期は中世から現代までに位置づけられるが、17Cから明治時代のものが多い。



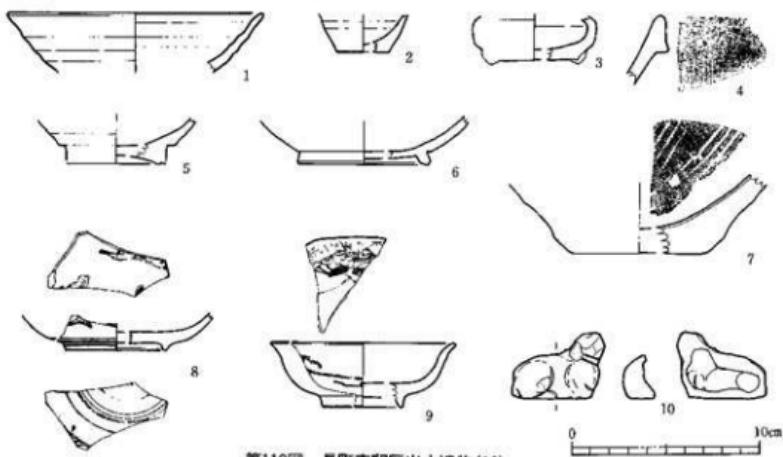
第118図 長町南駅区出土遺物(11)

木製品(第103図1・3、写真119)：1はXIIa区の7a層から出土した藤柄鉤の一部である。着柄軸から肩にかけて残存するだけ自身の全体の形状は不明である。身の片側の面の上部には段差があり上部の厚さが2.4cm、下部が1.2cmとなっている。残存長は13.6cmである。木取りは粋目で樹種はコナラ節である。

3はXb区の7a層から出土した鉤先と考えられるものである。身の下半部だけが残存している。残存長は22.3cm、身の幅10.4cm、厚さは1cmである。樹種はクヌギ節である。

石器(第102図7・8、第104図1、写真118)：第102図7・8は有形の石鉤で完形である。7はVII区の7c層、8はVIIIb区の7b層から出土している。7の尖頭部の側縁部はやや丸みがあり、基部との境はやや不明瞭である。尖頭部に対して基部がやや長くなっている。石材は玉髓である。8は尖頭部の側辺部はやや内反り気味で基部との境は明瞭である。石材は玉髓である。

第104図1は大型板状安山岩製石器(斎野1987)である。NA試掘No.4(本調査X1b区)



第119図 長町南駅区出土遺物(12)

の7a層から、約8cm離れて二つに割れた状態で出土している(写真67)。全体の形状は不整平行四辺形で、最大長は27.5cmとかなりの大型品である。背面側の上・左側縁は折れ面で、前者の折れ面から腹面側に二次加工が施されている。右側縁は両面から二次加工が施されている。背面側での下側縁は鋭い縁邊になっており、刃部と考えられる。刃部の縁は摩滅部分と二次加工部分とからなるが、刃部の長さに対して8割近くが二次加工部分となっている。また、刃部の両面には幅5~15mmの光沢面(スクリントン部分)が観察される。二次加工は摩滅部分および光沢面よりも新しい。背面の上側縁側の剥離面の風化は他に比べ新しい。

(9) 小結

①周辺調査区との層の対応

82年調査分の10数m南で1987年に第28次調査(佐藤甲:1988)、I区のすぐ東側の約480mの区間で1985・86年に第15次調査(斎野:1987)が実施されている。両報告書において本調査との層の対応が示されており、ここでもそれを踏襲すると以下のようになる。

本調査 第28次

| | |
|-------------|-----------------------|
| 4層 = 7・8層 | = 8層 |
| 5層 = 9a層 | = 9a層(弥生時代中期十三塚式期水田跡) |
| 6層 = 10a層 | = 10a層 |
| 7a'層 = 10a層 | = 10a層 |
| 7a層 = 10a層 | = 10a層 |

第15次

10b 層（弥生時代中期水田跡） = 10b 層

10c 層

7b 層 = 10d 層（弥生時代中期水田跡） = 10-11a 層

10e 層

7c 層 = 11a 層 = 11a 層（弥生時代中期樹形圓式期水田跡）

7e 層 = 12 層

7f 層 = 12 層

8 層 = 13 層

33 層 = 29 層（火山灰） = 31 層（火山灰）

② 7c 層水田跡

7c 層から出土した弥生土器は前述したように鍍沼・寺下圓式から樹形圓式に比定されることから、7c 層水田跡もその時期の所産といえる。一方、15次調査では本調査の7c 層に対応する「11a」層から樹形圓式の壺が出土し、樹形圓式期の水田が検出されていることから、7c 層水田跡の時期はさらに限定されて樹形圓式期に位置づけられよう。

7c 層水田跡は、大畦畔により大区画を設定しその内部を小畦畔により区画するという形態である。地形の傾斜に沿った方向の大畦畔と傾斜に直交する大畦畔とがあり、前者が北西方向N-43°~62°-W、後者が北東方向N-29°~39°-Eとなる。また、北西方向の大畦畔が多いことから傾斜方向に長い長方形の大区画になると考えられる。一方、小区画の形状は一定ではない。

③ 5 層水田跡

5 層からは年代を決定するような資料は出土していないので上下の層から時期を限定せざるを得ない。7c 層が弥生時代中期であること、4 層上面で奈良時代から平安時代の遺構が検出されていることから、5 層の水田跡は弥生時代中期から平安時代の時期に位置づけられる。一方、15次調査では本調査の5 層に対応する「9a」層から十三塙式に比定される広口壺が出土し、併せて同時期の水田跡が検出されている。よって 5 層の水田跡の時期はさらに限定されて十三塙式期に位置づけられよう。

擬似畦畔Bが1条検出されたのみであるが、それは7c 層の大畦畔を踏襲したものである。

④ 4 層検出遺構

4 層で検出された遺構の中で年代が特定できる遺物を出土したのはSD2のみである。出土した土師器壺は国分寺下層式に比定されることからSD2は奈良時代の所産とされる。一方、出入口区(VI-5)でのSD4は本調査でのSD6と同一と理解される。そのSD4から製作時にロクロを使用した高台付壺の底部が出土していることからSD6は平安時代の所産とされる。よって4層上面の遺構は奈良時代から平安時代の時期に位置づけられる。溝の性格につい

では不明であるが、SD 1・2・6は方向が真北あるいは真東方向であることから条里型土地割に関連したものである可能性も考えられよう。

⑤3層水田跡

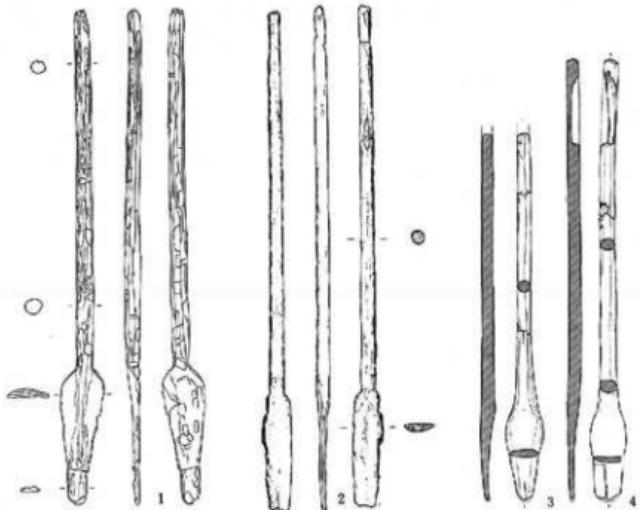
3層中および上面から土師器や赤焼土器、陶磁器が出土している。土師器は奈良時代の圓分寺下層式、赤焼土器は平安時代（10C後半～11C）で、陶磁器は17C後半から18Cのものが多い。また3層上面では灰白色火山灰（10C前半）が検出されている。以上から3層水田跡はおおまかではあるが平安時代の灰白色火山灰層下以降から近世の時期に位置づけられる。仮に平安時代の水田跡とした場合条里型土地割との関係が問題となる。最近の条里型土地割の検討（平間1988）から推定すると、本調査区内には坪境が4条（南北方向①Y=+4.185km、②Y=+4.076km、③Y=+3.975km、東西方向④X=-197.392km）存在することになる。ちなみに畦畔1が①、畦畔5が②に対応する位置にある。しかし、ともに幅が50～90cmと比較的小規模であることから断定し難く、今後の課題とされよう。

⑥木製鋤について

本調査区出土の一木鋤は、身の肩がナデ肩で、身の先端に向かって先細りになる点に大きな特徴がある。

一木鋤は富沢遺跡第8次調査でも出土している（工藤：1982）。その資料は身の幅が若干細くなる他は本資料とほぼ同じ大きさであり、なで肩になるのも同様であるが、身が先細りせず、長方形に近いことや木取りが柵目であることが相違点として挙げられる（参考図2）。

身が先細りになる一木鋤の弥生時代中期の類例としては大阪府池上遺跡出土の鋤A II形式（小野・奥野1978）が挙げられる（参考図3・4）。しかし池上例は身の長さが短く身の片面が削られ反り気味になっているのに対し、本資料は身がやや長く身の片面は池上同様丸味をもつものの、もう一方の面が平坦面であるなどの相違点が挙げられる。ここでは身の先細りの鋤の類例として指摘するにとどめ詳細な検討は今後の課題としたい。



1. 当調査区
2. 富沢造跡第8次調査
(工藤1984より転載)
3・4. 池上遺跡
(小野・美野1978より転載)

参考図 鰭類例図 (縮尺1/12)

第32表 長町南駅区遺物観察表(1)

土器

| 回収番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 種 别 | 外 型 | 直 径 | 口幅 | 底径 | 厚さcm | 特 徴 | 写真番号 |
|-------|------|----------|--------|-----|---------|------|-----|------|--------------------------------|------|
| 102-1 | B 2 | T C 横小切跡 | 舟生土器 | 縦 | 口縫痕片 | | | | 口縫L型窓、口縫ヨコナデ、列立文、底化物付着、1~2周・底付 | 117 |
| 102-2 | B 2 | T C 横小切跡 | 舟生土器 | 縦 | 口縫痕片 | | | | 口縫L型窓、口縫ヨコナデ、列立文、底化物付着 | 117 |
| 102-3 | B 2 | T C 横小切跡 | 舟生土器 | 縦 | 縫 | | | | L型窓文、底化物付着 | |
| 102-4 | B 1 | T C 横小切跡 | 舟生土器 | 縦 | 口縫痕片 | | | | 口縫L型窓、口縫ヨコナデ、底化物付着 | 117 |
| 102-5 | B 1 | T C 横小切跡 | 舟生土器 | 縦 | 口縫痕片 | | | | ヨコナデ、底縫文 | 117 |
| 102-6 | B 1 | T C 横小切跡 | 舟生土器 | 縦 | 体一部 | 16.0 | | | 底化物付着 | |
| 109-1 | C | 4面SD 2 | 上 口 縫 | 縦 | 体 25 片 | | | | クロロ不使用、底打、外縫ヘラシダク。内縫ヘラシダク無色透葉 | |
| 118-1 | E 1 | II区 3面 | 底 突 2面 | 縦 | 物 1/9 | 14.3 | 7.6 | 4.5 | ロクロ、底無色透葉 | 117 |
| 118-2 | E 3 | 3面 | 底 突 2面 | 縦 | 体一部 | 5.8 | | | ロクロ、底無色透葉 | 117 |
| 118-3 | C 1 | V区 3面 | 土 附 2面 | 縦 | 口縫窓 1/3 | 16.4 | | | ロクロ不使用、内縫ヘラシダク無色透葉 | 117 |
| 118-4 | D 1 | 舟生人口3面 | 舟生土器 | 縦 | 物 1/2 | 14.1 | 4.8 | 3.8 | ロクロ、内縫各切痕透葉、内外縫ヘラシダク。底縫/口縫0.37 | 117 |
| 118-5 | E 4 | II区 3面 | 底 突 2面 | 縦 | 舟生底内 | | | | 外縫平行印捺透葉 | 117 |
| 118-6 | E 5 | II区 3面 | 底 突 2面 | 縦 | 舟生底内 | | | | 外縫平行印捺透葉 | 117 |
| 119-1 | E 2 | VII区 2面 | 底 突 2面 | 縦 | 口縫窓 1/2 | 13.5 | | | ロクロ、内外縫ロクロナデ | 117 |

木製品

| 回収番号 | 登録番号 | 遺物・部位 | 材 种 | 直 径 | 長さcm | 幅 cm | 厚さcm | 特 徴 | 写真番号 | |
|-------|------|----------|-------|-------|------|------|------|--------------------------------------|--------------------|-----|
| 103-1 | L 1 | X区 2面 | 漆柄鉤 | 漆鉤頭一部 | 楕円 | 13.2 | 13.6 | 2.5 | 茎糸、ヨカ筋の一輪 | 119 |
| 103-2 | L 2 | T C 横小切跡 | 漆状木製品 | 片端大頭 | 楕 | 10.6 | 3.9 | 2.6 | イヌギヤ、一端を三側に加工 | 119 |
| 103-3 | L 3 | X区 2面 | 漆 | 舟下竿 | 楕 | 22.2 | 10.4 | 1.8 | ヨカ筋の二輪 | 119 |
| 108-1 | L 4 | 5面横小切跡 | 漆 | 舟 | 10.6 | 9.8 | 3.5 | 板目、舟縫24.4cm、舟界1~2cm、幅82.7~3.5cm、ヤマグワ | 119 | |
| 112-1 | L 5 | IV区 4面 | 田下駄 | 下脚部欠損 | 楕 | 49.5 | 13.3 | 1.4 | 板目、ヒノキ製の一輪、折曲の底板起用 | 120 |

第33表 長町南駅区遺物観察表(2)

石器

| 回収番号 | 登録番号 | 遺傳・層位 | 種 | 周 cm | 幅 cm | 厚 cm | 厚さ比 | 石 材 | 産み点 | 特 | 性 | 写真番号 | |
|--------|------|--------------|-----------|------|-------|------|-----|-----|-----|---|---------|--------------------|-----|
| 102-7 | K-2 | VII区 7 A層 | 石 破 | 25.0 | 12.0 | 5.0 | 1.1 | 玉 | 塊 | 形 | | 118 | |
| 102-8 | K-3 | VIII区 7 B層 | 石 破 | 27.1 | 11.9 | 5.2 | 1.1 | 玉 | 塊 | 形 | | 118 | |
| 102-9 | K-4 | VII区 7 C層水頭部 | 石 破 | 28.4 | 12.15 | 6.5 | 1.2 | 玉 | 塊 | 形 | | 118 | |
| 102-10 | K-5 | VII区 7 C層水頭部 | 石 破 | 19.6 | 12.2 | 6.5 | 1.0 | 砂 | 質 | 右 | 火熱を受けた痕 | 118 | |
| 104-1 | K-16 | IV区 7 A層 | 大型な弘安山型石刀 | 75.0 | 19.6 | 2.5 | 2.2 | 灰 | 岩 | 光 | 形 | 火熱陶面に光沢(スクランチング部分) | 118 |

杭

| 回収番号 | 登録番号 | 遺傳・層位 | 宋 材 | 周 cm | 幅 cm | 厚 cm | 厚さ比 | 種 | 材(試験番号) | 特 | 考 | 写真番号 |
|------|------|--------------|-----|-------|------|------|-----|---|----------------|---|---|------|
| 105 | 杭 1 | 8層上部 | 丸太材 | 36.4 | 5.2 | | | ○ | エゴノキ属の一種 (132) | | | |
| 105 | 杭 2 | 8層上部 | 分断材 | 31.5 | 7.8 | | | × | クリ (133) | | | |
| 105 | 杭 3 | 8層中 | 分断材 | 26.1 | 3.9 | | | ○ | ヤナギ属の一種 (134) | | | |
| 105 | 杭 4 | VII区 7 C層水頭部 | 丸太材 | 54.0 | 5.0 | | | ○ | クリ (135) | | | 129 |
| 106 | 杭 5 | VII区 7 C層水頭部 | 丸太材 | 24.5 | 3.1 | | | × | クリ (136) | | | 129 |
| 106 | 杭 6 | VII区 7 C層水頭部 | 丸太材 | 26.15 | 3.8 | | | × | クリ (137) | | | 129 |
| 106 | 杭 7 | VII区 7 C層水頭部 | 丸太材 | 29.15 | 3.95 | | | × | | | | 129 |
| 113 | 杭 8 | SII 2 | 丸太材 | 16.1 | 6.6 | | | ○ | アブ科の一種 (138) | | | |
| 113 | 杭 9 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 21.1 | 4.8 | | | × | ヤナギ属の一種 (139) | | | |
| 113 | 杭 10 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 33.7 | 5.6 | | | ○ | ヤナギ属の一種 (140) | | | |
| 113 | 杭 11 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 22.5 | 6.2 | | | × | ヤナギ属の一種 (141) | | | |
| 114 | 杭 12 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 33.9 | 1.2 | | | × | コナラ属の一種 (142) | | | |
| 114 | 杭 13 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 23.8 | 1.5 | | | ○ | クヌギ属の一種 (143) | | | |
| 114 | 杭 14 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 21.2 | 2.3 | | | × | クリ (144) | | | |
| 114 | 杭 15 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 18.4 | 1.9 | | | ○ | コナラ属の一種 (145) | | | |
| 114 | 杭 16 | 4層机集中地点 | 丸太材 | 20.0 | 1.9 | | | ○ | クリ (146) | | | |
| 114 | 杭 17 | 4層 | 分断材 | 28.4 | 6.0 | | | ○ | クリ (147) | | | |
| 115 | 杭 18 | 4層 | 丸太材 | 12.9 | 1.2 | | | ○ | 麻孔材 (148) | | | |
| 115 | 杭 19 | 4層 | 丸太材 | 16.6 | 3.8 | | | ○ | ヤマグワ (149) | | | |
| 115 | 杭 20 | 4層 | 分断材 | 44.3 | 9.0 | | | × | クリ (150) | | | |
| 115 | 杭 21 | 4層 | 丸太材 | 36.6 | 3.8 | | | ○ | ツヅク属の一種 (151) | | | |
| 115 | 杭 22 | 4層 | 丸太材 | 11.6 | 2.9 | | | ○ | トヨリコ属の一種 (152) | | | |
| 115 | 杭 23 | 4層 | 丸太材 | 12.7 | 4.1 | | | ○ | ショウブ (153) | | | |

陶器器・人形

| 回収番号 | 登録番号 | 遺傳・層位 | 種 | 鉢形 | 底 | 周 cm | 底径 cm | 高さ cm | 持 | 蓋 | 写真番号 |
|--------|------|---------|-------|----|-------|------|-------|-------|----------------------------|---|------|
| 118-7 | I-10 | I区 3層 | 脚 壺 | 直 | 平 | 53.3 | | | | | |
| 118-8 | I-2 | XII区 3層 | 脚 壺 | 直 | 口縁小片 | 4.2 | | | 脚物、小袋(各1個) | | 120 |
| 118-10 | J-1 | 3層 | 脚 壺 | 直 | 直 | 2.6 | | | 脚物、取付人跡(人跡)、12世紀後半～13世紀 | | 120 |
| 119-2 | I-3 | | 脚 壺 | 直 | 直 | 2.6 | | | 脚物、直縁、小袋(各1個) | | 120 |
| 119-3 | I-4 | I区 1層 | 脚 壺 | 斜 | 直 | 4.6 | | | 脚物、直縁、足(3)付 | | 120 |
| 119-4 | I-5 | VII区 2層 | 脚 壺 | 斜 | 斜 | 5.2 | | | 直縁、脚物、12世紀 | | 120 |
| 119-5 | I-6 | VII区 2層 | 脚 壺 | 斜 | 斜 | 5.2 | | | 直縁、脚物、天保実跡?、削り出し両台、12世紀～後半 | | 120 |
| 119-6 | I-7 | | 脚 壺 | 斜 | 斜 | 6.6 | | | 脚物 | | 120 |
| 119-7 | I-8 | I区 1層 | 瓦質土壺 | 脚 | 直 | 7.9 | | | | | 120 |
| 119-8 | J-2 | VII区 2層 | 脚 壺 | 斜 | 斜 | 5.4 | | | 脚物、象形小屋(例0)、12世紀 | | 120 |
| 119-9 | J-3 | VII区 2層 | 脚 壺 | 直 | 約 1/8 | 9.8 | 4.7 | 3.1 | 脚物、直縁、12世紀 | | 120 |
| 119-10 | J-4 | 1層 | 上 脚 壺 | 人形 | 1/8 | 6.8 | | 3.5 | 脚?、火 | | 120 |

礫石

| 回収番号 | 登録番号 | 鉢形 | 底 | 周 cm | 底径 cm | 厚 cm | 石 材 | 持 | 性 | 写真番号 |
|--------|------|-------|----|------|-------|------|-----|-----|---|------|
| 118-9 | I-1 | I区 3層 | 砾石 | 火形? | 7.7 | 4.2 | 1.6 | | | |
| 118-11 | K-17 | I区 3層 | 砾石 | 火形? | 13.4 | 3.2 | 3.2 | 花崗岩 | | 121 |

2. 変電所区

(1) 調査の方法と経過

本調査区は高速鉄道の鍋田変電所部分である。82・83年の本線敷の調査成果より水田跡の存在が十分予想されたことから、試掘を行わず本調査を実施した。変電所建設の工事工程上調査を急ぐ必要が生じたため、下ノ内遺跡の調査を一時中断して1983年12月から着手した。

調査区は長さ26~32m、幅約21mのほぼ長方形である。グリッド等は設置しなかったが、作業行程上A~D区に4分割し調査を実施した。実測は任意の実測用基準杭を東西に設定し、平板測量を基本として行った。なお、報文図中の国土座標は工事用の路線実測図の国土座標より図上で求めたものである。盛土のみを重機で除去し、それ以下は人力で遺構検査及び掘り込みを行った。また、調査区の東西両側にベルトコンベアを15台設定し、作業の効率化を図った。調査区設定に必要な諸工事や盛土・旧表土掘削・残土運搬などは他工区と同様に工事業者が担当した。

83年の調査は12月6日から開始し、翌84年6月29日に終了した。2層で区画整理前の擬似畦畔を検出、3層4層で水田跡、6層で不整形の落ち込み遺構、11・12層で弥生時代の水田跡を検出した。また、7層では石庖丁が出土した。12層で弥生時代の水田跡が比較的良好に検出されたことから6月23日に現地説明会を開催し、一般に公開した。

(2) 調査区の位置

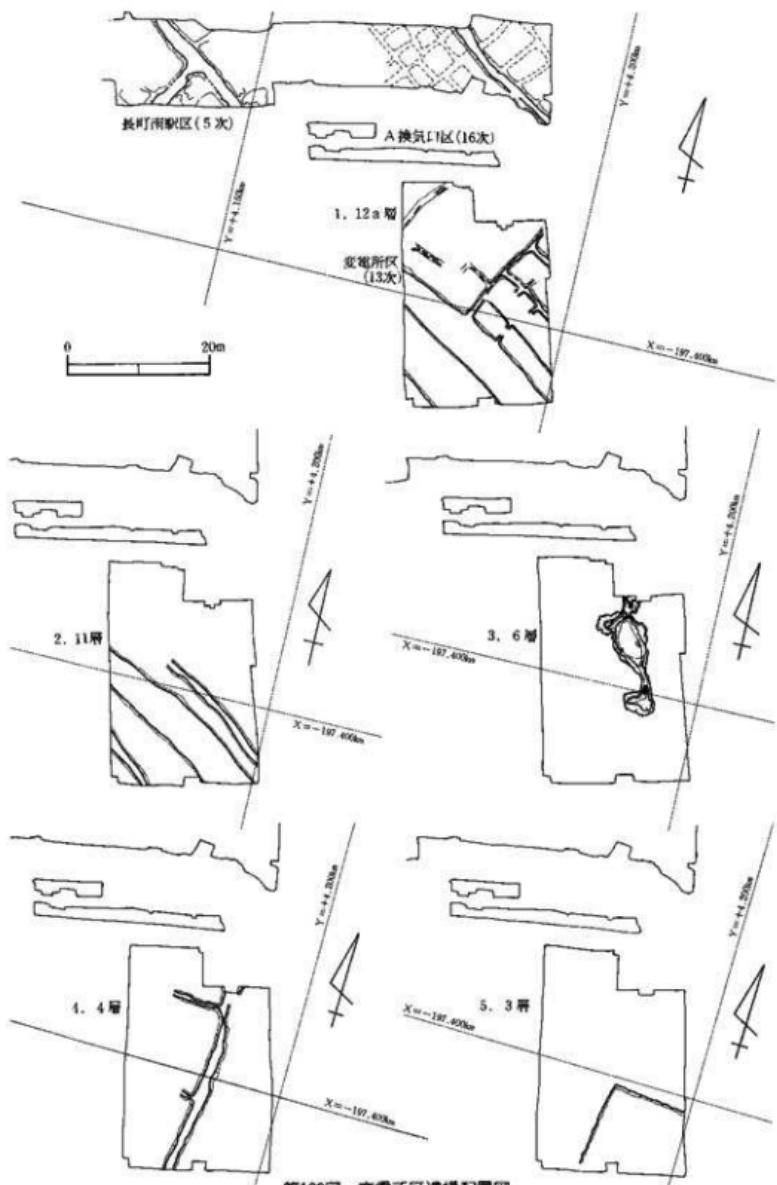
調査地点は前項の長町南駅区I・II区のすぐ南に隣接したところである。金洗沢が形成した泉崎浦の微高地とニッ沢が形成した鹿野の微高地(II-1参照)の中間に位置する。区画整理以前は南へ緩く傾斜する水田で標高は9.7~9.8mである。

(3) 基本層序

確認された基本層は1~14層までである。層序を大まかにみると1~5層がシルトおよび粘土層で6層以下が泥炭質粘土層となる。15層以下については未確認であるが、約15m西側で行われた28次(佐藤:1988)の調査成果からすると14層上面から約5.5mで基底礫層になり、その標高は約2.3mと推定される。

1層:褐灰色(10YR4/1)シルト層。旧耕作土。

2層:灰色(7.5YR4/1)シルト質粘土層。この層の最上部に鉄分の集積層が認められる。層厚は4~10cmである。調査区の東半に部分的に分布する。下面には凹凸が認められ、水田耕作土



第120図 変電所区構造配置図

3層：黒褐色(10YR3/1)粘土層。部分的に灰白色火山灰をブロック状に含む。層厚は5~30cmで全域に分布する。調査区西半部に厚く、耕作による攪拌が6a層にまで及んでいる。上面下面とも凹凸が認められる。水田耕作土である。

4層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土。部分的に灰白色火山灰をブロック状に含む。層厚は4~20cmである。調査区の東半部にのみ分布する。上面下面とも凹凸が認められる。水田耕作土である。

5層：黒褐色(10YR3/1)粘土層。層厚は5~30cmである。調査区の東半部に分布し、その南半に比較的厚く分布する。上面下面とも凹凸が認められる。水田耕作土の可能性がある。

6a層：黒褐色(10YR2/2)泥炭質粘土と灰黄褐色(10YR6/2)粘土との互層。層厚は5~25cmである。全域に分布する。上面に凹凸が認められる。自然堆積層である。

6b層：暗褐色(10YR3/3)泥炭質粘土。層厚は10~20cmで全域に分布する。6c層をブロック状に含み分解の進んだ層であるが、平面的には広がらず、水田耕作土とは認められない。

6c層：灰オリーブ色(5Y6/2)泥炭質粘土。黒褐色(10YR3/2)粘土と互層。層厚は2~10cmでほぼ全域に分布する。自然堆積層である。

7層：暗灰黄色(2.5Y5/2)泥炭質粘土。層厚は6~14cmで全域に分布する。下面の凹凸が顕著で一部9層上面まで及ぶ。分解が進んだ層である。水田耕作土である。

8層：黒褐色(7.5YR3/2)泥炭質粘土と灰オリーブ(5Y6/2)粘土との互層。層厚は4~10cmで全域に分布する。7層の母材の一部である。自然堆積層である。

9層：灰色(5Y6/1)泥炭質粘土。層厚は1~4cmで全域に分布する。自然堆積層である。

10層：黒色(10YR2/1)泥炭質粘土と灰黄褐色(10YR4/2)粘土との互層。層厚10~20cmで全域に分布する。分解度は高くないが、下半には分解が進んだ部分がみられる。自然堆積層である。

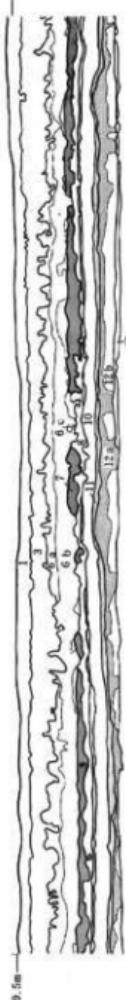
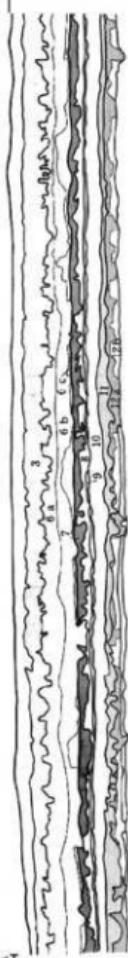
11層：灰黄褐色(10YR5/2)泥炭質粘土。層厚4~16cmで全域に分布する。下面是凹凸が認められる。水田耕作土である。

12a層：褐灰色(10YR4/1)泥炭質粘土。層厚4~20cmで全域に分布する。下面の凹凸が顕著である。層中に12b層のブロックを含む。水田耕作土である。

12b層：黒褐色(10YR3/2)泥炭質粘土。層厚は2~10cmである。この層は大畦畔の下部に明瞭に残存するが、他の部分では多くは認められない。これは12a層での耕作によるためである。自然堆積層である。

13層：黄灰色(2.5Y6/1)泥炭質粘土。層厚は2~10cmである。全域に分布する。自然堆積層である。

14層：黒色(10YR2/1)泥炭質粘土。層厚などは不明である。



宝带河区基本剖面

| 層序 | 土 壤 色 | 10YR 4/1 | 土 壤 质 | 解 釋 | 鑑 入 物 | 鑑 考 |
|------------|-----------|----------|---------|----------|-------|-------|
| 1 潮 湿 地 | 7.5YR 4/1 | 沙 小 粒 | 4~10cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 2 底 潮 地 | 7.5YR 5/1 | 粘 土 | 5~30cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 3 潮 湿 地 | 10YR 5/1 | 粘 土 | 4~10cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 4 潮 湿 地 | 10YR 5/2 | 沙 小 粒 | 4~10cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 5 潮 湿 地 | 10YR 5/1 | 粘 土 | 5~25cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 6 a 潮 湿 地 | 10YR 5/2 | 粘 土 | 5~25cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 6 b 潮 湿 地 | 10YR 6/2 | 粘 土 | 10~20cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 6 c 潮 湿 地 | 10YR 5/2 | 粘 土 | 2~10cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 7 潮 湿 地 | 2.5YR 5/2 | 砾质粘土 | 6~10cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 8 潮 湿 地 | 7.5YR 3/2 | 砾质粘土 | 4~10cm | 河床冲积带冲积物 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 9 潮 湿 地 | 5 YR 6/2 | 粘 土 | 1~4cm | 砾质粘土 | 自然带土壤 | 自然带土壤 |
| 10 潮 湿 地 | 5 YR 6/1 | 砾质粘土 | 10~20cm | 砾质粘土 | 自然带土壤 | 自然带土壤 |
| 11 潮 湿 地 | 10YR 2/1 | 砾质粘土 | 4~10cm | 砾质粘土 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 12 a 潮 湿 地 | 10YR 5/2 | 砾质粘土 | 4~10cm | 砾质粘土 | 未出耕作土 | 未出耕作土 |
| 12 b 黑 黑 地 | 10YR 4/1 | 砾质粘土 | 2~10cm | 砾质粘土 | 自然带土壤 | 自然带土壤 |
| 13 黑 黑 地 | 2.5YR 6/1 | 砾质粘土 | 2~10cm | 砾质粘土 | 自然带土壤 | 自然带土壤 |
| 14 黑 黑 地 | 10YR 2/1 | 不 明 | | | | |

第121圖 宝带河区土壤断面图

(4) 12層検出構造と遺物

12層水田跡（第122図、写真77～81）

大畦畔3条とそれらが形成する大区画(A～C)、小畦畔11条とそれらが形成する小区画11区画(a～k)を検出している。

【地形面】 北西から南東へ傾斜しており、その度合は10cm / 10mほどである。標高は8.25～8.55mである。

【水田域】 調査区はすべて水田域である。畦畔が調査区外へ延びることや隣接調査区でも対応する層で水田跡が検出されていることから水田域は調査区外へさらに広がっている。

【耕作土】 基本層12a層で、泥炭質粘土の12b層が攪拌された層である。層中に12b層をブロック状に含んでいる。層厚は平均して10cm前後である。耕作深度が深い場合には攪拌は13層まで達しているが、大畦畔の下部には12b層が良好に残存し、擬似畦畔が形成されている。12a層の上下面とも凹凸が認められる。

【直下の層】 基本的に12b層であるが一部耕作深度が深い場合には13層にも及んでいる場合がある。ともに自然堆積層で上面に酸化鉄の集積層は認められない。

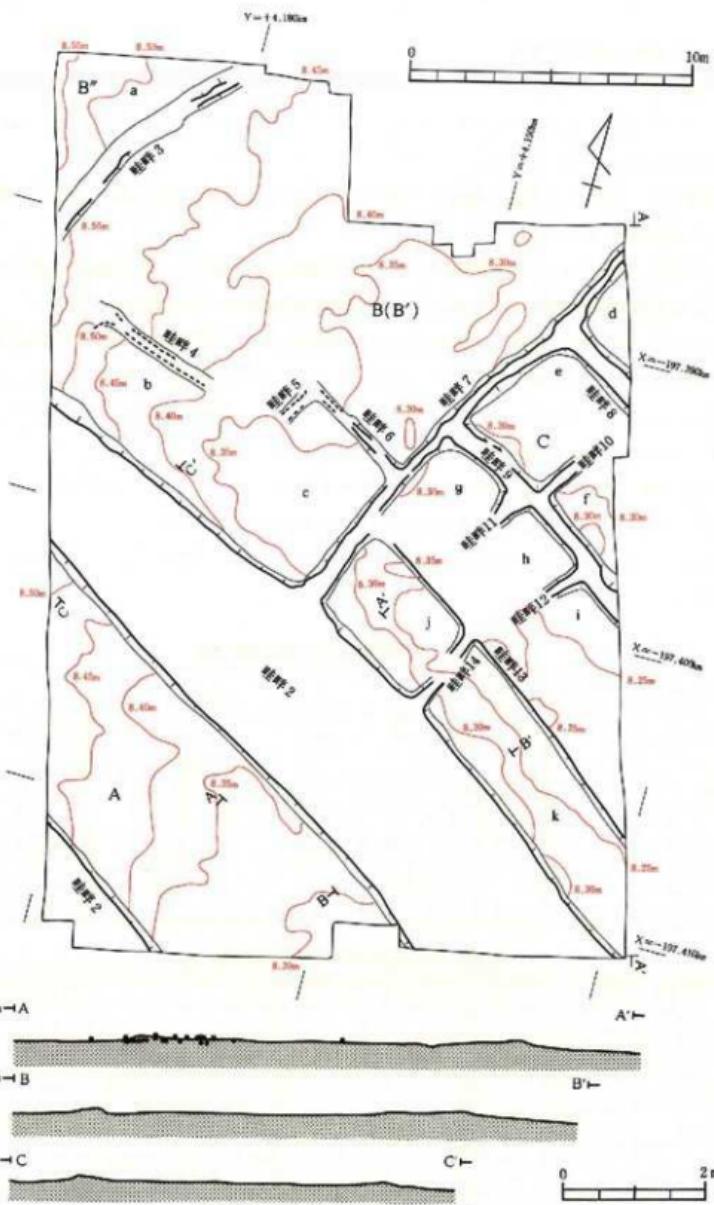
【畦畔】 大区画を形成する大畦畔と小区画を形成する小畦畔とが存在する。計測値は第34表に示した。

第34表 変電所区12層水田跡畦畔計測表

| 序番 No. | 標高(m) | 方位 | 万丈性 | 万丈 N-W | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比較(cm) | | |
|--------|-------|-----|-----|---------|---------|---------|-------------|----------|-----|
| | | | | | | | 北 | 南 | 東西 |
| 1 | 6.25 | | | N-55°-W | - | 2.5以上 | 北 | 3.4 | ? |
| 2 | 28.5 | 直 | | N-60°-W | 380-540 | 445-590 | # | 4.8-14.1 | 南北 |
| 3 | 8.5 | やや曲 | | N-36°-E | 20-30 | 70-90 | 西 | 0.5-1.7 | 東西 |
| 4 | 4.9 | 直 | | N-70°-W | - | 50-75 | 北 | 0.5-2 | 南北 |
| 5 | 1.25 | 直 | | N-30°-E | - | 30-60 | 西 | 1.2-1.8 | 東西 |
| 6 | 4.7 | 直 | | N-60°-W | 15-25 | 40-70 | 北 | 0.3-2.1 | 南北 |
| 7 | 16.7 | 直 | | N-30°-E | 20-35 | 55-110 | 西 | 0.2-1.9 | 東西 |
| 8 | 3.2 | 直 | | N-60°-W | 60-70 | 90-120 | 北 | 1.1-6 | 南北 |
| 9 | 9.2 | 直 | | N-55°-W | 45-75 | 80-120 | # | 0-4.2 | ? |
| 10 | 1.85 | 直 | | N-35°-E | 30-40 | 60 | 西 | 0-0.6 | 南北 |
| 11 | 1.2 | 直 | | N-30°-E | 40-90 | 70-110 | # | 0-3.2 | ? |
| 12 | 1.4 | 直 | | N-40°-E | 30-45 | 50-75 | # | 3.8-6.3 | ? |
| 13 | 13.6 | 直 | | N-55°-W | - | - | 南 | 0 | 2.5 |
| 14 | 3.2 | 直 | | N-20°-E | 30-80 | 50-70 | 西 | 1.5-3.2 | 東西 |

第35表 変電所区12層水田跡水田区画計測表

| 水田区画 | 標高 | 高(m) | | | 東西 | 南北 | 面積(m ²) |
|------|-------|-------|-------|-----|----|----|---------------------|
| | | 低 | 高 | 辺 | | | |
| a | 8.381 | 8.472 | - | - | | | |
| b | 8.53 | 8.381 | - | - | | | |
| c | 8.400 | 8.300 | (5.6) | 3.9 | | | (21.84) |
| d | 8.399 | 8.271 | - | - | | | |
| e | 8.360 | 8.293 | 4 | 3.3 | | | (13.2) |
| f | 8.323 | 8.290 | - | - | | | |
| g | 8.319 | 8.225 | (3.6) | 2.8 | | | (10.08) |
| h | 8.289 | 8.241 | (3.6) | 2.6 | | | (9.96) |
| i | 8.276 | 8.199 | - | - | | | |
| j | 8.368 | 8.213 | 4.5 | 3 | | | 13.5 |
| k | 8.369 | 8.196 | - | 2.7 | | | 9.5-1.5 |



第122図 12層水田跡平面図・断面図

大畦畔となるのは畦畔1・2・7である。畦畔1・2はほぼ同じ方向でN-約60°-W、畦畔7はそれらに直交する方向N-30°-Eである。これらは長町南駅地区で確認された方向と同じであり、とくに畦畔2は長町南駅地区の畦畔3の延長上に位置する。この畦畔2は規模が大きく、下端幅約4.5~6mを測る。畦畔7は下端幅が55~110cmと大畦畔としてはやや規模が小さいが検出長が16.7mと長いことや畦畔2に直交して取り付き大区画を形成することなどから大畦畔と捉えた。

小畦畔となるのは畦畔3~6・8~14である。これらの小畦畔も二つの方向が存在する。その方向はN-55°~70°-Wとそれに直交するN-20°~40°-Eとで大畦畔の方向とほぼ同様である。小畦畔の下端幅は40~120cmほどである。そのうち畦畔8・9は下端幅が約80~120cmと若干大きくなっている。畦畔9は検出長が9.2mと比較的長く、畦畔10・11・12がこの畦畔から伸びていることなどから大区画の中をさらに区画する畦畔とも考えられる。

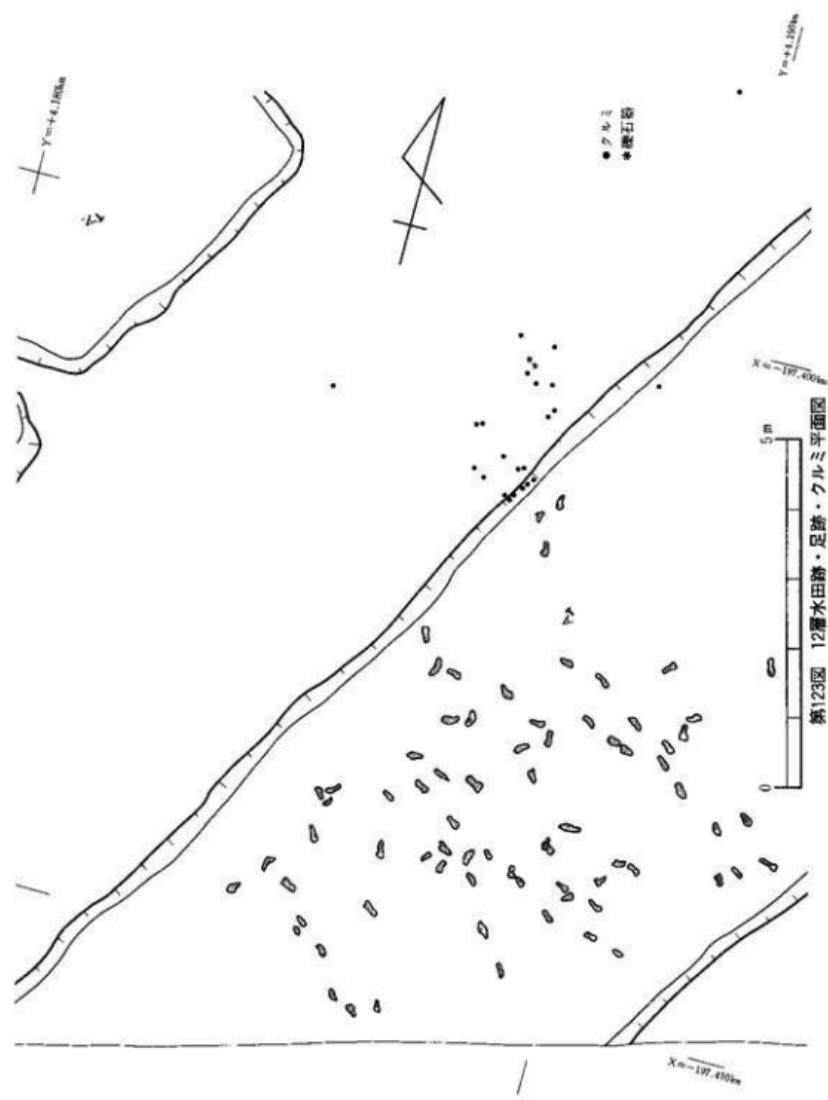
〔水田の区画〕 大畦畔により形成される大区画が3区画(A~C)存在する。1区画の全貌が判明するものはない。計測可能なのは区画Aの短辺のみで、6.2~6.9mである。

大区画Cの中には小畦畔により形成される小区画が8区画(d~k)存在する。形状は長方形を基調としている。長辺短辺の計測が可能な区画はe・jである。eの規模は長辺が3.6m、短辺が2.8m、面積が約10.1m²である。jの規模は長辺が4.5m、短辺が3m、面積が13.5m²である。g・hは短辺のみ計測可能で面積の推定値は10m²前後である。小区画の基本的面積が10~13m²とすると、長辺が6~10m以上となるk・iはさらに分割されていた可能性を考えられる。

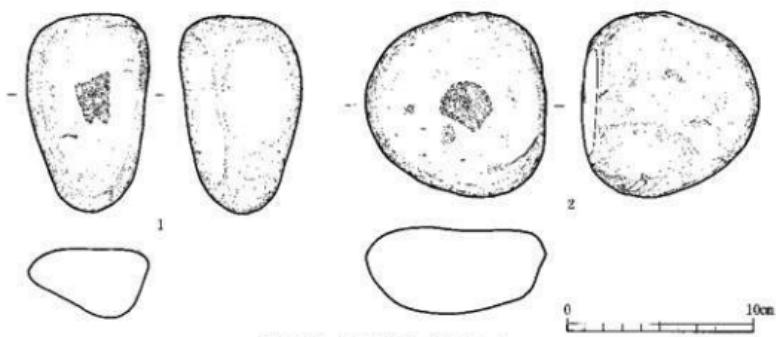
大区画Bの中も小区画によりいくつかに区画されている。畦畔3は畦畔7から約14m離れてほぼ並行に走り、大区画Bをさらに中区画B'・B''とに分割している可能性が高い。中区画B'の規模は東西約14m、南北17m以上となる。区画B'の中に小区画b・cが存在する。cの形状は長方形で規模は長辺5.6m、短辺4mで推定面積22.4m²となる。bは短辺が約3mと判るだけである。

〔水田面の傾斜〕 大区画C内の小区画の水田について若干触れておく。1区画の高低差については二つのグループに分けられる。①10cm以内におさまるもの(d~i)②10cm以上のもの(j~k)である。①のグループ内ではeが最も高くiが低くなり、特にk→h→iと順に低くなっている。k~iよりd・e・fが若干高い傾向にあること、畦畔8・9が中区画を形成する畦畔の可能性があることから、①のグループ内は(d)(e・f)(g・h・i)の3グループに再構成されると考えられる。さらにj・kはそれぞれの中の高低差が大きいこと、g・h・iに向かって傾斜することからg~iのグループと捉えられよう。

〔出土遺物〕 畦畔2の中央部南寄りの1.2×2.4mの範囲から礫石器2点、クルミ22点が出土し



第123図 12番水田跡・足跡・クルミ平面図



第124図 変電所区出土遺物(1)

ている。

疊石器(第124図1・2)：1は片側中央部に敲打による浅い凹み痕のあるもので、2は片側中央部に敲打による浅い凹み痕、片側側面に磨面のあるものである。

(5) 11層検出遺構

11層水田跡(第125図、写真82・83)

大畦畔3条とそれらが形成する大区画4区画(A～D)を検出している。

〔地形面〕 北西から南東へ傾斜しており、その度合は9cm/10mほどである。標高は8.6～8.3mほどである。

〔水田域〕 耕作土である11層が調査区全域に広がることから調査区はすべて水田域である。また、西側の第28次調査でも11層に対応する層(10d層)で水田域が確認されていることから、水田域は調査区外へさらに広がっている。

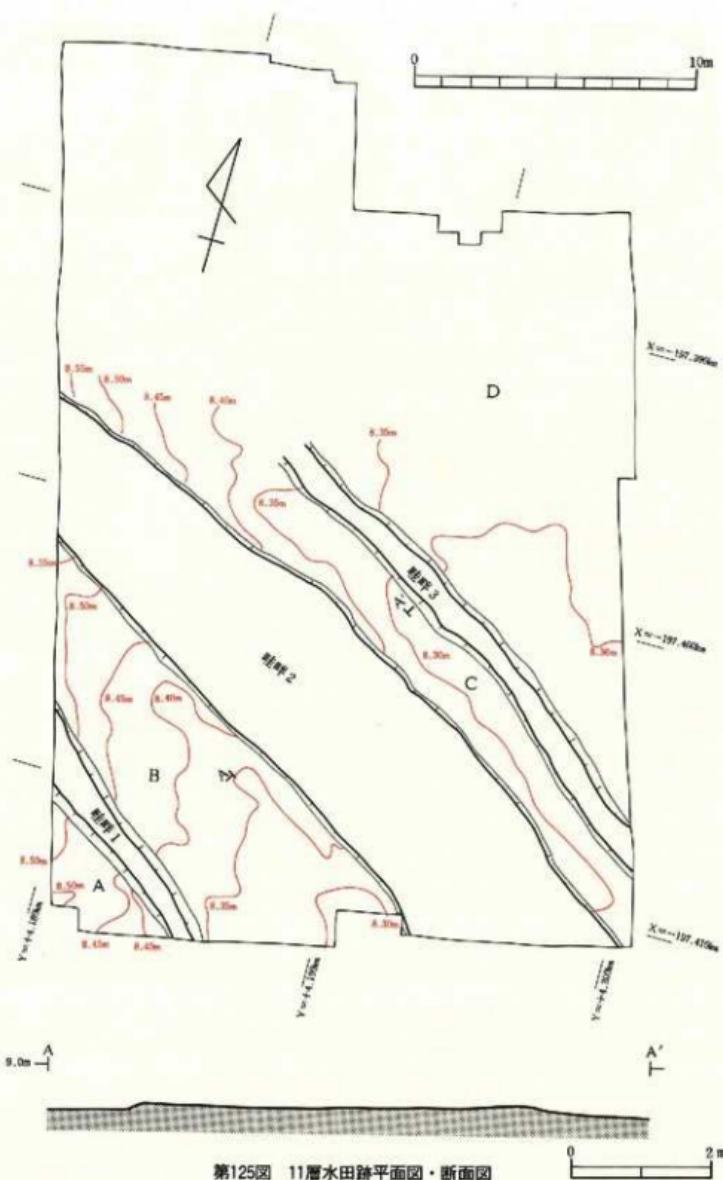
〔耕作土〕 耕作土は11層で、灰黄褐色の泥炭質粘土層である。層厚は4～16cmである。下面是凹凸が顕著である。母材となる層はこの調査区では確認されていないが28次調査では10e層であることが確認されている。また下層の12a層も搅拌していることから12a層も母材の一部と考えられる。

〔直下の層〕 基本層12層である。上面下面とともに耕作による搅拌で凹凸が顕著である。耕作土直下の層としての鉄分の集積層は認められない。

〔畦畔〕 同方向の畦畔が3条検出されている。方向はN-50°～60°-Wである。なかでも畦畔

第36表 変電所区11層水田跡畦畔計測表

| 基層 | 検出長(m) | 方 向 | 方 向 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比較(cm) | | | | |
|----|--------|-----|---------|---------|----------|-------------|----------|-----|-----|---------|
| | | | | | | 北 側 | 0.5 | 0.2 | 南 側 | 3-8.3 |
| 1 | 9.5 | 東 | N 50°-W | 60-130 | 11.5-190 | 北 側 | 0.5 | 0.2 | 南 側 | 3-8.3 |
| 2 | 2.8 | 東 | N-NW-W | 420-560 | 47.5-590 | 北 側 | 4.8-10.7 | 0.5 | 8.3 | |
| 3 | 18.6 | 東 | N 55°-W | 80-100 | 110-145 | 北 側 | 0 | 4.8 | 南 側 | 0.2-8.6 |



第125図 11層水田跡平面図・断面図

2の規模は大きく、下端幅410～560cmあり、検出長も28mと長い。この畦畔は下層の12a層の水田跡の畦畔13を踏襲して形成されたものである。他の2条の畦畔の規模はほぼ同様で下端幅は115～190cmである。水田面との比高差は3～8.5cmである。

[水田の区画] 大区画としてA～Dの4区画が存在しているが、区画全体が判明しているものはない。計測が可能なのは区画B・Cの短辺で、Bが3.8～6m、Cが約2mである。区画Cは非常に細長いものになる。

[水田面の傾斜] おおむね南東が低くなる傾斜である。区画Bは8.5～8.3mの標高で傾斜度が10cm／10mである。

[出土遺物] 出土遺物はない。

(6) 7層検出遺構と遺物

7層水田跡（第126図、写真84・85）

畦畔などは検出されなかったが7層は水田跡と考えられた。その根拠は、7層が長町南駅区での5層に対応しその層が水田跡であること、7層中から石庖丁が出土していること、7層が水田土壤の特徴を示していることなどである。

[地形面] 7層上面は南へ緩く傾斜しており、その傾斜度は5cm／10mである。標高は8.6～8.96mである。

[水田域] 耕作土である7層の分布が調査区内はもとより調査区外へも分布することから水田域はさらに広がっている。

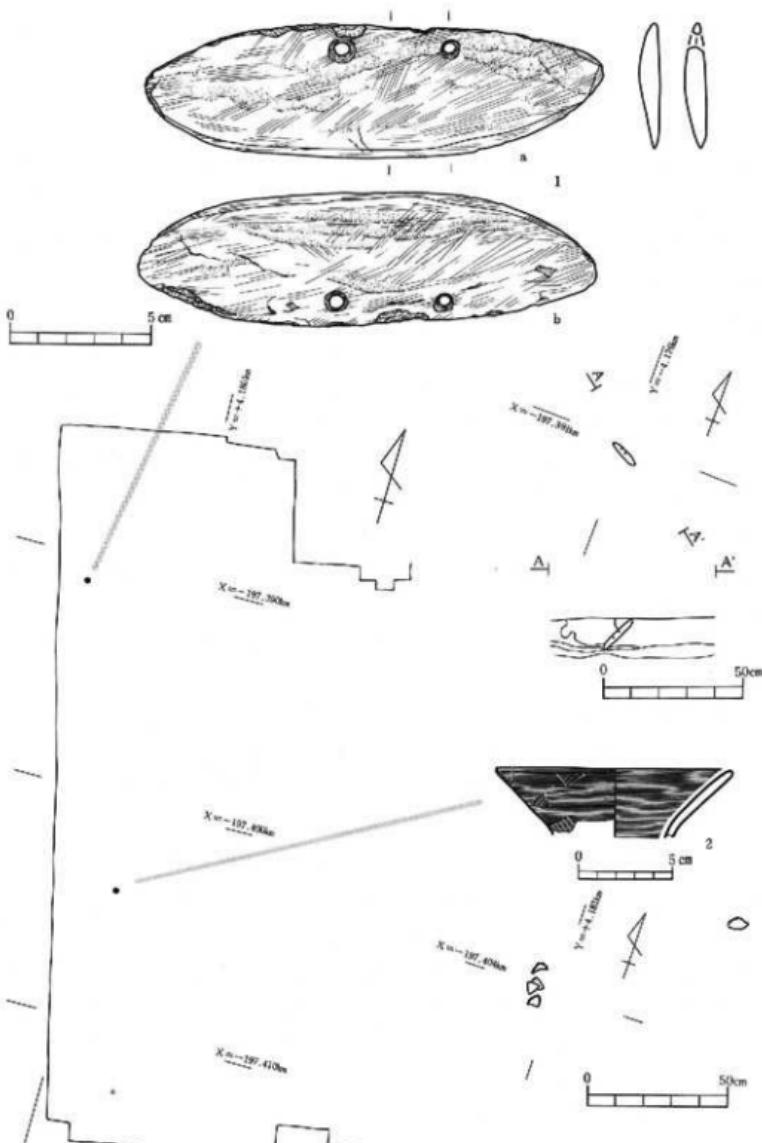
[耕作土] 耕作土は基本層7層で、暗灰黄色の泥炭質粘土層である。層厚は6～14cm、下面の凹凸が顕著で分解の進んだ層である。母材となる層は8層である。

[直下の層] 基本層8層で、黒褐色泥炭質粘土と灰オリーブ色粘土の互層である。上面はかなり攪拌を受けている。8層上面、層中に鉄分の集積層はない。

[出土遺物] 調査区西壁寄りから弥生土器1点、石庖丁1点が出土している。

石庖丁（第126図1、写真121）：完形品である。刃部は大きく外弯し、背部は緩く外弯し全体としては紡錘形に近い。成形時の剝離面が背部に研磨以前の面が表裏面の凹みに認められる。1a側はほぼ平坦であるが、1b側は丸みをもった面になる。刃部は両刃であるが、やや1a側が大きく作り出されておりやや片刃状になっている。紐孔は片側に寄っており、両面から回転穿孔されている。長さ16.29cm、幅4.72cm、厚さ0.7cm、紐孔間隔3.8cm、孔径0.4～0.5cmである。石材は粘板岩である。

弥生土器（第126図2、写真121）：壺の口縁部である。頸部以下は欠損していて全体の形状は不明である。やや外反気味に外傾する口縁部で内外面ともヨコナデが観察される。



第126図 变電所区出土遺物(2)

(7) 6層検出遺構と遺物

6a 層上面で杭列をともなう不整形の落ち込み状遺構（S X 1）を検出した。

S X 1 (第127~129図、写真86・87)

南北長約17m、東西長約7mの規模で検出されている。平面形は中央がくびれる不整形である。そのくびれ部を境に北半部と南半部に二分される。北半部の平面形は不整楕円形で、規模は約5×9m、深さ45cmである。底面の平面形は半月形で、規模は約5.6×2.7mである。底面はほぼ平坦であるが、北半部が若干低く、南端が緩く立ち上がりながらくびれ部に接続している。北端部に溝2条があり合流してS X 1に接続する。その接続部付近で杭列5列（7~11）が検出されている。北西部では杭列3列（1~3）が検出されている。くびれ部は溝状を呈し、規模は長さ約2.8m、幅0.7~1m、深さ25cmほどである。底面は南へ下がる傾斜で、北半部との比高差約23cm、南半部との比高差約16cmである。くびれ部の南半部で杭列2列（4・5）が検出されている。南半部の平面形は不整楕円形で、規模は3×5m、深さ20~30cmである。底面は細長い不整形で規模は0.8×2.8mである。

堆積土は1層で基本層4層である。

【出土遺物】 堆積土中から須恵器5点、土師器2点が出土している。土師器はロクロ使用の壺2点（口縁部1点、体部1点）とともに内面ヘラミガキの後黒色処理を行っている。図示できたのは須恵器2点である。

須恵器（第130図1・2）：1は壺の口縁部で、内外面ともにロクロ調整である。2は壺の下半部で外面調整は平行叩き目、ヘラケズリ、ロクロナデ、内面は刷毛目後ロクロナデである。須恵器は他に壺の口縁部が2点、壺の底部（回転糸切り無調整）が1点出土している。

【杭列1】（第131図、写真90） 北半部北西端のプラン外約80cmに位置する。配列は直線的で方向はN-8°-Wである。杭列の長さは146cmで、5本の杭で（杭1~5）構成されている。各杭は打ち込み杭であり、その間隔は20~50cmで規則性はみられない。すべて丸太材を素材とし、先端の加工もすべてに認められている。杭の長さは55~76cm、径は2.4~5.2cmである。樹種は、杭1・3・4・5がクリ、杭2がコナラ節の一種である。

【杭列2】（第131図、写真90） 杭列1の東約2.2mのS X 1内に位置する。配列はほぼ直線的で方向はN-7°-Wで杭列1とほぼ同方向である。杭列の長さは294cmで、9本の杭（杭6~14）で構成されている。各杭は打ち込み杭でその間隔は24~40cmで杭12だけが120cm離れている。杭6~11の頭部は底面から10~25cm浮いた状態である。杭列に沿うように樹木片が数点検出されているが、シガラミの痕跡かどうかは不明である。杭はすべて丸太材を素材とし、先端の加工もすべてに認められている。杭の長さは10.8~79cmであるが、杭6~11は64~79cmと比較的揃った長さになっている。径は2.5~6.5cmである。樹種は杭9・10・12・13がコナラ

節、杭7・11がブナ属の一種、杭14がクヌギ節、杭8がクリ、杭6がヤマボウシである。

〔杭列3〕(第131図、写真90) 杭列2の東方1.4m、底面近くに位置する。配列はほぼ直線的で方向はN-3°-Wで杭列1・2と同方向である。杭列の長さは225cmで、6本の杭(杭15~20)で構成されている。各杭は打ち込み杭でその間隔は35~53cmである。杭15~19の頭部は底面から24~40cm浮いた状態である。杭15・16・17では細い樹木片がシガラミ状に検出されている。杭はすべて丸太材を素材とし、先端もすべてが加工されている。杭の長さは69.9~95.8cm、径は4.0~5.1cmと大きさは比較的まとまっている。樹種は杭15・16・17・19がコナラ節の一種、杭18・20がクリである。

〔杭列4〕(第132図、写真90) SX1のくびれ部の南半に位置する。杭列の長さは384cmで12本の杭(杭21~32)が打ち込まれている。杭列はほぼ直線的に伸びており、方向はN-75°-Eである。杭の間隔は14~65cmで規則性はない。杭列の頭部はほぼ6層上面である。杭はすべて丸太材で、杭31以外はすべて先端に加工痕が認められる。杭の残存長は8.5~65.5cmであるが、杭21・22・31以外は38.2~65.5cmと比較的長くなっている。径は1.1~4.8cmである。樹種は杭24・27・30がエコノギ属の一種、杭21・23・26がクマシデ属の一種、29・32がブナ属の一種、28がサクラ属類似種、31がウツギ属の一種である。

〔杭列5〕(第132図) 杭列4の南約50cmに位置する。杭列の長さは249cmで、6本の杭(杭33~38)が打ち込まれている。杭列はほぼ直線的に伸びており、方向はN-79°-Eである。杭の間隔は12~128cmで規則性はない。杭はすべて丸太材で、杭36以外の杭はすべて先端に加工痕が認められる。杭の残存長は7.3~92.4cmで杭37・38だけが58.6~92.4cmと長い杭になっている。径は1.4~4.4cmである。樹種は33・35・36がヤナギ属の一種、37・38がクリ、34がウツギ属の一種である。

〔杭列7〕(第133図) 杭列2の北約1.2mに位置する。杭列の長さは88cmで、4本の杭(杭43~54)が打ち込まれている。杭列はほぼ直線的に伸びており、方向はN-18°-Eである。杭の間隔は8~58cmで規則性はない。杭40が分割材、他は丸太材である。杭39以外は先端に加工痕が認められる。杭の長さは9.3~41.6cmで径は1.8~2.6cmである。樹種は39・40がイイギリ、41がヤナギ属の一種、42がカエデ属の一種である。

〔杭列8〕(第132図) SX1北端部の溝部分に位置する。杭列の長さは352cmで、12本の杭(杭43~52)が打ち込まれている。杭列はほぼ直線的に伸び、方向はN-81°-Wである。杭の間隔は14~83cmで規則性はない。杭の素材は杭44・47・50が分割材で、他は丸太材である。先端の加工は杭46・48・53に認められるだけである。杭の長さは10.4~68cmで、杭44・45・46が比較的長めになっている。分割材の幅は3.0~5.9cm、丸太材の径は2.1~3.4cmである。樹種は杭48・51・52・54がウツギ属の一種、44・46・63がクリ、47・50がモミ属の一種、45がヤマグワ、

49がクヌギ節の一類である。

[杭列9] (第133図) 杭列8のすぐ南に位置し、北端の杭が杭列8に接している。杭列の長さは72cmで4本の杭(杭55~58)が打ち込まれている。杭列は直線的に伸び、方向はN-10°-Eである。杭の間隔は12~34cmで、規則性はない。杭58が分割材で、他は丸太材である。杭58以外の先端に加工が認められる。杭の長さは13.3~51.8cmで、杭55・56・57が比較的長い。丸太材の径は1.9~2.9cmで、分割材の幅は3cmである。樹種は杭55がサカキ、杭56がヤナギ属の一類、杭57がブナ属、杭58がコナラ属の一類である。

[杭列10] (第133図) 杭列8の約1.2m南、溝とS X Iとが接続する部分に位置する。杭列の長さは241mで7本の杭(59~65)が打ち込まれている。杭列はほぼ直線的に伸び、方向はN-82°-Wである。杭列の間隔は37~77cmで、規則性はない。杭63が分割材で、他はすべて丸太材である。杭60・61以外の杭の先端に加工が認められている。杭の長さは7.3~56cmで杭62・64・65が比較的長い。杭63以外の杭の径は1.2~4.2cmである。杭63は建築転用材と考えられ、長さ27.6cm、幅3.3cmである。樹種は59・61・62がウツギ属の一類、64・65がクヌギ節、60がバラである。

[杭列11] (第133図) 杭列10の10cm北側に位置する。杭列の長さは41cmで2本の杭が打ち込まれている。杭列の方向はN-70°-Eである。杭の間隔は35cmである。素材はともに丸太材で、杭66の先端に加工が認められる。杭66は長さ32.7cm、径7.6cmのクヌギ節の一類で、杭67は長さ38cm、径6.1cmのヤナギ属の一類である。

[杭列6] (第132図) S X I南端部から南へ約7.5mの地点で杭列6が検出されている。杭列の長さは159cmで6本の杭が打ち込まれている。杭は直線的に伸び、方向はN-77°-Wである。杭の間隔は22~40cmで、規則性はない。杭はすべて丸太材で先端の加工は杭71・72・73に認められる。杭の長さは8.2~22.2cmである。径は0.9~2.3cmである。樹種はコナラ属の一類が杭71・73、クリが70、ウツギ属の一類が68である。

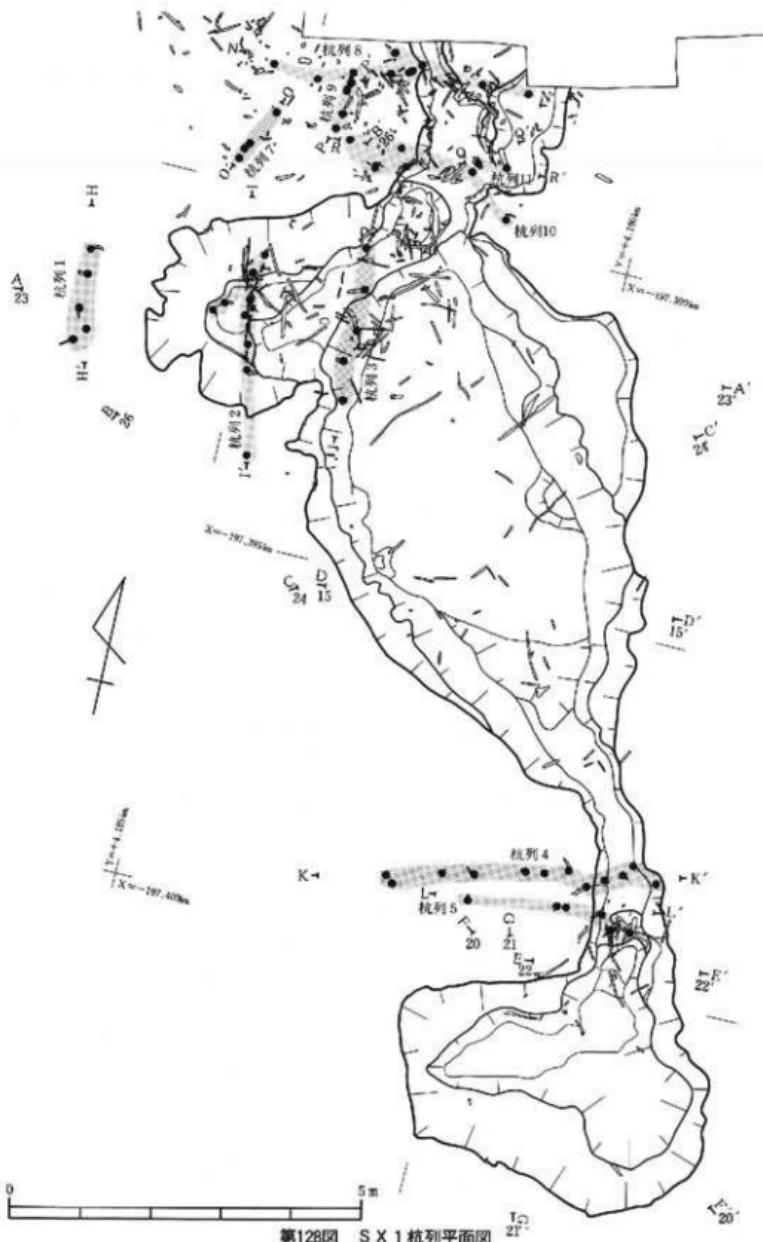
6層出土遺物

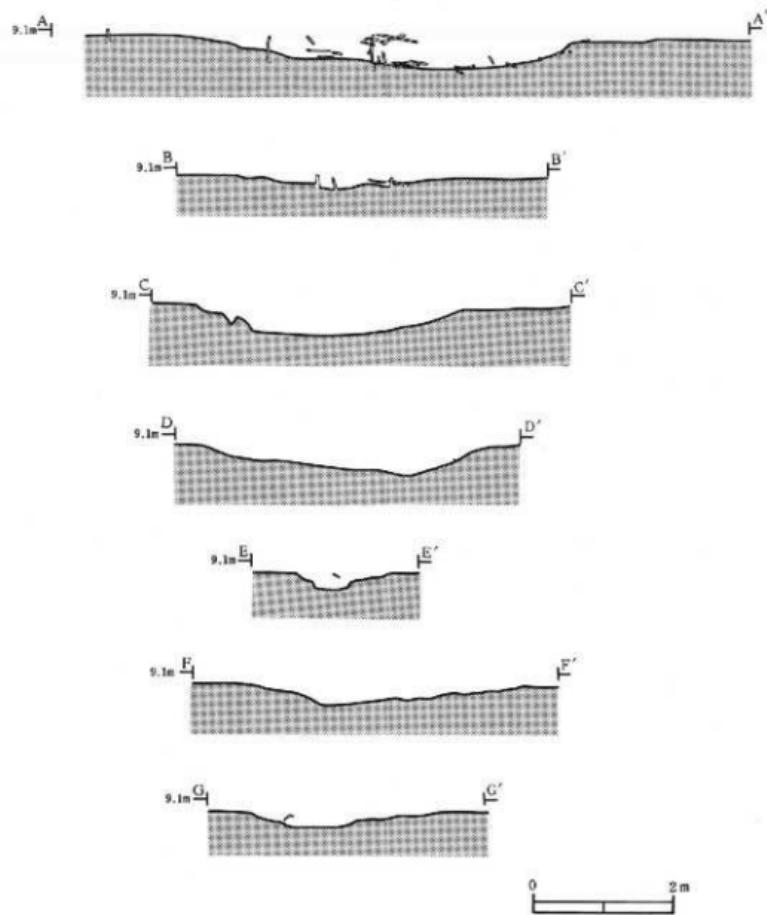
基本層6層から土師器3点、種別不明の素焼土器1点、木製品1点が出土している。土器類は細片で図示できず、木製品を図示した。

木製品(第130図、写真122)：S X I北端部付近の6層上面から出土している。両端部が欠損している。中央部と両端に孔が5箇所あり、上端と中央のものが鼻緒孔、下端のものが枠取り付けの孔と考えられることから大足の足板と判断した。残存長は29.8cm、幅7.5cm、厚さ1.7cmで木取りは板目、樹種はモミ属の一類である。

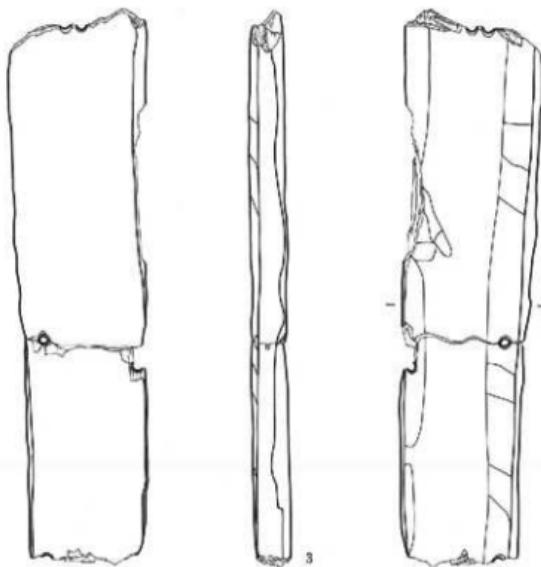
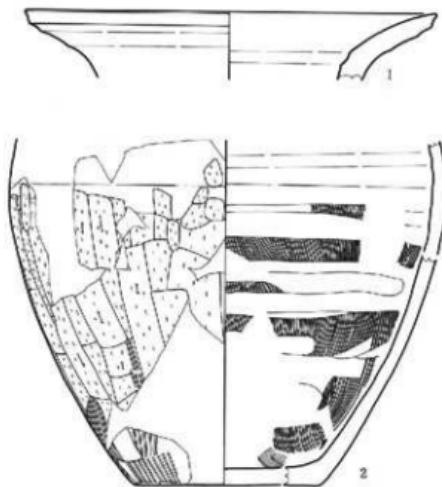


第127図 6層造構平面図

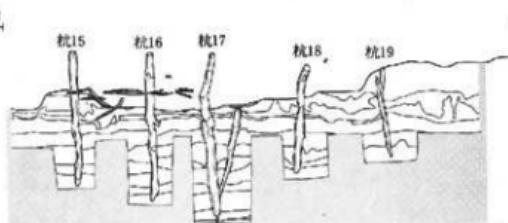
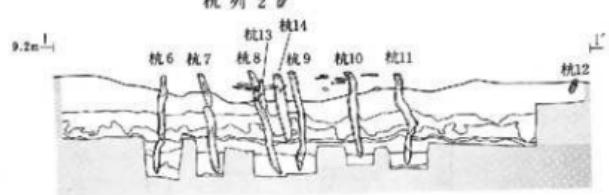
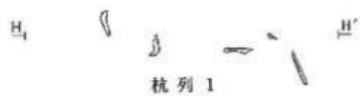




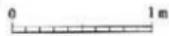
第129図 S X 1 断面図

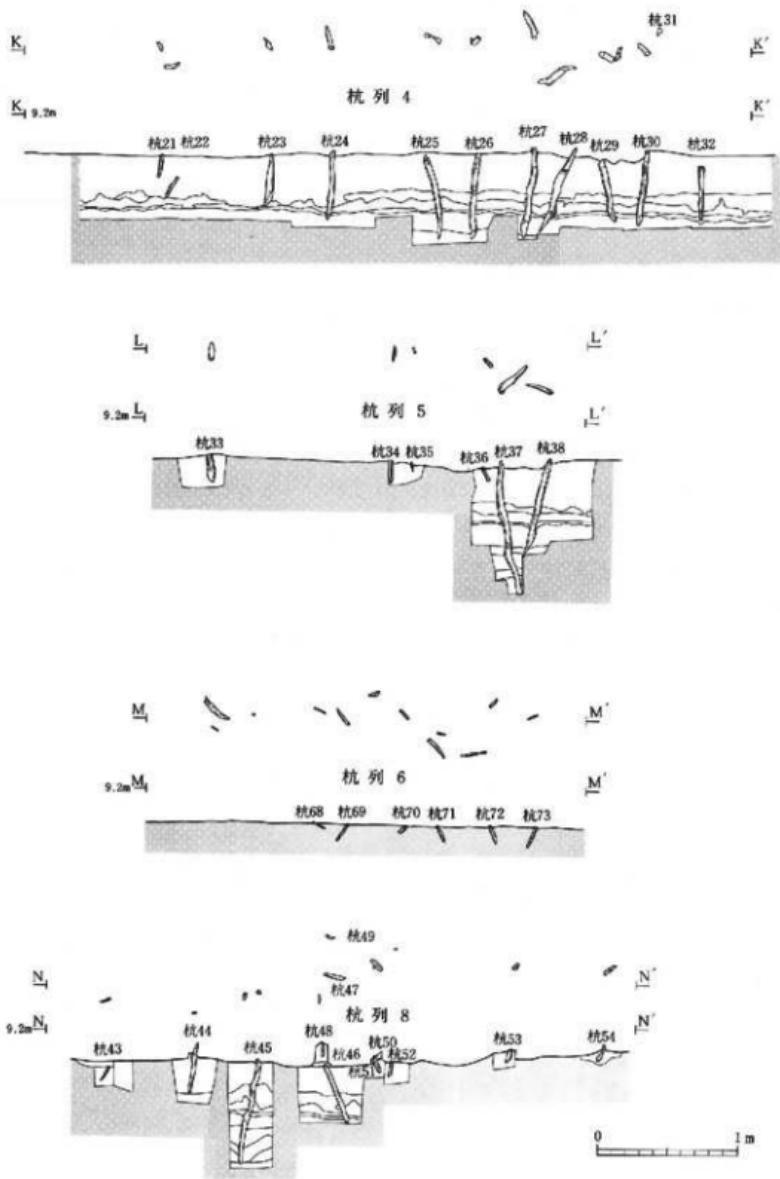


第130図 変電所区出土遺物（3）



第131図 SX1杭列1～3平面図・断面図





第132图 S X 1 杭列4~6·8平面图·断面图

(8) 5層検出遺構

溝状遺構（第134図、写真91）

3層中から灰白色火山灰の点在（スクリントン部分）が認められていたが、検討の結果5層上面に相当する面での灰白色火山灰を堆積土とする溝状遺構であることが判明した。検出長は約23mで幅20~50cm、深さは5cm前後である。方向は南半がほぼ真北方向で北半がやや西へ振れN-11°-Wである。堆積土は単層で出土遺物はない。

(9) 4層検出遺構と遺物

4層水田跡（第134図、写真91）

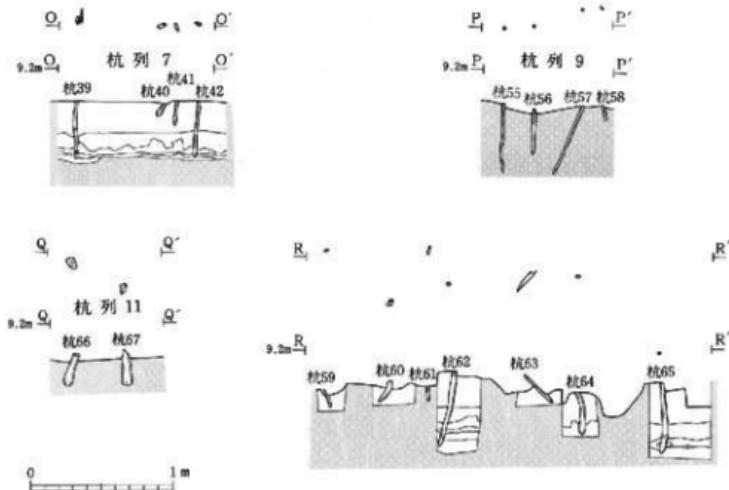
大畦畔1条、小畦畔2条とそれらが形成する区画5区画（A・B、a～c）を検出している。

【地形面】 4層上面はほぼ平坦で標高は9.1~9.2mである。

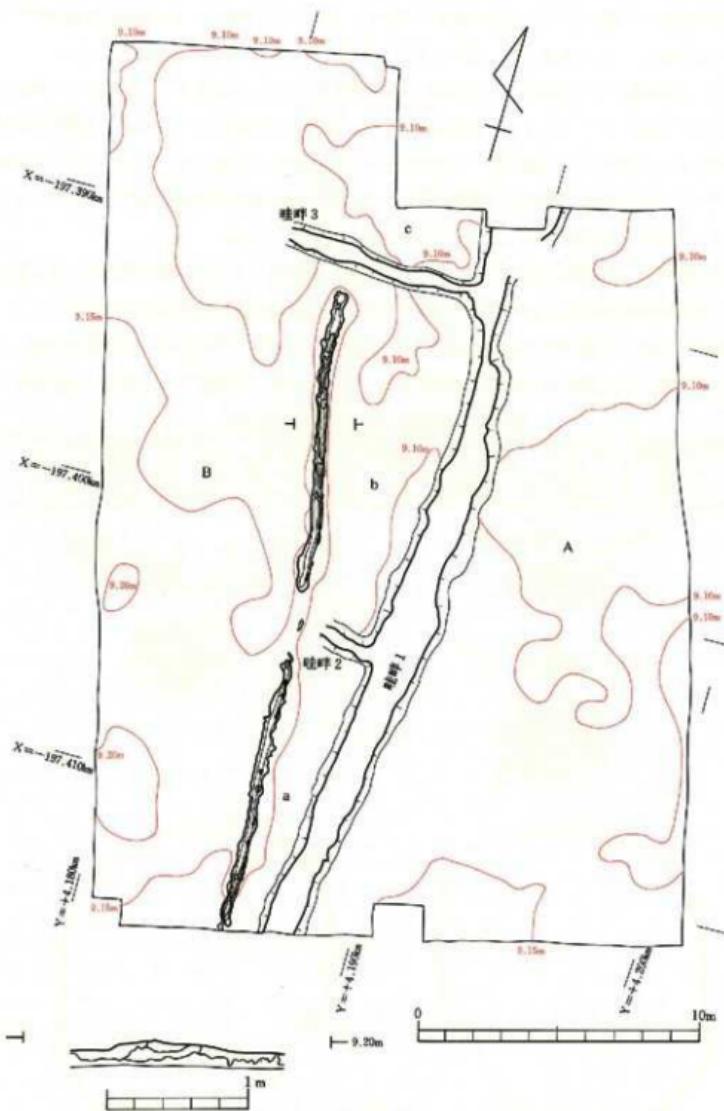
【水田域】 耕作土である4層は調査区の東半部にのみ分布する。しかし、小畦畔が西方へ延びることから本来は4層全域に分布していたが、3層の水田跡により搅拌され消失したと理解される。従って水田域は調査区全域および区外へも広がっていたと考えられる。

【耕作土】 基本層4層で灰黄褐色シルト質粘土である。上面下面ともに耕作による搅拌で凹凸が顕著である。層厚は4~20cmである。部分的に灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。母材となる層は不明である。

【直下の層】 基本層5層および6a層である。5層は黒褐色粘土で、6a層は黒褐色と灰黄褐色



第133図 S X 1 桿列7・9~11平面図・断面図



第134図 4層水田跡平面図

の互層である。5層の下面も凹凸が顯著で耕作上である可能性が高い。6a層は自然堆積層である。4層の直下、5・6a層上面、層中に鉄分の集積やマンガン斑などは認められない。

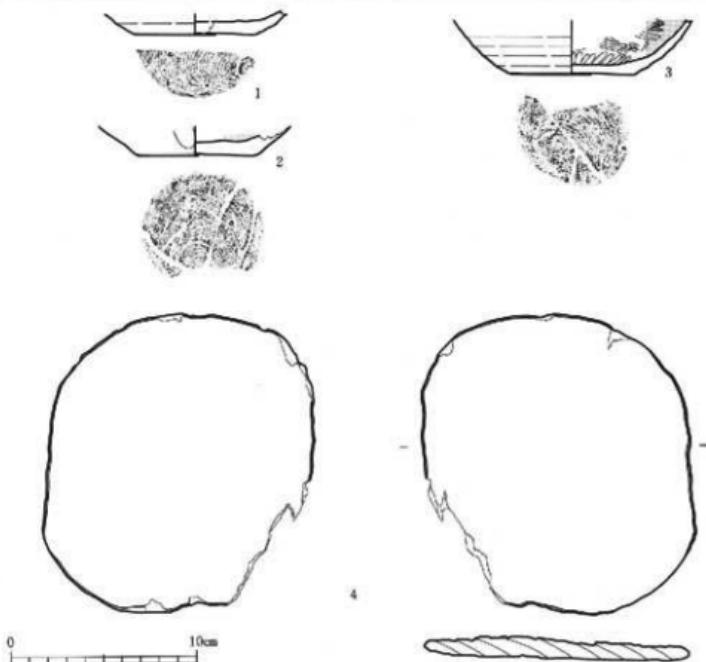
[畦畔] 大畦畔1条（畦畔1）と小畦畔2条（畦畔2・3）とが存在する。畦畔1の方向はほぼ南北方向でN-3°-Eである。検出長が約28m、規模は下端幅が95~224cm、水田面との比高差が6cmほどである。畦畔2・3は畦畔1の西側に直交して取り付いており、その方向はN-77°-87°-Wである。規模は下端幅が約60~100cmで水田面との比高差は約3cmである。畦畔2・3はともに畦畔1から2.1m、7.1mの所で消滅している。

[水田の区画] 大区画が2区画（A・B）、小区画が3区画（a～c）検出されている。しかし、1区画の全体が判るものはない。規模が計測可能なものは区画bの東辺のみである。

[4層出土遺物] 4層中から出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器、木製品である。いずれも細片が多く、図化できたのは土師器2点、須恵器1点、木製品1点である。土師器は口

第37表 変電所区4層水田跡畦畔計測表

| 地 帯 No | 検出長(m) | 方 向 性 | 方 向 角 | 上 端 幅(cm) | 下 端 幅(cm) | 水田面との比高差(cm) | | | | | |
|--------|--------|-------|---------|-----------|-----------|--------------|-------|---------|-------|---|-------|
| | | | | | | 西 | 無 | 東 | 無 | | |
| 1 | 27.6 | 直 | N-3°-E | 25-189 | 95-224 | 西 | 無 | 0-6.5 | 東 | 側 | 0-6 |
| 2 | 2.2 | 直 | N-77°-W | 36-59 | 88-106 | 北 | 無 | 3.1-4.5 | 南 | 側 | 3-3.8 |
| 3 | 7.1 | 直 | N-87°-W | 24-79 | 62-104 | ± | 0.5-2 | ± | 0.5-2 | | |



第135図 変電所区出土遺物（4）

クロ使用の壺が13点、甕の体部片が4点、調査不明の細片が6点の計23点である。須恵器は壺が6点（口縁部1、体部2、底部2）、甕が4点（口縁部1、体部3）の計10点である。赤焼土器は壺の体部片2点である。

土師器（第135図2・3、写真141）：2・3は壺の底部で切り離しは回転糸切無調整、内面はヘラミガキ後黒色処理が施されている。他の壺の破片も内面の調整は同様である。これらは平安時代の表衫ノ入式に比定されるものである。

須恵器（第135図1、写真141）：1は壺の底部で切り離しは回転糸切無調整である。他の底部も同様の調整である。

木製品（第135図4）：針葉樹の板目材を用いた円板で曲物の底板と考えられる。

⑩ 3層検出構造と遺物

3層水田跡（第136図、写真91）

段差部分2箇所とそれらが形成する区画1区画が検出されている。

【地形面】 3層上面はほぼ平坦で、標高は9.2～9.4mである。

【水田域】 調査区はすべて水田域である。耕作土の3層が調査区外へも広がっていることから水田域は調査区外へさらに広がっている。

【耕作土】 基本層3層で黒褐色粘土である。層の上面下面とも凹凸が顕著である。層厚は5～30cmであるが、東半が比較的薄く、西半が厚い。これは耕作深度の違いによるものである。

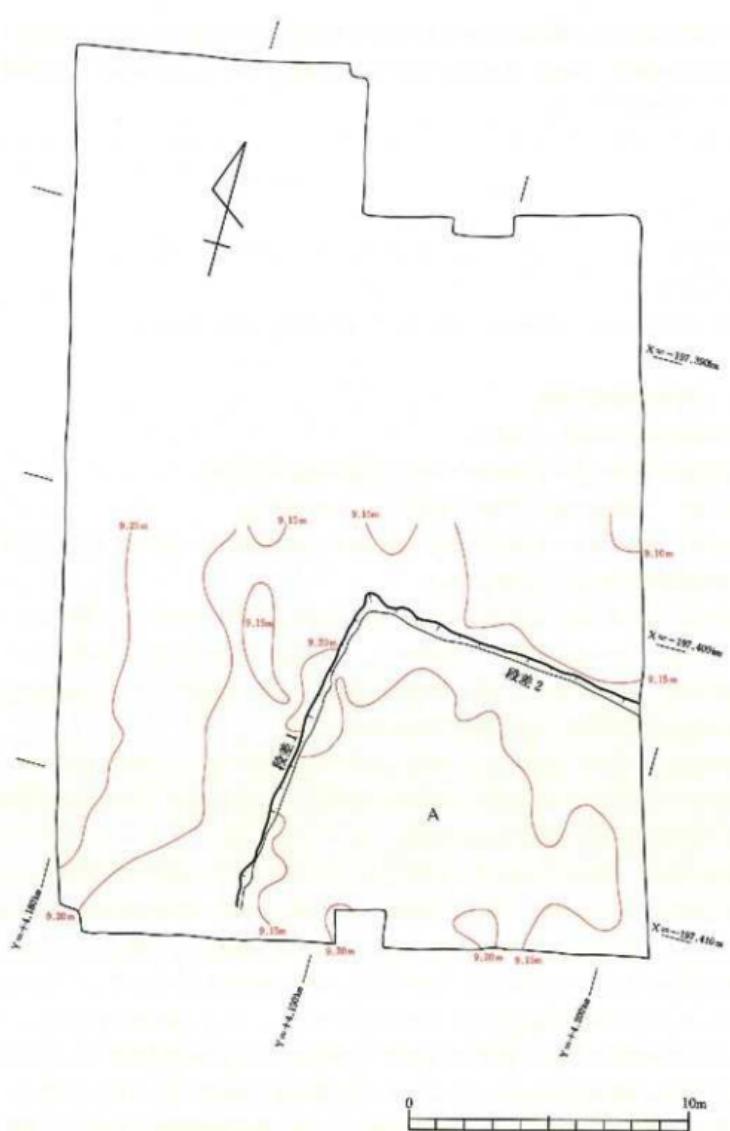
【直下の層】 東半部では4・5層、西半部では6a層である。3層直下、4・5・6a層上面・層中に鉄分の集積層やマンガン斑などは認められない。

【段差部分】 段差1・2が検出されている。段差1の方向がN-8°-E、段差2がN-83°-Wで両者はほぼ直交している。段差1の検出長は約12mで比高差は約2.3～7.2cm、段差2の検出長は10.5mで比高差は1.0～10.2cmである。

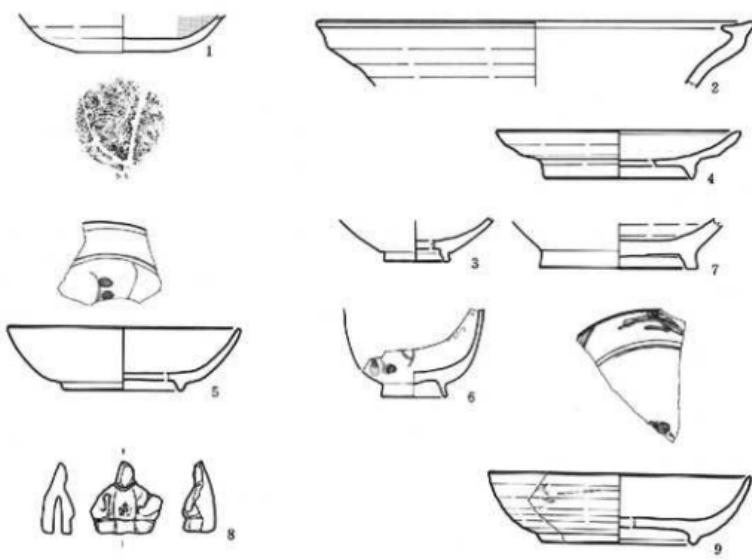
【水田の区画】 段差が1区画（A）を形成しているが全体の形状、規模などは不明である。

【出土遺物】 3層中からは、土師器、須恵器、赤焼土器、陶磁器、種別不明の素焼土器、石器が出土している。それらのうち図示できたのは土師器1点、陶磁器4点、礫石器1点である。土師器は70点出土しているがほとんど細片である。調整技法の判るものは22点（ロクロ使用・内面ヘラミガキ後黒色処理の壺10点、ロクロ使用の甕11点）である。須恵器は16点出土しているがすべて壺の細片である。底部が3点あり、切り離し技法は2点が回転糸切り、1点がヘラ切りである。陶磁器は13点出土している。そのうち産地年代が確定できたのは5点である。

土師器（第137図1、写真141）：壺の底部で内面ヘラミガキ後黒色処理が施されている。底部は回転糸切り無調整である。



第136図 3層水田跡平面図



第137図 変電所区出土遺物（5）

陶磁器（第137図2～5、写真□）：2は唐津の摺鉢（17C初）、3は相馬の灰釉碗（近世）、4は瀬戸美濃の御深井皿（17C前半）、5は肥前の染付皿（17C？）である。他に青磁の足付き輪花皿（17C？）、在地の中世陶器甕などがある。

砾石器（第137図10、写真□）：片面と片側側面に磨面と敲打による浅い凹み痕が認められる。

（11）その他の出土遺物

基本層の1・2層から、土師器・須恵器・赤焼土器・陶磁器・繩文のある土器・種別不明素焼土器・土製人形が出土している。いずれも細片で図示できたのは陶磁器3点、人形1点のみである。第137図6は肥前の染付碗（幕末～明治）、7は唐津の壺（17C）、9は肥前の染付皿（18C）である。8は土製人形で型押しの天神像である。

（12）小結

①周辺調査区との層の対応

28次調査区が西側約15mの所で、5次調査が北側約13mの所で実施されている。15次調査の成果を踏襲すると以下のようになる。

| 本調査 | 第5・7次 | 第28次 | 第15次 |
|------------------------|----------------|----------------------|----------------|
| 2層 | | = 2層 | |
| 3層 | = 3層 (*) | = 3層 | = 4a層 (*) |
| 4層 | | = 4層 | = 4b層 (**) |
| 5層 | | = 5層 | = 5a層 (***) |
| 6a-c層 | = 4層 | = 7・8層 | = 8層 |
| 7層 | = 5層 (*****) | = 9a層 (*****) | = 9a層 (*****) |
| 8層 | = 6層 | = 10a層 | = 10a層 |
| 9層 | = 7a層 | = 10a層 | = 10a層 |
| 10層 | = 7a層 | = 10a層・10b層 (******) | = 10a・b層 |
| 11層 | = 7b層 | = 10d層 (******) | = 11a-10層 |
| 12a層 | = 7c層 (******) | = 12層 | = 13層 (******) |
| 12b層 | = 7e層 | = 12層 | |
| 13層 | = 7f層 | = 12層 | |
| 14層 | = 8層 | = 13層 | |
| * 平安時代以降の水田跡 | | ***** 弥生時代中期十三綱式期水田跡 | |
| ** 平安時代・灰白色火山灰降下以降水田跡 | | ***** 弥生時代中期樹形畝式期水田跡 | |
| *** 平安時代・灰白色火山灰降下前後水田跡 | | ***** 弥生時代中期水田跡 | |

②12a層水田跡

12a層からは年代を決定できる資料は出土していない。しかし、前述したように隣接調査区との層の対応が可能であり、時期の判明している層からの推定が可能である。12a層に対応する15次調査の「11a」層から弥生時代中期樹形囲式の壺が出土していることから12a層水田跡もその時期に位置づけられる。

この12a層水田跡は大畦畔により区画を形成し、内部をさらに小畦畔により区画する構造である。大畦畔の方向は等高線に直交する方向と平行する方向とがあり、前者がN-60°-W、後者がN-30°-Eとなる。小畦畔の方向もほぼ同様である。小区画の形状は長方形が基調で面積は推定値も含めて10~13m²と考えられる。

以上のような構造は隣接調査区の5・7次、28次の構造と基本的に同様である。しかし、小区画の形状、面積には多少の差異が認められる。なお、本層の畦畔②は、28次の「11a」層水田跡の畦畔6を介して5・7次の「7c」層水田跡の畦畔③に連続するものである。また、その幅は4.5~6mと大きく、28次の畦畔1aが3.5~5mとなるのに類似している。

③11層水田跡

11層からの出土遺物はない。下層が12a層で前述のとおり弥生時代中期樹形囲式期であることと、上層にある7層が弥生時代中期十三塚式期であることから、11層水田跡は弥生時代中期樹形囲式期以降、十三塚式期以前の時期に位置づけられる。

等高線に直交する方向の大畦畔が3条検出されたのみでその構造については不明な点が多いが、ほぼ12a層の水田跡の地形面を踏襲していると考えられる。28次では本層に対応する「10d」層において大中小の三段階の区画が検出されていることから、本層水田跡も同様な構造であった可能性が考えられる。

④7層水田跡

7層から年代を決定できる資料は出土していないが、石庖丁が出土していることからほぼ弥生時代とされよう。一方、本層に対応する15次での「9a」層からは弥生時代中期十三塚式の広口壺が出土しており、本層水田跡もその時期に位置づけられる。

本層では耕作土が確認されたのみであり、隣接する5・7次、28次さらに15次においても畦畔などはあまり遺存していない傾向にある。

⑤6層検出遺構SX1

SX1から出土した土師器は平安時代の表衫ノ入式に比定される。また、SX1を覆う基本層4層の土師器も同時期のものであることや、4層中に灰白色火山灰が含まれることから、SX1は灰白色火山灰降下以前の平安時代に位置づけられる。

SX1は堆積土が4層であることから4層形成以前に開口していたと考えられ、5層が水田

の耕作土の可能性があることから5層の時期に伴う遺構と考えられる。性格についてはシガラミ状の杭列などの状況から水田に関わる水利施設としての機能が考えられる。

⑥灰白色火山灰を堆積土とする溝状遺構

灰白色火山灰だけが堆積土であることから溝状遺構は火山灰降下以前の時期に位置づけられる。方向がほぼ真北方向であることから畦畔に関連した溝跡などの類の一部が残存したと考えられる。条里型土地割の坪境が想定される座標値の幅の中に位置することからもその可能性が高いといえよう。

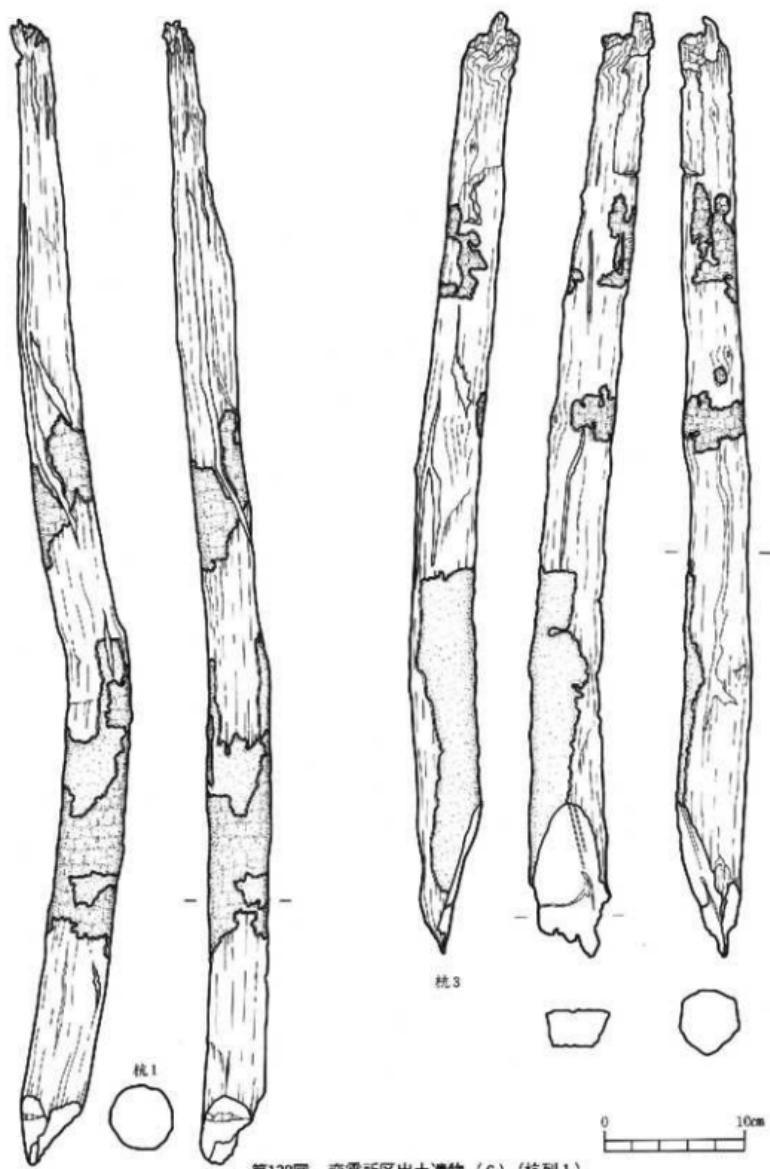
⑦4層水田跡

4層から出土した土師器は平安時代の表杉ノ入式に比定されることや4層中に灰白色火山灰が含まれることから平安時代の火山灰降下以降の時期に位置づけられる。

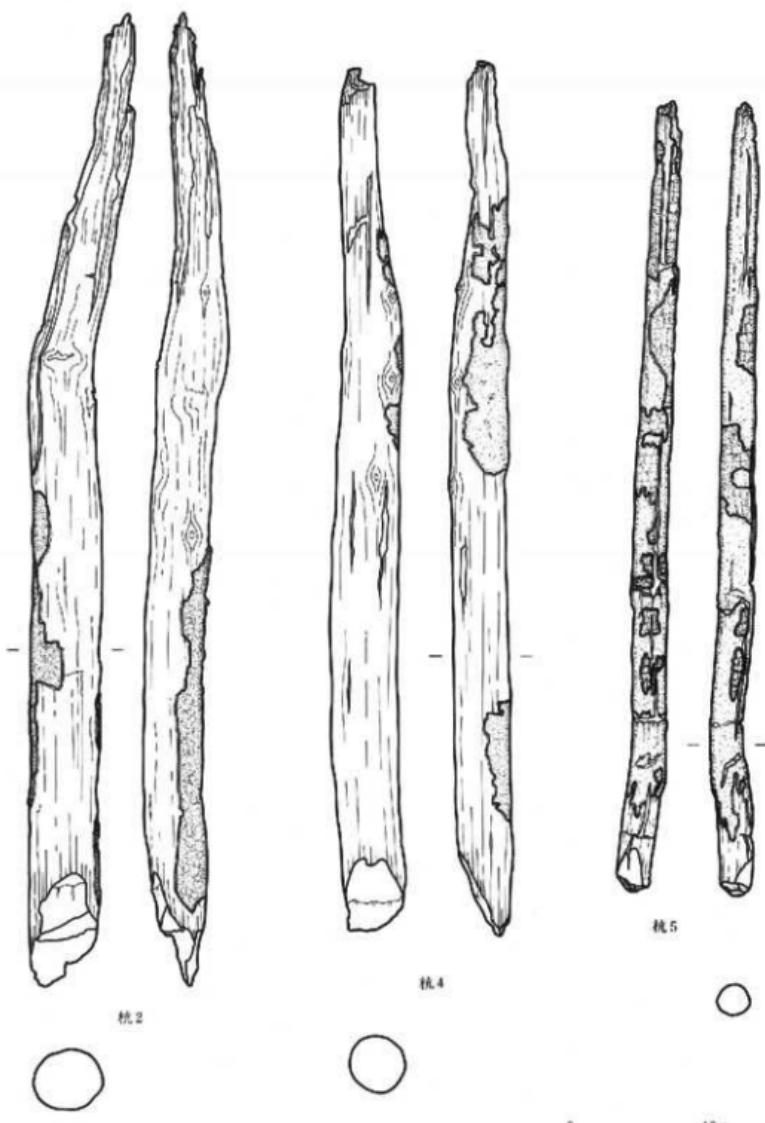
この時期の場合、条里型土地割が問題とされ、富沢遺跡での検討(平間1988)によれば、畦畔1が坪境($Y = +4.185\text{km}$)と推定されている。今回の報告で座標は $Y = +4.1875\sim+4.189\text{km}$ と計測された。15次での坪境の大畦畔が $Y = +4.407\text{km}$ で前者との差は219.5~218mで2で割ると109.75~109mとなり、より1町の値に近似することが判明した。

⑧3層水田跡

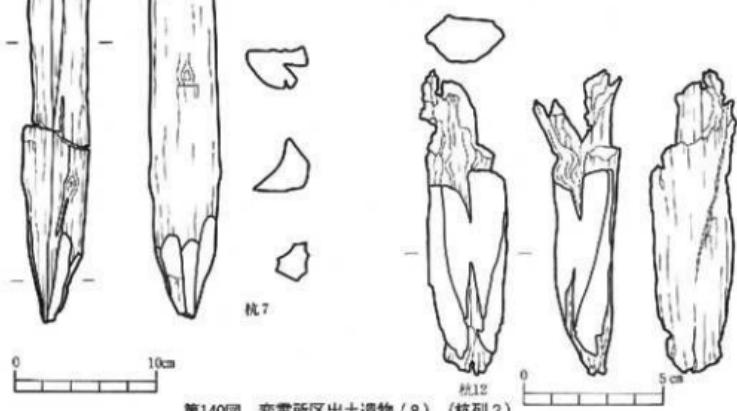
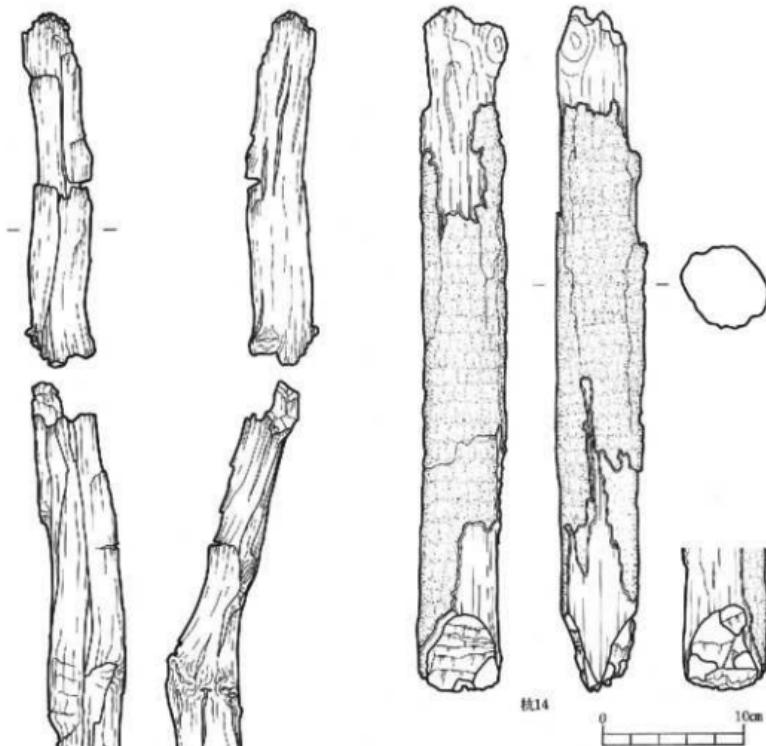
3層からは平安時代の表杉ノ入式の土師器から近世の陶磁器類までが出土している。しかし、土師器の大部分は擬拌が深く行われた西半部から出土しており、3層に帰属するものであるかどうかは問題である。陶磁器がほぼ17Cを中心とした時期であることからここでは大まかではあるが平安時代(灰白火山灰降下以降)から近世の時期に位置づけたい。



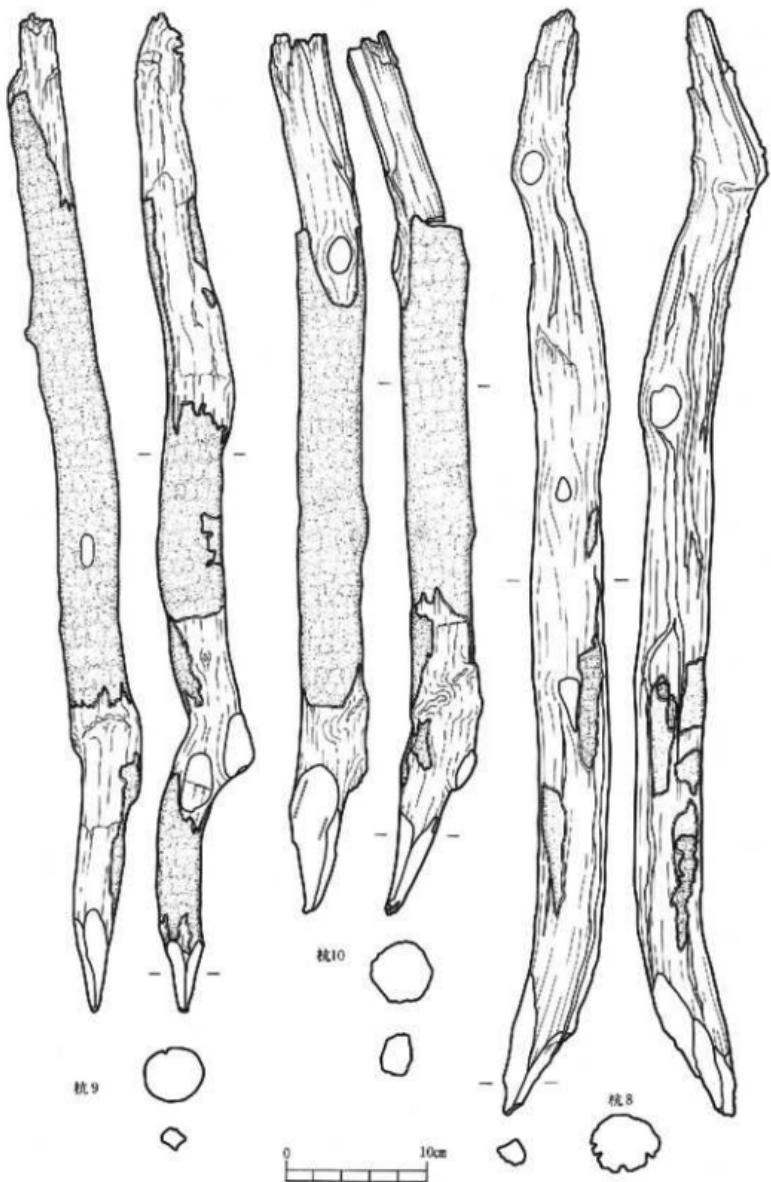
第138図 変電所区出土遺物（6）（杭列1）



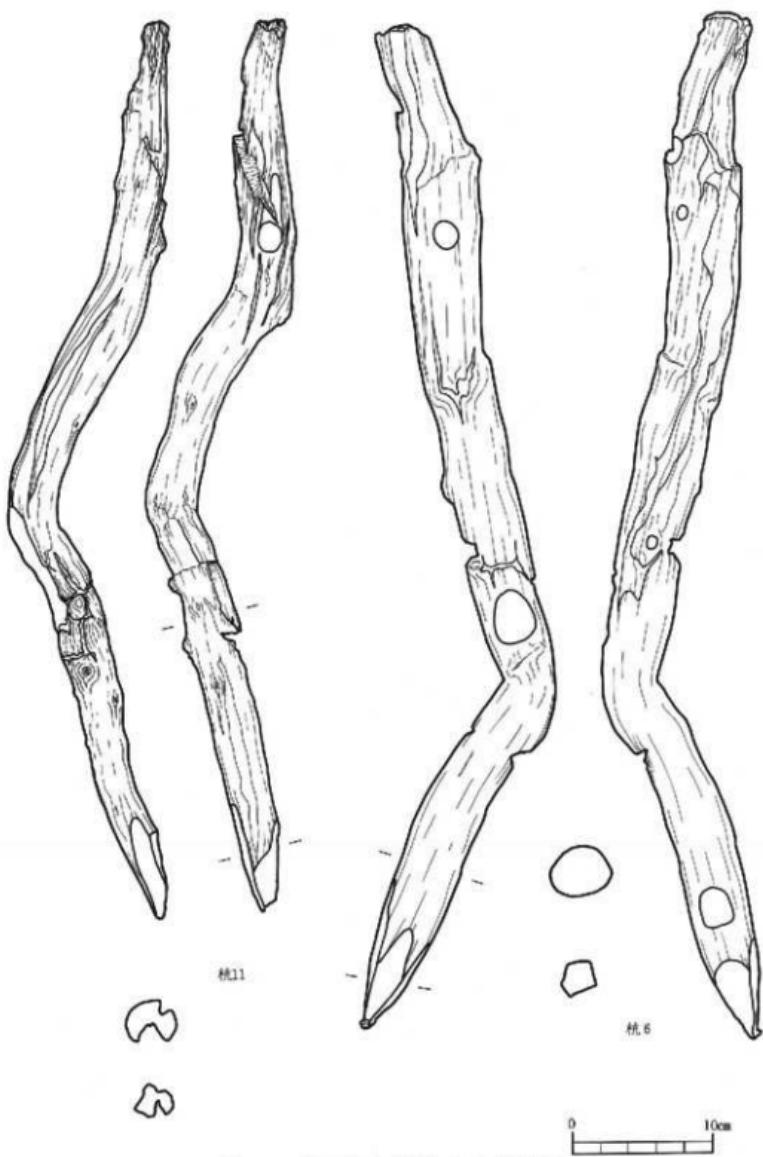
第139図 変電所区出土遺物(7)(杭列1)



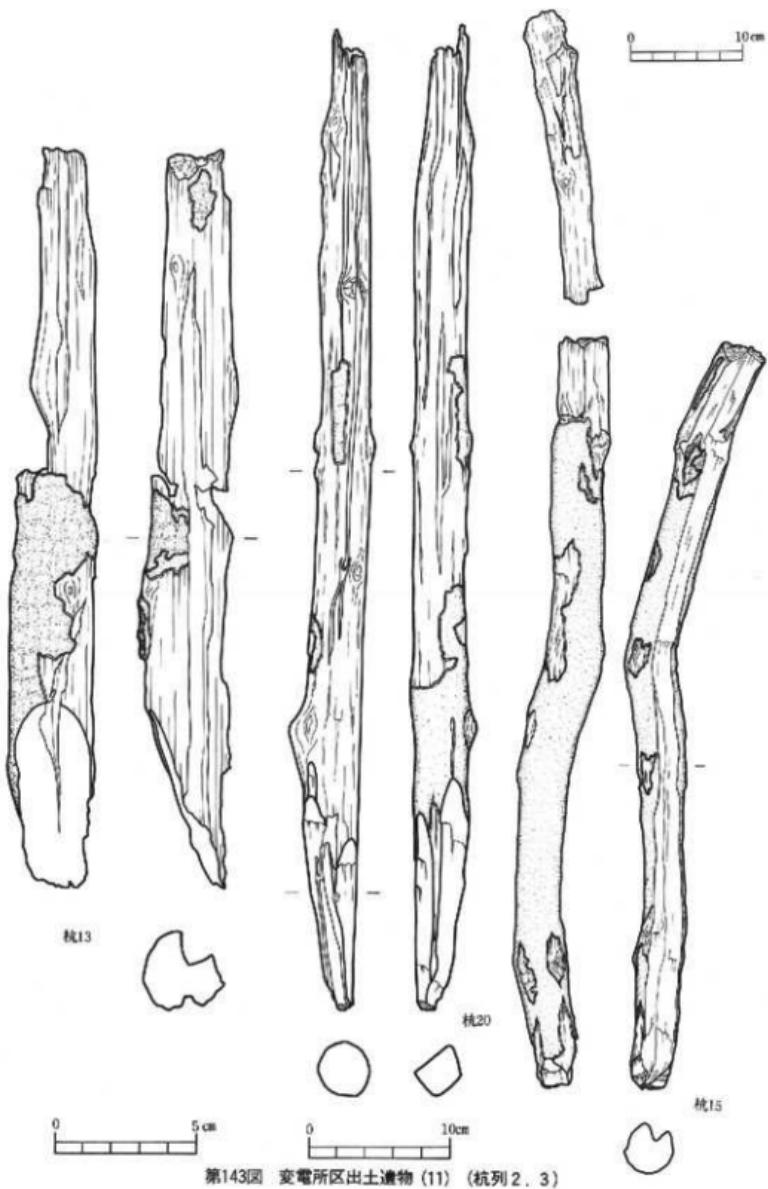
第140図 変電所区出土遺物(8) (杭列2)



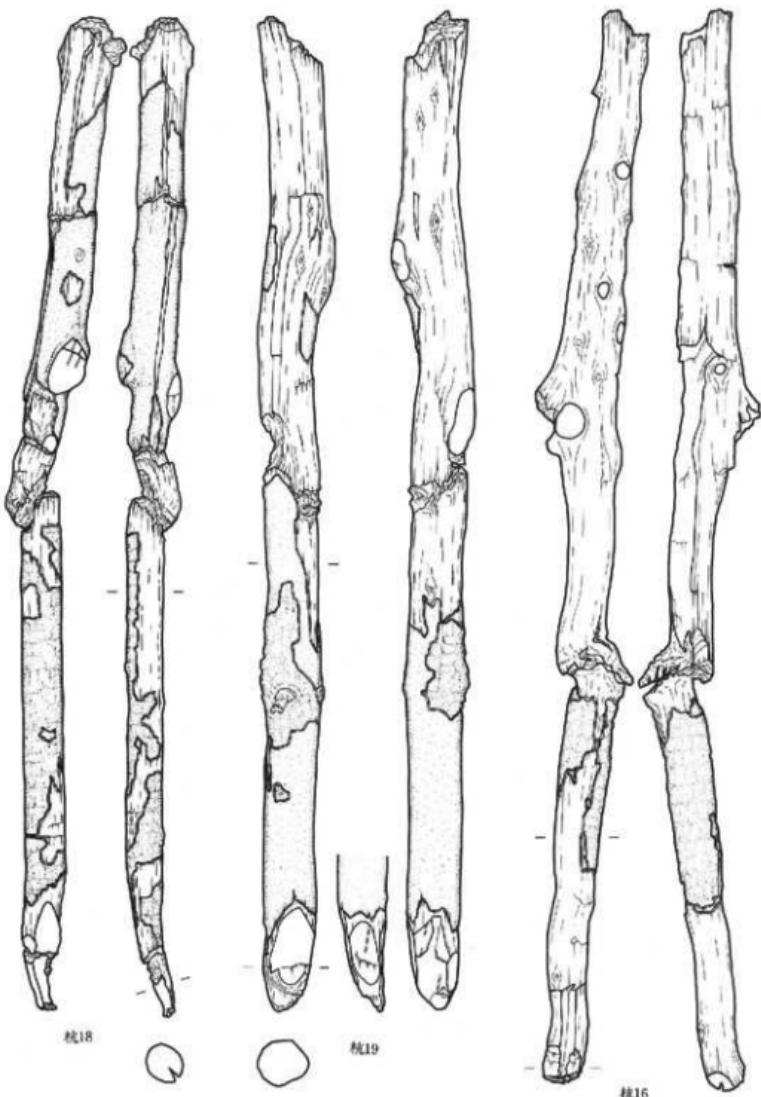
第141図 変電所区出土遺物 (9) (杭列 2)



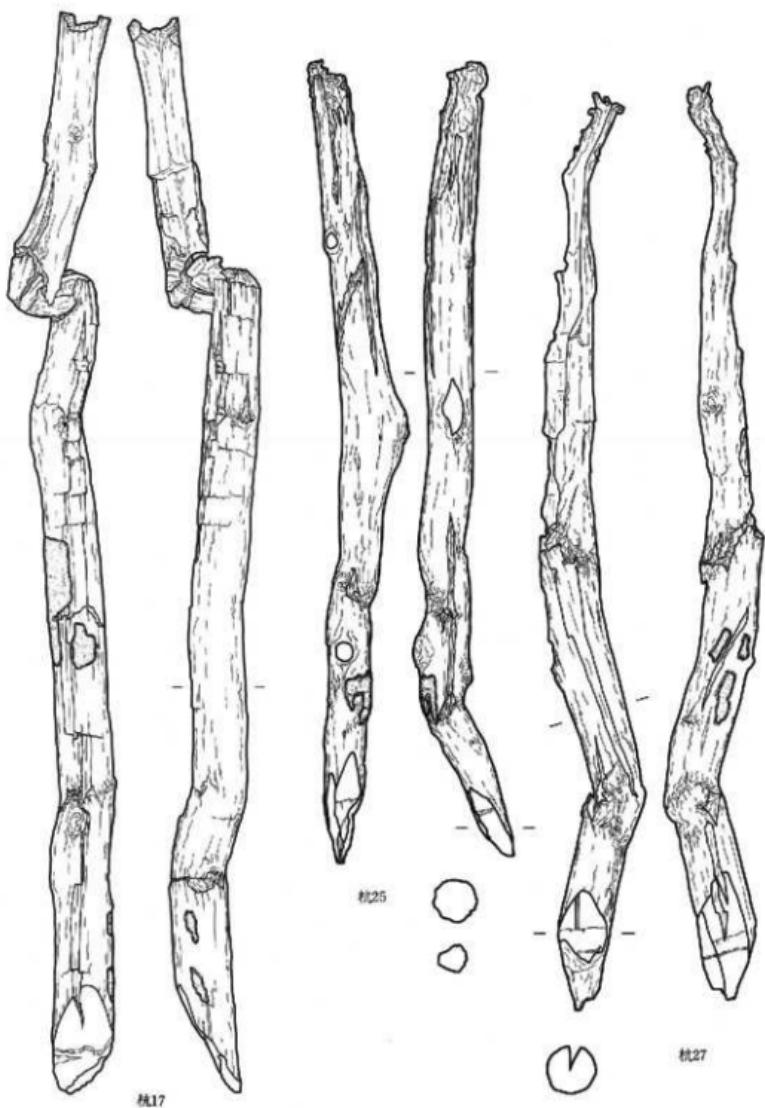
第142図 変電所区出土遺物 (10) (杭列 2)



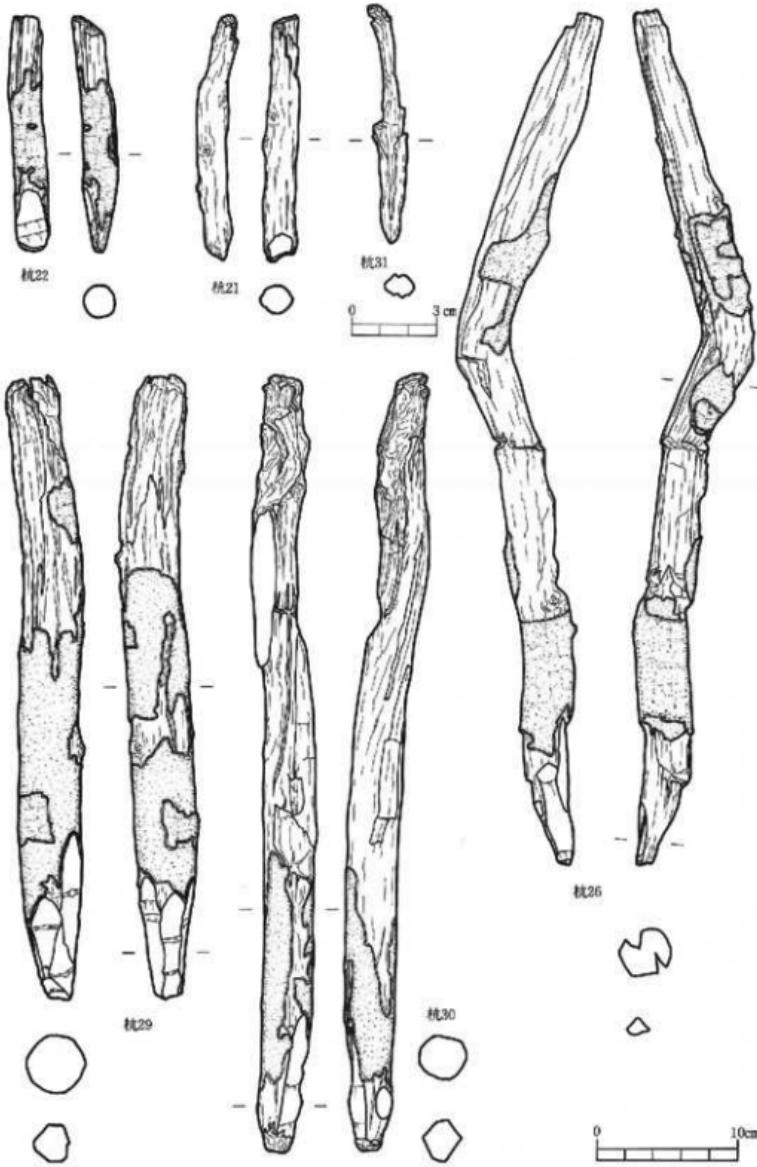
第143図 変電所区出土遺物(11) (杭列2, 3)



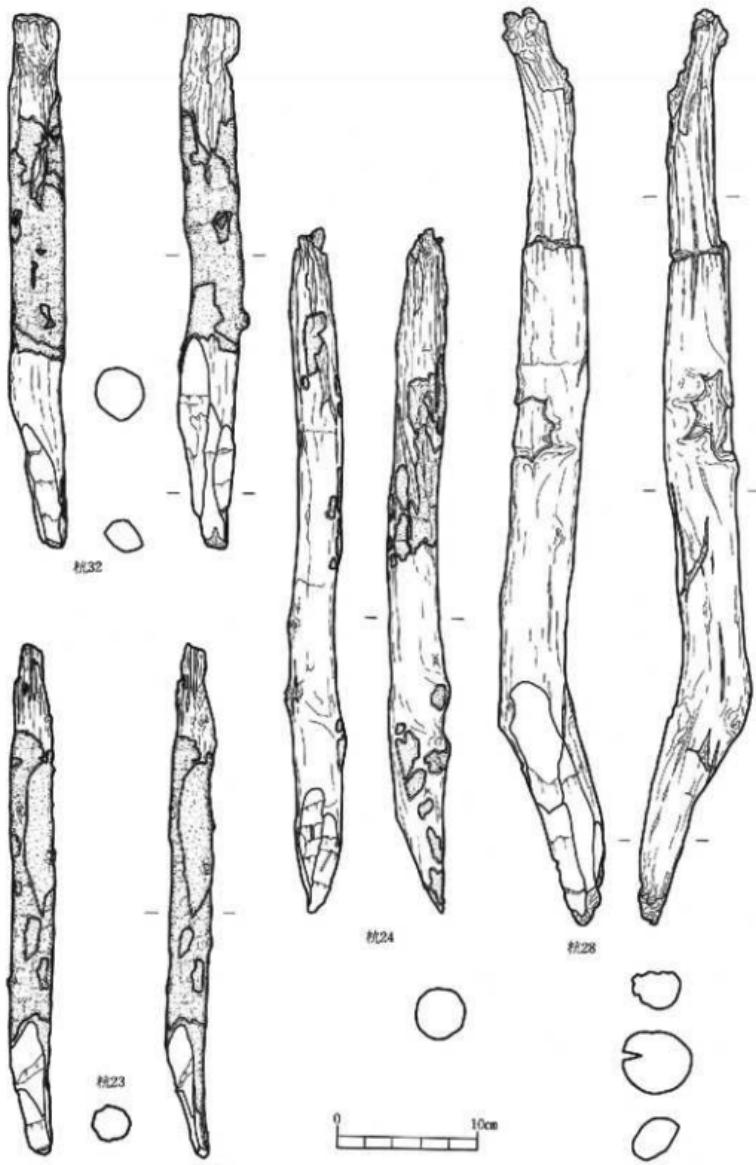
第144図 変電所区出土遺物(12)(杭列3)



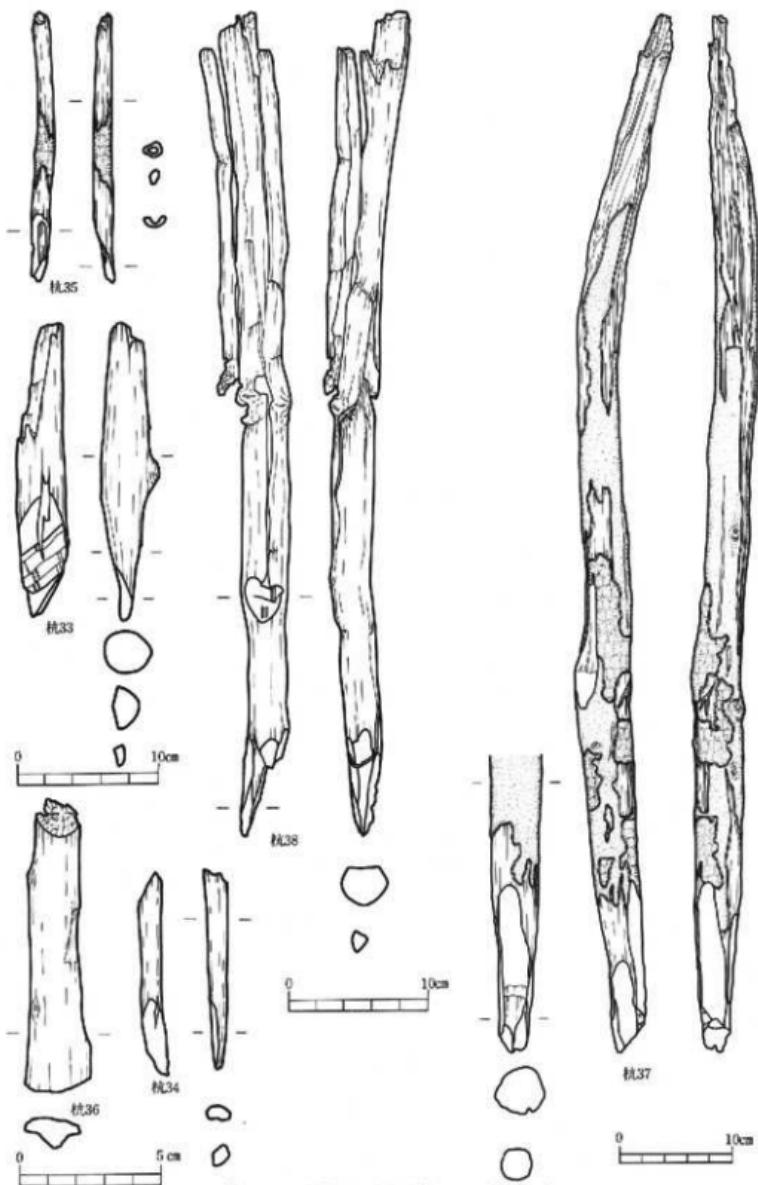
第145図 変電所区出土遺物 (13) (杭列 3, 4)



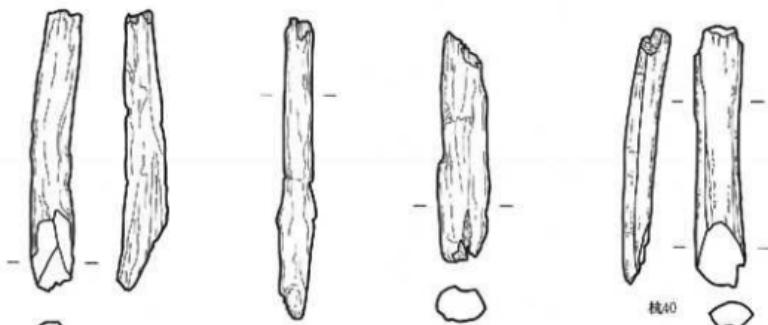
第146図 変電所区出土遺物(14)(杭列4)



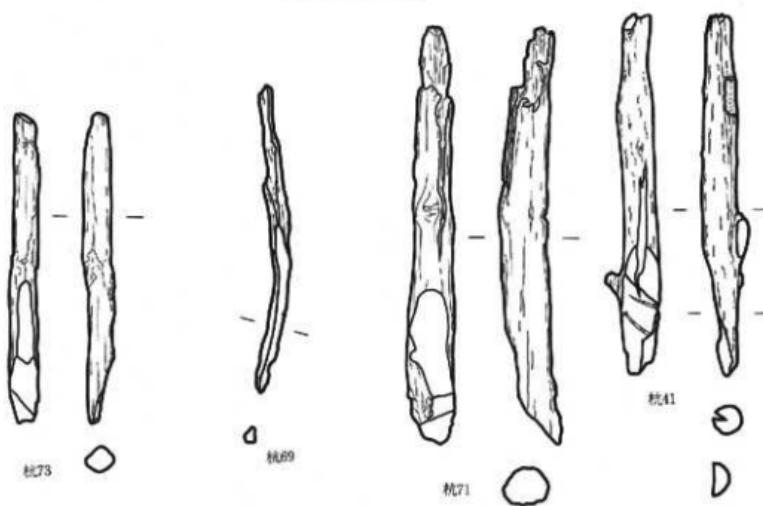
第147図 変電所区出土遺物 (15) (杭列 4)



第148図 変電所区出土遺物 (16) (杭列 5)

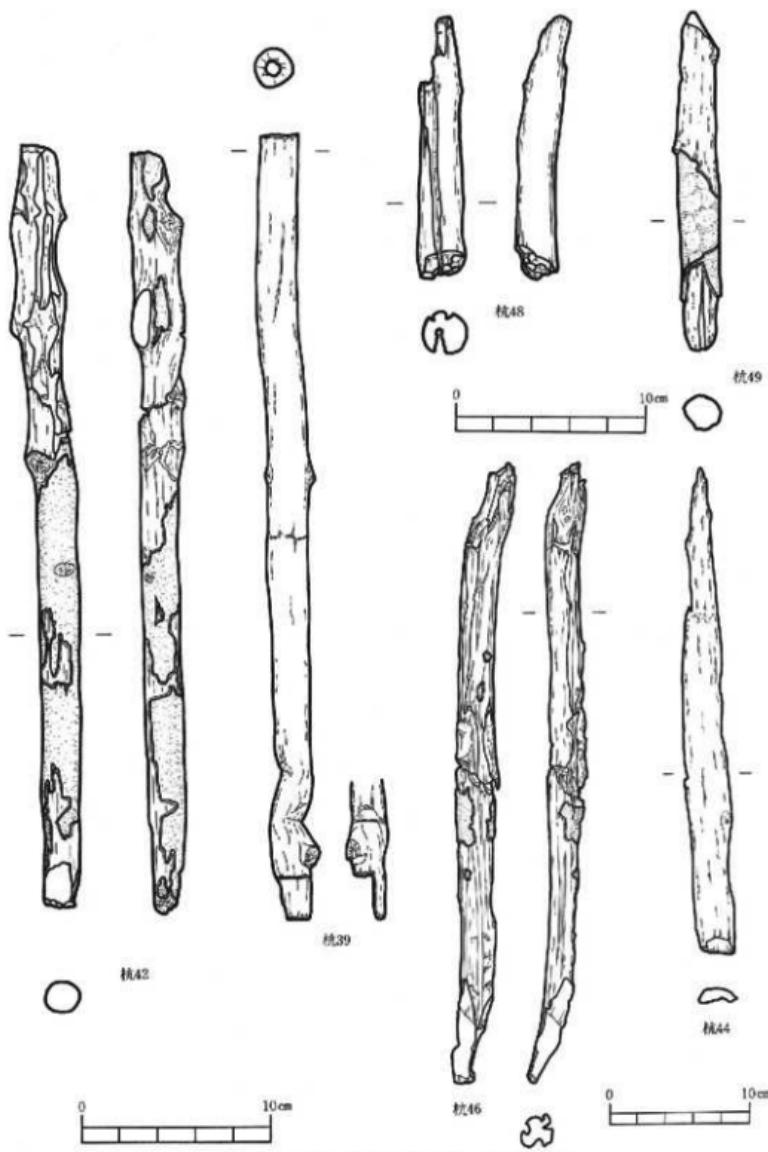


0 5 cm

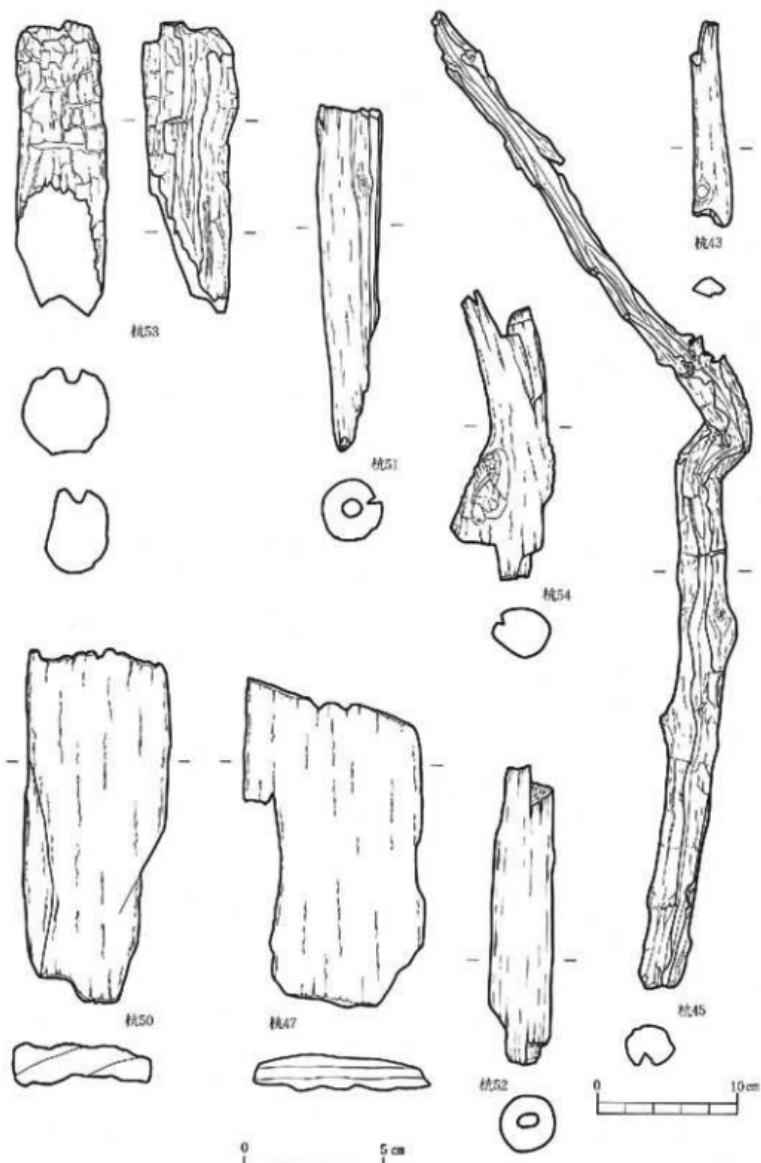


0 10 cm

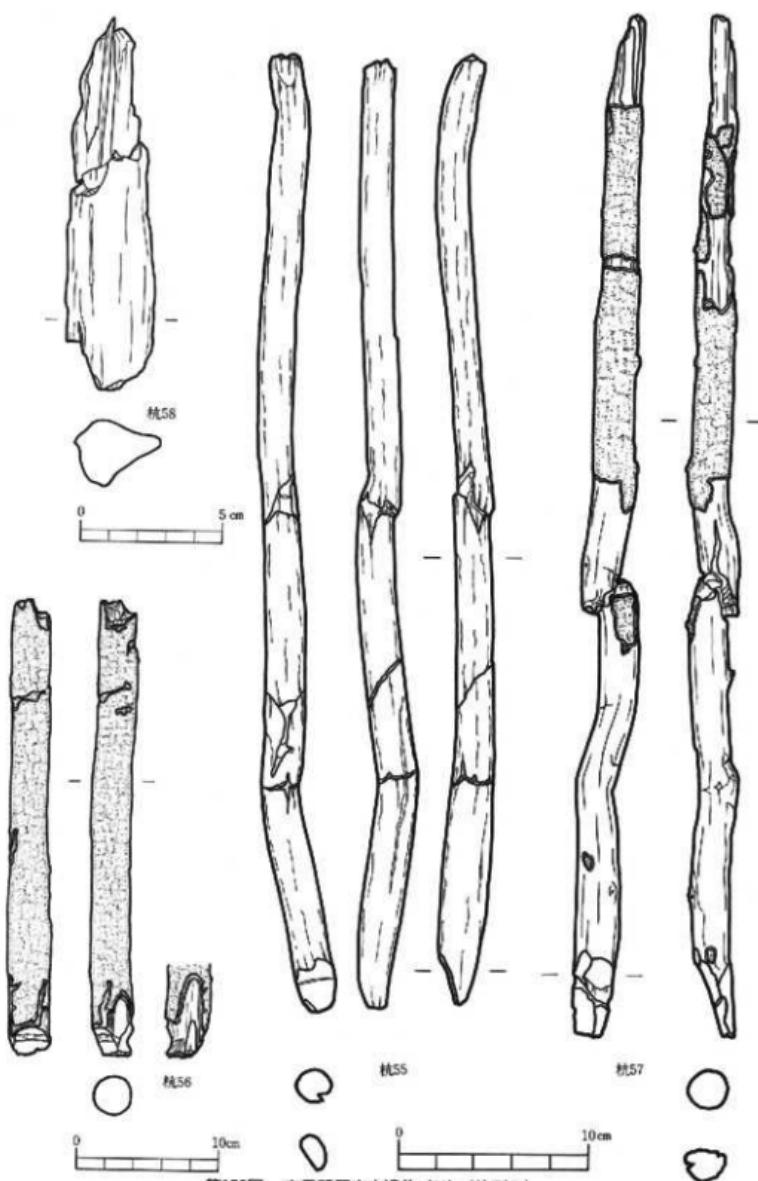
第149図 変電所区出土遺物(17) (杭列6・7)



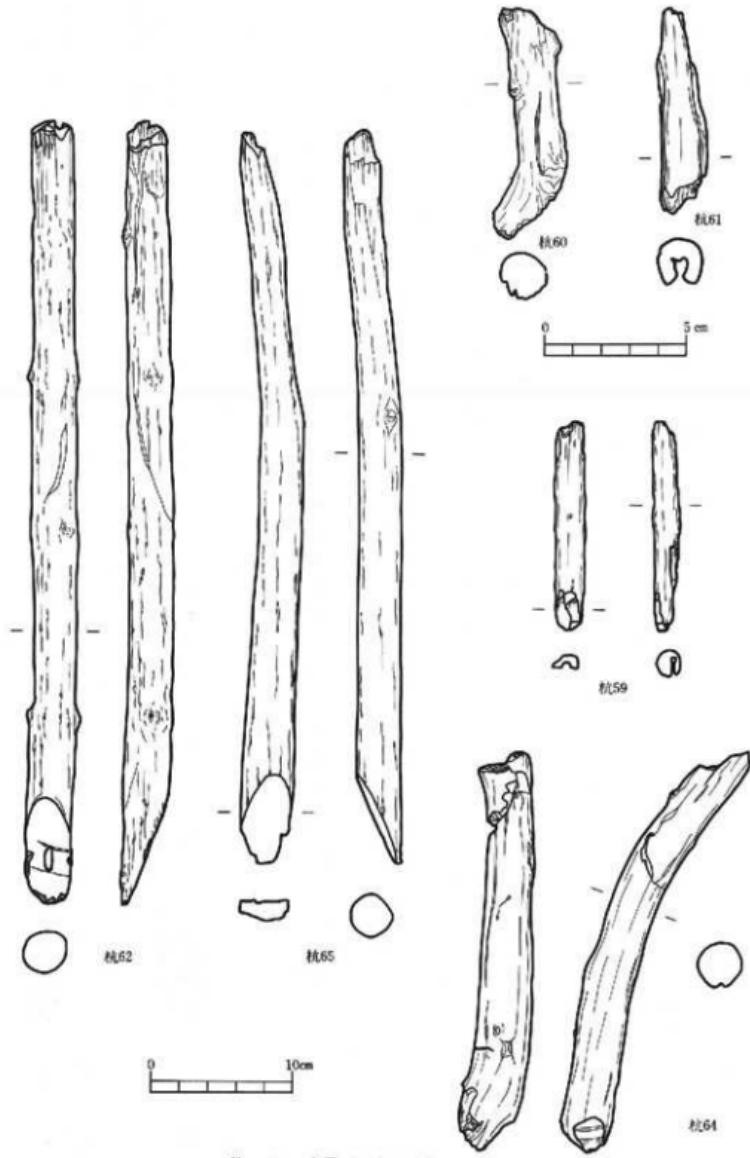
第150図 变電所区出土遺物(18) (杭列7, 8)



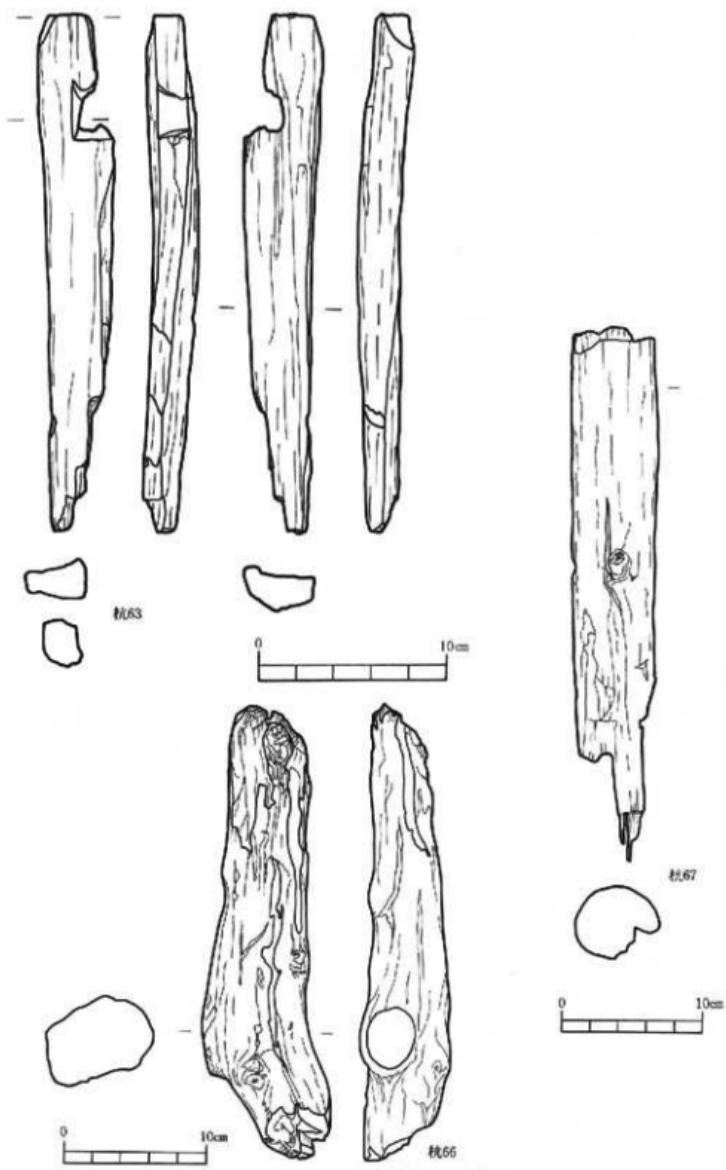
第151図 変電所区出土遺物 (19) (杭列 8)



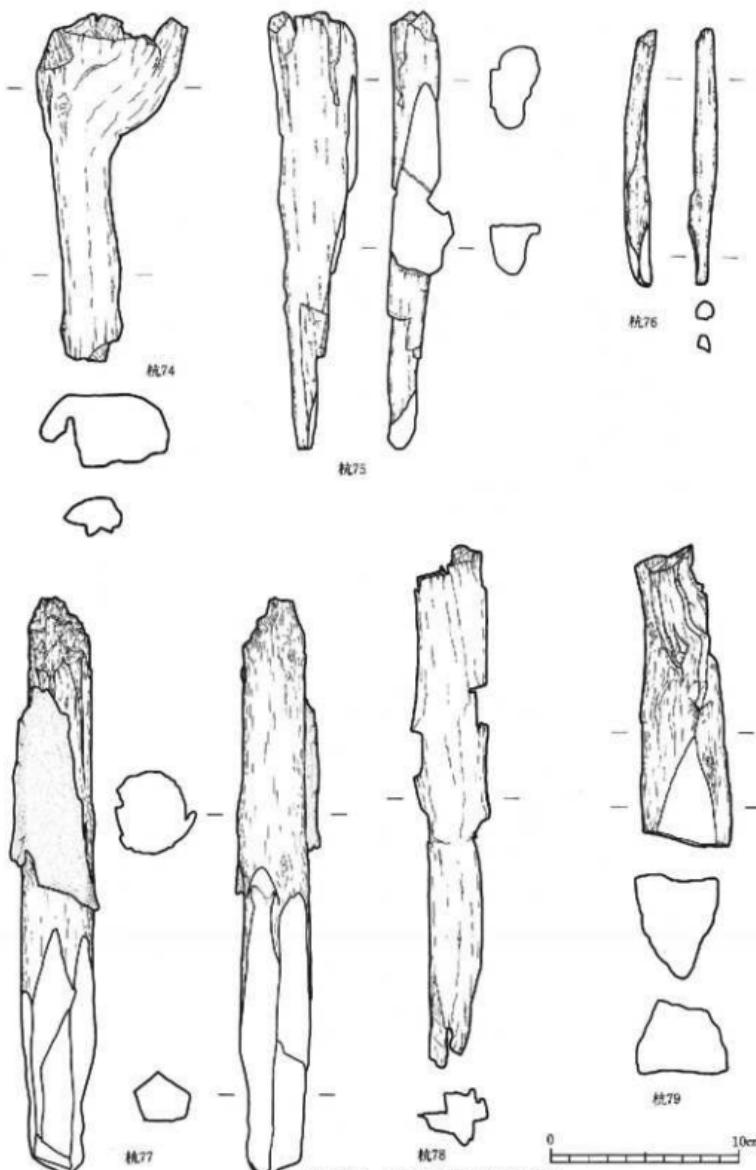
第152圖 變電所區出土遺物 (20) (杭列 9)



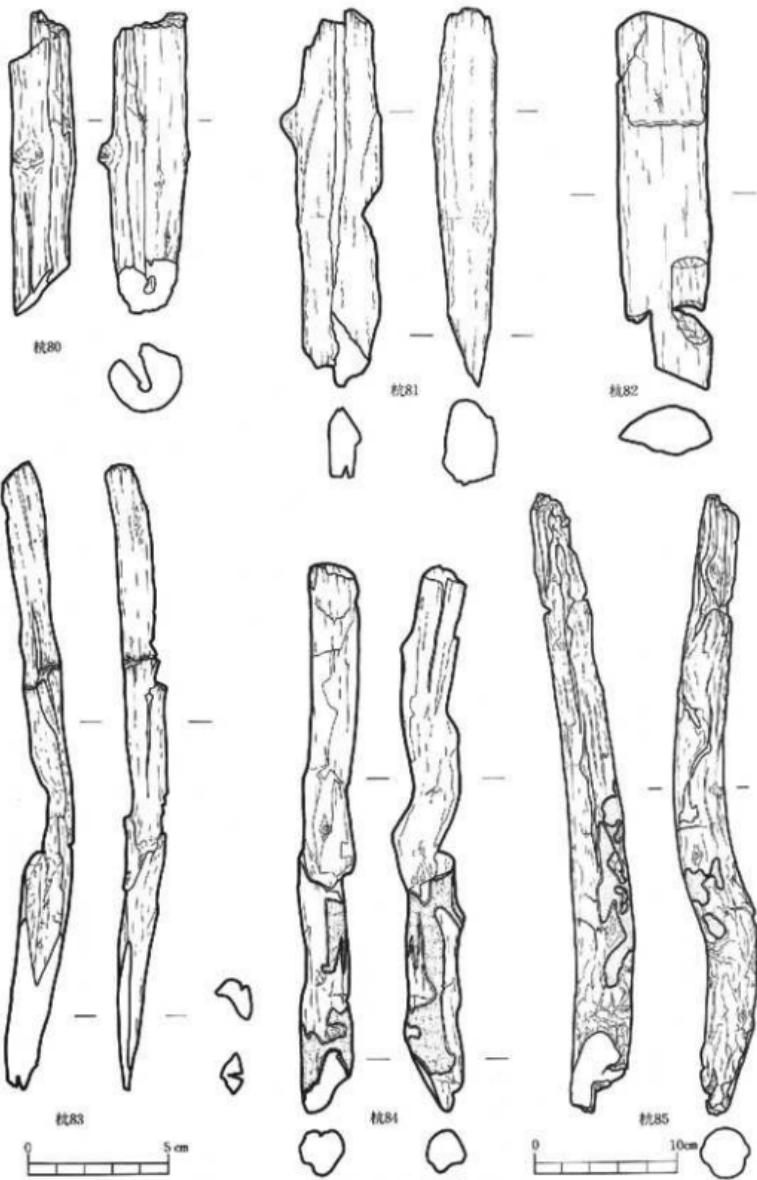
第153図 変電所区出土遺物(21) (杭列10)



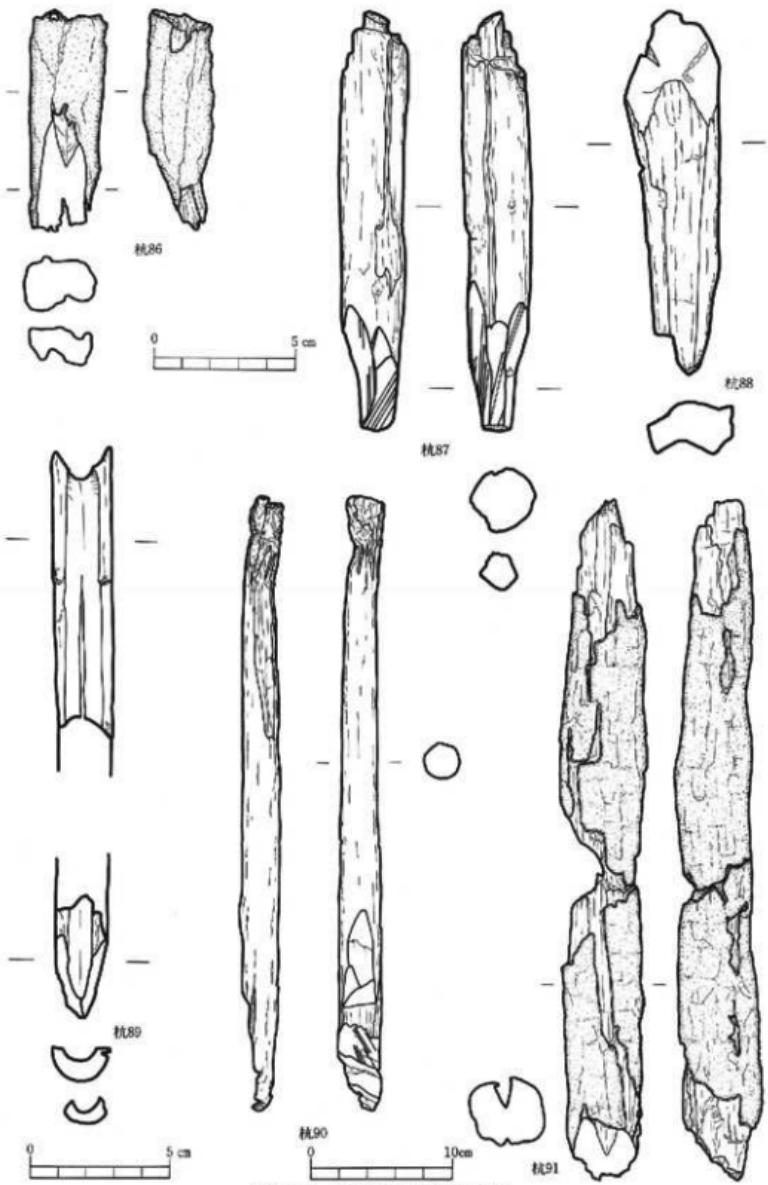
第154図 變電所区出土遺物(22) (杭列10. 11)



第155図 变電所区出土遺物 (23)



第156図 变電所区出土遺物 (24)



第157図 變電所区出土遺物 (25)

第38表 安電所区遺物観察表(1)

土器

| 遺物番号 | 形態・部位 | 形 | 寸 | 五寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 |
|-------|-------|-------|------|----|--------|------|-----|---|---|---|---|---|
| 135-2 | 盆1 | 7層小田原 | 切手1種 | 中 | 山根1/1 | 12.7 | | | | | | |
| 136-1 | 盆2 | SX1 | 直 筒 | 直 | 口縁幅1/4 | 21.5 | | | | | | |
| 136-2 | E1 | SX1 | 直 筒 | 直 | 体→脚部 | | 9.8 | | | | | |
| 136-3 | E3 | 4層小田原 | 直 筒 | 直 | 底切1 | | 6.6 | | | | | |
| 136-4 | D2 | 4層小田原 | 直 筒 | 直 | 底切片 | | 6.6 | | | | | |
| 136-5 | D3 | 4層小田原 | 直 筒 | 直 | 底切片 | | 6.6 | | | | | |
| 136-6 | D3 | 3層 | 直 筒 | 直 | 底切片 | | 4.8 | | | | | |

石庵丁

| 遺物番号 | 寸 | 形態・部位 | 形 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 |
|-------|----|-------|-----|---|---|-------|------|-----|-----|-------------------------|---|-----|
| 136-1 | K1 | 7層小田原 | 石庵丁 | 完 | 底 | 16.29 | 4.75 | 0.7 | 砂質岩 | 時代開拓8.8m、孔φ0.4~0.5m、砂質岩 | | 121 |

礫石器

| 遺物番号 | 寸 | 形態・部位 | 形 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 |
|--------|----|--------|-----|---|---|------|-----|-----|-----|---|---|-----|
| 137-1 | K5 | 12層小田原 | 礫石器 | 丸 | 約 | 19.5 | 8.5 | 3.7 | | | | |
| 137-2 | K4 | 12層小田原 | 礫石器 | 丸 | 円 | 10.0 | 9.5 | 4.6 | | | | |
| 137-10 | K3 | 3層 | 礫石器 | 丸 | 丸 | 10.7 | 8.5 | 4.3 | 444 | | | 122 |

木製品

| 遺物番号 | 寸 | 形態・部位 | 形 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 |
|-------|----|-------|-----|----|------|------|------|-----|----------------|---|---|-----|
| 138-3 | L1 | 4層 | 天端 | 天端 | 圓内欠損 | 19.9 | 7.5 | 1.7 | 板目、木丸の一種、尖鋸部分 | | | 122 |
| 138-4 | L2 | 4層 | 底面? | 底面 | 形 | 16.2 | 14.5 | 1.1 | 板目、針葉樹、底面下の板目か | | | |

陶器器・土製品

| 遺物番号 | 寸 | 形態・部位 | 形 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 | 寸 |
|-------|----|-------|-----|---|--------|------|------|------|-------------------------|---|---|-----|
| 137-2 | J1 | 3 層 | 陶 器 | 直 | 口縁幅1/3 | 23.4 | | | 直徑、口縁丸形 | | | 122 |
| 137-3 | J4 | 3 层 | 陶 器 | 直 | 口縁 | 3.4 | | | 直縫、内外底瓦斜、直縫付近突出、底斜 | | | 122 |
| 137-4 | J2 | 3 层 | 陶 器 | 直 | 約1/3 | 13.7 | 8.6 | 13.6 | 窓口、直縫、側縫付近突出、底ねじれ、17世紀前 | | | 122 |
| 137-5 | J3 | 3 层 | 陶 器 | 直 | 約1/3 | 13.6 | 6.2 | 3.4 | 直縫、窓口、直縫付近 | | | 122 |
| 137-6 | J3 | 2 层 | 陶 器 | 直 | 底切2/3 | | 5.4 | | 直縫、窓口、直縫付近 | | | 122 |
| 137-7 | J3 | 2 层 | 陶 器 | 直 | 底切1/3 | | 8.4 | | 直縫、直縫、直縫 | | | 122 |
| 137-8 | P1 | 2 层 | ○製品 | 人 | 底切完形 | 高3.8 | 幅3.9 | 厚1.7 | 窓縫付、矢付縫、直縫付 | | | 122 |
| 137-9 | J2 | 2 层 | 陶 器 | 直 | 約1/3 | 13.6 | 8.0 | 3.7 | 直縫、窓縫、直縫 | | | 122 |

第39表 变電所区遺物観察表(2)

| 回 | 場所 | 遺物・部位 | 深 | 長 | 幅 | 厚 | 追加T | 相 | 地 | 試料番号 | 備考 | 写真番号 | |
|-----|------|----------|------|-------|------|-----|-----|---|------------|-----------|----|------|-----|
| 138 | 机 1 | SX1 案例 1 | 丸太材 | 81.4 | 4.4 | | | ○ | クリ | 66 | | 123 | |
| 139 | 机 3 | SX1 案例 1 | 丸太材 | 68.8 | 3.7 | | | ○ | コナラ四角の 傷 | 66 | | 123 | |
| 140 | 机 2 | SX1 案例 1 | 丸太材 | 89.5 | 4.9 | | | ○ | クリ | 66 | | 123 | |
| 141 | 机 4 | SX1 案例 1 | 丸太材 | 69.6 | 4.0 | | | ○ | クリ | 66 | | 123 | |
| 142 | 机 5 | SX1 案例 1 | 丸太材 | 58.2 | 3.4 | | | ○ | クリ | 66 | | 123 | |
| 143 | 机 7 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 26.4 | 9.3 | | | ○ | コナラの一種 | 66 | | 123 | |
| 144 | 机 14 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 68.6 | 6.5 | | | ○ | クヌギ直立の 傷 | 66 | | 123 | |
| 145 | 机 12 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 10.8 | 2.75 | | | ○ | コイク居の一種 | 66 | | 123 | |
| 146 | 机 9 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 72.0 | 4.8 | | | ○ | コナラ四角の 傷 | 66 | | 123 | |
| 147 | 机 10 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 63.5 | 2.5 | | | ○ | コイク居の一種 | 66 | | 123 | |
| 148 | 机 8 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 79.0 | 5.4 | | | ○ | クリ | 66 | | 123 | |
| 149 | 机 11 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 64.0 | 3.0 | | | ○ | ブナ属の一種 | 66 | | 123 | |
| 150 | 机 6 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 70.0 | 3.6 | | | ○ | ヤマボウシ | 66 | | 123 | |
| 151 | 机 12 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 26.2 | 2.9 | | | ○ | コナラ直立の 傷 | 66 | | 123 | |
| 152 | 机 20 | SX1 案例 2 | 丸太材 | 69.0 | 5.1 | | | ○ | クリ | 66 | | 123 | |
| 153 | 机 15 | SX1 案例 3 | 丸太材 | 92.1 | 4.4 | | | ○ | コナラ直立の 傷 | 66 | | 123 | |
| 154 | 机 16 | SX1 案例 3 | 丸太材 | 89.8 | 4.2 | | | ○ | クリ | 66 | | 123 | |
| 155 | 机 19 | SX1 案例 3 | 丸太材 | 89.4 | 4.7 | | | ○ | コナラ直立の 傷 | 66 | | 123 | |
| 156 | 机 16 | SX1 案例 3 | 丸太材 | 95.8 | 4.0 | | | ○ | コナラ直立の 傷 | 66 | | 123 | |
| 157 | 机 17 | SX1 案例 3 | 丸太材 | 96.0 | 5.1 | | | ○ | コナラ直立の 傷 | 66 | | 123 | |
| 158 | 机 25 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 27.1 | 1.6 | | | ○ | クマシニア属の 茎 | 66 | | 124 | |
| 159 | 机 27 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 45.6 | 4.4 | | | ○ | エゾノキ属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 160 | 机 22 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 165.0 | 2.2 | | | ○ | クマシニア属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 161 | 机 24 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 27.0 | 2.35 | | | ○ | コナラ直立の 傷 | 66 | | 124 | |
| 162 | 机 21 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 8.5 | 1.1 | | | × | ヤツガ属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 163 | 机 26 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 68.5 | 4.05 | | | ○ | コナラ直立の 傷 | 66 | | 124 | |
| 164 | 机 29 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 44.4 | 4.5 | | | ○ | ブナ属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 165 | 机 26 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 55.1 | 2.1 | | | ○ | エゾノキ属の 茎 | 66 | | 124 | |
| 166 | 机 25 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 38.2 | 4.3 | | | ○ | ブナ属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 167 | 机 24 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 68.9 | 3.7 | | | ○ | エゾノキ属の 茎 | 66 | | 124 | |
| 168 | 机 29 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 65.4 | 4.5 | | | ○ | ヤクク属の直立 | 66 | | 124 | |
| 169 | 机 19 | SX1 案例 4 | 丸太材 | 36.6 | 3.3 | | | ○ | コナラ直立の 一種 | 66 | | 124 | |
| 170 | 机 26 | SX1 案例 5 | 丸太材 | 7.5 | 1.9 | | | ○ | セナギ属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 171 | 机 31 | SX1 案例 5 | 丸太材 | 121.3 | 2.3 | | | ○ | セナギ属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 172 | 机 26 | SX1 案例 5 | 丸太材 | 38.6 | 3.3 | | | ○ | クリ | 66 | | 124 | |
| 173 | 机 37 | SX1 案例 5 | 丸太材 | 92.4 | 4.4 | | | ○ | クリ | 66 | | | |
| 174 | 机 26 | SX1 案例 6 | 丸太材 | 10.4 | 2.35 | | | × | セナギ属の 一種 | 66 | | 124 | |
| 175 | 机 34 | SX1 案例 6 | 丸太材 | 19.7 | 1.4 | | | ○ | クリ直立の 一種 | 66 | | 124 | |
| 176 | 机 22 | 6箇 | 机例 6 | 丸太材 | 18.0 | 1.1 | | | ○ | クヌギ直立の 一種 | 66 | | 124 |
| 177 | 机 66 | 6箇 | 机例 6 | 丸太材 | 30.7 | 0.9 | | | × | ヤツガ属の 一種 | 66 | | 124 |
| 178 | 机 70 | 6箇 | 机例 6 | 丸太材 | 8.2 | 1.8 | | | × | クリ | 66 | | 124 |
| 179 | 机 71 | 6箇 | 机例 6 | 丸太材 | 16.5 | 1.4 | | | ○ | コナラ直立の 一種 | 66 | | 124 |
| 180 | 机 69 | | | | | | | | | | | | |
| 181 | 机 71 | 6箇 | 机例 6 | 丸太材 | 29.5 | 2.3 | | | ○ | コナラ直立の 一種 | 66 | | 124 |
| 182 | 机 49 | SX1 案例 7 | 分離材 | 9.3 | 1.7 | | | ○ | イイギリ | 66 | | 124 | |
| 183 | 机 41 | SX1 案例 7 | 丸太材 | 19.8 | 1.9 | | | ○ | セナギ属の 一種 | 66 | | 124 | |

第40表 変電所区遺物観察表(3)

| 番 | 杭名 | 地番・所位 | 材 | 高さcm | 幅 cm | 厚さcm | 形状 | 構造(判別用) | 備 考 | 写真番号 |
|-----|------|------------|-----|-------|------|------|----------------------|---------|--------|------|
| 159 | 杭 42 | S X 1 桁列7 | 丸太材 | 49.6 | 1.8 | | ○ カエデ属の 一 種 | 05 | | 124 |
| 159 | 杭 43 | S X 1 桁列7 | 丸太材 | 41.6 | 2.6 | | × イイギリ | 05 | | 124 |
| 159 | 杭 48 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 14.0 | 2.45 | | ○ ウツギ属の一 種 | 05 | | 124 |
| 159 | 杭 49 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 19.0 | 2.1 | | × クヌギ属の一 種 | 05 | | 124 |
| 159 | 杭 49 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 44.3 | 2.6 | | ○ クリ | 05 | | 124 |
| 159 | 杭 44 | S X 1 桁列8 | 分離材 | 34.6 | 3.05 | | × クリ | 05 | | 124 |
| 151 | 杭 50 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 11.0 | 3.2 | | ○ クリ | 05 | | |
| 151 | 杭 51 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 12.4 | 2.1 | | × クワガタ属の 一 種 | 05 | | |
| 151 | 杭 54 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 19.4 | 2.35 | | × クワガタ属の 一 種 | 05 | | |
| 151 | 杭 45 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 69.0 | 3.4 | | × キマダラ | 05 | | 124 |
| 151 | 杭 43 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 2.5 | 1.3 | | × | | | |
| 151 | 杭 50 | S X 1 桁列8 | 分離材 | 37.6 | 4.9 | | × キシミ属の 一 種 | 05 | | |
| 151 | 杭 47 | S X 1 桁列8 | 分離材 | 11.05 | 9.9 | | × キシモト属の一 種 | 05 | | 124 |
| 151 | 杭 52 | S X 1 桁列8 | 丸太材 | 18.7 | 2.2 | | × ウツギ属の一 種 | 05 | | |
| 152 | 杭 36 | S X 1 桁列9 | 分離材 | 13.3 | 3.0 | | × コナラ属の一 種 | 05 | | 125 |
| 152 | 杭 55 | S X 1 桁列9 | 丸太材 | 51.0 | 1.9 | | ○ サカイ | 05 | | 125 |
| 152 | 杭 57 | S X 1 桁列9 | 丸太材 | 31.8 | 2.4 | | ○ ブナ属の一 種 | 05 | | 125 |
| 152 | 杭 56 | S X 1 桁列9 | 丸太材 | 33.0 | 2.9 | | ○ サトウイチゴ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 152 | 杭 62 | S X 1 桁列10 | 丸太材 | 56.9 | 2.8 | | ○ ウツギ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 153 | 杭 65 | S X 1 桁列10 | 丸太材 | 62.3 | 3.6 | | ○ タメガタ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 153 | 杭 59 | S X 1 桁列10 | 丸太材 | 14.9 | 2.1 | | ○ ウツギ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 153 | 杭 61 | S X 1 桁列10 | 丸太材 | 7.3 | 1.4 | | × ウツギ属の 一 種 | 05 | | 126 |
| 153 | 杭 64 | S X 1 桁列10 | 丸太材 | 39.6 | 4.7 | | ○ クヌギ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 153 | 杭 60 | S X 1 桁列10 | 丸太材 | 36.4 | 3.2 | | × バラ | 05 | | 125 |
| 154 | 杭 63 | S X 1 桁列10 | 分離材 | 37.05 | 3.25 | 2.2 | ○ 離離材(日村) | 05 | | 125 |
| 154 | 杭 67 | S X 1 桁列11 | 丸太材 | 38.0 | 6.05 | | × カナギ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 154 | 杭 66 | S X 1 桁列11 | 丸太材 | 32.7 | 7.6 | | ○ クヌギ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 155 | 杭 74 | 6層 | 丸太材 | 28.7 | 7.3 | | × ウツギ属の 一 種 | 05 | | |
| 155 | 杭 75 | 6層 | 分離材 | 23.4 | 4.7 | | ○ カエデ属の 一 種 | 05 | | |
| 155 | 杭 76 | 6層 | 丸太材 | 22.7 | 1.3 | | ○ クリ | 05 | | |
| 155 | 杭 77 | 6層 | 丸太材 | 26.9 | 4.5 | | ○ コナラ属の 一 種 | 05 | | |
| 155 | 杭 78 | 6層 | 丸太材 | 27.9 | 3.75 | | × コナラ属の 一 種 (100) | 05 | | |
| 155 | 杭 79 | 6層 | 分離材 | 16.1 | 4.7 | | × コナラ属の 一 種 | 05 | | |
| 156 | 杭 80 | 6層 | 丸太材 | 18.7 | 3.2 | | ○ ウツギ属の 一 種 | 05 | | |
| 156 | 杭 81 | 6層 | 分離材 | 23.5 | 3.45 | | ○ クヌギ属の 一 種 | 05 | | |
| 156 | 杭 87 | 6層 | 分離材 | 13.5 | 3.1 | | × ケトギ属の 一 種 | 05 | | |
| 156 | 杭 88 | 6層 | 丸太材 | 22.2 | 1.6 | | ○ クリ | 05 | | |
| 156 | 杭 89 | 6層 | 丸太材 | 19.35 | 1.8 | | ○ クリ (100) | 05 | | |
| 156 | 杭 85 | 6層 | 丸太材 | 64.4 | 2.5 | | ○ クリ | 1005 | | 125 |
| 157 | 杭 86 | 6層 | 丸太材 | 7.0 | 2.5 | | ○ 穴丸材? | 05 | | |
| 157 | 杭 87 | 6層 | 丸太材 | 11.9 | 2.3 | | ○ クリ | 05 | | |
| 157 | 杭 89 | 6層 | 丸太材 | 33.0 | 3.1 | | × コナラ属の 一 種 (100) | 05 | | |
| 157 | 杭 90 | 6層 | 丸太材 | 63.9 | 3.0 | | ○ カナギ属の 一 種 | 05 | | 125 |
| 157 | 杭 89 | 6層 | 丸太材 | 14.7 | 2.1 | | ○ ウツギ属の 一 種 | 05 | | |
| 157 | 杭 91 | 6層 | 丸太材 | 68.7 | 3.2 | | ○ コナラ属の 一 種 | 05 | | 125 |

3. A換気口区

(1) 調査の方法と経過

本調査区は長町南駅と鍋田変電所の間に作られるA換気口部分である(第120図)。変電所区の成果より試掘を行わず本調査を実施した。

調査区は長さ26m、幅4~5mで西側が幅広になる鍵形である。グリッドは設置せず実測は任意の実測用基準杭を東西に設定し平板測量を基本として行った。なお、報文中の国土座標は工事用の路線実測図の国土座標より図上で求めたものである。盛土のみを重機で除去したが中央部がすでに区画整理事業時の下水管埋設により搅乱されていた。表土以下は人力で遺構検出及び掘り込みを行った。調査区設定に必要な諸工事や盛土・旧表土掘削・残土運搬などは他工区と同様に工事業者が担当した。

調査は85年4月10日から開始した。4層で平安時代の水田跡、12層で弥生時代の水田跡、15・16層で杭を検出し、7月9日に終了した。

(2) 基本層序

基本層は1~24層まで確認された。1~14層までは変電所地区の基本層序と同様である(前項参照)。15~24層も6~14層と同じ泥炭質粘土層で、いずれも自然堆積層である。基底疊層は4~5m下に存在する。また、トレンチ南壁中央部で剥ぎ取り転写を実施している(留消遺物登録番号B-002、荒井:1987)。

15層: 黒色(10YR2/1)泥炭質粘土。層厚は5~13cmである。

16層: 黑褐色(10YR3/1)泥炭質粘土と暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土との互層。層厚は10~25cmである。

17層: 暗灰色(10YR4/2)泥炭質粘土と黒色泥炭質粘土との互層。層厚は10cm前後である。

18層: 灰色(5Y4/1)粘土と黒色泥炭質粘土との互層。層厚は7~13cmである。

19層: 黄灰色(2.5Y4/1)泥炭質粘土。層厚は約5cmである。

20層: 暗灰黄色(2.5Y4/2)泥炭質粘土。層厚は5~15cmである。

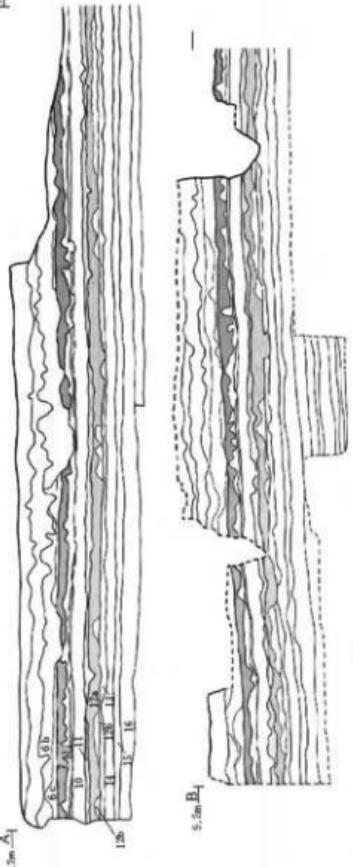
21層: 黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土。層厚は4~10cmである。

22層: 黄灰色(2.5Y4/1)泥炭質粘土。層厚は約5cmである。

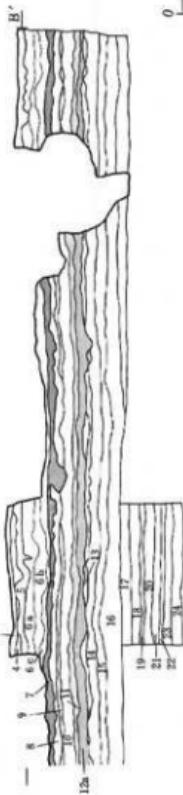
23層: 黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土。層厚は約10cmである。

24層: 黑褐色(2.5Y3/1)泥炭質粘土。層厚は約7cmである。

A'



B



| 层号 | 土 壤 | 上 质 | 下 质 | 层 厚 | 地 球 | 层 号 | 上 土 | 下 土 | 层 厚 | 地 球 | 层 号 | 上 土 | 下 土 | 层 厚 | 地 球 | 层 号 | 上 土 | 下 土 | 层 厚 | 地 球 | | |
|-----|-------|-----------|------------|--------|------|------|-------|-----------|--------|------|-----|-------|-----------|-------|------|-----|-------|-----------|-------|------|----|-------|
| 1 | 褐 黑 土 | 10Y R/1 | 5.5 YR 1/1 | 4~10cm | 砖红带土 | 9 | 灰 黑 土 | 5 Y 6/1 | 5~10cm | 砖红带土 | 17 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 16 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 15 | 褐 黑 土 |
| 2 | 灰 黑 土 | 7.5 Y R/1 | 5.5 YR 1/1 | 5~20cm | 砖红带土 | 10 | 褐 黑 土 | 10Y R/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 18 | 褐 黑 土 | 5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 17 | 褐 黑 土 | 5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 16 | 褐 黑 土 |
| 3 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 5.5 YR 1/1 | 4~20cm | 砖红带土 | 11 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 19 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 18 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 17 | 褐 黑 土 |
| 4 | 灰 黑 土 | 10Y R/2 | 5.5 YR 1/1 | 5~20cm | 砖红带土 | 12 | 褐 黑 土 | 10Y R/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 20 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 19 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 18 | 褐 黑 土 |
| 5 | 灰 黑 土 | 10Y R/2 | 5.5 YR 1/1 | 5~20cm | 砖红带土 | 12.5 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 21 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 20 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 19 | 褐 黑 土 |
| 6 | 灰 黑 土 | 10Y R/2 | 5.5 YR 1/1 | 5~20cm | 砖红带土 | 13 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 22 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 21 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 20 | 褐 黑 土 |
| 6.1 | 灰 黑 土 | 10Y R/2 | 5.5 YR 1/1 | 2~10cm | 自然带土 | 14 | 褐 黑 土 | 10Y R/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 23 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 22 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 21 | 褐 黑 土 |
| 6.2 | 灰 黑 土 | 10Y R/2 | 5.5 YR 1/1 | 2~10cm | 自然带土 | 15 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 24 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 23 | 褐 黑 土 | 2.5 Y 6/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 22 | 褐 黑 土 |
| 7 | 褐 黑 土 | 7.5 Y 6/2 | 5.5 YR 1/1 | 4~10cm | 砖红带土 | 16 | 褐 黑 土 | 10Y R/1 | 1~5cm | 砖红带土 | 25 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 24 | 褐 黑 土 | 10Y R/2 | 1~5cm | 砖红带土 | 23 | 褐 黑 土 |
| 8 | 褐 黑 土 | 7.5 Y 6/2 | 5.5 YR 1/1 | 4~10cm | 砖红带土 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第158图 A换气口土壤断面图

(3) 15・16層検出遺構と遺物

調査区の北西部分で15～16層にかけて杭が4本（杭1～4）検出されている（第159図1、写真93～95）。杭1と杭2とは間隔が17cmと近接しており、直立して打ち込まれている。ともに素材は丸太で先端に加工がなされている。杭1の残存長は69cm、杭2の残存長は49.6cmで樹種はクリである。杭3と杭4も間隔が45cmと近接し、両者とも同じ方向に打ち込まれ、さらに16層中で頭部付近が強く折れ曲がっている。ともに素材は丸太で先端に加工がなされている。杭3の残存長は136cmで樹種はカエデ属の一類である。杭4の残存長は91.2cmである。

(4) 12層検出遺構

12層水田跡（第159図、写真92）

畦畔などは検出されなかつたが変電所区と同じ層であることから水田跡と判断された。調査区の西端部分で足跡状の凹みを2列検出した（第159図2）。北側の列は長さが3.4mで6個確認され北東方向（N-54°-E）へ5歩歩んだ状態である。南側の列は長さ1.6mで3個確認されている。個々の長さは19～23.5cmである。いずれも11層が堆積している。

(5) 4層検出遺構と遺物

4層水田跡（第160図、写真92）

畦畔1条を検出しただけである。

【地形面】 調査区中央に下水管が埋設されていたことによる影響を考慮しなければならないが、4層上面は東へ下がる傾斜で、特に中央部に傾斜の強い箇所（傾斜度34cm/5m）が存在する。

【水田域】 耕作土である4層の分布が断続的であるので水田域の広がりについては不明である。

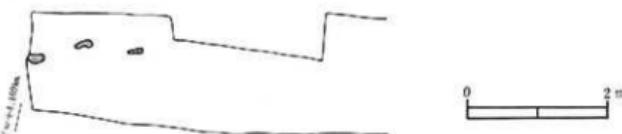
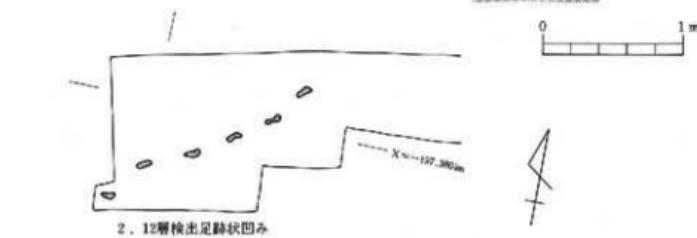
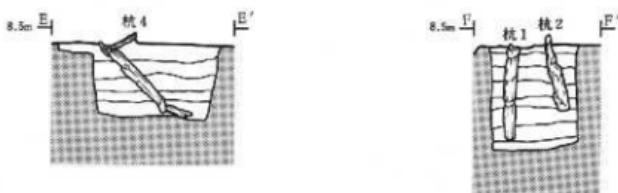
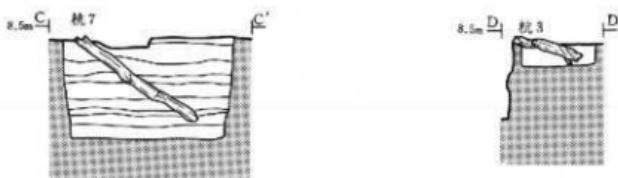
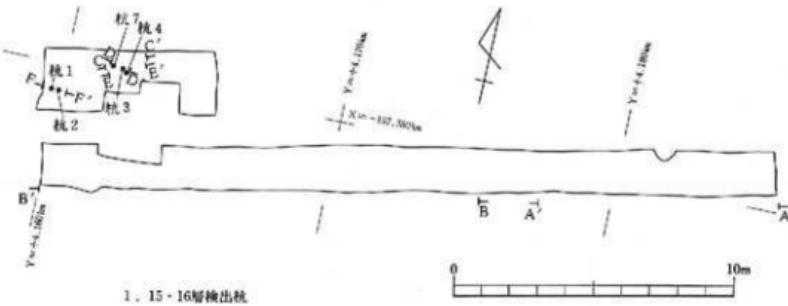
【耕作土】 基本層4層で灰黄褐色シルト質粘土である。上下面に若干凹凸が認められる。層厚は5～10cmである。

【直下の層】 基本層5層・6a層である。5層の下面にも凹凸が認められ水田耕作土の可能性がある。6a層は自然堆積層である。4層直下、5・6a層上面・層中に鉄分やマンガン斑の集積はない。

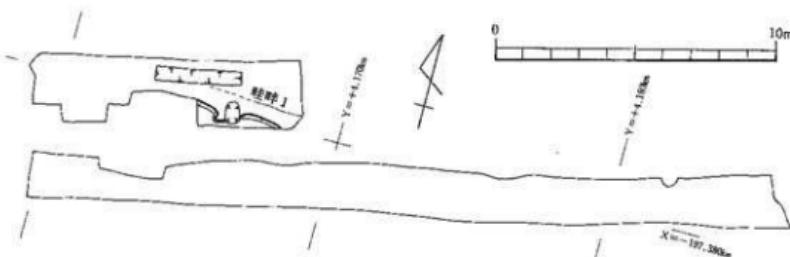
【畦畔】 検出された畦畔は1条で、方向はN-87°-Wでほぼ東西方向である。水田面との比高差が判るのは南側だけで2cm前後である。

【水田面の傾斜】 【水田面の区画】などは不明である。

【4層出土遺物】 4層からは須恵器・土師器・種別不明素焼土器の計4点が出土している。い



第159図 12・15・16層遺構平面図・断面図



第160図 4層遺構平面図

ずれも小片で図示できるものはない。須恵器は壺の体部片で外面が平行叩きである。土師器は2点でうち1点は壺の口縁部でロクロ使用・内面黒色処理である。

(6) その他の出土遺物

基本層3・5層から土師器・須恵器・種別不明の素焼土器が出土している。いずれも小片で図化できるものはない。3層からの出土点数は12点でロクロ使用の壺口縁部3点、ロクロ調整が不明で内面黒色処理の土師器片4点が出土している。5層の出土点数は6点である。

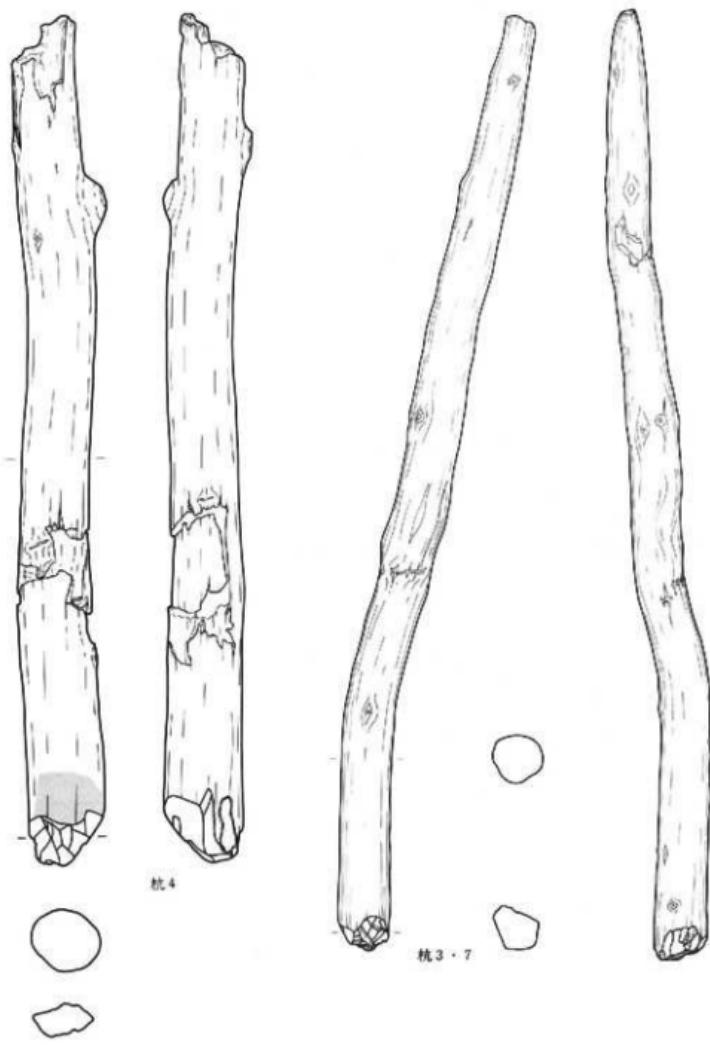
(7) 小結

① 4・12層水田跡

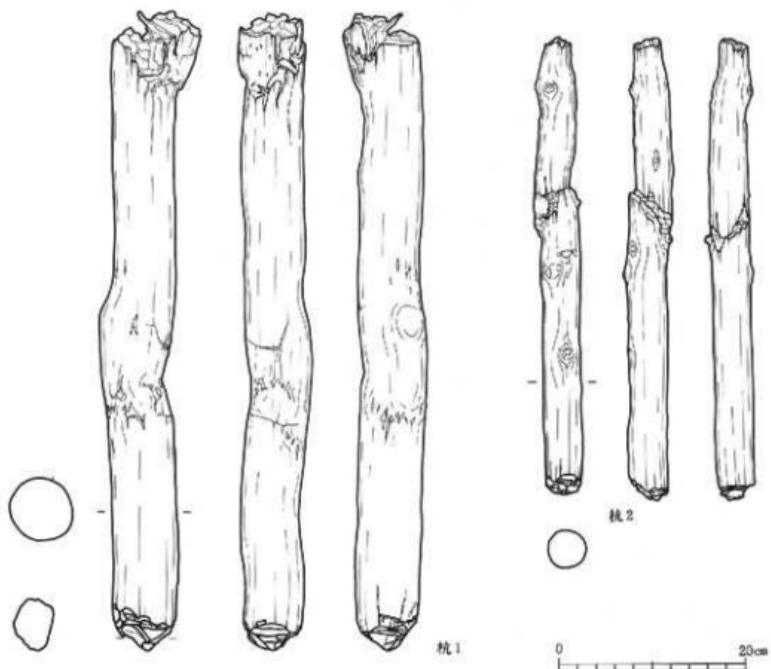
基本層序が変電所区と同じであるので4層・12層水田跡は各々平安時代（灰白色火山灰降下以降）、弥生時代中期樹形壠式期に位置づけられる。

② 15・16層の杭

検出面が12層以下であることからこれらの杭は弥生時代中期樹形壠式期以前に位置づけられる。性格については不明であるが、12層以下に遺構面が存在する可能性が示され、今後の調査の課題とされよう。



第161図 A換気口区出土遺物 (1)



第162図 A換気口区出土遺物（2）

第41表 A換気口区遺物観察表

| 杭 | 名稱 | 遺構・部位 | 素 材 | 長さ cm | 幅 cm | 厚さ cm | 形 狀 | 備 考 (試片番号) | 調 考 | | 写真番号 |
|-----|-------|-------|-----|-------|------|-------|-----|------------|-----|---|------|
| | | | | | | | | | 形 | 考 | |
| 161 | 杭 4 | 15層 | 丸太材 | 91.2 | 7.3 | 0.5 | ○ | | | | 136 |
| 161 | 杭 3.7 | 26層 | 丸太材 | 136.0 | 7.2 | 0.5 | ○ | カニシケ類の一種 | 48 | | 136 |
| 162 | 杭 1 | 15層中 | 丸太材 | 69.0 | 6.8 | 0.5 | ○ | | | | 136 |
| 162 | 杭 2 | 15層中 | 丸太材 | 49.6 | 4.0 | 0.5 | ○ | クソ | 88 | | 136 |

4. B換気口区

(1) 調査の方法と経過

本調査区は長町南駅のB換気口部分である。82・83年の本線敷での成果より水田跡の存在が十分予想されたことから試掘を行はず本調査を実施した。

調査区は長さ19m、幅約7.5mのほぼ長方形である。グリッド等は設置せず、実測は任意の実測用基準杭を南北に設定し平板測量を基本として行った。なお、報文図中の国土座標は工事用の路線実測図の国土座標より図上で求めたものである。盛土のみを重機で除去しそれ以下は人力で遺構検出及び掘り込みを行った。調査区設定に必要な諸工事や盛土・旧表土掘削・残土運搬などは他工区と同様に工事業者が担当した。

調査は85年4月10日から開始し、7c・7d層で弥生時代の水田跡を検出、深掘りでは縄文時代の火山灰を確認し、6月14日に終了した。

(2) 調査区の位置

長町南駅区Xa区の南に隣接している。区画整理以前は水田で標高は10mである。

(3) 基本層序

基本層は1～35層まで確認されている。1～7a層までは長町南駅区の基本層序と同様(VI-1参照)であるので7c1層以下についてその概要を記述する。

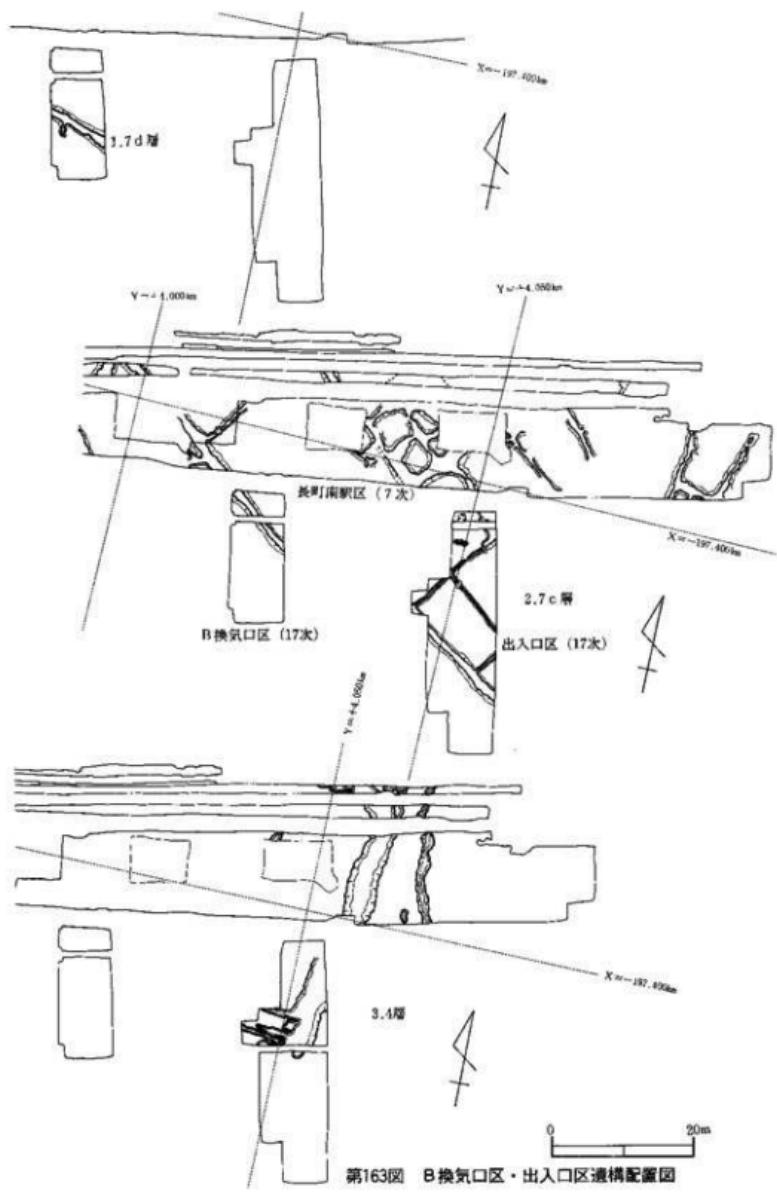
7c1層：黒褐色(10YR3/1)泥炭質粘土。層厚は1～10cm。出入口区で大畦畔の下部に母材と考えられる層が残存していたため耕作土を7c1層、母材層を7c2層とした。7c1層は5・7次の7c層、7c2層は同7e・7f層に対応する。ただし、本調査区では7c2層は確認されなかった。

7d層：黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土。層厚は4～14cmで分解のあまり進んでいない層である。5・7次の8層に対応する。

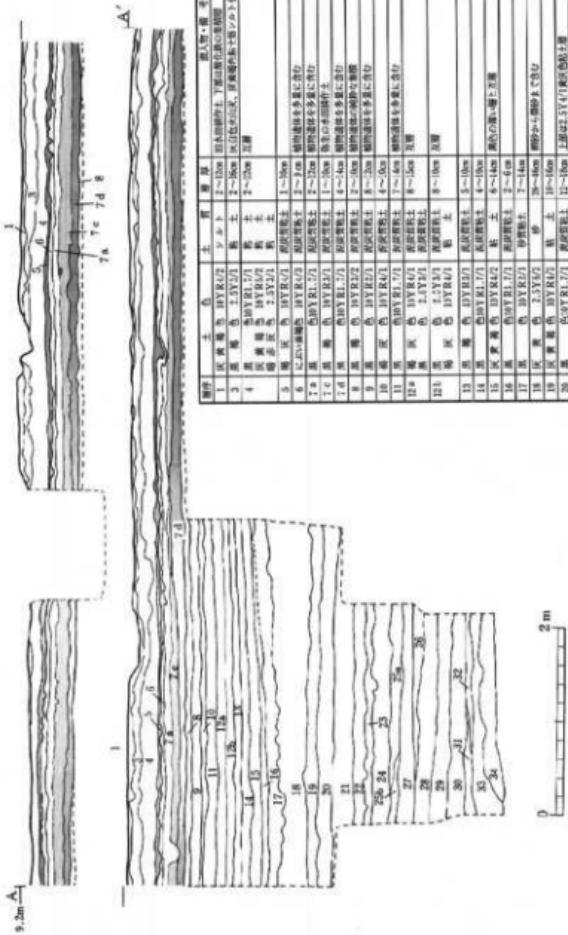
8層：黒褐色(10YR3/2)泥炭質粘土層。層厚は2～10cmでほとんど分解していない層である。5・7次の9層に対応する。

9層以下24層までの約2mにかけては粘土及び泥炭質粘土層、それ以下はグライ化した粘土および砂層となる。途中に厚い砂層(18・26層)が存在する。18層は層厚25～40cmで、26層が層厚20～30cm、両者とも細砂から粗砂までを含んでいる。

24層の黒色(10YR1.7/1)泥炭質粘土層中には火山灰のブロック(径1～2cm)が含まれている。標高は6.5m前後である。この火山灰は長町南駅区のIIb区の深堀りで確認された33層と同じものであり、その年代は約5500年前と考えられている(VIII-9)。



第163図 B換気口区・出入口区構造配図



第164図 B換気口区土壌断面図

(4) 7d層検出遺構

7d層水田跡（第165図、写真97・100）

大畦畔1条が検出されている。

【地形面】 ほぼ平坦であるがトレンチ中央が若干低くなっている。その傾斜度は11cm/10mほどである。標高は8.65～8.75mである。

【水田域】 7d層の分布域が調査区外へも広がることから水田域もさらに広がるものと考えられる。しかし、この層での水田跡の検出は本調査区のみであり、その広がりについては不明な点が多いと言えよう。

【耕作土】 基本層の7d層である。黒色の泥炭質粘土である。層厚は8～15cmで、調査区全域に分布している。上面下面に若干凹凸がみられる。長町南駅区のXIVa区以西ではこの7d層下面の凹凸が顕著に認められている。母材となる層は不明である。

【直下の層】 基本層の8層ではほとんど分解が進んでいない層である。上面では凹凸がやや認められる。7d層直下、8層上面・層中に鉄分やマンガン斑の集積などは認められない。

【畦畔】 大畦畔1条（畦畔1）が検出されている。畦畔1の検出長は8.65mで直線的に伸び、方向はN-72°-Wである。下端幅は170～240cmで水田面との比高差は0.5～6.3cmである。畦畔1から南側へ直交気泡に約2m張り出す部分がある。また、畦畔1上で径15cmの炭化物の集中箇所が検出されている。

【水田の区画】 畦畔1により南北に区画されているが、その全貌については不明である。

【水田面の傾斜】 両区画ともに大畦畔に向かって低くなる傾斜である。

【出土遺物】 出土遺物はない。

(5) 7c層検出遺構

7c層水田跡（第165・166図、写真98～100）

大畦畔1条と足跡状の凹みが検出されている。

【地形面】 7c層上面はほとんど平坦である。標高は8.7～8.8mである。

【水田域】 調査区内はすべて水田域である。耕作土である7c層がさらに広がっていることから水田域は調査区外へも広がっていると考えられる。

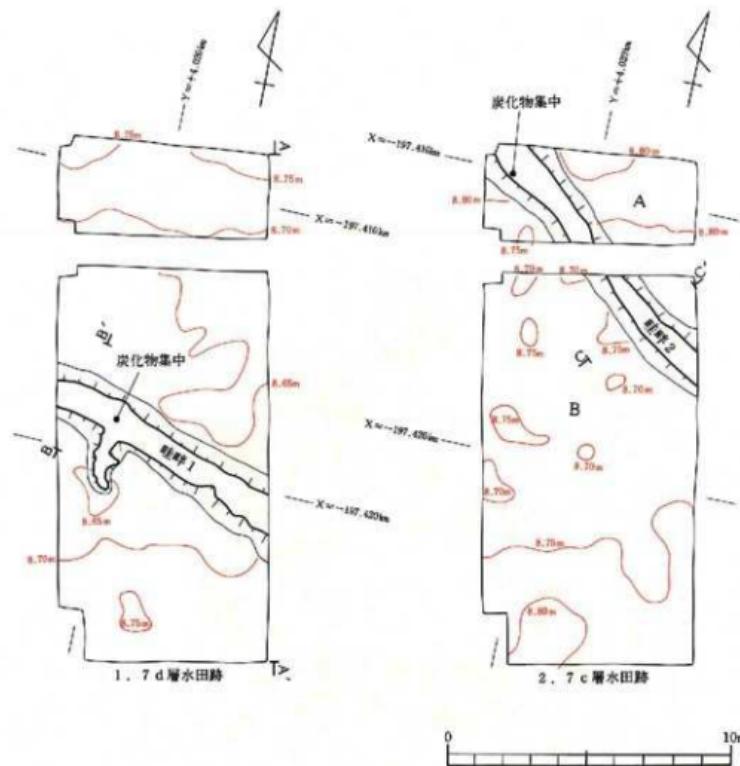
【耕作土】 基本層の7c層で黒褐色の泥炭質粘土層である。層厚は4～15cmで、下面に凹凸が

第42表 B換気口区7d層水田跡畦畔計測表

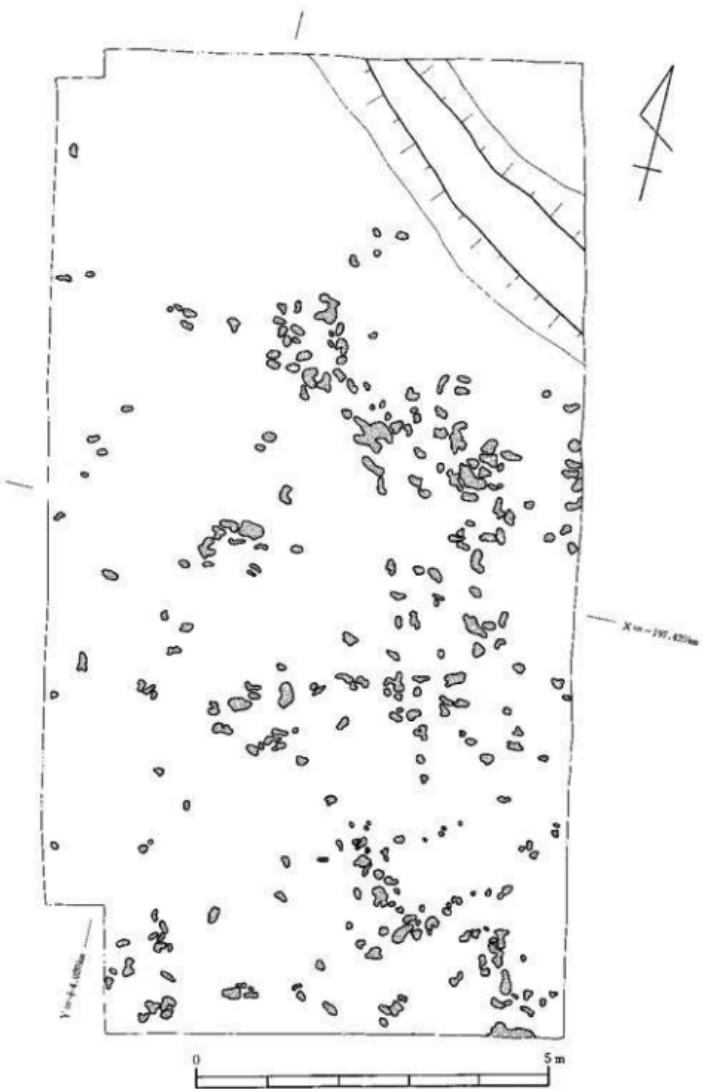
| 地盤No. | 検出長(m) | 方 向 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比高差(cm) |
|-------|--------|-----|------------------|---------|-------------------------|
| 1 | 8.65 | 東 | N 72.5°-W 65-130 | 170-240 | 北 傾 1.8-6.3 南 傾 0.5-4.4 |
| 2 | 1.90 | 東 | N 4.5°-W 45-75 | 60-140 | 西 傾 0.7-3.5 東 傾 0.9-3 |

第43表 B換気口区7c層水田跡畦畔計測表

| 地盤No. | 検出長(m) | 方 向 | 上端幅(cm) | 下端幅(cm) | 水田面との比高差(cm) |
|-------|--------|-----|----------------|---------|-----------------------|
| 1 | 9.25 | 東 | N-51°-W 30-120 | 150-240 | 北 傾 0.5-4.1 南 傾 3-6.9 |



第165図 7 d層・7 c層水田跡平面図・断面図



第166図 7C層水田跡足跡状凹み平面図

若干認められる。分解の進んだ層である。大畦畔の下部に母材層は残存していない。

[直下の層] 基本層の7d層で分解のあまり進んでいない層である。上面に若干凹凸が認められ

る。7c 層直下、7d 層直上・層中に鉄分やマンガン斑の集積は認められない。

〔畦畔〕 大畦畔 1 条(畦畔 2)が存在する。検出長は 10.8m で直線的に伸び、方向は N-51°-W である。下端幅は 150~240cm で水田面との比高差は 1~7 cm である。この大畦畔は長町南駅区の大畦畔 24 の延長上にある。畦畔の北西隅で径 15cm の炭化物の集中地点を検出している。

〔水田の区画〕 大畦畔により区画 A・B に区画されるが 7d 層と同様にその全体は不明である。

〔水田面の傾斜〕 区画 A 内は若干比高差が大きく 15cm あるが、区画 B はほぼ平坦である。

〔足跡状の凹み〕 水田面で足跡状の凹みを多数検出したが規則性は認められない(第 166 図)。凹みの堆積土は 7a 層である。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

(6) その他の出土遺物

基本層 1・3・4 層から土師器・陶磁器・杭が出土した。土師器は 1 層から 5 点、3 層から 3 点出土しているが、いずれも細片で図化し得なかった。調整技法の判るものはすべてロクロ使用のものである。陶磁器は 1 層から 3 点出土している。産地・年代が推定されたのは 2 点で、相馬の灰釉碗(18~19C)と肥前の瓶類(江戸)である。杭は 4 層上面で出土している(第 167 図)。素材は丸太材で長さ 17.5cm、径が 4.8cm、先端に加工が認められる。

(7) 小結

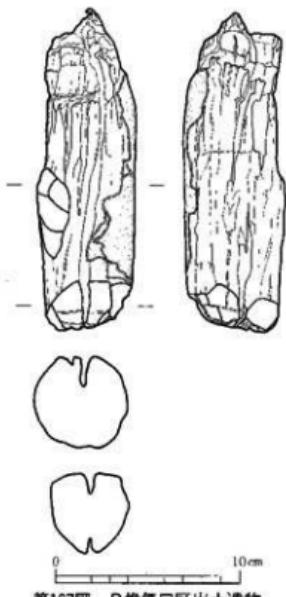
① 7d 層水田跡

7d 層から年代を決定する資料は出土していない。上層の 7c 層の時期から弥生時代中期樹形圓式期以前に位置づけられよう。

今調査では水田跡と認定したが、7d 層の分解があまり進んでいないこと、他地区では畦畔が未検出であること、下面の凹凸の分布域が限定されることなどの問題点があり、今後の周辺での調査の進展を待って検討したい。

② 7c 層水田跡

7c 層から年代を決定する資料は出土していないが、長町南駅区の 7c 層と同じ層であることから弥生時代中期樹形圓式期に位置づけられる。7c 層水田跡がさらに南へ広がっていることが確認された。



第 167 図 B換気口区出土遺物

5. 出入口区

(1) 調査の方法と経過

本調査区は長町南駅の南側の出入口部分である。82・83年の本線敷での成果より水田跡の存在が十分予想されたことから試掘を行わず本調査を実施した。

調査区は長さ35m、幅約6～12mの不整長方形である。グリッド等は設置せず、実測は任意の実測用基準杭を南北に設定し平板測量を基本として行った。なお、報文図中の国土座標は工事用の路線実測図の国土座標より図上で求めたものである。盛土のみを重機で除去しそれ以下は人力で遺構検出及び掘り込みを行った。調査区設定に必要な諸工事や盛土・旧表土掘削・残土運搬などは他工区と同様に工事業者が担当した。

調査は85年4月10日から開始し、4層で溝跡、7c層で弥生時代の水田跡を検出し、8月9日に終了した。

(2) 調査区の位置

長町南駅区VIIIb区の南に隣接している。区画整理以前は水田で標高は9.8～10mである。

(3) 基本層序

基本層序は1～18層まで確認されている。5・7次の1～7c層と基本的に同様であるが、5層が5a・5b層に、7c層が7c1・7c2層に細分された。7d層以下は隣接するB換気口区と同様である。

5a層：褐灰色(10YR4/1)泥炭質粘土。層厚2～17cm。B換気口区、5・7次の5層に対応する。

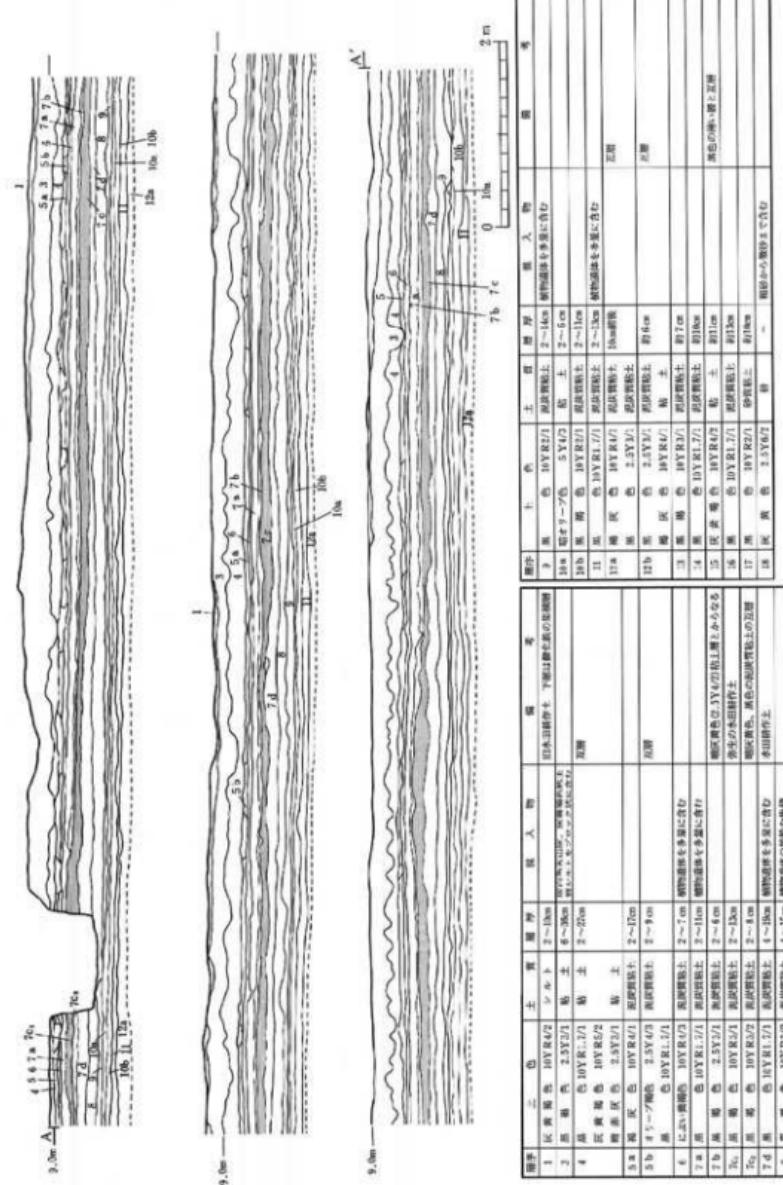
5b層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)と黒色(10YR1.7/1)の泥炭質粘土の互層。層厚2～9cm。本調査区での5a・5b層は同一面に不連続に分布する状況である。

7c1層：黒褐色(10YR3/1)泥炭質粘土。層厚2～13cmで分解の進んだ層である。7c層水田跡の大畦畔の下部に耕作土の母材となる層が確認されたため、耕作土を7c1層、母材層を7c2層とした。5・7次の7c層に対応する。

7c2層：黒褐色(10YR3/2)・暗灰黄色・黒色の泥炭質粘土の互層。大畦畔の下部に層厚2～8cmで残存していた。5・7次の7e・7f層に対応する。

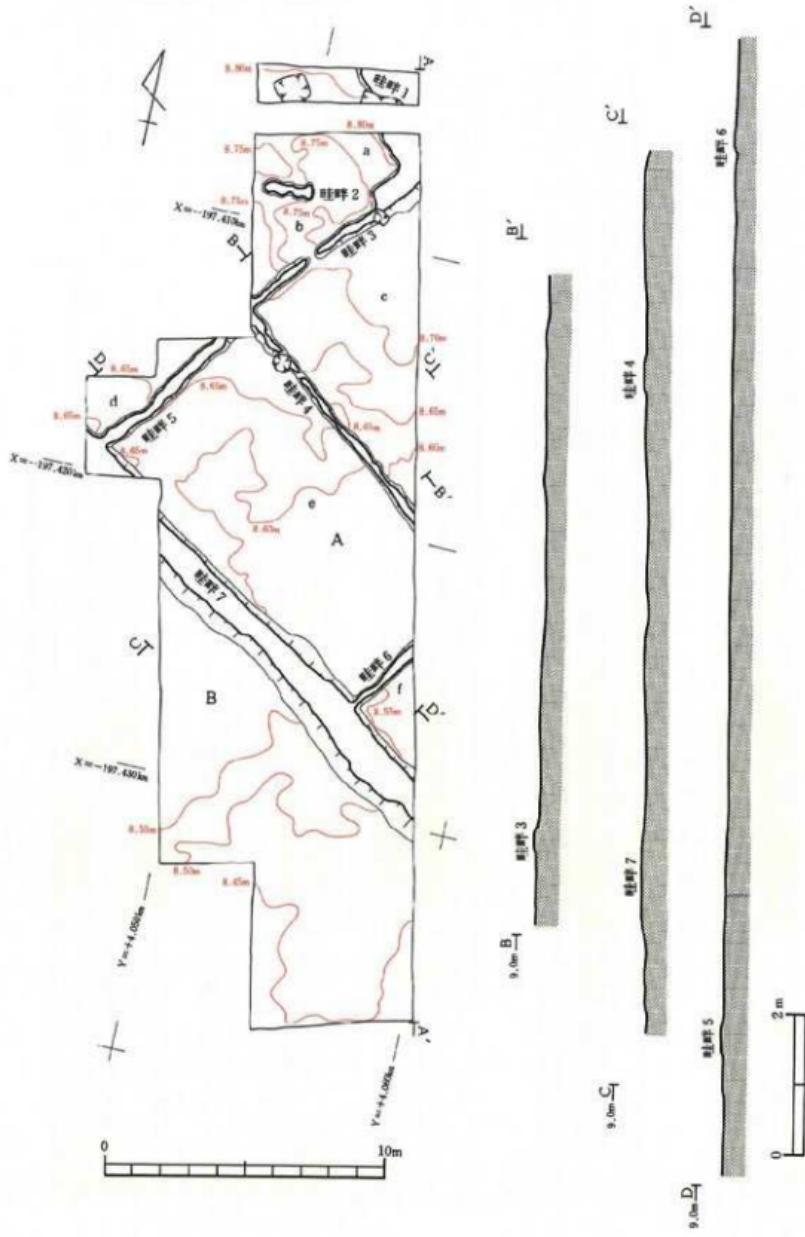
(4) 7c層検出遺構と遺物

7c層水田跡(第169図、写真101～104)



第168図 出入口区土層断面図

第169図 7c層水田跡平面図・断面図



大畦畔2条とそれらにより形成される大区画2区画(A・B)、小畦畔5条とそれらにより形成される小区画6区画(a～f)を検出している。

[地形面] ほぼ平坦であるが南東へ緩く下がる傾斜をもつていて、傾斜度は12cm/10mで、標高は8.8～8.45mである。

[水田域] 調査区全域が水田域である。耕作土はさらに区外へも延びており、水田域は調査区外へも広がっている。

[耕作土] 基本層7c1層で、黒褐色の泥炭質粘土層である。層厚は4～15cmで、下面に凹凸が認められる。大畦畔の下部に母材層7c2層の残存が認められる。7c1層は分解の進んだ層である。

[直下の層] 基本層の7d層である。上面に若干凹凸が認められる。7c1層の直下、7d層上面・層中に鉄分やマンガン斑などは認められない。

[畦畔] 大区画を形成する大畦畔と小区画を形成する小畦畔とが存在する。計測値は第44表に示した。

大畦畔となるのは畦畔1・7である。畦畔7の方向はN-55°-Wで、長町南駅区やB換気口区で確認された方向と同じである。しかしB換気口区での大畦畔の延長上には乗らず、北側へ約10mずれたところに位置する。畦畔の規模は下端幅145～210cmで、水田面との比高差は4～10cmである。畦畔1は調査区の北東隅にあり、長町南駅区での畦畔16の延長上に位置する。規模は下端幅が約1.8m(東壁からの推定値)、比高差が5～12cmである。

小畦畔となるのは畦畔2～7である。小畦畔には三つの方向がある。畦畔4が大畦畔に並行する方向N-50°-W、畦畔3・5・6が直交する方向N-35°-40°-E、畦畔2が斜めの方向N-87°-Eである。畦畔2以外は他地区で確認されている方向と同じである。小畦畔の規模は30～65cmで、水田面との比高差は1.0～5.8cmである。

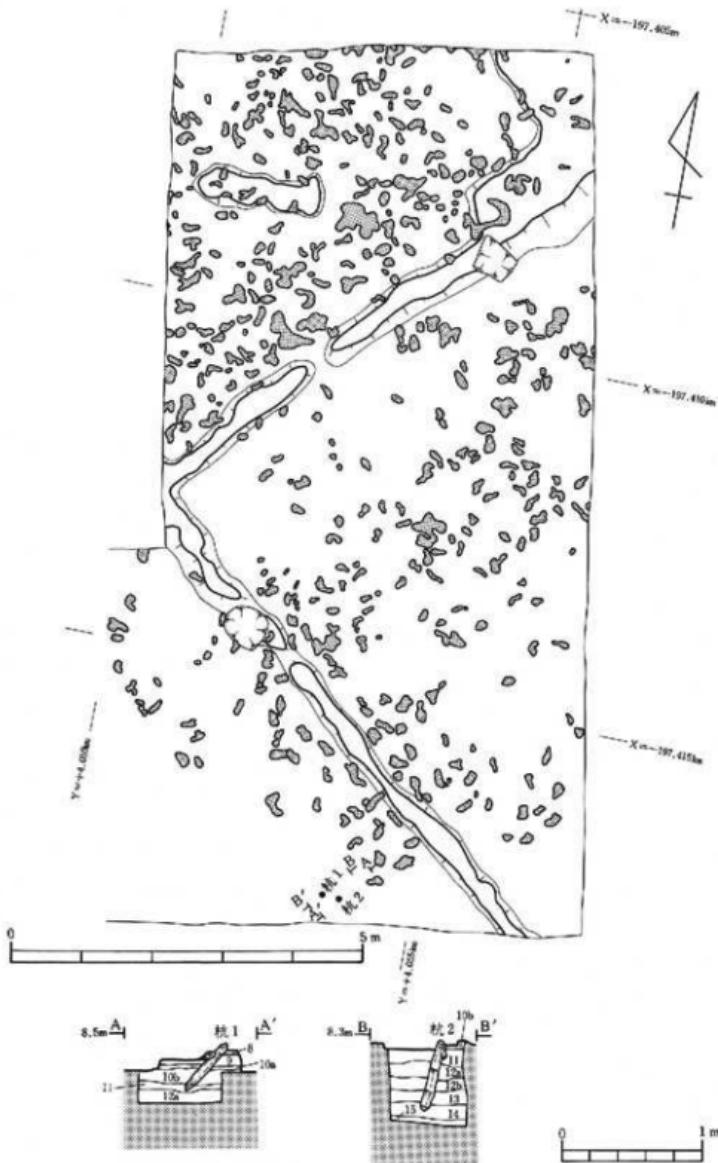
[水田の区画] 大畦畔により形成される大区画が2区画(A・B)存在する。区画の全体は不明で区画Aの短辺のみが計測可能で、その値は14.5mである。

大区画Aの中には小畦畔によりa～fまでの小区画が6枚存在する。全体の形状が判明するのはeのみで、その形状は長方形、その規模は短辺が6.3～5.5m、長辺が約12.2mで、面積が約73m²である。他地区での小区画に比較してかなり広い面積になっている。bが三角形、cが長方形になると推定されるが、他は不明である。

[水田面の傾斜] 大区画の傾斜はおおむね南東へ下がる傾斜になっている。小区画相互の関係

第44表 出入口7区c層水田跡畦畔計測表

| 序 番 号 | 標高(m) | 方 向 | 性 質 | 方 向 | 上地幅(cm) | 下地幅(cm) | 水田面との比高差(cm) | | |
|-------------|-------|---------|--------|---------|---------|---------|--------------|---------|--------|
| | | | | | | | 北 側 | 東 側 | 西 側 |
| 1 | 3.7 | N-35°-W | 泥 | - | - | - | 1.0 | 1.7 | - |
| 2 | 4.5 | 西 | 泥 | N-10°-E | 20～50 | 45～60 | 北 側 | 1.0～1.7 | 北 側 |
| 3 | 7.2 | 西 | 泥 | N-40°-E | 15～80 | 25～140 | 西 側 | 0.1～1.8 | 東 側 |
| 4 | 9.4 | 東 | 泥 | N-35°-W | 7～35 | 30～65 | 北 側 | 0.3～3.3 | 東 側 |
| 5 | 6.0 | 東 | 泥 | N-35°-E | 25～50 | 45～65 | 西 側 | 1.0～2.2 | 東 側 |
| 6 | 3.0 | 東 | 泥 | N-35°-E | 15～35 | 35～55 | 北 側 | 0.5～2.6 | 北 側 |
| 7 | 15.4 | 西 | 泥 | N-45°-W | 70～140 | 145～210 | 北 側 | 0.7～5.1 | 南 側 |



第170図 7c層水田跡足跡状凹み・杭平面図・断面図

ではa・b・dが高く、c・e・fの順に低くなっている。

また、小区画内のレベル差をみた場合、比較的広い面積のc・eにおいてはレベル差が15cm以上あり、区画内がさらに細分されていた可能性がある。

[水口] 小区画bとcを画する畦畔3のほぼ中央部で1カ所検出されている。cはbより低い水田面になっていることと整合する。水口底面は水田面と同じである。

[足跡状の凹み] 水田面で足跡状の凹みを多数検出した。凹みの堆積土は7b層である。それらの位置関係に規則性は認められない。

[出土遺物] 耕作土中より石器が1点出土している。

石器(第172図、写真127)：粗削り片を使用し、鋭角な角度をもつ1側縁に二次加工が施されたものである。石材は頁岩である。

(5) 4層検出遺構と遺物

調査区北半部で溝状遺構を4条検出している(第171図、写真105)。

S D 1

検出長は約6.4m、東端でS D 4に合流している。方向はN-81°-Wである。上端幅は50~70cm、下端幅は20~40cm、深さは約15cmである。堆積土は1層で出土遺物はない。

S D 2

検出長は約4.5mでS D 1同様東端でS D 4に合流している。方向はN-81°-Wである。上端幅は40~110cm、下端幅は15~70cm、深さ約12cmである。堆積土は2層で出土遺物はない。

S D 3

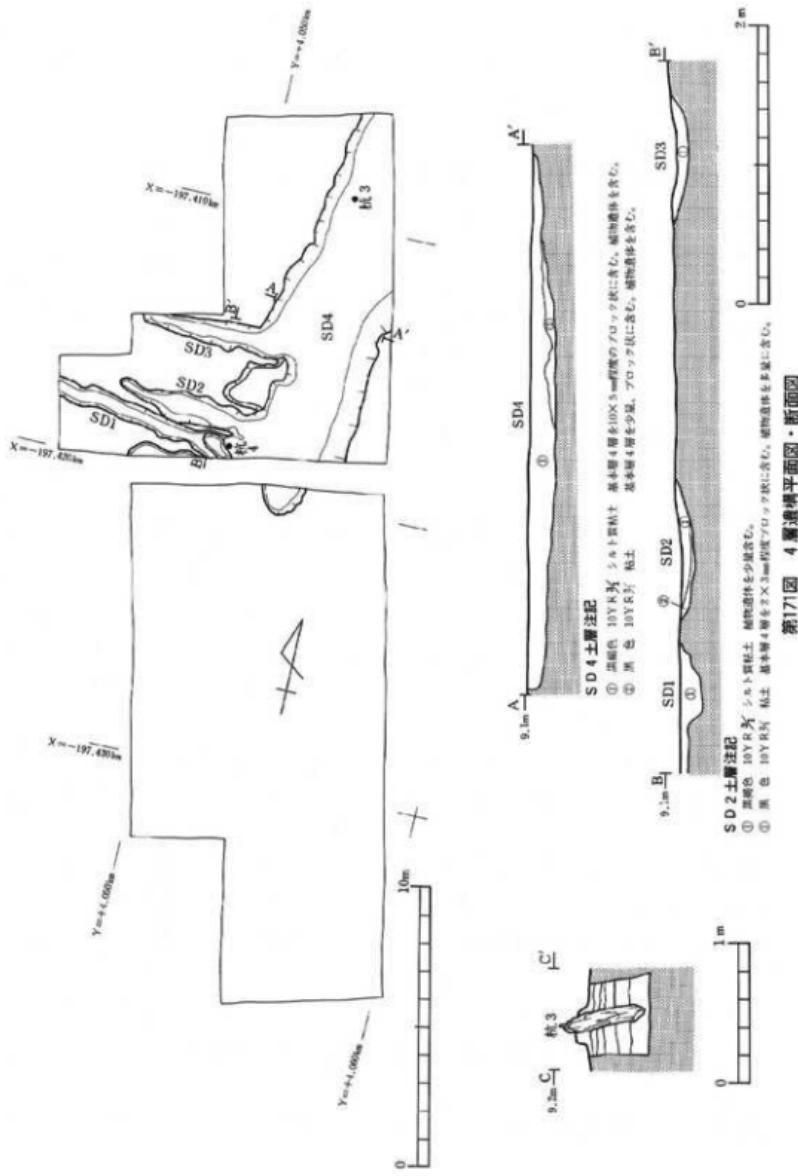
検出長は約5mで、S D 1・2同様東端でS D 4に合流する。方向はN-88°-Wである。上端幅は60~100cm、下端幅は20~50cm、深さは約13cmである。堆積土は1層で出土遺物はない。

S D 4

調査区を斜めに縦断する。長町南駅区で検出されたS D 6の延長上に位置する。検出長は約14.5mでS D 1・2・3が合流している。方向はN-11°-Eである。上端幅が380~490cmで、下端幅が270~300cmで、深さが約20cmである。堆積土は2層である。堆積土中から土師器、石器、杭が出土している。

土師器(第173図2、写真126)：2は製作時にロクロを使用した高台付壺の底部で、内面はヘラミガキ後黒色処理され、底部の切り離しは回転糸切りである。平安時代の表衫ノ入式に比定される。

石器(第173図1、写真127)：主要剥離面側の末端部に微細な二次加工のある剝片で、石材は流紋岩である。



第171図 4番遺構平面図・断面図

杭（第173図4・5）：ともに丸太材で先端に加工が認められる。

4層出土遺物 4層上面で石器が1点出土している。

石器（第173図3、写真127）：主要剥離面側の縁辺に微細剥離痕のある石器で、石材は流紋岩である。

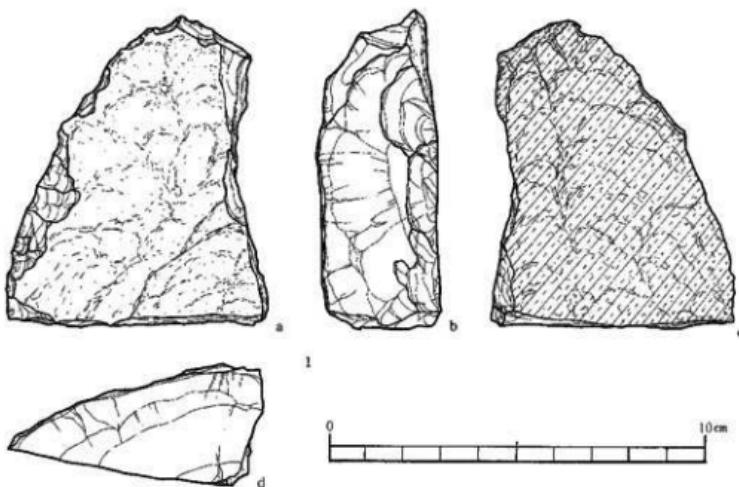
（6）その他の出土遺物

基本層1・3層から弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石製品・木製品・杭などが出土した。そのうち石製品2点、木製品1点、杭2点を図示した。土器類はすべて細片で図示できるものはない。弥生土器片は3層出土のもの1点で内面に粗痕がある（写真126-8）。土師器は1層で1点、3層で5点出土しているが調整技法はいずれも不明である。陶磁器は1層で33点、3層で2点出土している。産地、年代が推定できたのは9点である。3層出土の陶器片のうち1点は在地の中世陶器（13～14C）である。他の陶磁器はすべて1層で年代は近世以降のものである。

石製品（第174図2・3、写真127）：2は3層出土の砥石で、3は敲打痕のある砾石器である。

木製品（第174図1）：1は3層出土の曲物の底板か蓋と考えられるものである。

杭（第174図4・5、写真126）：4が8層出土、5が10b層出土である。ともに丸太材で5には先端に加工が認められる。



第172図 出入口区出土遺物（1）

(7) 小結

① 7c 層水田跡

7c1層から年代を決定できる資料は出土していないが、5・7次の7c層と同じ層であることから弥生時代中期樹形開式期に位置づけられる。

この7c層水田跡は5・7次の7c層水田跡と同一のもので、連続する大畦畔も確認されている。その構造は大畦畔により大区画を形成し、その内部をさらに小畦畔により区画するものである。大畦畔の方向は傾斜に沿った方向で、小畦畔は大畦畔に直交ないし平行する方向である。小区画の形状は長方形で、面積は約73m²である。

このように小区画の面積などに多少の差異が認められるものの、その構造は5・7次と基本的に同様である。

② 4層検出遺構

4層で検出した遺構の中で年代が決定できる資料を出土したのはSD4のみである。出土した土師器は平安時代の表杉ノ入式に比定されることからSD4は平安時代に位置づけられよう。一方、5・7次でも同層で溝跡を検出している。そこでSD2は奈良時代に位置づけられていることから4層検出の溝は奈良時代から平安時代のものとされよう。

これらの遺構の性格は不明だが方向が真北、真東西方向に近いことから条里型土地割に関連したものである可能性が考えられよう。

第45表 出入口区遺物観察表

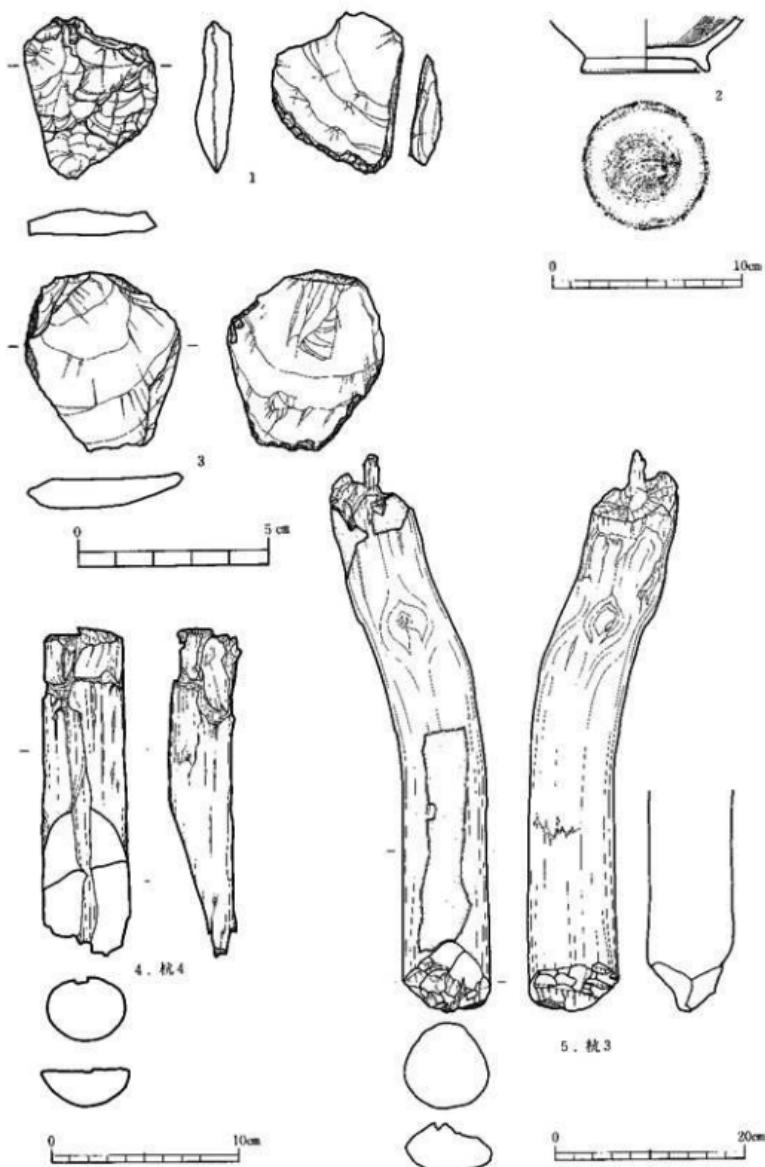
| 地盤番号 | 登録番号 | 深度・部位 | 種別 | 基盤 | 高さ | 底面 | 特徴 | 写真番号 |
|-------|------|--------|----|------|-----|-----|----------------------------|------|
| 173-2 | D1 | SD4 5層 | 土器 | 面付付灰 | 8.5 | 6.5 | ヤクコ。付蓋台。底部可逆手柄。内面ヘリコロ化粧瓦底板 | 126 |

石製品

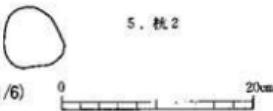
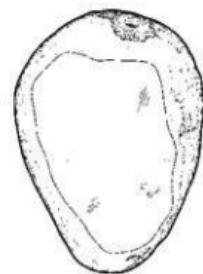
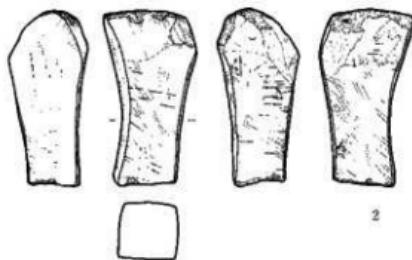
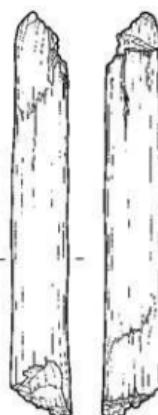
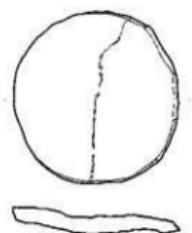
| 地盤番号 | 登録番号 | 深度・部位 | 種別 | 造形 | 造形 | 高さ | 横幅 | 厚さ | 重量 | 特徴 | 写真番号 |
|-------|------|---------|--------|-----|----|-------|-------|------|-------|-----|------|
| 171-1 | K3 | 7c 層水田跡 | スクリーパー | 丸 | 丸 | 95.8 | 69.6 | 32.8 | 166.1 | 付蓋台 | 127 |
| 173-1 | K2 | SD4 1層 | 切削加工物 | 丸 | 丸 | 43.2 | 26.0 | 14.6 | 12.1 | 鉄鋸刃 | 127 |
| 173-3 | K1 | 4層 | 鉄鋸刃 | 丸 | 丸 | 68.4 | 43.4 | 9.3 | 16.9 | 鉄鋸刃 | 127 |
| 174-2 | K5 | 3層 | 石 | 打削欠 | 丸 | 92.2 | 64.0 | 50.6 | 247.3 | | 127 |
| 174-3 | K6 | 3層 | 石 | 磨 | 丸 | 143.0 | 105.0 | 36.0 | 775.0 | 安心磨 | 127 |

枕

| 地盤番号 | 地盤番号 | 深度・部位 | 素材 | 奥行き | 幅 | 厚さ | 上端面 | 下端面 | 地盤番号 | 特徴 | 写真番号 |
|------|------|--------|-----|-------|-----|----|-----|-----|------|----|------|
| 173 | 机 4 | 4層 | 丸太材 | 17.55 | 4.7 | - | ○ | - | | | |
| | 机 5 | 4層上部 | 丸太材 | 60.3 | 5.9 | - | ○ | - | | | |
| 174 | 机 1 | 8層 | 丸太材 | 43.4 | 5.8 | - | × | - | | | 126 |
| | 机 2 | 10a+b層 | 丸太材 | 50.2 | 6.4 | - | ○ | - | | | 126 |



第173圖 出入口區出土遺物（2）



第174図 出入口区出土遺物（3）（杭は1/6）

0 10cm

VII まとめ

1. 調査成果の概要

本報告書は富沢遺跡第1～5・7・13・16・17次調査、泉崎浦遺跡第2次調査の報告である。これらは高速鉄道建設に伴う事前調査であり、富沢遺跡、泉崎浦遺跡内を約1kmにわたり縦断するものであった。また、今年度で48次まで数えるに至った富沢遺跡調査の初期段階のものである。その成果を13の柱状図で模式的に表現したのが第175図である。この図をもとに以下に調査成果の概要を述べる。

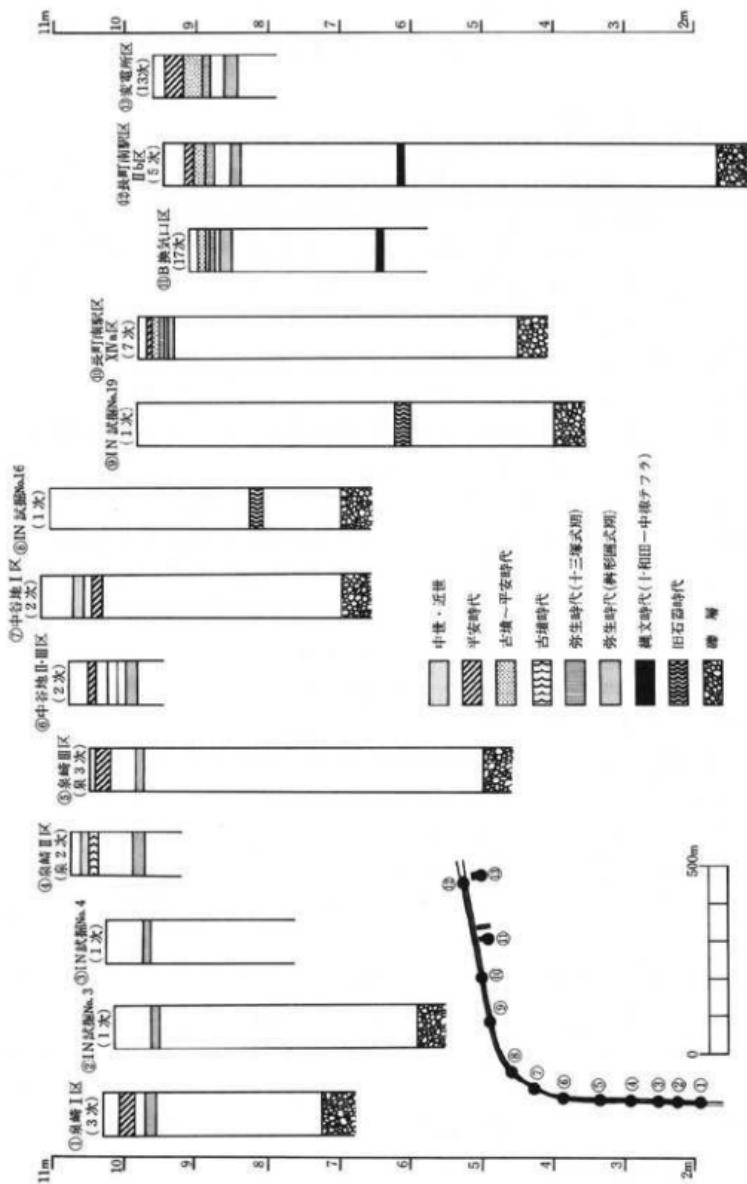
(1) 旧石器時代

旧石器時代の遺構・人工遺物は検出されなかったが、⑧の中谷地地区試掘区No.16で行われた花粉分析の結果から旧石器時代の層が確認された(VII-7参照)。それによると17～19層にかけては最終氷期後半期の植生となり、この周辺にはミズゴケ湿原とそれを取り囲むトウヒ属・モミ属・カラマツ属などの亜高山帯針葉樹林が存在していた。17・18層は、グライ化して緑灰色系統になった土層にある暗赤褐色の層である。17層中には毬果などが含まれていた。その標高は8.3m前後である。⑨のIN試掘No.19においてもグライ化した層中に樹木片を含む38層が確認されている。その標高は約6.2mで、IN試掘No.16の場合よりかなり低くなっている。これは基底疊層の高低差に起因すると考えられる。基底疊層は⑩から⑫の方向に低くなり、次項で述べる約5500年前の火山灰の標高も6～6.5mとなることなどから、旧石器時代の層は東方へさらに下降していくと推定される。

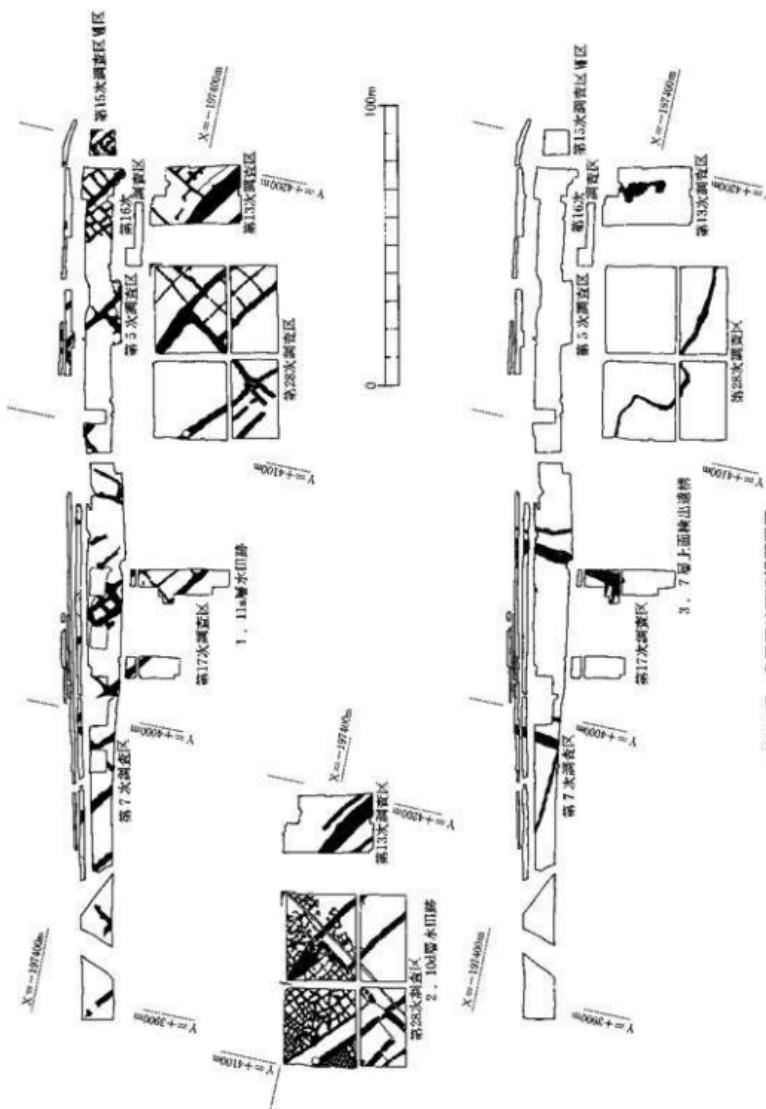
(2) 繩文時代

縩文時代の遺構遺物は検出されなかったが、⑪の長町南駅B換気口区(17次)24層中と⑫(5次)の同II b区33層で縩文時代の火山灰が検出された。この火山灰の検出状況や年代等については既に概報Vに報告されている(斎野:1986)。

この火山灰の年代は上下の層を¹⁴C年代測定した結果、約5500年前の時期に位置づけられた(VII-9)。また、この火山灰と類似したものは、富沢遺跡15次31層中、同28次調査29層上部、山口遺跡2次調査16層上面、下ノ内浦遺跡2次調査16層中で検出されている。これらの火山灰については既に数回分析が行われている(山田・庄子1987、同1988)。それによれば、⑪(5次)、15次、28次の火山灰は同一のものと考えられ、また、山口遺跡の火山灰は同一のものと推定されている。噴出源についてはある程度限定されたが断定するまでには至らなかった。しかし、今回の分析により、約5500年前の縩文時代前期に降下した十和田火山起源の中摺テフラと同定された(VII-5)。



第175図 時期別層序対比図



第176图 麻居寨地区灌排配置图

(3) 弥生時代

弥生時代の水田跡が、①～⑥、⑩～⑬で検出されており（③・⑥は推定）、かなり広範囲に水田が存在していたことが判明した。但し、⑩～⑬の鳥居原地区と①～⑥の中谷地地区より南では水田の時期や立地などの点で以下のように若干の相違が見られる。

鳥居原地区の水田跡は、樹形凹式期以前、樹形凹式期、樹形凹式期～十三塚式期、十三塚式期の4時期存在し、それらは東へ傾斜しながら標高8.5～9.5mの間におさまる。すでにII-1で述べられているように鳥居原地区は其底疊層が最も低く、丘陵部からの堆積物の供給が微弱な所である。そのような立地条件のもとに発達した泥炭層が、弥生時代の水田耕作の条件に適していたために、数時期にわたり水田が営まれたと言えよう。

当地区での調査は数多く、第5・7・13・17・28次調査および15次VII区の調査が近接して行われている。そのうちの樹形凹式期の水田跡をまとめたのが第176図1である。各地区で検出された畦畔の方向や規模はほぼ一致しており、大畦畔で画された大区画内を小畦畔でさらに区画する形態も同様である。また、大畦畔は各地区にまたがって検出されており、5次畦畔3-28次畦畔6-13次畦畔2は総延長約66mになるほどである。第176図2は樹形凹式期～十三塚式期の13次と28次の水田跡である。両者とも畦畔の方向は前段階と同様だが、小畦畔による区画はかなり小規模化し変容している。

一方、中谷地II区より南の水田跡は樹形凹式期の1時期しか確認されていない。その標高は9.6～10mでほぼ一定であるが鳥居原地区よりもやや高くなっている。II-1で前述されているように、泉崎浦周辺では西方の金沢沢からの堆積物の供給が微弱なときに泥炭層が形成されている。その泥炭層上面の標高は9～9.5mで、調査で確認された水田層の標高をほぼ同様である。従って泉崎I区から中谷地II区にかけては、その泥炭層を利用して弥生時代の水田耕作が行われていたと考えられる。この泥炭層は鳥居原地区まで連続しており（II-1）、弥生時代にはこの周辺一帯には淀口に適した泥炭層が広範囲に存在したことになる。また、泉崎浦周辺では微地形に変化があったことが、泉崎II区において弥生時代の水田層の上に古墳時代の遺構の検出面となる厚い砂層が存在することから窺える。

遺物は、少量ではあるが弥生土器、石器、木製品などが出土している。特に鳥居原地区からは石庖丁や大型板状安山岩製石器、ほぼ完形の一木鋤などが出土している。

(4) 古墳時代

古墳時代の集落跡が④の泉崎浦地区（泉崎浦2次）のみで検出されている。泉崎浦地区は金沢沢が形成した微高地上に立地しており、他地区的遺構面より高くなっている。竪穴住居跡1軒は微高地南側に、墓跡と考えられる小溝状遺構群と遺物包含層は微高地から連続する傾斜面上に位置している。これらの遺構の時期は出土土器から古墳時代中期南小泉式期に位置づけられ

た。また、古墳時代前半に位置づけられる土師器高坏も出土でしている。

前項でもふれたがこれらの遺構は砂層の上面で検出されており、その下位には弥生時代の水田層が存在する。したがって、泉崎浦周辺では、弥生時代の水田が金洗沢から供給された土砂により埋没し、その土砂が形成した微高地上に古墳時代の集落が形成されたと考えられる。他地区では同時期の遺構が未検出であり、今後の調査の進展に期待したい。

(5) 古墳～平安時代

古墳時代から平安時代にかけての時期と考えられる遺構が⑩～⑫の鳥居原地区の同一層上面で検出された。隣接する28次調査区でも同一層で溝跡が検出されている。その層は7・17次4層=13次6層=28次7・8層であり、溝跡11条、何らかの水利施設1基が検出されている（第176図3）。これらの遺構は東西約240m、南北約50mにわたって検出されている。方向は溝跡は幅の広いもの（3～4.5m）と狭いもの（0.4～1.1m）とがあり、その方向はほぼ東西・南北方向である。これらの溝は周辺に集落に関連する遺構がないことや上層が水田層であることなどから水田に関係した溝と考えられる。

これらの遺構は、灰白色火山灰の関係する水田跡の下位にあり、しかも同一層上面で検出されるという共通性があり、何らかの関連性が予想されるが、詳しくは今後の事例の増加に期待したい。

(6) 平安時代

平安時代の水田跡が検出されている。①⑤⑥⑦⑩～⑫で広範囲に確認されている。その時期は灰白色火山灰の状態により、灰白色火山灰降下以前、降下前後、降下以降の時期に位置づけられる。

この時期の条里型土地割との関連では⑬の変電所区で坪境と考えられる南北方向の大畦畔が検出されている。この坪境については、近年の富沢遺跡の検討（平間1988）すでにその存在が指摘されていた。今回の報告で座標はY=+4.1875～4.189kmと計測され、15次調査での坪境の大畦畔（Y=+4.407m）との差は219.5～218mで2で割ると109.75～109mとなることが判明した。

なお、灰白色火山灰降下以降の水田にはその下限が近世になるものも存在した。

(7) 中世

中世の水田跡と溝跡が⑦の中谷地地区のみで検出されている。溝跡は護岸用の杭列を伴うものである。これと同一と考えられる溝跡が隣接する30次調査区（仙台市教委：1987）で検出されており、詳細はその成果に委ねたい。

(8) 近世

近世の墓壙群が④の泉崎浦地区で検出されている。微高地の南縁辺に30数基集中して確認さ

れており、17C中頃から19Cまで機能していたと考えられる。この地区は近世富沢村に属している。この墓壙群が集落の共同墓地であったか、屋敷（同族）墓であったかは不明である。一方、明治38年測図の地図（第176図）に墓地が認められ、昭和13年の地図には認められないことから、おそらく大正年間頃に忘れ去られていったと考えられる。



第177図 明治時代の泉崎周辺 (1/10000)

2.まとめ

- 富沢遺跡は郡山低地西部に立地している。郡山低地は仙台市東南部に位置し、広瀬川と名取川とにはさまれた部分に形成された低湿地帯である。泉崎浦遺跡は富沢遺跡内に存在する微高地上に立地している。
- 今回の調査は富沢・泉崎浦遺跡を縦断する地下鉄路線を対象としたもので、約1kmの区間に試掘・本調査を合わせほぼ連続的なトレンチを設定した。
- JII石器時代の遺構遺物は検出されなかったが、中谷地地区における花粉分析で最終氷期後半の層が確認された。
- 繩文時代の遺構遺物は検出されなかったが、鳥居原地区で約5500年前の十和田火山起源の中振テフラが確認された。
- 弥生時代中期の水田跡がほぼ全城にわたり検出された。とくに樹形凹式期の水田跡はかなり広範囲に存在していることが判明した。また、弥生時代の遺物として、土器の他に石庖丁や木製農具（一本鎌、鋤先など）が出土している。
- 古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、烟跡と考えられる小溝状遺構群、遺物包含層が泉崎浦地区で検出された。泉崎浦の微高地に古墳時代の集落が存在していたと考えられる。
- 奈良時代から平安時代にかけての時期に、水田跡に関連した考えられる溝跡10条、杭列を伴う落ち込み遺構が、鍋田地区の同じ層上面で検出された。
- 平安時代の水田跡が広範囲に検出された。特に鳥居原地区では条里型土地割の坪境と考えられる南北方向の大畦跡が検出されている。
- 中世の水田跡と溝跡1条が中谷地地区で検出された。
- 近世の墓壙群30数基が泉崎浦地区で検出された。

引用・参考文献（五十音順）

- 荒井 格：1984「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第69集
- 氏家和典：1957「東北土器群の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 太田昭夫：1980「大槻遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第71集
- 岡村道雄：1988「東北地方の绳文時代における塩生産」『考古学ジャーナル』第298号 28~32
- 小野久隆・奥野 都：1978「大阪池上遺跡第4分冊の1 木器編」『大阪文化財センター』
- 木村清二他：1985「郡山遺跡V」仙台市文化財調査報告書第74集
- 工藤喜司他：1984「高沢水田遺跡 第1冊—病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書」仙台市文化財調査報告書第67集
- 古泉 弘：1987「江戸の考古学」考古学ライブラリー48 ニュー・サイエンス社
- 秦野裕彦・荒井 格：1983「鳥居原遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』仙台市文化財調査報告書第56集
- 秦野裕彦：1985「富沢水田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV』仙台市文化財調査報告書第82集
- 秦野裕彦：1986「富沢水田遺跡鳥居原地区33層の火山灰について」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V』仙台市文化財調査報告書第89集
- 秦野裕彦他：1987「富沢一高沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集
- 佐藤甲二他：1985「雨小泉遺跡—第12次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第80集
- 佐藤甲二：1988「高沢遺跡第28次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第114集
- 佐藤 洋他：1981「山口遺跡」仙台市文化財調査報告書第33集
- 佐藤 洋：1988「富沢遺跡—第34次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第118集
- 篠原信彦他：1982「仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I」仙台市文化財調査報告書第40集
- 渋谷季雄：1980「泉崎浦遺跡試掘調査報告」「午報I」仙台市文化財調査報告書第23集
- 志間泰治：1971「鹽釜遺跡」
- 主浜光朗：1988「泉崎浦遺跡」仙台市文化財調査報告書第119集
- 白鳥良一・加藤道男：1974「岩切鶴ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第35集
- 白鳥良一：1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡研究所
- 白金館址遺跡調査団：1988「白金館址遺跡I」白金館址（特別養護老人ホーム建設用地）遺跡調査会
- 新庄延元晴他：1985「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書I」宮城県文化財調査報告書第107集
- 須藤 隆：1984a「中沢貝塚」東北大学文学部考古学研究会
- 須藤 隆：1984b「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』第1巻 237~303清文堂出版
- 仙台市教育委員会：1987「富沢遺跡第30次調査現地説明会資料」
- 仙台市教育委員会：1988「富沢遺跡第30次調査現地説明会資料」
- 高橋勝也：1983「中谷地遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II』仙台市文化財調査報告書第56集
- 田嶋明人他：1986「漆町遺跡I」石川県立埋蔵文化財センター
- 川中利和：1981「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集

- 田中則和・主浜光朗・佐藤甲二：1984『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集
- 動坂貝塚調査團：1978『文京区動坂遺跡』動坂貝塚調査会
- 丹羽 茂・小野寺洋一郎・阿部博志：「清水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」宮城県文化財調査報告書第77集
- 丹羽 茂：1993『宮前遺跡』『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集
- 白山西四丁目遺跡調査團：1981『文京区白山西四丁目遺跡』白山西四丁目遺跡調査会
- 平間亮輔：1988『平安時代の条里型土地割について』『日本における稻作農耕の起源と展開』日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム・資料集』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会
- 平間亮輔：1989『宮沢・泉崎浦・山口遺跡－富沢遺跡第36～48次・泉崎浦遺跡第4次・山口遺跡第5～8次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第128集
- 真砂遺跡調査團：1987『真砂遺跡』真砂遺跡調査会
- 真山 悟：1981『家老内遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集
- 真山 悟・菊地透大・鈴木真一郎：1988『富沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第129集
- 宮城県教育委員会：1986『塩釜市新浜遺跡』宮城県文化財調査報告書第113集
- 山川一郎・庄子貞雄：1987『第9章富沢遺跡の下部火山灰と第15次噴出32a層の土壤』『富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 437～438
- 山田一郎・庄子貞雄：1988『第IV章3. 富沢遺跡第28次調査の土壤と火山灰』『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集 129～130
- 結城恵一・佐藤 洋：1985『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集
- 吉岡恭平：1983『泉崎前遺跡、泉崎浦遺跡』『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報表II』仙台市文化財調査報告書第56集
- 吉岡恭平：1986『富沢水田遺跡鳥居原地区』『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報表V』仙台市文化財調査報告書第89集
- 渡辺 誠：1986『富沢水田遺跡』『仙台平野の遺跡群V』仙台市文化財調査報告書第87集

VIII 自然科学的分析

1. 仙台：富沢遺跡(泉崎前および鍋田地区)における プラント・オパール分析

宮崎大学 藤原 宏志

富沢水田遺跡は仙台市の南西部、名取川と広瀬川に挟まれる低地に位置している。昭和57年、当該遺跡の近傍に位置する山口遺跡調査の際、プラント・オパール分析を行い平安時代および中世の水田址を検出している。その後、富沢遺跡で進められた発掘調査により、弥生時代中期以降の水田址が広範に埋蔵されていることが明らかになり、富沢水田遺跡と呼ぶにふさわしい成果が挙げられている。

本稿では泉崎前および鍋田地区におけるプラント・オパール分析結果を踏まえ、当該遺跡の水田址につき若干の検討を加えることにしたい。

1 試料および分析法

分析に供した土壤試料は泉崎-Ⅰ区(11試料)、泉崎-Ⅲ区(9試料)および鍋田-2区(13試料)、鍋田-5区(15試料)の各地点で採取されたものである。各試料は試掘坑壁から試料採取用円筒を用い、各土層ごとに採取した。

プラント・オパール分析はプラント・オパール定量分析法の常法に従い、宮崎大学農学部で行った。

2 分析結果

分析結果は図に示すとおりである。

3 分析結果の検討

(1) 泉崎-Ⅰ

1) 1-11層の各層でほぼ連続的にイネが検出された。11層は弥生時代中期の遺物包含層で、その後の発掘調査により水田遺構が検出されている。したがって、ここでは弥生時代中期以降、ほぼ連続的に水田稻作が営まれたとみてよかろう。

2) 23層ではタケ類が卓越している。おそらく、このタケ類は樹林の下床植生として繁茂したものであろう。その後、11層堆積時までヨシが増加し、湿润な堆積環境で推移したことがうかがえる。

3) 11層で水田が拓かれるとともに、再びタケ類が増加はじめる。このことは低湿地が開拓されたことにより水管理が行われた結果、周辺部に乾地が生じたことを示すものであろう。

(2) 泉崎-III

1) 15層は弥生時代中期（折形開式）の遺物包含層であり、発掘調査により水田遺構が検出されている。ここでも、弥生時代以降、短い中断のあった可能性はあるが、ほぼ連続的に稻作がおこなわれたことがわかる。

2) 7層以下ではヨシが卓越しているが、5層以上では、タケ類が増加している。おそらく、灌漑施設の進展がもたらした結果と思われる。

(3) 鍋田-2

1) 6-9層で少量のイネが検出される。検出量からみて、周辺からの流入ないし短期間の稻作跡と判断される。その後、考古学的調査により6層上面に畦畔らしきもの（擬似畦畔）が検出された。おそらく、短期間（50年未満）の稻作が行われたのであろう。

2) ここでは、5層以下でヨシが卓越しており、タケ類がヨシを凌ぐのは4層（古墳-平安時代）以降である。イネの生産総量とも合わせ考えると、ここで水管理が行き渡るのは4層堆積時以降と推量される。

(4) 鍋田-5

1) 5-8層でイネが検出されるが量的に少ない。近傍からの流入か短期間の稻作の結果と考えられる。

2) 11層でタケ類がやや卓越している。樹林地が低湿地化しつつある時期を示すものであろう。4-10層はヨシが卓越し、3層以降タケ類が増加する。

ここでも、鍋田-2地点と同様に灌漑施設が整備されるのは古墳-平安時代以降であることが伺える。

4 まとめ

(1) 弥生時代中期の水田址が確認されたことにより、同時期に当該地方で水田稻作が営まれていたことに疑念を挟む余地はなくなった。東北地方の日本海側では、より早い時期の稻作が確認されていることを考えると、当該地方でも弥生時代中期以前に稻作が行われていた可能性も考慮しておく必要があろう。

(2) 泉崎地区と鍋田地区を比較すると、泉崎地区の方が早い時期（弥生時代中期）に安定した水田（生産総量から100年以上継続したと推量される）が拓かれたと推定されるとともに、イネ以外の植生変遷の様子から灌漑施設の整備も早かったものと考えられる。

第1表 プラント・オバール定量分析結果

泉崎-Ⅰ Sampling block[No.1] Sampling date(9/8'82)

| 番名 | イネ (O. sati.) | イネ粒 (rice g.) | 植物体乾重 (t/10a.cm) | キビ苗 (Panl.) | キビ苗種子 (Panl. seed) | ヨシ (Phrag.) | タケ類 (Bamb.) | ウシクサ族 (Andro.) |
|---------|------------------|------------------|---------------------|----------------|-----------------------|----------------|----------------|-------------------|
| 1 - 2 b | 7.735 | 2.710 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 3.283 | 0.000 |
| 2 c | 4.925 | 1.726 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 4.021 | 0.000 |
| 3 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.762 | 0.000 |
| 4 | 2.747 | 0.962 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 3.139 | 0.000 |
| 5 - 10 | 2.210 | 0.774 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.706 | 0.000 |
| 11 | 7.225 | 2.531 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 6.623 | 1.114 | 0.000 |
| 12 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.877 | 0.715 | 0.000 |
| 13 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 3.271 | 0.566 | 0.000 |
| 14 - 19 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.193 | 0.000 |
| 20 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.640 | 0.000 |
| 22 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.949 | 2.510 | 0.000 |
| 23 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 5.646 | 0.000 |

泉崎-III Sampling block[No.3] Sampling date(5/12'82)

| 番名 | イネ (O. sati.) | イネ粒 (rice g.) | 植物体乾重 (t/10a.cm) | キビ苗 (Panl.) | キビ苗種子 (Panl. seed) | ヨシ (Phrag.) | タケ類 (Bamb.) | ウシクサ族 (Andro.) |
|---------|------------------|------------------|---------------------|----------------|-----------------------|----------------|----------------|-------------------|
| 1 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 |
| 2 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.943 | 0.000 |
| 5 | 3.302 | 1.332 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.327 | 2.702 | 0.000 |
| 7 | 7.012 | 2.457 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 6.993 | 0.220 | 0.000 |
| 11 | 0.363 | 0.127 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.856 | 6.348 | 0.000 |
| 12 | 1.055 | 0.379 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.829 | 1.330 | 0.000 |
| 13 - 14 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 4.827 | 1.987 | 0.000 |
| 15 | 3.306 | 1.158 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.397 | 1.038 | 0.000 |
| 16 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.521 | 0.702 | 0.000 |

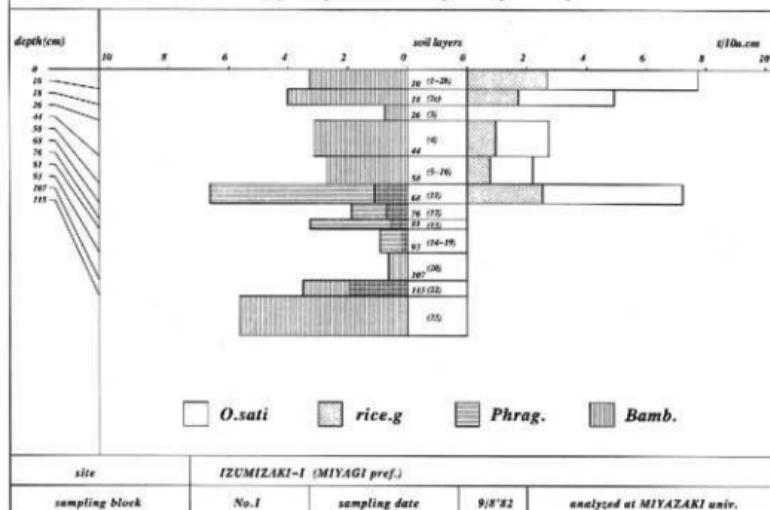
鶴田-2 Sampling block[No.2] Sampling date(9/8'82)

| 番名 | イネ (O. sati.) | イネ粒 (rice g.) | 植物体乾重 (t/10a.cm) | キビ苗 (Panl.) | キビ苗種子 (Panl. seed) | ヨシ (Phrag.) | タケ類 (Bamb.) | ウシクサ族 (Andro.) |
|-----|------------------|------------------|---------------------|----------------|-----------------------|----------------|----------------|-------------------|
| 1 | 12.480 | 4.372 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.919 | 0.000 |
| 3 | 30.371 | 10.640 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 5.507 | 6.866 | 0.000 |
| 4 | 4.866 | 1.705 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.912 | 2.781 | 0.000 |
| 5 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.805 | 0.563 | 0.000 |
| 6 | 0.543 | 0.190 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.280 | 1.307 | 0.000 |
| 7 a | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.032 | 0.214 | 0.000 |
| 7 b | 0.333 | 0.117 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.429 | 0.633 | 0.000 |
| 7 c | 0.500 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.879 | 0.533 | 0.000 |
| 8 | 1.138 | 0.399 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.383 | 0.637 | 0.000 |
| 9 | 0.145 | 0.051 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.726 | 0.165 | 0.000 |
| 10 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.992 | 0.016 | 0.000 |
| 11 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.503 | 0.055 | 0.000 |
| 12 | 0.600 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.530 | 0.331 | 0.000 |

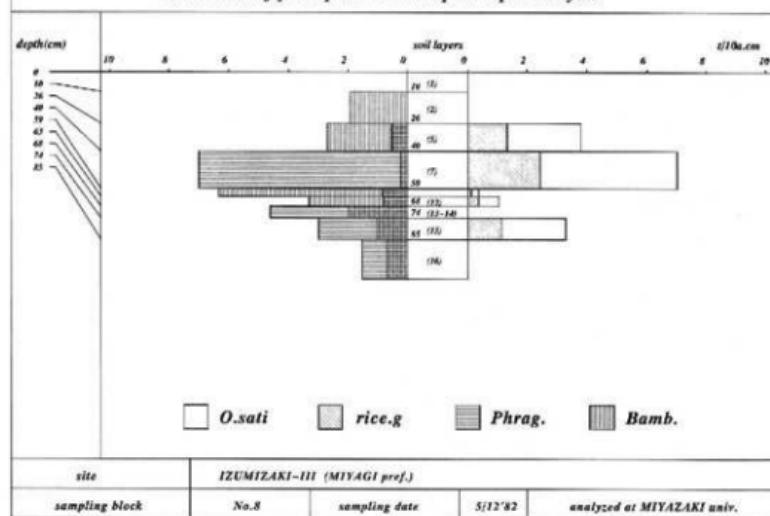
鶴田-5 Sampling block[No.5] Sampling date(10/7'82)

| 番名 | イネ (O. sati.) | イネ粒 (rice g.) | 植物体乾重 (t/10a.cm) | キビ苗 (Panl.) | キビ苗種子 (Panl. seed) | ヨシ (Phrag.) | タケ類 (Bamb.) | ウシクサ族 (Andro.) |
|-------|------------------|------------------|---------------------|----------------|-----------------------|----------------|----------------|-------------------|
| 1 | 16.203 | 5.677 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 3.637 | 3.401 | 0.000 |
| 3 a | 2.804 | 0.982 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 5.647 | 0.000 |
| 3 | 2.237 | 0.784 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.582 | 0.913 | 0.000 |
| 4 a | 0.900 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 3.502 | 0.312 | 0.000 |
| 4 | 0.114 | 0.040 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 8.666 | 0.342 | 0.000 |
| 5 | 0.209 | 0.073 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.614 | 0.000 |
| 6 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.013 | 0.253 | 0.000 |
| 7 a | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.509 | 0.036 | 0.000 |
| 7 c | 0.470 | 0.165 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 1.109 | 0.019 | 0.000 |
| 7 d | 0.357 | 0.125 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.314 | 0.117 | 0.000 |
| 8 - 1 | 0.210 | 0.073 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.306 | 0.068 | 0.000 |
| 8 - 2 | 0.060 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 2.041 | 0.130 | 0.000 |
| 9 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 9.790 | 0.017 | 0.000 |
| 10 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 3.337 | 0.759 | 0.000 |
| 11 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.000 | 0.759 | 0.648 | 0.000 |

- Estimation of plant products with plant opal analysis -

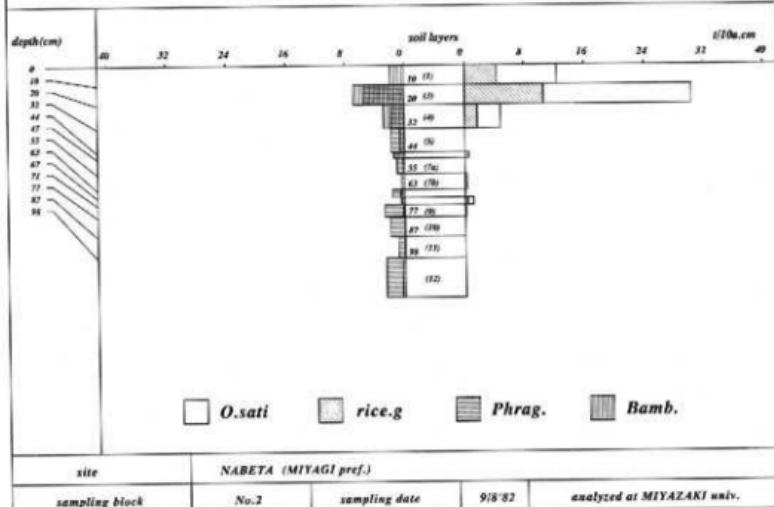


- Estimation of plant products with plant opal analysis -

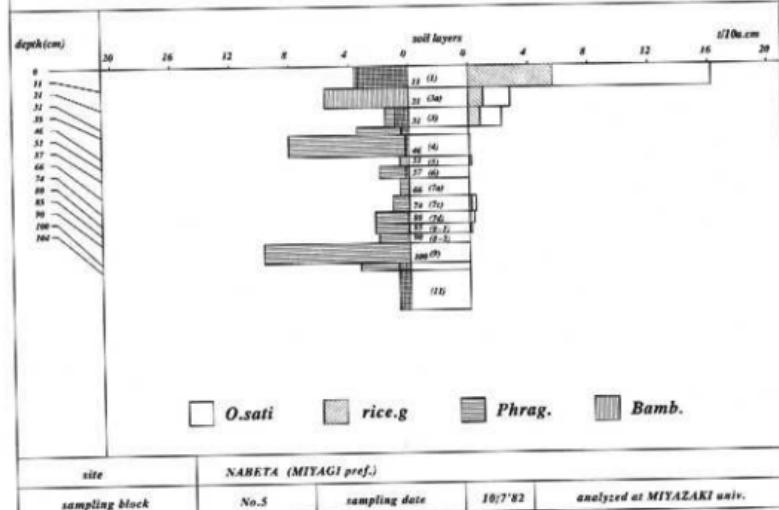


第1図 プラント・オパール定量分析結果 (1)

- Estimation of plant products with plant opal analysis -



- Estimation of plant products with plant opal analysis -



第2図 プラント・オパール定量分析結果（2）

2. 鳥居原地区・鍋田変電所部分のプラント・オパール分析

大分短期大学助教授 佐々木 章

1 はじめに

イネ科植物の葉身中に存在した珪化機動細胞の化石を土壤中から検出し、過去の植生や栽培植物を同定したり生産量を推定する方法をプラント・オパール分析法と呼ぶ。

仙台市では荒川の流域に位置する富沢遺跡とその周辺で弥生時代以降の水田跡があいついで発掘されてきている。また多くのプラント・オパール分析結果が集まってきた。それらによつて、各時代の水田の変遷と生産量の推移も実証的に明らかになりつつある。

ここでは発掘調査で2層、3層、4層、11層、12層の各層上面で水田跡が検出されている。時代は3層、4層がいずれも平安時代、11層、12層が弥生時代中期、その間は7層が弥生時代から奈良時代に対応するとの説明を受けた。

この小論は、それぞれの水田で生産された総生産量を推定することを目的としている。したがつてプラント・オパール分析のため土壤を採集したのは、すでに発掘が終つてからであった。

2 分析方法

プラント・オパールの粒径は $50\mu\text{m}$ に満たないため、クラックや根跡といった微少な隙間があつても土層中に入り混みコンタミネーションの原因と成りかねない。土壤試料の採集には細心の注意を払つて筆者自身が行った。採土管で採集した分析試料は研究室にもち帰り通常の定量分析法によって分析した。手順を図1に示す。

3 分析結果

検出した主なプラント・オパールを相当する植物体重に換算して図2に示す。イネについて生産されたであろう畠重に換算してあわせて表示した。

イネ機動細胞プラント・オパールは1層から4層までと、6c層、7層、9層、10層、12a層、13層で多量に検出された。1層から4層まではイネ機動細胞プラント・オパールの密度が高く、いずれもこの土壤を使って水田が営まれたことを示している。一方6c層、7層、9層、10層、12a層、13層などはイネ機動細胞プラント・オパールは検出されるものの経験的に知られている水田土壤にくらべてその密度が小さく、この分析結果だけでは水田であったとは断定できない分量であった。

ヨシ属機動細胞プラント・オパールは1層、2層、6a層、14層に比較的多い。3層と4層では検出されなかつた。一方タケアキ属機動細胞プラント・オパールは全ての層から検出されたが1層から4層までに特に多い。

4 考察・結論

発掘調査によって水田面が検出された土層のうち、2層、3層、4層ではイネ機動細胞プラント・オパールの密度も高く安定した生産が出来たことを示している。場所によって土層の厚さも異なりまたプラント・オパールの密度も異なると考えられるが単純に計算すると、平安時代と考えられている3層、4層をあわせて $22.5 \text{ t} / 10\text{a}$ の畠を生産するに足る葉身中に含まれるイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。穗刈りであれば葉身は圃場から持ち出さないので、それは実際に生産された値に等しい。また株刈りであれば葉身も持ち出るので、圃場に残ってプラント・オパールになるのはその一部およそ $1 / 20$ にすぎない。例えば穗刈りで400年間生産したとすると年間収量は 10a あたり 56.3 t と計算できる。しかし株刈りと考えればその20倍の 1125 t になる。実際の収量はその中間で前者に近いという感触が強い。400年という値ももう少し検討を要するが、穗刈りから株刈りに移行しつつあったと考えられる値である。

実際に水田面が検出された11層、12a層のイネ機動細胞プラント・オパールの総量は11層が 0 、12層が $1.1 \text{ t} / 10\text{a}$ という結果になった。山口遺跡のばあい $6.2 \text{ t} / 10\text{a}$ 、泉崎前遺跡で $11.1 \text{ t} / 10\text{a}$ という結果がでているのに比べると少ない。12a層で水田を作ったが生産量は少なかった。洪水の後11層を使って再び水田を作ったものの生産は皆無に等しかった。時代はずっと下るが欠ノ上I遺跡でも平安時代後半から中世前半の畦畔が検出されていて考古学的に水田と確認されているにもかかわらずイネ機動細胞プラント・オパールが検出できなかつた例がある。そのときはキビ族の機動細胞プラント・オパールが検出されたのでキビ族の同定ができないままヒエ田の可能性を指摘しておいた。しかしここではキビ族機動細胞プラント・オパールも検出されていないのでヒエ田の可能性はない。収穫皆無だったのである。

そのほかにイネ機動細胞プラント・オパールが検出された土層には6c層、7層、9層、10層、13層などがある。経験的に知られている水田に比べるとといずれも検出量が少なく、ここが水田であったと断定はできないが、少なくともごく近所で水田が営まれていたことはまちがいない。

参考文献

- 佐々木章、藤原宏志：山口遺跡のプラント・オパール分析『仙台市文化財調査報告書第61集「山口遺跡II」』1984
- 佐々木章：仙台：欠ノ上I遺跡土壤のプラント・オパール分析『仙台市文化財調査報告書第79集』1985
- 佐々木章：六反田(昭和59年度調査区)土壤のプラント・オパール分析『仙台市文化財調査報告書第102集』1987

| | | $\times 10^4$ 個/g |
|------|-------------------------------|-------------------|
| イネ | <i>Oryza sativa</i> | 3.40 |
| ヨシ | <i>Polygonites communis</i> | 1.44 |
| ヒエ | <i>Echinochloa Cris galli</i> | 0.233 |
| ゴキタケ | (<i>Bambusaceae</i>) | 20.83 |
| ススキ | <i>Miscanthus sinensis</i> | 2.79 |

表1 植物体中の珪化機動細胞

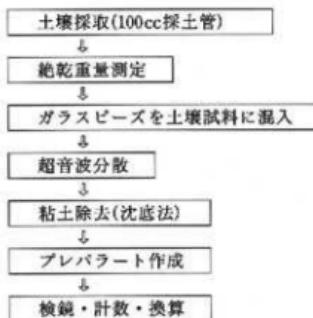


図1 プラント・オパール定量分析手順

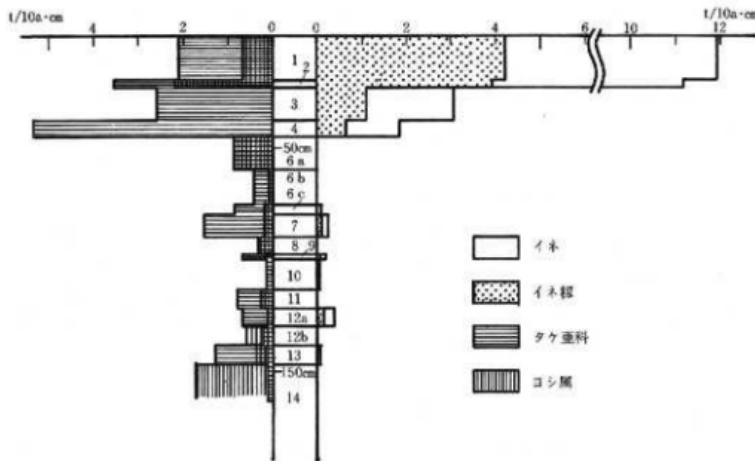


図2 プラントオパール密度から推定した植物体量

3. 富沢水田遺跡鍋田地区の水田遺跡土壤

東北大學 山田 一郎* 庄子 貞雄

本水田遺跡土壤は荒川の後背湿地に位置し、黒泥土下層泥炭土と分類される。

本土壤は上層（2層と3層への移行層）はグライ層、3層と4層は黒泥層、5層以下は泥炭層である。

2層とその下層の3層への移行層は細粒な河川堆積物を主体とし、この断面内では排水の良い土層である。3層への移行層には肉眼観察でも雲状鉄の斑紋が認められ、室内分析の遊離鉄含量も鉄の集積状態を示している。この鉄は現在の水田作土層から移動集積したものと思われる。

3層は平安時代の水田跡の検出面であり、その上面は山口遺跡や泉崎前遺跡の平安時代の水田跡と同様波状を呈している。この3層中には10世紀前半の降下火山灰である灰白色火山灰が点在している。平安時代の水田耕作下の鉄の集積層は断面観察でも室内分析でも認められない。これは3層と4層が湿性な黒泥土層であったためである。

5層と6層は腐植含量がそれらの上下層よりもかなり低い値をもつ層であり、無機質部分が多い。

7層は泥炭層であり、植物遺体（ヨシ）は大部分が分解している（分解度、H_d）。粒度組成は大部分が粘土とシルトからなり、微粒質な河川堆積物が搬入されてきている。このうち、7c層は弥生時代の水田面で、腐植含量は上下層よりかなり低くなっている。これは耕作のために有機物の分解が進んだためとみられる。

8層は室内分析から遊離鉄含量が高くなっているが、これは下方の地下水中の鉄がこの面で酸化沈殿したためと考えられる。

以上のことから鍋田遺跡水田土壤は、平安時代、弥生時代ともに湿性な有機質土層を用いて耕作が営まれてきたことがわかる。そして、この土層は有機物が多いため自然地力が高く、かつ湿性であり水の心配がいらない。この条件は近辺の山口遺跡や泉崎前遺跡の古代水田土壤も同様である。

*現農水省農業環境技術研究所(つくば市観音台3-1-1)

表1 鍋田地区(長町南駅区)の土壤の諸性質*

| 試 料 No | 深さ cm | 土 色 | 地 質 またば ら別 | 腐 蚕 の 分 解 度 | 粒度組成(%) | | | | 腐 殖 合 成 (%) | 電 導 度 (%) | 真 空 度 積 (%) | 備 考 |
|----------|----------|---------|------------------|---------------------|---------|--------|-----|--------|-------------------------|--------------------|-------------------------|---------------------------------------|
| | | | | | 粗 砂 | 細 砂 | シルト | 粘 土 | | | | |
| 2 層 | 0-10 | 2.5Y4/1 | | | 9 | 27 | 32 | 32 | 4.95 | 2.44 | | |
| 3 層への移行層 | 10-14 | 2.5Y4/1 | | | 9 | 25 | 32 | 35 | 4.92 | 3.94 | 腐殖質に富む | |
| 3 层 | 14-17 | 10YR4/1 | 黑 沟 | | 1> | 14 | 40 | 46 | 15.94 | 1.19 | | 平安時代の水田跡 その一層は古河で層中に 灰白色火成灰を含む。 |
| 4 层 | 17-35 | 2.5Y2/1 | 黑 疣 | | 0 | 14 | 50 | 37 | 36.94 | 1.11 | | |
| 5~6 层 | 35-45 | 2.5Y3/2 | 泥 黑 | H _a (ヨシ) | 0 | 10 | 46 | 50 | 19.07 | 1.07 | | |
| 7 a 层 | 45-51 | 10YR2/1 | 泥 黑 | H _a (ヨシ) | 0 | 4 | 51 | 45 | 35.32 | 1.76 | | |
| 7 c 层 | 51-56 | 2.5Y3/1 | 泥 黑 | H _a (ヨシ) | 0 | 5 | 44 | 51 | 26.43 | 1.16 | | 弥生時代の水田跡 |
| 7 d 层 | 56-65 | 2.5Y2/1 | 泥 黑 | H _a (ヨシ) | 0 | 6 | 51 | 44 | 34.28 | 2.43 | | |
| 8 层 | 64+ | 2.5Y3/2 | 泥 黑 | H _a (ヨシ) | 0 | 5 | 59 | 36 | 51.89 | 3.47 | | |

*) 1983年8月9日採集

4. 富沢水田遺跡鳥居原地区の水田土壤

東北大学 山田 一郎*、庄子 貞雄、安藤 豊**

土壤の堆積状態を上位層よりみていく。1層は現代の作土層であり、この層直下には鉄の集積層(2層)がある。また、1層の下部は砂に富んでおり円礫も認められる。

3層および4層は平安時代の水田跡が検出された層である。4層は鉄の斑紋が多くみられ、とくに4層上部に多い。6層(6a層～6c層)¹⁾は有機物に富む黒泥層であり、6a層には10世紀前半と考えられている灰白火山灰が認められる。この灰白火山灰は3層や4層にも不規則に認められることから、平安時代の水田耕作では3層、4層だけでなく6層上部も耕かれたものと思われる。4層の鉄の斑紋は3層が耕作された時代の鉄の集積でできたと考えられる。4層が耕作された時代の鉄の集積は、下層が黒泥であるため明確ではない。このように、平安時代の水田耕作ははじめ4層および6層上部を作土層としておこなわれ、次により上位の3層を中心に営まれたものである。また、6層は黒泥であることから、はじめは湿田に近い状態で水田耕作がおこなわれたものが、3層の有機物含量が2.6%であり、この時代の鉄の集積層が4層に認められることから、この時はかなり乾田化しつつあったものと考えられる。

7層以下は、グライ土層と黒泥層が交互に認められる。このことは、植物遺体の供給が盛んであった時と、河川からの粘土を主体とする細粒物質の供給が盛んであった時期が交互にあらわれたことをしめしている。従って、6層も含めると、10世紀前半から弥生の水田が弥生の中期²⁾と考えられることから、少なくとも千数百年間は大きくみて洪水の影響が強かった時期とそうでない時期がくり返された時代であり、湿性な土壤環境が続いた時代である。

11層および12層は弥生の水田跡がみいだされた層である。上に記したように、この時代の水田耕作は湿田で営まれている。

弥生時代の水田跡は東北では青森県田舎館村の垂柳遺跡³⁾、仙台市の富沢水田遺跡泉崎前地区⁴⁾、同遺跡鳥居原・中谷地地区で検出されているが全て湿田条件下で耕作が営まれている。

このように湿地で弥生の水田が営まれている例が多いことは、筆者らが指摘したように、稻作技術が進んでいない段階では自然的力が高いことと、かんがい用水の確保し易いことが、稻作の適地のもっとも重要な点であったためと思われる。

* : 現農水省農業環境技術研究所

** : 現山形大学農学部

参考文献

- 1) 白鳥良一：多賀城跡出土土器の変遷、宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要VII、1~38(1980)
- 2) 仙台市教育委員会・仙台市交通局：宮沢水田遺跡鳥居原地区現地説明会資料、(1984)
- 3) 青森県教育委員会：青森県埋蔵文化財調査報告書第78集、垂柳遺跡発掘調査概報、(1983)
- 4) 仙台市教育委員会：仙台市文化財調査報告書第67集、宮沢水田遺跡、1、(1983)
- 5) 仙台市教育委員会・仙台市交通局：宮沢水田遺跡鳥居原・小谷地地区現地説明会資料(1983)
- 6) 庄子雄・山田一郎：山口遺跡水田土壤、仙台市文化財調査報告書第61集山口遺跡II、444~446(1984)

表1 鳥居原地区(変電所区)の土壤の性質¹⁾

| 標位 | 深さ (cm) | 土 色 | 色 調 査 名 | 相 土 色 | 地 形 状 態 | 地 主 の 性 質 特 徴 | 有 機 物 質 比 (%-%) | 水 分 量 (%) | 電 導 率 (S/m) | C/N 比 | 灰 分 (%) | 火 山 灰 | 水 硬 度 | 鹽 度 |
|-----------------|----------------------|----------|------------------|------------------|------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------|----------------------|----------|---------------|-------------|-------------|--------|
| 1 1 ~10から22 | 2.5YR3/2 3 YR4/6 | | | 2層は堅軟 軟化軟化に近む | | | 2.84 (2層1.46) | 0.23 (2層0.13) | 12 (33) | | | | | |
| 3 ~20から30 | 7.5YR3/1 3 YR4/4 | | | 堅軟・骨炭鉄を含む | | | 2.60 | 0.35 | 17 | あり | あり(平交) | | | |
| 4 ~25から34 | 10YR3/1 5 YR4/6 | | | 堅軟・骨炭鉄に富む(くろい山面) | | | 2.81 | 0.33 | 18 | あり | あり(平交) | | | |
| 6 a ~30から52 | 7.5YR2/1 3 YR5/6 | 7.5YR5/1 | | 堅軟・骨炭鉄を含む | あり(洗れて いる) | | 9.12 | 0.37 | 24 | 含む | | 無 | 無 | 無 |
| 6 b ~50から55 | 10YR2/1 5 YR5/6 | 10YR5/1 | | 堅軟・骨炭鉄を含む | あり(洗れて いる) | | 8.91 | 0.36 | 22 | | あり? | 無 | 無 | 無 |
| 6 c ~62から570 | 10YR1.5/1 5 YR6/6 | 2.5YS/1 | | 堅軟・骨炭鉄を含む | あり(洗れて いる) | | 7.06 | 0.32 | 22 | | | 無 | 無 | 無 |
| 7 ~70 | 2.5Y5/1 | | | | | | 4.47 | 0.21 | 21 | あり? | グライ | | | |
| 8 ~71から609 | 10YR2/1 | | | | | | 13.04 | 0.48 | 27 | | | 無 | 無 | |
| 9 ~86 | 10YR4/1 | | | | あり(洗れて いない) | | 4.26 | 0.20 | 21 | | | グライ | | |
| 10 ~100 | 7.5YR2/1 | | | | | | 10.37 | 0.33 | 21 | | | 無 | 無 | |
| 11 ~110 | 2.5Y5/1 | | | | | | 3.10 | 0.18 | 17 | あり(稀少) | グライ | | | |
| 12 ~120 | 10YR1.5/1 | | | | あり(洗れて いない) | | 7.70 | 0.35 | 23 | あり(稀少) | 無 | 無 | | |
| 13 ~125 | 2.5Y5/1 | | | | | | 3.60 | 0.18 | 20 | | | グライ | | |
| 14 125~ | 10YR1.5/1 | | | | | | 16.39 | 0.63 | 26 | | | 無 | 無 | |

1) 資料採取は昭和59年6月25日南端中央でおこった。

2) C-Nエーディーによる。 3) ケルダール法による。

5. 富沢水田遺跡の十和田一中振テフラ

東北大学 山川一郎*

仙台市富沢水田遺跡では長折線31層（第15次調査V区）、鍋田33層（第5次調査）、総合支所29層（第28次調査）らには、細粒な灰白色のテフラが認められた。これらの火山灰は、層相が一致していること、層序関係や¹⁴C年代がほぼ同じである（表-4）こと、1次鉱物組成や火山ガラスの化学組成が一致していることから同一のテフラと判断された。一方、このテフラは年代的には十和田火山起源の中振テフラと一致しているが、火山ガラスの化学組成がやや異なることから、このテフラを中振テフラと同定するにはさらに検討の必要があることが指摘された。^{11Be}

本短報では、中振テフラの細粒部の火山ガラスの化学組成を分析した結果、富沢遺跡の下部火山灰中の火山ガラスのそれと良い一致を示したことにより、このテフラを中振テフラと同定したことを報告する。

1. 試 料

分析に供した富沢遺跡のテフラは、いずれも現場での肉眼観察により、上下の土壌の影響のない部分より採取した。中振テフラの軽石は、青森県三ノ戸町二ノ倉で採取し、火山灰は青森県田子町川向で採取した。

鍋田33層は泥炭であるが、この中にテフラが最大層厚4cm、平均2cmで連続して認められた。総合支所29層ではその層の上部にテフラがブロック状に認められた。長折線31層では厚さ5cm、平均3cmのテフラが連続していた。

川向では中振テフラは66cmの深さから出現し、66～96cmが埋没腐植層（3A層）、96～126cmが埋没B層（3B層）、126～146cmが火山灰層（3C₁層）、146～250cmが軽石層（3C₂層）である。中振テフラの上位には、十和田-bテフラ（2000年前）、十和田-aテフラ（1000年前）がのっている。二ノ倉の竪礎でも層序は、川向と同じであり、各テフラの厚さのみが違っていた。

2. 実験方法

1次鉱物組成：軽く超音波処理をした後、軽石は軽く粉碎した後、100～200μ部分を篩別した。この部分の一部を取り、比重2.96の重液を用いて重鉱物部分と軽鉱物部分にわけた。各々、

* 現農水省農業環境技術研究所（つくば市駒崎台3-1-1）

200~300粒検鏡した。

火山ガラスの化学組成：鍋田と総合支所のテフラは100~200 μ 部分の、中揮テフラの火山灰は20~100 μ の、中揮テフラの軽石部は軽石を粉碎し、火山ガラスを東北大学理学部岩鉱教室のEPMAで分析した。

3. 実験結果

1次鉱物組成(表-1)は富沢のテフラと中揮テフラでは異なっていた。中揮テフラの重鉱物含量は約15%で、その組成はシソ輝石>磁鉄鉱>普通輝石であった。一方、中揮テフラでは火山灰および軽石ともシソ輝石>磁鉄鉱>普通輝石であった。軽鉱物組成は前者、後者とも火山ガラスが大部分で残りは斜長石であったが、火山ガラス含量は後者で高かった。

富沢のテフラと中揮テフラの火山ガラスの形態は、両者とも非常に発泡性の良い無色ガラスであり、その屈折率は富沢のテフラでは1.515前後、中揮テフラでは1.501~1.512または1.510~1.517であった。シソ輝石の屈折率は前者、後者とも1.705~1.710であった。

火山ガラスの化学組成(表-3)をみると、いずれもSiO₂含量が高く流紋岩質であった。各テフラの各元素含量を比較すると、Fe₂O₃、CaO、K₂O、TiO₂の各元素含量は各テフラ間で極めて良い一致を示した。これに対し、SiO₂含量は富沢のテフラでやや低い傾向にあり、Al₂O₃、MgO、Na₂Oの各元素含量は、やや高い傾向にあった。

4. 考察

中揮テフラの分布については、当初の大池の研究³⁾では、十和田湖西方に分布するとされていて、宮城県の最北部にも分布することが近年示された(町田、1987)。

1次鉱物組成からは、富沢のテフラと中揮テフラとでは異なっていることから同一のテフラかどうかは判断できない。これは、遠方に行く程、重鉱物含量が低下し、重および軽鉱物組成も分級作用により変化するためである(山田、井上、1989)。従って、広域に分布するテフラの同定には1次鉱物組成は不適当である。

火山ガラスの形態や屈折率は広域テフラの同定に、わが国ではもっとも一般に用いられる方法である。しかし、火山ガラスの屈折率は複数の元素含量により決定されるため(山田、庄子、1983)、火山ガラスの化学組成によるテフラの同定の方が望ましい。

筆者らは富沢遺跡の下部テフラとの比較に中揮テフラの軽石を利用してきた。その結果は表-3に示したように、両テフラではSiO₂含量で2%、Al₂O₃%で1%、Na₂O%で0.5%と1.6%異なることから、富沢のテフラを中揮テフラとすることを保留していた(1、2)。今回、中揮テフラの火山灰部分と富沢のテフラを比較した結果、両者は良い一致を示した。この原因

は、もともと火山灰の火山ガラスの化学組成が軽石部分のそれとは、やや異なっていたのか、または細粒部分の火山ガラスが風化して、脱珪酸がおこったのかは不明である。(山田・庄子 1986)によると、埋没土壤条件下では、火山ガラスは初期風化ではナトリウムの相対濃縮が顕著であることが示されており、本火山ガラスでもそのような風化が行っている可能性が考えられる。

この富沢遺跡の火山灰の年代は(表-4)の¹⁴C年代測定結果より、5,000yB.P.~5,500yB.P.と推定される。この年代は、中振テフラの年代と良い一致を示した。

富沢遺跡の下部火山灰は、細粒なガラス質火山灰であることから、その噴出源は遠方であることが予想された。また、このテフラはその鉱物学的性質より、大陸起源の可能性はないと考えられた(新井房夫、1986)。火山ガラスの化学組成の一一致、年代の一一致は富沢遺跡の下部テフラを十和田一中振テフラと同定できることを示した。

引用文献

- 1) 山田一郎、庄子貞雄(1987) 富沢遺跡の下部火山灰と第15次調査32a層の土壤、仙台市文化財調査報告書第98集、p.437~438
- 2) 山田一郎、庄子貞雄(1989) 富沢遺跡第28次調査の土壤と火山灰、仙台市文化財調査報告書第114集、p.45~46
- 3) 大池昭二(1972) 十和田湖東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、p.228~235
- 4) 町田洋(1987) 火山・テフラ・巨大崩壊、日本第四紀地図、日本第四紀学会編、東京大学出版会
- 5) 山田一郎、井上克弘(1989) 東北地方に分布する古代の珪長質火山灰、日本土肥学会講演要旨集
- 6) 山田一郎、庄子貞雄(1983) 火山ガラスの性質ならびに火山帶とテフラの性質との関係について、土肥誌、54、p.311~318
- 7) 山田一郎、庄子貞雄(1986) 埋没土壤条件下での無色火山ガラスの変質、土肥誌、57、p.167~172
- 8) 新井房夫(1986) 富沢水田遺跡鳥居原地区33層火山灰分析結果、仙台市文化財調査報告書第89集、p.35
- 9) 町田洋、新井房夫、森脇広(1981) 日本海を渡ってきたテフラ、科学、51、p.563~564
- 10) I. Yamada, S. Shoji, S. Kobayashi and J. Masoi (1975) Chemical and mineralogical studies of volcanic ashes (II), Soilsci. Plant Nutr., 21, p.319~326
- 11) 仙台市教育委員会(1987) 富沢遺跡第15次調査における¹⁴C年代測定結果、仙台市文化財調査報告書第98集、p.473
- 12) 仙台市教育委員会・仙台市交通局(1986) 仙台市文化財調査報告書第89集、p.34~36
- 13) 早川由紀夫(1983) 十和田火山中振テフラ層の分布、粒度組成、年代、火山第2集、vol. 28, p.263~273

表-1 1次鉱物組成*

| 試料名 | 四加物組成(粒度%) | | | | 鉱物組成(粒度%) | | | 重鉱物合量 (重量%) |
|----------------|------------|------|-----|-----|-----------|-----|----|----------------|
| | シソ輝石 | 普通輝石 | 角閃石 | 粗粒岩 | 火山ガラス** | 斜長石 | 石英 | |
| 長折器31層 の火山灰 | 82 | 8 | 0 | 11 | 93 | 6 | 0 | 1 |
| 鍋田33層 の火山灰 | 73 | 7 | 4 | 16 | 82 | 11 | 2 | 1 |
| 中嶋テフラ (火山灰) | 44 | 21 | 14 | 30 | 64 | 32 | 4 | 15 |
| 中嶋テフラ (輝石) | 60 | 17 | — | 42 | 75 | 25 | — | 17 |

*: 0.1~0.2mm部分で分析。重鉱物と軽鉱物は比重2.96重液で分離。

**: 火山ガラスの形態は、ほとんどが溶融性の極めて良いガラスである。
スボンジ型(新井の龍石型)。

表-2 屈折率の比較*

| | 火山ガラスの形態 | 火山ガラスの屈折率 | シソ輝石の無光帶 |
|---------------|------------------------|----------------|-----------------|
| 鍋田33層 の火山灰 | 1.514~1.516 (1.515) | 1.708± | |
| 中嶋テフラ** | — | 1.516~1.517 | 1.705~1.708 |
| 中嶋テフラ (輝石) | スボンジ型*** | 1.501~1.512*** | 1.704~1.707**** |

*: 文献(5)

**: 文献(5)。火山ガラスの屈折率は図からの読み換えによる。

***: 文献(6)

****: 文献(6)

表-3 火山ガラスの化学組成 (%) *

| | SiO ₂ | Al ₂ O ₃ | Fe ₂ O ₃ | MgO | CaO | Na ₂ O | K ₂ O | TiO ₂ |
|------------------|------------------|--------------------------------|--------------------------------|------|------|-------------------|------------------|------------------|
| 鍋田33層 の火山灰 | 73.06 | 14.45 | 2.60 | 0.96 | 2.72 | 4.48 | 1.30 | 0.43 |
| 総合実所29層 の火山灰 | 74.03 | 14.77 | 2.55 | 0.92 | 2.05 | 3.33 | 1.32 | 0.41 |
| 中嶋テフラ** (火山灰) | 74.43 | 14.23 | 2.60 | 0.74 | 2.71 | 3.68 | 1.20 | 0.43 |
| 中嶋テフラ*** (輝石) | 73.94 | 13.06 | 2.56 | 0.77 | 2.69 | 2.82 | 1.36 | 0.43 |

*: 火山ガラス粒子を各々10~20ヶをEPMAで分析し、値は100%になるように再計算し、表はその平均値を示した。

**: 文献(7)

***: 文献(6)

表-4 火山灰の年代

| | | | |
|-----------------|-------|---------------|----------|
| 長折器31層* の火山灰 | 地上の土壤 | 4960±90yB.P. | N-5130 |
| | 地下の土壤 | 5250±90yB.P. | N-5131 |
| 鍋田33層** の火山灰 | 地上の土壤 | 5440~80yB.P. | N-4914 |
| | 地下の土壤 | 5330±105yB.P. | N-4915 |
| 中嶋テフラ*** | 灰化木片 | 5390±140yB.P. | GAK-9781 |

*: 文献(1)

**: 文獻(2)

***: 文獻(3)

6. 泉崎前遺跡（仙台市）の花粉分析

岡山理科大学 三好 敦夫*

泉崎前遺跡は仙台市の南東部にあり、名取川が形成した沖積平野に位置している。本遺跡の地形や出土した遺物については、別に詳細な報告があるので、ここでは地下鉄工事現場の泉崎東工区試掘地No.1で採取した10点の堆積物についての花粉分析結果についてだけ報告する。

花粉分析に供した堆積層は、112cmの厚さがあり、最上層のA層から最下層のM層まで13点を採取した。しかし、その内下層の80~112cmのK、L、M層の3点は、化石花粉・胞子の含有量が少ないため省略した。本報に使った10点の堆積物の特徴は、次の通りである。A：耕作土（埋め立て前の水田）、B：黒褐色シルト質粘土、C：泥炭～黒泥、D～F：黒褐色シルト質粘土、G～J：泥炭～黒泥。 ^{14}C 年代測定を行っていないため、絶対年代は不明であるが、F層で弥生式土器が出土していること、A層が埋め立て前まで水田であったことが年代の目安となっている。

化石花粉・胞子の抽出は、KOII法、ZnCl₂法、HF法、アセトリシス法により行ない、グリセリン・ゼリーに包埋してプレパラートを作成した。測定結果については、木本花粉は高木とカン木を基本数として、草本花粉は種子植物の草本類を基本数として、シダ類胞子は木本花粉と草本花粉を基本数として、それぞれパーセントで算出し、花粉・胞子分布図を作成した。化石花粉の写真は、JSM-35型走査電子顕微鏡で撮影した。

結果と考察

全層を通して木本花粉を24種類、草本花粉13種類、シダ類胞子2種類の合計39種類を検出した。その内訳は次の通りである。

木本花粉：スギ属 (*Cryptomeria*)、モミ属 (*Abies*)、トウヒ属 (*Picea*)、マツ属 (*Pinus*)、ツガ属 (*Tsuga*)、ハンノキ属 (*Alnus*)、カバノキ属 (*Betula*)、クマシデ属 (*Carpinus*)、ハシバミ属 (*Corylus*)、ブナ属 (*Fagus*)、コナラ属 (*Lepidobalanus*)、オニグルミ属 (*Juglans*)、サルワグルミ属 (*Pterocarya*)、ヤナギ属 (*Salix*)、エノキ属 (*Cellis*)、ニレ属・ケヤキ属 (*Ulmus & Zelkova*)、カエデ属 (*Acer*)、トチノキ属 (*Aesculus*)、クリ属 (*Castanea*)、シナノキ属 (*Tilia*)、ツツジ科 (*Ericaceae*)、モチノキ属 (*Ilex*)、シノノキ属 (*Castanopsis*)、アカガシ属 (*Cyclobalanopsis*)。

* 岡山理科大学理学部基礎理学科生物学教室(700岡山市理大町1-1)

草本花粉：カヤツリグサ科 (Cyperaceae)、イネ科：イネ属型・野生型 (Gramineae : *Oryza* type・Wild type)、アギナシ属 (*Sagittaria*)、ガマ属 (*Typha*)。ヨモギ属 (*Ariemisia*)、その他のキク科 (Other Compositae)、ナデシコ科 (Caryophyllaceae)、ソバ属 (*Fagopyrum*)、その他のタデ科 (Other Polygonaceae)、アカザ科 (Chenopodiaceae)、セリ科 (Umbelliferae)。胞子：シダ植物 (Pteridophyta)：単条溝型 (Monolete type)・三条溝型 (Trilete type)。

主要植物の増減をみると、裸子植物ではマツ属がG～H層とC層で10%以上出現し、A層では60%以上も出ている。スピルリス属とモミ属も全層にわたって出現するが、10%をこえない。落葉広葉樹では冷温帯要素のコナラ亜属が10～45%出現して最も多く、ブナ属も5～25%でかなり多い。中間温帯林要素のクマシデ属とニレ属・ケヤキ属なども少なくない。常緑広葉樹ではアカガシ亜属が全層にわたって出現するが10%以下で、シノノキ属は1～2%である。単子葉植物ではカヤツリグサ科とイネ科が圧倒的に多い。カヤツリグサ科とイネ科の野生型は、ほぼ全層にわたって多く出現するが、イネ属型は上層だけで多い。双子葉植物ではヨモギ属がほぼ全層にわたって10～30%も出現し、その他のキク科は下層でやや多い。ソバ属を除くタデ科も全層にわたって出現するが10%をこえない。シダ植物胞子では単条溝型が下層で80%をこえるところもあるほど多いが、ペリンが消失して区別できないものが多いので、科や属への同定は行なわれなかった。

これらの出現傾向を深度別にみると、最下層のJ層でコナラ亜属が、最上層のA層でマツ属が突出して多いことと、これらの中間のI～B層ではコナラ亜属、ブナ属、ニレ属・ケヤキ属などが多いことから、3花粉帶に区分できる。このうち中間のI～B層の8点については、さらに下部のI～F層でコナラ亜属、ニレ属・ケヤキ属、オニグルミ属などが多いのに対して、上部のE～B層ではブナ属、クマシデ属の増加がみられることから、40cmのF層とE層の境界での細分が可能かもしれない。この出現傾向をわが国の花粉帶に当てはめると、J層はR-III a帶の最上層にあたり、I層以降はマツ属の増加が始まるところから、R-III b帶の歴史時代に相当するとみられる。

コナラ亜属とブナ属を中心とした落葉広葉樹が表層のA層をのぞく全層にわたって多く出現していることから、仙台市周辺の植生は、比較的近代まで落葉広葉樹の原生林～二次林が優占し、ひどい森林伐採によるマツ属の急増が始まったのは、せいぜい300～500年前以降のように思われる。本遺跡と同時に調査された仙台市鍋田遺跡の花粉分析結果（中村：1983、分析担当・畠中健一）でもマツ属の急増は表層の1点だけである。仙台市周辺の丘陵地でもっと詳しく調べられた根白石湿原や茂田・高田湿原の花粉分析結果（宮城・口比野・川村：1979）でも、マツ属の急増するのは表層の30～40cmだけで、その絶対年代も500y.B.P.をこえない。

アカガシ亜属が10%以下の低率ながらも全層にわたって出現していることは、常緑広葉樹林

が縄文海進期に北上して以来ずっと当地に生育し、現在も北限域の植生として残存していることを示している。またシイノキ属については、現在スグジイは福島県まで、ツブラジイは関東以西までしか分布していない（北村・村田：1979）が、今回の分析では1～2%の低率ではあるが、かなりの層でシイノキ属の化石花粉が検出され、しかもスグジイ型とツブラジイ型の両方が確認された（図版I、5、6）。このことは、縄文海進期に北上したシイノキ属が比較的最近まで当地に残存し生育していたことを示すのかもしれない。

稲作農耕の開始については、J層を除く全層でイネ科花粉が多数出現しているが、イネ属型とみられるものは、H層から出現はじめF層から急増している。このF層は前述のように弥生式土器が出土していることから、東北地方でも弥生時代からすでに稲作が行なわれていたことを示すものであり、出現頻度も30%近くあることから、かなり集約的な稲作が行なわれていたと考えられる。また稻作よりもっと古くから栽培されていたとみられる雑穀のソバ属については、本試料では表層のA層でごくわずかに検出されただけである。その理由として、ごく最近までソバの栽培が行なわていなかった可能性と、ソバは虫媒花で花粉生産量が少ないため、ソバの栽培は古くから行なわれていたけれども化石花粉として残らなかつたことの両方が考えられるが、後者の可能性が強い。

稿を終わるにあたり、本研究の機会を与えて下さった仙台市教育委員会と、現地での試料採取にご協力下さった同委員会斎野裕彦氏と荒井格氏に厚くお礼を申し上げる。

参考文献

- 北村四郎・村山 淳 1979. 原色日本植物図鑑. 木本編 II. 保育社。
宮城豊彦・日比野経一郎・川村智子 1979. 仙台周辺の丘陵斜面の削剥過程と完新世の環境変化. 第四紀研究 18 (3): 143~154.
中村 純 1983. 農耕史の花粉分析学的研究. 特定研究「古文化財」昭和57年度年次報告 420~430.

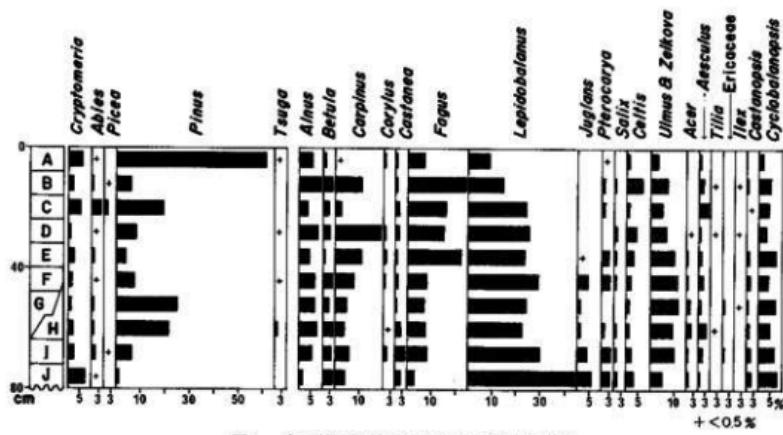


図1 泉崎前遺跡(仙台市)の木本花粉分布図

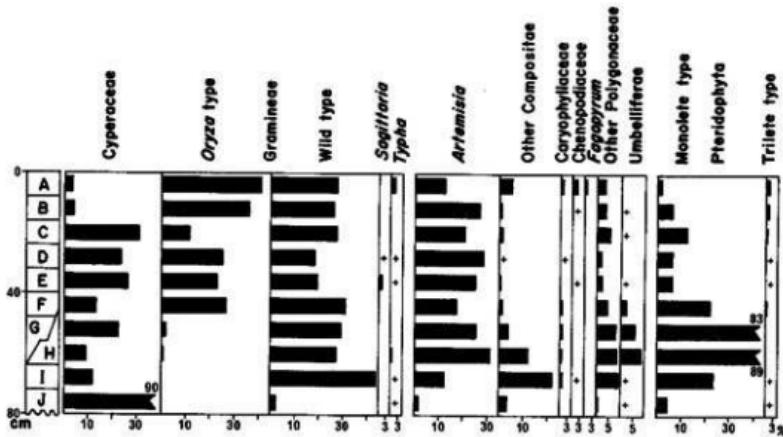
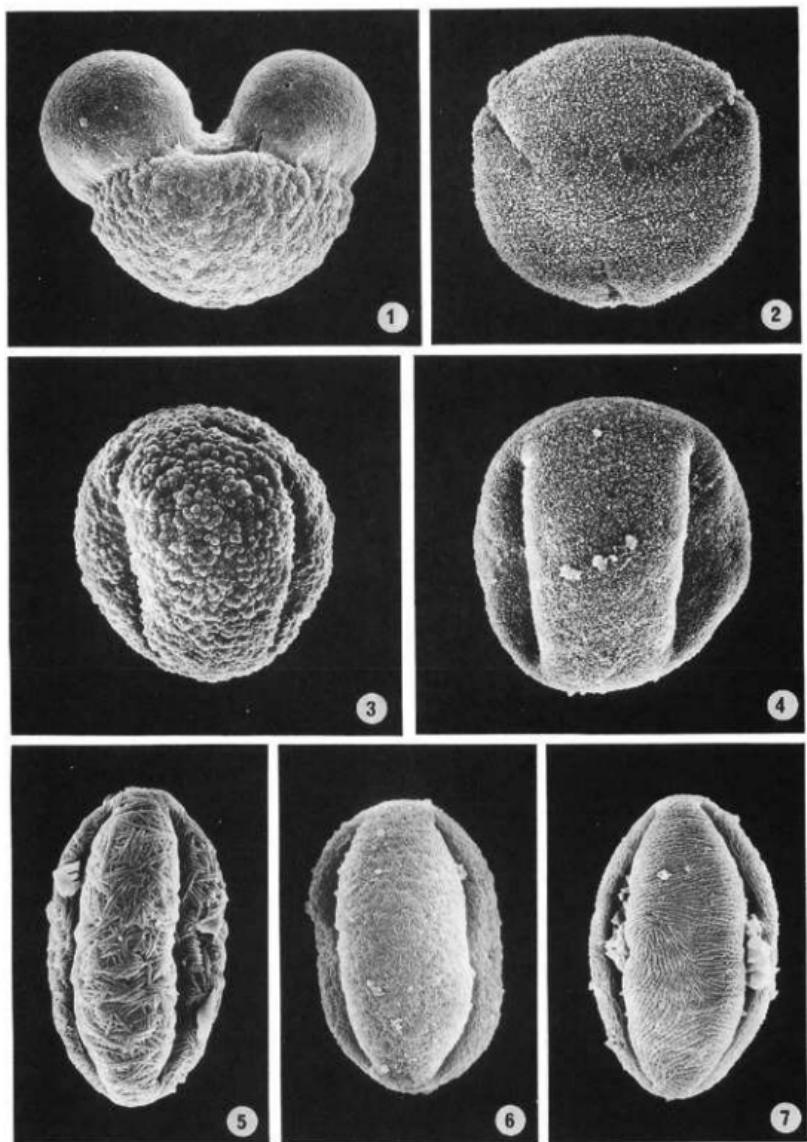
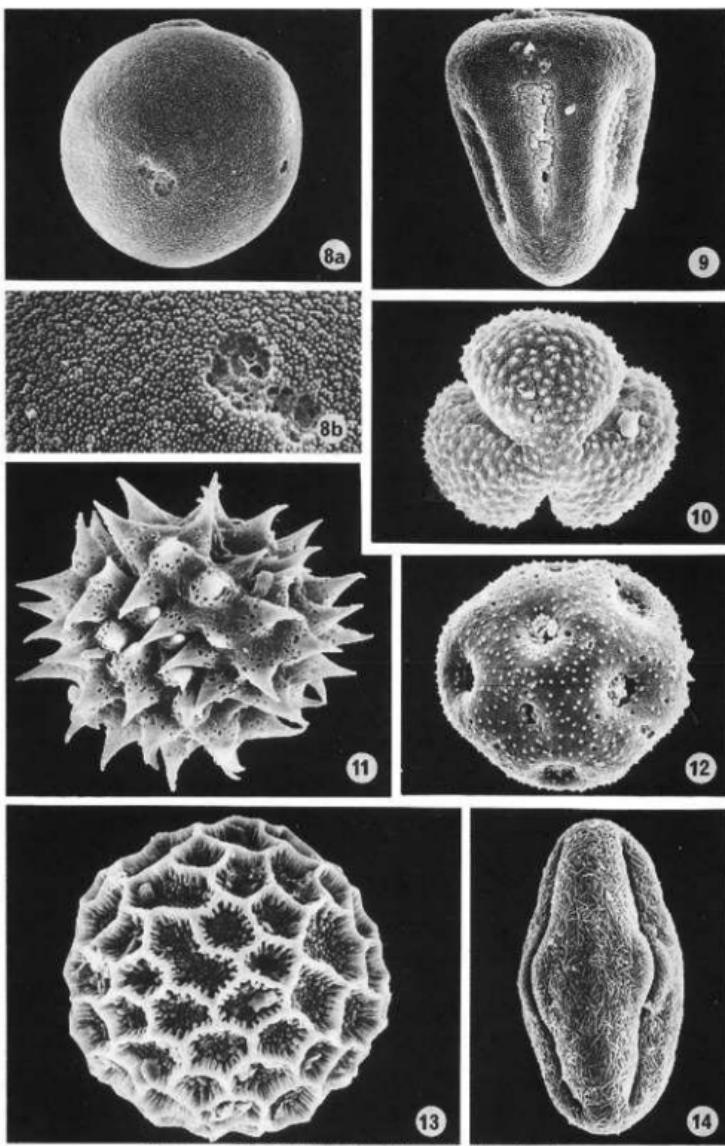


図2 泉崎前遺跡(仙台市)の草本花粉とシダ類胞子分布図



図版 I. 泉崎前遺跡(仙台市)で検出した木本類の化石花粉

1. マツ属($\times 1000$)、2. ブナ属(ブナ型、 $\times 1300$)、3. コナラ属($\times 2300$)、4. アカガシ属($\times 2300$)、5. シイノキ属(スダジイ型、 $\times 3000$)、6. シイノキ属(ツブラジイ型、 $\times 3000$)、7. トナノキ属($\times 2300$)。



図版II. 泉崎前遺跡(仙台市)で検出した草本類の化石花粉

8. イネ科(イネ属型、a. $\times 1300$ 、b. $\times 4000$)、9. カヤツリグサ科($\times 1700$)、10. ヨモギ属($\times 2300$)、
11. キク科($\times 2300$)、12. カラマツソウ属($\times 1700$)、13. タデ属($\times 1300$)、14. セリ科($\times 2000$)。

7. 中谷地遺跡の泥土の花粉分析

広島大学 安川 喜恵*

I 試料の採取と層序

花粉分析の試料採取地点と層序はIII章第16図に示す如くである。

II 花粉分析の方法

花粉分析の方法は、KOH処理(10%水酸化カリウム溶液にて10分間湯せん)－水洗(蒸留水にて水洗・遠心分離)－比重分離(70%塩化亜鉛溶液にて比重分離)－塩酸処理(1%塩酸を加え遠心分離)－水洗－酢酸処理(水酢酸を加え遠心分離)－アセトトリス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液を加え3分間湯せん)－酢酸処理－水洗－マウント－顕鏡の順に行なった。顕鏡に際しては樹木花粉の同定数が200個体以上に達することを基準とした。

III 花粉分析の結果

花粉分析の結果は表1と図1に示す如くである。試料No16からNo10の灰青色シルト～シルト質粘土層は、花粉・胞子の残存が悪く、有意な結果を得ることができなかった。

主要な花粉については、顕微鏡写真を示した。

1) JH石器時代の古環境

試料No19～No17からはトウヒ属・モミ属・カラマツ属・ツガ属・五葉マツ属の花粉が高い出現率を示す。草本花粉ではオミナエシ属・タデ属(イブキトラノオ節)・キク科・カヤツリグサ科などが特徴的なものとして出現し、胞子ではミズゴケ属・ヒカゲノカズラ属が、この時代にのみ多産する。このことから、試料No19～No17の泥炭～泥炭質粘土は最終氷期後半の堆積物であり、中谷地遺跡周辺にはミズゴケ湿原が存在し、それを取り囲んで亜高山帶針葉樹が密に生育していたとみられる。この花粉分析の結果は、最終氷期には、仙台平野の低地部にまで亜高山帶針葉樹が降下していたことを立証するものであり、当時の森林帯は1000m以上現在より降下していたとみることができる。より詳細な年代については、¹⁴C年代測定結果が出しだい、あらためて報告する。

2) 繩文時代の古環境

縄文時代に相当する、試料No16～10の灰青色シルト～シルト質粘土層は、花粉・胞子の遺体の残存率が著しく悪く、有意な結果を得ることができなかった。この中谷地遺跡と類似した結

*現国際日本文化センター

果は、すでに報告した山口遺跡（安田1984）、宮沢水田遺跡（安田1984）においてもみとめられた。山口遺跡や宮沢水田遺跡では、この中谷地遺跡より有機物に富むにもかかわらず、遺体の保存が著しく悪かった。その理由等については、あらためて本報告において検討を加えたい。

3) 弥生時代以降の古環境

試料No.9-1から上位の堆積物は花粉の含有量が多く、有意な結果を得ることができた。花粉ダイアグラムの試料No.9-1層からNo.6層まではコナラ亜属が高い出現率を示し、これとともにオニグルミ属・ニレ属・ケヤキ属が高い出現率を示す。草木花粉では野生のイネ科・カヤツリグサ科・セリ科が高い出現率を示し、周辺の丘陵や局状地にはナラ林が生育し、低地にはスギ類の湿原が展開していたことを示す。イネ属型の花粉はNo.7層より出現を開始し、泥炭地のなかで稻作がはじまつたことを物語る。

一方No.5層に入ると堆積物が泥炭から有機質粘土に変化する。No.4層は有機質を含む砂礫層、No.3層は砂礫まじりの黒泥となる。No.5層を境として、安定したスギ類を中心とする湿原から、洪水の影響を受けやすい後背湿地の環境に変化したことを示す。

こうした堆積物の変化に対応して、花粉フローラも変化している。このNo.5層を境として、コナラ亜属がオニグルミ属とともに上方に減少する。カヤツリグサ科も急減する。かわってブナ属・ハンノキ属・ハシバミ属・二葉マツ亜属が増加していく。またこの時代以降、イネ属型が上方に増加する。

こうした花粉フローラの変化は、平安時代の開拓によって、周辺のナラ林やオニグルミ林が破壊されたことを物語る。堆積物が泥炭から砂礫や砂礫混り粘土に変化するのは、こうした森林破壊によって、堆積環境が不安定になったことを示す。

一方、こうした人間の森林破壊とともに、気候の悪化を筆者は考えたい。それは、ナラ林の減少に反比例してブナ属が増加することである。ブナ属の減少は、周辺のナラ林が破壊されたため、より遠方に生育していたと推定されるブナ属が、みかけ上、相対的に高い出現率を示すようになったことは事実である。しかし、試料No.5でコナラ亜属が減少し、二葉マツ亜属が増加するにもかかわらず、ブナ属は増加しない。ブナ属の増加はその上位のNo.4層に入ってからであり、かつ五葉マツ亜属の増加をともなっている。このことは、平安時代末期以降、これらの花粉が遠方から運ばれやすいような洪水が増加したり、あるいはブナ属の生育に適した気候に変化したことを想定せざるをえない。

一方、No.5層を境としてオニグルミ属が減少するにもかかわらず、ハンノキ属は逆に増加していく。このことは低湿地の開田化と矛盾する。多賀城址などでは、低湿地の開田とともに、ハンノキ属は急減した（安田1973）。そのハンノキ属が増加する原因として、現時点では、すでに報告した如く（安田1984）、チソ分の固定のため、ハンノキ林は破壊されることなく残され

たものとみるのが妥当であろう。ハンノキ属とともにクリノキ属の花粉が出現率をNo.5層より増加させることは、やはり人間の保護、育成の結果であろう。

花粉ダイアグラムの最上部の現代の水田耕土に入って、二葉マツ亜属の優占する現在と類似した景観が現出した。仙台湾周辺においては、森林破壊によってアカマツの優占するような二次植生が形成されたのは、近世後半～明治以降のことであろう。

参考文献

- 安山喜憲 (1973) 宮城県多賀城址の泥炭の花粉学的研究、第四紀研究、12-2
安田喜憲 (1984a) 山口遺跡の泥土の花粉分析、「山口遺跡II」仙台市教育委員会
安田喜憲 (1984b) 富沢水田遺跡泉崎前地区的泥土の花粉分析、「富沢水田遺跡」仙台市教育委員会

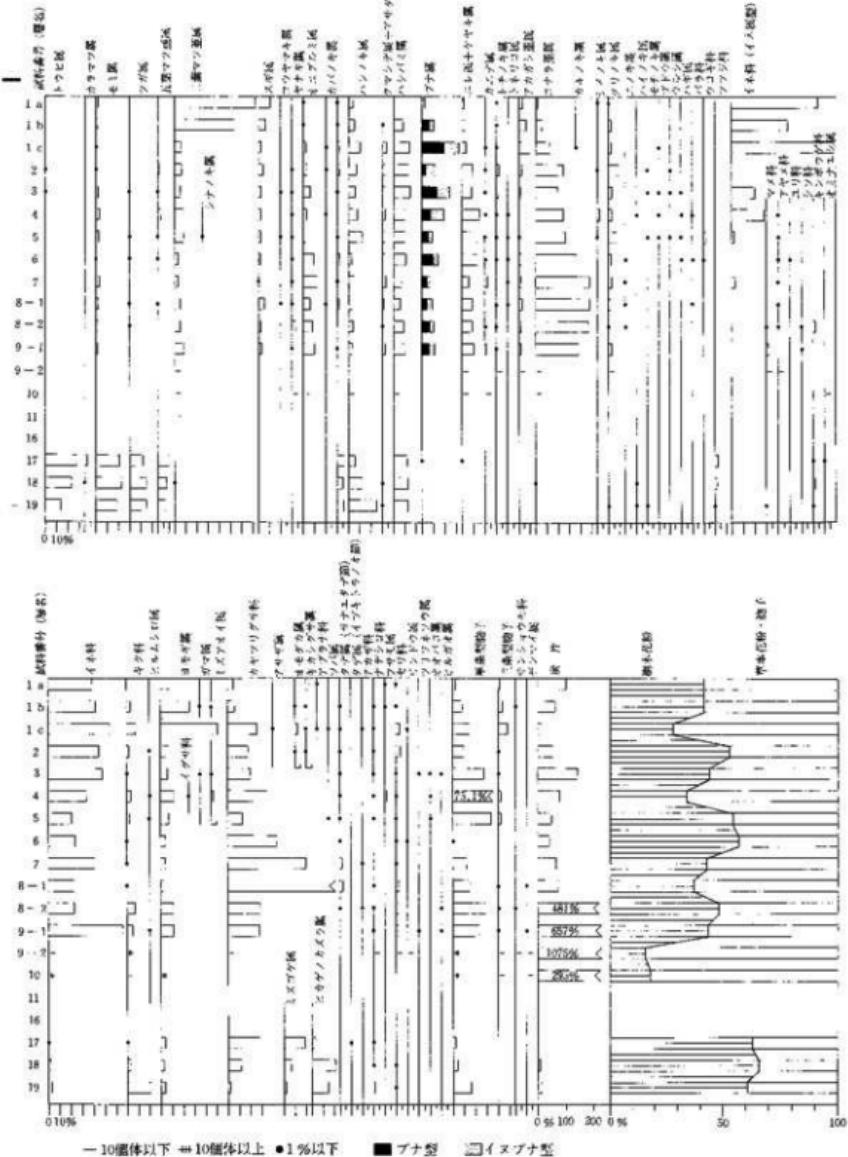
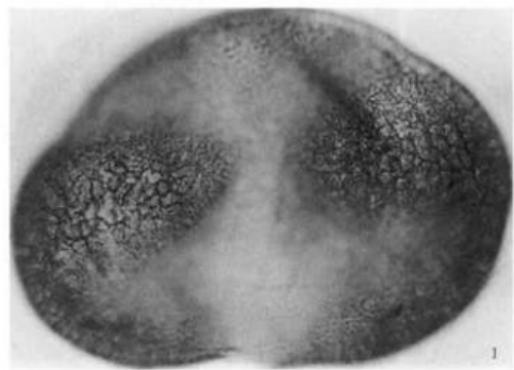
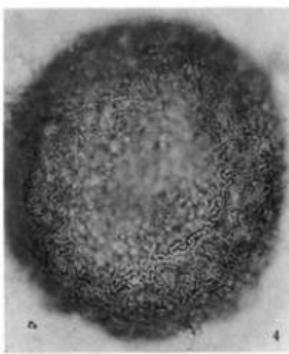


図1 中谷地遺跡試掘花粉ダイアグラム（樹木花粉を基数とするパーセント）

表 1 中谷地遺跡試掘花粉・孢子出現率表



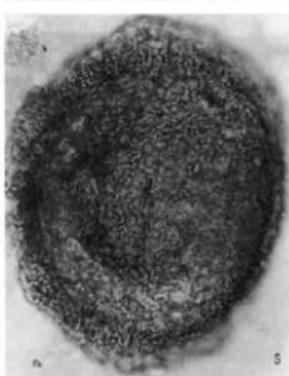
1



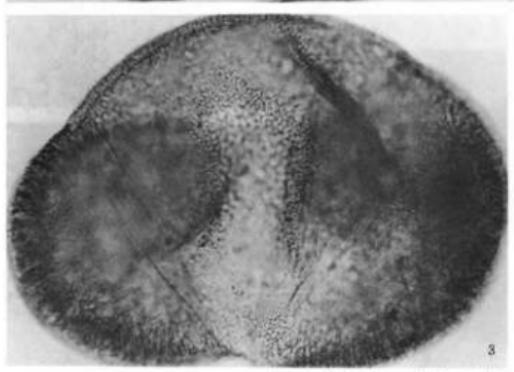
4



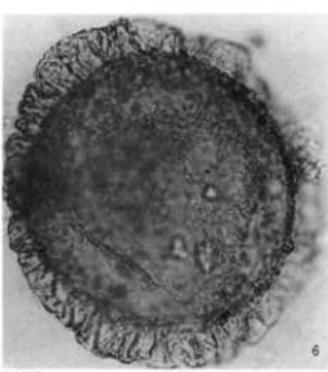
2



5

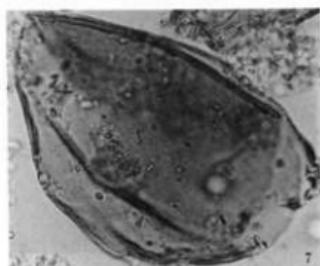
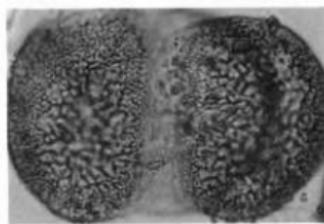
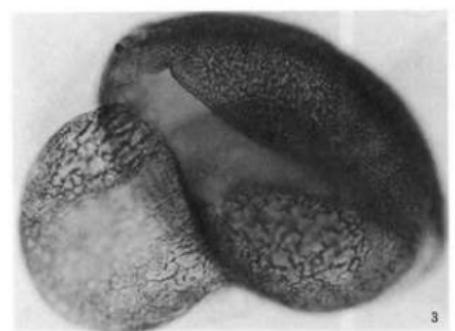
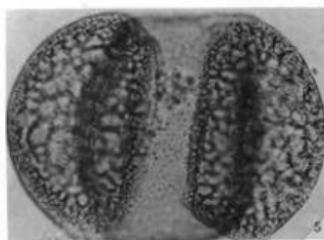
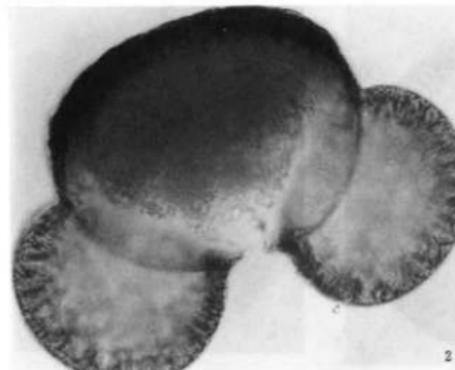
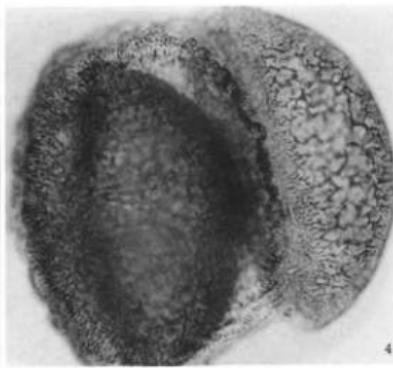
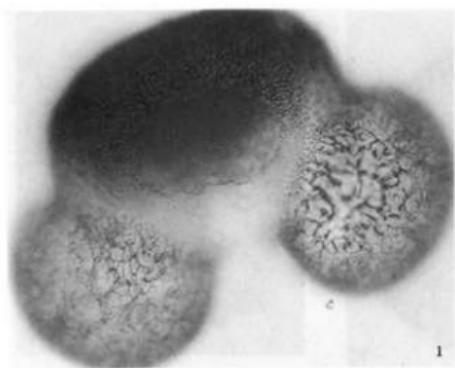


3



6

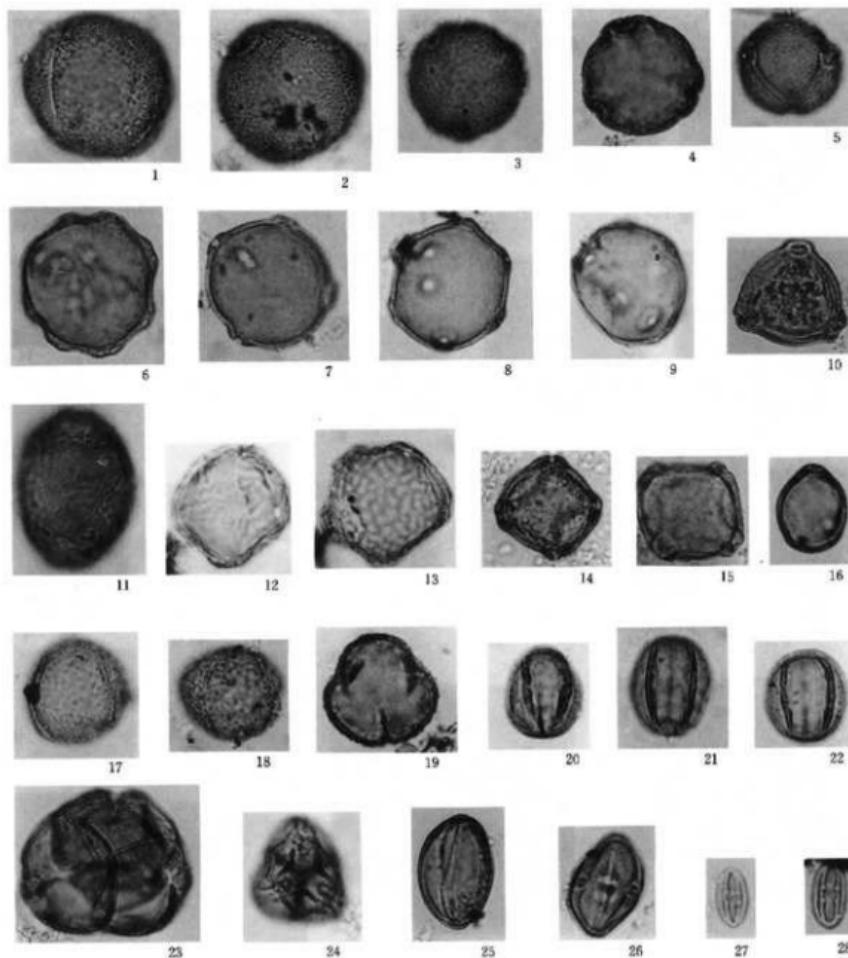
1～3、トウヒ属 4～6、ツガ属 (750倍)
花粉頭微鏡写真 I



1～4. モミ属 5～6. 五葉マツ属

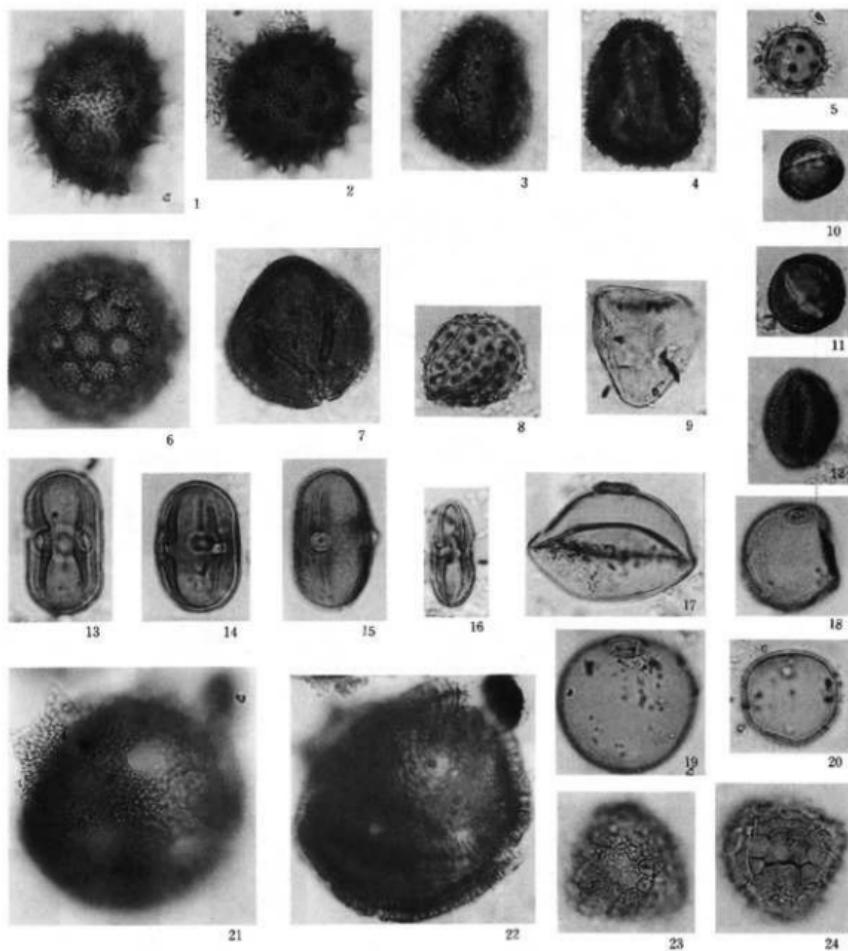
7. カラマツ属 (750倍)

花粉顯微鏡写真 II



1～2、ブナ型
 3～5、イスブナ型
 6～9、オニグルミ属
 10、カバノキ属
 11～13、ケヤキ属
 14～15、ハンノキ属
 16、ハシバミ属
 17～19、コナラ属属
 20～22、アカガシ属属
 23～24、ツツジ属
 25、カエデ属
 26、ウルシ属
 27～28、クリノキ属 (750倍)

花粉顯微鏡写真 III



1～2、キク科
 3～4、オミナエシ属
 5、キク科
 6、タデ属
 7、リンドウ属
 8、キク科
 9、カセツリグサ科
 10～11、コモギ属
 12、キンポウゲ科
 13～15、マメ科
 16、セリ科
 17～20、イネ科
 21～22、ヒルガオ属
 23～24、ヒカゲノガズラ属 (750倍)

花粉・胞子顯微鏡写真 IV

8. 仙台市富沢遺跡鳥居原地区の花粉分析

北九州大学文学部 畑 中 健 一

富沢遺跡は、仙台市南西部の富沢地区にあり、郡山低地の西半部、おもに広瀬川と名取川によって形成された後背湿地に立地している。花粉分析の試料を採取した「鳥居原地区」は、富沢遺跡の北東部、東北本線長町駅の西方約800mに位置している（仙台市教育委員会、1986）。

本遺跡においては、弥生時代および平安時代の水田跡遺構が検出されている。

本調査は、富沢遺跡鳥居原地区のトレンチ壁面より採取した試料について、花粉分析の手法により、弥生時代以降の水田農耕と古環境の復元を目的としたものである。

報告書をまとめるにあたり、花粉分析の機会をあたえられた仙台市教育委員会の方々に厚く御礼申し上げる。

分析試料

花粉分析は第4・5両トレンチの堆積物について行った。第4トレンチでは、地表から深度4mのトレンチ下底まで10cmごとに、計41点の試料を採取した。これらの試料のうち、地表下260cmおよび290cm以下の堆積物からは花粉化石は検出されなかった。

第5トレンチでは、各層から1点ずつ計15点の試料を採取したが、8層と10層の試料からは花粉化石を検出できなかった。

トレンチ壁面の層序

第4トレンチ：

| | | | |
|-------|---------|-----------|---------------------------|
| 1 層 | 0～14cm | 盛土、旧水田耕土 | |
| 3 a 層 | 14～18cm | 黒褐色シルト質粘土 | (平安時代の水田跡) |
| 3 層 | 18～25cm | 黒色粘土 | |
| 4 a 層 | 25～30cm | 黒色粘土 | : 植物遺体を含む |
| 4 層 | 30～36cm | 黒褐色粘土 | : 植物遺体を含む |
| 5 層 | 36～48cm | 黄灰褐色粘土 | : 植物遺体を含む(弥生時代、十三塚式期の水田跡) |
| 7 a 層 | 48～58cm | 黒色粘土 | : 植物遺体を含む |
| 7 b 層 | 58～60cm | 灰褐色粘土 | : 植物遺体を含む(弥生時代の水田跡 ?) |
| 7 c 層 | 60～70cm | 黒褐色粘土 | : 植物遺体を含む |
| | | | (弥生時代中期樹形圓式期の水田跡) |

| | | | |
|------|-----------|-----------|--------------|
| 8 層 | 70～84cm | 黒褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 9 層 | 84～90cm | 黒色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 10 層 | 90～98cm | 灰色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 11 層 | 98～108cm | 黒色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 12 層 | 108～128cm | 黄灰色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 13 層 | 128～138cm | 黒褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 14 層 | 138～141cm | 黒色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 15 層 | 141～166cm | 淡黄褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 16 層 | 166～170cm | 黒色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 17 層 | 170～188cm | 黒色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 18 層 | 188～192cm | 黄灰色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 19 層 | 192～197cm | 黒褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 20 層 | 197～206cm | 黒褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 21 層 | 206～216cm | 黒色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 22 層 | 216～231cm | 灰色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 23 層 | 213～236cm | 灰褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 24 層 | 236～248cm | 黒褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 25 層 | 248～250cm | 黒褐色シルト質粘土 | ：植物遺体、砂を含む |
| 26 層 | 250～252cm | 黒褐色粘土 | ：植物遺体を含む |
| 27 層 | 252～257cm | 黒色シルト質粘土 | ：植物遺体を含む |
| 28 層 | 257～262cm | 黒色シルト質粘土 | ：植物遺体、砂を含む |
| 29 層 | 262～280cm | 黒灰色シルト | ：植物遺体を含む |
| 30 層 | 280～292cm | 黄灰色砂 | ：粘土をブロック状に含む |

第5 トレーンチ：

- 1 層 0～6cm 腐植質シルト（旧水田耕土）
- 3 a 層 6～14cm 泥炭質粘土
- 3 層 14～21cm 泥 炭
- 4 a 层 21～30cm 泥 炭
- 4 层 30～40cm 泥 炭
- 5 层 40～47cm 泥炭質シルト（赤生時代、十三塚式期の水田跡）
- 6 层 47～50cm 泥 炭

| | | |
|-------|-----------|-----------------------|
| 7 a 層 | 50～58cm | 泥 炭 |
| 7 b 層 | 58～64cm | 泥 炭 (弥生時代の水田跡?) |
| 7 c 層 | 64～70cm | 泥 炭 (弥生時代中期樹形岡式期の水田跡) |
| 7 d 層 | 70～75cm | 泥 炭 |
| 8 層 | 75～83cm | 泥 炭 |
| 9 層 | 83～94cm | 泥 炭 |
| 10 層 | 94～100cm | 泥 炭 |
| 11 層 | 100～110cm | 泥 炭 |

分析法

花粉化石の抽出は、塩化亜鉛ーアセトリシス法によった。

- 1) 試料2～3gに55%HFを加えて珪酸塩類を分解－水洗。
 - 2) アルカリ液処理：試料に10%KOHを加え、湯煎器で加熱－水洗。
 - 3) アセトリシス処理：試料を水酢酸で脱水後、無水酢酸9容、濃硫酸1容の混合液を加えて加熱、繊維質を分解－水洗。
 - 4) 比重選別：試料にZnCl₂溶液(比重約1.8)を加えて搅はん後、液面に浮上した微化石をミクロ・ビペットで別の遠心管に移し、水洗。
 - 5) 以上の処理を終った試料(花粉濃縮液)の一部をミクロ・ビペットに採り、グリセリン・ジェリーに包埋。
- 検鏡は通常400倍で行った。花粉の出現頻度(%)は、各試料ごとに樹木花粉の総数を基本数として算出した。

イネ型花粉の同定は、中村(1974)の位相差像の観察による方法に準拠した。

分析結果および考察

両トレンチを通じて検出された花粉・胞子はつぎの通りである。

樹木花粉(AP)：マツ属(*Pinus*)・モミ属(*Abies*)・トウヒ属(*Picea*)・ツガ属(*Tsuga*)・スギ属(*Cryptomeria*)・コウヤマキ属(*Sciadopitys*)・クリ属(*Castanea*)・コナラ属(*Lepidobalanus*)・アカガシ属(*Cyclobalanopsis*)・ブナ属(*Fagus*)・カバノキ属(*Betula*)・ハンノキ属(*Alnus*)・クマシデ属(*Carpinus*)・サワグルミ属(*Pterocarya*)・オニグルミ属(*Juglans*)・トネリコ属(*Fraxinus*)・トチノキ属(*Aesculus*)・シナノキ属(*Tilia*)・カエデ属(*Acer*)・ミズキ属(*Cornus*)・ハイノキ属(*Symplocos*)・ウルシノキ属(*Rhus*)・ニレ/ケヤキ属(*Ulmus/Zelkova*)・エノキ属(*Celtis*)。

非樹木花粉 (N A P)：ハシバミ属 (*Corylus*)・モチノキ属 (*Ilex*)・ツツジ科 (Ericaceae)・ヤナギ属 (*Salix*)・グミ属 (*Elaeagnus*)・スイカズラ属 (*Lonicera*)・イネ科：野生型 (Gramineae : Wild type)・イネ属 (*Oryza*)・トウモロコシ属 (*Zea*)・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)・ガマ属 (*Typha*)・アヤメ属 (*Iris*)・ヨモギ属 (*Artemisia*)・キク科 (Compositae)・タデ属 (*Persicaria*)・スイバ属 (*Rumex*)・アカザ科 (Chenopodiaceae)・ソバ属 (*Fagopyrum*)・マメ科 (Leguminosae)・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)・アリノトウグサ属 (*Haloragis*)・タネツケバナ属 (*Cardamine*)・ミソハギ属 (*Lythrum*)・アカバナ属 (*Epilobium*)・ツリフネソウ属 (*Impatiens*)・オモダカ属 (*Sagittaria*)・セリ科 (Umbelliferae)・ヒツジグサ属 (*Nymphaceae*)。

シダ類胞子 (F S)：単条型 (Momolete type), 三条型 (Trilete type)。

主要花粉の消長は花粉ダイアグラム (図1・2) に示した。シダ類胞子は、Pteridophytaとして一括表示した。

第4トレンド：

分析結果は図1に示すように、コナラ亜属、ブナ属・クマシデ属など冷温帶要素が全層にわたって高率に出現する。またこれらの各属に伴って、サワグルミ・オニグルミ・ハシバミ・ニレ/ケヤキ・ハンノキ各属も連続的に出現する。これらのうち、コナラ亜属は、最下層と中層で、ハンノキ属は下層部で優占する傾向を示す。

針葉樹ではマツ・モミ・トウヒ・ツガ各属がほぼ連続的に出現する。これらのうち、マツ属は18層 (-190cm) と表層部でいちじるしい増加を示す。スギ属は中層から出現し始め、表層に向かって僅かながら増加の傾向を示す。

草本類では、イネ科とカヤツリグサ科が全層にわたって高率に出現する。イネ属 (イネ) は12層 (-128~-108cm) から出現し始め、7c層から表層にかけて増加する。さらに、表層部ではトウモロコシとソバが低率ながら出現する。

ダイアグラムに示すように、27~28層 (-252~-262cm) の放射性炭素年代は (仙台市教育委員会、1986)、5440±80年 B.P. ; 5530±105年 B.P. で、ほぼ縄文前期の堆積物であることをしめしている。このことから、富沢遺跡周辺では縄文前期以降、コナラ亜属やブナ・クマシデ・ニレ/ケヤキ各属の優占する気候的極相林が、比較的の自然度の高い状態で維持されていたと考えられる。しかしながら、前にも触れたように、18層 (-190cm) ではマツ属が急増し、さらに草本類ではキク科やヨモギ属・タデ属をはじめ、シダ類 (单条型胞子が圧倒的に多い) なども異常な増加を示している。またカヤツリグサ科はこの直上の層準で急増し、以後高い出現率を維持している。

このような草本類の一時的増加をもたらした原因については明らかでないが、18層の堆積物

が黄灰色粘土であることから、おそらく名取川や広瀬川の氾濫によって土砂が運びこまれたことに因るものとかんがえられる。遺跡周辺の後背低地には潟湖や湿地が散在し、ノハナショウブやスゲ類（カヤツリグサ）が繁茂したと推定される。

水田跡の遺構が検出された層準のイネ属（イネ）花粉の出現率はつぎの通りである。

7c層（弥生中期樹形圃式期：-70～-60cm） 9～12.7%

5 層（弥生時代十三塚式期：-48～-36cm） 7.3%

3/3a層（平安時代：-25～-14cm） 62.8%

この分析結果からみると、7c・5・3/3aの各層を水田跡とする考古学的知見は支持されてよいものと考える。平安時代の層準（3/3a）では、イネ花粉は63%と高率に出現し、あきらかに集約的栽培が行われていたことを示唆している。低率ながらソバの花粉も出現することから、水田の近傍ではソバの栽培も行われていたことは推定に難くない。一方、弥生時代の層準（7c・5）では、イネ花粉の出現率は13%以下にすぎず、当時の稻作がまだ集約的段階に達していなかったことを物語っている。

表層部の花粉群集に認められるマツ属のいちじるしい増加、アカガシ亞属やブナ・クマシデ・ニレ/ケヤキ各属の減少は、人類文化の影響による自然植生の衰退を示すものである。農耕文化の発展（中世以降？）に伴い、この地域の気候的極相林（落葉広葉樹林）の破壊は急速に進み、その跡地にはアカマツの二次林が拡大した。

第5トレーニング：

3a層以下の堆積物は、コナラ亞属やブナ属・クマシデ属など冷温帯要素の優占によって特徴づけられるが、中間温帯要素のニレ/ケヤキ属や暖温帯要素のアカガシ亞属もかなり出現する。

1層（現在の水田耕土）では、落葉広葉樹各属は急減し、これらに代わってマツ・スギ両属が顕著な増加を示す。

草本類では、イネ科（野生型）とカヤツリグサ科が中・上層で多数出現する。3・3a層ではヨモギ属の増加がみとめられる。また、ヨモギ属の増加と前後して、水田雑草と考えられるタネツケバナ属やオモダカ属が出現する。シグ頬胞子（単条型）は全層で高率に出現するが、とくに11層と9層で異常に高い出現率（230～357%）を示している。

イネ花粉は、7c層以上の層準では連続的に出現し、表層に向かって急増する。水田跡と推定される層準での出現率はつぎの通りである。

7c層（弥生中期樹形圃式期：-70～-64cm） 4.8%

7b層（弥生時代水田跡？：-64～-58cm） 花粉不検出

| | |
|-----------------------------|------------|
| 5 層 (弥生時代十三塚式期 : -47~-40cm) | 19.4% |
| 3/3a 層 (平 安 時 代 : -21~-6cm) | 12.6~25.6% |

イネ花粉の出現率から判断すると、7c・7b層での水稻耕作の可能性は乏しいと考えられる。しかし、5層および3/3a層での出現率は10%以上、最高値26%を示していることから、本遺跡での稻作は、弥生時代十三塚式期（弥生中期後半？）以降かなり集約的栽培に移行したと考えられる。

表層部（1層）の花粉群集にみとめられるコナラ亜属やブナ・カバノキ・クマシデ・ニレ/ケヤキ各属の急減と、マツ属のいちじるしい増加は、第4トレンドのそれと同じく、人類文化の影響を反映したものであり、また、スギ属の顕著な増加はスギ人工林の拡大を示すものである。

文 獻

- 中村 純(1974)：イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究、13: 187-193。
仙台市教育委員会(1986)：仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書V 仙台市文化財調査報告書第89集、36pp.

図2 鳥居原地区第5トレーンの花粉ダイアグラム

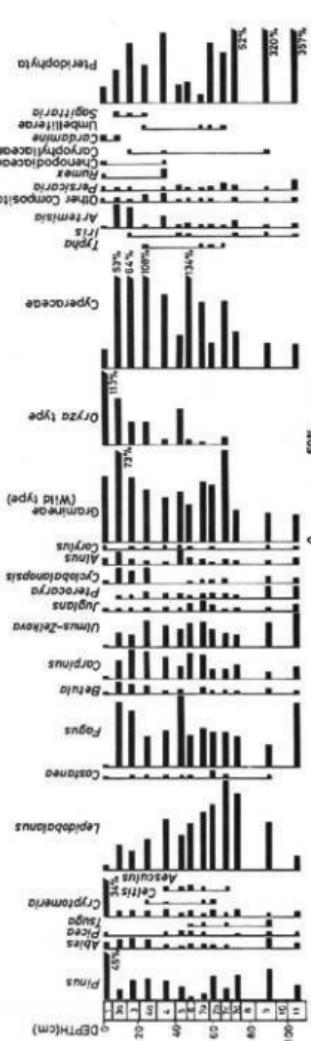
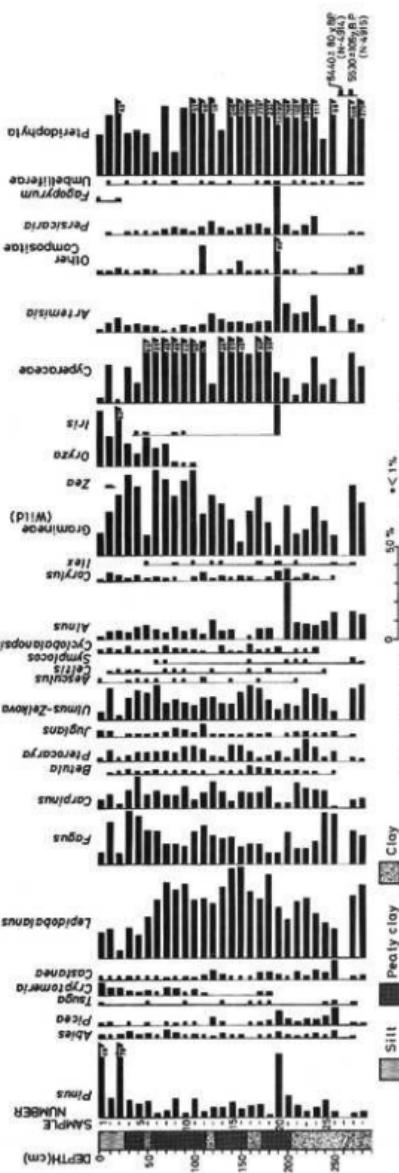


図1 鳥居原地区第4トレーンの花粉ダイアグラム



9. 富沢遺跡の¹⁴C 年代測定

社団法人 日本アイソトープ協会

測定結果報告書

昭和59年7月27日に受取りましたC-14試料8個の測定結果がございましたのでご報告します。

当方のコード 依頼者のコード C-14年代

富沢水田遺跡 烏居原地区

| | | |
|--------|---|-------------------------------|
| N-4909 | 1 | 2370±75yB.P. (2300±75yB.P.) |
| N-4910 | 2 | 2580±85yB.P. (2500±80yB.P.) |
| N-4911 | 3 | 2440±80yB.P. (2370±75yB.P.) |
| N-4912 | 4 | 3200±60yB.P. (3110±60yB.P.) |
| N-4913 | 5 | 4620±75yB.P. (4480±75yB.P.) |
| N-4914 | 6 | 5440±80yB.P. (5280±80yB.P.) |
| N-4915 | 7 | 5530±105yB.P. (5370±100yB.P.) |
| N-4916 | 8 | 5070±90yB.P. (4920±80yB.P.) |

年代は¹⁴C の半減期5730年(カッコ内は Libby の値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yearsB.P.)として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取の誤差から計算されたもので、¹⁴C 年代がこの範囲に含まれる確立は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお¹⁴C 年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。(御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。)

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

表1 富沢水田遺跡 烏居原地区¹⁴C 年代測定試料表

| 試料番号 | 試 料 名 | 試 料 注 記 | 測 定 結 果 |
|------|------------------------|-----------------------------|---------------|
| 1 | 7c層サンプル (1982) №1 | ナベタ R212 7c層サンプル№1 VI±IV | 2370±75yB.P. |
| 2 | 7c層サンプル (1982) №9 | ナベタ R21216 7c層サンプル№9 IV±V | 2580±85yB.P. |
| 3 | 7c層サンプル (1982) №18 | ナベタ R21217 7c層サンプル№18 II±IV | 2440±80yB.P. |
| 4 | IIa区深掘り区18層サンプル (1982) | 鍋田 II b 区 18層 | 3200±60yB.P. |
| 5 | IIa区深掘り区26層サンプル (1982) | 鍋田 II b 区 26層 | 4620±75yB.P. |
| 6 | IIa区深掘り区32層サンプル (1982) | 鍋田 II b 区 32層① | 5440±80yB.P. |
| 7 | IIa区深掘り区34層サンプル (1982) | 鍋田 II b 区 34層① | 5530±105yB.P. |
| 8 | IIa区深掘り区31層サンプル (1982) | 鍋田 II b 区 31層 | 5070±90yB.P. |

10. 仙台市泉崎浦遺跡出土の人骨について

聖マリアンナ医科大学 森 本 岩太郎

I. はじめに

1982年10月、仙台市泉崎浦遺跡II区から発掘調査により江戸時代末葉に属する27基の墓壙が検出され、そのうちの7号土壙の木桶内と桶下から人骨が出土した。仙台市教育委員会からの委嘱により、筆者がこの人骨を調べたのでここに報告する。

II. 人骨の出土状況

人骨を出土した本遺跡II区7号土壙は、27基の墓壙群のほぼ中央に位置する。土壙は約1.2×1m大で、類円形を呈する。便宜上、桶内の人骨を7a号、桶下の人骨を7b号とする。

(a) 7a号人骨

この人骨は成人男性1個体分と思われる。桶に入れて埋葬されていた。しかし、桶の西半分が、たまたま地下鉄工事用に打ち込まれたH杭により破壊されたために、該部にあった頭蓋をはじめとする上半身の骨格が、桶の一部とともに行方不明となった。その結果、壊れた桶の底に沈むように残っていたのは、腰椎1個、肋骨1個・左右の上腕骨・大腿骨・脛骨と右距骨の各骨片だけである。これらの人骨片の配列は、解剖学的には不自然であるが、東を向いて立て膝で座った人の下半身の骨格が、軟部組織の腐食とともに自然に桶底に崩れ落ちたと考えれば、これらの人骨片の配列の不自然さは説明できる。この人骨には、煙管1本・寛永通宝2枚が伴出した。

(b) 7b号人骨

この人骨は桶の下から発見された。桶内の人骨とは別個体と判断された。成人の左手の有鉤骨片が1個残っているだけである。この骨片1個の所見だけから性別を確定することは難しいが、人骨と一緒に手鏡・櫛・鉄が発見されているところから、女性人骨と考えて差し支えないと思われる。

III. 人骨所見

(a) 7a号人骨 (写真1)

この人骨は、その大きさ・頑丈さなどからみて、恐らく壮年～熟年期の男性1個体分であると思われる。腰椎1個については、椎体だけしか残っていないので、その正確な所属部位は不明である。上下の椎体縁に変形性脊椎症によると思われる比較的高度の骨棘形成が認められる。肋骨は左右不明の骨片が1個だけである。その長さは5cmほどの短いものであるが、やや厚い。左上腕骨は下半、右上腕骨は骨体下半が残っている。上腕骨体は太く、上腕骨頸は大きく、

三角筋粗面が著しく発達している。左右の大腿骨は骨体だけしか残っていない。右大腿骨体上部の横断示数は72.2を示して超広型に属するが、骨体中央の横断示数は103.3でピラステルの形成は見られない。骨体中央の周径は98mmである。左右の脛骨は骨体中央部が残っている。右脛骨体中央の断面は3角形を呈し、前縁が鋭い。その横断示数は71.9を示して正脛型に属する。右距骨は前半がかけているので、滑車上面の蹲踞面の有無は分らないが、発達した距骨体副外面が見られるので、この男性には恐らく蹲踞の習慣があったと思われる。外傷などは認められない。

(b) 7 b 号人骨 (写真1)

上述したように、恐らく成人女性1個体分であると思われる。左手の有鉤骨片1個が残っているだけである。病的所見は無い。

IV. まとめ

仙台市泉崎浦遺跡II区7号土壤内から出土した2個体分の江戸時代人骨のうち、桶内にあつた人骨は壮年～熟年期の頑丈な男性1個体分で、腰椎に変形性脊椎症が認められ、生前は蹲踞の習慣があったと思われる。桶下から発見された人骨は成人女性1個体分であると推定される。



写真1
7 a 号人骨

11. 富沢水田遺跡試料材同定 (1)

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試 料

試料は、変電所部分（112点）、長町南駅部分（36点）の2地点から出土した杭と考えられる材で、合計148点である。その使用年代は弥生時代中期以前から平安時代におよぶものと考えられているが、奈良時代が主とされている。試料の出土層位とその年代、試料番号を試料表としてまとめた（表1）。

2. 方 法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。No.81は焼痕部より採取した炭化材であったため、これを乾燥させたのち、三断面を作成、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版1～148）も作成した。

3. 結 果

同定結果を一覧表で示す（表1）。また、それらを地点別、時代別にまとめ（表2）、さらに変電所部分から検出された、奈良時代のものと考えられている杭列についても種類別にまとめた（表3）。

次に、各試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質などについて種類ごとに述べる。

• *Abies* sp. マツ科 No.75, 80

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は粗く、末端壁には數珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型（Taxodoid）で1～4個。放射組織は単列で1～20細胞高。

モミ属には、モミ（*Abies firma*）、ウラジロモミ（*A. homolepis*）、アオモリトドマツ（*A. mariesii*）、シラベ（*A. veitchii*）、アカトドマツ（*A. sachalinensis*）、の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは、本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは、本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州（福井県以北）の亜高山～高山帯に、シラベは、本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては、山地～高山・寒冷地に生育する。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・家具・器具・建築材など各種の用途が知られている。

• *Pinus* (subgen. *Haploxyylon*) sp. マツ科 No.2

晩材部から早材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。樹脂道は垂直・水平ともに認められる。樹脂細胞はない。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり、内壁はともに滑らかである。分野壁孔は窓状。単列、1～15細胞高。年輪界は明瞭。

単維管東亞属は、いわゆる丸葉松類であり、ハイマツ（*Pinus pumila*）、チョウセンゴヨウ（*P. koraien-*

sis)、アマミゴヨウ (*P. armandii* var. *amamiana*)、ヒメコマツ (*P. parviflora*) がある。ハイマツは本州(中部地方以北)・北海道の高山・寒冷地に、チョウセンゴヨウは関東・中部地方および愛媛県(東赤石山)の亜高山帯に、アマミゴヨウ(ヤクタネゴヨウ)は、種子島・屋久島に特産し、ヒメコマツは北海道(日高・渡島・奥尻島)・本州・四国・九州に分布する。したがって、試料はヒメコマツである可能性が高い。ヒメコマツは、尾根筋や斜面に生育する常緑高木で、まれに植栽される。材の硬さは中程度、加工や乾燥は容易で、保存性は中程度。建築・建具・家具・器具材などの用途が知られている。

• *Pinus* (subgen. *Diplaxylon*) sp. マツ科 No129

晩材部から早材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。樹脂道は垂直・水平ともに認められる。横胞細胞はない。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり、柔細胞内壁は滑らかであるが仮道管内壁には顕著な鉤歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。単列、1~15細胞高であるが多くは5細胞高前後。年輪界は明瞭。

複維管束葉質、いわゆる二葉松類には、アカマツ (*Pinus densiflora*)、クロマツ (*P. thunbergii*)、リュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツとクロマツは、本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性にすぐれる。建築・土木・家具・建具・器具材など広い用途が知られている。

• *Pinus* sp. マツ科 No 3、98

劣化が進んでいるため、上記二亞属の区別点となる放射仮道管の構造が観察できず、亞属の同定ができない。

• *Cryptomeria japonica* スギ科 No118

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2~4個。放射組織は単列で1~20数細胞高。

スギは、本州・四国・九州の水湿・肥沃な谷間などに生育する常緑高木で、また各地に植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で、割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度であり、建築・土木・樽桶・舟材など各種の用途がある。樹皮は樹根茸用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

• *Chamaecyparis* sp. ヒノキ科 No 5

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限られ、樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型(Cupressoid)で1~4通常2個。放射組織は単列、1~10数細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。その材はやや軽軟で、加工は容易、割裂性も大きいが、強度・保存性は高い。

建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で、加工は容易、割裂性も大きい。強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、桶や樽にするほか、各種の用途がある。

- *Salix* sp. ヤナギ科 No 8, 9, 19, 58, 60, 61, 71, 85, 96, 108,
109, 120, 121, 123, 134, 138, (145)

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。管壁厚は中庸で、横断面では梢円形～やや角張った梢円形、単独および2～3個が複合する。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。柔組織は隨伴散在状およびターミナル状。年輪界は明瞭～や不明瞭。

ヤナギ属は、国内に約40種が知られ、種間差異も多く、分類の困難な植物群である。属としては全国に分布し、時に植栽される落葉低木または高木である。ヤナギというと、水辺に生育するネコヤナギ (*Salix gracilistyla*) やシダレヤナギ (*S. babylonica*) を連想することが多いが、バッコヤナギ (*S. bakkoo*)、ノヤナギ (*S. subopposita*) などのように乾燥した立地に生育するものや、シリヤナギ (*S. shiraii*) やコマイワヤナギ (*S. rupestris*) のように岩場に生育するものもある。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく、保存性は低い。大径木が少ないため小細工物にする程度で特に重要な用途は知られていない。樹皮を各種の用途に用いるものもある。

- *Pterocarya rhoifolia* クルミ科 No 155

散孔材で、晩材部へ向かって管径を漸減させる。管壁厚は中庸で、横断面では多角形、単独まれに2～10個が複合する。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性III(～II)型、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は短接線状、周囲状およびターミナル状。年輪界はやや明瞭。

サワグルミは、北海道南部(渡島)・本州・四国・九州の主に谷沿いに生育する落葉高木で、東北・関東西部・中部地方に多い。材は軽軟で、加工は極めて容易であるが、耐朽性は小さく、割れやすい。かつてはキリ (*Paulownia tomentosa*) の代用材として下駄に用いられたほか、経木・器具・家具材などにも用いられた。樹皮は丈夫で、屋根材・皮算・細工物などに用いられたといふ。

- *Carpinus* sp. カバノキ科 No 47, 51, 130

散孔材で、管孔は単独および2～6個が複合、横断面では角張った梢円形～多角形、管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性III～II型、1～5細胞幅、1～40細胞高のものと集合組織よりなる。柔組織は短接線状、散在状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

クマシデ属は、イワシデ (*Carpinus turzanicinovii*)、イスシデ (*C. tschonoskii*)、アカシデ (*C. laxiflora*)、クマシデ (*C. japonica*)、サワシバ (*C. cordata*) の5種が自生する。イワシデは本州(中国地方)・四国・九州の石灰岩地に生育し、アカシデ・サワシバは北海道・本州・四国・九州に、イスシデ・クマシデは本州・四国・九州に生育する温帯性落葉高木～低木である。山野に普通に見られ、二次林の構成種でもある。その材はやや重硬で、割裂性が小さく、曲木や木地、薪炭材などに用いられる。

• *Fagus* sp. ブナ科 No32、37、55、57、86、105、147

散孔材で晩材部へ向って管径を漸減させる。管孔は単独または2~4個が複合、管壁厚は中庸~薄く、横断面では多角形、分布密度は高い。道管は単および階段穿孔を有し、段(bar)数は10前後。壁孔は大型で対列状~階段状、放射組織との間では網目状~階段状となる。放射組織は同性~異性凹型で、單列、数細胞高のものから複合組織まである。年輪界は明瞭~やや不明瞭。

ブナ属には、ブナ(*Fagus crenata*)とイヌブナ(*F. japonica*)の2種がある。ブナは北海道南西部(黒松内低地帯以南)・本州・四国・九州に、イヌブナは本州(岩手県以南)・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナの方がブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは、日本の冷温帶落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本山地に広く生育していたが、近年、植林などによって生育地が激減している。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。材積は国産広葉樹の中で最大であるにもかかわらず、近年まで本格的な利用はなされなかった。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。また種子は食用となり、搾油される。

• *Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp. ブナ科

No 7、28、34~36、39、40、42、44、46、49、52、66、68、87、99~101、

116、122、127、144

環孔材で孔縫部は3~4列、孔縫外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は薄く横断面では円形~梢円形、小道管は管壁は中庸~薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、單列(まれに一部複列)、1~20細胞高のものと、複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は、落葉ナラ類 (=subgen. *Lepidobalanus*) の中で、果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ(*Quercus mongolica*)とその変種ミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosseserrata*)、コナラ(*Q. serrata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)、カシワ(*Q. dentata*)といいくつかの変品種を含む。モンブリナラは、北海道・本州(丹波以北)、ミズナラ・カシワは、北海道・本州・四国・九州に、コナラは北海道(南部)・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。單にナラと言う場合はミズナラをさすことが多い。ミズナラはブナとともに我が国の冷温帶落葉樹林を代表する樹木で、ブナより低標高地から生育し、またブナ帯の二次林構成種でもある。材は一般に重硬であるが、生長の良否によって著しく変化する。割變性は小さく、加工は困難で、保存性は中程度。家具・器具・機械・船舶・櫓橋・薪炭材など広い用途が知られる。また平野部で普通にみられるのはコナラで、その材は一般にミズナラより重硬で、加工は困難、用途もミズナラ同様であるが、薪炭材としてはクヌギ(*Q. acutissima*)に次ぐ有用材で、古くから利用され、植栽されることも多かった。

• *Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. ブナ科

No 13、22、38、41、67、78、93~95、104、125、128、131、156

環孔材で孔隙部は1~4列、孔隙外で急激に管径を減ずる。大道管は管径は中庸~厚く、横断面では円形、小道管は管壁は中庸~厚く、横断面では角張った円形、とともに単独。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では棒状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔組織はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、落葉ナラ類の中で、果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ(*Q. variabilis*)の2種が含まれる。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両種を区別することはできないが、現在の自然分布からみて、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは、樹高15mになる高木で、材は重硬である。

古くより薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多かった。黒炭で知られる佐倉炭・池田炭も本種で作られ、薪炭材としては國産材中の重用材である。このほかに器具材・杭材・橋木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。

- *Castanea crenata* ナラ科 No11、14~16、23、26、27、29、30、
33、43、45、62、63、65、73、77、81、102、103
115、116、124、126、133、140、(142)、146、150

環孔材で孔隙部は1~6列、孔隙外で急激に管径を減じ火炎状に配列する。管壁は中庸~薄く、大道管は単独、横断面では円形~橢円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った橢円形~多角形。道管は單穿孔を有し、壁孔は大型で密に交互状に配列、放射組織との間では棒状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~150細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また栽培される落葉高木である。その材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、橋木や海苔粗糸などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

- *Morus bombycis* クワ科 No74、113、148

環孔材で孔隙部は1~5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状となる。大道管は管壁は厚く、横断面では橢円形、単独。小道管は管壁は中庸、やや角張り複合管孔をなす。單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II~III型、1~6細胞幅、1~50細胞高でしばしば結晶を含む。柔組織は周囲状~糸状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは、北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、中国原産のカラグワ(マグワ)(*Morus alba*)・ロウソ(*M. alba* var. *multicaulis*)とともに多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。材の解剖学的特徴から、これらを区別することはできない。ヤマグワの材はやや重硬で強韌、加工はやや困難で、保存性は高い。装饰材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

- *Deutzia* sp. ユキノシタ科 No12、17、18、21、48、59、64、76、79、82、

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独まれに複合する。道管孔は階段穿孔を有し、段数は20~30、壁孔は小窓で交互状に配列。放射組織との間では節状となる。放射組織は大型で異性II型、1~4細胞幅、鞘細胞(sheath cell)が認められる。柔組織はほとんど目立たない。年輪界は不明瞭。

ウツギ属は、ウツギ(*Deutzia crenata*)、ヒメウツギ(*D. gracilis*)など約5種が自生する。いずれも落葉低木で、このうち、各地で普通にみられるのがウツギで、ヒメウツギ・マルバウツギ(*D. scabra* var. *scabra*)が本州(関東地方以西)・四国・九州にみられるほかは産地が限られる。ウツギは山野に自生するほか、生垣として栽培されることもある。材は重硬で割裂性は大きく、木釘・呑口・楊子などに用いられる。

• *Prunus* sp. バラ科 No(54)、90

環孔性を帯びた散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2~8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~3細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

サクラ属は、ヤマザクラ(*Prunus jamasakura*)やウミズサクラ(*P. grayana*)など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ(*P. persica*)やスモモ(*P. salicina*)など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木~低木であるが、バクチノキ(*P. zippeliana*)やリンボク(*P. spinulosa*)の常緑樹も含まれる。このうちヤマザクラは、本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中~やや重硬・強韌で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は櫻皮細工に用いられる。

• *Zanthoxylum* sp. ミカン科 No111、136

半環孔材へ散孔材で晩材部へ向かって管径を漸減させる。管壁厚は中庸、横断面では円形~楕円形、単独まれに2~3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

サンショウ属は、サンショウ(*Zanthoxylum piperitum*)、イヌサンショウ(*Z. schimifolium*)など約5種が自生する。このうちイヌサンショウ・カラスサンショウ(*Z. ailanthoides*)などはイヌサンショウ属(*Fagara*)として独立させる見解もある。常緑または落葉性の高木~低木で、時に植栽される。サンショウは北海道・本州・四国・九州の山野に普通な落葉低木で、人家に植栽されることもある。材は強韌で、すりこぎとして常用されるほか、(小)器具材や薪炭材としても用いられる。カラスサンショウは本州(宮城・青森県以南)・四国・九州・琉球・小笠原の主として沿海地に分布する落葉高木で、材はやや軽軟で、器具(箱・桶など)・玩具・薪炭材などに用いられるほか、地方によってはキリの代用材として下駄に用いられるという。葉は民間薬として用いられ、また種子から精油を搾ったといふ。

• *Picrasma quassoides* ニガキ科 No149

環孔材で孔圈部は2~3列、孔圈外で急激に管径を減じのち年輪界に向かって漸減する。大道管の

管壁は厚く横断面では円形～角張った円形、単独、小道管は円形～多角形で単独～塊状、年輪界付近では周囲の柔細胞と区別しにくい。単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となる。放射組織は同性、1～8細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～翼柔およびターミナル状、柔細胞ストランドが目立つ。年輪界は明瞭。

ニガキは全国の山野に普通な落葉高木で、樹皮や材に苦味があることからその名がついた。材の硬さは中程度で強度はやや小さい。器具材や薪炭材などにも用いられるが、材や樹皮を健胃・驅虫・殺虫剤として利用することで知られる。また樹皮は染料となる。

• *Acer* sp. カエデ科 №1, 24, 72, (154)

散孔材で、管孔は単独および2～3個が放射方向に複合、管壁は薄く、横断面ではやや角張った梢円形、管径は年輪界へ向かって漸減する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁には細いらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～30細胞高で時に100細胞高を越える。柔組織はターミナル状、周囲状または隨伴散在状、接線状。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属は、イタヤカエデ(*Acer mono*)やイロハモミジ(*A. palmatum*)など約25種が自生し、また多数の品種があり植栽されることもある。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高～低木である。材は一般にやや重硬・強韌で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭作などに用いられる。

• *Aesculus turbinata* トチノキ科 №141

散孔材で管壁は中庸～薄く、単独および放射方向に2～4個が複合、横断面では角張った梢円形を示す。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では、網目状～篩状となる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列し、肉眼ではリップル・マーク(ripple mark)として認められる。柔組織はターミナル状に配列。年輪界は明瞭。

トチノキは、北海道(西南部)・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で耐朽性は低い。器具・家具材や、旋作材・木地として用いられる。種子は多くの澱粉を含み食用となるほか、タンニン原料ともなる。

• *Cleyera japonica* ツバキ科 №84

散孔材で晩材部へ向かって管径を漸減させる。管壁は薄く、横断面では多角形。道管は階段穿孔を有し、段数は10前後、壁孔は対列状～階段状で、放射組織との間では階段状となる。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。柔組織は散在状。年輪界は不明瞭。

サカキは、本州(新潟・茨城県以西)・四国・九州・琉球に自生するとされる常緑高木で、暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)の構成種であり、神社などに植栽される。このため本来の自生北限は明らかではない。材は重硬・強韌で、割裂しにくく加工は困難。建築・器具材としても用いられるが、薪炭材として一般的である。枝葉を玉串として用いることでも知られる。

• *Idesia polycarpa* イギリ科 №69, (70)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～3個が複合する。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～4細胞幅、1～30細胞高であるがときに上下に連結

する。柔組織は周開状～隨伴散在状。年輪界は明瞭。

イイギリは、本州・四国・九州・琉球の主として山腹～谷筋の肥沃地に生育する落葉高木で、近畿地方以西に多く、ときに植栽される。材は軽軟で、耐朽性は低い。キリの代用材として下駄などに用いられるほかは、あまり重用な用途は知られていない。

• *Cornus kousa* ミズキ科 No31

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段数が多い。放射組織は異性II型、1～10細胞幅、1～40細胞高。年輪界はやや明瞭で、放射組織の部分で外方へ突出する。

ヤマボウシは、本州・四国・九州・琉球に分布する落葉高木で、時に植栽される。材は重硬・強韌で、割裂性は小さい。農耕具の柄・櫛・旋作材などに用いられる。また果実は食用となる。

• *Clethra barbinervis* リョウブ科 No139

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った円形、単独。道管は階段穿孔を有し、段数が多く、壁孔は交互状～階段状に配列する。放射組織は異性II型、1～4細胞幅、1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや明瞭。

リョウブは、北海道(渡島)・本州・四国・九州の主に陽好地に生育する落葉高木である。材はやや重硬で、割裂しにくく、加工はやや困難で、器具・旋作・玩具・薪炭材などに用いられる。また若葉は食用となる。

• *Styrax* sp. エゴノキ科 No20、50、53、56、132-1

散孔材で年輪界付近で管径を減ずる。管孔は放射方向に2～4個が複合または単独で、横断面では梢円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有し段数は10前後、壁孔は小型で密に交互状～対列状に配列、放射組織との間では節状となる。放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

エゴノキ属にはエゴノキ(*Styrax japonica*)、ハクウンボク(*S. obassia*)、コハクウンボク(*S. shiriana*)の3種がある。エゴノキは北海道(渡島)・本州・四国・九州・琉球に、ハクウンボクは北海道(北見・石狩以南)・本州・四国・九州に、コハクウンボクは本州(板木原以南)・四国・九州に分布する落葉高木～低木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易で、旋作・器具・薪炭材などに用いられる。果皮にはエゴサボニンを含み、洗剤や魚毒として用いられた。またハクウンボクの種子から搾られた油脂からはロウソクが作られた。

• *Fraxinus* sp. モクセイ科 No106、114

環孔材で孔圈部は1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち晩材部へ向かって漸減する。管壁は厚く、横断面では円形～梢円形または2個が複合、複合部は更に厚くなる。道管は單穿孔を有し、壁孔は小窓で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～節状となる。放射組織は同性(～異性III型)、1～3(まれに5)細胞幅、1～40細胞高であるが20細胞高前後のものが多い。柔組織は周開状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ(*Fraxinus platypoda*)、トネリコ(*F. japonica*)、アオダモ(*F. lanuginosa*)

など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ(*F. longicuspis*)・マルバアオダモ(*F. sieboldiana*)・アオダモは、北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ(*F. mandshurica* var. *japonica*)は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、剛性があり、加工は容易で、建築・家具・器具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

4. 考 察

上述のように木材の解剖学的特徴のみで、その種名を特定することは困難な場合が多いが、現生種の分布などから、今回検出された試料の一部は次のような種(species)であると推定される。すなわちモミ属=モミ(*A. firma*)、ブナ属=イヌブナ(*F. japonica*)、クヌギ節=クヌギ(*Q. acutissima*)、ウツギ属=ウツギ(*D. crenata*)と考えられ、以下ではそれぞれの種として扱うこととする。なお、木村・内藤(1984)、内藤(1984)はコナラ節に含まれるコナラとカシワを区別したり、コナラと限定しているが、材の解剖学的特徴のみでこれらの種を識別できるかは、はなはだ疑問である。

試料148点で、25Taxaが同定された。このうち針葉樹類は、変電所部分6点、長町南駅部分2点の計8点で、全体の5.4%を占めるにすぎない(表1-3)。近隣の山口遺跡においても杭が出土し同定されているが、平安時代と考えられるII区22号溝で、35点中イヌガヤ1点、カヤ1点の計2点(木村・内藤 前出)、I区第8層上面(弥生～奈良時代、奈良時代の可能性大とされる)では12点中針葉樹0、弥生～平安時代と考えられる2点のうちの1点がカヤである(内藤 前出)。このように杭材に針葉樹をあまり使用していない例は、各地・各時代の遺跡でも知られている。例えば埼玉県大宮市寿能泥炭層遺跡A杭列(繩文時代後期)では306点中カヤ・イヌガヤ計4点(1.4%)、同B杭列(繩文時代中～後期)では35点で針葉樹0である(鈴木・能城・横田 1984)。大阪府東大阪市鬼虎川遺跡(弥生時代中～後期)では、柱材では針葉樹が全試料数の1/3強を占めるのに対し、杭材では61点中5点にすぎない(伊東・林・島地 1984)。また同市西岩田遺跡(弥生時代後期～古墳時代前期)では、柱・杭材の区別がなされていないが、43点中モミ・スギ・ヒノキ計7点のみである(松田 1983)。このような傾向について内藤(前出)は、“現在では、水温の多いところの土木用杭として、樹脂が多く水温に強いクロマツなどの、杭を使用することが多いことと考え合わせると、当時の杭の利用との差異について検討することは、杭材料の供給地としての、森林状態を推測する資料になるのではないか”と、現在と過去の植生が異なっていた可能性を示唆している。確かに、スギ・ヒノキの植林や、アカマツ(クロマツ)の植林・二次林が広がり、亜高山帯針葉樹林までが伐採されるようになった現在の植生と、そうした人為的影響のきほどおよばなかった過去の植生が、異なっていたことは容易に想像される。しかし、物理的に針葉樹材が入手しにくいという状況のほかに、当時の人々の中に、杭材として針葉樹を用いることへの抵抗感のようなものがあったのではなかろうか。一般に、加工が容易で、強度・耐久性にすぐれ、生長の速い針葉樹材は、いわば貴重な木材資源であり、建築材や器具材など“特殊”な用途に用いられ、それらに比べれば“一段劣る”杭材には、いわゆる雜木(=広葉樹)で十分と考えられたのではないか。しかも広葉樹には、生長が速いえに、伐採されても切株から萌芽・再生するものが多くみられる。特に、後述するように、今回多く検出された、ヤナギ類・ナラ類・クヌギ・クリ・ウツギは、生長が

述いうえに、強度の剪定にも耐える種類である。今回検出された杭の性格については、資料も少なく不明確であるが、水田址に伴なうものであることから、水路・畦畔の補強や境界線などがその主なもので、特に強度や耐久性が要求されるものとは考えられない。保存性の低いとされるモミやヤナギ類をも使用していること(とは言っても、残存・検出されている訳だが)、灌漑・排水施設が検出されていないこと(仙台市教育委員会 1984)から、補強材的性格は薄れてくる。1本の杭を長持ちさせて使うことより、手近の材料を用い、腐朽したら直ちに補修するという方法がとられたのではなかろうか。この点は、試料の太さを検討すれば、より明確になるものと思われる。したがって、杭材に針葉樹材が少ないとすることは、植生量の問題と、伐採・採取後の再生産速度の問題の二つの入手しにくさに関わっているものと、現時点では考えられる。

今回同定された試料には、自然木は含まれていないため、当時の植生を直接推定することはできないが、杭の材料は、手近な林木の中から選んだであろうことから、その組成から推定される植生は、山口遺跡において、花粉・大型遺体の分析結果から推定されたもの(内藤・三浦・木村 1984)と類似したものとなろう。すなわち、台地へ丘陵地の極相林のモミ・イヌブナ林と二次林のクリ・コナラ林、河辺へ低湿地のハンノキ林・ヤナギ林などが主なものであろう。こうした植生の中から、クリ・ナラ類・ツツギ・クヌギ・ヤナギ類が杭材として選択されていることになる(表3・4)。第1位と2位(クリとナラ類)、4位と5位(クヌギとヤナギ類)の順位が変動するものの、これら5Taxaで、試料全体では67.6%、変電所部分(112点)では69.6%、更に杭列(70点、ただし第11杭列は2点のみであり、杭列と呼べるか疑問であるが)では71.4%を占めている。その選択規準は、材質(強度・耐久性など)とは考えにくく、上述のように入手し易さということになろうか。ただ、遺跡の立地などから考えて、当然生育していたであろうハンノキが、1点も検出されていない。材質的には、ヤナギ類を用いてハンノキを避けなければならないとは考えられないし、立地的にも、ある程度の広がりを持ったハンノキ林が成立していてもおかしくはない。山口遺跡では、ヨシ沼沢を水田として利用したと推定されているが(内藤ほか 前出)、本遺跡の場合は、ハンノキ林を破壊して、水田を造成したものでもあろうか。その場合には、採集したハンノキを杭などに利用すると考えられるが、この点に関しては、今後、自然木などの検討がなされれば、解答が得られるものと思う。

(注) 杭と自然木の組成を比較した例として、寿能泥炭層遺跡がある(鈴木ほか 前出)。ここでは縄文時代後期とされる自然木518点、A杭列306点が同定・比較されているが、同定された32Taxaのうち、自然木では認められず、杭で検出されているものは、ニガキ1点のみである。

引用文献

- 伊東隆夫・林 昭三・島地 謙(1984) 鬼虎川遺跡から出土した建築用材の樹種。鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告書 3-遺物編一、東大阪市文化財協会、55~72。
- 木村中外・内藤俊彦(1984) 山口遺跡から出土した平安時代の木杭など。仙台市文化財調査報告書第61集 山口遺跡II-仙台市体育馆建設予定地一、仙台市教育委員会、440~441。

³ 松田隆嗣(1983) 西岩田遺跡出土木製遺物の樹種について、西岩田、大阪文化財センター・大阪府教育委員会、309-342。

内藤俊彦(1984) 山口遺跡Ⅰ区の杭の材質。仙台市文化財調査報告書61集 山口遺跡Ⅱ—仙台市体育館建設予定地— 仙台市教芸委員会、519。

内藤俊彦・三浦 均・木村中外(1984) 山口遺跡3号河川跡堆積物の花粉分析と植物遺体。仙台市文化財調査報 告書第61集、山口遺跡II-仙台市体育馆建設予定地-、仙台市教育委員会、231~240。

仙台市教育委員会(1984) 富沢水田遺跡(C-301)-鳥尼原・中谷地地区、仙台市文化財調査報告書第69集
仙台市立演舞遺跡C-301調査報告書III、仙台市教育委員会・仙台市交通局、67~75。

鈴木三男・能城修一・植田弥生(1984) 加工木の樹種。寿能丸炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—、埼玉県教育委員会、699～724。

表1 固定結果

| 試料番号 | 地 区 | 種 | 品 | 標 | 目 | 試料番号 | 地 区 | 種 | 品 | 標 | 目 |
|------|------|------|---|---------------------|-------|------|--------|-----|---|---|---------------------|
| 107 | 長町南駅 | 4 雄 | 赤 | ウツギ属の一種 | 135 | 長町南駅 | 5 雄 | | | | ワタクシナタケ属(スギ科)の一種 |
| 108 | 長町南駅 | 4 雄 | 赤 | カナガ属の一種 | 136-1 | 長町南駅 | 7 d 雄上 | 枝 | | | エゴノキ属の 一種 |
| 109 | 長町南駅 | 4 雄 | 赤 | カナガ属の一種 | 132-2 | 長町南駅 | 7 d 雄上 | 枝 | | | エゴノキ属の 一種 |
| 110 | 長町南駅 | 1 雄上 | 赤 | カナガ属(コナラ属同科ナラ属)の一種 | 133 | 長町南駅 | 7 d 雄上 | 枝 | | | カナガ属の 一種 |
| 111 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | サンショウ属の一種 | 134 | 長町南駅 | 7 d 雄上 | 木 片 | | | カナガ属の 一種 |
| 112 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | 松叶材? | 136 | 長町南駟 | 4 雄 | 枝 | | | サンショウ属の 一種 |
| 113 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | ヤマグサ | 137 | 長町南駅 | | | | | ウツギ属の 一種 |
| 114 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | トヨリ属の 一種 | 138 | 長町南駅 | | | | | ヤナガ属の 一種 |
| 115 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | カナ | 139 | 長町南駅 | | | | | ヨロイヅ |
| 116 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | カナ | 140 | 長町南駅 | 7 c 雄 | 枝 | | | カナ |
| 117 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | スギ | 141 | 長町南駅 | 4 雄中 | 木 片 | | | ワタクシナタケ属(スギ科)の 一種 |
| 118 | 長町南駅 | 4 雄上 | 赤 | カナガ属の 一種 | 142 | 長町南駅 | 6 雄上 | 枝 | | | (D 9) |
| 119 | 長町南駟 | 4 雄上 | 赤 | カナガ属の 一種 | 143 | 長町南駟 | 6 雄上 | 枝 | | | カナガ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 |
| 120 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | カナガ属の 一種 | 144 | 長町南駟 | 6 雄上 | 枝 | | | セナガ属の 一種 |
| 121 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | カナガ属の 一種 | 145 | 長町南駟 | 6 雄上 | 木 片 | | | カナガ属の 一種 |
| 122 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | コナラ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 | 146 | 長町南駟 | 12 雄上 | 木 片 | | | カナガ属の 一種 |
| 123 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | カナガ属の 一種 | 147 | 長町南駟 | 3 雄中 | 枝 | | | カナガ属の 一種 |
| 124 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | アフ | 148 | 長町南駟 | 3 雄中 | | | | セナガ属 |
| 125 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | コナラ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 | 149 | 長町南駟 | 3 雄中 | | | | カナガ属 |
| 126 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | アフ | 150 | 長町南駟 | 3 雄中 | | | | カナガ属 |
| 127 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | コナラ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 | 151 | 長町南駟 | 7 c 雄 | | | | カナガ属 |
| 128 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | コナラ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 | 152 | 長町南駟 | 7 c 雄 | | | | カナガ属(スギ科)の 一種 |
| 129 | 長町南駟 | 4 雄中 | 赤 | カナガ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 | 153 | 長町南駟 | 7 c 雄 | | | | カナガ属 |
| 130 | 長町南駟 | 5 雄 | 赤 | ヤマグサ属の 一種 | 154 | 長町南駟 | 7 c 雄 | | | | カナガ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 |
| 131 | 長町南駟 | 5 雄 | 赤 | ヤマグサ属の 一種 | 155 | 長町南駟 | 7 c 雄 | | | | カナガ属(コナラ属同科ナラ属)の 一種 |
| | | | | | 156 | 長町南駟 | | | | | |

表2 樹種別・時代別標本数

(種名の属・節などは省略し、一部通称を用いたものもある。また同定の不確定のものも含めた

| 種名 | 時代 | 新生中期 | | 新生中期 | | 新生中期 | | 新生中期 | | 新生中期 | | 小計 | 合計 | | | |
|-------|----|------|---|------|---|------|---|------|----|------|---|----|----|-----|----|-----|
| | | 地図 | 年 | 地図 | 年 | 地図 | 年 | 地図 | 年 | 地図 | 年 | | | | | |
| モミ | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | | |
| ダクマツ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| 二葉マツ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| マツ | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | | |
| スギ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| ヒノキ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| ヤナギ | | | | | | | | | | | | 17 | 17 | | | |
| サワグルミ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| タマシデ | | | | | | | | | | | | 3 | 3 | | | |
| ブナ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| ナラ | | | | | | | | | | | | 7 | 7 | | | |
| クヌギ | | | | | | | | | | | | 22 | 22 | | | |
| タリ | | | | | | | | | | | | 14 | 14 | | | |
| ヤマグワ | | | | | | | | | | | | 3 | 3 | | | |
| ウツギ | | | | | | | | | | | | 18 | 18 | | | |
| サクラ | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | | |
| サンショウ | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | | |
| ニガキ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| カエデ | | | | | | | | | | | | 4 | 4 | | | |
| トチノキ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| サカキ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| イイギリ | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | | |
| ヤマボウシ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| リョウブ | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | |
| エゴノキ | | | | | | | | | | | | 5 | 5 | | | |
| トネリコ | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | | |
| 不動 | | | | | | | | | | | | 4 | 4 | | | |
| 小計 | | 0 | 1 | 1 | 5 | 1 | 3 | 97 | 28 | 4 | 1 | 9 | 3 | 112 | 36 | 148 |

※: 变=変電所部分、長=長町南駅

表3 変電所部分検出杭列の樹種別標本数(種名については表3と同様)

| 種名 | 杭 列 | | | | | | | | | | | 計 |
|-------|--------|---|---|----|---|---|---|---|---|----|----|----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | |
| モミ | | | | | | | | 2 | | | | 2 |
| ヤナギ | | | | | 3 | | 1 | | 1 | | 1 | 6 |
| クマシデ | | | | 2 | | | | | | | | 2 |
| ブナ | | 2 | | 2 | | | | | 1 | | | 5 |
| ナラ | 1 | 4 | 3 | 3 | | 2 | | | 1 | | | 14 |
| クメギ | | 1 | 1 | | | 1 | | 1 | | | | 7 |
| クリ | | 4 | 1 | 2 | | 1 | | 3 | | | | 13 |
| ヤマグワ | | | | | 1 | 1 | | 1 | | | | 1 |
| ウツギ | | | | 1 | 1 | 1 | | 1 | | 3 | | 7 |
| サクラ | | | | | 1 | | | | | 1 | | 2 |
| カエデ | | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| サカキ | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| イイギリ | | | | | | | 2 | | | | | 2 |
| ヤマボウシ | | 1 | | | 3 | | | | | | | 1 |
| エゾノキ | | | | | | | | | | | | 3 |
| 計 | 5 | 9 | 6 | 12 | 6 | 5 | 4 | 8 | 4 | 6 | 2 | 67 |

12. 富沢遺跡試料材同定 (2)

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試 料

試料は、No.1～44の44点である。泉崎前・島居原地区など5地区から検出された柵・農具などの木製品・加工材と杭で、弥生時代・平安時代・中世・幕末のものと推定されている。(表1)。

2. 方 法

削刀の刃を用いて試料の木口・粧口・板口の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール(Gum Chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顯微鏡写真図版(図版1～10)も作製した。

3. 結 果

手元の現生標本中には該当するものが見あたらず同定できなかった1点(No.4)を除く43点が以下の19種類(Taxa)に同定された。試料の主な解剖学的特徴や、現生種の一般的な性質は次のようなものである。

・イヌガヤ(*Cephalotaxus harringtonia*) イヌガヤ科 No.2, 9.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は不明瞭。樹脂細胞はあるが、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の縫は滑らか、分野壁孔はトウヒ型(Piccidoid)で1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

イヌガヤは、本州(岩手県以南)・四国・九州に分布する常緑小高木～低木で、時に植栽される。なお、北海道西部・本州の主として日本海側・四国的一部分には、匍匐性の変種ハイイヌガヤ(*C. harringtonia* var. *nana*)が分布する。イヌガヤの材はやや重硬で、器具・旋作材などに用いられる。

・シラキ(*Sapindus japonicus*) トウダイグサ科 No.21.

散孔材で、横断面では角張った梢円形、単独および2～8個が複合する。单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列。放射組織は異性、1(～2)列、1～40細胞高。柔組織は散在状および短接線状。年輪界はやや不明瞭。

シラキは本州(岩手県南部・山形県以南)・四国・九州・琉球の陽好地などにやや普通な落葉小高木である。材はやや重硬であるが、加工は困難ではなく、仕上は良好である。大径木が少ないため、薪炭材として普通なほか小細工物・小器具などに用いる。

・ヌルデ(*Rhus javanica*) ウルシ科 No.14, 24, 36, 38, 41.

環孔材で孔間部は2～6列、孔周囲で急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は横断面では梢円形、単独、小道管は横断面では梢円形～やや角張り、2～3個が複合。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III～II型、1～3細胞幅、1～20細胞高であるが、時に上下に連続する。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

ヌルデは北海道(石狩以南)から琉球の山野に普通にみられる落葉小高木である。材は軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽性が高い。器具材や旋作・薪炭材として用いられるほか、杭や浮子としての用

途も知られる。

・ケンボナシ (*Hovenia dulcis*) クロウメモドキ科 №22.

環孔材で孔圈部は1~4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減する。大通管は横断面では楕円形、単独、小通管は横断面では円形~楕円形、単独および放射方向に2~3個が複合する。通管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1~5細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状~翼状、散在状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

ケンボナシは北海道(奥尻島)・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装飾材・家具材として貿易され、器具・楽器・旋作・薪炭材などにも用いられる。

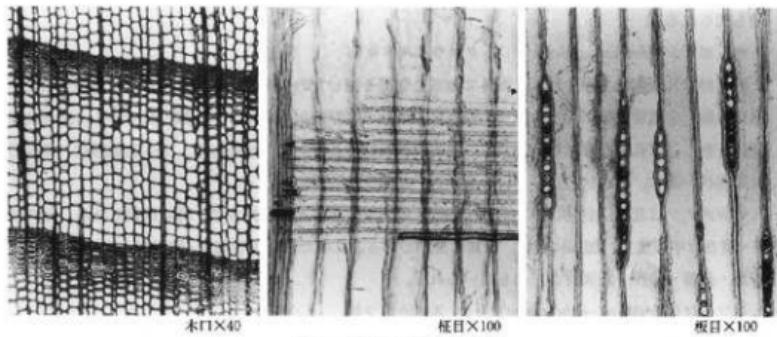
・ニワトコ (*Sambucus sieboldiana*) スイカズラ科 №19.

散孔材で横断面では多角形、2~5個が複合または単独で、接線方向に配列することがある。通管は單穿孔を有し、壁孔は大型で交互状に配列する。放射組織は異性II型、1~4細胞幅、1~30細胞高。年輪界は不明瞭。

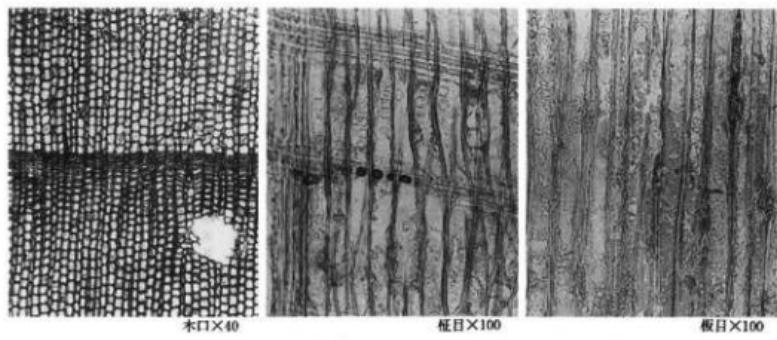
ニワトコは北海道から九州の山野に普通な落葉低木~小高木で、ときに植栽される。御幣など民俗的には重要な用途があり、若葉は綠肥とされ、花は民間薬として利用されたが、材の用途には重要なものはない。

表1 富沢遺跡出土材の樹種

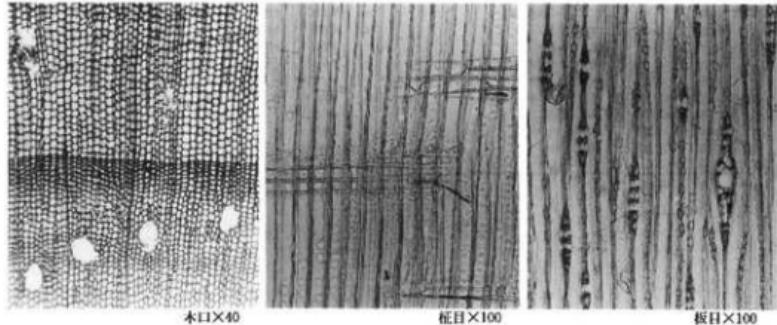
| 試料番号 | 地 | 立 | 場 | 種 | 品 | 年 | 調査番号 | 生 | 樹 | 緒 | 年 | 樹 |
|------|-----|----|---|---|------------|--------------------|--------|-----|-----|---------|--------------------|---------|
| 1 | 森内山 | 12 | 周 | 根 | 原 | コナラ属(コナラ又名クサギ属)の一類 | 33 | 鳥居前 | 12 | 周 | 松 | ヤツガ属の一群 |
| 2 | 森内山 | 15 | 周 | 馬 | イヌガヤ | 24 | 森内山 | 15 | 周 | 松 | スルガ | |
| 3 | 森内山 | 森 | 根 | 木 | ブナ属の一様 | 25 | 森内山 | 18 | 周 | 松 | コナラ属(コナラ又名コナラ又)の一類 | |
| 4 | 森内山 | 根 | 根 | 木 | エゾヒノキ(古代木) | 26 | 森内山 | 5 | 周 | 松 | コナラ属(コナラ又名コナラ又)の一類 | |
| 5 | 森内山 | 森 | 根 | 木 | スギ | 27 | 森内山 | 5 | 周 | 松 | コナラ属(コナラ又名コナラ又)の一類 | |
| 6 | 森内山 | 森 | 根 | 木 | モミ属の一様 | 28 | 森内山 | 5 | 周 | 松 | カシモミ属の一様 | |
| 7 | 森内山 | 森 | 根 | 木 | 白杉人手品 | 29 | 千石地 | 1号地 | 松 | ナメモの一族 | | |
| 8 | 森内山 | 7 | 周 | 根 | 原 | コナラ属(コナラ又名コナラ又)の一類 | 30 | 中田地 | 1号地 | 松 | クリ | |
| 9 | 島田山 | 7 | 周 | 根 | 原 | イヌガヤ | 31 | 中田地 | 1号地 | 松 | ヤマモミの一族 | |
| 10 | 島田山 | 7 | 周 | 木 | 木 | コナラ属(コナラ又名クサギ属)の一類 | 32 | 中田地 | 1号地 | 松 | クリ | |
| 11 | 島田山 | 5 | 周 | 木 | ヤマフジ | 33 | 中田地 | 1号地 | 松 | クリ | | |
| 12 | 島田山 | 4 | 周 | 木 | シノキ属の一様 | 34 | 中田地 | 1号地 | 松 | クリ | | |
| 13 | 玄武岩 | 6 | 周 | 木 | モミ属の一様 | 35 | 中田地 | 1号地 | 松 | クリ | | |
| 14 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | スギ | 36 | 半弓地 | 1号地 | 松 | スルガ | | |
| 15 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | スギ | 37 | 半弓地 | 1号地 | 松 | ヤツガ属の一族 | | |
| 16 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | ヤクシキ属の一様 | 38 | 半弓地 | 1号地 | 松 | スルガ | | |
| 17 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | ヤケギ属の一様 | 39 | 鳥居前 | 1 | 周 | 松 | ヤムケ属の一族 | |
| 18 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | カシモミ属の一様 | 40 | 鳥居前 | 7 | 周 | 松 | カシモミ属の一様 | |
| 19 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | ハリコ | 41 | 鳥居口 | 7 | 周 | 松 | スルガ | |
| 20 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | ヤケギ | 42 | 500m地 | 基 | 松 | ヤツガ属の一族 | | |
| 21 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | シラカ | 43 | A地500m | 5 | 周 | 松 | カスレ属の一族 | |
| 22 | 島崎山 | 12 | 周 | 木 | ランボナシ | 44 | A地500m | 15 | 周 | 松 | クリ | |



Abies sp. No. 75 (モミ属の一種)

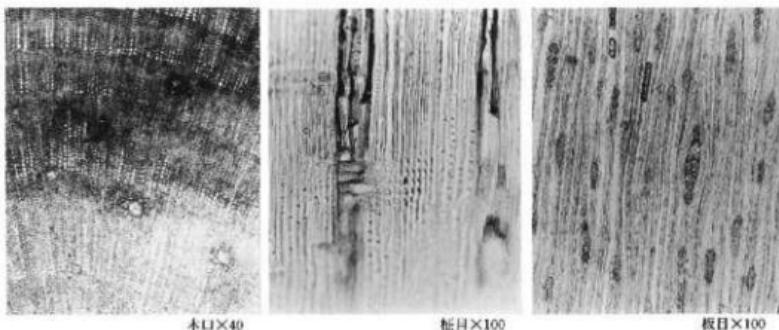


Pinus (subgen. *Haploxylon*) sp. No. 2 (マツ属(单维管束亚属)の一種)

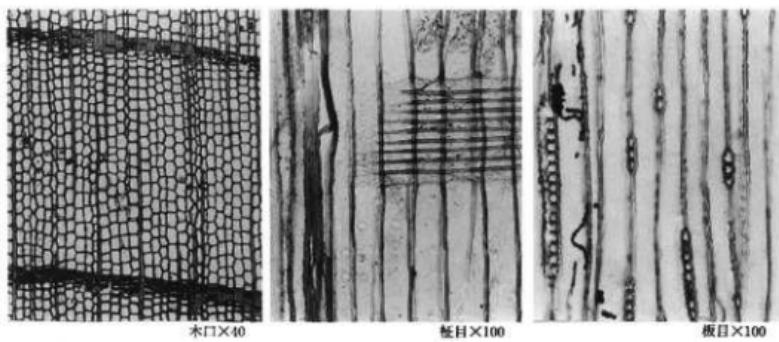


Pinus (subgen. *Diplexylon*) sp. No. 129 (マツ属(複维管束亚属)の一種)

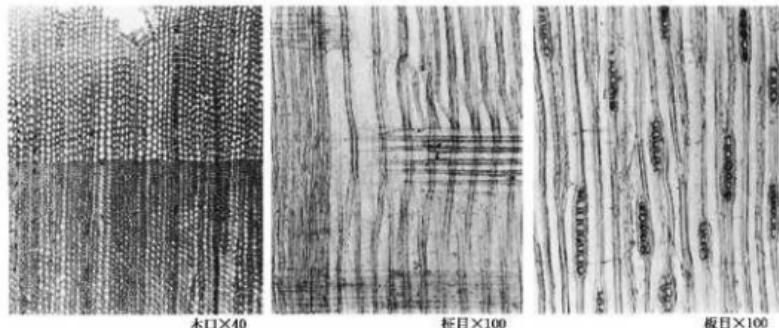
写真1 材顕微鏡写真



Pinus sp. No. 98 (マツ科)

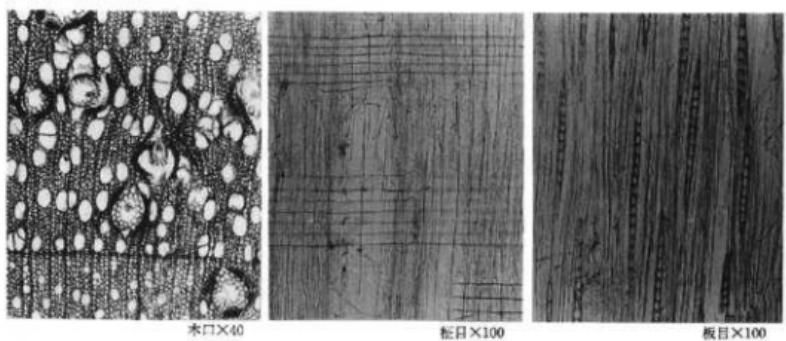


Cryptomeria japonica No. 118 (スギ)

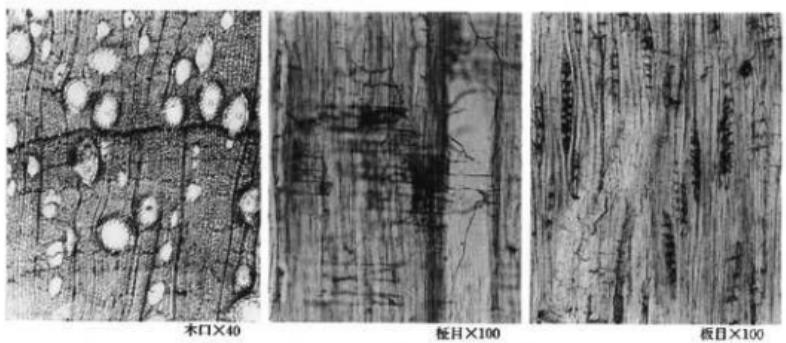


Chamaecyparis sp. No. 5 (ヒノキ属の一種)

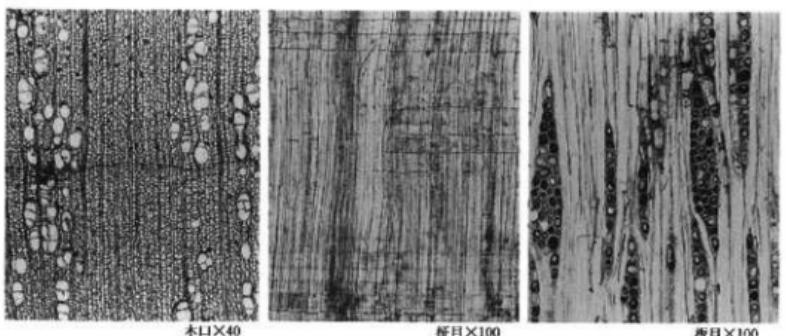
写真2 材顕微鏡写真



Salix sp. No. 123 (ヤナギ属の一種)

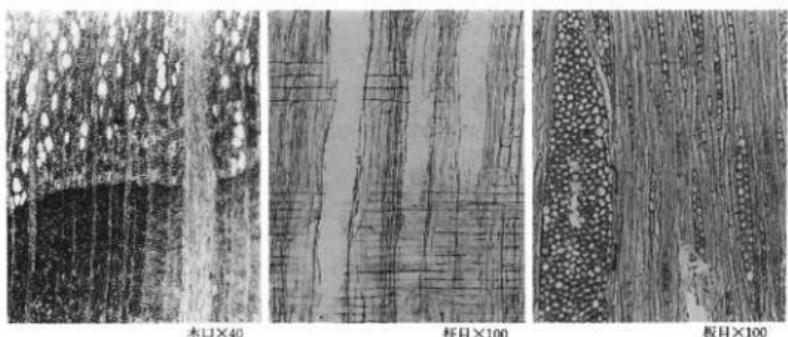


Pterocarya rhoifolia No. 155 (サワグルミ)

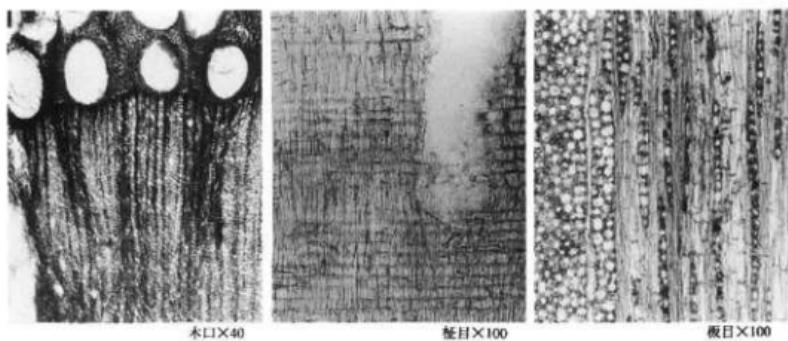


Carpinus sp. No. 130 (クマシデ属の一種)

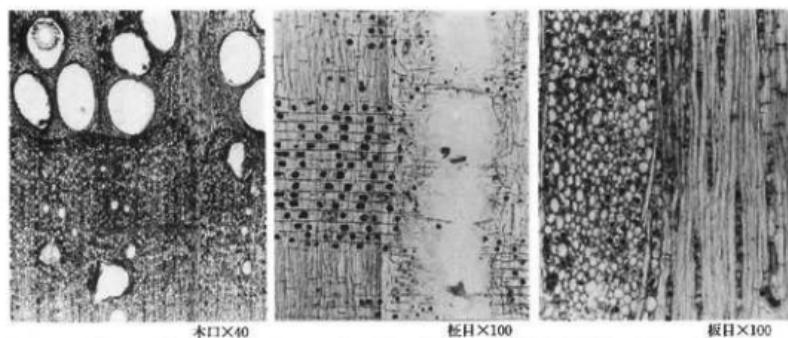
写真3 材顕微鏡写真



Fagus sp. No. 32 (ブナ属の一種)

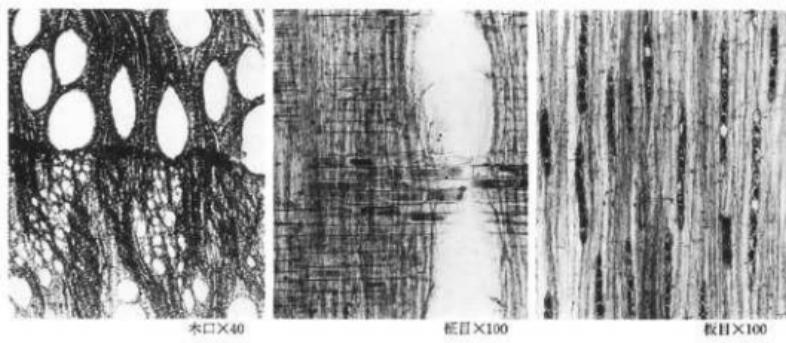


Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Primis*) sp. No. 7 (コナラ属(コナラ亜属コナラ節)の一種)

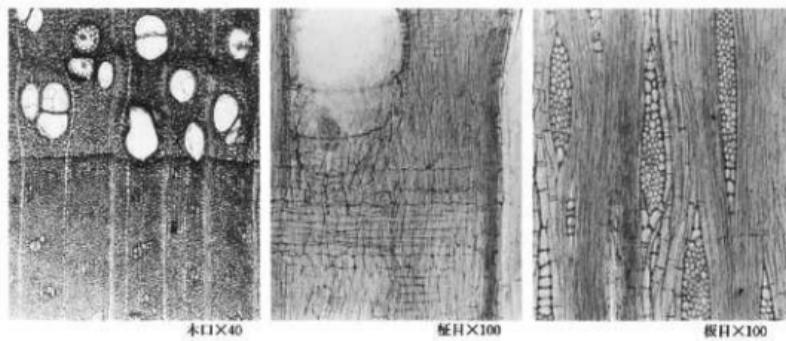


Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp. No. 83 (コナラ属(コナラ亜属クヌギ節)の一種)

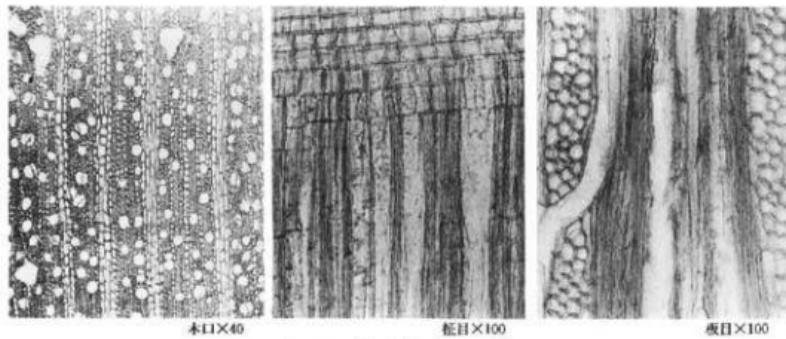
写真4 材顯微鏡写真



Caelomea crenata No. 26(クリ)

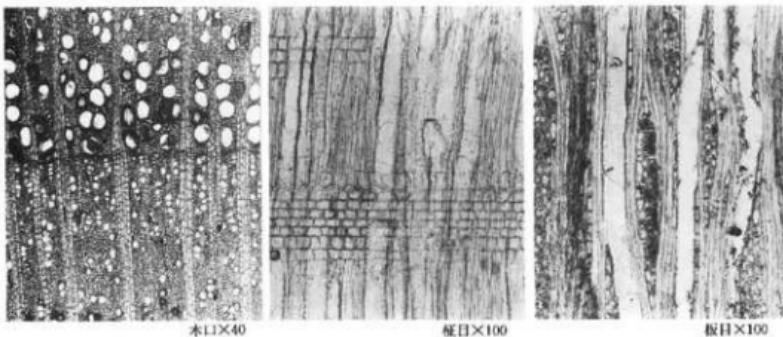


Morus bombycis No. 113(ヤマグワ)

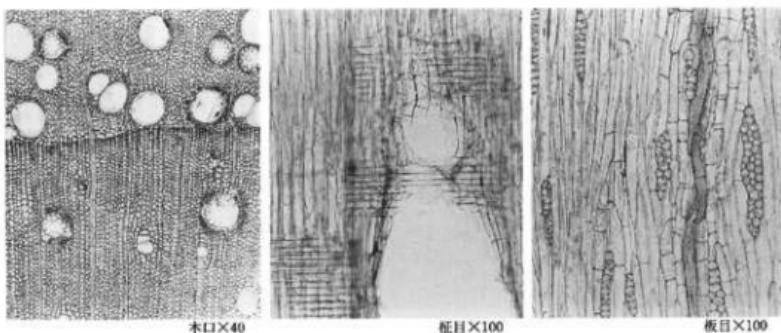


Desizia sp. No. 17(ウツギ属の一種)

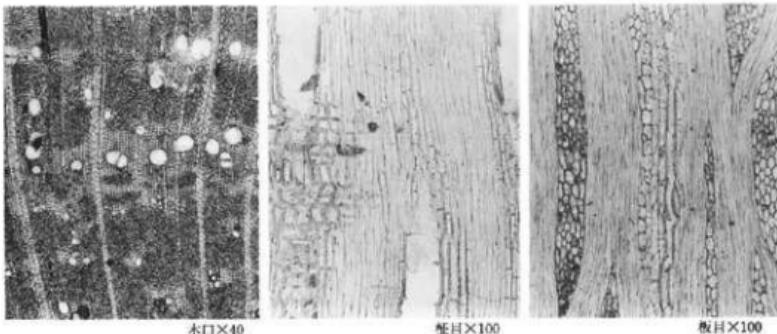
写真5 材顕微鏡写真



Prunus sp. No. 90 (ヤクラ属類似種)

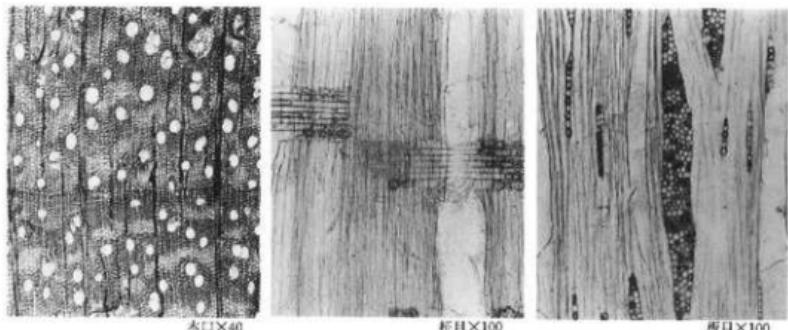


Zanthoxylum sp. No. 111 (サンショウ属の一種)

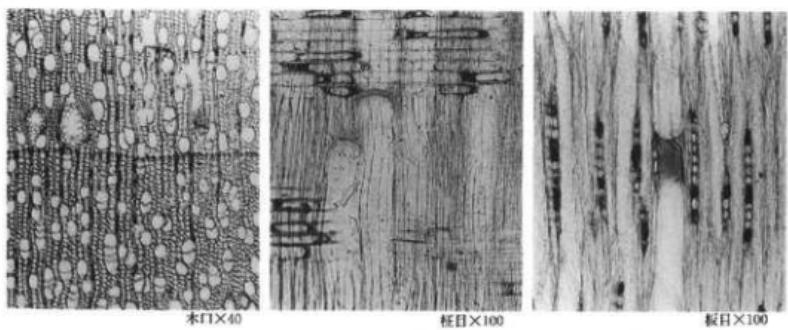


Picrasma quassoides No. 149 (ニガキ)

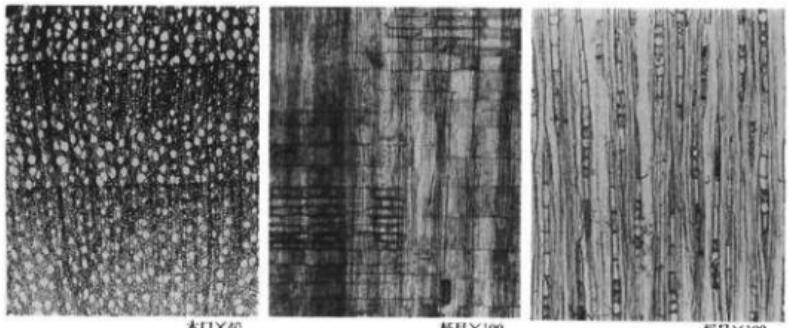
写真6 材顕微鏡写真



Acer sp. No. 24 (カエデ属の一樹)

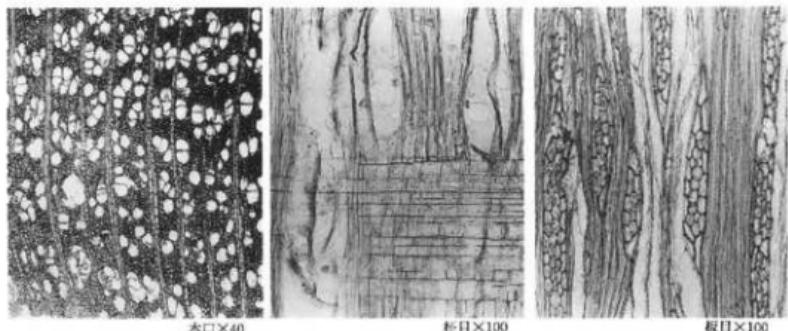


Aesculus turbinata No. 141 (トチノキ)

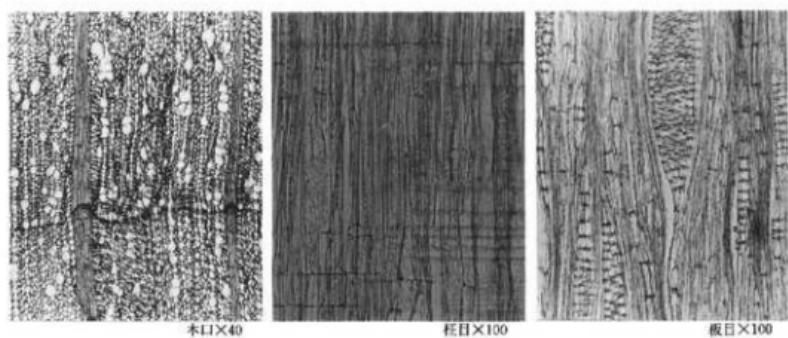


Clegrea japonica No. 84 (サカキ)

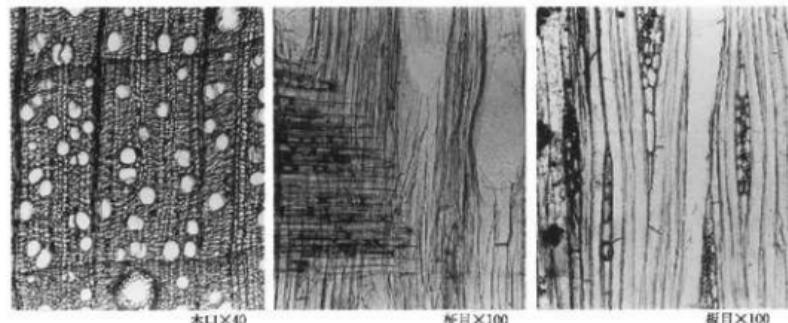
写真7 材顕微鏡写真



cf. Idesia polycarpa No. 70 (イイギリ)

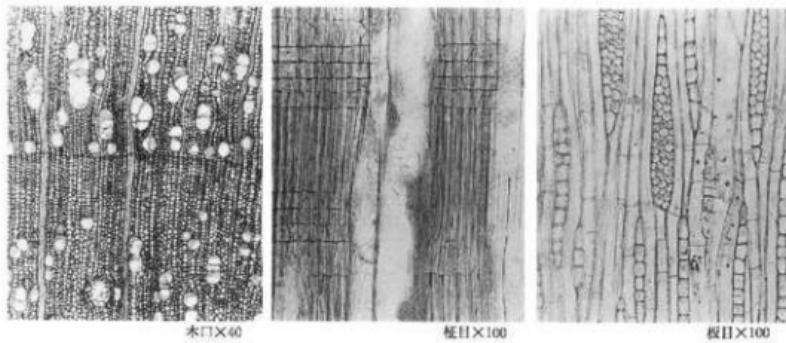


Cornus kousa No. 31 (ヤマボウシ)

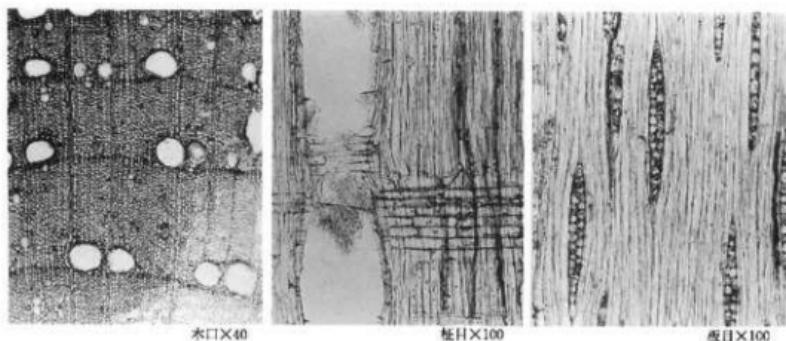


Clethra barbinervis No. 139 (リョウブ)

写真 8 材顕微鏡写真

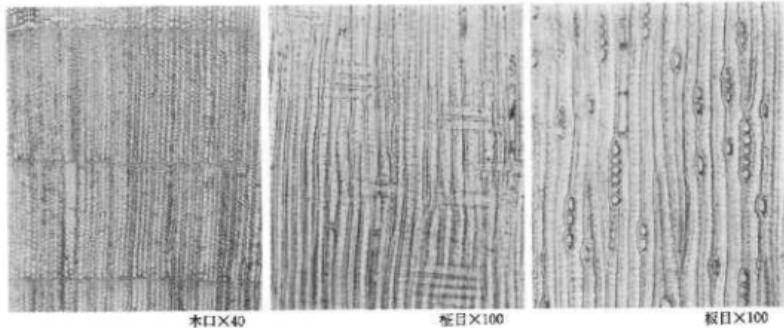


Styrox sp. No. 50 (エゴノキ属の一種)

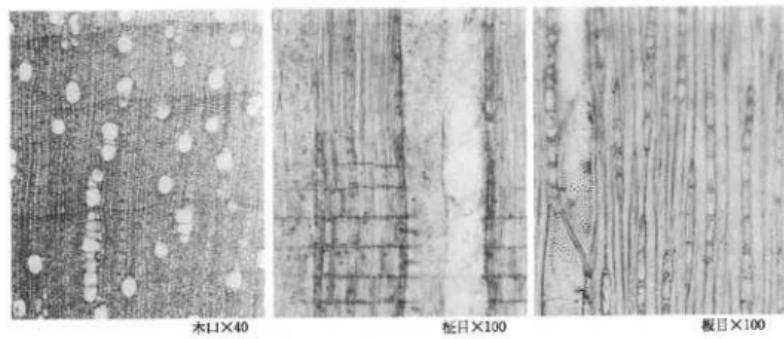


Fraxinus sp. No. 106 (トネリコ属の一種)

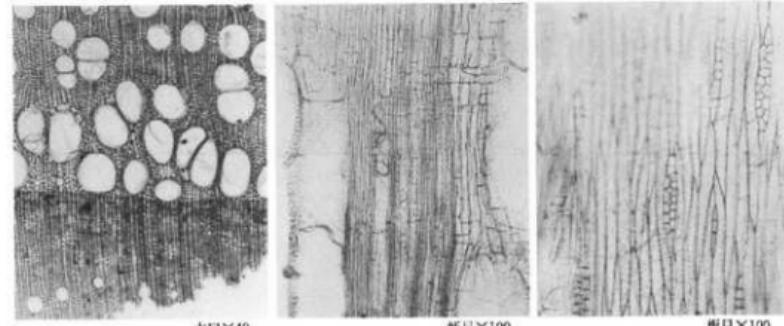
写真9 材顕微鏡写真



Cephaelostaxus harringtonia No. 9 イヌガヤ

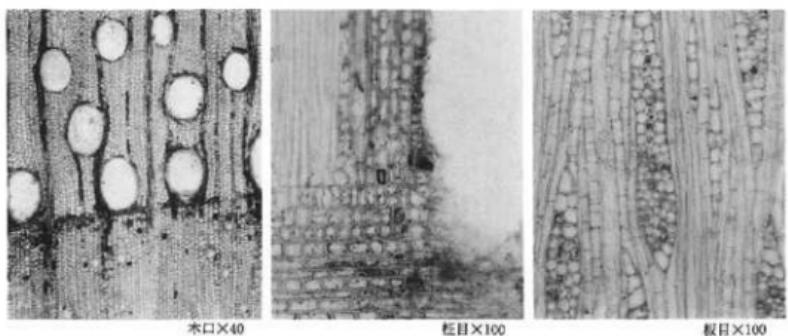


Sapium japonicum No. 21 シラキ

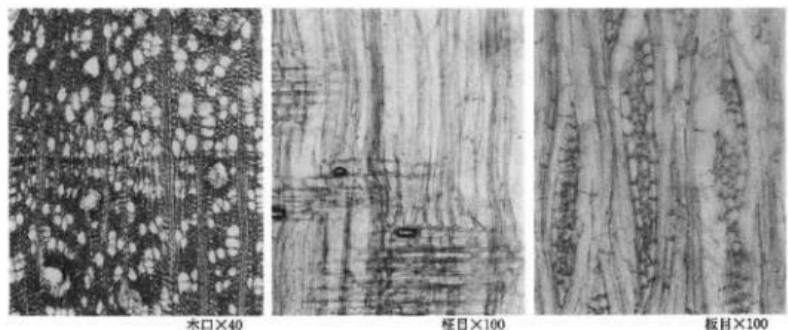


Rhus javanica No. 38 ムルデ

写真10 材顯微鏡写真



Hovenia dulcis No. 22 ケンボナシ



Sambucus sieboldiana No. 19 ニワトコ

写真11 材顕微鏡写真

写 真 図 版



写真1 遺跡周辺の空中写真(1983年5月撮影)

写真2 泉崎東工区試掘区
設定期 (IN 試掘
No.1 南から)



写真3 IN 試掘区 No.3 SD
3～5断面 (西から)

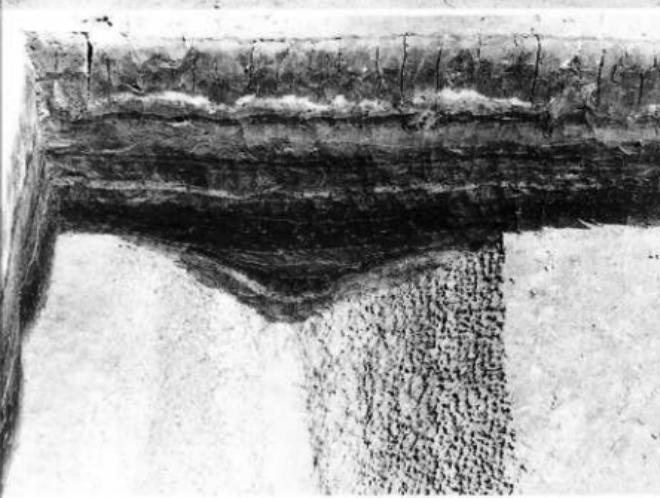


写真4 IN 試掘区 No.3 SD
1・2断面 (西より)



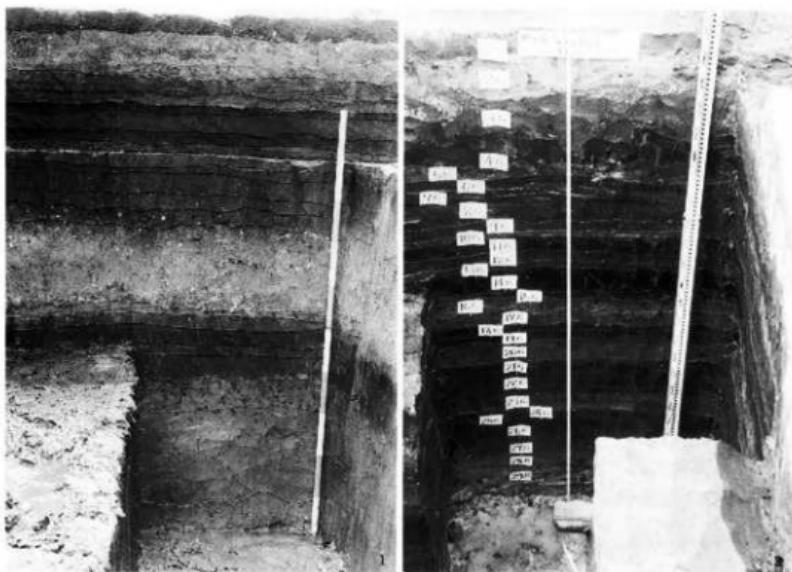


写真5 IN 試掘区
 1. No.4 東壁断面
 2. No.8 東壁断面（プラントオバール分析サンプリング地点西から）
 3. No.16完盤状況（北から最下部の黒っぽい層が旧石器時代の層）

写真6 IN試掘区No19
東壁断面

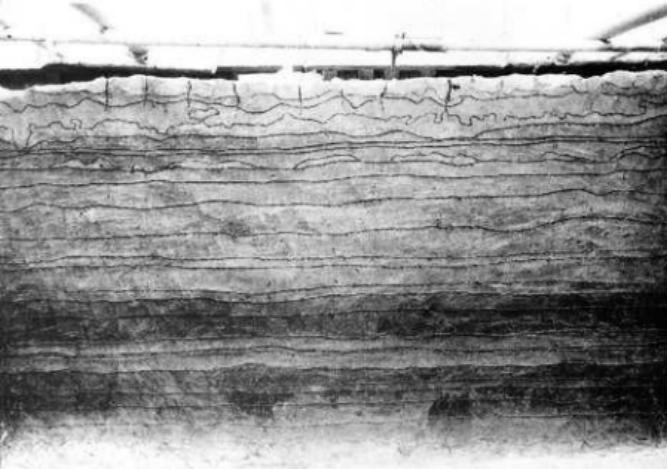


写真7 IN試掘区No19
深掘断面



写真8 IN試掘区No19
38層樹木出土状況



写真9 泉崎東工区 I N 試掘
区No 3 作業風景

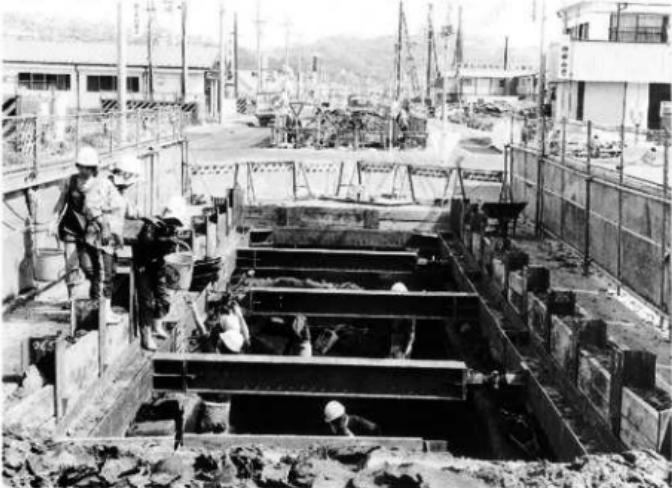


写真10 中谷地工区試掘
風景 (中央が I N
試掘No19)



写真11 長町南駅工区試掘
風景



写真12 泉崎Ⅰ区調査区
全景



写真13 泉崎Ⅰ区南壁断面



写真14 泉崎Ⅰ区深掘部分





写真15 犀崎工区 1. SR2・3 (南より)
2. 11層水田跡畦畔確認状況 (南より)
3. 11層水田跡畦畔検出状況 (北東より)

写真16 泉崎I区S×1
(東より)



写真17 泉崎I区S×1
杭列 (北より)

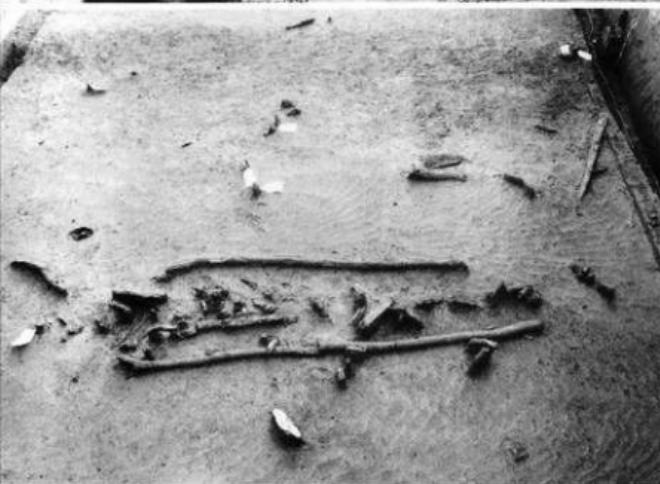
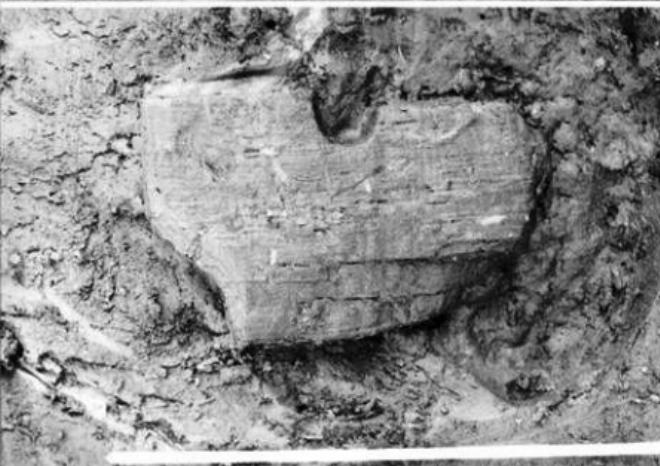


写真18 泉崎I区S×1
横櫛出土状況



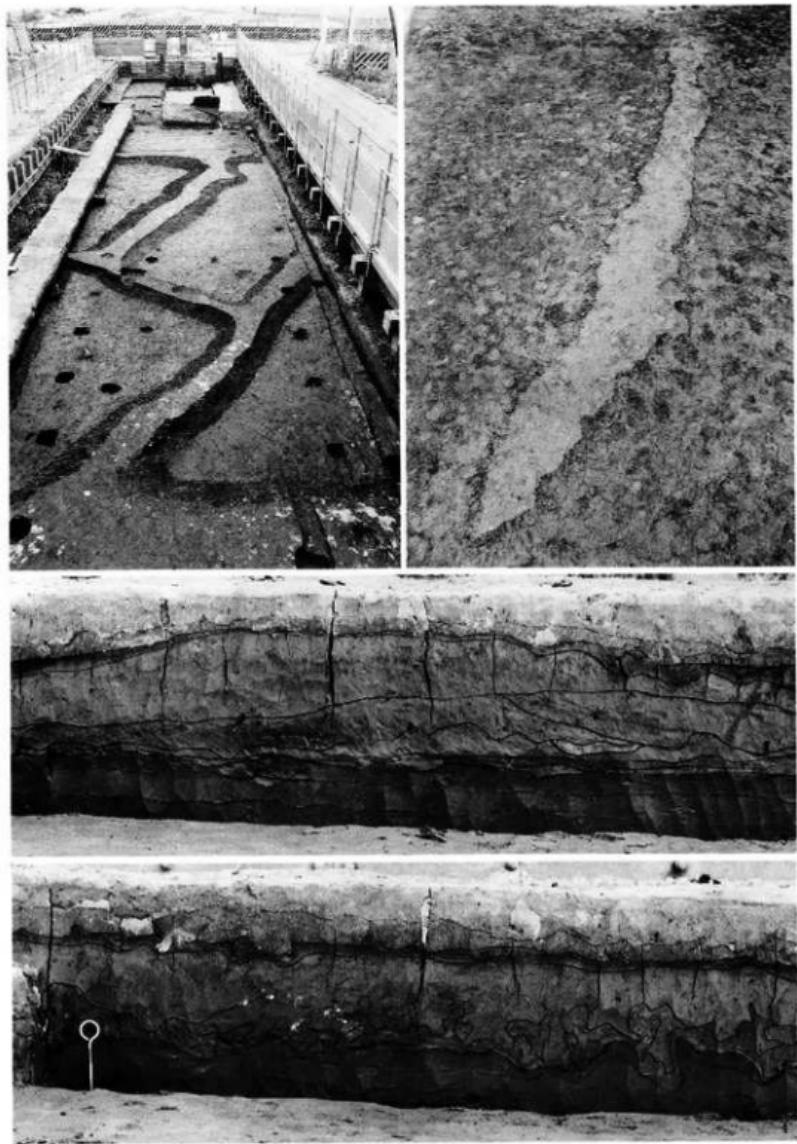


写真19 泉崎Ⅰ区 1. 5層水田跡（北より） 2. 4層水田跡（北より）
3. 4・5層水田跡壁面断面（C48、西より）
4. 東壁断面（C48、北半）

写真20 泉崎Ⅰ区5層水田
跡（北より）



写真21 泉崎Ⅰ区4層水田
跡水口検出状況



写真22 泉崎Ⅰ区4層水田
跡石器出土状況



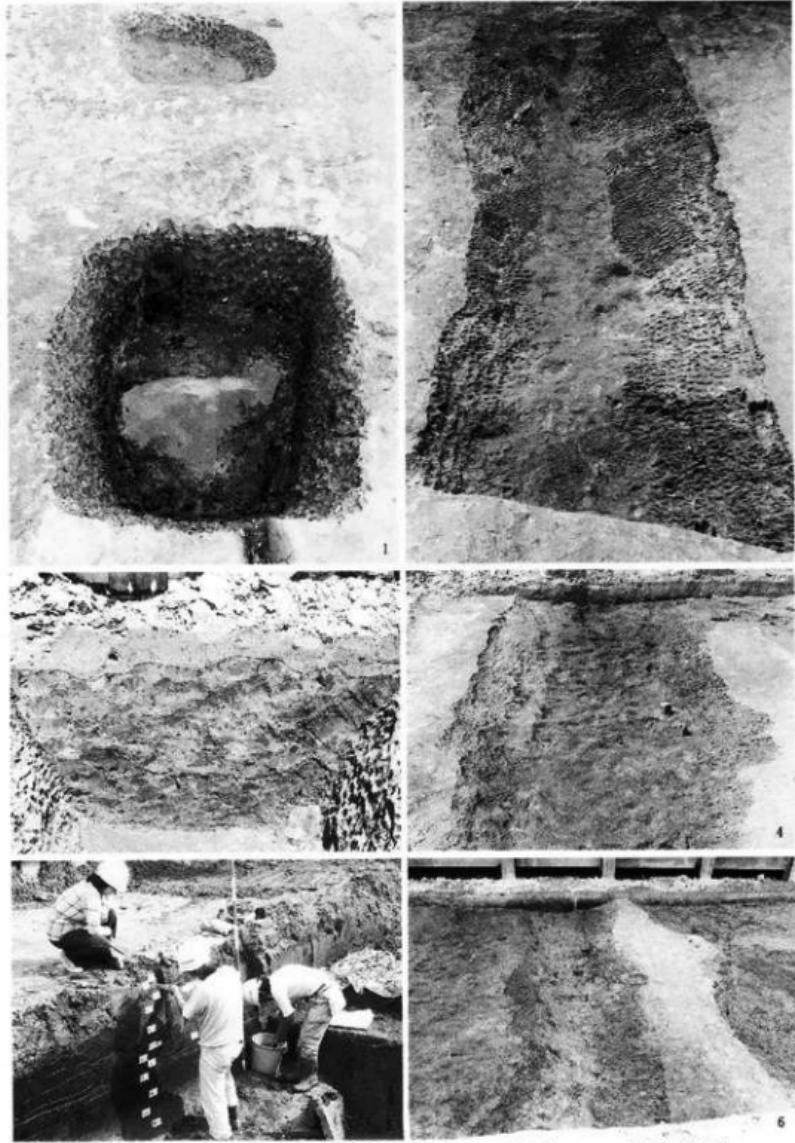


写真23 東崎I区
 1. SK1・2 (南より) 2. SD2 (東より)
 3. SK1断面 (南より) 4. SD1 (東より)
 5. プラントオパール分析サンプリング風景 (北西から)
 6. SD4 (東より)

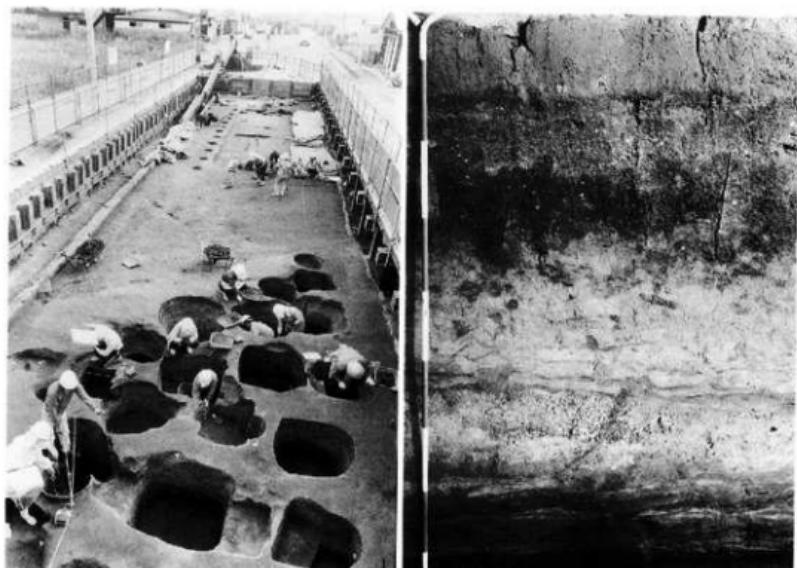


写真24 泉崎II区 1. 調査区全景 2. 東壁断面
3. S 11(南より)

3

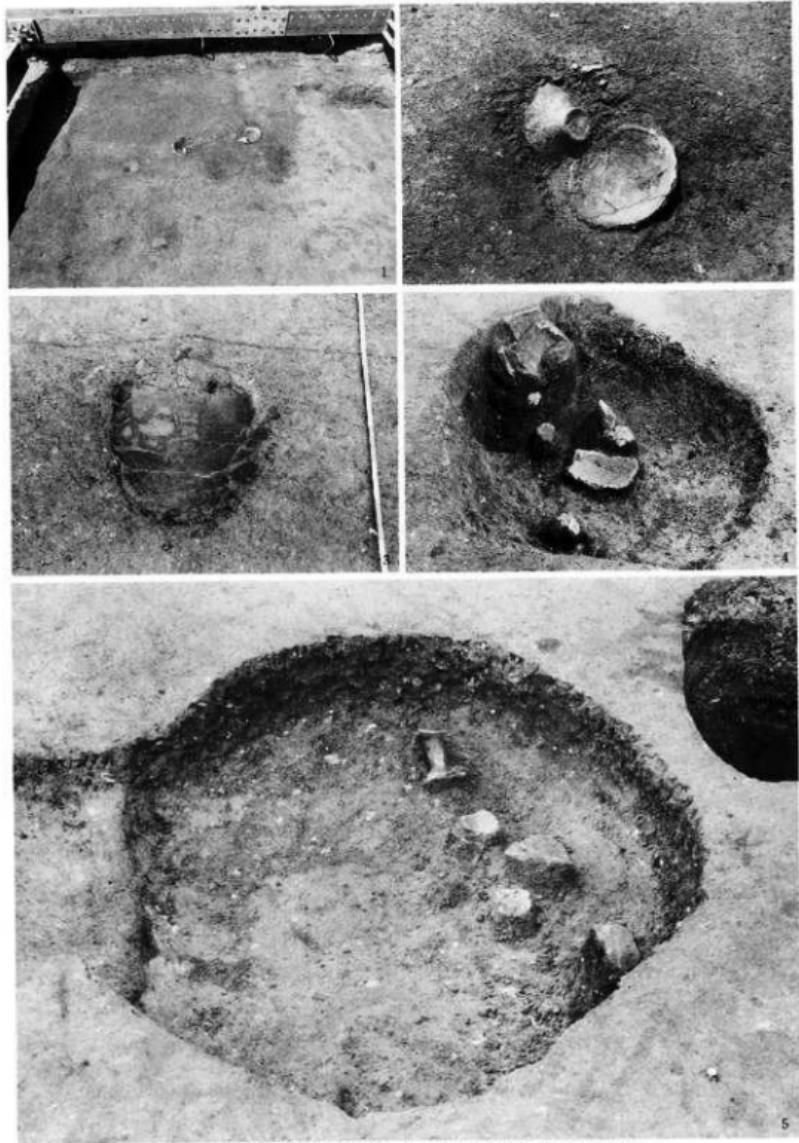


写真25 泉崎II区
 1. S 11種部状況（試掘時東より）
 2. S 11遺物出土状況（試掘時）
 3. S 11遺物出土状況（試掘時）
 4. SK 4 5. SK 5

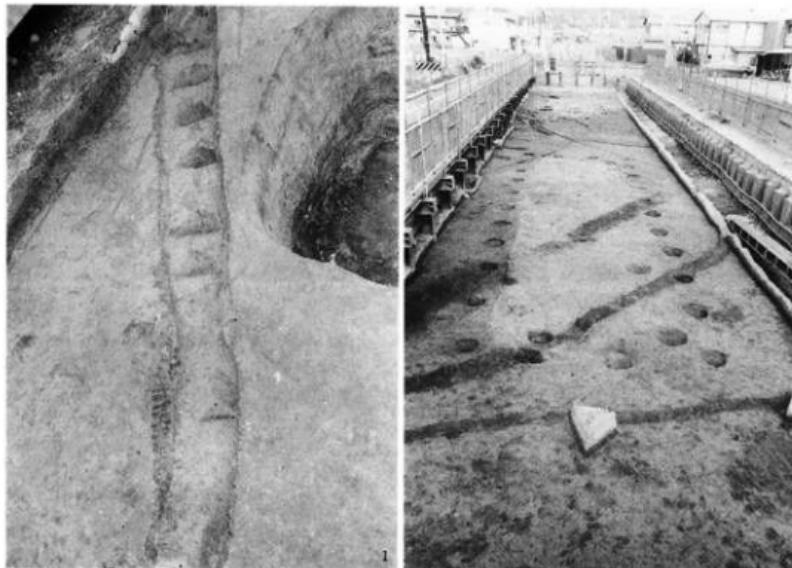


写真26 泉崎II区 1. SD 8 収蔵具痕 2. 5層全景(南より)
3. 近世墓全景(北より)

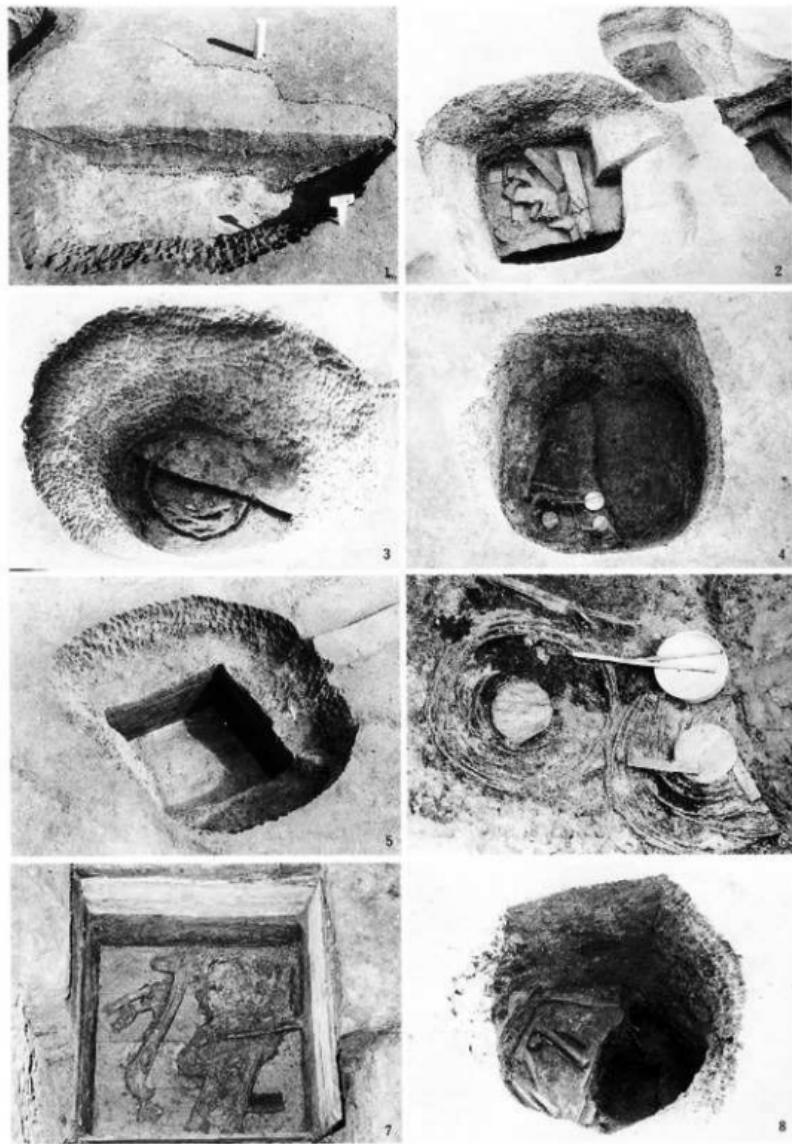


写真27 泉嶋II区

- 1. 1号墓
- 2. 2号墓
- 3. 3号墓
- 4. 4号墓
- 5. 5号墓
- 6. 6号墓
- 7. 7号墓
- 8. 8号墓

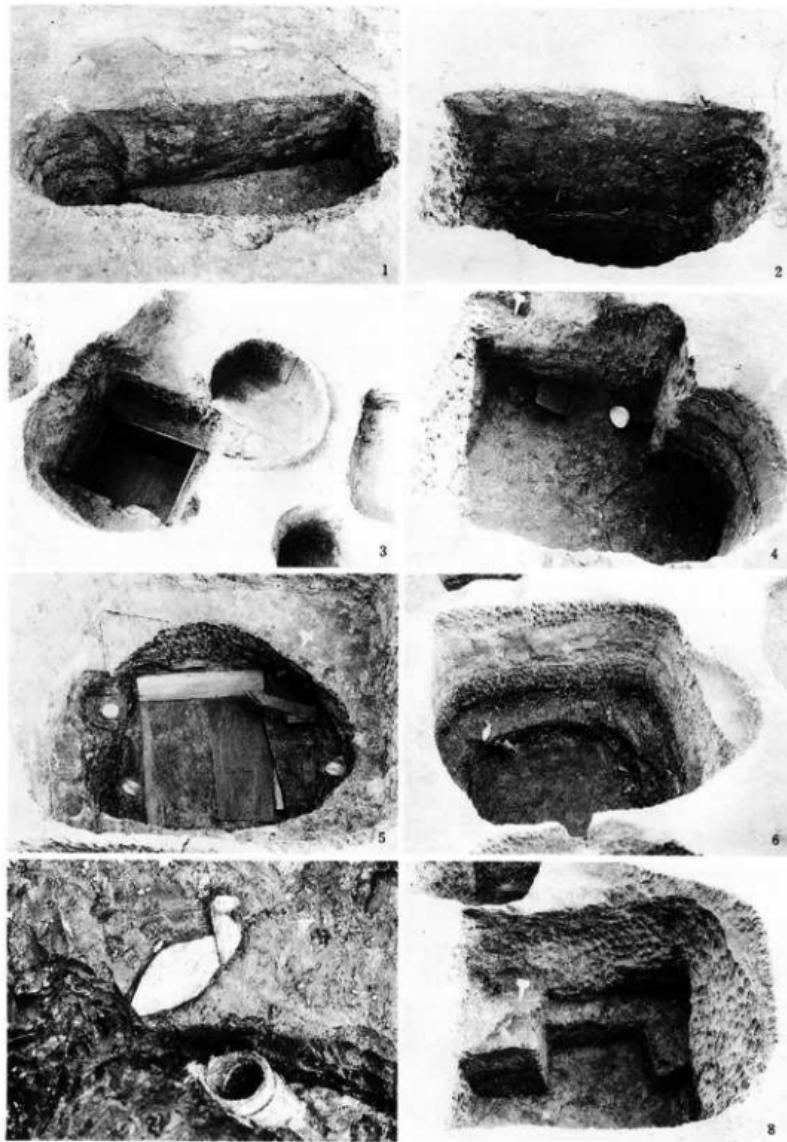


写真28 泉嶺II区

- | | |
|------------|----------|
| 1. 8号墓 | 2. 9号墓 |
| 3. 11-25号墓 | 4. 14C分墓 |
| 5. 15号墓 | 6. 15号墓 |
| 7. 15号墓 | 8. 16号墓 |

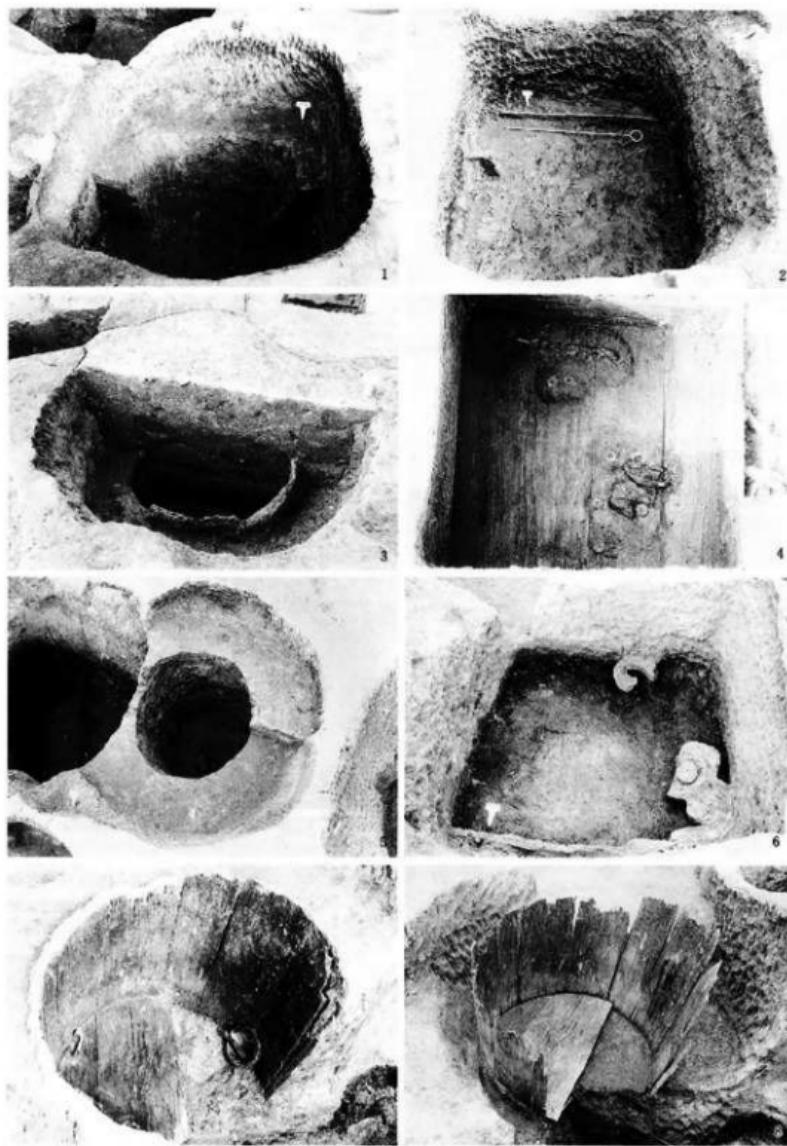


写真29 泉陵II区
 1. 17号墓 2. 19号墓
 3. 20号墓 4. 22号墓
 5. 23号墓 6. 24号墓
 7. 25号墓 8. 25号墓

写真30 泉崎Ⅲ区調査区
近景



写真31 泉崎Ⅲ区東壁断面



写真32 泉崎Ⅲ区15層水田
跡跡畔 3 検出状況
(東より)



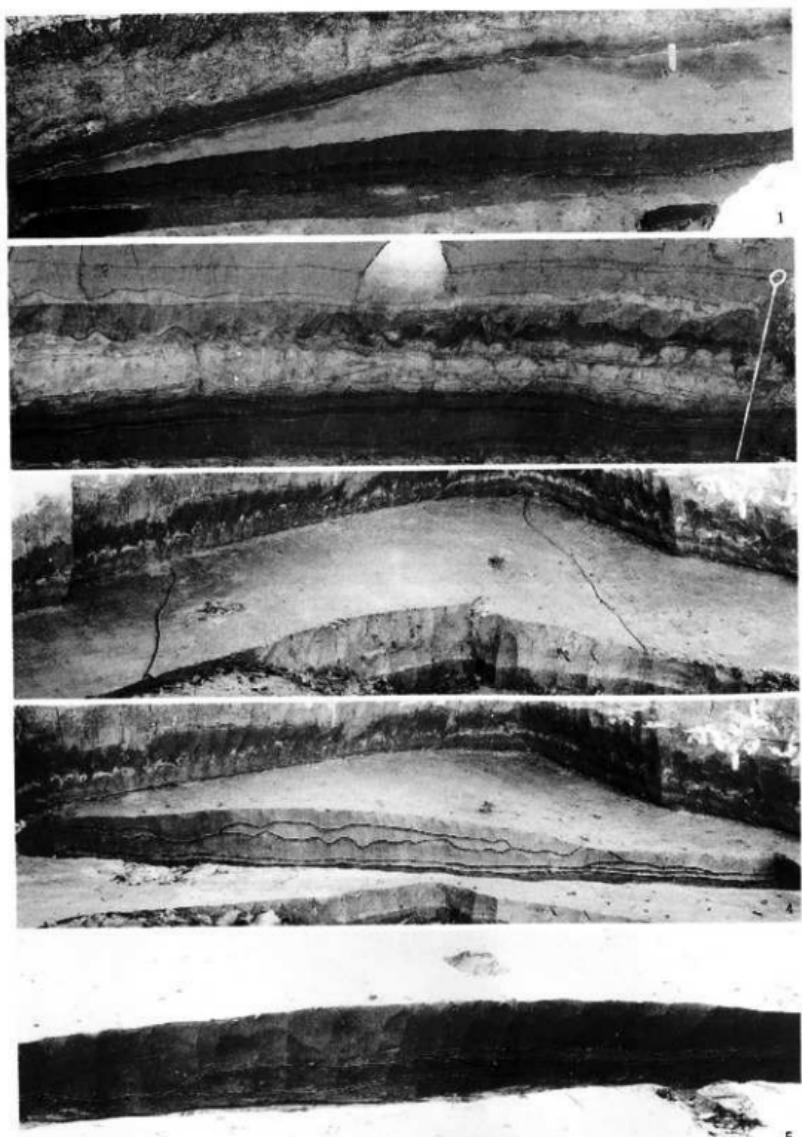


写真33 泉崎Ⅲ区
 1. 15層水田跡畦畔1断面(東より)
 2. 15層水田跡畦畔1・西壁断面(東より)
 3. 15層水田跡畦畔4検出状況
 4. 15層水田跡畦畔4断面(南より)
 5. 15層水田跡畦畔3断面(西より)

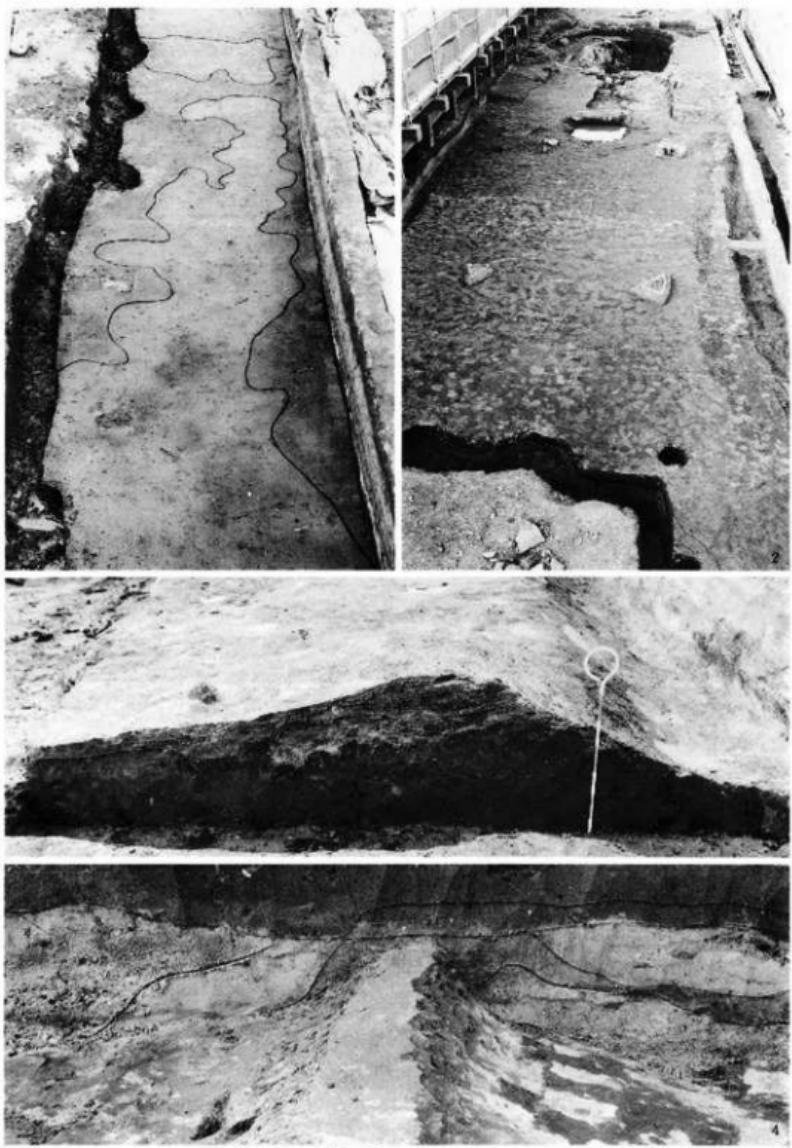


写真34 泉崎III区 1. 15層水田跡畠畔2 碑記状況（南より）

2. 5層水田跡全景（南より）

3. 5層水田跡畠畔1 断面（南より）

4. 5層水田跡畠畔2 断面（東より）

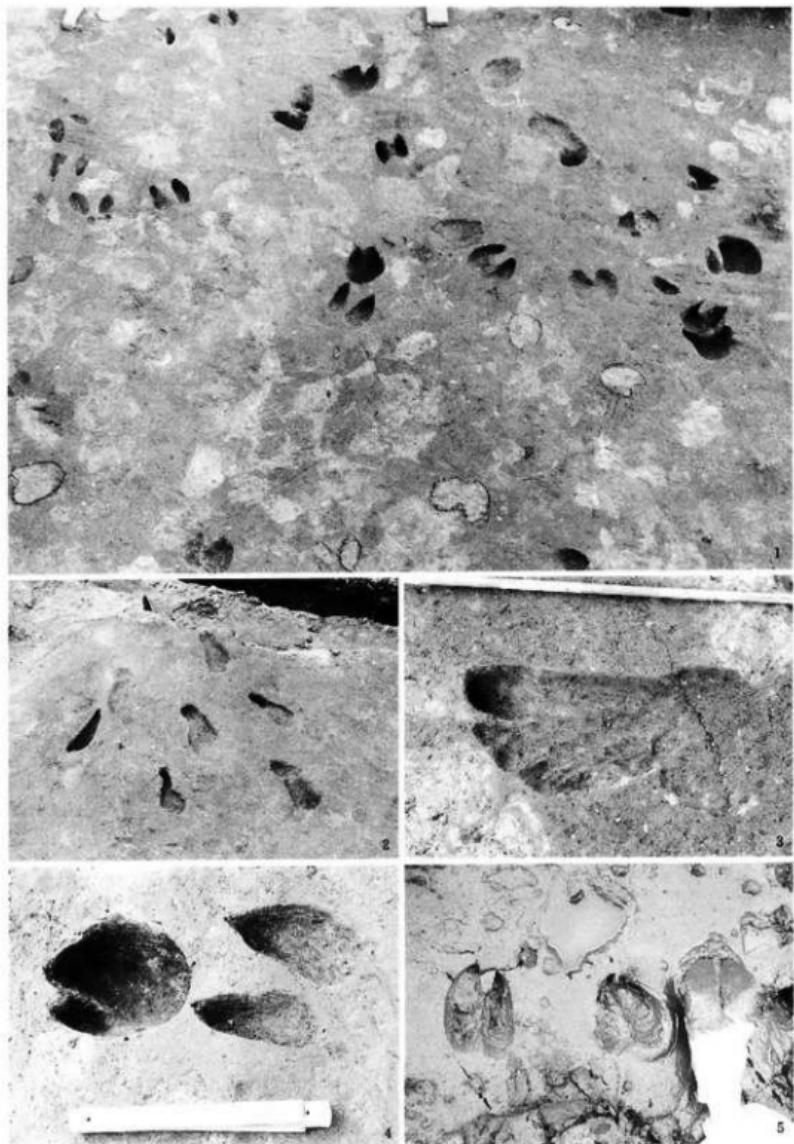


写真35 泉崎Ⅲ区
 1. 5層水田跡足跡
 2. 5層水田跡人足跡（畦畔2東半部北面、東より）
 3. 5層水田跡人足跡
 4. 5層水田跡牛足跡
 5. 牛足跡実験

写真36 中谷地Ⅰ区土層
断面（東より）

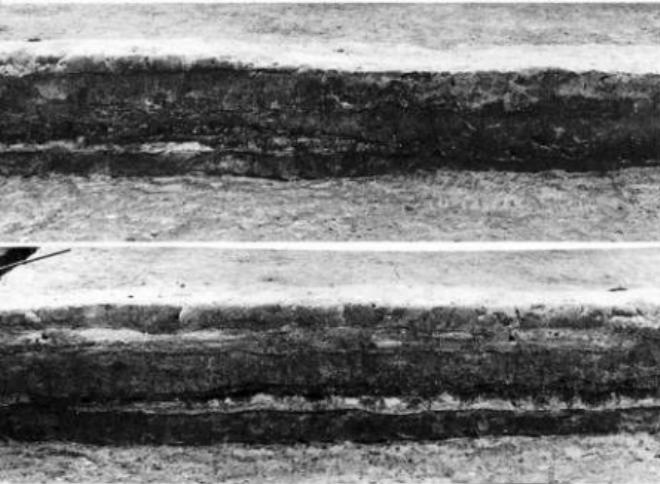


写真37 中谷地Ⅰ区12層
水田路（南より）



写真38 中谷地Ⅰ区7層
水田路（南西より）



写真39 中谷地Ⅰ区 S D 1
全景（東より）



写真40 中谷地Ⅰ区 S D 1
断面（南より）



写真41 中谷地Ⅱ区西壁
断面（4 b層水田
跡駐畔2部分、
東より）





写真42 中谷地II区
 中谷地III区
 中谷地II区

1. 8層水田跡（南より）

2. 4b層水田跡（南より）

3. 4b層水田跡（南より）

4. 10層土器出土状況

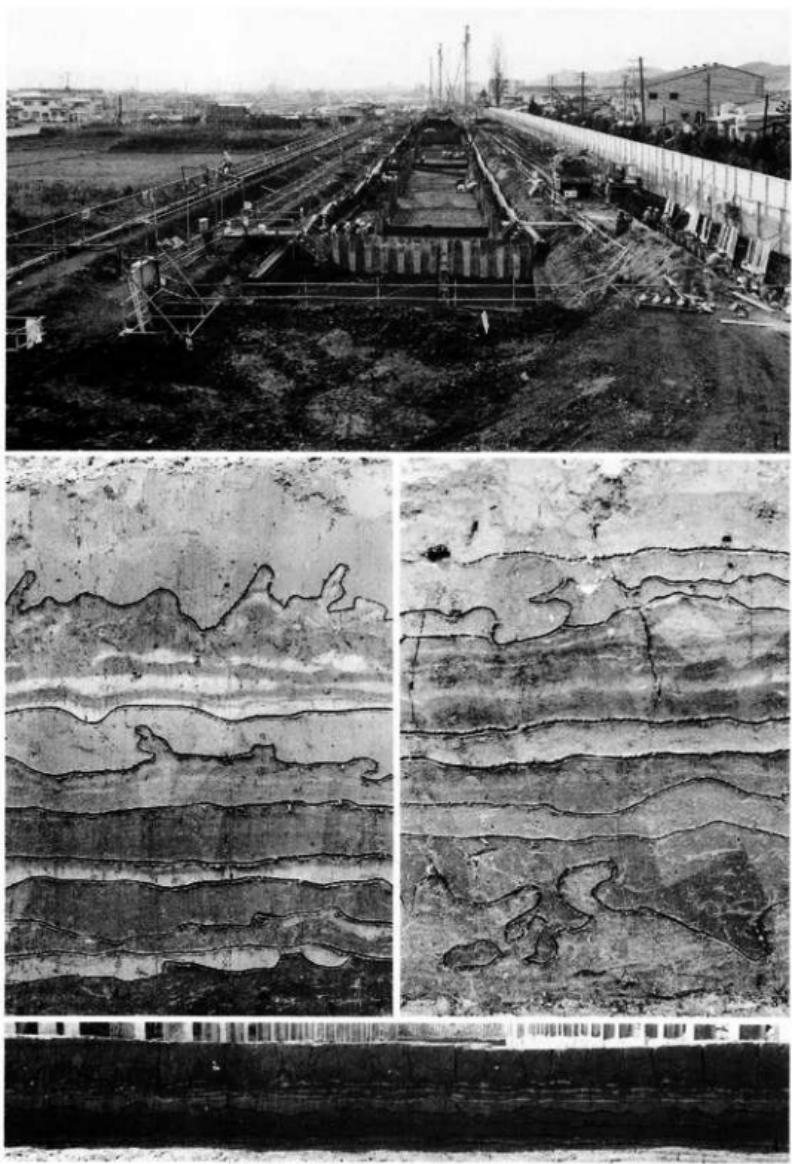


写真43 長町南駅区
1. 全景(東より)
2. Ⅲb区上層断面(東出入口部分南壁)
3. Ⅳa区東壁断面
4. Ⅳa区西壁断面(基本層序7m層まで)

写真44 長町南駅区深掘1
(XⅦ a 区南壁)

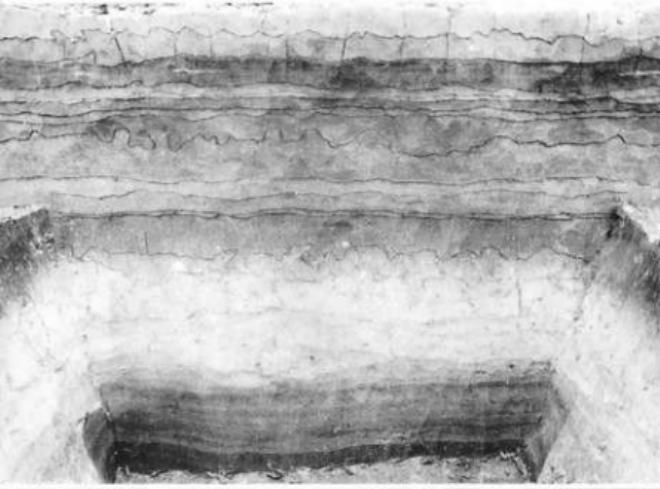


写真45 長町南駅区深掘2
(XⅢ a 区南壁)

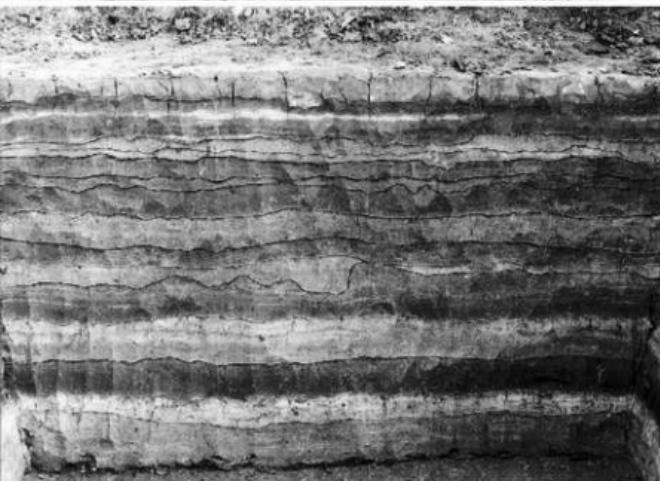


写真46 長町南駅区深掘3
(N A 試掘No.4)



写真47 長町南駅区深掘 4
(N A 試掘No.6)

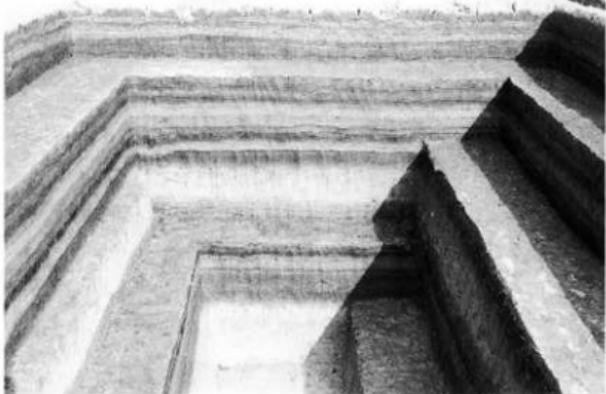


写真48 長町南駅区深掘 5
(Ⅱ b 区南壁)



写真49 長町南駅区深掘 6
(N A 試掘No.1)



写真50 長町南駅区深掘
(II区深掘)



写真51 長町南駅区 N A
試掘No.5 北壁断面
(花粉分析用サン
プリング地点)

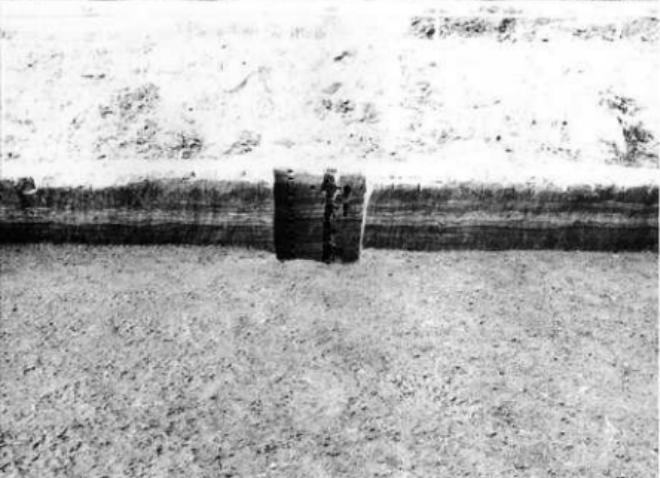


写真52 長町南駅区 7c層
水田跡 I 区 (南西
より)



写真53 長町南駅区 7c層
水田跡II a区小畦畔
確認状況（北より）

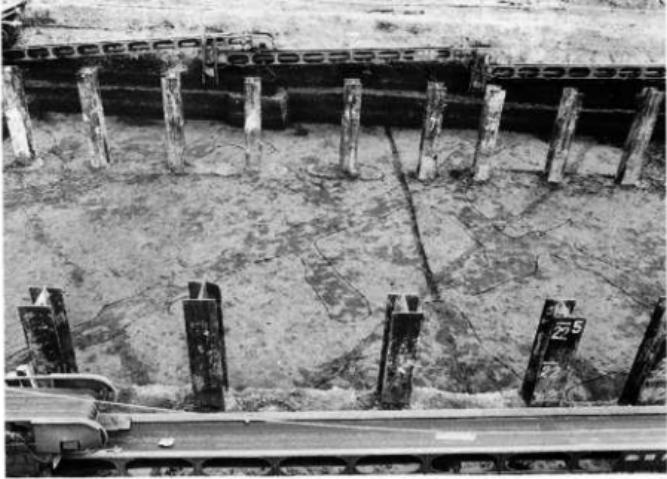


写真54 長町南駅区 7c層
水田跡II a区
(北より)

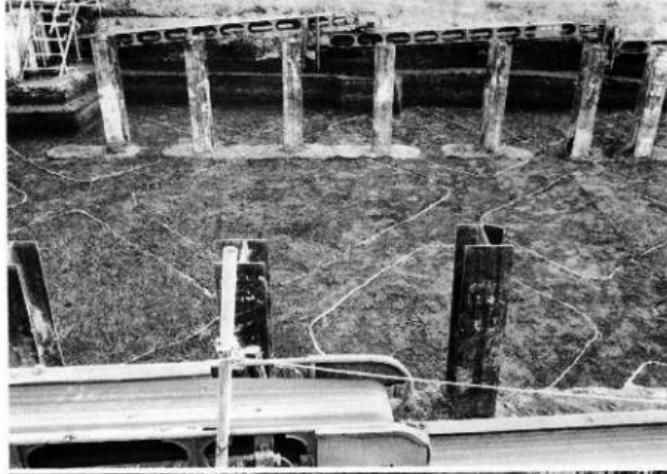


写真55 長町南駅区 7c層
水田跡II a区
(東より)





写真56 長町南駅区 7c層
水田跡Ⅳb区
(北より)



写真57 長町南駅区 7c層
水田跡Ⅲb・Ⅳa区
畦畔3・4 (北より)



写真58 長町南駅区 7c層
水田跡Ⅲb・Ⅳa区
南拡張部分畦畔
3・4 (東より)

写真59 長町南駅区 7c層
水田跡XII b区
畦畔26・27
(西より)



写真60 長町南駅区 7c層
水田跡XIV b区
畦畔29 (南西より)



写真61 長町南駅区 7c層
水田跡XIV区畦畔
30・31 (西より)



写真62 長町南駅区 7c層
水田跡XVb・XVIa区
畦畔32(東より)



写真63 長町南駅区 7c層
水田跡畦畔32土器
出土状況



写真64 長町南駅区 7c層
水田跡畦畔2上面
木製品等出土状況



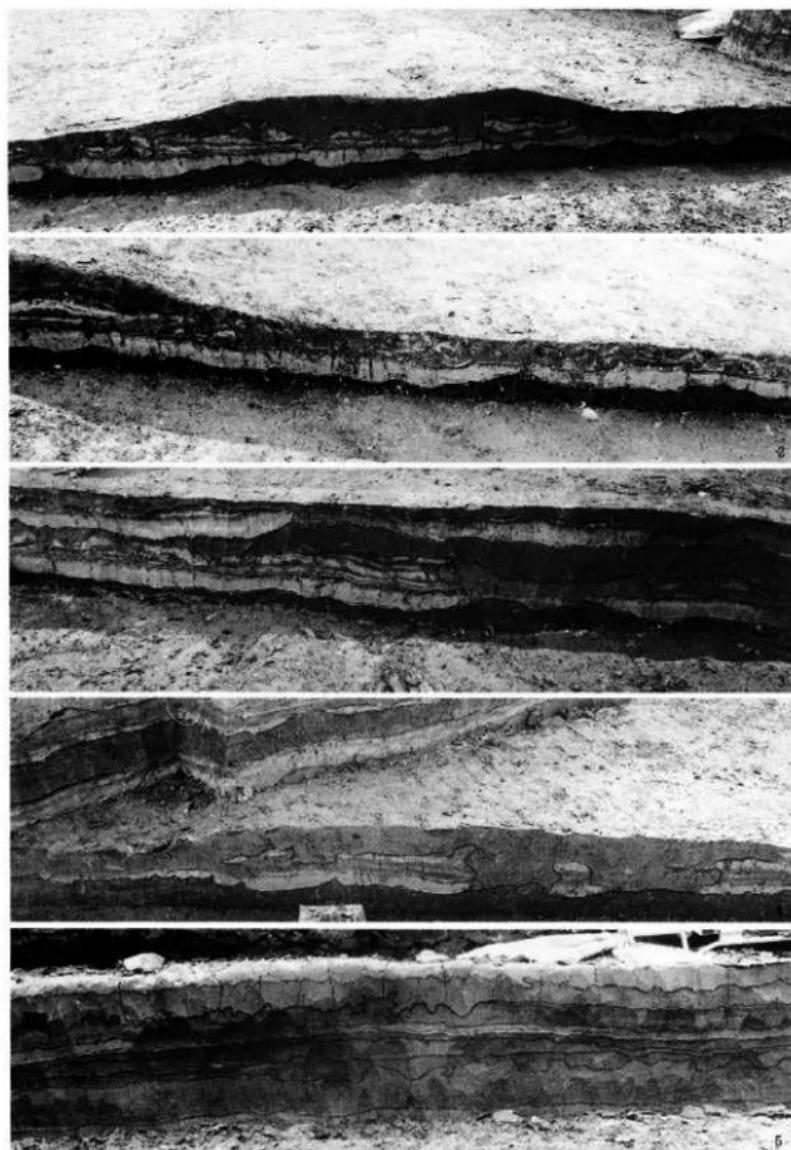


写真65 長町南駅区
1. 7 c層水田跡畦畔2断面 (A-A'、北西より)
2. 7 c層水田跡畦畔2断面 (南東より)
3. 7 c層水田跡畦畔2断面 (B-B'、北西より)
4. 7 c層水田跡畦畔4断面 (北より)
5. 7 c層水田跡X VI a区南駅 (畦畔32断面)

写真66 長町南駅区 7 a 層
出土鉈先状木製品
(X b 区)



写真67 長町南駅区 7 a 層
出土大型板状
安山岩製石器
(N A 試掘No 4)



写真68 長町南駅区 5 層
水田跡出土一木鶴
(X I a 区)



写真69 長町南駅区 4層
XII b区 SD 2全景



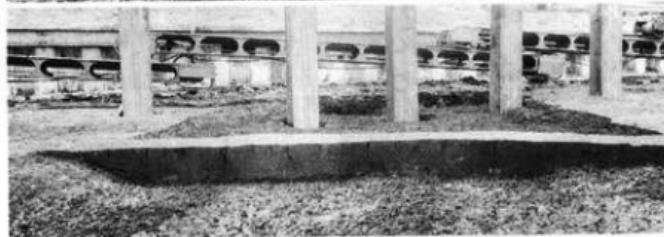
写真70 長町南駅区
SD 2断面



写真71 長町南駅区 4層
XII b・XIII a区
SD 6・SD 7全景



写真72 長町南駅区
SD 6断面



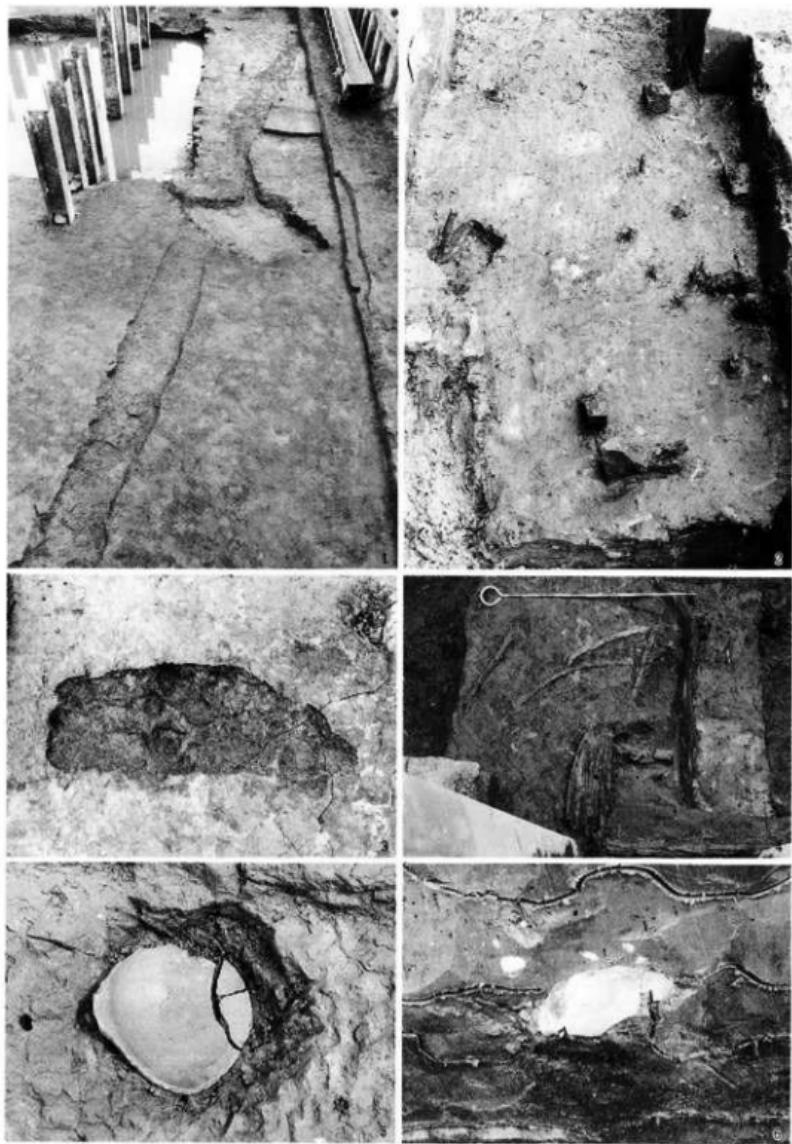


写真73 長町南駅区
 1. 4層SD1 2. 4層底b区杭集中地点
 3. 4層SK5 4. 4層底b区田下駄出土状況
 5. 3層遺物出土状況 6. 3層遺物出土状況

写真74 変電所区東壁断面
(北端部)

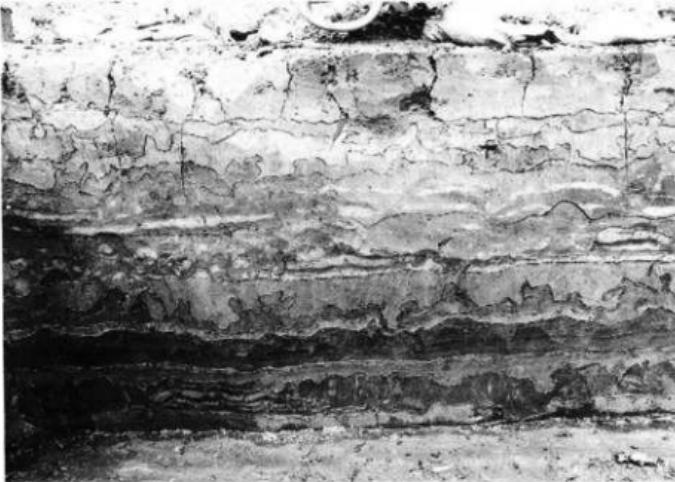


写真75 変電所区西壁断面
(11層水田跡畦畔1)

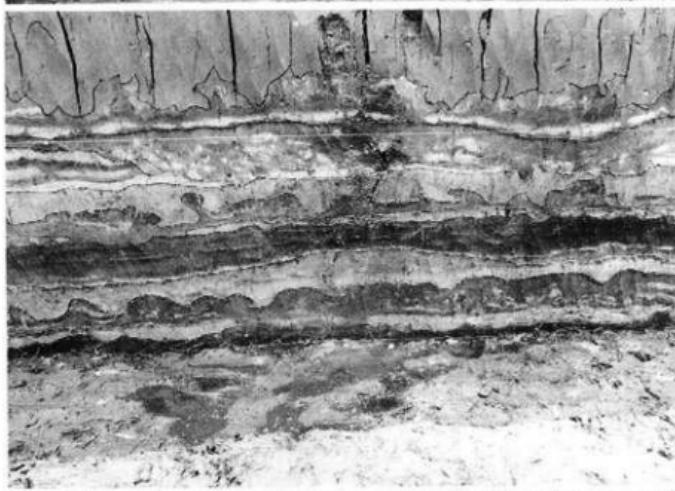
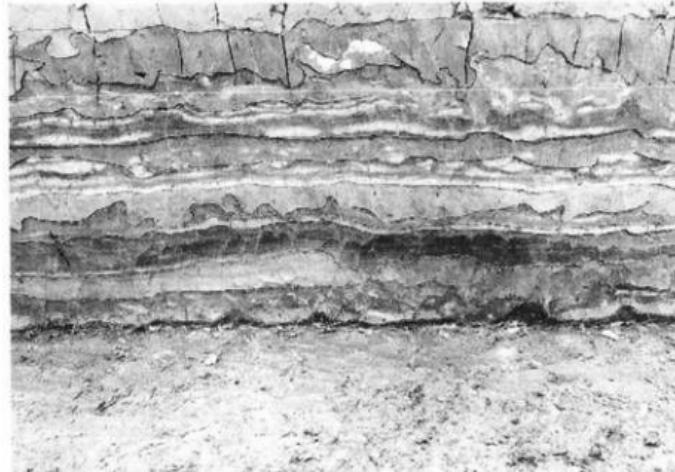


写真76 変電所区南壁断面
(11層水田跡畦畔1)



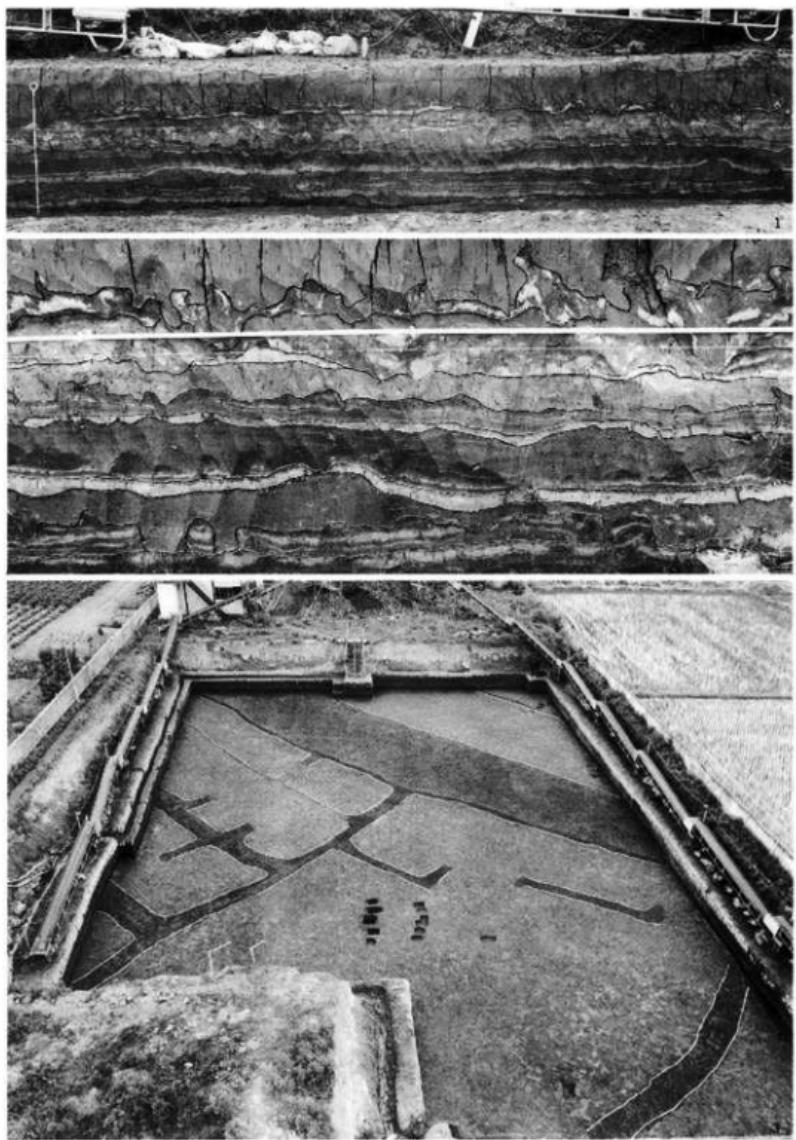


写真77 変電所区

1. 12a 層水田跡畦畔 2 断面 (西壁)
2. 12a 層水田跡畦畔 2 断面 (西壁、畦の北側から耕作土にかけて)
3. 12a 層水田跡 (北より)

写真78 変電所区12a層
水田跡（南より）



写真79 変電所区12a層
水田跡（現地説明会、南東より）

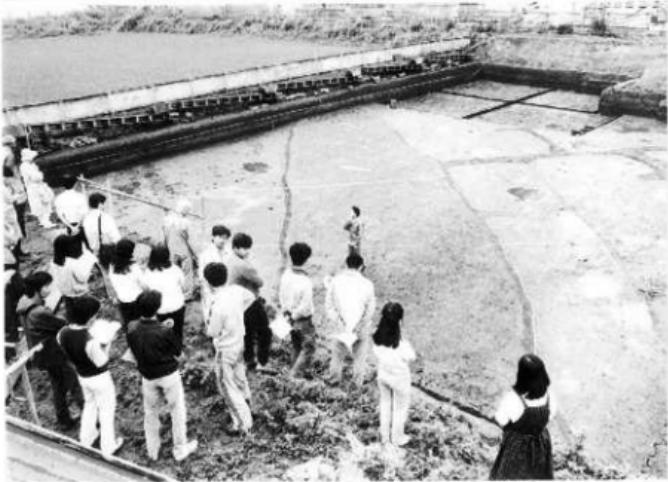


写真80 変電所区12a層
水田跡（足跡状
凹み）



写真81 変電所区12a層
水田跡畦畔2
クルミ出土状況

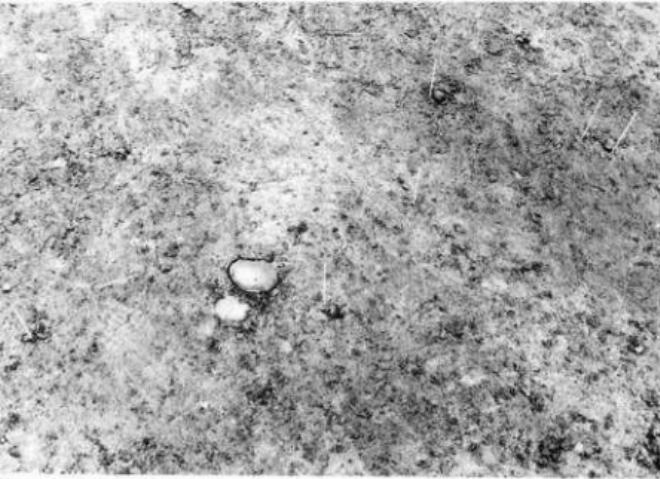


写真82 変電所区11層
水田跡（北より）



写真83 変電所区11層水田跡
(南東より)



写真84 変電所区 7層水田
跡石庵丁出土状況



写真85 変電所区 7層水田
跡土器出土状況



写真86 変電所区 6層
S X 1 (北より)



写真87 変電所区 6層
S X 1 (北西より)



写真88 変電所区 6層
S X 1 杭列 3



写真89 変電所区 6層
S X 1 杭列 3





写真90 変電所区 6層 S X 1 1. 断面
 2. 杖列 1
 3. 杖列 2
 4. 杖列 3
 5. 杖列 4

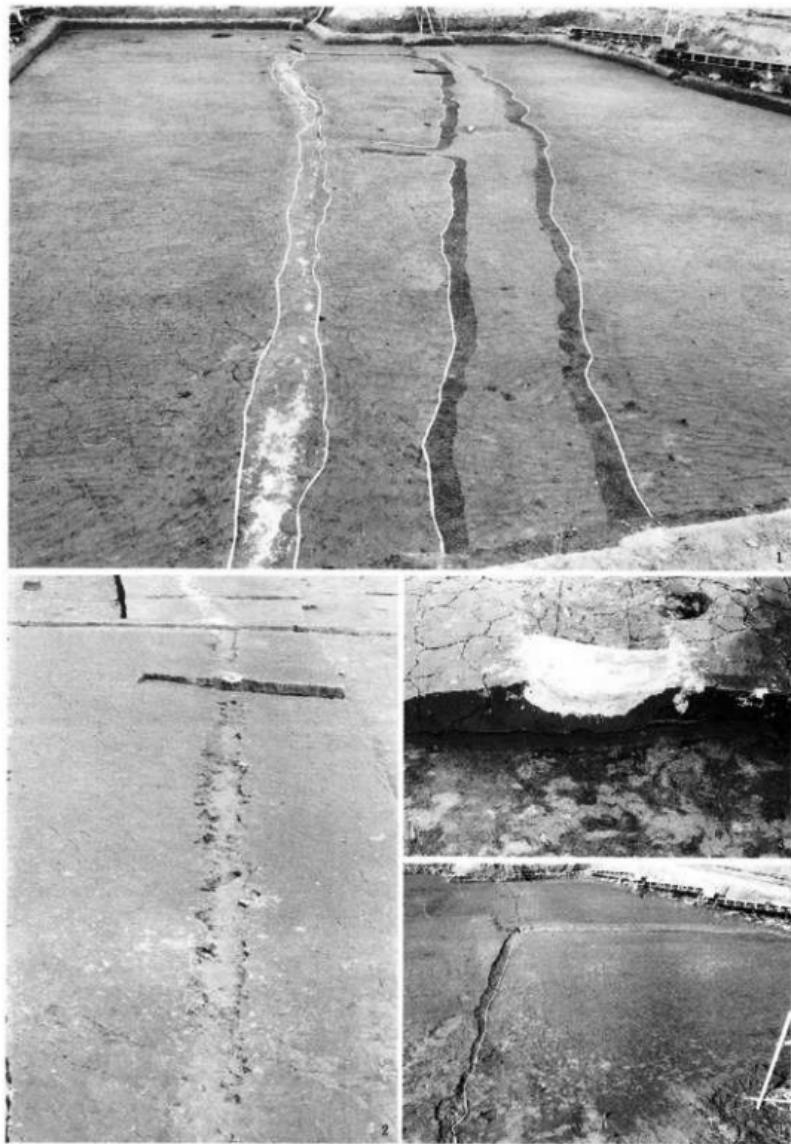


写真91 変電所区
 1. 5層溝状造構・4層水田跡（南より）
 2. 5層溝状造構
 3. 5層溝状造構底白堆積状況
 4. 3層水田跡（南より）

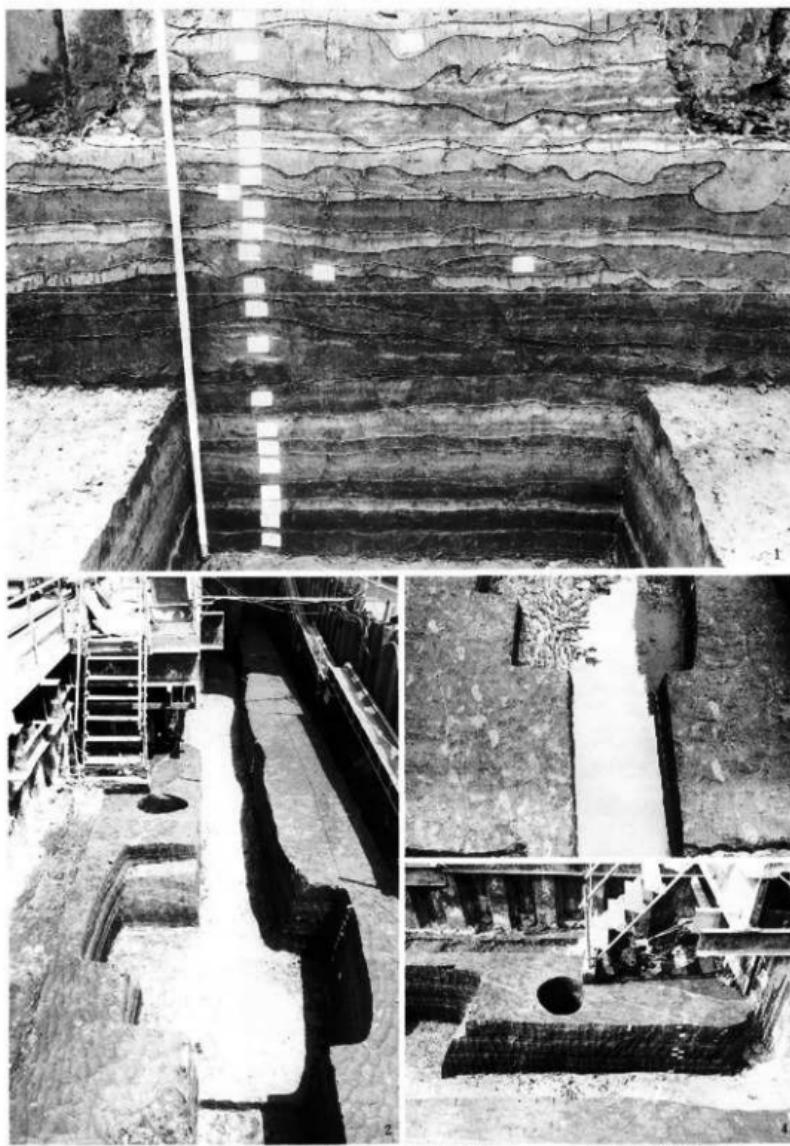


写真92 A換気口区
1. 南壁断面
2. 調査区全景(西より)
3. 12a 深水田路(足跡)
4. 4層水田路壁

写真93 A換気口区
15・16層杭1・2



写真94 A換気口区
15・16層杭4



写真95 A換気口区
15・16層杭7



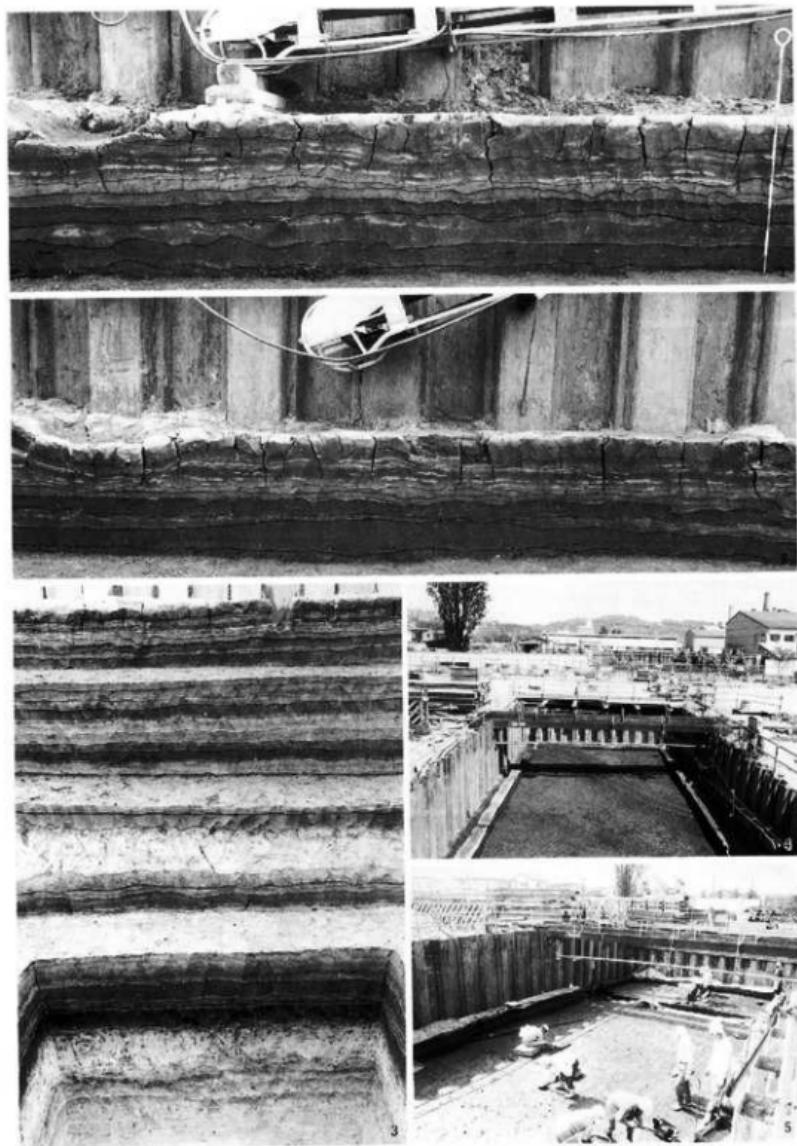


写真96 B換気口区
 1. 東壁断面 (7c層柱状断面)
 2. 東壁断面 (7d層柱状断面)
 3. 西壁深掘断面 4. 調査区全景
 5. 調査区近景

写真97 B換気口区 7 d層
水田跡（南より）

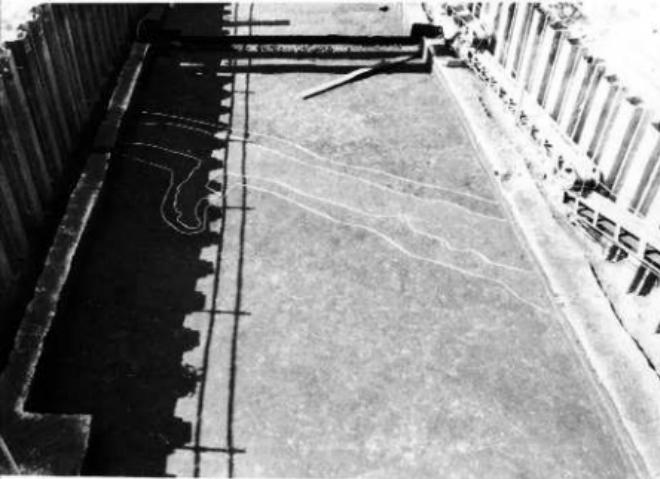


写真98 B換気口区 7 c層
水田跡（南東より）

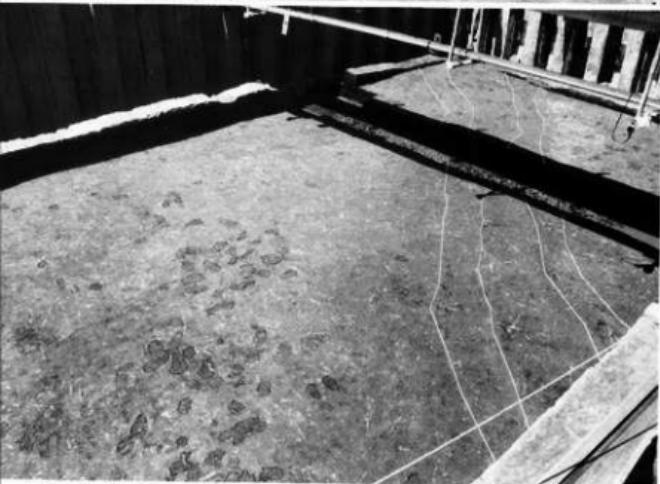


写真99 B換気口区 7 c層
水田跡（足跡状凹み）



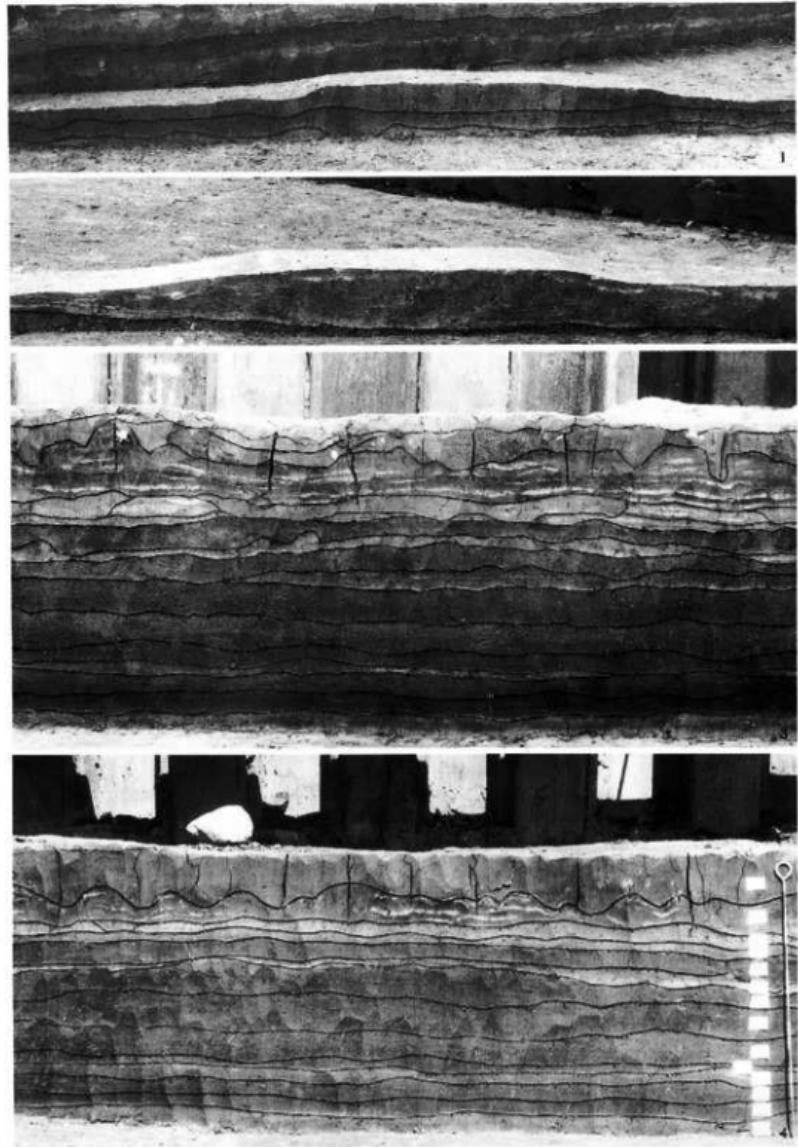


写真100 出入口区 1. 7 d 畳水山跡畦畔断面 2. 7 c 畠水田跡畦畔断面
3. 西壁断面 4. 東壁断面

写真101 出入口区 7 c 層
水田跡（南より）

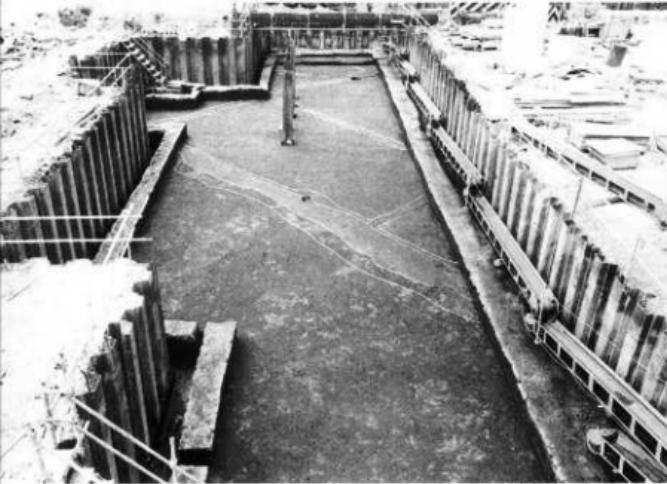


写真102 出入口区 7 c 層
水田跡（畦畔確認
状況、北西より）

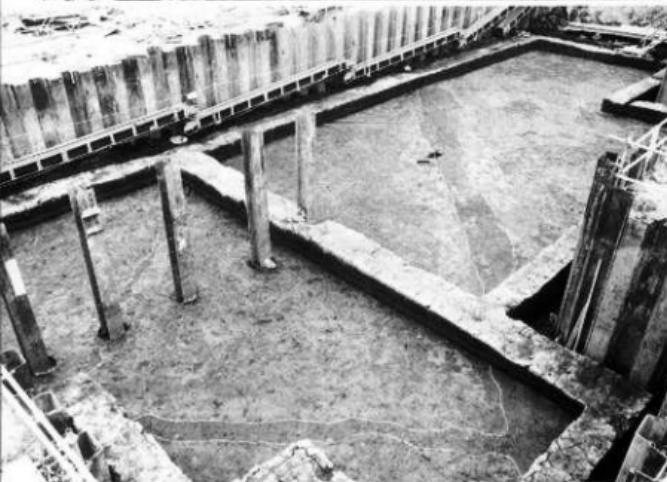


写真103 出入口区 7 c 層
水田跡（北西より）



写真104 出入口区 7c層
水田跡（足跡状
凹み、北東より）



写真105 出入口区 4層
遺構全景



写真106 出入口区
杭1・2



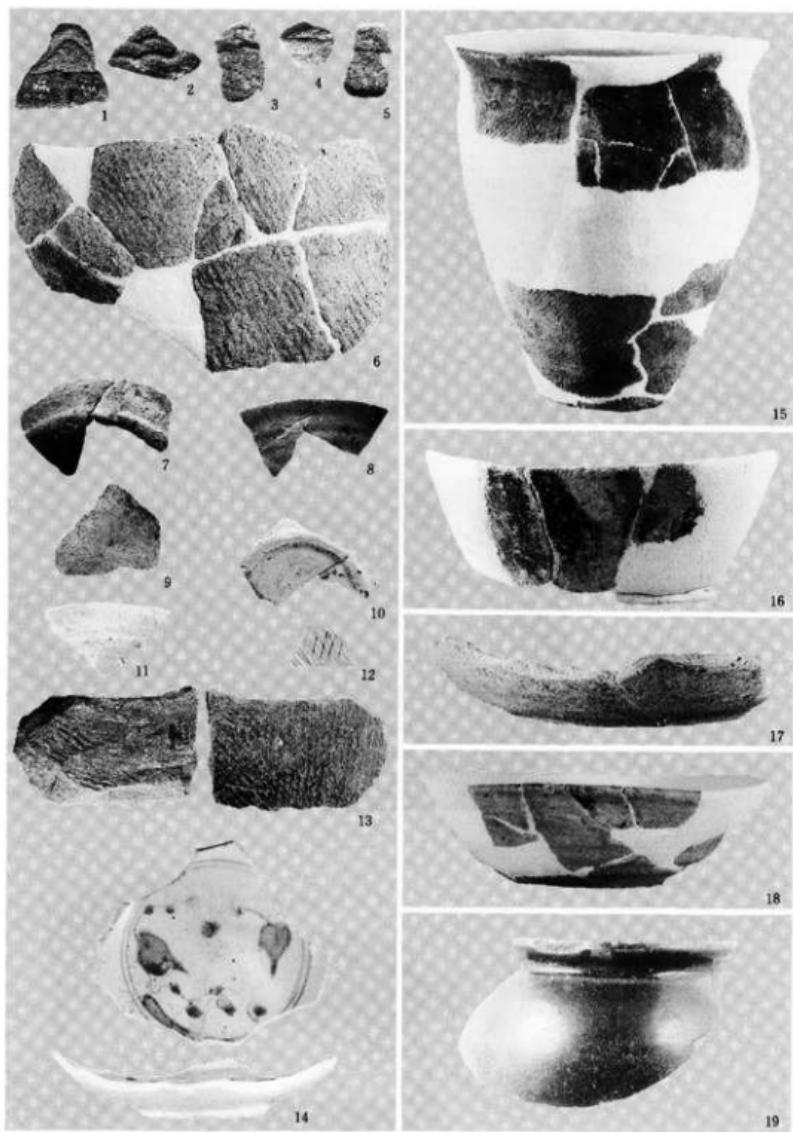


写真107 泉崎Ⅰ区出土遺物（1）

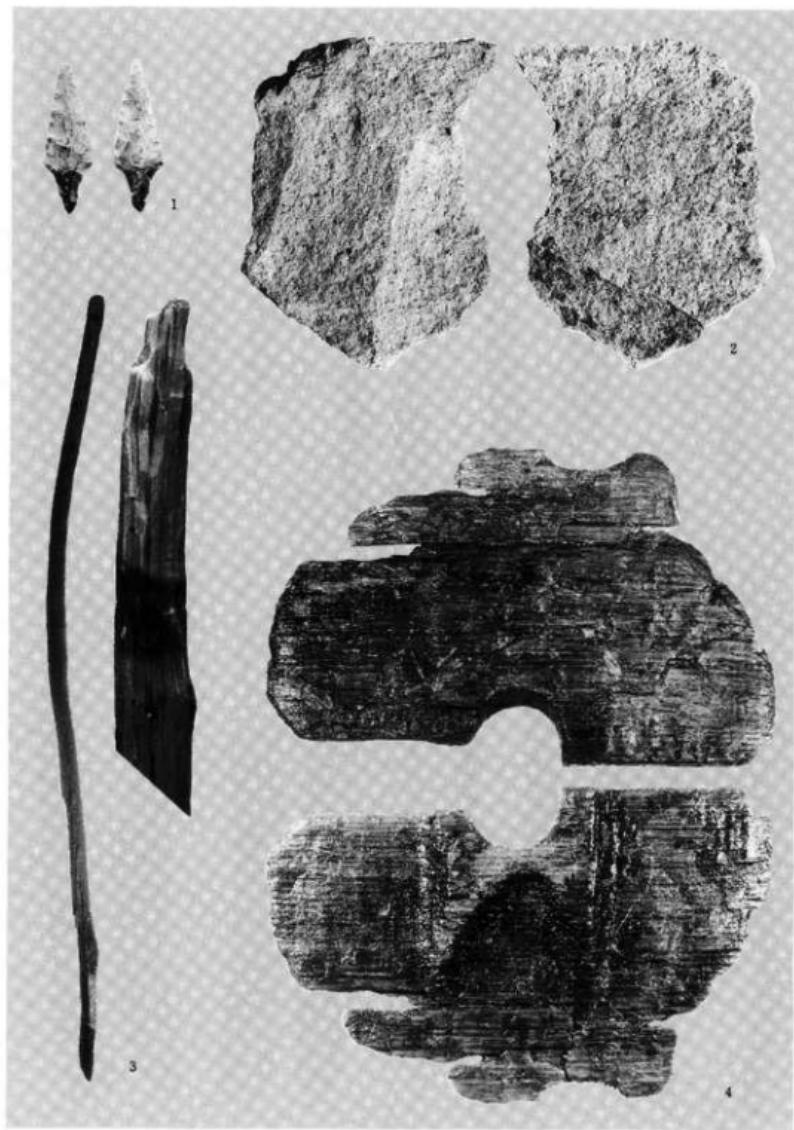


写真108 泉崎Ⅰ区出土遺物（2）

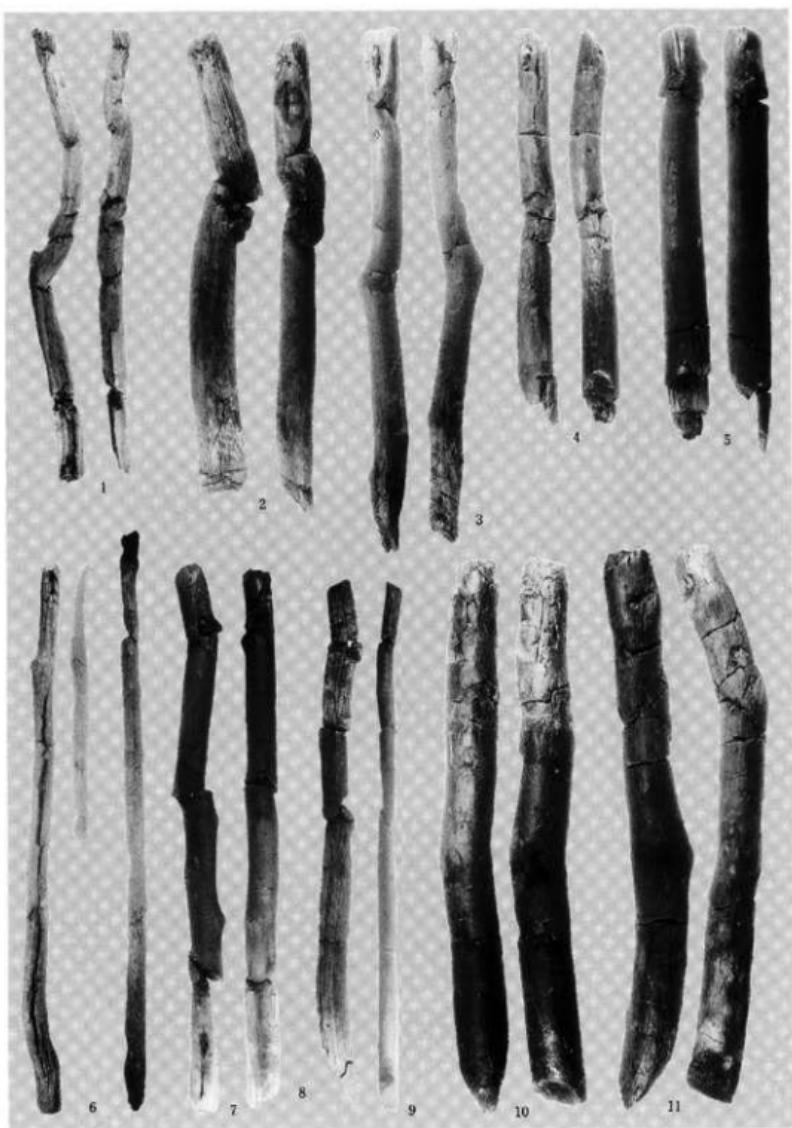


写真109 泉崎Ⅰ区出土遺物（3）

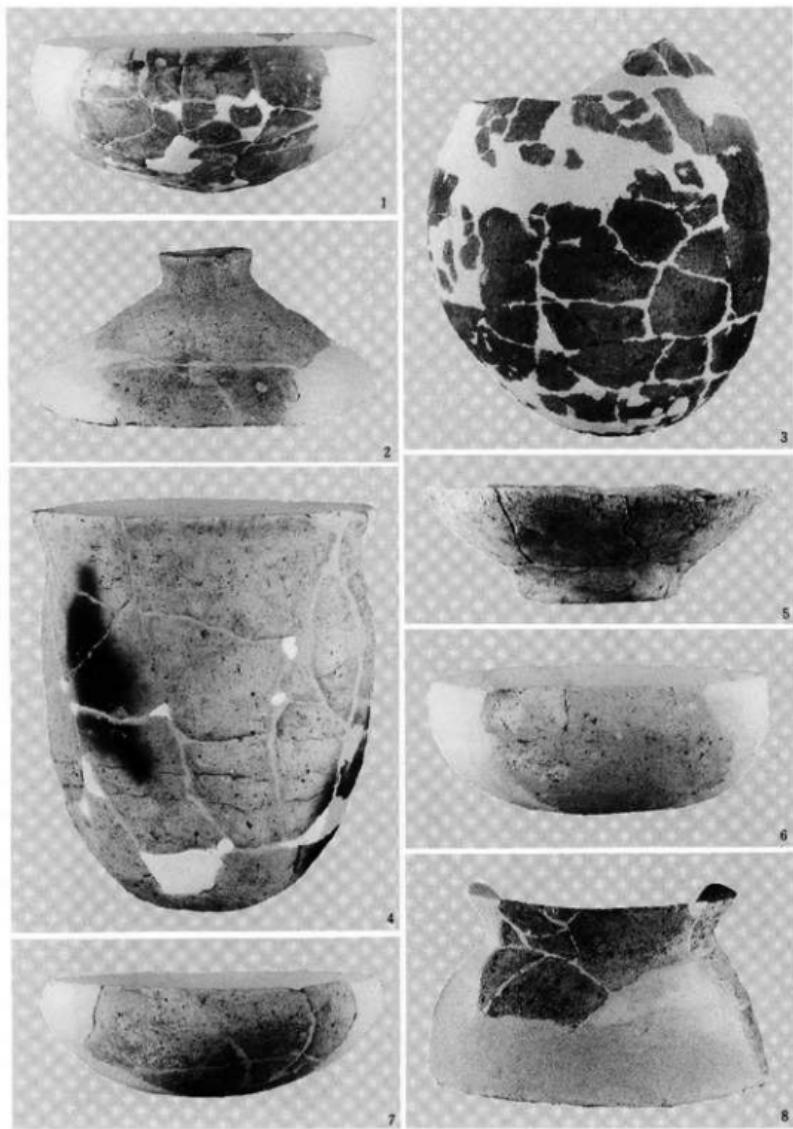


写真110 泉崎Ⅱ区出土遺物（1）

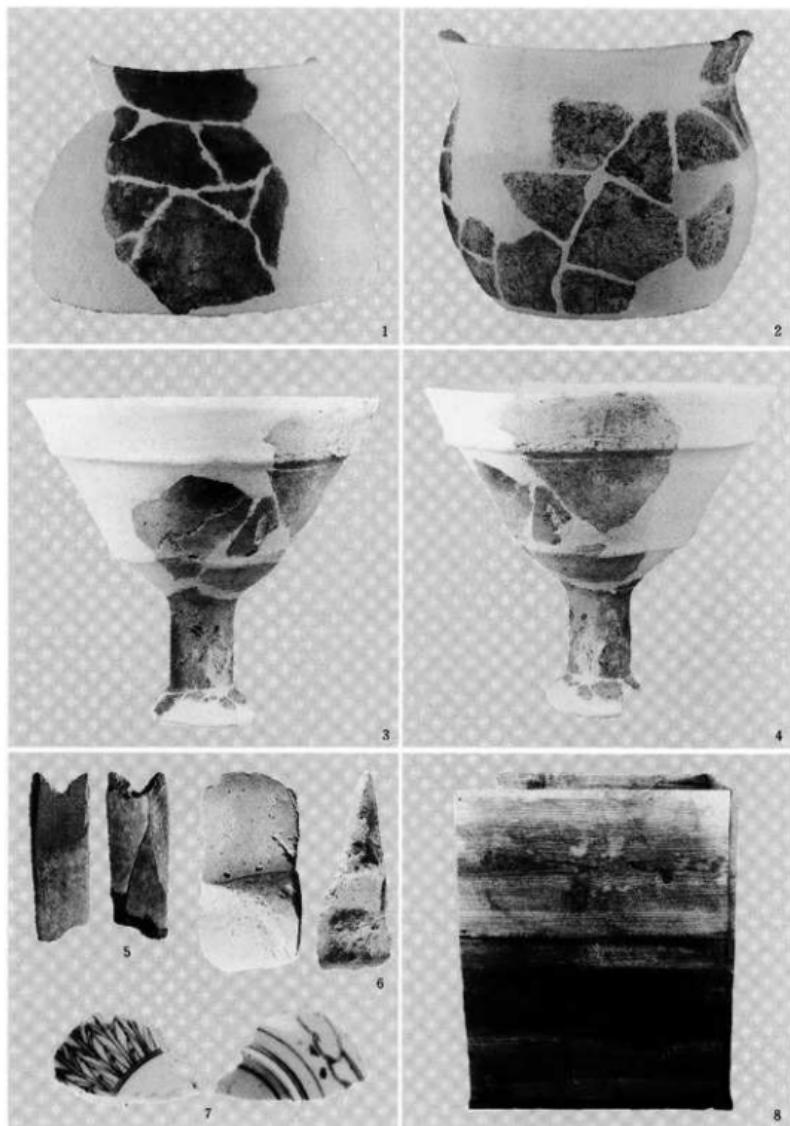


写真111 泉崎II区出土遺物（2）

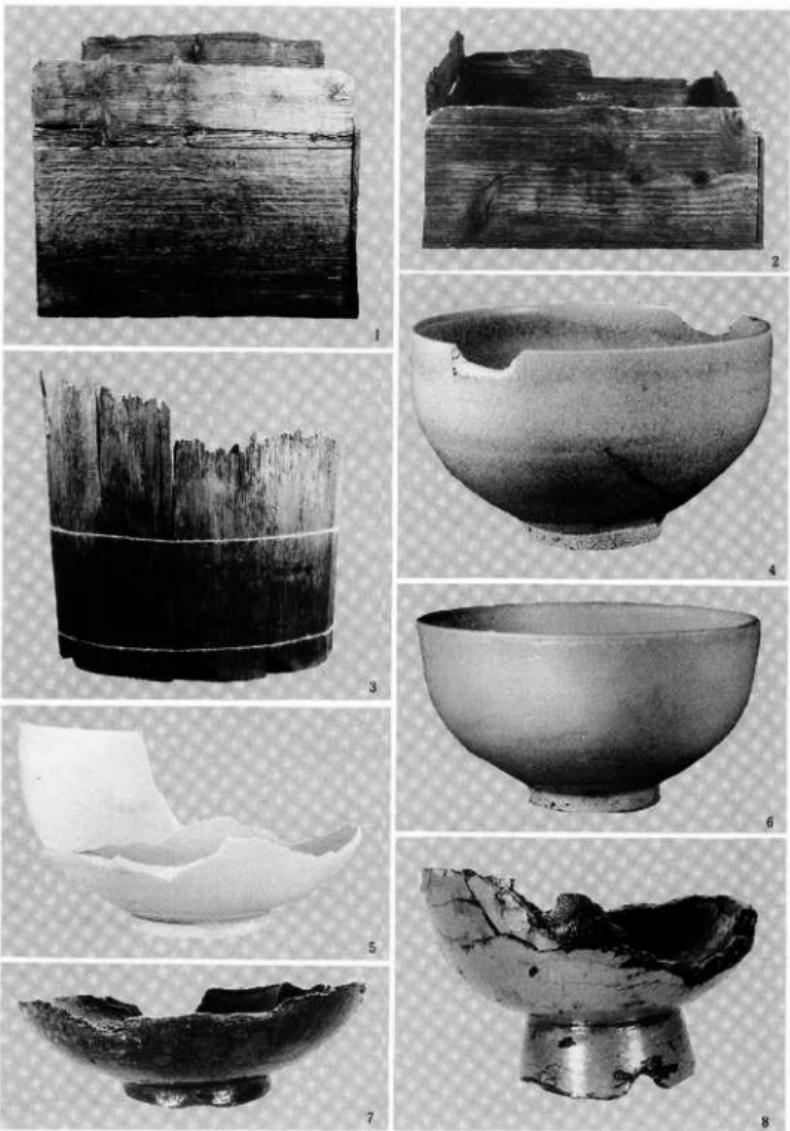


写真112 泉崎II区出土遺物（3）

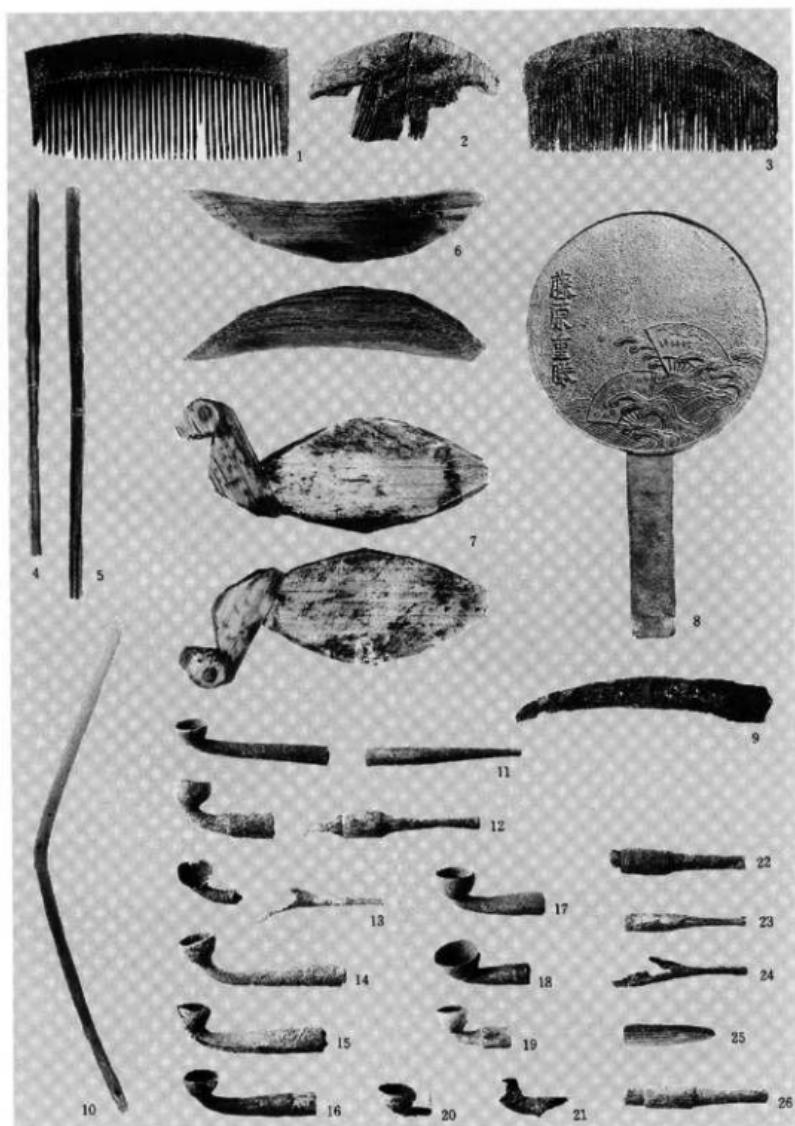


写真113 泉崎II区出土遺物（4）

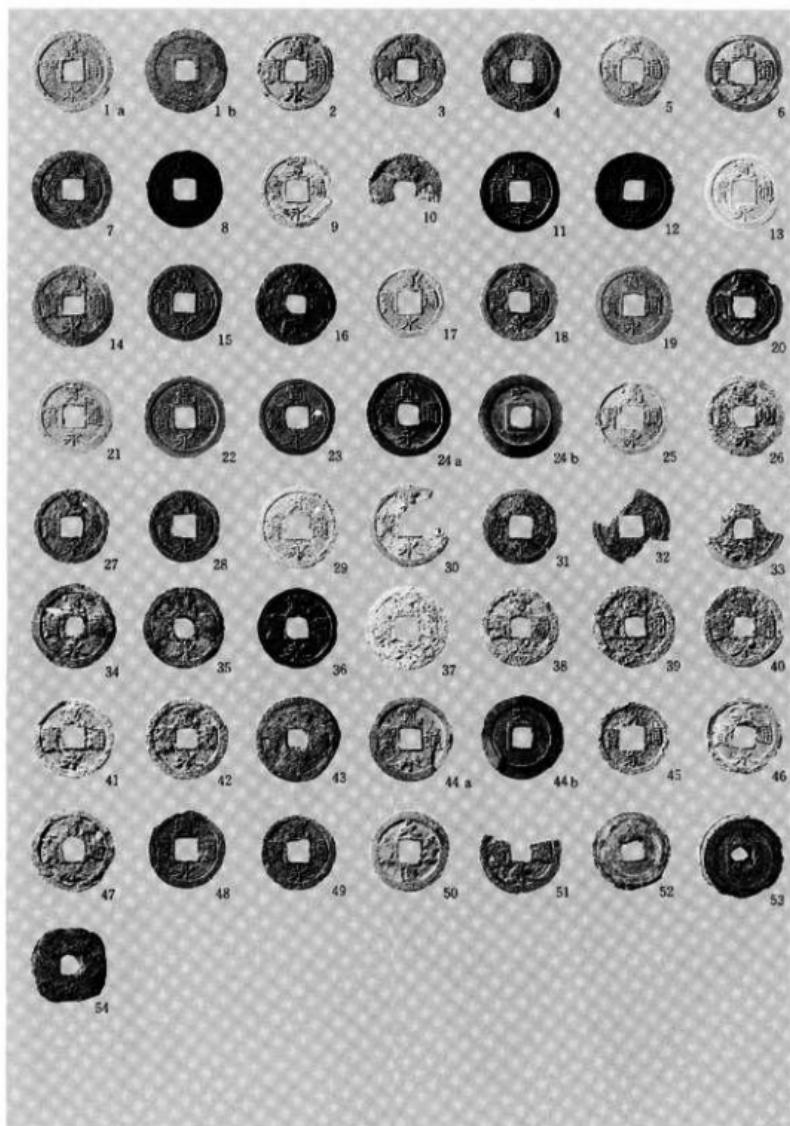


写真114 泉崎II区出土遺物（5）

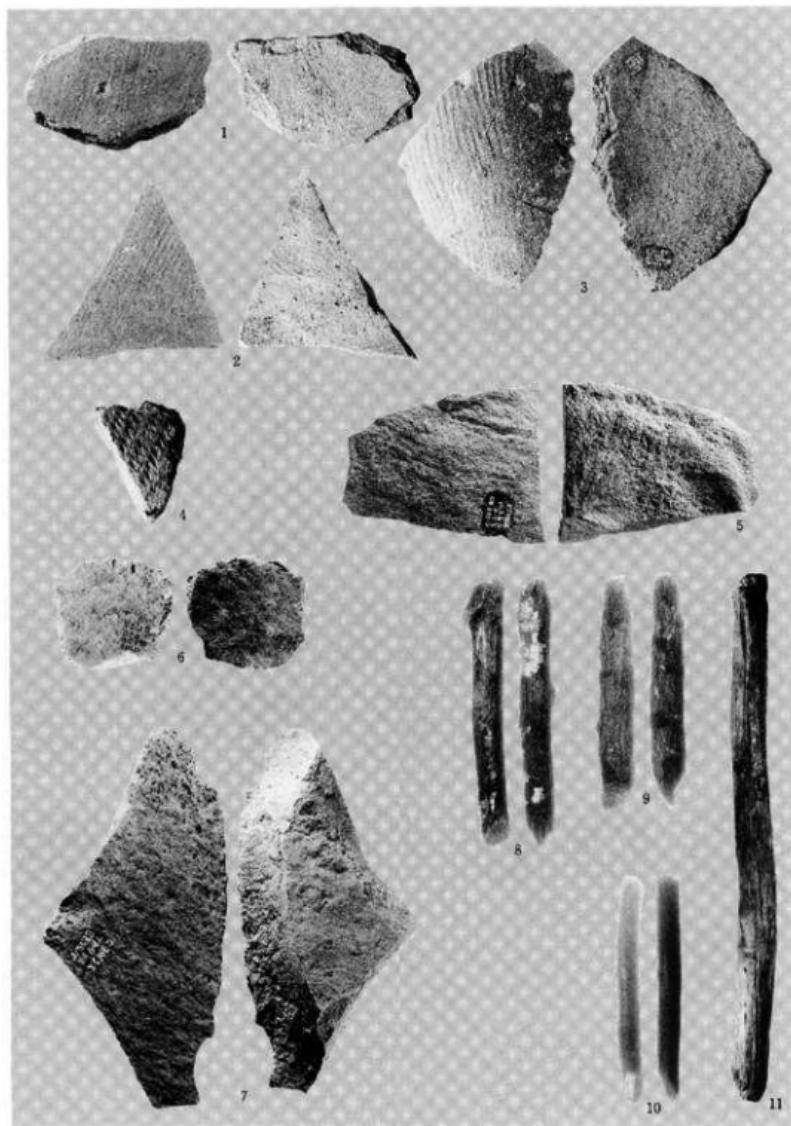


写真115 泉崎Ⅲ区出土遺物

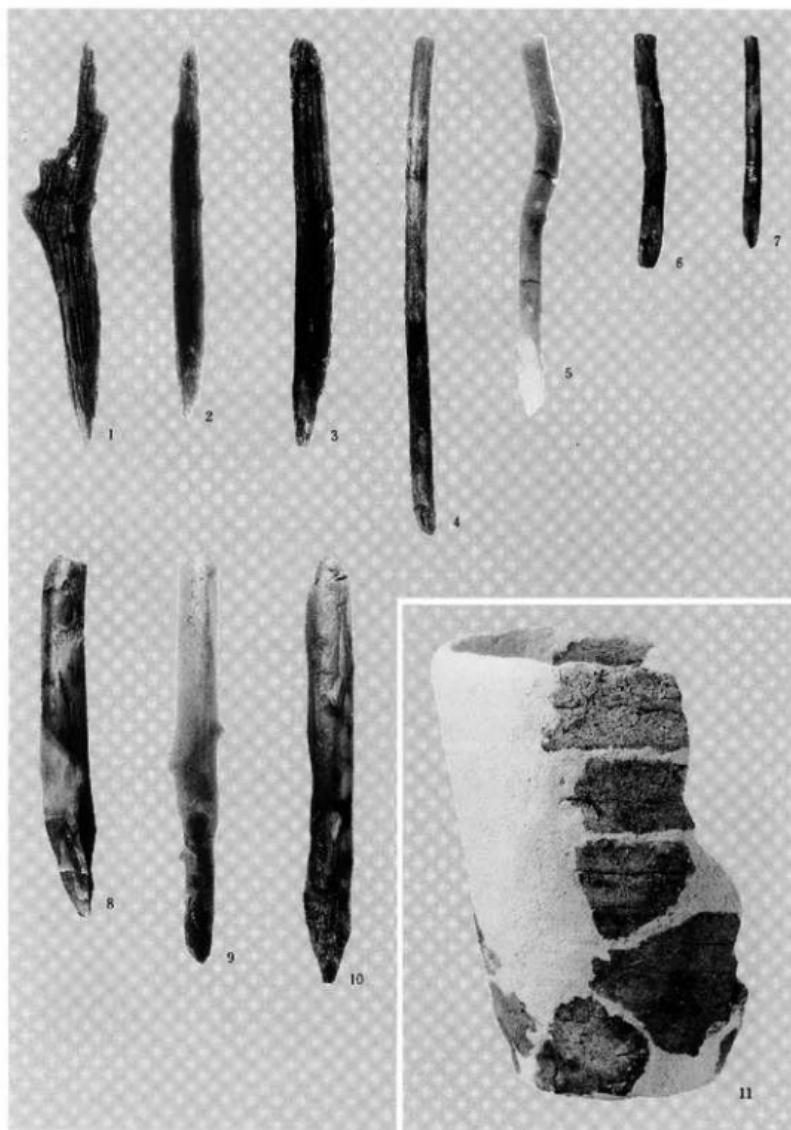


写真116 中谷地I・II区出土遺物

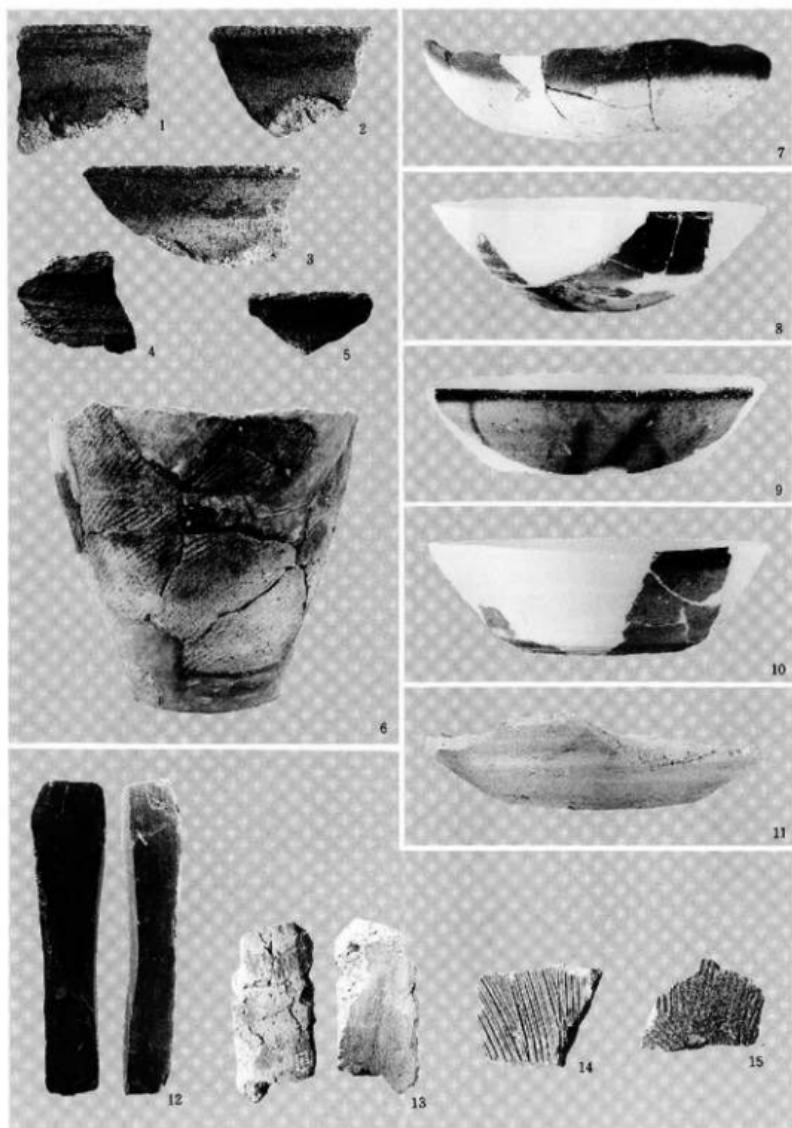


写真117 長町南駅区出土遺物（1）

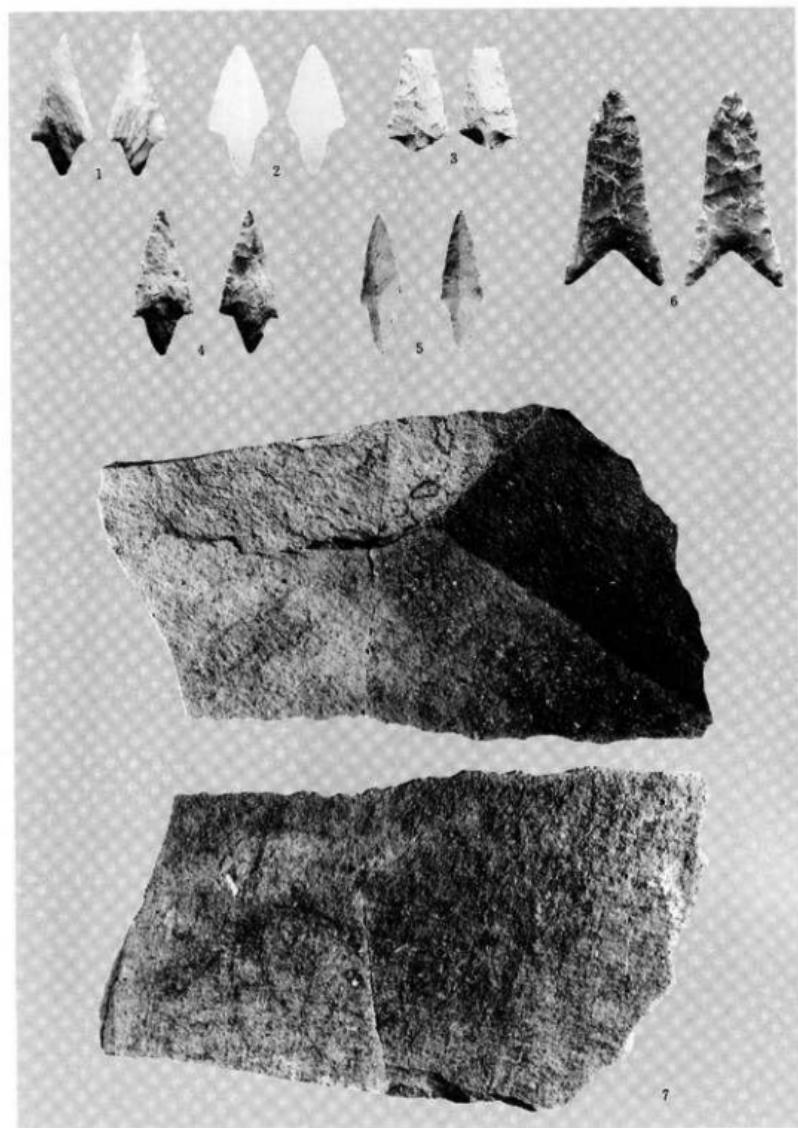


写真118 長町南駅区出土遺物（2）

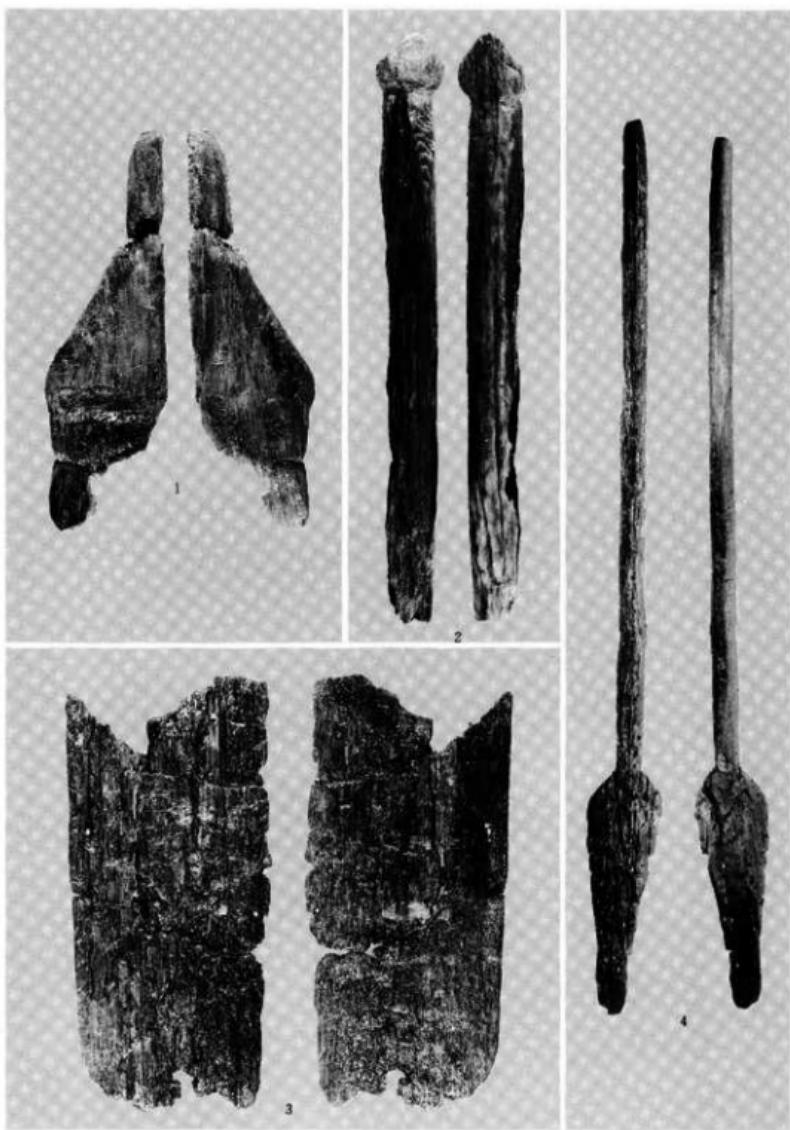


写真119 長町南駅区出土遺物（3）

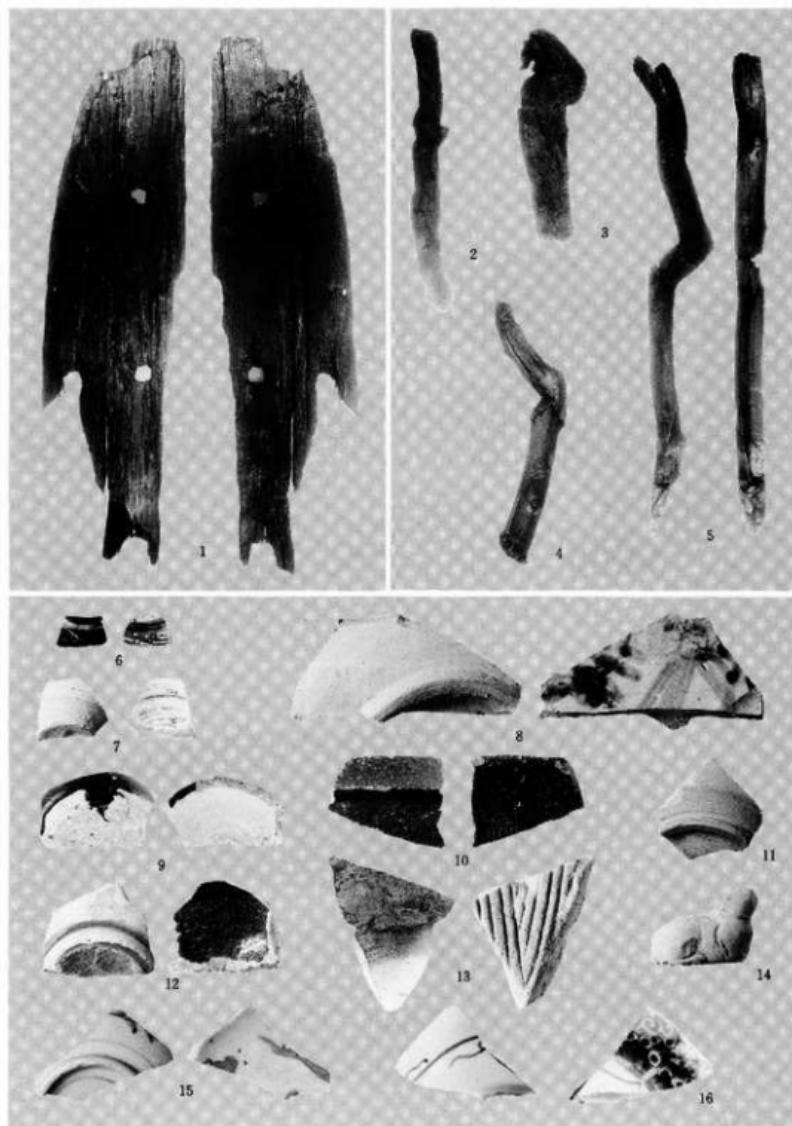


写真120 長町南駅区出土遺物（4）

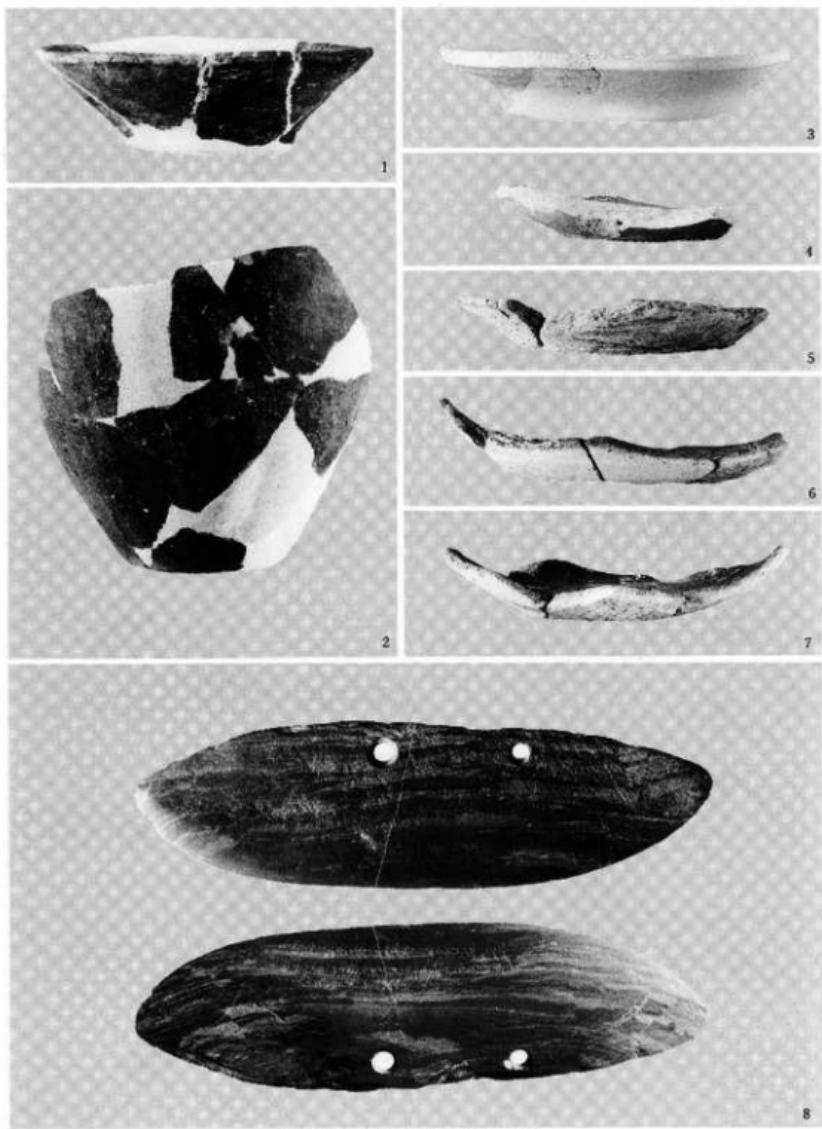


写真121 変電所区出土遺物（1）

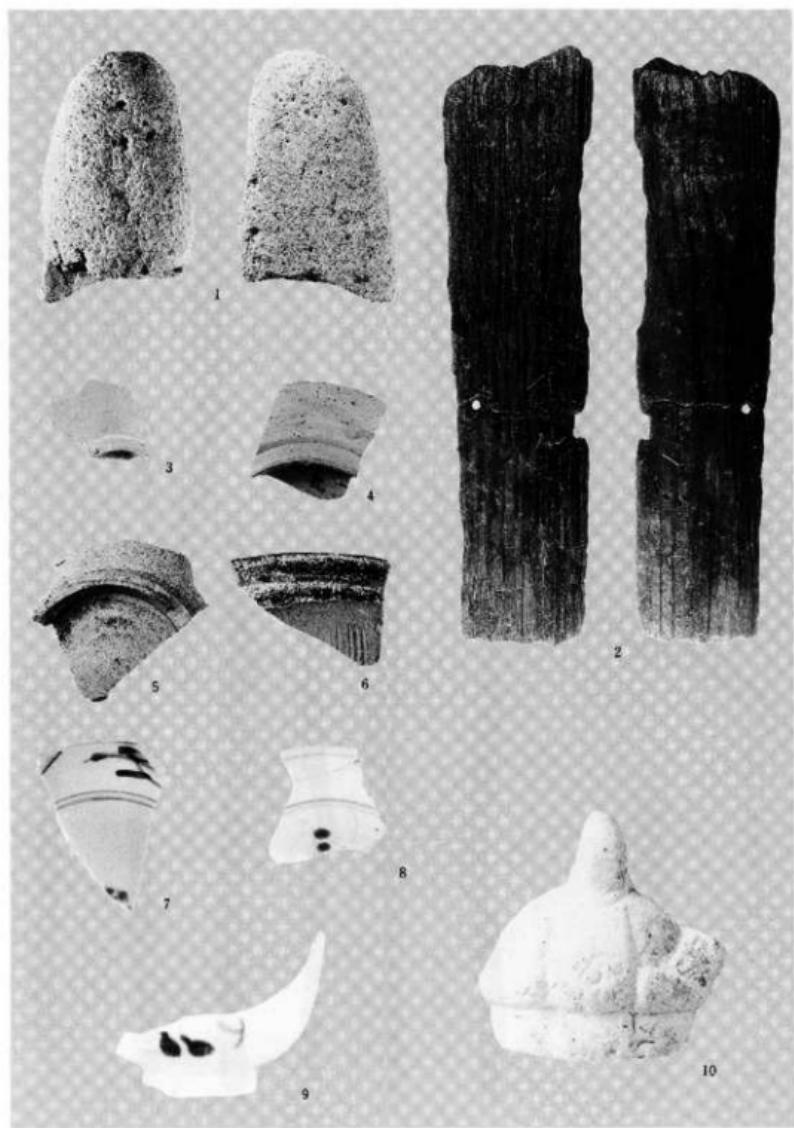


写真122 変電所区出土遺物（2）

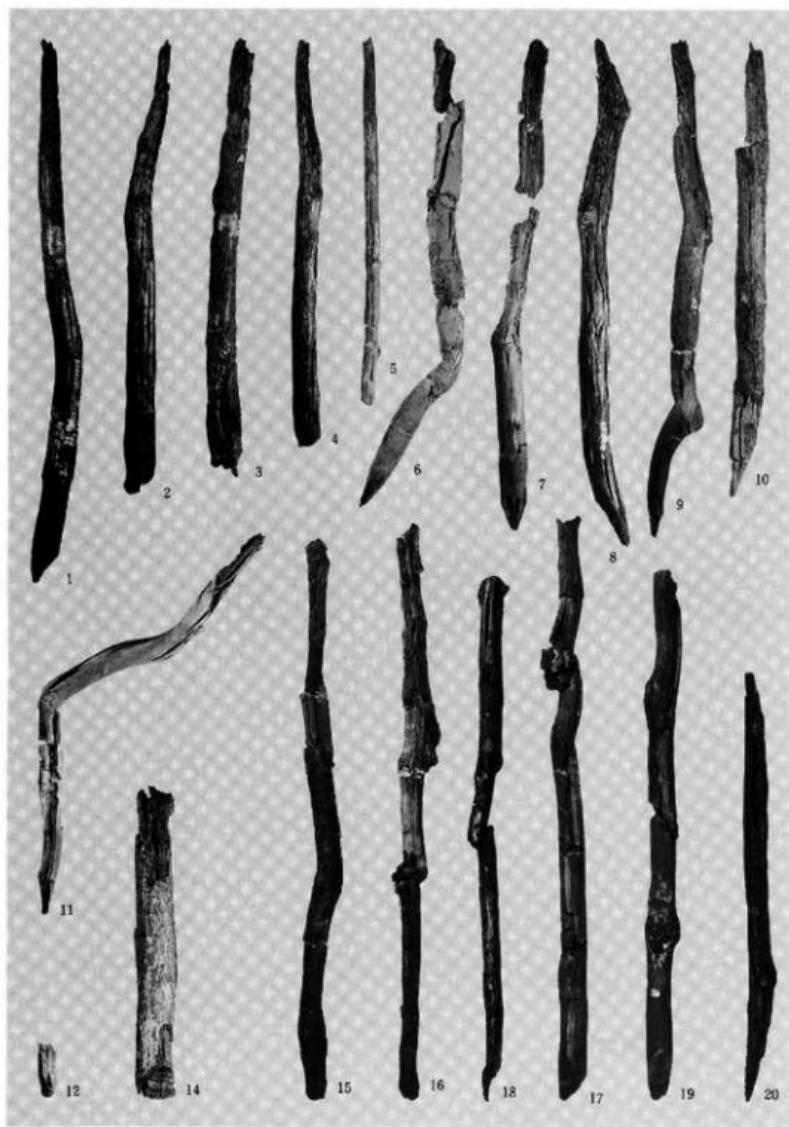


写真123 変電所区出土遺物（3）（番号は杭番号）

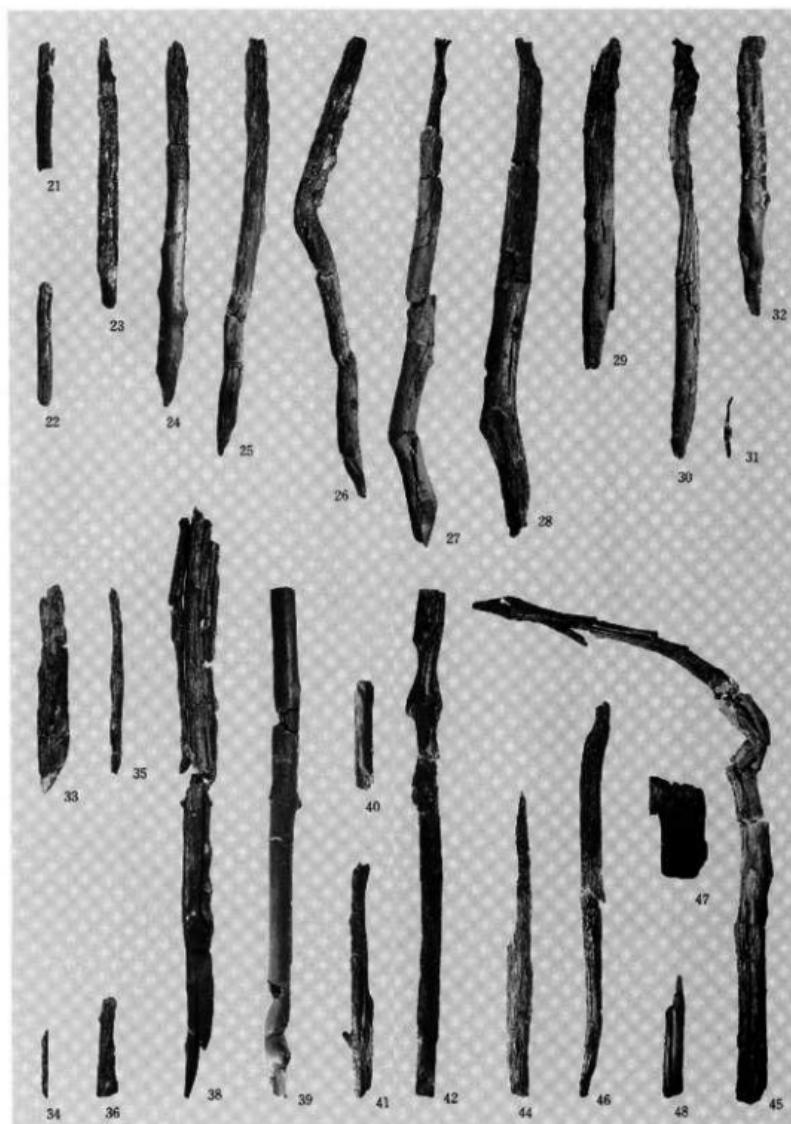


写真124 変電所区出土遺物（4）（番号は杭番号）

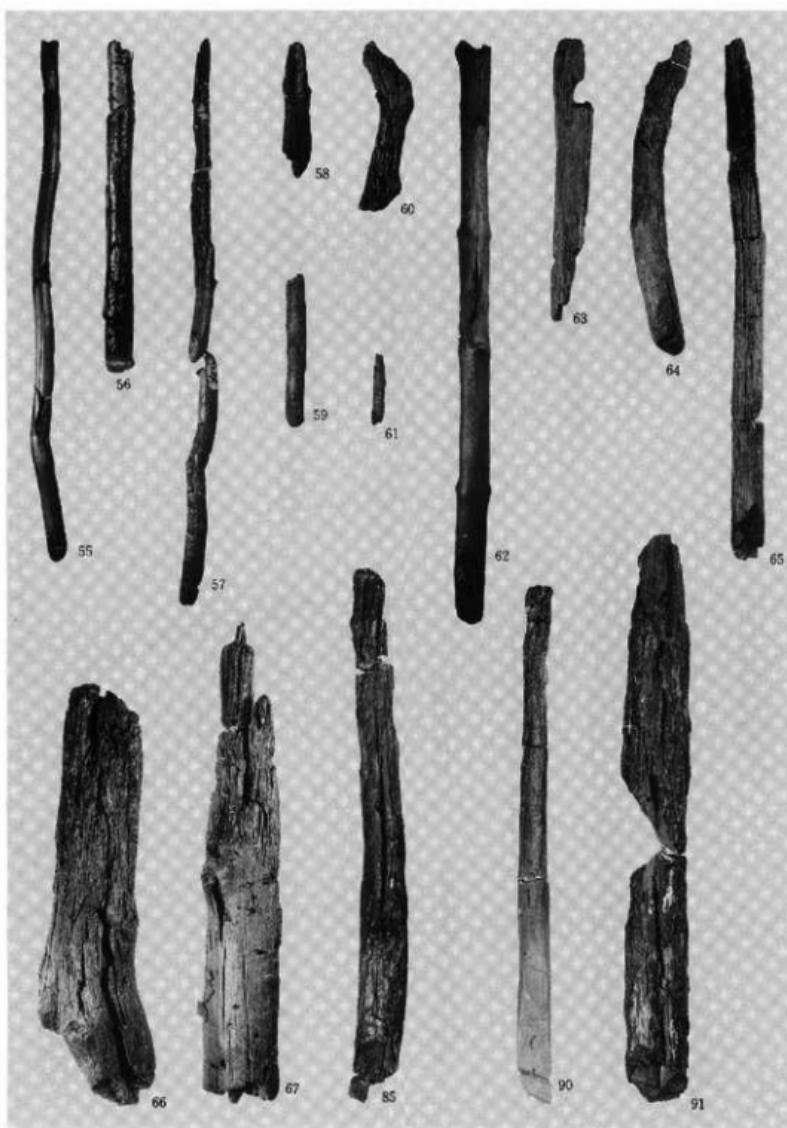


写真125 変電所区出土遺物（5）（番号は杭番号）

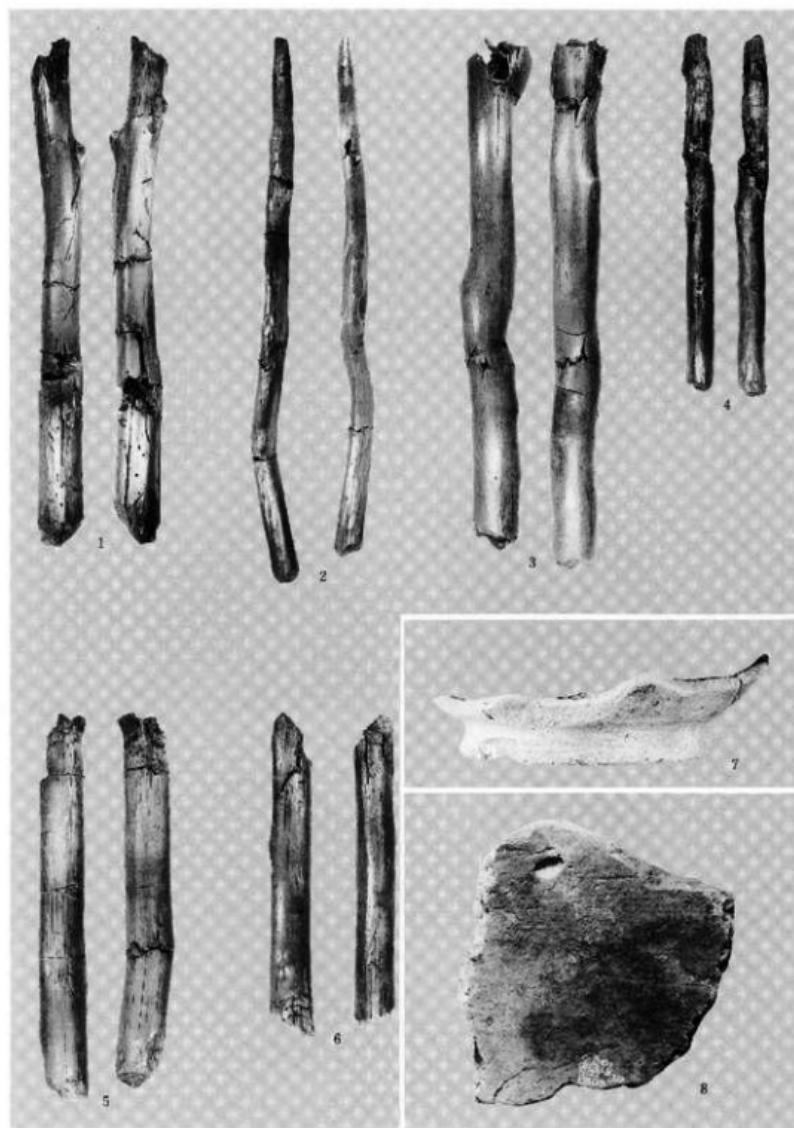


写真126 A換気口区・出入口区出土遺物（1）

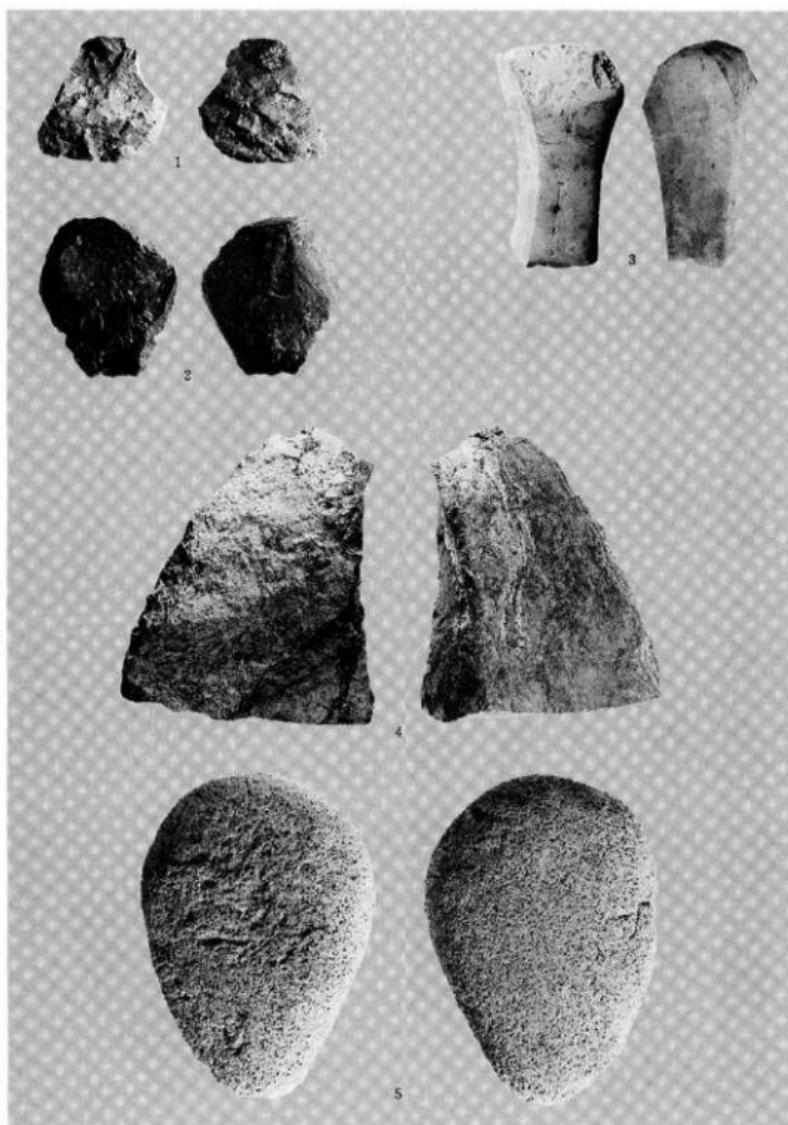


写真127 A換気口区・出入口区出土遺物（2）

仙台市文化財調査報告書第126集

富沢遺跡・泉崎浦遺跡

-仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書 I -

1989年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷  東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL263-1166
